

ガールズバンドが人気な時代ですが、男も頑張ってみます。

怜哉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ラブコメ目指してます（書けるとは言っていない）

## 目次

最初に買う楽器は性能より見た目で選ぶ派	1
アニソンやボカロはかっこいいけどシンプルに難しい。	11
人をおちよくる時は引き際だけは考えた方がいい	23
B●SSの Blues Driver は結構優秀、持ってたて損はない。	36
ブラックじゃないバイトなんて存在しないから安心していいよ	49
恋とか愛とか分からないって言ってる青春はすぐに過ぎ去る	63
個人的には何万人って規模の野外ライブより百人未満の箱ライブの方が好き	76
バンドの解散騒動は通過儀礼っていうけど、騒動起こさないにこしたことはない	90
真のヒロインは隠れているものだ(迫真)	102
恋人や友達を作るときは相手を選べよ。	116
バンドマンはラーメン好きっていう偏見は間違っではない	134
校長先生だって好きであんな長話をしてるわけじゃない	148
勘違いをしていること自体が勘違いだったりすることも、稀にね	161
ハッオー!! ジャムツ! ジャムツ! 最高ウ!!!	177
キラキラしてドキドキしたのなら今日からキミもシューティングスターさっ!(?)	190
ソイヤツ!(☆そこに言葉は要らず)	205
男には、命を賭してもやらなきゃいけない時がある。好きなバン	

ドのコピーとかね。

るんっ！（☆そこに言葉は要らず——V2）

非日常は稀に訪れるからこそ価値がある

星の鼓動を聞いたことはあるか

とびだせエゴサーチ！

運動会と体育祭は似て非なるもの

そして世界は笑顔になった

『既存国家の転覆からの迅速な建国』

野球は1人じゃできないの

ふふっ。つまり、そういうことさ。

少しのお砂糖と、過分なスパイス。そして素敵な何か。

やはり、俺の青春ラブコメは始まらない 前編

やはり、俺の青春ラブコメは始まらない 後半

12月の北海道の海は冷たい

閑話休題：兎は寂しくてもしっっかり生きる

ライダーとは漢の憧れであり、いずれ至るべき場所である（諸説あり）

聖なる夜の時間だオラア!!（深い意味はありません）

サンタさんはいるもんっ！

聖なる夜に何を成す

door in the face（譲歩的依頼法）

閑話休題：アコースティックギターという完成された楽器

前話の蛇足

ハードロックのない人生なんて、ワサビ抜きの寿司みたいなものだ

『革命前夜にランナウェイ　くお国に逆らうもんじやないく』　—  
音楽を愛せよ、さすれば救われる。知らんけど　—　570

昨日の敵は今日も敵　—　614

ギャルは基本的に怖いけど気に入った相手には優しく振る舞うとい  
う都市伝説　—　633

人に優しいギャルは人間国宝に認定する、って古事記にも書いてある  
—　653

大人はいつだって汚いが、それが社会を生き残る術でもある。

670

つつぐつつぐにしてやんよ　—　689

何であれ、やるからには負けちやダメ　—　706

受験期前半は団体戦、後半はバトルロイヤル　—　727

イベント事にはとりあえず便乗しとけ　—　743

馬って平均時速60kmとかで走るんだっただっけかなあ　—　764

ラブコメじゃ幼馴染みは負けるのが定番だけど、これは現実なんだか  
ら。　—　781

男の子には隠すべきものが多いから女の子はアポ無しで部屋に入っ  
てくるな。　—　798

事前確認はしっかりしよう。　—　816

卒業は終わりじゃない。　—　831

## 最初に買う楽器は性能より見た目で選ぶ派

「もうひと声！」

アタシがお店に入ると、そんな声がした。

男の人の声だ。声だけなので顔とかは分からないけど、多分何か値切っているんだろう。今どきそんなことをする人がいるのか、とちよつとだけ感心してしまう。

「……分かった、降参だ。こいつは半額にしてやる！」

「マジっすか!? よっしやあ!! ありがとうございます!! じゃ、ちよつと金下ろしてきますねヤツフウ！」

どうやら値切りは成功したらしい。

どんな人なんだろう。ふと興味が湧いたアタシは、足を声のする方へ向ける。けど、ちよつと遅かったみたい。宣言通りお金を下ろしに行つたみたいで、声の主の姿はどこにもなかった。ただ、店長さんが持っているアレを手に入れたのだろうことは分かる。

男の子のことは気になったけど、帰ってくるのを待つほどじゃない。このあと練習もあるし、早く目的のものを買つて行こう。

——それが、アタシと彼の出会い。

出会いつて言つちやうと少し大袈裟すぎるけど、間違つてはないと思う……。いやでも、彼はこの時アタシのこと知らなかったし、アタシも彼の顔知らなかったからなあ。やっぱり出会いつてのは大袈裟すぎかも。

? ? ? ? ?

音楽スタジオCIRCLE、ロビー。

「じゃーん！ 買つちやいましたー！」

テンション高めで、俺——はきんちカイ関口海はついさつき買ったブーツを見せびらかす。

ブツ、とはギターのことだ。エドワーズのレスポールで、ボディは黒。ネックに近付くにつれて赤っぽくなっている。パーツは金。

そんな俺の子(ギター)を見せびらかしている相手は五人。小学校から中学校まで同じ学校に通い、家も割かし近い、プチ幼馴染みたいな相手だ。

「おお、かつこいいですな〜」

「うん、すごくいいと思う〜!」

そう言ってくれるのは、青葉モカと羽沢つぐみ。

二人に続き、宇田川巴と上原ひまりも「かつこいいな!」「良いね!」  
と言ってくれる。ふぶん、ドヤ顔が止まらんぜ。

「キモっ」

「あ? おう蘭、俺の子を馬鹿にすったあいい度胸してんな? 喧嘩  
売ってんのかテメエ」

「違う。アンタの顔。ギターはまあ... 悪くないと思う」

口癖でもある「悪くない」を口にしたのが、美竹蘭だ。

以上の五人が、俺の小学校からの友達である。この五人は“Afterglow”というバンドを組んでいる。そのバンド練が今日ここCIRCLEであるところから聞いていたので、ギターを買って家に帰る前に足を運んだのだ。

異性とつるむのを躊躇いがちになる中学時代でも彼女達とは普通に一緒にいたので、仲は良いと思う... 良いよね? 友達だと思ってるの俺だけじゃないよね?

「ふぶん! そうだろ、悪くないだろ、むしろいいだろ! ... つか顔の話は普通に悪口だよな? 俺、一応今の高校じゃ女子から『イケメンだね』って言われる関口さんだぞ?」

「まあ、カイはそこそこ整った顔してるよね〜」

「そうだな。ブサイクではないな」

ふむ...。これはあまり周りの言葉を真に受けないほうが良さそうですね? 巴の言う通り、ブサイクではないって感じの評価ですね? クラスの女子どもめ、変に自信付けさせるようなこと言いやがって... 調子乗るところだったじゃねえか!

まあそれはいいとしてだ。

「エレキ買った方がいいけど、シールドとか買ってなくてさ。つーか今月はもう金無いから買えないんだわ。だから悪いんだけど、誰かシールド貸してくんね？ あとできればモカと蘭にはエフエクターも触らせてもらえれたら嬉しいなって」

今日、俺はただギターを見せびらかしに来たわけではない。いやまあそれが本命なんだけど。それとは別に、シールドとエフエクターを借りたかと思っただからわざわざCIRCLEまで足を運んだのだ。ついでにスタジオも借りることにした。エレキっていつたらやつぱりアンプ通してなんぼだろ。

「シールドもエフエクターも、あたしが貸してしんぜよう。練習も終わったし、今日はもう使わないしね。なんなら使い方、教えてあげよつか？」

「おー！ 助かるぜモカ、ありがとな！ エフエクターのことは良く分かんねえし、ご指導のほどよろしくお願いします」

「うんうん、くるしゅうないくるしゅうない」

俺が頭を下げると、モカが少しだけ胸を張った。

俺は別にギター初心者ってわけじゃない。なんなら、ギター自体はモカ達よりも早く始めている。確か小学三年の時だったかな。母さんと、あと姉ちゃんの影響でギターを始めた。

ではなぜ今更エフエクターの使い方などを聞くのかというと、俺が今までやってきたのがアコギだからだ。アコギはそれ単体で音を出すから、エフエクターは使わない。エレアコなんていうものもあるが、そっちは存在を知っているだけだ。

「いや、とうとう海もバンド始めるのか。今まではアコギで弾き語りしてばかりだったのに、どういう風の吹き回しなんだ？」

「お前らがやってるの見てたら俺もやりたくなつてさ。まあ他のメンバーがいらないから、バンド組むのはだいたいぶ先の話になるだろうけどな」

「へえ。あつ、じゃあ海！ Afterglowに入ってみる気とかある？ 海以外全員女の子！ ハーレムの出来上がりだねっ！」



「馬鹿だ馬鹿だとは思っちゃいたが… ひまり、お前ちゃんと考えてからものを言えよ?」

「ひどい!」

まあひまりも本気で言ってるわけじゃないだろ… ないよな?

A f t e r g l o wに入るってのは無しだ。嫌ってわけじゃないけど、A f t e r g l o wは五人でA f t e r g l o wだろ。不純物<sup>俺</sup>が入っちゃいけないと思う。というか俺以外女子とかメンタルが持たん、イキリ陰キヤなめんな。しかもみんなして美少女なんだぞ。特にひまり、てめえはダメだ。何がとは言わんがライブ中や練習中に目のやり場に困って、俺が蘭に殴られる未来が見える。それにしても立派になって…。あつ、ちよ、蘭やめて拳を握らないで!

「バンドメンバーのあてはあるの? 最低でもベースとドラム。あと二人は必要だよな?」

蘭の拳に戦々恐々としていっていると、つぐみがそんなことを聞いてくる。

「それがどうにもな。うちのクラスにドラマーはいるんだけど、なんか訳ありらしくて最近はドラム叩いてないんだって」

「ふーん? まあC i R C L Eでもバンドメンバー募集とかのポスターとかよく見るし、気が向いたところに行くのもいいかもね」

「へえ。そんなのあるんだ」

「あるよー。ほら、あそこの掲示板」

つぐみが指を差した方を見れば、確かにいくつかの紙が貼られた場所があった。C i R C L Eは専らガールズバンドの使用場所となっているが、男のバンドも普通に使っている。そういうバンドが、不足分のメンバーを募集しているらしい。

… 面白いや、ガールズバンドは言うのにボーイズバンドつては言わないよな。なんだろ、歴史的なアレか? (テキトー)

まあどうでもいつかと思ひ、俺はトテトテと掲示板に貼ってあるメンバー募集のポスターを見に行く。

さすがにこの場でどのバンドに入るか決める気は毛頭ないが、どんなバンドがあるかくらいは見ておきたい。ギター募集とかねえかな。

リードでもいいけど、俺が即戦力になるとしたらギタボか？

「きゃっ！」

「うおっ」

掲示板に辿り着く直前。曲がり角から飛び出てきた薄緑な何かとぶつかった俺は、少しよろける。

薄緑色の何か——ギターケースを背負った女子は、よろけるだけでは止まらなかったようで、後ろに転んでしまっていた。

「あー… すんません、大丈夫ですか？」

尻もちをついてしまった女子を心配し、俺は謝罪しながら彼女の様子を窺う。……あれ、どこかで見たことあるような？

「いつつ… あ、いえ。こちらこそすいま… あら、あなた関口くん？」

「？ あっ、氷川さん？」

顔を上げた女の子の端正な顔は、いつも校門前で見るものだった。

氷川紗夜さん。俺の属する高校、花咲川学園二年の風紀委員。俺の一つ上の先輩だ。うちの学校は去年まで女子校だったため、先輩は全員女子。見目麗しいお姉様方が多い中であってなお一際美人だと一年男子一同が騒ぐのが氷川さんだ。だからよく覚えてる。確かに美人だし。あと校門前でよく話しかけられるし。

ちなみに花咲川学園一年生の男女比は六対四で、男の方が多い。今年から共学になったんだからきつと女の子でいっぱいなんだろうなデユヘヘ… とか思ってたけど、蓋を開けてみれば全然そんなことはなかった。普通に共学だった。話によると受験者の男女比は八対二だったらしい。つたく、男共め。下心丸見えだっつーの（ブルーメン）

話がそれた  
閑話休題

「すんません氷川さん。ケツ、大丈夫ですか？」

「ケっ!? も、もう少し言葉を選べないのですか!? 貴方はいつもいっつも…」

そうやってぶつくさ小言を言ってくるあたり、やはり氷川さんだ。私服を見たのが初めてつてのものもあるけど、ギターケース背負ってのが普段の氷川さんからは想像できなくて最初はちよつとだけ人違いかと思った。あとなんかピアスとか付けてるし。風紀にうるさい人なのになあ。まあここ学校じゃないし、プライベートで何付けてようが関係ないんだけど。

「紗夜ー？ 大丈夫ー？ なんかおっきい音したけど」

氷川さんの小言を右から左に流していた俺の耳に、そんな声が届いた。

声のした方を見れば、氷川さんの後ろから心配そうに近付いてくる影が一つ。

「今井さん… ええ、大丈夫です。少し転んでしまっただけで、怪我もありませんでしたし」

「そっかー。なら良かった☆」

今井さん、と呼ばれた人は、氷川さんに負けず劣らずの美人さんだった。少しウエーブのかかった長く茶色い髪は後ろで軽く纏められ、顔には薄い化粧が施されている。肩出しのニットワンピース？ っていうんだっけ。そんな露出度高めの服は、なんだか年上のお姉さんって感じがする（小並感）

にしても、語尾に☆とか付けてそうな喋り方といい、派手な容姿といい、いかにもギャルですって感じの人だな。なんか氷川さんと相性悪そう。風紀委員的なアレで。いやでも今普通に話してたし、そうでもないのか？

「あと紗夜。そのピアス気に入ってるとこ悪いんだけど、燐子が衣装にもう少し手を加えたいから回収してもいいかって言ってるよー？」

「ピアス？ …… つー！ せつ、関口くん！ これは違いますからね!」

「は？ え、何が？」

なぜか顔を真っ赤にして駆けていく氷川さんの背中を見て、俺は首を傾げる。一体何が違うんだらうか？ ピアスのチョイス？ 別に似合ってると思ったけどなあ。

「あはは〜！ 紗夜ったら照れちゃって〜！ あっ、もしかしてキミ、

紗夜の彼氏とか？」

「なんでそうなるんですか」

氷川さんみたいな美人が彼女だったらそりや嬉しいかもしれないけど…。いや待って、もしそうだったら毎日怒られそうだからちよつと考えるな…。

まあそんなifの話はどうでもいい。どうせ実現なんかするわけないんだし、妄想しても虚しいだけだ。悲しい。

「海く、大丈夫く？ なにかあったの？」

ちようど角で死角になつているのか、さつきぶつかつた氷川さんや俺の目の前にいる今井さんつてギヤルの姿が見えていなかったのだろう。何が起こつているのか気になつたらしいAfterglowの面々が、ひまりを先頭にぞろぞろとこちらに歩いてきていた。あ、俺のギター、ちゃんとケースに入れて蘭が持つててくれてる。

「あれ？ アフグロじゃーん。やつほー☆ 今日そつちも練習だったんだ？」

「あ、リサさん！ はいつ、もう練習は終わりましたけど…。Rose liaもですか？」

どうやら知り合いだったらしいひまり達に会話を任せ、それはそつとギヤルから離れる。いやだつてほら、ギヤルつて怖いじゃん？ しかもバンギヤとかなおさら（小心）

え？ Afterglowもバンギヤ？ こいつらとはバンド組む前から友達だから。

話を弾ませるひまりとギヤルに背を向け、俺は蘭に一言お礼を言つてからギターを受け取る。アコギよりも重いそれを背負い、次はモカに声をかけようとする。そろそろスタジオが使える時間だからな。モカにシールドと、あとエフェクターについてのご教授を受けないと。

「それで、海…。その男の子が、さつき買ったばかりのギターを見せびらかしてたんですよー」

ふと聞こえたひまりとギヤルの会話に、俺の名前が出る。

いや見せびらかしに来たのは本当だけど、他にも色々言い方とかあ

るだろう？ …… 悪かったな、ギター買ってテンション爆上がりしてて。

「やつぎ？ …… ふーん？」

…？ …… なんだ、ギヤルの様子がおかしい。別にギターを買うくらいおかしい事じゃないのに、何をそんなに考え込むことがあるんだ？  
分からん。

「海くんだけ？ …… はじめましてっ。私、Roseliaってバンドでベースやってる、今井リサでーっす！ リサって呼んでくれると嬉しいな☆」

「え、あつ、どもつす。えつと… 関口です」

「アンタ何吃どもってるの？ キモッ」

「おい蘭、そのキモいは普通に傷付くからやめろ」

「あははっ、海くんは面白い子だね〜」

何やら今井さんに気を使われたらしい。じゃないと、今のを見て「面白い」って感想は絶対出てこないだろ…。

はあ、やつぱキモいよなあ。ちゃんとAfterglow以外の女の子耐性付けなきや。彼女欲しい。

「リサ。通路の真ん中で一体何をしているの？ 人の邪魔になるわ」

また奥のスタジオから、またまた美少女が出てくる。次は銀髪美少女だ。察するに彼女もRoseliaとかいうバンドのメンバーなんだろう。氷川さんも出てきた。

さらにその奥から二人、これまた美少女が出てくる。てか一人は見ただことあるな。

「んー？ あつ、お姉ちゃんだー!!」

「おー！ あこ、ちゃんと練習頑張ったか？」

「うんー！」

この元気いっぱい活発娘は何度か見たことがある。巴の妹、宇田川あこだ。ちゃんと話したことはないけどな。巴と遊ぶ時はだいたい外だし、たまに家に行った時にお互いちよっとお辞儀し合うくらいの仲だ。

もう一人は、あことは打って変わって大人しそうな人だ。そして美

少女。圧倒的美少女。黒髪ロング清楚系。なんだ、男のロマンの塊か？ 加えてひまり並かそれ以上の立派なモノを…

「フンッ！」

「アガッ!? お、おい蘭！ いきなり人の脇腹殴んな!!」  
「変態」

なんだろう、俺の考えてることを見抜けるんだらうか？ いやでも万乳引力は男なら誰しも逆らうことが出来ない法則だから仕方なくない？

それにしても、美少女ばつかなあ、ここ。花咲川に入る前にこういうシチュを妄想しなかったことはないけど、いざそんな環境美少女だらけの空間に放り込まれると緊張して後ずさりしちゃうな（ヘタレ）

「関口さーん。部屋の準備出来たので、もう入っちゃっていいですよー」

「あ、はい」

美少女だらけの中の居心地が意外と悪かったり、蘭からの視線が厳しかったりしたので、ここで離脱する理由が出来たのは嬉しい。

俺はさっさと輪を抜け、受付の人に案内されて先程まで R o s e l i a が練習していた部屋に入った。

あつ、同じ部屋なのね。ちよつといい匂いす… おつと寒気が。さては蘭の殺気だな? … え、普通に怖っ。

この後、モカに色々教えてもらってめっちゃめっちゃエレキギターを堪能した。

? ? ? ? ?

「ねえひまり。海くんが買ったギターってさ、色が赤黒だったりする? ペグとかブリッジとか、パーツは金の」

彼、海くんが今まで私達使っていたスタジオに入り、モカがそれに続いた後、アタシはひまりにそう聞いた。

「え? はい、そうですよー。よく分かりましたね?」

「ん。まあ、ね」

やつぱり。

今どきギターを買う高校生なんて珍しくはないけど、さつき買ったっていう人はそう多くはないと思う。多分、海くんが値引きの彼だ。聞けば、彼はアフグロのみんなと昔からの友達だという。あこも知ってたみたい。いやー、世間って案外狭いね☆

「海、ギターすっごく上手いんですよ！ 蘭やモカがギター始めたのも、海の影響が大きかったんだと思います。ね、蘭！」

「……まあ、あいつがギター上手いのは認めるけど」

へえ。蘭が褒めるってことは、本当に上手いんだろうな。

ひまりの話じゃ、海くんは今までアコギばかりやってきてたらしい。弾き語りがめっちゃ上手いってひまりが言ってたし、それには巴やつぐ、あと蘭も頷いている。

それを聞いた友希那と紗夜がちよっと反応してた。弾き語りってことは、歌も演奏も上手いってことなんだと思う。アフグロは演奏のレベルが高いし、蘭の歌も良い。そんな彼女たちが褒めるんだから、二人が反応しちゃうのも、まあ妥当といえれば妥当なのかな。アタシも気になるし。

いつか海くんの弾き語り、聴いてみたいな。

アニソンやボカロはかつこいいけどシンプルに難しい。

「あの、体育館ってどこですか？」

彼と出会ったのは、入学式の日。新入生案内用の看板などを片付けている時だった。

初対面の時の彼への印象は、不真面目。その一言に尽きる。

「式はもう始まっています。遅刻ですよ」

数分の遅れではない。入学式はすでに半分ほど終わってしまったているだろう。長い校長先生の話も終盤に入っている頃か。

そんな遅刻してきた彼は、服装も乱れていた。ブレザーは鞆にしまつてあるのか見当たらず、ワイシャツの袖を雑に捲っている。ネクタイは緩めてあり、ズボンの裾は膝下まで捲り上げられていた。髪は黒で地毛っぽい、目元まで伸びていて眉は完全に隠れている。

「すみません、来る途中でザステイン二号が壊れちゃって」

「ぎす…?」

何かの隠語かしら？ よく分からないけれど、多分重要な言葉ではない気がする。

それに、いかなる理由があろうと、遅刻は遅刻だ。

「全く… 体育館はあちらです。急いで行きなさい。あ、式の邪魔にならないように静かに入るんですよ」

「はい、あざっすー」

そう言つて、彼は駆け出した。

我が校は今年から共学となつて、男子が入学してくる。そうなれば当然風紀も乱れやすくなるだろうと考えていたのだが… 彼とは今後関係しなければならなくなるかもしれない。



——翌週。抜き打ちで行った朝の服装検査に、彼は当然のようにひっかかった。

? ? ? ? ?

「くぁ……」

水曜日の昼下がり。

五時間目の数学をなんとか乗り切った俺は、欠伸と大きく伸びをした。

高校に入学してから早一ヶ月と少し。環境には慣れつつあるが勉強には一切慣れない。因数分解とかいつ使うんだよ。大学受験か(解決)

「眠そうだね、関口くん」

数学の教科書とノートを机の中にしてしまっていると、前の席に座ってる女子から声をかけられた。

「ん……。ちよつと昨日夜更かししてて」

「また? 最近、っていうか今週ずっとそうじゃない? ダメだよ、ちゃんと寝なきゃ」

メツ、と人差し指を立てながら、彼女は注意してくる。かわいい。そんなかわいかわい彼女の名前は、山吹沙綾。先週の席替えで山吹さんが俺の前の席になって、それから話すようになった間柄だ。

「それは分かってただけでしょ……。月曜に言ったろ? ギター買ったって。新しいギター買うとき、なんか無性に弾き倒したくなるじゃん?」

「まあ気持ちは分からないでもないけどー……」

「なにになに? ギターの話?」

微妙に納得のいつていなさそうな山吹さんの後ろ、俺から見て山吹さんより黒板側から、目を輝かせた少女がひよこっと出てきた。彼女も今回の席替えで席が近くなりギター関連の話で盛り上がった人物の一人、花園たえだ。

「そー、ギターの話。せつかくだからリードに挑戦しようと思ってる

んだけど、これがまた難しくてさ。てかアコギと少し違うからまだ感覚が掴めてない」

「あー、確かに。私アコギはあんまり触ってないけど、ちよつと感触違うよね」

「なんかオススメの練習方法とかある？　とりあえずメジャースケール練習してるんだけど」

『エレキ 練習 初心者』

で検索かけても、ほとんどコードの練習とかしか出てこないからな。コードは弾けるつちゅーねん。逆にコードしか弾けんわ。

「コードは弾けるみたいだし、それでいいんじゃないかな？　運指のトレーニングは大事だし。慣れてきたらペンタとか？」

花園さんはギター経験者で、聞いた話では俺より長いらしい。この前学校にギター持ってきてたから弾いてみせてもらったんだけど、指めちやくちや速く動くのな。あとあれ、タツピングっていうんだっけ。指で指板の上の弦を弾く奏法。そういう、私今エレキギター弾いてますよ！　って感じの弾き方してたから密かに憧れてる。アコギでもやろうと思えば出来るんだらうけど、今までやろうと思わなかったからなあ。てかあんなの歌いながら弾けるかよ。一部のプロくらいだわ。多分。

「あと、曲練習してみるのもいいって聞いたことあるよ」

山吹さんがそうアドバイスをくれる。

曲の練習か。確かに、そっちの方が楽しく練習できるかもな。

「関口くん、好きな曲とかある？　アーティストとか」

「B, O」

「また難しいところだねえ」

いやだって。かつこええやん、B, O。

けどまあ、確かに難しいと思う。あの人らすんごいから。グルーヴ感ハンパないって。

「ほかってなると... Hales Oormとか」

「ハードロック好きなんだってことは分かった」

「slipp O notも好きだよ」

「ゴリゴリだね」

「ミ〇クの言葉を信じて部屋で8時間練習してる」

「いや、だからちゃんと寝なよ?」

心配そうな... いやこれは呆れてんのか。山吹さんのそんな目が俺に向く。対する花園さんは目をキラキラさせた。さてはてめえ、Ha〇estormもslinknotも結構好きだな?」

そんなこんなで、六時間目開始のチャイムが鳴った。

六時間目は... 世界史だっけ。なんで一年で世界史を選んだら二年から三年にかけては日本史をやるのか、本当に謎だ。三年かけて一つの科目極めた方が絶対受験に有利なだと思わん? 俺は思う。まあ世界史も日本史も好きだからいいけど。

? ? ? ? ?

「らっしやつさせー」

学校も無事終わり、放課後。俺はバイトに来ていた。

高校入学の三日後に面接、翌日から出勤となった現バイト。週二〜三勤務で、平日は実働四時間、土日祝日は六〜八時間で入っている。加えて毎月のお小遣いもあるので、月に手にするお金は合計六万くらい。高校生にしては貰いすぎなくらいだ。

今は買いたい機材がたくさんあるから金が必要なんだよな。ある程度揃えたらシフト減らせ。遊びたいし。

「バーガーお一つ、ポテトSサイズお一つ、いちごシェイクSサイズお一つでよろしいでしょーか。ありがとございます、隣にずれてお待ちください。お次のお客様、こちらのレジどーぞー。らっしやつさせー」

最初はマニュアル通りの文句をガチガチに緊張しながら言ってたけど、一ヶ月もやってれば慣れてくる。少し雑だけど、特に怒られないしファストフード店の店員に恭しい接客なんて相手も求めてないだろ。最低限の接客態度でいいと、俺が客側ならそう思うね。ダルいだけとかじゃないから、本当だから。

それからしばらくレジ対応をしていると、ピークの時間を過ぎたように、客足が少なくなってきた。店的には混んでいる方がいいのだろうが、俺的には空いてる方が楽でいい。

「お疲れ様〜！ 海くん、もうすつかり仕事に慣れたみたいだね」  
レジで暇をしていると、隣から劳いの言葉がかけられる。

俺のバイトの先輩であり、学校でも一つ上の先輩な、丸山彩さんだ。今日も今日とてかわいい。アイドルに学生にバイトにと、結構忙しい身の人ののだが、疲れなど一切感じさせない明るい人である。ドジっ子などころもあり、俺の癒しだ。絶対に本人には言わないけど。言ったら怒られそうだし、なにより女子のことを本人の目の前で褒めるのって恥ずかしいじゃん？ …いや、ドジっ子云々はただただ怒られるだけだな。

「丸山さんがくれたマニユアルのおかげですよ」

「えへへ、役に立ったみたいで良かった〜！ あつ、でも海くん、最近接客テキストになつてゐる時あるから気を付けてね？」

気付かれてた（残当）

まあ現役アイドルに、メツ！ つてされるの優越感に浸れるからありっちゃありだな。見ろ、全国の丸山彩ファン達よ。俺は今、丸山彩にメツ！ つてされているぞ…ッ！

…いや、熱狂的なファンに何されるか分かつたもんじやないな。やっぱ見んな。

「あと一時間くらいであがりだよな？ 帰り駅まで一緒に帰ろっ！」

「夜に現役アイドルと一緒に歩いてるとパラッちられるか刺されそうなんですけど」

「大丈夫だよ、私変装するし！」

「余計心配なんですけどそれは」

このあと、めちゃくちゃ本気で変装させた丸山さんと一緒に帰った。

？  
？  
？  
？

一週間が経ち、時間は放課後。

今日はCiRCLEのスタジオを予約してあるので、学校が終わってから直でCiRCLEに来ている。蘭達も誘おうと思ってたんだけど、今日はみんな用事があるとかで集まれなかった。ボツチである。寂しい。

受付でシールドと、あとマイクを借りてスタジオに入る。

正直な話単音の練習だけでは飽きるから、途中途中で息抜きに弾き語ろうと思って。

「おお… やっぱアンプに繋ぐと迫力が違うな」

レスポール特有の凶太い音というか、「これぞロック！」って感じの音が腹に響く感覚。悪くない…。ふふっ、こりやあ震えちまうぜ…。

家ではご近所迷惑になるため、アンプになんか繋げない。そもそもアンプなんて持ってない。インターフェースだかなんだかがあればパソコンに繋いで音が聴けるらしいけどよく分からん。買う金もない。バイト代溜まったら検討しようとは思ってる。

さて、今日わざわざスタジオを予約したのはただ音を聴くためじゃない。いや、それも半分以上あるけど、それだけじゃないんだ。

この一週間、家にこもって寝る間も惜しみ、ようやく完成した。

そう、曲の通しである。

本当は巴やひまりとかに頼んでセッション的なこともしたかったんだが、それはまた今度でいいや。

「動画も撮っとく」

スマホを譜面台に置き、顔は映らずギターと胴体のみ映るようにセッティング。あとで、自分がどんな運指の仕方をしているのかを見返すのも良い練習になる。

音楽プレイヤーに繋いであるイヤホンを右耳に突っ込み、イントロのキーボードの音を聴きながら、最初押さえる弦を確認する。ここ、キーボードよりピアノチックだから好き。

今日練習してきた曲は鈴木こ○みさんの『This game』。アニソンだ。いや、この前姉ちゃんにこのアニメ勧められて観たんだ

けど、これがまた面白くて。なんの曲練習するか決めあぐねてたところだったから、これでいいかなって。好きだったし。

長めのピアノが終わり、ようやくギターのパートが始まる。

最初のコードは小さめに、徐々に上げていく。こういう時ペダルとかあれば便利なのかもしれない。まあ手元でどうとでもできるからいいんだけど。

歌が始まってすぐの単音と、ビブラート。そこが少し不安だったが、難なく弾けた。気持ちいい。あとは慣れたコードと少しの単音で曲は進んでいき、俺の一番の山場でもあるBメロとCメロの間奏、いわゆるギターソロにさしかかる。

アコギではあまり使わない（少なくとも俺は使ってなかった）十四フレットまで指をスライドさせ、その弦以外に触れないよう丁寧に、なおかつ素早く弾く。プリングやハンマリングなども少しだけ織り交ぜ、止まることなくソロを弾きおえれば、曲が一旦静かになる。その後は駆け抜けるようにラスサビをかき鳴らし、フィニッシュ。

「き、気持ちいい……」

エレキでの初演奏が終わって最初の感想がそれだった。

マジ気持ちいい。アコギとは違った良さを、俺は今真の意味で理解した気がする。

… あっ、そういや動画撮ってたんだっけ。

そう思ってスマホに手を伸ばすと、画面越しに俺の背後が見えた。

後ろは出入口。音漏れが無いようにしっかり二重になっている、ドゴつい扉だ。

それが今、何故か空いている。

それだけならいい。いや良くないけど。スタッフさんに怒られるけど。そうじゃなくて。

「…… 何、してるんスか？」

「覗き見よ」

「…………… えっ、もしかしポリスメン？」

「軽率な行動は良くないと思うの」

なんか銀髪の美少女に覗き見されてた。

「友希那く、そっち隣の部屋だよ〜?」

どこからかそんな声が聞こえる。

状況から考えて、友希那とはこの銀髪の人だろう。

「ええ、分かってるわ」

「いや、だったらなんでそっちに……あれ、海くんじゃん? やっ

ほー☆ あ、もしかして練習してた?」

「もしかしなくてもしてましたね」

「あはは〜、まあスタジオ入ってるし当然か☆ ごめんね〜、うちの友希那が邪魔しちゃったみたいで」

「失礼ね。邪魔なんてしてないわよ」

まあ確かに邪魔はされてないけども。

覗き見されてたつてのが問題なんですよ。完全に一人だと思つててなんか演奏中暴れちゃってたからな。これでもし笑われでもしたら俺の精神は半日ほど死ぬ。いや、相手が女子、しかも美少女つてことを考えると、今後この曲を聴くたびに悶えるかもしれない。

「今の曲、『Thos game』よね?」

「え? はあ、まあそうですね」

「今ちようど、私達もその曲のカバーをしていたところなのよ。だからちよつと気になって」

まさかの。そんな、何万曲つてある中からピンポイントで合うことなんてある? あるんだあ (感心)

いやでも「気になって」つてなんぞ? ドラムとかならまだしも、ギター之音がそんなハッキリ外に音漏れしてんのかここ? 設備大丈夫かよ。

「決して部屋を間違つて入ったとかじゃないわ。音が外に少し漏れ出たのよ。ほら、私耳が良いから。少しの音漏れでもちゃんと聴き分けられるの。本当よ?」

なんか聞いてもないのに自ら進んで墓穴掘つてきましたねえ (啞然)

「も〜、海くん呆れてんじゃん」

「そうみたいね。私の耳の良さは常人のそれではないから」（ドヤア）  
「（そういう呆れじゃ）ないです」

ドヤ顔で言うことじゃないと思う。

よし、少し分かった。この友希那さんって人、クールぶってるお茶目系キャラだな？

「でも、海くんもあの曲練習してたのは偶然だね」

「はあ…最近聴いて、結構好きな感じだったんで練習がてらちよつと」

「そんな貴方を見込んで頼みがあるの」

「お断りします」

「軽率な判断は死に直結するわよ」

「え、怖…」

死て。いや死て。

全然お茶目じゃなかった。断ったら何されちゃうんだよ俺。

「私達の演奏、みてくれないかしら」

? ? ? ? ?

「それで連れてきたんですか？」

「ええ」

はあ、と私は一つ嘆息する。

そんな私の前では、状況がよく分かっていないような顔をした後輩が、ちよこんと椅子に座らされていた。彼だけでなく、白金さんや宇田川さんもなんだかよく分かっていない顔をしている。私も分からない。

まあ湊さんが言うのなら、これにも何か意味があるのでしょけど…。

「さあ、始めるわよ」

『はーい』

「えっ」

湊さんの合図を受け、関口くんの困惑を無視して宇田川さんのカウ



ントから伴奏が始まる。多分湊さん以外今の状況をきちんと理解している人はいないと思うけれど、曲が始まったのなら関係ない。完璧な演奏をするだけだ。

最後のコードを弾き、演奏が終わる。

「ふう… どうだったかしら？」

一息ついた湊さんが、関口くんに感想を求める。

最初こそポケツとしていた関口くんだったが、一番のサビが始まった頃には真剣な顔付きになって聴いていた。彼がどれだけ音楽への知識を持っているのかは分からないが、第三者からの意見は貴重なものだ。

「えつと… まあ、凄かった、としか。上手いんですね、皆さん」

ありきたりな感想ね。Afterglowの皆さんが口を揃えて

「上手い」と言っていたけれど、彼に意見を求めたって――

「ただまあ、細かいので気になる点ならいくつか」

「！ 教えてちょうだい」

湊さんが食い気味に聞く。

それは私や他のメンバーも同じで、静かに彼の言葉を待った。

「えと… じゃあ、リズム隊から。あこちゃん、あと今井さんはちよつと走りすぎですね。勢いがあることはいいんだけど、バンドは土台のリズム隊がしっかりリズムキープしなきゃ、曲全体が狂っちゃいますから」

「は、はい！」

「は〜い。てか、呼び方。リサでいいって言ったじゃ〜ん☆」

今井さんの呼び方は置いておくとして、なるほど。その指摘は正しい。実際、私達も何度か宇田川さんや今井さんに注意はしていたことだ。

「次がシンセの人、ですかね」

「あ… し、白金… 燐子、です…」

「じゃあ、白金さん。白金さんは、聴いてた感じ完璧です。ただ、もう少し自信持って弾いてみたらどうでしょうか？ せつかく上手いん

ですし。あと、この曲はシンセの存在感が強いんで、堂々と弾いた方が様になると思います」

「は、はい……頑張り、ます……」

……彼、同じ高校の先輩なのに白金さんのこと知らなかったのかしら。

「んで、次。氷川さん。ちよつとミスタッチが多いですかね。聴いて違和感があるほどじゃない、本当に些細なレベルですけど、結構同じフレーズで失敗しちやってるんで、癖なのかもしれないっすね。あ、あと小指もう少し使えるようになるといいかなって思います」

「……次は修正します」

ミスタッチ、バレてたのね。いえ、別段隠してたわけでもないけれど。ミスしたところは自分がよく分かっている。けど……他人に指摘されると、より気が引き締まる気がする。

「最後が友希那さん……なんですけど、いや、ボーカルに関してはマジ圧巻って感じですね。俺が言えることないっす」

「そう。ありがとう」

関口くんの言う通り、湊さんの歌は素晴らしい。私も練習するにあたって曲は聴き込んだけれど、本家とほぼ遜色はないように思える。

それはそうとして、関口くんの指摘はタメになる。普段、外から聴いた私達の演奏への指摘はあまり聞く機会もないから尚更だ。

「……関口海。貴方、中々いいわ。美竹さん達が褒めるだけはある。さっきの貴方の演奏も素晴らしかったし……ねえ、海。私達の御意見番になる気はない？」

「え、お断りしま——」

「軽率な判断は命に関わるわよ」

「いやだから俺何されるんすか？」

——そんなこんなで、湊さんの申し出を断り切れなかった後輩が御意見番となった。なってしまった。

まあなつてしまったものは仕方がない。別に私達のマイナスになるようなこともないだろうし。

「じゃあ海くんがRoseliaの御意見番になったってことで…  
海くん、ここらで一曲どうぞー!」

「は?」

「いいですね。私達だけ演奏を見せる、というのも公平ではないです  
し」

今井さんの意見に、私も乗っかる。

Afterglowが上手いと手放しで褒める彼の实力を見てみ  
たい。

「えく…俺今日アコギ持ってきてないんですけど」

「大丈夫ですよ。私、アコシユミ持ってますので。お貸しします」

「…はあ。なんの曲がいいんですか」

「やった☆んく…弾き語りっていえば奏じゃない? スキ○ス  
イッチの!」

「あこはねー! あこはー、えつと…紅とか聴きたい!!」

「ちよ、あこく。さすがにXはアコギじゃ…」

「本家がアコギでやってたこともあるらしいんで多分できます」

「マジで!」

結局、この後一人一つ弾いてほしい曲を言っていた。

今井さんがスキ○スイッチの奏。宇田川さんがX J A O A Nの  
紅。白金さんがボカロの曲で、4○mPという方からくりピエロ。  
湊さんがヨル○カの藍○乗。私はf1○mpo○の君○届けを。

正直今井さんと私の選曲以外は弾き語り向きの曲ではない。随分  
無茶ぶりをするものだと思っていたのだが――

関口くんは、全ての曲を高水準で弾き語ってみせた。

いつもの不真面目な彼とは一変して、ギターを弾いている時の彼は  
真剣そのもので、その…か、かつこ良かった…と思う。

人をおちよくる時は引き際だけは考えた方がいい

「また貴方ですか!!」

ふと、私が登校してきて校門を抜けようとしている最中。

聞き覚えのある声が聞こえた。

「この一週間毎日毎日… 昨日も、一昨日も、その前も言いましたよね？ 『明日も服装検査するからちちゃんと制服を着てくるように』と。それがなんなんですか！」

私と同じクラスで、同じバンドに所属している氷川紗夜さん。彼女の声は非常に通りやすく、声の小さな私にとっては羨ましい限りだ。

そんな彼女の怒りの矛先は、ここ一週間ずっと氷川さんが愚痴を漏らしている相手。一年生の男の子に向いている。確か名前は… 関口くん。

「いや、今日はちゃんとしてるじゃないっすか。ネクタイしめてるし、靴下も白だし、靴も鞆も指定のやつ」

「自分の下着を見てみなさい!!」

「えっ？ そんな… 公然わいせつですか？」

「~~~~!!! うっ、上のことです！ 肌着!!」

声にならない怒りで顔を般若のように歪める氷川さん。怖い。

そんな氷川さんに臆することなくおどける彼は、心臓に毛でも生えているのだろうか？

彼の肌着は、ワイシャツの上から透けて見えている。校則では、肌着の色は白でワンポイントまで、だったはずだけど…。彼は黒い肌着で、ワンポイントではすまない文字入りTシャツを着ていた。

… 粉塵爆発？ なんで？

「あー、これっすか？ 俺の好きなユーチューバーのTシャツです。にゃ〇たこっっていうんですけど…」

「知りませんっ！ はあ… 今日のもういいです。肌着を脱げという

わけにもいかないですし、反省文を放課後までに提出してください」  
「はい」

「明日は絶対！ ぜえつたいにキチンとした服装で登校してくるよう  
に!! いいですね!」

「努力は… してみます…!」

「か・く・じ・つ・に! 校則に則った服装をしてきなさい!!」

「はいはい」

顔を真っ赤にして怒る氷川さんと、楽しそうに笑って校舎に向かう  
関口くん。

すごいなあ。私にはあんなことはできない。氷川さんに怒鳴られ  
たらすぐ謝っちゃう。いえ、真似しようとか真似したいとか、そうい  
うのは無いけど。

そんな彼とお昼休みにすれ違った時、彼の肌着は無地の白になっ  
ていた。

? ? ? ? ?

「給料を貰いました」

『おおく』

羽沢珈琲店にて、俺は分厚くなった財布を掲げる。まあ分厚くなっ  
たっていつでも数枚の諭吉じゃたかがしれてるけど。小銭増えた時  
の方が分厚いよな。

だが、財布の分厚さなど問題ではない。事実として金が手元にあ  
る、それが重要だ。

「つーわけで、シールドとエフエクター買いに行きたいんだけど、誰か  
付き合ってくんね?」

そう、念願のエフエクター購入の時が来たのである。

一ヶ月分の給料は五万と少し。研修中ということと若干時給が安  
くなっていたので、来月はもう少し期待できそうだ。

とりあえず、今日エフエクター代に使えるのは三万円まで。残りは

貯金して、遊ぶ金にする。俺だって現役の高校生、遊びたい盛りだ。学校帰りに友達と買い食いしたいし、服だって欲しい。全てを楽器類に貢ぐわけにはいかない。

「あたしはパス。今は勉強したい」

「アタシもだ。悪いな、海」

「ごめんね、海くん。私もちよつと…」

「明後日中間テストだもんね。花咲川もそろそろテストなんじゃないの?」

「数学以外は九割取れるし。数学も赤点はないだろ」

「うわ、これだから海は…モカと同じタイプだ」

なんだ、みんなしてノート広げてると思ったら、テストが近いのか。

俺はテスト来週からだし、授業はちゃんと聞いているから赤点はない。全国模試ならまだしも、学校の定期テストは先生が言ったこと聞いてりや点取れるからな。モカは聞いてないのにできる天才型だけだ。

しゃーない、モカだけにでも付き合ってもらって…あれ? モカは?

「なあ、今日モカは来ないの?」

「そういえば来てないな…蘭、何か聞いてないか?」

「今日バイトって言ってた」

「ああ、なるほど…え、モカのやつバイトしてんの?」

なにそれ初耳。あいつなんでも器用にこなせるけど意図的にふぎけるからなあ。バイトとかできんのかな?

「先週から始めたみたい。モカの家近くのコンビニだって」

「え、そこ私がよく買い物行くところじゃん! モカがレジの時、なんか割引とかしてくれないかな。ってかあれだね? そこ、リサさんも働いてるとこじゃない?」

「そうなん? そりやまた派手なコンビニ店員がいたもんだな」

まあ、モカがいないんだったら今日はもういいかな。一人で行ってもエフェクターのこととかよく分かんないし。歪みとか空間系とか、そういう種類までは調べたけど、どれがいいのかとかが分かんない。

高い金出すんだし、ちゃんとしたの買いたいからな。

「なあ海、ちよつとここの英文の訳し方教えてくれ」

「ん？ えーつと… 『雨の中あなたの家に行ったのに、あなたは結局いませんでした』、かな。 only to V で『Vしたけど、結局…だった』っていう逆説的な意味になるんだよ」

「なるほど… サンキューな、海！」

「ほいさ。そうだな、今日はもうエフェクターはいいから、俺も勉強すっかな」

来月には全国模試もあるみたいだし、そこで好成绩出して親に小遣いねだってみよ。金はいくらあってもいいんだよオ…。

てか、昔からみんなに勉強を教えるのは俺の役目だったし、今回も分らないところは教えてやろう。それも勉強の一環だし。

モカの方が勉強はできるんだけど、あいつは教え方が奇天烈すぎるからなあ。まずノートの解読に時間がかかるし、感覚派だから何言ってるのか分からん時もある。てか勉強感覚派ってなんぞ？ 感覚で解けんのは国語と英語の長文くらいだろ、ふざけんな。

その後、三時間ほど勉強会を続けて、今日のところはお開きとなった。

みんな別に頭が悪いわけじゃないし、なんなら真ん中よりは上の成績だから、教えるっていつでもそんなに苦労はない。てか数学については逆につぐみから教えて貰ったし。これは満点取らなきゃつぐみに合わせる顔がないってもんだな。よーし、ツグるぞー。

まあそれはともかく。

羽沢珈琲店で少し遅めのおやつを頂いたあと、ひまりの提案で、帰りがてらモカの働くコンビニに寄ることになった。つぐみも連れて行くあたり、帰りがてらってより普通に冷やかし目的な気がしないでもないが、まあ細かいことは気にすんな。

「バイトかく。私も何かやろっかな？」

「お、じゃあウチくるか？ ひまり。この前バイトが三人くらい辞めちゃって、少し人手が足りないって店長が言ってたし。多分求人もま

「だ出てんじゃねえか？」

「ホント!? じゃあちよつと応募してみよつかなく」

「おう。なんなら俺の紹介って感じで店長に言つとこうか？」

「あつ、それ助かる〜! じゃあお願いしていい？」

「ん、おっけ」

「おつ、ひまりもバイトするのか。じゃあアタシもやろうかな。海んとこの店ってまだいけそうか？」

「いけんじゃね? まあ店長に言ってみないことには分からないけ」

「そつか。じゃあアタシも一応頼む！」

「おっけー。こうなりや蘭やつぐみもやるか？」

「私は家の手伝いあるから、ちよつと掛け持ちは厳しいかな。ごめんね、せつかく誘ってくれたのに…。」

「あー、うんにや、気にすんな。それは仕方ない。蘭は？」

「… あたしもパスで。バイトやってる暇ないし」

あ、蘭は家のこととかあるんだっけ。

詳しく本人から聞いたことはないけど、華道の家元とかなんとか。他人<sup>ヒト</sup>ん家の事実<sup>チ</sup>は知らないけど、大変なのかもしれない。

そんなことを駄弁っていると、例のコンビニに着いた。

なんだろ、友達が働いてるところに行くのって初めてだけど、なんかソワソワするな。口元ニヤケそう。

そんな思いの中、俺達はコンビニの自動ドアをくぐる。

「パンプキーン… あつ、みんな〜。やっほ〜」

どこか間の抜けた声が、店内に響く。

… パンプキン? かぼちゃがどうした? 季節外れのハロウィンキャンペーンでもやってんのか?

「も〜、モカ、ちゃんと接客しなつて言ってるじゃん。あ、アフグロに海くん。いらつしやいませ〜☆」

「サンシャイーン」

奥から出てきたリサさんがモカに注意する。一緒のシフトだったんだ。てかモカのやつ、クビになつたりしないよな?

その後、ひまりが買ったコンビニスイーツのカロリーを言い上げる



という新手のイジメをやり始めたモカがもう少しで退勤すると言うので、俺達はコンビ二の前でアイスとかスイーツとか食って時間を潰した。

… 蘭と巴がいるとヤンキーが溜まってるみたいに見えなくもない（小並感）

?? ?? ??

月曜日、放課後。

明日からの中間テストに備え、今日は午前で授業は終了した。

中学までは二日で終わっていたテストだが、高校になると四日も使うようで、明日から金曜日までずっとテストだ。まあ前日午前中だけで終わるから楽っちゃ楽なんだけどな。

「なあ関口。ちよつと図書室で勉強しないか？ 古文と漢文教えてくれっ！」

帰り支度をしている俺に、男友達が話しかけてくる。

去年まで女子高だった花咲川だが、今年から共学になり、現一年の男女比は六対四。そんな男女比であれば、男の友達だって普通にできる。

今話しかけてきたのは須田<sup>すだまこと</sup>誠。入学当初の席順で、俺の一つ前だった奴だ。須田はいい奴で、入学式に遅刻してきた俺に快く話しかけてくれた、高校で初めての友人である。

「別に勉強教えるのはいいけど、なんで図書室？ あそこ、静かにしなきゃいけない雰囲気あるし、教えるには向いてない場所だと思うんだけど」

「いや、それもそうなんだけど… 図書委員の先輩、めっちゃ可愛いらしいんだよ」

「なんだそれ。ったく、可愛い先輩目当てとか。ちゃんと勉強する気ないな？」

「んー、そつかあ。関口は美人な先輩に興味無いか」

「興味あるに決まってるさっさと行くぞ準備しろ須田」

「お前のそういうところ好き〜」

つてことで図書室に行くことになった。

年上美人を一目見てみたい。男なら当たり前だよなあ？ まあちよつと見たら帰るけど。明日数学あるし勉強しなきゃ。

支度を終えた須田と共に、俺達は図書室へと辿り着いた。

勉強といえば図書室で、つてのは少しばかり古い考えらしく、窓から見える図書室内はがらんとしている。まあ夏場はエアコン効いてるからともかくとして、この時期は図書室にいて得することなんてほぼないからな。自宅か、もしくはファミレスとかに集まるんだろ。現にAfterglowは羽沢珈琲店に集まるしな。

「で？ その美人先輩は今日図書室にいるのか？」

「知らね。入ってみりゃ分かんだろ」

そう言つて、須田は図書室のドアを開ける。

それと同時に、図書室特有のあのカビ臭いような匂いが俺の鼻腔を擦った。いや、カビ臭いとはちよつと違うな。なんていうかこう、古本の匂い？ そんな感じ。

須田に続き、俺も図書室に入る。さて、噂の美人図書委員はいるのだろうか。せつかく来たんだからいて欲しいな。

「…… あ、関口くん」

「白金さん？」

図書室の受付に一人座っていたのは、最近なぜか御意見番とかいうものになってしまったRoseliaというガールズバンドのキーボード担当、白金燐子さんだった。

え、この人花咲川の生徒だったん？ というかもしかして、美人な先輩って……。

「おい関口イ…… ちよおつと面ア貸せや……」

「お前キャラ変わってんぞ」

なんか須田に肩掴まれて図書室の外に連れ出されてしまった。やだ、顔怖いよ須田くん。せつかくのイケメンが台無しよ…… 言うほどイケメンじゃねえな、こいつ。悪くもないけど。

「てめえ今失礼なこと考えたろ」

「いや？ 事実を事実として再認識しただけ」

ナチュラルに心を読まれかけたのは一旦置いておくとして、一体なんの用だろうか。白金さんに聞かれちゃまずい話？ …… そんなん猥談しか思い付かないんだけど。昼間つからそんな話する気かこいつ？

「お前… あの先輩と知り合いなのか？」

「白金さんのこと？ まあ、知り合いっちゃ知り合い」

御意見番とかしてるよ。

「お前ってやつは… お前ってやつは… !!」

「？ どしたんお前」

肩をわなわなと震わせる須田を、俺は理解できてないですつて顔で見る。いや、本当にこいつの行動の意味が分からん。悪いもんでも食ったか？

「お前！ 氷川先輩っていう超絶美人な彼女がいながら、他の女に手え出してんじゃねえぞ?! 山吹さんやおたえちゃん、香澄ちゃんに留まらず!! お前別の美人先輩にまで!!」

「ちよつと待て少し話をしよう須田」

誰と誰が付き合ってるって？ え、俺と氷川さん？ マジ？ そんな噂流れてんの？

「須田、落ち着いて聞け。まず前提として、俺は氷川さんと付き合ってるわ」

「嘘だツ!!」

「いやホントだよ、なんで嘘つく必要があんだよ。彼女出来たら真っ先にお前に自慢するわ」

「… 確かに。それによく考えりゃ、お前に年上美人がなびくわけねえな」

ぶん殴つたらかこいつ。

「… まあ今はいいや。んで、次。俺は山吹さんにも花園さんにも戸山にも、ましてや白金さんに手なんて出してない」

「確かに。お前にそんな度胸あるわけないもんな」

「歯ア食いしばれ」

「あだツ!!」

顔はさすがにまずいと思ったから肩に一発入れといた。なんだこいつ、俺のこと馬鹿にしたいのか？

「つーかだいたい、なんで俺と氷川さんが付き合ってることになつてんだよ」

「いや… 毎朝あれだけ元気に痴話喧嘩してたらそりや… ねえ？」

「痴話喧嘩だあ？」

毎朝つていうと… あれか、俺が氷川さん弄ってるやつか。

えー… あれ痴話喧嘩に見られてんの…？ 氷川さんの反応が面白いから色々やってたけど… なんか悪いことしちやっとな。俺と付き合ってるように見られてたとか、氷川さんもいい迷惑だろ。

ま、とりあえず今後は控えるか。そろそろしつこくて嫌われるかもしれなかったし、いい引き際だろ。嫌われたくはないしな。

「で？ 山吹さん達のは」

「あれはお前、教室ですつと喋ってるし、おたえちゃんに至つてはお前と話してる時が一番楽しそうだし」

「そりやギターの話してるからだろ。むしろその話しかしてねーよ。お前もベース始めりやあ、牛込さんと楽しくおしゃべりできんじゃねえの？ 知らんけど」

「マジか!? じゃあ俺ベース初めよつかなあ」

軽率過ぎひんこいつ？ まあいいけど。

以前須田本人から聞いた話だが、こいつは牛込さんにホの字らしい。大人しそうだし、そういうところが良いのかもしれない。頑張ってくれ。

「ちなみに、白金さんも楽器… バンド繋がりで知り合った人だよ。氷川さんと同じバンド組んでんの」

「そうなん？」

「そうなん」

「じゃあさっきの先輩… 白金先輩だっけ？ その人とも、そういう男と女の関係じゃないと」

「言い方がヤラシイなお前。ちげーって」

「なるほどなるほど」

「どうやら誤解は解けたらしい。須田だけな。」

「まったく、噂流れてるってことは、多分クラスの奴は半分以上が俺と氷川さんが付き合ってるって思ってるんだろうし、そんな彼女持ちの俺が色んな女の子に手を出してるって思われてるってことだろ？」

「…うーん、丸山さんには知られたくないなあ。あの人に軽蔑の目で見られんのはちよつと精神にこたえる。」

「はあ…ちよつとは考えて行動しなきゃダメなのかね？」

「これで変な噂がさらに広がったら、それに巻き込まれたみんなに申し訳ないし、俺も困る。なんで困るってお前、校内で好きな人ができた時に積極的にアピールできなくなるじゃん。」

「ま、いいや。過ぎたことはしゃーないな。とりあえず須田、勉強すつか」

「ホント、お前のそういうところ好き〜」

「それさつきも聞いた。」

「てかどういこうとだよ。」

「? ? ? ? ?」

「関口くんがお友達（らしき人）に連れられて図書室を出て行ってから十分と少しくらい経った頃。二人はまた図書室へやってきた。」

「明日からテストだし、おそらく勉強しに来たのだろう。」

「白金先輩！ はじめまして！ 俺、須田誠っていういます！ 関口のクラスメイトっすー！」

「えっ…!!? え、と…は、はい…よろしく…お願い、します…?」

「元気に頭を下げられて自己紹介されちゃって、びっくりしちやっただ。」

「おどおどしながらなんとか返事したら、関口くんのお友達…須田くんは、一歩私に近寄ってくる。ひえっ…。」

「趣味は映画鑑賞、最近は純愛モノをよく観ます！ あ、あと音楽興味あるっす！ …… おい関口、白金先輩の趣味は？ 好きなものとか」

「はあ？ 知らねえよ、読書とかじゃねえの？ 図書委員だし」

「なるほど確かに。あと読書も好きです！ えと… そう、推理モノとか！」

「は、はあ…？？」

関口くんと小声で何かを話した須田くんは、また元気に自己紹介をしてくる。な、なんなんだろう…？

助けを求める意味で、関口くんの方を見る。だが彼は呆れたような顔を須田くんに向けるだけで、私のSOSに気付いてくれない。うう… 須田くん、分からない…。

「白金先輩！ 下のお名前をお伺いしてもいいですかっ！」

「え!? あ、あの… 白金、り、燐子… です…。」

「燐子先輩！ いえ燐子さん！」

「ひうつ!？」

また一歩近寄ってくる。お、男の人にこんなに詰め寄られたら… こ、怖い…。 た、助けてください、関口くん…！

「あ… じゃあ白金さん、俺ら… ところで失礼します。ほら須田、行くぞ」

「お、おいちよつと待てっ！ まだ話したいことが…。」

「あんましつこいの苦手な人だから、ここで退いとけ」

「え？ あ、そういう… 分かった。じゃあ燐子さん！ またいつか！」

そう言っつて、十数分前とは逆に、関口くんが須田くんを引っ張って図書室から出て行く。二度目のSOSはキチンと届いたらしい。良かった… 普通に怖かった…。

…でも、多分今のを怖がってちゃ、私は変わらない。Roseliaに入っつて、変わろうっつて思えるようになったけど… まだ、思っつてるだけ。怖がりな自分を、この人見知りな性格を克服するんだ…！

その夜、関口くんからL I O Eがあつた。彼がR o s e l i aの御意見番になった際に交換したのだが、連絡がきたのは初めてだ。

K a i 『お疲れ様です。夜分にすいません、関口です』

K a i 『今日は友人がすいませんでした。今後、俺の目の届く範囲では自重させますんで…』

昼のことを謝るために連絡をくれたらしい。

彼は何も悪くないのに。きっと、私が怖がつていたからだろう。優しい子だ…。でも、目の届く範囲でしか、しかも自重させるだけなんだ…。

白金 燐子 『お疲れ様です (^、^♪』

白金 燐子 『ゞノ≧▽≦) O I E I E ! 大丈夫ですよ！ 私が勝手に怖がつてしまっただけなので… (×ω×、)』

慣れた手つきで返信する。既読はすぐには付かなかつた。

一旦お風呂に入り、上がつてL I O Eを確認すると、返信が返つてきていることに気付く。

K a i 『大丈夫でしたら良かったですよ。須田も決して悪い奴じゃないんで、できれば誤解しないでいただけると…』

K a i 『あいつ、普段は明るくて気も利く良い奴なんで』

友達を庇っているのか、それとも本心から褒めているのか。多分、どっちもだろう。本当に、関口くんはいい人だ。本人の知らないところで友人を庇い、褒めるのは、大変好感が持てる。だって、その行為は見返りを求めたものじゃないから。

白金 燐子 『そうなんですな (▽、)』

白金 燐子 『大丈夫です。今日は怖がつてしまいましたが、関口くんがそういうのなら悪い人ではないと思います (≧▽≦\*)』

白金 燐子 『なにより、関口くんのお友達ですもんね (\*。▽。\*)』  
そう送つたところで、今度はすぐに既読が付いた。

K a i 『良かったですよ』

K a i 『あ、あと、白金さんってSNSとかだめっちゃ喋るんですね。正直意外でした』

ひう。ついいつものノリで返してたけど… ひ、引かれちゃったかな…。

白金 燐子『タイピング、得意なので…』

K a i『へー、そうなんですね』

K a i『俺タイピングとか全然ダメで…』

良かった、引かれてはないみたい。

K a i『姉に勧められてオンラインゲーム始めたんですけど、チャットが中々打てなくて。なんかコツとかあったら教えてくださいます』

… オンラインゲーム？

白金 燐子『ちなみに、そのオンラインゲームのタイトルってなんですか？（…|…?）』

K a i『えと… Neo Fantasy Onlineってやつです』

白金 燐子『お友達になりましょう（つ、ワ、c）ウウツヒョオアアア』

関口くんとは良いお友達になれる！ … かもしれません。



B●SSSのBlues Driverは結構優秀、  
持ってて損はない。

彼は、一言で言えば変態だ。

「くるぞ、くるぞ…… あゝあゝ」

最近ハマったらしいバンドの曲を私に聴かせてきて、ギターソロとか、そういう演奏の見せ場になるところやって興奮している。

…… まあ気持ちは分からないでもない。むしろ同意しかない。このソロは確かに気持ちいいし、私も弾いてみたいなって思う。

「次はこの曲なんだけどな？ こっちはギターもいいんだけど、Bメロに入る前ベースソロが二秒くらいあるのが良くて……」

彼はロック系、しかもハードなのが好みらしい。メタルも少し嗜んでる、とかこの前言った。メタル系アイドルバンド、なんてものも聴いているのかなんとか。

彼と出会ったのは、数週間前。高校の入学式の日だ。出会った、とは言っても、お互いクラスの自己紹介で名前を知ったくらいのものであったけど。

最初はただのクラスメイトってだけで、話すこともなかった。ただ、私が学校でギターを弾いてた時に話し掛けられて、そこからは頻りに話している。内容は音楽の話ばかりだけど、すごく面白い。今までそんな話できる人はあんまりいなかったし。

「私はねー、最近はこのバンド聴いてるよー。ブラジルのバンドなんだけど、サビ前のリフが良いから聴いて」

こうして、今日もまたお互いの性癖を暴露しあっている。

最近では、私が一番楽しみにしている時間。自分をさらけ出せる、幸せな時間。

彼は、一言で言えば変態だ。  
私と同類の、大好きな変態さんだ。

? ? ? ? ?

楽器を始める理由は人それぞれだ。

好きなアーティストがいるから、友達や家族がやっていたから、モテたいから。

別にどれが正解だ不正解だなんてあるわけではなく、始める理由なんて関係はない。所詮は趣味、好きなようにすればいい。

「見ろよ関口く、買っちゃった♡」

目の前のアホのように、気になつてる人とお近付きになりたいから楽器を始めようというのも、不純ではあるが、間違つてはいない。

「親父が昔バンドやってたみたいでさー。ベース欲しいってちよろつとこぼしたら買ってくれたく」

そう言つて新品のベースを見せてくるのは、友人の須田誠だ。

テスト期間最終日の今日。筆記用具を片付けている途中で須田に話し掛けられたと思つたら、ドヤ顔でブツを見せられた。

この前、牛込さんと話す話題になるかもとか言つてベース欲しがつてたけど、ほんとに買つてくるとはなあ…。つってもこいつ、白金さんにもアピールしてっけどな。

「ふーん、えっちじゃん」

「は? えっち?」

見せられた木目の五弦ベースに対して率直な意見を口にしてみたのだが、どうやら伝わらなかつたらしい。悲しい。

ベースのことはよく分からないが、バンドやってた親父さんが買つてくれたつてことは多分いいやつなんだろう。なんでいきなり五弦なのかは知らんけど。てかテスト期間に何してんだこいつ? これで赤点取つてたら腹抱えて笑つてやる。

そういやベースの五弦ってあんまり必要性ないらしい。六弦ならあるらしいけど。確かに、普通に考えたら低い音増えるより高い音が増える方が実用性はあるよな。ま、五弦ってだけでビジュアル的に厳いついでに俺は好きだけど。

「ん？ 須田くん、ベース買ったの？」

俺たちの会話に気付いた山吹さんが、荷物をすべてしまった鞆を背負いながら振り向く。

それにつき、花園さんもこちらを振り向いた。

「へー、五弦買ったんだ？」

意外そうな顔をして、花園さんはまじまじと須田のベースを見る。おい、照れんな須田。見られてんのはお前じゃないから。

「ベースはいつ頃から？」

「へ？ あ、ああ… 実は昨日買ったばかりで、まだちゃんと触ってないんだよ」

「え、最初の一本を五弦にしたの？」

さらに意外そうな声を出す花園さん。

俺もそれは思った。親父さんの趣味だろうけど、いい趣味してんよなあ。木目つてのも関口的にポイント高い。親父さんとは良い酒が飲めそうだけ。いや俺未成年だけど。

「え、ベースって弦五本じゃないの？ へー、そうなんだ。なんかカツコよかったからこれ買ったんだけど」

「須田。俺達、これからも友達でいような」

いい趣味してんの須田父じゃなくて須田本人だった。さすがだブラザー。ベースの知識とか皆無でその五弦木目ベース選ぶ辺りさすがだよマイフレンド。

「あつ、そうだ。花園さん、確か牛込さんとバンド組んでたよね？」

「うん、そうだよ。香澄も一緒」

「戸山がリーダーだったけ？ まあとりあえず、須田にベース教えてくれないか、牛込さんに聞いてくんない？ 教則本と睨めっこするより、人に教えてもらった方がいいだろうし」

須田がベースを始めるきっかけとなった人物。牛込りみさん。

須田ができるだけ楽しくベースの練習をするには、彼女の力が必要だろう。実際、人に直接教えてもらった方が成長も早いだろうしな。「うん、いいよ。っていうか、この後有咲の家の蔵で練習するから、須田くんも来なよ」

「いいの!?」

その食いつき気味な須田を見て、山吹さんは何かに勘づいたらしく、少し目を見開いてから俺の方を見てきた。彼女はこちらを向いたまま、須田と、教室の端っこの席に座っている牛込さんとを交互に指さす。

あー、うん、多分山吹さんの想像通りだと思う。そういう意味を込めて、俺は軽く頷いてみせる。すると、山吹さんの口元がだんだんニヨニヨと歪んできた。まあ他人の恋路って見てる分にはめっちゃくちゃ面白いからな。気持ちは分かる。

「あ、海も来て」

「はえ? 俺も?」

「うん。じゃあ行こ」

なんでか俺もどっかの誰かん家の蔵に行くことになった。

? ? ? ? ?

「市ヶ谷有咲ってアレだろ? 学年一位の天才」

「何の?」

「成績」

「そうなん?」

どこかの蔵に向かうため、花園さんに付いて行っている途中。須田が思い出したかのように市ヶ谷有咲って人の名前を出す。俺は初耳だな、市ヶ谷有咲って名前は。有名なのか?

「あー、お前遅刻してきたから知らないんだっけ? 入学式ん時の新入生代表挨拶。あれって学年首席がやるらしいんだけど、なんか無断欠席してたとかで教師陣が慌ててたんだよ」

「へー」

そりや知らんわけだわ。俺が体育館入った時、もう最後の国歌斉唱始まってたもん。列に並んだその二分後に退場した。

「有咲、面白い子だよ。引きこもり気味だけど」

俺達の会話を聞いていたのだろう。花園さんがそう言ってくる。

現在、その市ヶ谷さんとやらの蔵に向かっているのは三人。俺、須田、花園さんだ。本当なら牛込さんも一緒に行くはずだったのだが、練習に行く前に少し用事があると言って、山吹さんと一緒に教室から出て行ってしまった。

戸山？ あいつは知らん。気付いたら教室にはいなかった。

そんなこんなで歩いていると、とある大きな店に着いた。店というより普通の家に見えるが、『流星堂』という看板が出てるから、家兼店舗、つて感じの建物なのかもしれない。

須田と二人してボケつと店（家）を見てみると、花園さんはそちらには目もくれず、端にある蔵らしき建物へと歩いて行く。あれが蔵……うん、蔵だわ。

花園さんが蔵の扉を開けて中に入る。俺達も中に入ると、次は地下へと続く階段が待っていた。

「この下、スタジオ代わりにしてるの」

そう言った花園さんは、慣れた足取りで階段を下った。

須田と一度目を合わせてから、俺が先に階段を降りる。

埃っぽくジメツとした空間から一変。階段を降りた先には、明るい空間が広がっていた。

「あ、おたえ〜！ ……と、関口くん…えと、須田くん？」

俺と須田が恐る恐る地下の部屋に足を踏み入れると、そんな声が聞こえてきた。

「あ、お邪魔します」

とりあえず、挨拶だけはしておく。

俺と須田がぺこりと頭を下げた相手は、戸山香澄。ウチのクラスの不思議ちゃんである。

それからその奥。いかにも女子が好みそうな可愛らしいソファに腰掛ける、金髪のツインテの子。あの子が噂の天才、市ヶ谷有咲だろ

うか？

「え……誰？」

市ヶ谷さん（仮）は、俺達を見て率直な意見を述べた。当たり前だ。突然知らない男が二人も入ってきたら、そりゃ困惑もするだろ。俺なら手元に武器になるもん置くね。ギタースタンドとか。

「ごめんね有咲、香澄。友達連れてきちゃった。海と須田くん」「いや、連れてきちゃった、ってお前……」

納得のいつていなさそうな顔をする市ヶ谷さん（仮）。

そりゃそうだ。俺もなんでここにいいのか分からん。その場のノリって怖いよな。

「なんかすんません……。えと、市ヶ谷さん、で合ってます？」

「え？ あ、はい……。んんっ。ご機嫌よう。私、市ヶ谷有咲と申します」

何やら随分と芝居がかった仕草で挨拶をしてくる市ヶ谷さん（真）。なんか良家のお嬢様みたいだな（小並感）

市ヶ谷さん本人だと確認が取れたのは良かったが、この微妙な空気はどうするんだ。

「りみ、まだ来ないから、須田くんは待ってて。海、ギターとアンプあるけど、弾く？」

「弾く」

え〜アンプ完備かよ最高じゃねえか〜（脳死）

しかもミニアンプじゃなくて普通のマーシャルだし。何？ タダでギター弾けるとかここ天国か？

俺がウキウキしていると、花園さんがギターのセッティングを済ませてくれる。音を調整し、いい感じになったところでギターを渡してくれた。

「海。なにか一曲弾いてみて。聴きたい」

「あっ！ それ私も！ 海くんのギター、私も聴きたいな！」

花園さんに続いて、戸山も目をキラキラさせながら近寄ってくる。

しよーがねーな〜（嬉） じゃあなんかテキストに一曲。まあゆー

てすぐできんのは弾き語りくらいなんだけどな。

んー… R A O W I M P Sの「そっけない」とかどうでしょうか。最初のコードはCとかだろ、多分。

「届きそうで、届かなそうなく」

須田と市ヶ谷さんを完全に無視して、俺の弾き語りショーは始まった。んー、アコギと音違ーう！ まあ歪みひずとか普通にかかっているし、多少はね？ 弾き語りとして聴けないこともないけど、この曲終わったら練習してたりリードの方も聴いてもらおう。

… ふと我に返って、この蔵の主である市ヶ谷さんに頭を下げるまで、残り十数分。

? ? ? ? ?

「んー… 無難にB O O Sのデイストーションとか買つときやいいか?」

「ちやんとロック系やりたいなら、やっぱエフェクターにはお金かけた方がいいと思うよ。買うなら、色んなもの比較して吟味した方がいいかも」

場所は代わって、江戸川楽器店。エフェクター売り場。

壁いっぱいには並ぶ長方形の機材と睨めっこしながら、俺が唸る。

それに応えるのは、クラスメイトの花園… じゃない。おたえだ。

エフェクター欲しいんだよねー、つて言ったら、じゃあ買うのに付き合うから今から行こう、つて言われて現在に至る。

「歪み系はブースター用に二つくらい持ってたほうがいいかもだけど、空間系も充実させたいよね。とりあえずはリバーブとディレイかな? 有名なギタリストには、良いアンプと良いリバーブがあれば十分だつて言ってる人もいるくらいだし」

いつも以上に口数の多い彼女。やはり楽しいのだろう。

そんな彼女に俺は数時間前、名前の呼び方を矯正された。「花園さん」から「おたえ」へ。なんでも、親しい人に苗字で呼ばれるのはな

んだかむず痒いらしい。それに便乗したのか、戸山からも自分のことを名前で呼んでくれと言われた。

ふうむ… おたえに香澄、か…。正直むず痒いのはこつちなんだが。蘭達以外の女子を下の名前で呼ぶのなんて小学校以来だわ（思春期）

「歪み二つじゃなくて、このFUZZってやつじゃダメなの？ デイストーションの強化版的なやつなんだろう？」

「んー、それだと強すぎるかな。まあ海の好きなジャンル考えたら別に持つてもいいだろうけど」

念願のエフエクター購入ということもあり、俺の目は真剣そのものだ。てかこの時間も楽しい。ワクワクする。

ちなみにだが、須田は蔵に置いてきた。今頃牛込さんにベースを教えてもらっていることだろう。大量のパンを持つてきた牛込さんは、意外に須田と話が合うようで、須田にベースを教えることも快諾してくれていた。是非とも五弦ベースを使いこなせるようになってもらいたい。

「こつちの、スイッチがたくさん付いてるやつは？」

ふと目に付いた、今見ていたものより二回りほど大きいエフエクターらしきもの。なんか色々なスイッチがある。強そう。

「それはマルチエフエクターだね。それ一つに色々なエフエクターが入ってるんだよ」

「へー、便利じゃん。これ一つ買うのじゃダメなの？」

「んー… 悪くはないんだけど、やっぱりコンパクト… こつちの小さいやつをたくさん買って繋げた方が、音はいいと思う。歪みなんかは特におね」

ふうむ… 分からん。やっぱ実際に音聴かないとダメだな。

「ちなみに花ぞん」

「おたえ」

ええ… (困惑)

「… おたえのオススメは？」

「私は… そうだね。初心者向けってなると、歪みはBOSSのBD



「2とか？ ちょっと高音暴れたりノイズ気になったりするかもだけど、バンドで合わせたらしつくりくるし。それとく… あ、これとか。TC Electronicのリバーブ」

青色をしたBlues Driverって書かれたやつと、赤色でHALLOF FAME 2って書かれてるやつ。おたえはその二つを指差した。

「ふうむ… 見ても分からん」

「試奏してみたら？」

「そうする」

近くにいた店員さん呼び、BluesDriverとりバーブを出してもらい、セッティングまでしてもらおう。

椅子まで用意されたし、ピックも色んな形のが置いてある。なんだこれいたせりつくせりかよ。最高だな。

「じゃあとりあえず、クリーンからかな」

おたえの言葉に従い、まずはエフェクターを踏まらずに軽く弾く。

「次、先にブルース」

「うい」

まだ買っていないものを足で踏むわけにもいかず、少し前屈みになりながら右手で青色のエフェクターのスイッチを押す。

ジャーン、と。軽くAのコードを鳴らしてみた。

「おお…！」

明らかに音が違う。

言い表すなら、ラジオなんかを聴いてる時に走るノイズのような音。

元々歪みの概念が生まれたきっかけは、アンプの故障から偶然発生したノイズらしい。本来なら取り除くべき音をどっかの変人（褒め言葉）が「あれ？ この音良くね？」と思ったことが発端らしい。そこから「歪み」って音が普及したんだとか。

全く、昔の人は凄いこと考えるよな。まあ今から百年以内の話だけだ。

「じゃありバーブも踏んでみよつか」

「おうー！」

テンション上がるなあ。

もう一度前屈みになり、ブルースは着けたままでリバーブを押す。

またAコードを弾くと、歪みに加えて微かな残響が聴き取れた。あ

ゝ あゝ (恍惚)

「そのまま弾いててね」

俺が勝手に気持ちよくなっていると、おたえがエフェクターのツマミを弄り出した。

「また音が変わったな」

少し高い音が聴こえやすくなった気がする。

あと全体的に歪み具合が増えた。

「今のはブルースのGainを上げて、Toneも少し弄ったの。こっちのリバーブのツマミを弄れば…」

「… お、変わった。なんかこれ、カラオケで歌ってる時のアレに似てるな」

「エコー？ まあどっちも残響だし、同じ感じかな」

へえ。

でもこれ、カツコイイっちゃカツコイイんだけど、やりすぎると気持ち悪いな。イントロとかゆったりめのソロとか、そういう局所局所で使う分には全然いいんだけど。

「このリバーブにはね、感圧式のスイッチが使われてて、踏み込んだ強さでエフェクトの掛かり具合とかが変わる『MASH機能』ってのが付いてるんだよ。最初は使いづらいかもしれないけど、使いこなせばすっごく便利」

「はええ…」

なんか凄そう (小並感)

試しに自分でも色々弄ってみたが… いやはや、楽しいなこの野郎。色んな音色が出るわ出るわ。ずっと弄っていられる。

「… よし、決めた」

? ? ? ?

江戸川楽器店を出ると、街は朱色に染まっていた。

最近はずかしくなってきたとはいえ、日が傾くとそれなりに冷える。今日は朝から暖かかったし、制服の上に着るものは持つてきてなかつたな。まあ無くても耐えきれないほどじゃないし……

「ほれ。俺のだけど、蔵帰るまではこれ羽織つとけ。寒いんだろ？」

少し両腕を抱くような仕草をしたからか、海がブレザーを渡してきた。無くても耐えきれないほどじゃないけど……あるなら欲しい。

「ありがと、海……海の匂いがする」

「うちの母親、柔軟剤には拘ってるらしいからなー。いい匂いだろ？」

「うん、とつてもフローラル。磯臭くなくて良かった」

「……え？　もしかしてそれ、俺の名前の漢字が海だから言ってる？」

困惑したような顔をする彼の手には、江戸川楽器店のレジ袋が二つ。片方にはエフエクターが二つ、もう片方にはパワーサプライが入っている。

「海。エフエクター、私が勧めたので本当に良かったの？　せつかくなんだから、もつと色々自分で吟味してみても良かったのに」

そう。彼が購入したエフエクターは、二つとも私が勧めたものだ。

私も本気で考えて勧めたから性能については文句のほぼない製品だけど、もつと他のを試してみても良かったんじゃない……

「ああ、いんだよ。おたえのオススメってのもあるけど、俺がコレがいって思ってたから買ったんだ」

「そう？　ならいいんだけど」

海のブレザーを羽織りながら、私と彼は二人並んで歩く。

それにしても、このブレザーおつきいなあ。やっぱり男の子なんだよね、海も……改めてそう思うとちよつと恥ずかしいな、ブレザー借りてるってこういうこの状況。

「海はこの後どうするの？」

最初は合わなかった歩幅も、すぐに海がこちらを気遣ってくれて、今は同じ速度で歩いている。

そんな彼の優しさに対するふわふわした気持ちを感じながら、私はブレザーのポケットに手を突っ込んでみた。あ、ピック入ってる。

「とりあえず市ヶ谷さん家の蔵に行くわ。須田置いてきたままだし」

「須田くん、りみりんにベース教わってるんだよね？ 海とバンド組むの？」

「分かん。あいつが続けるんなら組むかもな」

「続けるといいね〜」

「ん」

大通りに出る角を曲がると、海がスつと車道側に出た。

私知ってる。男子が女子に対してやると好感度が上がるって嘘くさいサイトとかに書いてあるエスコートだ、これ。

けど多分、海はそんなの気にしてない。この前須田くんと海が話してた時、海は「異性のタイプは年上」って言ってたし。あ、盗み聞きしたとかじゃないよ？ ただたまたま聞こえてきただけ。

ちよつと前に須田くんが吹聴してた紗夜先輩との交際疑惑は嘘だって海本人は言ってたけど、紗夜先輩みたいな人がタイプなのかもしれない。私は… お世辞にも大人っぽくはないからなあ。

…けど、だからこそ。これは海が本当に優しいってことの証明になるんじゃないかって、私は思う。誰にでもしてるんだって思うと、それはそれで複雑だけどね。

「ねえ海」

「ん？」

「海ってあれだよな。モテそうだけどモテない人」

「なんだ突然。喧嘩でも売ってんのか？」

「んーん、違うよ？ ただ、ふとそう思っただけ」

「そんなふと思われるレベルでモテナさそうなの俺？」

逆に私のタイプは、渋い感じ。熟練のギタリスト感があれば完璧。けど、仮にそんな人が目の前に現れたとしても、好きになるかなんて分からない。

そもそも、私のこのふわふわした気持ちがあるのか、それもまだちよつと分かってないのだ。何か特別なイベントイベントがあつて、それを経

てから発生した気持ちだったら、まだ何か分かったのかもしれない。けど、気付いたら思ってたからなあ。

これは恋なのかもしれないし、単なる友情の延長線なのかもしれない。この感情がなんなのかを知ること。そこから始めよう。

じゃあ、まずは手始めに。

夕日に照らされて長く伸びた二つの影を、私はちよつとだけ近付けた。

ブラックじゃないバイトなんて存在しないから安心  
していいよ

彼と会った時のことは、正直よく覚えていない。

小学校一年生の時に同じクラスになって、秋頃に席が隣になって。  
そこからなんとなくお話した。

「関口くん、算数の宿題やった？ プリントのやつ。あれ、最後の問題  
分かんなくって〜…」

「昨日用水路に流したからボクも分かんない」

「何やってるの!?!」

小学校二年生も同じクラスになって、よく遊ぶようになった。

「おかえりなさい、ア・ナ・タ♡ ご飯にする？ お風呂にする？ そ  
れとも… って… 別の女の匂いがする…」

「ねえ、怖いからこのおままごとやめない?」

「えー! 金曜日の夕方のアニメでこういうのやってて、すつごく面  
白そーだったのにー!!」

「それクレヨンし〇ちゃんだよね? リアルおままごとだよね? え  
? 僕マ〇オくん役? やなんだけど」

小学校五年生で三回目のクラスメイトになって、その頃には幼なじ  
みのみんなと同じくらい一緒にいるようになった。

「海ー! 夏休みの宿題手伝って〜!!」

「お前… 今日夏休み最終日だぞ? 今まで何やってたんだよ」

「えーっと… 遊んできた!!」

「だろいな。俺も毎日のように誘われてたからな」

「海、私が誘っても来てくれない時あって寂しかったよ。用事あ

るって言ってたけど、何やってたの?」

「宿題だよバカ野郎」

そして中学校に上がった頃には、他の男の子よりも特別になった。

「かーいつ! 一緒に帰ろ〜!」

「ちよ、お前… 急に抱き着くな! しかもお前こんな教室のど真ん中で…」

「え〜? 別に場所とか関係なくない? … あ、もしかして海〜、照れてる?」

「はあ!? てっ、照れてねーし! 全然余裕だし!」

「ほほーん? はいじゃあギユ〜!! … ぷっ、あはは! 海ったら顔真っ赤〜!!」

「うっせえ!!」

中学校三年生になって、少し諦めつてものがチラついた。

「海つてさ、女子の好みのタイプとかあるの?」

「あ? 突然なんだよ」

「いや〜、海つて優しいしモテそうなのに、全然付き合わないな〜って思ってたさ? もしかしてホモなの?」

「ふぎけろ。それに俺モテないし。仮にモテたとしても、俺、年上が好きだからなあ。下級生はもちろん、同級生とでも考えられん」

「え〜、もったいないなあ。そんなんじや一生彼女できないよ?」

「分かんねえだろ俺のことめっちゃ好きになつてくれるお姉さんがいるかもしれねえじゃねえかよ諦めてたまるか馬鹿野郎お前俺は諦めないぞお前」

「ぐ、ごめんなさい…」

そして、彼と別々の高校に通い始めてもう少して二ヶ月が経とうとしている今。

なんか最近海と一緒にいる時、海の視線感じるんだけど!! なにこれ、最近急におつきくなってきたコレが原因なの!? そうなの!? 年

上好きとか言ってたけどやっぱり大きいのがいいんだね海の変態さんめ!!

これはワンチャンあるね? あるんだよね!? F o o o o →  
邪魔だなんて思ってたけど海が興味持ってくれるなら育てよ  
かった、ありがとう私のおっぱい!! (混乱)

? ? ? ? ?

「らっしやつさせー」

土曜日、午後四時。

姉ちゃんが小学生の頃には土曜日にも学校があったらしいが、俺たちの世代は土日は学校が休みだ。まあ、だからと言って全員が全員休むわけではないのが学生というものである。

部活に遊びに趣味。様々な理由で、土日祝日も予定がある者は多い……と思う。少なくとも、俺は毎週土曜日はバイトの日で働き詰めだ。

「ポテトLサイズお一つ、烏龍茶お一つで。お代のほう三百九十円になります。……あ、ちようどのお預かりで。隣にずれてお待ちください。次の方どうぞ」

今日は午前十時出勤で、上がりは午後五時。二時から三時まで一時間の休憩をもらい、実働六時間の中々ハードなシフトである。まあ大学生である俺の姉ちゃんは実働八時間で拘束九時間とか普通にやっちゃってるので、そこらと比較してしまおうと楽な部類になってしまったのだが。

「クーポンのご使用で? スマホアプリの画面を……あ、はい、確認しました。以上でよろしいでしょうか。お会計百九十円になります」

それにしても、最近は店の混み具合は異常だ。俺が入ったばっかの時はこれの半分くらいだったのに。てか午後四時っていう時間帯を考えたらもっと異常だろこれ。さつきからトイレ行きたいのにレジからはなれらんねーんだけど。



こうまで忙しくなったのには理由がある。

特大セールとか新商品発売とか、そんなチャチなもんじやあ断じてない。もつと恐ろしいモノだ。

「いらっしやいませー♡ スマイルは0円ですっ♪」

おうそのこのダブルピンク。これ以上店前で道行く男に愛嬌振り撒くんなら少し裏の仕事に回ってこいや（憤怒）

「お先あがりまーす。お疲れ様っしたー」

「はい、お疲れ様ー」

店長に挨拶をして、スタッフルームから出る。

店内にはまだまだお客さんが残っているが、レジの前はガラツとしていた。ついさつきまで激混みだったのにな。

「お疲れ様でしたー！」

後ろからシンクロした声が聞こえてくる。

振り返るまでもなく、例のダブルピンクだ。

「あ、海〜！ お疲れ〜！」

「ホントにな」

「海くんお疲れ様〜！ 今日もお客さんいっぱいだったね」

「誰のせいだと」

呑気に駆け寄ってくるダブルピンクこと、上原ひまりと丸山彩さん。

この二人、何を隠そう顔が良いのである。それはもうバチバチに良いのである。あとひまりに関しては一立派すぎる核弾頭を拵こしらえているのだ。そんな二人が店頭で元気に愛想を振り撒けばどうなるか？ 男共がホイホイ寄ってくる。Q. E. D.

元々、現役アイドルである丸山さん目当てで来るお客さんも少なくはなかったが、ひまりがウチで働き始めたらお客さんが倍になった。

丸山さん目当てのファンには「プライベートアルバイト中のアイドルに気安く近付いてはならない」という紳士的思考を持った人も多かったらしいのだが、如何せんひまりは一般人だ。みんな躊躇というものがない。というか、「同じピンクでも俺ひまりちゃんのファンだ

から。彩ちゃん目当てじゃないから。セーフだよセーフ」とか思ってる紳士（偽）が増えてる気もする。最悪の相乗効果だふざけんな。

可愛くてスタイルが良いだけならまだしも、二人ともファンサが非常に良い。なんなら握手とかしてるまである。ひまりはともかくとして、丸山さんは事務所ストップとかかからないんですかね？

まあとにかくそのおかげで新規だけでなくリピーターも急増。そろそろ確認されている丸山さんとひまりの固定ファンだけで去年のこの時期の来店者数を超えているかもしれないと店長が慄いてたのは記憶に新しい。いやマジかお客様<sup>共</sup>。

「ねえ聞いて海く。私、今日で研修終わりなんだく。次から時給上がらって、さつき店長さんが教えてくれたの」

「そりゃ良かったな」

「…海、なんか機嫌悪い？」

「疲れてんだよ、どっかの誰かさんのせいで」

ひまりも丸山さんも、何一つとして悪いことはしていない。むしろいい事をしている。俺と、あと複数人のスタッフ死ぬほど働かされて疲れただけだ。給料上げてくんないかな。割に合わないんだが。マジで。

「お、お疲れ様でしたあ…」

俺が死んだ目で虚空を見つめっていると、スタッフルームから疲れきった声が聞こえてきた。

声の主は想像がついているので、俺はそちらを向く。

「お疲れ様です、松原さん」

「あ、関口くん。お疲れ様く」

今日もお客さん多くて大変だったねく、と。

そう言っただけで笑顔を浮かべるのは、松原花音さん。丸山さんと同じく、バイト先&高校の先輩にあたる人だ。

この松原さん、ダブルピンクには劣るものの、そのファンの数は多い。松原さんは基本レジに立っているのだが、松原さんのレジには行列ができることが多い。何かしらの癒しを見抜いているのか、老若男女問わず松原さんのレジに並ぶことが多いのだ。まあ男が圧倒的に

多いけど。

「ねえ海、今日これからどうするの?」

恐らく俺より大変だったであろう松原さんを労っていると、ひまりにそう聞かれた。どうでもいいからちよつと前屈みになるその姿勢やめろ。そういうとこだぞ。

「家帰って... あ、今日家誰もいないんだった。あー... しばらくブラブラしてから、飯食って帰るか」

今日は巴はシフト入っていないし、これ以上ここに居座る必要はない。家に帰っても誰もいないことを思い出した俺は、これからのプランを練る。

まだ夕飯には早いし、家に帰ってからもう一回外に出るのも面倒だしな。自炊なんてほぼ出来ないし。

「お婆さんがいないのはたまにあるけど、希のぞみさんもって珍しくない?」

ひまりは小学校からの友人だ。俺の家族構成も知っているし、会ったこともある。

父親と母親と姉。これがうちの家族構成だ。父さんは九州の方に単身赴任中で、うちに居るのは母さんと姉ちゃんと俺の三人。

母さんは元バンドマンで、昔の仲間と一緒に飲みに行くことがまれにある。今日がそれだ。こういう日はたいいてい朝帰りになる。

「姉ちゃん、今日サークルの飲み会なんだってさ。そのまま友達の家泊まるって言ってた」

「希さん、何やってるんだっけ?」

「ジャズ研究会」

まあジャズとは名ばかりのバンドサークルで、色んなジャンルの音楽やってるらしいけどな。楽しそうだから俺も大学生になったら入りたい。高校? まずもって音楽系の部活が合唱部と吹奏楽しかなかったよ。

「海くん、お姉さんいたんだ?」

「ええ、まあ。四つ上の大学二年です」

「へえ。どんな人?」

「え？ えと… 普通だと思いますけど。あ、性格が俺と似てるってばあちゃんに言われたことあります」

「そっかー、変な人なんだね〜」

「おいまてバカピンク」

「バカピンク!? え、私先輩だよ!」

まったく、失礼な先輩だな。

「希さん、綺麗な人ですよ。いい人ですし。ちよつとガサツっていうか、大雑把なところもありますけど」

「あー、そういう… 確かに似てるのかもね〜」

なんか納得されてしまった。

え、俺そんなにガサツ？

「そ・れ・よ・り！ 暇だったら遊びに行こーよ！ 彩先輩たちも、一緒にどうですか？」

「え？ 行くー！ 今日ハレスンもお仕事もない日だし〜」

それでいいのか現役アイドル。

? ? ? ? ?

「しゅ〜わしゅわっ、どり☆どり〜みんなっ、Yeah!」

さあ場所は変わって、ここはとあるカラオケルーム。

まん丸お山に彩を、Pastel\*Paletteボーカル担当の丸山彩さんによる『しゅわりん☆どり〜みんな』が終わる。いやあ… 本物だったわ (当たり前)

「すごーい！ 本物だ!」

「えへへ〜」

得意げな顔をしながらもちよつと照れてる丸山さん可愛い。

結局、俺はひまりの誘いに乗ることにした。暇だったし。

丸山さんと松原さんも暇だったらしく、四人で遊びに行くことになった。最初はテキトーに歩いて気になった店に入る予定だったのだが、カラオケを見つけたひまりが「久々に海の歌聴きたい！ 彩先輩のも聴きたい!」と言い出してカラオケに入ることになった。

「次の曲は、『Go! Go! MONIAC』? あ、これ私知ってる。けいおんの曲だよな?」

次の曲を見たひまりの反応を見て、俺もそういえばと思い出す。俺のオタク趣味は、八割以上が姉ちゃんから勧められたものだ。そのなかに、けい○ん! ってアニメもあつた。あのベースのキララの声、巴に激似なんだよな。

「わ、私の番だね」

「あ、花音先輩が歌うんですか? はいっ、マイクどうぞ!」

おずおずと挙手する松原さんに、ひまりは元気良くマイクを渡す。いやあ、小学校の時からひまりのコミュ力は高いよなあ。俺がAfterglowのみんなと交流持ち始めたのだって、ひまりが話しかけてきてくれたからだし。

ひまりのコミュ力に感心していると、曲が流れ始めた。カラオケって、原曲とちよつとだけ音違うよな。著作権とかそういう問題? あとなんか音が薄い。まあ歌の邪魔をしないようにするためかもしれないけど。

軽快なイントロから、松原さんの歌が始まる。

歌声は初めて聞いたけど、結構上手い。現役プロの丸山さんにも引けを取っていないと思う。

そーいや松原さん、最近バンド組んだとか言ってたな。くそっ、ドラムやってるって知ってたら俺も声かけたのに…。

やがて曲が終わり、次は俺の番になる。

松原さんの歌を褒めつつ、彼女からマイクを受け取った。

曲が始まる前にリモコンを弄り、エコーを小さくする。これかけすぎたら、実際はそうでもなくてもなんか上手く聴こえちゃうからな。

「…MY FIRST STORY? 初めて聴くアーティストかも」

丸山さんが画面に映し出された曲名を見てそう呟く。

MY FIRST STORY、通称マ○ファスの『Miss in g you』。マイ○アスはなんか色々酷評されてたけど、俺は好き

だよ。カッコイイと思う。歌詞とか結構厨二チックだよね、中高生好み。

ギターの音から始まるイントロが流れ、三十秒ほどで歌が始まる。歌の入りは不安定になりがちだ。だが、一番大事な部分でもある。極論、始めと終わりが良ければその曲は他者に良い印象を残すからな。

この歌の入りは英語だ。音程はもちろん、発音にも注意しなければならぬ。アクセントがどこにあるのかを意識しながら、最初は静かに入る。気持ち的には呟く時より少し強め。クリーンになりすぎず、少しだけ声をかすらせる。

そのまま数フレーズほど歌った後、音量とキーを少し上げる。ここ、俺的気持ちいいポイントな。歌も演奏も。ブリッジミュート好きなんだよ。

そんな感じで勝手に気持ち良くなりながら歌い切った俺を待っていたのは、女子三人からの拍手だった。

美少女たちからの拍手、悪くない…。(恍惚)

? ? ? ? ?

海の歌は、小さい頃から聴いてきた。

カラオケでもそうだし、それより弾き語りしてる時の方が多いかな?

小学校中学校と、音楽室にアコギがあったから、ちよくちよく弾いてもらっていた。中学校の授業ではアコギを弾くって授業があつて、その時はみんな聴き蕩れてたっけ。友達としてすごく誇らしかつたけど、海がクラスの女子からキヤーキヤー言われてたのはあんまりいい気分じゃなかったな。

「海くん、歌上手だね! 私聴き惚れちゃった」

「ありがとうございます。丸山さんも上手かったですよ。さすがプロ」

「えへへ、ありがとう」

カラオケからの帰り道。

外はすっかり暗くなり、すこしお腹も空いてきた。

それにしても、海ったらデレデレして… 彩先輩が可愛いのは認めるけどさあ…。 むう…。

「松原さんも上手かったつすね、歌」

「そ、そうかな？ 彩ちゃんや関口くんほどじゃないと思うけど…。」「いやいや、松原さん声が良いですから。歌えるドラマー、俺も欲しかったなー。コーラスとかバリバリできるドラマー、欲しかったなー」

「ふええ…。 あ、圧が強いよお…。」

近い。近いよ海。花音先輩に近付きすぎ。

いつつも自分から女の子に近付くのは避けてるくせに…。 そんなにドラマー欲しいのかな？ あ、というかバンドメンバーが欲しいのか。

「私は？ ねえ、私はどうだった？」

「んあ？ ひまりはいつも通りつつーか…。 うん、いつも通りだった」「なにそれ酷くない!？」

二人のことは褒めたくせに！ 褒めたくせに!!

…。 落ち着くのを、私。海の「いつも通り」は蘭のそれと同じ。つまり褒めてる。「いつも通り上手かった」って意味だから、海は私のこと褒めてる！ もおう、海ったら素直じゃないんだからあく（ポジティブ）

「じゃあじゃあ、私が海とバンド組んであげよつか？ ドラムは叩けないけどベースは弾けるよ？ 歌も歌えるし！」

ベースボーカルだつてその気になればできるんだからっ！

「え？ いや別にいらない」

「うわーん!!! 海が虐めてくるう!!!」

なんで!? なんで!?

私じゃダメなの!? なんで!?

「か、海くん、さすがに今のはちよつと…。 ひまりちゃんじゃダメなの?。」

私が彩先輩に泣きつくくと、彩先輩が海にそう言ってくれた。そうだそうだ！ もつと言つちやつてください先輩！

「いやダメっつーか…。ベースはもういるんで、二人目はいいかなって…。」

「えっ、ベースもういるの？」

なにそれ聞いてない。

「いったいどこの女が…。リサさん？ 海、年上好きって言ったし。」

「ウチのクラスの須田ってやつ。そいつ最近ベース始めたんだけど、バンド組みたいって言ってたから、じゃあ一緒にやろうぜって」

同級生!! まさかのクラスメイト!!

くう…。！やっぱり高校離れたのは大きかったかな…。

「えと、その、なんだ…。悪かったな、ひまり」

海の謝罪を聞いて、私はちよつとだけ落ち着いた。

「うう…。もつと早く海にバンド組もうって言えばよかった…。ア  
フグロあるから掛け持ちになつちやうけど、海のバンドならみんな許してくれると思うし…。」

まあ泡に消えた話ですけどねっ！（ヤケクソ）

少しだけ落ち込みながら歩いていると、私達は駅に着いた。

私と海は彩先輩たちと別方向だから、お二人とはここでお別れ。それぞれホームに向かう。

「あ、そういえば海、ぐい飯食べに行くんじゃないかってっけ」

「え？ …… あっ」

忘れてたみたい。海って昔からちよつとボーツとしてるところあるからなあ。

「あー、ぐいめんひまり、先帰ってて。俺飯食ってくるわ」

「待って。私も一緒に食べに行くよ」

「それは悪くね？ 家に晩飯あるだろ？」

「今『今日は海と食べて帰るからぐい飯いらない』ってお母さんにL I O Eした！」

トーク画面を海に見せるように突き出す。



ちょうど既読もついて、猫が『OK』って言ってるスタンプも届いた。あと、同じ猫が『頑張れ』って言ってるスタンプも届いたけど…そんなんじゃないよって後で送っておこう。いやでも明日休みだしワンチャン…。

「俺の名前出してんのかよ…。はあ、高いのは奢れないからな」

「大丈夫だよー。それに奢ってもらうつもりないし」

何かの罰ゲームならまだしも、何も無い時に奢ってもらう気はない。そういうの、なんか悪い気がするし。誕生日とかだったら遠慮なく奢ってもらうけどね〜！ あっ、でもアクセとかも貰いたいな。今年海に強請<sup>ねだ</sup>ってみよ。

密かにそんなことを思いながら、駅員さんに頼んで改札を出る。定期圏内じゃないから、一回入場をキャンセルしなきゃ。

先に海が外に出て、そのあと私が出る。さてどこに行くかと地図アプリを開く海に駆け寄ると、後ろから声がかけられた。

「おー？ 関口じゃん、お疲れ〜」

「あ？ あー、お疲れ須田。今帰り？」

「おう。つっても帰んのはばあちゃん家<sup>ち</sup>だけど。今日親戚の集まりがあるんだよ」

知らない男の子が声をかけたのは、海。中学でも見たことない人だし、多分高校の友達だろう。

「っていうか、今須田って…？」

「あ、そうだひまり。さっき言ってたベシスト、こいつな？ 須田誠。花咲川の一年」

「あ、関口の友達っすか？ どうも。ツ!？」

軽く頭を下げた須田くんは、そのまま固まってしまった。

「どうしたんだろ… あっ（察し）」

「… おい須田、目線上げる。さすがにガン見はヤバいぞ」

… 海だっただまにチラチラ見てくるくせに。

「はじめましてっ！ 私、上原ひまりですっ。海とは小学校から友達で… まあ幼馴染みみたいな感じかな？」

「あ、ども。関口のクラスメイトです、須田です… おい関口、まさ

かお前の彼女じゃ…」

彼女…！ 彼女に見えます!? 見えちゃいます!?

いやあ、そっかそっかく、見えちゃうかく（満悦）

「違えよ。友達とか幼馴染みとかいう単語が聞こえなかったのかお前」

「むっ…」

「ちよっ、やめっ、やめろひまり足を踏むな…っ」

即答するとか… いやまあ事実だから仕方ないんだけど。

「… おい関口さんよオ… ちつと顔貸せやア…」

「えっ、何このデジャブ。やだよさっさと帰れよお前」

「言い残すのはそれだけかア？」

「帰れつつってんだろ帰れ。あつ、テメヤんのかコンニヤロ…！  
離せ肩を掴むな…っ」

なんか軽い取っ組み合いを始めた二人をとりあえず諫めて、用事があるという須田くんとバイバイする。最後まで海のこと射殺さんばかりに睨み付けてたけど、何かあったのかな？

それはそうと、須田くんは須田さんじゃなくて須田くんだった。

そのことにひとまずは安心する。

「？ なんだひまり、なんか機嫌良さそうだな」

「んー？ べっつにー？ あ、あそこサ○ゼあるじゃん！ あそこにしよーよ、海の奢りで！」

「はあ!? お前さつき奢られる気はないって… ちよ、おい！ 腕を組むな！」

「えへへ、いーじじゃんっ！ そ・れ・と・も。昔みたいに抱き着いて欲しい？」

高校生になって、別々の高校に通うようになって。なんだか海との距離が遠くなっちゃった気がしてた。私が知らない交流があつて、私が見えない一面もあるのかもしれない。そんなことは当たり前だ。むしろ今までが知り過ぎてた。

「ぶっ、あははっ！ 海ったら顔真っ赤〜！」

でも。こうやって顔を赤く染める海は、小中学校の頃と何も変わっ

てない。私の特別になった、私の好きな人。

よーしっ！

ライバル多そうだけど、これからも私、ツグっちやうぞく!!

恋とか愛とか分からないって言ってる青春はすぐに過ぎ去る

彼は、私にとっての救世主だ。

私は “ほどほど” を好む人間だ。

ほどほどに遊んで、ほどほどに勉強して、ほどほどの大学に入る。私だって年頃なんだし、恋愛にも興味がある。もちろん、ほどほどに。そんな “ほどほど” の高校生活を望んでいた私を待ち受けていたのは、『天災』。不幸な偶然が重なり、私はその天災に振り回される “ほどほどじゃない” 高校生活を送ることとなった。

こうして私が絡むこととなった五人のうち、天災を含む三人、通称三馬鹿は、私のSAN値をゴリゴリ削ってくる。もうホント、ゴリゴリにだ。そこに悪意が一切ないのだから手に負えない。そこに現れたのが彼だった。

いや、「現れた」というより「拉致られてきた」という方が正しいのかな。うちのゆるふわ担当、花音先輩と似た境遇だ。実際、最初ウチの馬鹿共に腕を掴まれて連れてこられていた時は困惑しきった顔だったし。

花音さんと同じバイト先で働いている、うちの高校の一年生らしいその男子は、なんと常識を持っていた。その事実がどれだけ私の心を打ったことか。初対面の男子について力強く握手をしてしまったほどだ。その際、彼はもつと訳が分からなそうな顔をしていた。きつと、初対面の女子に突然手を握られたことに困惑していたのだろう。

素晴らしい、完璧な常識人だ！

これで私のSAN値も少しは守られるし回復するかもしれない。私の救世主はここにいたんだ!! (歓喜)

? ? ? ? ?

梅雨。『小笠原気団くんとお、オホーツク気団ちゃんがあ、お空で  
ごつつんこしちやってえ、痛いよ、痛いよ、泣いちゃうから、雨  
が降るんだよお』と言っていた小学校の頃の理科の先生に彼氏はで  
きたらどうか。

一昨日から正式に梅雨入りが発表され、ここ三日間は雨が降りっぱ  
なしだ。去年は空梅雨だったけど、今年は割と降るっぽいな。

雨は別に嫌いじゃない。が、湿気は大嫌いだ。髪は撥ねるし菌は繁  
殖しやすいし楽器にも悪影響を及ぼす。いい事なんてほとんどない。

「つまりだな香澄、弾けないなら弾けるようにすればいいんだよ」

「な、なるほどお!!」

「お前ら脊椎だけで会話してんのか?」

だが、雨がコンクリートや窓を打つ音は好きだ。

それに、雨が降るのは自然の摂理。降ってしまうものは仕方がな  
い。降らなかつたら降らなかつたで困るし。水不足とか。

湿気の悪質さを帳消しにするとは言わないが、雨なら雨で楽しめる  
ことはある。音とか、あとは……音とか。

はあ……楽器のケア、しつかりしとこ。

「うわあ!?! ど、どうしよう海くん、一弦切れちゃった!」

「指大丈夫か? 怪我とかは……してないっぽいな。普通に弦の寿命  
だと思う。新品の弦持つてるからやるよ」

「わー、ありがとく! …… えと、これ、どうやって張り替えるの?」

「マジかお前」

現在地は市ヶ谷家の蔵の地下。

学校帰りにおたえに連れられてここまで来たが、雨の日にギターな  
んて持ち歩いているわけもなく、香澄と他愛のない話ばかりして暇を  
潰していた。おたえ? なんかバイトあるの忘れてたとか言って  
さっき慌てて出ていったよ( )

「やり方教えつから、自分でやってみろ」

「うん！」

元気でよろしい。

ちなみに、この場にいるのは俺と香澄と市ヶ谷さんだけ。

市ヶ谷さんは盆栽特集が載った雑誌を読みながら紅茶を飲んでいた。優雅すぎるけど…なぜに盆栽？好きなもの？

牛込さんもまともそうに見えてその実チヨココロネ狂いだったりするし、やっぱこのバンド変わってる奴しかいないな。でもまあ、変わってないとバンドやろうなんて考えないよな。

その牛込さんは、今日は家の用事があるらしく、蔵には来ていない。おたえはバイト行っちゃったし、俺も香澄に弦替え教えたら帰ろうかな。

「まず弦を緩める。ペグを時計回りに回すと緩むからな」

「ペグ…？」

「そこから？」

こいつ教則本とか買っていないのかな？いや俺も買ったことないけど。ギターはお母さんと姉ちゃんに教わったからな。

「ペグってのは、ギターの頭ヘッドについてるネジみたいなやつ」

「これ？」

「それ。んで、それを時計回りに…そう」

たどたどしくも、香澄は二弦のペグを回して弦を緩める。

ある程度緩めたら、次は三弦、そして四弦と、順に緩めていった。

「六弦まで緩めたら、真ん中くらいで弦を切る。まあだいたい十二フレットのところくらいかな」

「はーいっ。えっと、ハサミはく…」

「弦はハサミじゃ切れねえよ。ほれ、ニツパー」

「ありがと〜！」

「お前のカバンからはなんでも出てくるな…」

「カポも常備してあるぞ？」

「ギターは持ってきてねえのにな？」

「何も言い返せない悲しい」

市ヶ谷さんのツツコミに軽く感心していると、香澄が弦を切り終え

たらしく、こちらに指示を仰ぐような視線を向けてくる。

「そんじや古い弦は丸めて、この缶に入れとけ」

さつき飲み切った魔<sup>モン○ターエナジ</sup> 剤の空き缶を差し出す。弦を貯めてるって人もいるみたいだけど、俺はいつもこうやって捨ててる。不燃ごみとかの袋にそのまま入れたら袋突き破つてくる時があるからな。

「あえ!?! な、なんかパーツが取れたよ!?! 壊れた!?!」

ブリッジの部分のパーツが外れたことで、香澄が騒ぐ。

分かる。最初は壊れたのかって焦るよな。やっぱ最初焦んのは俺だけじゃなかった。

「落ち着け。それ、テイルピースっていつて、弦の張力で固定されてる部品なんだよ。だから、弦を緩めたり、ましてや取ったりしたら普通に外れる」

「壊れたわけじゃ...?」

「ないから安心しろって」

「良かった...」

安心したように、香澄は胸を撫で下ろす仕草をする。

... こいつ意外と胸あるんゲフンゲフン!!

「そんじや、次は——」

「新しい弦を通す!!」

「——前に、指板とか拭く。普段手入れしにくい所だからな。こういう時にやるんだよ」

言いながら俺はカバンを漁り、クロスと二本のスプレー缶を取り出して香澄の前に並べた。

「まずはこっち。指板用のクリーナーな。それを、そのクロスに噴きかける。一秒くらいでいいぞ」

「うんっ」

「クロスにクリーナーを噴きかけたら、その部分で指板を拭く。丁寧にな。俺は各フレットずつにやっていってる」

「はい」

「... ちょっと関口のカバンの中身見せてくれよ。ほかは何が入ってるんだ?」

「んー？ ほかは… 教科書類と筆記用具とピックと弦の潤滑油と楽譜がいくつか。あ、クリップチューナーもあった」

「それ本当に学校用のカバンなのか？ むしろ教科書とかのがオマケに見えるんだけど…」

「ほぼ兼用だからな」

学校のカバンって意外と物がたくさん入るんだよな。便利。

「拭き終わったよー」

「ん、じゃあ次はボディを拭く。ポリッシュっていう、こっちのスペーラーをクロスにかけてな。ついでにテイルピースも拭いところか」

ボディはともかく、テイルピースとか普段はあんまり手入れできないからな。こういう時にピカピカにしておいた方がいい。

あと、指板の方は保湿もしておいたほうがいい。まあ今は梅雨だからあんまり必要ないけど、秋とかになったら乾燥してくるからな。保湿はレモンオイルとかがオススメ。

「裏やヘッドの方までしつかり拭いたら、ようやく新しい弦を通す番だ。六弦から巻いていくとやりやすいかもな」

弦の巻き方のコツを教えて… ほい完了。

「わく!! ありがと海くん！ ギター、すっごく綺麗になったよ!!」

「おう。手入れはこまめにしとけよ？ 弦交換の目安ってほしい一ヶ月から二ヶ月だから、その度にやつとくとくとい」

「うん、分かった!! あっ、そうだ。ギター綺麗になったし、写真撮ってTwitterにあげところ」

Twitterか。俺も一応アカウント持ってるけど、アプリ開いてすらねえなあ。まあ芸能人とAfterglowの五人くらいしかフォローしてないし、別に開く必要もないんだけど。

写真を撮ってスマホを操作する香澄を横目に、俺は出した物をカバンにしまっていく。

さて、そんじゃあそろそろ帰るかね。雨の音も弱くなってきたし、今が帰り時だと――

「香澄ー！ 海ー！ 有咲ー！ 来たわよー!!」

弦の巻き方教えたら弦巻が来たってか、ははっ。



帰らせる今すぐに（無理です）

「私、ライブをやりたいの！」

突然現れた弦巻は、突然何か言い出した。

まあいつものことだし驚きはしない。ゲンナリはするけど。

「じゃあまず近場のライブスタジオで参加バンドを募集してるところを見つけてだな」

「それだと、そこにこられない人達を笑顔にできないでしょう？ 私 はみんなを笑顔にさせたいの!!」

「路上ライブやりたいってこと？」

「路上ライブ？ それよ！ 海、私達、路上ライブをやるわ！ …… それで、路上ライブってどうやればいいのかしら？」

「奥沢さーん、奥沢さん早くきてー」

このまま弦巻に説明しても多分無駄っていうか警察の手を煩わせる結果になりそう。奥沢さん来て。

「美咲は今日はいないわ。ミッシェルならもう少しでくると思うけど」

そう弦巻が言った途端、蔵の入口の扉が開かれる音がした。

しばらくすると、地下と地上を繋ぐ扉も開けられ、そこからピンク色のクマが現れる。

「コラこころっ！ 勝手にどっか行ったらダメってあれほど言ったじゃん！ あ、市ヶ谷さん、おじやまします。あとごめんなさい、うちのこころがホントに…」

クマが頭を下げている。

雨の中、傘もささずに来たのだろうか。色が変色するほど濡れていた。

このずぶ濡れのクマ、名をミッシェルという。商店街の幻のご当地キャラクターらしい。なぜ幻かというと、半日で商店街から姿を消したから。多分全部弦巻が悪いんだと思う。悪気はないんだろうけどな。

「あらミッシェル、そんなに慌ててどうしたの？」

「いや突然車から飛び出されたら誰でも驚くし慌てるから。走行中の車から飛び降りたらダメって習わなかったの」

「習わなかったわー！」

「弦巻家エ・・・」

怒りと呆れを二対八くらいで含んだような声を出す奥沢さん。

てか習わなかったとしても知ってて欲しい。常識として。

「そうだわミッシェル！ 私、路上ライブをやりたいの！」

「ええ・・・」

そんな助けを求めるような目でこつちを見ないでほしい。いや、奥沢さんの目見えないけど。着ぐるみの無機質な目しか見えてないけど。

? ? ? ? ?

『美咲！ 今からミッシェルを迎えに行くから、呼んでおいてちょうだい！』

雨降ってるし風もまあまあ吹いてるし帰ってくる途中で下着までずぶ濡れになっちゃったし、今日はもうお風呂入ってから家でゆつくり羊毛フェルトの続きでもしようかな。そう思っていた矢先に、そんな内容のＬＩＯＥメッセージが送られてきた。スタンプだけ返してお風呂に入った。

それで、お風呂から上がって髪を乾かしていた最中。ふと窓の外に目を向けたら、なんかうちの前に黒塗りの高級車が止まっていた。なんだろ、追突しなきゃいけないのかな（疲労）

雨の中わざわざ家まで迎えにきた弦巻家の真っ黒なりムジンに乗って、私はどこかに向かっている途中だった。ちなみにリムジンに乗る前に黒服さんたちにミッシェルの着ぐるみを着せられた。

どこか、とは一体どこなのか。私にも分からない。先に乗っていた人達に聞いても「とつても楽しいところよ!」、「はぐみも知らない!」でも楽しみだね!」、「フツ。シェイクスピア曰く、なにもない!

ころに、なにも生まれぬ。つまり、そういうことさ」「ふえええ……。」と返ってきただけで、何も状況は把握できなかった。まあ、こんなことは日常茶飯事だ。

今回は黒服さんたちが最初から見るところにいるし、少しは安心できる……。いややっぱできないなこれ。私これからどうなるんだろう……。

そんな不安と戦いながら流れる景色を見ていると、スマホを眺めていたところが急に車のドアを開けて飛び降りた。

……飛び、降りた?!

「ちよつとこころオお!!??」

あまりに自然な動きで飛び降りたものだから軽く流しそうになっただけ、今これ車走ってる途中だよ!? え、大丈夫なの!? 死んでない!?!

「ふえつ!? こ、こころちゃん!?!」

「フツ。まったく、お転婆なお姫様だ……」

「こころんすつごーい!」

「いや確かにすごいけどお転婆じゃすまないですよ! く、黒服さん!」

「はい。こころ様にお怪我はありません。綺麗に着地しておられました。現在は恐らく市ヶ谷様のお宅へ向かわれているものかと。こちらのSNSを見てからの行動でしたので」

黒服さんが差し出してきたスマホの画面を見ると、そこにはとあるT w o t t e r の投稿が映されていた。投稿者はK A S U M I ☆。戸山さんか。

『海くんがギターの弦交換とお手入れのやり方教えてもらっちゃった〜!! ギターすつごく綺麗になったよ! (ノ、▽、) ノ♪』

そんな投稿が、笑顔の戸山さんとギターが写っている写真と共に載っていた。

その下には、『暇だよ〜(・・?・・)』という投稿と共にカバンを漁っている関口くんの写真が載せられていた。その他に、机やアンブなんかも写っている。場所は市ヶ谷さんの家の蔵かな。あ、だから

市ヶ谷さんの家に向かったのか、なるほど。… なんて？

「と、とにかく追わなきゃ！ 黒服さん、市ヶ谷さんの家まで運んでください！」

「かしこまりました」

そう言った黒服さんは運転席に座る黒服さんに耳打ちする。

すると、車はすぐにUターンした。いくらこちらの身体能力が人間離れしているとはいえ、車と人間の走る速度じゃ途中で追いつくはず…

「着きました」

「え早っ、早すぎませんか？」

「すぐ近くだったもので。近かったからこそ、ここも飛び降りられたのかと」

あの馬鹿、目の前の欲しか見えてないの？ 今日これからどっか行くんじゃないかったの？ てか飛び降りるにしても一言言ってよ。

次々と疑問やら怒りやらが込み上げてくるけど、とりあえず今はこの回収に行かなきゃ。このままじゃ市ヶ谷家の蔵が爆発してもおかしくない…！ (過剰思考)

雨の中、私は市ヶ谷家の門をくぐる。

弦巻家ほどではないけど、立派な家だ。門から蔵まではある程度距離がある。傘持つてくれば良かったかな。

少しだけ後悔するけど、今から車に戻る方が時間がかかりそうだし、そのまま蔵へ急ぐ。うわっ、ちよっと染みてきた…。うわ、気持ち悪いなあ…。

蔵に辿り着き、扉を開ける。こころの姿はない。もう地下に行ったのか。

悪いとは思いながらも、蔵の中央へ進む。地下に続く扉を開き、中へ入った…。… いた。

「コラこころっ！ 勝手にどっか行ったらダメってあれほと言ったじゃん！」

「そうだわミッシェル！ 私、路上ライブをやりたいの！」  
「ええ……」

またこの子は突然…… いやまあ今に始まったことじゃないけどさ……。

けど今日は大丈夫。市ヶ谷さんはこの前のお花見で “こつち側” っていうことは分かっているし、関口くんも常識を持っている。戸山さんとこのころが混ざることと起こるポケの化学反応も、この三人なら乗り越えられる……！

「こころーん！ ミッシェルー！ ここにいるのー？」

「ふっ、こんな所に隠れるなんて…… さあ出ておいで、仔猫ちゃん。外の世界は怖くはないさ」

何言ってるんだあの先輩（真顔）

くっ…… はぐみと薫さんも来たか……。この二人が来たってことは花音さんも来るはずだけど、あの人は…… こう言っちゃなんだけど戦力にならない。てかなんで人様ん家の蔵にズカズカ入り込んでくるんだこの人達は……。あつ、あたしもじゃん。もしかして同類？ 私この三馬鹿と同類？ やだなあ……。

「…… 奥沢さん。ちよつと俺ついていけてないんだけど」

「大丈夫だよ関口くん、私もついていけてないから」

「何も大丈夫じゃないんだよなあ」

既に疲れたような目を私に向けてくる関口くん。私も疲れたよ。

あつ、市ヶ谷さんが爪の手入れ始めた！ やめて戦闘放棄しないで

！

「はあ…… 弦巻。お前何しにきたの」

「楽しいことを見つげに！」

「路上ライブはどこいった？」

「路上ライブも楽しいことの一つだわ！ あ、そうだ！ 私達、今から海うみに行つて船に乗ろうと思つていたの！」

「この天気で海は死うみぞ……」

そっかー。私達、海うみに向かつてたのか……。少し天気のことも考えよ……？

「問題ありません。雨の降っていない、穏やかな地域から出航いたしますので」

「少なくともそれ都内じゃないですよね？」

今朝の天気予報では、都内だけでなく、千葉や神奈川にも雨マークが出ていた。波も高い、みたいなのも言ってたな。え、もしかして日本じゃない説もある？

「そうだわ！ 船に人を呼んで、そこでライブをしましょう！ それがいいわ！」

「いや船でライブで…」

「…もしもし、私だ。大型客船の用意を。ああ、速急にだ」

「弦巻家エ…」

呆れたような声を出す関口くん。分かる、私も呆れてる。

けどこうなったらもう私には止められない。覚悟を決めて、その大型客船とやらでライブするしかないかなあ…。ご飯、美味しいかな  
(境地)

「なんか楽しそうなことになってるね、薫くんっ！」

「ああ。シェイクスピア曰く、輝くもの、必ずしも金ならず。船上ライブか。とても素晴らしい考えだね、こころ」

「ふええ…。み、みんな速いよお…」

花音さん、さすがに遅すぎない？ 門から距離あるって言っても十数メートルくらいしか…。もしかして迷った？ 他人の家の庭で迷った？ そんな馬鹿な。

「そうと決まれば行くわよ！ ミッシェル、薫、はぐみ、花音、海、香澄、有咲！」

『おー!!』

「おい待て俺は関係ないだろ」

「私もだよ。くそっ、完璧に空気になれてたと思っただのに…」

「安心しなよ、二人とも。こうなったところからは逃げられない」

「何も安心できねえ…」

さっさと出ていってしまった三馬鹿と戸山さん…。なんで戸山さんは乗り気なんだろう？

「えっ？ えっ？ ど、どこに行くの？ ふ、ふええ…!!」

三馬鹿に腕を掴まれて、花音さんも連行されていく。南無…。

「… おい関口、お前どうする」

「え… え… 行きたくねえ…」

「だよなあ」

戸山さんとは違って、関口くんと市ヶ谷さんはあんまり乗り気じゃないらしい。普通そうだよな。私も帰りたいたい。でも帰れないんだよなあ（諦め）

「奥沢様。替えの着ぐるみを用意いたしました。お早めにご支度の方を」

「あー、はいはい。ありがとーございませう急ぎマース」

さすがに濡れたままはダメだと思ったのか、黒服さんが替えのミツシエル着ぐるみを用意してくれた。どっから持ってきたんだろ、って思ったら負けなんだろうな。

濡れて重くなった頭部をなんとか取って、数十分越しに外気に触れる。

「はあく、暑かった… 蒸すんだよねえ、着ぐるみの中」

一息ついてから、私は腕も抜いて着ぐるみから上半身を脱出させた。

とりあえず水飲みたい。ポカリスエットでも可。

「ちよ、奥沢さん…っ!」

市ヶ谷さんがギョツとした表情をする。

なにか焦ってるみたいだけど、どうしたんだろ？

「関口！ お前後ろ向いとけ!」

関口くんが何かあるの？

そう思って関口くんの方を向けば、彼は顔を赤く染めながら顔を背けていた。なに？

「…？ ……!!」

バツ！ と。私は自分の体を抱くようにしてしゃがみこんだ。

着ぐるみの中は蒸せる。雨で湿度が上がっている今日なんかは、十分も着ぐるみを着ていれば滝のような汗が出る。

そこに加えて、着ぐるみの下に着ているものは下着と白いタンクトップだけときたものだ。そうなれば当然——下着や肌が透ける。

「~~~~!! 見た？」

「……ピンク似合ってると思う」

「感想言えなんて言ってるじゃない!!」

「待って落ち着いて奥沢さん俺が悪かったこの通りだからそのギタースタンドを離してねえ頼むからごめんなさ——」

この後、罰として関口くんには一緒に来てもらった。

でも、戸山さんに押し切られて市ヶ谷さんも着いてきたから、あんまり罰ゲームっぽくないなあ。

関口くんにはもつと別の形で罰を受けてもらおう。そうだな……とりあえず、船の上にいる間のこのころの相手を任せようかな。私、あっちのプールで遊んでこよう。

日本かどうかも怪しいけど、この気候は穏やかで暖かい。雲一つない晴天の下、ライブを終えた私は自由の身だ。体感時間じや今頃太陽が傾いてないとおかしい時間なんだけど、太陽はまだ空高く昇ったまま……まあ、明日は学校休みだし、気にしない気にしない。あ、この赤い果物テレビで見たことある。ドラゴンフルーツだったっけ。おいしー。

「奥沢さーん、関口のやつがどこいったか分かる？」

「関口くん？ ああ、彼ならほら、あそこだよ」

黒服さんが用意してくれたサングラスを付けて、プールサイドでビーチベッドに寝転がりながら、私は空を指さす。

「あゝあゝあゝあゝ!!!」

「あつははははは！ 楽しいわね!!」

私の代わりにこころたちとスカイダイビングしながらギターを弾いている彼は、ちよつとえつちな私の救世主だ。



個人的には何万人って規模の野外ライブより百人未満の箱ライブの方が好き

彼と会ったのは、私が二年生になってすぐの頃。

C i R C L Eでリサが立ち話をしている、その時にチラッと顔だけ見た。

その後彼はすぐにスタジオに入ってしまったから、その時は一言も言葉を交わしてはいない。ただ、美竹さんたちA f t e r g l o wが褒めるレベルのギタリストであることは分かった。

次に会ったのは、同じくC i R C L E。

スタジオの部屋番号を間違……んんッ！ たまたま音が漏れてて、気になってスタジオ内に入った時。

その時彼が弾いていた曲が、たまたま私達がちょうどカバーしている途中の曲だったから、アドバイスを貰うために私達の演奏を聴いてもらった。

その後、彼にはR o s e l i aのアドバイザーとして協力してもらっている。

なぜ彼にそんなことを頼んだのか、私自身正確には分からない。確かに実力はあるし知識も持っている。だが、探せば彼より良い人材はいるはずだ。それこそ、本業の人達とか。

けど、彼に頼みたいと思ったのだ。私は彼に……彼の演奏に、言い表せない魅力を感じた。彼しかいないと、そう思ってしまった。

その判断は間違っていなかったのだと、私はもう少しだけ後になって確信することになる。

? ? ? ?

まだまだ梅雨が続く六月中盤の金曜の夜。

雨だけならまだしも、今日は気温が高い。めっちゃムシムシする。

俺はエアコンをドライ運転でガンガン回しながら、リビングでテレビを観ていた。今週の金曜ローションは『ドクター・スレンジ』だ。名前しか聞いたことはなかったが、案外面白い。闇の魔術とか出てくるし、あことか好きそう。

「海へ、あたし風呂上がったから入っていいよ」

「ん」

まだ入る気なんてないが、とりあえず返事だけしておく。

録画してないし、面白いから最後まで観たい。

「何観てんの?」

「ドクター・ストレンジ」

脱衣所の方からやってきた人物が、俺に問いかける。

俺の实の姉、関口希だ。

「あー、マー○ルのやつね。面白い? それ」

「結構」

「ふーん」

そんなやりとりをした後、姉ちゃんは冷蔵庫から缶ビールを二本持ってきて、ソファに腰掛ける。

……どうでもいいけど、下着姿でリビングに居座るのやめて欲しい。別に姉弟きょうだいだし性欲がどうかは無いけど、見るとなんか変な罪悪感湧くじゃん。

「海、あんたも飲む?」

「未成年に酒すすめんな」

「いーじゃん」

「飲まないから」

「真面目だねえ。そんなんじゃモテないよ?」

「うっせ」

ふざけたり友達と馬鹿をやったりするのは好きだが、違法行為になると話は違う。お酒は二十歳になってから。

「そういや弟よ、ギターのほうは順調かね」

「順調だよ、姉よ。さっき一曲コピー終わったところ」

「ほー？　ちなみに何の曲？」

「DIE」

「HODEの曲かー、懐かし〜」

「うんにゃ、HODEじゃなくてBAOD—MAIDってバンドの曲」

「BAND—M—ID？　何それ初めて聞いた。どれどれ」

スマホを手に取った姉ちゃんは、何度か画面をタッチしてから、そこらに落ちてたイヤホンを挿す。多分検索してBOND—MAIDの曲を聴いているのだろう。

「…んー、確かにアンタが好きそうなバンド。ドラムの手数多いし、リードの方のギター上手いし…　おつ、サビで歪みもう一個踏むのはいいね〜、分かってる」

「だろ？」

どうやら姉ちゃんも気に入ったらしい。どうやらBAN—MAIDの曲を漁り始めたらしく、大人しくなった。これで集中して映画が観れる。

「面白かった」

『ドクター・ストレージ』を見終えた俺は、めちやくちやに小並感な感想を口にしてテレビを消す。

いや、実際面白かった。映像も圧巻だったし。あと主人公のおっさんが無双しなかったのも良かった。安易に無双させると萎えちゃうからな。

「ねえ海、あんたこのバンド聴いたことある？」

俺が一息ついていると、姉ちゃんがスマホを渡してきた。画面を見れば、とある動画サイトが開かれており、どこかのバンドのライブ映像が流れている。

「… 知らね。けどカッコイイな」

「だしよー？ ガンズ・アード・ローゼズっていうんだけど、ギターが  
いいんだよね。スラ○シユってギタリスト。たしかマイ○ル・ジャ○  
ソンともコラボしてた」

「ほえー」

こういうのはたまにある。お互いの好みのバンドを投げ合う会、み  
たいなやつ。定期的にやっているわけではなく、いつも唐突に始まる  
この会だが、これがどちやくそに楽しい。おたえとかともたまにやつ  
てる。

知らないアーティストを知って、それが性癖に突き刺さる瞬間。悪  
くないよ。

「んじや俺はー… これで」

姉ちゃんのスマホでとあるバンドを検索し、それを姉ちゃんに渡  
す。

『原爆○ミルクシェイク』… へえ、誰の歌？」

「ベン○ー。BLA○KEY J E ○ C I ○ Y って知ってる？」

「聞いたことくらいは」

「そのギタリスト」

ベ○ジーはホントに天才だと思う。

世の中天才ギタリスト多すぎて困るよな。

「じゃ、次あたしねー。んーっと… よし、これ！」

姉ちゃんからスマホを受け取り、曲を流す。

あ、この曲…。

「これ知ってるわ。つか、俺が影響受けた曲。めっちゃ好き」

「え、ま？」

「ま。中学上がるちよつと前くらいに聴いた。確かこの人達、お母さ  
んの友達だよ？ 対バンとかも何回かしたって聞いた」

「まっ！」

さつきから姉ちゃん一文字で会話してるけど大丈夫かな？

今聴いてる曲は、俺がロック系のバンドを聴き始めるきっかけに  
なった曲だ。リビングに積んであったCDを漁ってたら出てきたや

つで、お母さんに聞いたら「それ私のバンド仲間の曲。インディーズ時代のやつだったかな」って言ってた。

インディーズの時ってやりたいことをそのままぶつけてるバンドが多いから、結構好きなんだよな。媚びてない感じっていうか。まあ全てのメジャーアーティストが世間に媚びてるとは言わないけど、やっぱりメジャーデビューするとビジネスも絡んでくるからな。多少は仕方ないのかな、とも思う。

「あたしこの前この人達知ってさ。世間って狭いなー。でもあれだよね？ この人達、何年か前に解散してるよね」  
「らしいね」

メジャーデビューしたバンドでも解散することは珍しくない。音楽性の違いとか、メンバーの一人上の都合とか。ちなみにうちの母親は親父との結婚を期にバンド活動を辞めたらしい。

「もったいないよな。せつかくかつこいい曲書ける人達だったのに」

「ほんとそれー。あ、じゃあ次海の番ね〜」

「あいあい。じゃ、次は——」

にしても懐かしい曲を聴いたな。

あ、そうだ。次にコピーする曲、これにしよ。

スコアとかないけど、まあ耳コピでもしてみるか。思い出の曲だし、ちよつとツグつちやうぞ〜。

??????

土曜のバイトを乗り越え、日曜の昼。

とりあえずBOND—MAIDのDIOEと、あと金曜の夜聴いた曲のコードだけは譜面におこすことができたので、その練習だ。

ちなみに今日はこの後、Roseliaの練習が入っている。意見を聞かせてくれとお願いされているため、俺も一応練習には参加するようにしていた。

最初は面倒だなとか思ってたけど、途中からRoseliaの演奏を聴くのが楽しくなってきた。今では役得だと思ってる練習に

参加している。あとリサさんの手作りお菓子が美味しいし、たまに氷川さんが作ってくるクッキーも良き（餌付け）

少し前には解散騒動や不調の時期もあったけど、それも無事に解決し、今は近くに迫ったフェスに向けてみんな頑張っている最中だ。特に最近のリサさんの成長は目覚ましい。きつと家とかでたくさん練習しているのだろう。ああいうのを近くで見ていると、こっちも頑張ろうって気になるよな。

そうこうしているうちにギターのセッティングを終え、音楽プレイヤーに繋いであるイヤホンを右だけ耳に突っ込んだ。一応、スマホを譜面台に置いて両手元の録画もする。

別に、録画してどこかに出すつもりはない。弾いてみた動画の投稿に興味がないわけじゃないんだけど、やっぱりスマホだとしても音質がな。インターフェース買ったらやってみてもいいかも。

「よし」

音楽プレイヤーの再生ボタンをタップすると、ドラムから音が始まり、すぐにベースが乱入してくる。

最初はD I O Eから。B A N D M O I Dはガチロックを演奏するガールズバンドだ。しかも、演奏中はメイド服を着ているという異様さを持っている。国内より海外からの人気が高いバンドだけど、そろそろ国内でも人気が出てきそうだ。普通にかっこいいし。

ロックなガールズバンドって言ったらA f t e r g l o wやR o s e l i aもそうだ。個人的な意見だけど、B O N D M A I DとR o s e l i aはやってる音楽が似てる気がするかな。てかカバーとかやって欲しい。

演奏始まるぞ  
閑話休題

イントロの途中からギターも入り、歌の始まる直前からブリッジミュートが始まる。この後はイントロと同じフレーズを挟み、数個コードを鳴らしてからサビだ。ここもコードなので難なく進み、サビの終わり数音のチョーキングで音が途切れないように注意する。

チョーキングは油断すると弦がフレットから離れたりとかして音が途切れることがあるからな。

サビも終わり、イントロとほぼ同じフレーズの間奏を弾いたら二番の歌詞が始まる。二番のAメロ部分は、一番より五音くらい高い音でブリτζミュージートだ。Bメロとサビは一番と同じで大丈夫。

二回目のサビを弾き終われば、次はギターソロ。チョーキングやらビブラートやらを織り交せて音をより深く表現する。モカが言うには、モカつとしてる演奏……らしい。

モカつてるが何かは詳しく知らないけど、エモいとか、多分そつち系の意味だと思う。知らんけど。

それにしても、うん。我ながらいい音出してると思う。

レスポールは元々の音が攻撃的だが、そこにエフェクターとアンプで歪ひずみをかけてパワーアップ。さらにリバーブでトドメだ。

とうかこのリバーブ、やれることが多過ぎる。正直まだ扱いきれてないんだが、いじってる時めっちゃ楽しいんだよな。これはハマりますわ……。つかエフェクターやバイ。凝りだしたらきりがなし。コレクションしそう。楽しい(オタク)

歌のパートが全て終わり、曲はアウトロに入る。

ここはイントロと同じ音を弾くんだけど、最後数秒だけギター一本になつてからの楽器全部でシメつてのが最&高。本当に俺の性癖に突き刺さってくるんだよな、BAND—O—AID。

ちなみにBOND—MAIKOってのもある。最初はエイプリルフールのネタかと思ってたんだけど、普通に活動もしてるらしいしCDも出たんだよな、あれ。メイドもいいけど舞妓も良きゾ。

録画を止め、ちゃんと撮れてるかを軽く確認する。音や運指の確認は家帰ってからやるか。今はせっかくアンプで爆音出せるんだし、エフェクターもいじり倒したい。さっきの音もいいんだが、原曲に忠実かという点と少し違う。まだ『自分の音』を見つけてないし、今は原曲に沿った音作りをしていきたいんだよな。色んな音を知っていく上で『自分の音』が見つかるって、どっかのギタリストが言ってた。

しかしそうになると、エフェクターをいじるだけで時間が終わりそう

だ。

今日はこのあとRoseliaの練習もあるということで、俺個人では一時間しかスタジオを借りてない。そんな俺の持ち時間のうち、既に三十分以上経ってるし、音作りは凝りたいから時間がかかるだろう。てかかける。妥協したくないもん。そこんところ、俺はガチだからな。

「んー…」

エフェクターと格闘すること十数分。色々やってはみたんだけど、なんかこれじゃないって感じの音だ。いいんだけど、いいんだけどこーう、何か足りない。どうすりゃいいんだろ。エフェクターはまだまだ勉強不足だからなー…。

歪みももう一個欲しいと思うけど、結局どれがいいのか分からない。一口に『歪み系エフェクター』っていつても、星の数ほどあるからな。同じデイストーションでもメーカーとかが違えば全く違った音になってきたり、〇〇社のデイストーションと△△社のオーバードライブが同じくらい歪み具合だったりもする。金は有限だ。あれもこれもと買えるわけじゃない。

まあ、ないものねだりをしてても仕方ないからな。手持ちのものでどうにかするつきやないだろう。あー、金欲しい。

あーでもないこーでもないってアンプやエフェクターをいじっていると、スタジオの扉が開かれた。

「お疲れ様です、関口くん」

「んあ？ あ、氷川さん。お疲れっス」

入ってきたのは氷川さん。

とりあえず挨拶したあとに時計を確認したら、俺の持ち時間はあと十分を切っていた。少し早めに着いたRoseliaのメンバーが入ってきてもおかしくはない時間だ。

幸い、このスタジオにはジャズコとマーシャル、二つのギターアンプがある。氷川さんが来たからどかなきゃいけないってことはない。



俺がマーシャルを使っているので、氷川さんはジャズコの方にギターを繋ぐ。てか氷川さんがいつつもジャズコ使ってるから俺がマーシャル使ってるんだけどな。

ちなみに、氷川さんはライブではDiezeiってアンプを使ってる。俺は使ったことないからよく分かんないけど、音が重くなってる気がする。

まあRoseliaはオリジナル曲のほとんどがドロップDチューニングとかいう脳筋バンド(褒め言葉)だからな。パンクつーかメロコアつーか。ロックンロールしてるよなあ。

「…氷川さん、マルチとコンパクト繋げてるんですか?」

少し気になって氷川さんのボードをチラ見したら、いくつかのコンパクトエフェクターと、一つの大きなエフェクターらしきものが設置されていた。

「? いえ、そんなことはしていませんが… ああ、これですか?」

氷川さんが、俺が気になっていたエフェクターを差す。

「これはプログラマブル・スイッチャーといって、コンパクトエフェクターを一括して操作できる機材です。まあ、そういう点ではマルチエフェクターと言えなくもないですね」

プログラマブル・スイッチャー… また新しいのが出てきたな!  
(トキメキ)

てか改めて見ると、氷川さんのボード凄いな。一、二、三、四…: 九個コンパクトエフェクターが置いてある。あれ全部使うのかな…: うずうずする。

「氷川さん氷川さん、ちょっと聞きたいことあるんですけど…:」

? ? ? ? ?

「んー…: 音はいいっちゃいいんだけど、あと一歩足りないっていうか…: 欲を言えばもう少し強い歪みひずみが欲しいっすよね」

「確かに、歪みひずみはもう一個欲しいところですね。ブースターでもいいですけど。それからディレイもあれば文句はないかと」

「氷川さんはどんな歪み使ってるんですか？」

「私はMORのオーバードライブを使っています。それからブースターを二つ付けてるわ。このKooling Floorというのがハイゲインブーストペダルで…」

「また物騒な名前してんな」

私がスタジオに入ると、海と紗夜が隣同士に座ってエフェクターについて話していた。

他のメンバーはまだ来ていないようね。まあまだ集合まで時間はあるし、遅刻しなければ問題ない。

「こんにちは。二人とも早いわね」

「湊さん、お疲れ様です」

「うーっす」

二人同時に顔を上げて、こちらに挨拶してくる。海はもう少しまともにも挨拶できないのかしら？ まあ何に支障があるわけでもないからいいのだけれど。

そんなことより、今の私の意識は昨日聴いた曲に向いている。

昨日聴いたあの曲…『LOUDER』は、昔お父さんが歌っていた、お父さん達のバンドの曲だ。

あのお父さんのすごく楽しそうな歌声… あの歌は、音楽への情熱で溢れてる。インディーズ時代の、純粋な気持ちをぶつけた歌。

あの歌を、私も歌いたい。あの曲を、Roseliaで演<sup>や</sup>りたい。けど…今の私に、あの歌を歌う資格があるのか分からない。

結局気持ちの整理ができないまま、今日を迎えてしまった。

「？ 友希那さん、なんかあつたんですか？ 顔暗いですけど」

「っ！…別に、何も無いわ」

そんな顔に出ていたのかしら…。ダメね、私情は持ち込まないと言ったのは私なのに。

「ならいいんですけど。あ、それより昨日あこちゃん達から聞きましたよ？ なんかセトリに悩んでるって」

「ええ、まあ。今日それぞれ考えてくる予定よ…。あまり時間はないけれど、貴方も考えてくれるかしら。意見は多い方がいいわ」

「了解つす。カバー曲とかもやるんですか？」

「まあ、必要があるのならね」

「ならこんなのでしょうか？ さっき俺が練習してた曲なんですけど」

そう言つて彼が聴かせてきたのは、BAND—MAIDというガールズバンドの曲。これは私も知っている。主に海外で人気な日本人バンドだ。実力もある。

けど、これじゃない。LOUDERを超えるモノを感じられないなら、私達のオリジナル曲をやったほうがいい。

「いい曲だけれど、今回は遠慮しておくわ」

「そつすか？」

海は残念そうに肩を落とした。

そんな彼に、紗夜が問いかける。

「BAND—MAIDのDIE？ 関口くん、さっきは別の曲の楽譜を持っていなかった？」

「あー、そっちはまだ練習してる途中なんですけど… まだ練習まで時間ありますし、一応聴いてみます？」

紗夜に言われて、海は音楽プレーヤーを操作する。

海には悪いけれど、今の私に刺さる曲は多分ない。

そう思つてPAMIXサーにマイクを繋げようとする私の耳に、海の音楽プレーヤーから流れ出た音が届いた。思わず、手を止めてしまふ。

その曲は、今私の心を支配しているモノ。私の魂を震わせるモノ。

「……その、曲……」

「曲名は『LOUDER』。これ、俺がロック系の音楽を好きになつたきっかけの曲なんですよ。ま、俺がこの曲知つて数ヶ月後に解散しちゃつたんですけどね、このバンド」

そう言つた彼は、呆ける私を置いてさらに言葉を続ける。

「俺が初めて好きだと思つたバンドが、この——の曲なんです。それまではバンドに興味なんてなかったのに、このバンド知つてからはそっちに傾倒しましたからね。LOUDERの他にもいい曲はたく

さんあるんですよ？ 例えば……」

嬉々とした表情で、海は様々な曲を流していく。

そのどれもが、お父さんの誇り。私が憧れた人の情熱が詰まった曲だった。

「うちにライブ映像があつて、それ何回か観たんですよ。演奏中のパフォーマンスとか、ちよつとした弾き方とか、結構参考にしてるところもあるくらいにはファンでしたね」

——そうか。そうだったのか。

彼の演奏の中に感じた魅力。その正体。

所々で溢れていた、お父さんの……お父さん達の残滓、だったのかもしれない。

なんとも楽しそうに、海はお父さん達のバンドを褒めちぎる。

そうだ、その通りだ。お父さん達のバンドはカッコいい。お父さんの歌は熱い。私の憧れは、間違つてなんかいない。

………けど。

「……そのバンド、私も聴いたことがあるわ」

「マジっすか？ いいですよ〜」

「ええ。だつてそのバンドのボーカル、私のお父さんだもの」

「………ま？」

「本当よ。嘘をつく必要がないわ」

海と紗夜の驚いた顔が見える。

無理もないわね。私だつて立場が逆ならそうなっている自信がある。

それに、海には軽い仕返しができた。さつき突然LOUDERを流されたとき、私の驚きは今の海にも引けをとっていないだろう。そう思うと少しだけスッキリした。

「その曲はいい……Roseliaのみんなには悪いと思うけど、私情を持ち込んででも歌いたいと思う曲よ……でも、今の私にその資格があるとは思えない」

「資格、ですか？」

紗夜の言葉に、私は頷きで返す。

私が Roselia に私情を持ち込んでまで歌いたいと思った歌。震えるくらいの想いが籠ったお父さんの歌を歌う資格なんて、今の私には――

「…えと。資格とか、何言ってるの?」

「――え?」

少しだけ眉に皺を寄せた表情の海が、呆れたような声音で私に問う。

「いや、友希那さんの親父さんへの思いとか、そういうのはこの前聞きましたけど… 資格云々はちよつと分かんないですね」

「それは… だって、この曲はお父さんの曲で…」

「別に資格とかいらんでしよう。親父さんが『自分達以外は歌うな』とか言ってるんならまだしも、そんなこともないんでしょ?」

「でもっ…。でも、この歌から感じる純粋な情熱… これを、私の声にのせて歌える自信がなくて…っ」

ああ、私は何を言っているんだろう。他人に弱音を吐くなんて私らしくない。

「なら、その気持ちをぶつければいいじゃないですか?」

「え? でも…」

「でももへチマもねつすよ」

一度言葉を区切った海は、私をまつすぐ見てから続けた。

「それが友希那さんの情熱でしょ? 悩んで、向き合って、藻掻いて。それは貴女の真剣な想いだ。それをぶつけて歌うことは、何も間違っていない。つーか、仮に『歌う資格』なんてもんがあるとしたら、貴女以上に資格があるやつの方が少ないですよ、友希那さん」

「…私、未熟でも…?」

「完成された音楽なんてありえないし、友希那さんが未熟とも思いませんけど。まあ、友希那さんが技術や精神性の未熟さに思い悩んでいるんだとしても… その思いは紛れもなく純粋で、素晴らしいものだと思いますよ」

諭すように、彼は言った。

それはまるでお父さんのようで、心地良ような、こそばゆいよう

な… 妙な感覚が湧いてくる。

「湊さん。私も、関口くんと同意見です…。私も、音楽との向き合い方については思うところがありません。だから、というわけではないかもしれませんが。貴女の思い、その強さ…。正直、見直したわ」

「紗夜…」

「やりましょう、この曲を。私達で、お父様の曲にもう一度、新しい生命を吹き込むんです…。まあ、今井さん達からの了承を貰うのが先ですけどね」

そう言つて微笑む紗夜の目には、熱いものが灯っていた。

… 私は… 歌つても、いいの…？

お父さんの曲を… 私が…！

「… ありがとう、海、紗夜」

まだ演ると決まったわけじゃない。

紗夜の言った通り、リサや燐子、あこ達に許しを貰わなければいけない。

… きつとみんな、許してくれるのだろうか。あこはカツコイイと騒ぐかもしれない、燐子は静かに燃えるだろうか。リサは——喜んで、くれるかしら。

でも、まずはごめんなさいと頭を下げよう。この曲を歌いたいと懇願しよう。

これは私情だから。私のわがままだから。みんなの優しさに甘えてはいけない。

そして彼には——

「友希那さんの『LOUDER』、楽しみにしてますよ？」

「ええ。私達の音を、私の気持ちを届けてみせるわ。だからアドバイスをよろしくね、御意見番さん？」

——彼には、最大の感謝を。

ああ、本当に。彼を選んだのは正しかった。

その判断は間違つてなんかいなかったんだと、私は今、確信した。

バンドの解散騒動は通過儀礼っていうけど、騒動起こさないにこしたことはない

彼は昔から、いつも私たちのお兄ちゃんだった。

年は同じで、たまに変なことをするけど。いつも私たちを優しく包んでくれる、頼れるお兄ちゃん。

傷付いた時、落ち込んだ時、壁にぶつかった時、喧嘩をしちゃった時。私たちが真っ先に頼るのは、親でも先生でもない。彼だった。

「聞いてよ海！ 蘭ったらまた——」

こんなひまりちゃんの声を聞いたのも、もう何度目か分からない。

そんなひまりちゃんの不満を受け止めるのは、いつも彼。

コーヒーに角砂糖を一つ入れてマドラーでかき混ぜつつ、相槌を打ったり短い返答をしたりしてひまりちゃんの話聞く。

一見まともに見えるように見えないけど、話を聞き終えた彼はすごく的確なアドバイスをするのだから驚きだ。そのおかげか、小さな小競り合いは何回かあっても、私たちの中で喧嘩といえるような喧嘩はあまりなかった。喧嘩になりそうな時は彼が仲裁に入ってくれたし。

——だから、こうなったのかもしれない。

? ? ? ? ?

まだまだ続く梅雨の時期でも、晴れる日はわりとあったりする。湿

度が高い上に太陽が出ると気温も上がるからやめてほしい。

昨日今日と快晴が続き、夏が顔を出してきたような気温が人間を襲う。地球が人間をバイ菌だと思って体温（気温）を上げてる『地球の免疫力』説、あると思います。

「映画観たい」

冷房の効いた学校の図書室で、俺はふと呟く。

「映画、ですか…？」

俺の声に反応したのは、この図書室の主（仮）である白金さん。

期末試験まで残り二週間となり、正式なテスト範囲が発表された今日。本格的に勉強を始めるため、俺は図書室に足を運んでいた。

時間は放課後ということもあり、図書室を利用する人はほとんどいない。というか俺と白金さんの二人だけだ。

「アメリカン・ア○マルズって映画やってるんですけど、それ気になつてて」

英単語帳をパラパラめくって、分からない単語があれば付箋を貼る。

チラツと受付に座る白金さんの方を見れば、彼女は本に視線を落としながら口を開いた。

「アメ○カン・アニマルズ…動物の映画ですか？」

「いえ、クライム映画ですね。アメリカの大学生四人が起こした実際の窃盗事件を題材にしてて、なんか本人達も出演してるらしいんですよ」

俺が好きなのは何も音楽だけじゃない。趣味が広い、という自覚はある。読書も好きだし球技も好きだ。あと散歩と将棋と温泉。おじいちゃんかな？ それに最近は奥沢さんにフェルトも習ってる。

そんな数ある趣味のうちの一つに、映画鑑賞がある。

「ほ、本人って…犯人が、ですか？」

「はい。まあ犯罪者っていつでも窃盗犯ですからね。もう十年以上前の事件ですし、普通に刑期終わって出所してきたんだと思います」

「それでも…斬新、ですね…」

「そうなんですよー」



他にも観たい映画はいくつかある。この前キ○グダムを観たから、アメリカ○・アニメルズを入れてあと四作品、観たい映画が残ってるわけだが・・・金が飛ぶなあ。

少し待てばDVDが出るとか、テレビで放送されるとか、そう言われることもたくさんあった。けど違うんだ。そうじゃない。映画館で観るからこそその感動、そこでしか感じられない昂奮があるんだ。

「・・・あの」

「はい？」

誰に向けてというわけでもなく、心の中で語っていると、白金さんが本から視線を上げてこちらを向きながら、おずおずと口を開いた。やめて本で口元隠さないで。照れてんのかなんなのか知らないけどこつちが照れちやう。

「その映画、観にいきませんか・・・？ えと・・・一緒に」

「・・・はい？」

？ ？ ？ ？ ？

土曜日、バイト終わり。

あいにくの曇り空が広がる池袋で、俺は待ち合わせをしていた。

「お・・・おまたせ・・・しまし、た・・・」

スマホを弄って時間を潰していた俺に、息も絶え絶えな声が届く。顔を上げて声のする方を見てみれば、顔を青白くした白金さんが焦点の合っていない目でこちらを見ていた。

「・・・大丈夫ですか？」

「少し、大丈夫では・・・ないかと・・・」

白金さんは人混みが大の苦手だ。

そんな彼女がなぜ人でごった返すこの街に来たのかというと、

『今のままじゃ・・・ダメなんです・・・。苦手を・・・克服、したくて・・・らしい。』

そのためにまずは映画館みたいな静かな場所で慣らししていきたい、と。一人じゃ無理だけど、人と一緒ならなんとか挑戦できるのだと

か。あとなんかア○メイトで買いたいモノもあるらしいので、今日はアニメ○トも映画館もある池袋に集合したのだ。

まあ、映画館に行く前にすでに満身創痍だけどな、この人。

「映画始まるまでもう少し時間ありますし、先にアニメイト行きましょうか」

「は、はい……」

大丈夫かこの人？ もう目え回しそうになってる……。つか、もう回してるけど。あ、いや。大丈夫じゃないってさつき言ってたな。

電車が辛かったんだろうか。確かにこの時間帯の電車、下手したら昼間よりも混んでるからなあ。

「辛いようだったら今日は無しでもいいですけど……。映画はもうしばらく上映してますし。最寄りの駅までは送って行きますよ」

「い、いえ……。頑張りたいです……！」

白金さんの表情に決意の色が現れる。

なるほど、この人は本気なんだろう。人見知りを治したいと本気で思ってるんだ。

なら、その手伝いくらいならいくらでも付き合おう。

「じゃあ、とりあえずア○メイトに向かいますね。周りの人混みが辛くないなら、俺の背中だけ見といてください。多少は楽になるかと」

「あ、ありがとうございます……」

高所恐怖症の人が、高い場所で下を見ないようにすれば多少マシになるのと同じだ。周りの人を視界に入れなければ、少しは落ち着けるかもしれない。

人見知りが人混みを怖がる理由は、周りの視線が気になるから。自分がどういふ目で見られているのか、それを常に気にしてしまうからだと思う。

まあ白金さんの場合、実際に周囲の目を集めるからな。容姿は上の上。おっp……。スタイルも抜群ともなれば、当然のように周囲の目を集める。特に男の。俺だってこんな人と街ですれ違ったらチラ見するわ。そういう視線を敏感に感じ取ってしまうことも、白金さんが人混みを嫌う原因の一つなのだろう。

根本的に人見知りなんだろうけど、白金さんの容姿が更に彼女を苦しめる。やつぱかわいって罪だよな、色んな意味で。

と、そんな厨二みたいなきことを考えながら歩きだそうとすると、シャツの裾が引つ張られる感覚がした。

「…あの、白金さん」

「? なんですか…?」

「あ、いえ。なんでもないです。行きましようか」

上目遣いは反則、はつきり分かんだね。

案の定というか、シャツの裾を引つ張っていたのは白金さんだった。ギョツと握ってるわけじゃなくて、親指と人差し指でそっと摘んでる。身を小さくしようとしているのか、背中をちよつと丸めて腕は前に出しているのだが、それがなんだかグラビアのポーズみたいで…なんだっけあれ、雛ポーズだっけ。それに加え、トドメに少し潤んだ瞳での上目遣い。なにこの生き物、可愛すぎるんだが???

昨晩は「フウーツ!! 明日は美人とデートだぜ、フウーツ!!」とか騒いでお母さんにうるせえと怒られるくらいにはテンションを上げていた俺だが、こんなにドキドキするとか聞いてない。可愛い。

事前に色々心構えとかして準備してたのにこんなにドキドキしてるのはおかしい。かわいい。

チラツと後ろを向いたらちよつと震えた手で俺のシャツの裾を掴んでおどおどしながらもギョツと口を結んで俺の背中を見つめている小動物がいた。KAWAII。

そんなこんなで軽く混乱していると、あつという間にアニ○イトに着いた。

未だビクビクしている白金さんを連れて入店する。すると、入つてすぐの右側にN F Oのグッズがズラリと並んでいるコーナーがあった。

「白金さんが欲しいのってコレですか?」

「は、はい…。ここでグッズを買ったら…レシートにQRコードが付いてきて…そのQRコードを読み込むと、限定の水着衣装が…」

入手できるんです…。」

「ほええ」

知らなかった。あー、最近水着衣装のプレイヤーが増えたのはそういう…。どっかのクエスト報酬か課金アイテムかと思ってたら、こういう感じで入手できたのか。

俺もそれなりにNFOにはハマってるし、白金さんやあちちゃんと一緒にプレイとかもしている。俺が選んだ職業はランサー<sup>クラス</sup>。俊敏性が高く、対魔力値も中々に高いこの職業を、俺はそれなりに気に入っている。が、しかしだ。

「関口くんも… 買いませんか…?」

「んー… 男キャラで水着もなー」

そう、俺がメイキングしたキャラクターは男なのである。男の水着とか誰かの得になっても俺の得にはならない。

逆に白金さんのキャラクターは女で、容姿も整っている。さぞ水着衣装が映えることだろう。

白金さんは少し残念そうにしたが、強要するつもりなどないらしく、グッズを物色し始めた。

どうやら衣装の種類はいくつかあり、レシートに付いてくるQRコードはランダムらしい。白金さんの欲しい衣装が付いてくるのはどれかを真剣に悩んでいるようだが… QRがレシートに付いてるならグッズ見ても意味無くない?

「…ん」

悩みに悩んだ末、白金さんは一つのぬいぐるみを手に取った。ゲームの中でも割と人気のある、味方NPCキャラのぬいぐるみだ。

意を決したようにレジに並ぶ白金さんを見て、ふと思う。

「あ、俺いなくてもレジ並べてんじやん」

目的のためなら苦手すらも気にしない。

まさにゲーマーの鑑といえる人だな。

と、そこで俺の視界にとあるポスターが写る。

どうやらNFOの水着衣装の種類についてかかかれているらしい。ビキニにスク水、レオタード。浮き輪が付いているものもある。中に

は貝殻だけの水着もあるんだが、あれは大丈夫なんだろうか。十八禁とかにならないの？　つか男物ないじゃん。…　あ、端っこに『男性キャラクターの水着は後日公開』って書いてあんな。

まあとりあえず。数えてみれば、水着衣装は全八種類。八分の一は中々に厳しい数字だ。

…　ふむ。

「あ、おまたせしました」

レジの横でレシートを大事そうに持ちながら立っていた白金さんに声をかける。

「…？　関口くん、何か買われたんですか…？」

「ちよつとキーホルダーを。好きなキャラのがあったんで。あ、これレシートです」

そう言つて、俺はQRコードの載ったレシートを白金さんに渡す。

八分の二、まあつまり四分の一でも不安は残るけど、十二・五%より二十五%の方がいいだろう。というわけで俺も商品を買つてレシートを白金さんに渡したのだが…。

「あ、あの…　とても、ありがたいの、ですが…」

なんだろう。なんで白金さんは何か言い難そうな雰囲気を出してるんだろう。まさかありがた迷惑とか、そんなふうに思われた…？

「その…　プレイヤー一人につき…　入手できる…　限定装備は…　一つまでなので…　その…　頂いても使えないというか…」

「えっ」

この後めちやくちや集中して映画を観た。

？　？　？　？　？

「面白かった」

小並感極まりない感想を呟きながら、俺は映画館を出る。なんかこの前も似たような感想言つた気がすんな。やだ…　もしかして俺、

ボキヤ貧…？

アメリカン・アニールズの感想をめちゃくちゃ簡単に言い表すとすれば、『クソ雑魚四人組がオーシャンズしてた』だろうか。

セリフ回しも良かったし、音響もいい。これは観て正解の映画だったな。

「なんだか… ハラハラ、しました…」

「っすね。主人公達がどこまでいっても所詮素人っていうか、何をしでかすか分かんなくて目が離せなかったっていうか」

普通じゃない刺激を求める大学生の悲惨な末路。

少し前から話題になっている、学生が過度な悪ふざけ動画をSNSに上げて炎上したやつと似ていると言えば似ているかもしれない。

いやしかし。本当に面白かった。監督の力も大きいだろうな、これ。

白金さんと映画の感想を言い合いながらしばらく歩いていると、すぐに駅に着いたのだが、あまりの人混みに白金さんがとうとう本格的に目を回してしまった。

そんな白金さんに付き添い、白金さんの家の最寄りまで送る。

電車の中ではNFOの話をした。今やってるイベントクエストが難しいだとか、報酬が豪華だとか。ちなみに俺のレシートは明日の練習時にあちちゃんに渡すことにした。女性専用の装備持っても使い道皆無だしな。

改札を出ながらお辞儀する白金さんを見送り、俺はどう帰ればいいのかを調べようとスマホをポケットから取り出す。

と、そこでスマホの電源が入っていないことに気付いた。映画館に入る時に電源切ったまんまだったな。

スマホの電源を入れ、パスワードを打ち込む。

すると、見慣れたホーム画面が出てきた。出てきたのだが… なんだこのLIE通知の数。百超えてんのか初めて見た。

不審に思いつつも、俺はアプリを開く。

「… 蘭とモカとひまりとつぐと巴…？ なんだなんだ」

いくつかの公式アカウントやら須田やらからもメッセージが届いているが、そっちは今は無視。

A f t e r g l o w 全員からメッセージが届くとか何事だ？ ひまりやモカとは普段からL O N E のやり取りをしてるけど、一度に十何件も送られてくるなんてことは今までなかった。それに電話も何件かかかってきている。急用だろうか。

それより驚いたのが、蘭からL I O E が届いていたということ。たった一件だけだが、普段は返事すらろくにしない蘭から届いているってのは少し異常だ。

気になって、とりあえず蘭から先に返信しようと蘭とのトークルームをタップしようとする、不意に画面が切り替わった。

「つぐ？」

画面には『羽沢つぐみ』と『拒否』、『応答』の文字。

つぐから電話がかかってきたのだ。

蘭のことも気になるが、とりあえず今はつぐの電話に出ようと『応答』をタップする。

『あつ！ 繋がった!! どうしよう海くん、このままじゃ私達…!!』

焦ったつぐの声が、俺の耳を貫いた。

? ? ? ? ?

カランカラン、とベルが鳴る。

お店の出入口に付いている、お客さんの出入りを知らせるベルの音だ。

「おまたせ」

そこから入ってきたのは、関口海くん。

私達の幼馴染みの一人だ。

「ごめんね海くん、急に呼び出したりしちゃって」

「気にすんな」

まだお客さんがチラホラと残ってるけど、もうすぐ閉店時間だし、

席はたくさん空いてる。

その空いている席のうち、私が腰掛けていた席に海くんも座った。特に注文はしていないけど、お父さんが気を利かせてくれて、私と海くんの前にブレンドコーヒーが出てくる。羽沢珈琲店ウツチのオリジナルだ。

海くんはお父さんにお礼を言って、角砂糖を一つ、コーヒーに入れる。中学校に上がったくらいから、これが海くんのお気に入り。ウチに来る時はだいたいこれを頼んでる。

マドラーでコーヒーを混ぜながら、海くんは口を開いた。

「話ほだいたい把握してる。ほかの連中からも連絡入ってたし、移動中にひまりから電話で話を聞いた」

「そっか…」

今日海くんを呼んだのは、とある問題が発生したから。

今日の夕方頃。私達Afterglowは、近くに迫った大きなライブに向けて、スタジオに入って練習していた。

けど、練習の途中に蘭ちゃんに何度も電話がかかってきて、その度に蘭の顔は暗くなる一方。いつそ苦しそうに見えた。電話の相手は、蘭ちゃんのお父さん。多分お家のことで色々言われちゃったんだろう。蘭ちゃんのお家は華道の家元で、そこには私達じゃ分からない苦悩があるんだと思う。

その事がきっかけになって、蘭ちゃんと巴ちゃんがケンカしちゃって… 蘭ちゃんが飛び出してしまった。

その後も、バンド活動を休止しようとか、そういう言葉も出てきて…。

バンドが蘭ちゃんを苦しめてるなら、そうするのがいいのかもしれない。辛い思いをしてる友達を放つてはおけない。けど、私はバンドが好きだ。Afterglowが大好きだ。辞めたくない。けど蘭ちゃんは…。

… こういう時はいつも、海くんが仲裁に入ってくれていた。



いつも海くんがなんとかしてくれていた。  
だから、今回も頼ってしまおう。

これは私達の問題なのに。自分達で解決しなきゃいけないことなのに。私には、どうするのが一番いいのかわからない。

「ふんむ…… 悪いんだけどこれ、俺の手に負えるモンじゃねえわ」  
「…… え？」

私は耳を疑う。

コーヒーを啜りながら海くんが言った言葉は、私が望んでいた言葉じゃない。いつでも頼りになる、お兄ちゃんという言葉じゃ――

「単なる口喧嘩だけならまだしも、バンドの話となるとな。その活動休止つての、蘭抜きで話したことだろ？」

「う、うん……。あとモカちゃんもいなかった。モカちゃん、すぐ蘭ちゃんのこと追いかけていったから……」

「なら、まずはそのことについてしっかり話し合うべきだ。そんで、つぐはそこで本心を言え。蘭の気持ちは一先ずおいといて、つぐがバンドを続けたいかどうかをな」

コーヒーカップを軽く回しながら、海くんは言う。

『お前らのバンドの問題だ、お前からで考えろ』と。

…… そうだ。うん、その通りだ。

どうすればいいのかわからない、なんて甘えたことを言ってる場合じゃなかった。崩れようとしてるのは私の居場所だ。海くんは関係ない。海くんは幼馴染みで、私の憧れで、尊敬してる人で、とても大切な人だけど…… Afterglowじゃない。

「……ごめんね、海くん。ありがとう」  
「ん」

短い返事をしたあと、彼は残っていたコーヒーを飲み干して席を立つ。カップとソーサー、マドラーを返却口に置いて、食器類を洗っていたお父さんに挨拶してから、彼は出入口へと向かう。

慌てて私もコーヒーを飲み、海くんを追いかけた。

「明日、みんなが集まって話してみるね」

「ああ。こういうの結構しんどいだろうけど、ちゃんと向き合わない  
きやいけないことだからな……。ま、お前なら大丈夫さ。思う存分、  
気持ちをぶつければいい。その程度で関係が崩れるほどヤワじゃな  
いだろ？ 仲良し幼馴染み」

さつきまでは少し厳しめだった彼の口調が、柔らかいものに変わ  
る。私を安心させるように。私を後押しするように。

そんな気遣いをされてることがむず痒くて、でも嬉しくて。

どこか締めりのない顔をしていると自覚しながらも、私は彼と目を  
合わせる。

「うんっ！ たとえどんな結果になっても、後悔だけはしないよう  
に……。私、ツグっちゃうから！」

真のヒロインは隠れているものだ（迫真）

私が彼に持っている印象は、真面目だが根はやんちゃ。

それは今も昔も変わらない。

「こんにちは〜」

初めて彼が私の家に来た時、とても礼儀正しい振る舞いをしていた。

だが小一時間もすれば、廊下を走って花瓶にぶつかり盛大に割るわ、庭でサッカーをしていて盆栽をひっくり返すわ。その他にも色々やってくれたので、彼がウチに来る時は最大限の注意を払っていた。

中学校に上がってから、彼はあまり家に遊びにはこなくなった。生け花をひっくり返された時に激怒したのが原因だろうか？ 彼が来ないことに少し寂しいと思ったことは内緒だ。私も毒されたものだと、ほとほと呆れてしまう。

稀にウチに来る時、彼は必ずと言っていいほどギターを担いで来た。部屋で弾き語る彼の声や演奏は、素直に素晴らしいと感じられる。

そんな彼も、今年から高校生。

相変わらずやんちゃなところはあろうだが、それもまた可愛いくらだと思ってしまう。私も完全に毒されてしまったようだ。

彼が高校生になってからはまだ一度もウチに遊びに来ていない。そろそろ遊びに来てもいい頃だと思っただけ。

？  
？  
？  
？

つぐに呼び出されてから、約半日後。

「氷川さん。ちよつと音が埋まつてるんで、少しmiddle上げてみてください」

「分かりました」

「それからあこちゃん。テンション上がった時に勝手に手数増やすのは全然いいしむしろ俺好みだけど、ほかの音邪魔しちやつてる時があるからそこ気をつけて」

「うっ……はあい……」

俺はいつも通り、CIRCLEにてRoseliaの練習に参加していた。

「リサさんはだいぶ良くなってきますけど、コーラスとかで歌う時はやつぱり音が不安定になりますね」

「あー……指板見えなかつたりするから、ちよつと弾きにくいんだよね」

「そこはもうフレットと弦の位置を覚えるしかないかと。ちなみにリサさん、家とかで練習する時って座って弾いてます?」

「え? うん、こうやって座って弾いてるよ☆」

近くにあつた椅子に腰掛けたりリサさんは、足を組んでベースを構えてみせる。

スカートで足組みしないでお願い氷川さんからの目線が怖い。

「それ、立って弾く時に弾きにくいなーとか思いませんか?」

「あ、思う思う!」

「座ってる時と立ってる時、構えてるベースの位置が違いすぎますね。ボディの位置もネックの角度もバラバラだと、座ってる時と立ってる時の感覚が違くなりますから」

「なるほど。じゃ、日頃から立って練習すればいい?」

「いえ、別にそんな必要はないっすね。座って弾く時もちゃんとストラップを肩にかけることと、背中を丸めずに姿勢良く弾くこと。あとさっき言ったネックの角度を立てて弾く時と一緒にする。それに気を付けるだけでだいぶ変わりますよ」

俺も最初は立って弾けなくて悩んだもんだ。

自分がどこを抑えてるのかを見やすいように背中を丸めて指板を

覗き込む姿勢で練習していると、どうしても立って弾く時に違和感というか、なんか指の位置が分からなくなるんだよな。

「友希那さん、もう少し高めの声で歌えますか？ 今のままでも十分いいんですけど、もうちょい高い方が綺麗に聴こえるかもです」

「分かったわ。修正してみる」

「白金さんは完璧だと思います。つーかエグいです。なんでそんなに安定してるんですか？ この曲、普通二人はシンセが要りますよ？」

キーボードを二つ同時に弾くことも確かに難しいが、そのくらいなら俺でもできる。じゃあなにが凄いつて、その演奏技術の高さだ。白金さんはマジでヤバイ。超高校級の上手いキーボーディストが二人いるようなもんだ。

Roseliaは全員プロ顔負けの演奏をするが、その中でも白金さんは飛び抜けていると思う。スタジオミュージシャンとかのレベルだ。

幼い頃にどこかのピアノコンクールで金賞を取ったって聞いたけど、それにしても上手すぎる。ブランクあつてこれだからな。ありえないだろ。

「そんじゃ時間も残り少ないですし、もう三回くらい合わせて終わりにしましょうか」

俺がそう言った数秒後。

あこちゃんのカウントから、高校生離れた圧倒的な演奏が始まった。

? ? ? ? ?

「え、これくれるの!? わーい!! 海兄かいにいありがとうー!!」

Roseliaの練習も終わり、CIRCLEカフェテリアにて。

九州の方は大雨が降っているとニュースでやっていたが、こちらは至って快晴だった。

照りつける太陽に夏の予感をヒシヒシと感じながら、俺はあこちゃんに、昨日アニメ〇トでもらったQRコード付きのレシートを渡して

いた。

あこちゃんの喜ぶ顔を見て、俺も自然と笑みが零れる。

「そういえば聞いたよ☆ 海くん昨日、燐子とデートしたんだって〜?」

「い、今井さん…っ…」

そんなリサさんの<sup>からか</sup>揶揄を受け、白金さんは顔を朱色に染める。かあええなく。

「人生初デートでした」

「!?」

リサさんに乗っかって真顔で返すと、白金さんの顔が耳まで赤くなった。

そんな白金さんをニマニマと見ていると氷川さんから睨まれたので、咳払いを一つして視線を外す。

そんな俺たちを笑いながら、リサさんが不思議そうに聞いてきた。

「デート初めてなんだ? ひまりとか、アフグロの誰かと行ったりするの?」

「遊びにはしよっちゆう行ってますけど… あいつらと行くとデートって感じしないんですね。もう十年くらいの付き合いですし、あんま異性って意識したことないです」

まあ稀にそういう目で見ちやうことはあるけど。

いやだって。アレは仕方ないやん。みんな無防備すぎるんやもん。ひまりとか特に。あいつ、今も子供の頃と同じ感覚でくっ付いてく

るからな。あんなもにゆんもにゆんしてたらモンモンしちゃうよね。そんなのだって言えよ、全肯定しろ全国の男子高校生（ヘケツ!!）

そんな俺を見て、リサさんは「ふーん…」とジト目を向けてくる。なんだ、やめろよ。変な扉が開いたらどうすんだ。

そんなありもしないふざけた冗談を考えていると、不意に俺のスマホが複数回鳴る。どれもLONEの通知音だ。

羽沢つぐみ『これから集まって話し合い始める! (? ) . . . | . . . ?』

HIMARI・U『もうすぐ話し合いが始まっちゃうよく…』

HIMARI・U『うう…胃が痛い…』

ともえ(ソイヤツ)『今から話し合いに行ってくる』

ともえ(ソイヤツ)『昨日LIEで海に言われた通り、アタシの気持ちを実つ直ぐぶつけてくるぜ!』

うーん。

つぐと巴は大丈夫そうだけど、ひまり吐いたりしねえかな。心配になつてきた。あいつ他人に感情移入しやすいうえに優しいからな。板挟みになつて潰れなきやいいんだけど。

さて。

「じゃあ、お疲れ様でした。俺ちよつと用事あるんで、今日は先に帰りますね」

「ん。お疲れ様☆」

「お疲れ様。次もよろしく頼むわ」

「お疲れ様でした」

「お疲れ…様、です…」

「海兄じゃあねく!!」

Rose liaの面々の声を受けつつ、俺は荷物を持ってカフェテリアを出る。

…… あつちい、帰りたい、ふぎけんな太陽この野郎本気出してんじゃねえぞテメエ…。

途中コンビニでアイス買ってこ…。

? ? ? ? ?

夕方。

用事も終わり、俺は茜色に染まる住宅街を歩く。

この時間になるとちようどいい気温になつて、そよ風なんかが吹くととても気持ちいい。

「あ、海く」

「おー、モカ。つぐ達も揃ってんな」

民家にしては大きな門の前で、蘭以外の A f t e r g l o w のメンバーが揃っていた。そんな彼女らは、モカを除いて一様に不安げな表情を浮かべている。

まあ、理由は知ってる。

それに何を隠そう、この大きな門は美竹家、蘭の家の門だ。それだけでもだいたいは察せるというもの。

「で、どうだった？ 話し合いの方は」

「ん〜。とりあえずバンドは続けたいつてなつて〜、今蘭が蘭パパと話ししてるところ〜」

「なる。まあ一応は良かったよ、解散なんてことになんなくて」

なんとかなるとは思ってたけど、絶対はないからな。

その後、話し合いの掻い摘んだ内容を聞いていると、玄関の方から蘭が歩いてきた。

「っ！ 蘭、どうだった…？」

巴が真っ先に声をかける。それだけ心配だったのだろう。

そんな巴に続いて、つぐやひまり、モカも蘭の返事を待つ。

「… 次のライブ、ガルジヤムに、父さん来てくれるって。ライブで納得させる」

「じゃあ…！」

「ほら、早く行くよ。父さんを納得させる演奏しなきゃ… 海、いたんだ」

「ついさっき、用事の帰りにこいつらと会ってさ。あいつかわらさず素直じゃないけど… 良かったな、蘭。バンド続けられて」

「……………ん」

頬を赤くして顔をそらしながら、蘭は短く返答する。

「ん〜!! やったあ!! 良かったよお!! もうっ、本当に心配したんだからね!!」

我慢できなかったのか、ひまりが大声を出して蘭に抱き着く。

親父さんと直接話した蘭も緊張しただろうが、ひまり達も相当心配だったろう。



「…蘭、よく言ったな」

「…うんっ、うん…！ あたしだって…不安、だったんだから…！」

巴が蘭を優しく抱く。

そこで蘭の我慢も限界を迎えたのだろう。巴の胸で、蘭が声をあげて涙を流す。

「蘭とまたバンドできて嬉しいよっ！ やっぱりAfterglowはこの五人じゃないとね！」

「お前昔俺をAfterglowに入れようとしてたけどな」  
「そ、そういうことは今言わなくていいじゃん!？」

む…。確かに今のはちよつと無駄口だったかもな。反省。

「…みんな、いつも助けてくれて…その…ありがとう」  
消え入るような声で、蘭が呟く。

顔が赤いのは、きつと夕焼けのせいじゃない。

「…蘭…！ ううん。こちらこそ、だよ！」

瞳に涙を浮かべたひまりが蘭に抱き着いた。

蘭は苦しそうにしているが、それ以上に嬉しそうだ。

「じゃ、スタジオ行くか。今から練習すんだろ？ 付き合うよ」

「うんっ…わあ！ 見て、すごいキレイな夕焼けだよ！」

つぐが興奮したように言う。

Afterglow、夕焼け。こいつらには感慨深いものだ。

「おう、ホントだ。まぶしいねえ。まるであたし達の青春みたい」

「ははっ。何言ってるんだよモカ」

「よーっし！ みんな、この夕日に誓お！ ライブ、ぜえくくったいに成功させようって！」

みんな調子が戻ってきたみたいだな。

昨日今日と、みんなとはLINEや電話で連絡を取っていた。

焦っていたり、落ち込んでいたり、混乱していたり。いつもの喧嘩よりもずっと大きな不安が募ったことだろう。

けど、大丈夫だった。みんなで話して、みんなで解決できた。これは今後のタメになるし、より絆も深まったことだろう。

これでようやく、いつも通りだ。

「せーのっ、えい、えい、おー!! …… この空気でもやんないの!？」

あまりにもいつも通りすぎた。うーんこの。

? ? ? ?

「モカ、一番サビ終わりの間奏の入り、ちよつとモタついてるな。五フレのコードからの十三フレ単音だから難しいのは分かるけど、そこキレイに決めた方がいい。最悪、間奏直前の一小節分は弾かなくてもいい。蘭と弾いてるところは同じだからな」

「ほーい。頑張りまーす」

「巴はちよつと走りがちだな。巴は人を魅せるドラムの叩き方してるけど、その勢いが先行したら曲が崩れる。リズム隊はバンドの基盤だ。特にドラムは音がでかい分、ベースより周りへの影響力が大きい。練習中とかはイヤホンでメトロノーム流しとくといいかもしれないな」

「おうー!」

「蘭は歌に集中しすぎてるな。特にサビの時。いや、ギタボだし歌がおぎなりになるよりは全然いいんだけど、やっぱりギターもちやんと弾けた方がいい。歌いながらは難しいと思うけど、そこは練習あるのみだな。弦の位置は体で覚えるしかない。歌は完璧。さすが、上手い」

「…ん、分かった」

「つぐも歌う時にちよつと不安定になってるな。マイク、もう少し手前に寄せて少し下に下げてみ? そうすりゃ手元見ながら歌えるはずだから。将来的には歌ってる時は前見て歌えるようになったほうがいいんだけど、今は手元を見ながらも問題ないよ。あとつぐはミスった時顔に出すぎだし、ずっと緊張した顔してる。お前めっちゃ頑張ってるんだし、もっと自信持って弾いていいんだぞ」

「う、うん…!」

「ひまりはもう少し音上げていいよ」  
「……。え、それだけ!？」

音楽スタジオ、CiRCLEにて。

美竹家からCiRCLEに直行しようとして楽器がないことに気付いた俺たちは、一度帰宅してからCiRCLEに集まって練習していた。

みんなが一度帰ったということもあり、CiRCLEに集まった時には外はもう暗くなっていた。

「じゃあ時間も時間だし、ラスト一回。今の曲最初から合わせて終わるか」

俺が言うと、皆の頷きと巴のカウントが返ってくる。

うーん…。それにしてもモカがうめえ。普段あんなボーツとしてくせにこんなキレイキレイのギター弾くからなあ、こいつ。タツピングとかしてるの見てたらギャップで萌えそうになる。

そんなことを考えながら演奏を聴いていると、あつという間に終わってしまった。

やっぱテンポ速いよなあ。まあ一発で修正できることじゃないし、次の練習までに合わせられればいいか。それにこの曲はAfter glowのオリジナルだし、最悪このテンポに合わせられるように練習してもいい。

「お疲れさん。最後、一番良かったぞ」

肩で息をするみんなに、労いの言葉をかける。

最後が一番良かったのは本当だ。少し走ってはいたが、全体的によく弾けていたと思う。ドラムも走ってるだけで、技術は高校生離れしてるくらいには高いからな。

とりあえずスタジオを出る時間がきたため、パツと楽器類を片付けてスタジオを出る。

CiRCLEは二十四時間営業ではないが、まだ閉店時間ではない。もはや常連となったカフェテリアで、全員分の飲み物をテイクアウトで買う。

「そういやどうでもいいんだけど、外国で「テイクアウト」って通じないらしいな。「to go」とか「take away」とかいうんだ。この前バイトで外国人のレジ対応した時、take outが通じなかったからなあ。」

「練習お疲れ。ほら、飲み物」

「わあ！ ありがとう」

「真っ先に受け取ったのはひまり。」

「それに続いて、ほかのみんなも飲み物を受け取っていく。」

「昼間はあんなに暑かったというのに、夜になったら肌寒い。この時期は服装をどうしていいか分かんないし、油断したら風邪引くんだよな。」

「んー、疲れた体にコーヒの苦味が染みまますなあ」

「え？ 私のは甘いけど...」

「ああ。つぐのはココアだよ。お前、苦いの苦手だろ」

「つぐ以外のは微糖コーヒーだ。俺が好きだし、あと蘭も好きだから。」

「つぐ以外は別に苦いのが嫌いとかはないし、微糖でいっかなって。」

「海。ライブまであんまり時間ないし、今度もあたし達の練習を見てくれない？ あんたの指摘、結構タメになるし」

「あつ、それいい！」

「等間隔で並んだ街灯と月明かりに照らされて、雑談なんかをしながら帰っている途中。」

「蘭がそんな提案を持ち出し、ひまりが賛同する。」

「ああ、別にいいよ。ライブまでみっちりねっちり仕込んでやるから覚悟しとけ」

「意地の悪い笑顔を貼っつけて、俺は蘭たちを見た。」

「へ、変質者...」

「おい聞こえてんぞひまり」

「で、でもっ！ 海くん、教えるの上手だったよね！」

「それ、思った」

「まー、海はRoseliaの指導もしてるしね」

「ん?..ん?..」

「だな。あこも『海の教え方は上手い』って言ってたぞ」

「んー???」

「近い近い近い。え、なにお前ら知らなかった? 言っただけか。ごめん黙ってたのは悪かった知ってたと思ってたからだから離れてひまり蘭も脇腹抓るな痛い」

あれ、言っただけか? 巴とモカは知ってたらしいけど。

巴はあこちゃん経由として、モカはリサさんか? ひまりはRoseliaの面子ともSNSとかで連絡取ってるから知っててもおかしくなさそうだけど..。そっかあ、教えてなかったかあ。

自分達の知らないところで、自分達を差し置いて、別のバンドに加担する。そう思われたから、蘭達は少し怒っているのかもしれない。言うなれば軽い裏切りみたいなものかな? .. いや別に裏切っているだけだ。

まあ、それなら悪いことをした。正直バンドについては俺の方が初心者だし、俺がAfterglowに口を出す必要はないと思っただ。てかRoseliaの演奏に口出してんのもちよつと分かんないけどな。なんで俺なんだろう?

「まあとにかく。ライブまで俺にできる限りのサポートはする。何より優先してやる。だからお前ら、ライブ、絶対に成功させろよ」

「ふんっ... 言われなくてもやるし」

ようやく俺の脇腹を抓ることをやめた蘭が、プイツとそっぽを向きながら答える。

それを見るモカの顔に優しさや嬉しさみたいなのが浮かんだ気がした。五人の中でも特に仲の良い二人だ、今回の一件で色々あったんだろう。

さて、一番の山場は越えたが、終わったわけじゃない。ここで気を抜いたら全てが水の泡だ。

親父さんを納得させるライブをする。それをクリアするために、俺も全力を尽くそう。

? ? ? ? ?

「… ただいま」

玄関が控えめに開かれる音のあとに、そんな声が聞こえた。

「遅かったな」

「… 練習してた」

少し緊張したような声音で、娘——蘭は答える。

「そうか。だが、こんな暗くなるまで出歩いているのは感心せんな」

「みんな一緒だったし… 海も」

海。その名を聞いて、私の顔が少し強ばるのを感じた。

それを蘭に悟られる前に、蘭から顔を逸らす。恐らく気付かれては

いないだろう。

「… 明日は学校があるだろう。風呂に入って、早く寝なさい」

それだけ言い残して、私は自室へ向かう。

夕方の話のあとだから上手く話せないというのものもあるが、海、という少年について少し思うところがある。

『『娘の言葉をちゃんと聞いてくれ』、か… ふん』

夕方。私は娘とある話をした。

その少し前。私の元に現れたのが、海くんだ。

顔を合わせたのは、確か一年ぶりだったか。

突然うちに訪れたと思えば、私に頭を下げてきたのだ。

『お久しぶりです、親父さん』

『君に親父呼ばわりされる筋合いはないが?』

『いやそういうのじゃないんで… まあ、蘭の話ではあるんですが』

『娘はやらんぞ』

『そういうのじゃねえつつってんだろ』

ふ。感情的になると素が出るのは変わっていなかったな。

『はあ… 真面目な話です。ホントなら俺が突っ込むべきじゃないん

すけど… 蘭の今後について』

『… ふむ』

『親父さん、最近蘭に家業を継ぐように結構強く言ってるみたいで』  
『強くもなにも、昔から話していたことだ。高校に上がったら華道の勉強をする、とな』

『でも、蘭自身はそれを肯定してない。そうですよね？』

『… 君が口を出す問題ではない』

『分かってます。けど、親友が困ってんだ。放つてはおけねえっすね』

… 強い目だった。私が彼と同じ歳の頃、私にあんな目ができただろうか？

『… 別に、蘭に跡を継がせるなって話じゃないんです。そこまで他人<sup>ひと</sup>ん家の事情に深く入り込む気はありません。ただ、蘭の… あんたの娘の言葉をちゃんと聞いてくれ』

そう言うと、彼は私に背を向けた。

一度玄関に行き自分の靴を持った彼は、裏口に向かう。

何をしているのか分からなかった私が彼の行動の理由に気付いたのは、その後すぐだった。

『ただいま… 父さん、ちょっと、話があるんだけど』

彼が裏口から出ていつてすぐ、蘭が帰ってきたのだ。

蘭と鉢合わせたくない理由があったのだろう。例えば、私に会いにきた事を知られたくなかった、とか。

いつもそうだ。彼は蘭を救おうとする。蘭に手を差し伸べる。

蘭達が中学校の頃、塞ぎ込んでいた時も、彼は蘭を引きずり出した。

彼は、そういう人間だ。他人に手を差し伸べられる、優しい人間だ。

「… いい “友人” を持ったな、蘭」

そう、友人だ。そうだよな？ 付き合っていないよな？ …… 不安だ。海くんなら安心だろうが、そういう問題ではなく誰にも娘をやる気はない。

だがまあ… 彼なら右頬に一発で認めてやらんでもないな。

というか、蘭が家を継ぐのをやめたら彼に責任を取ってもらうのはどうだろう。私の女婿になって、家業うちを継いでもらうか。



恋人や友達を作るときは相手を選べよ。

七月頭。

まだ梅雨は明けていないと今朝のニュースでは言っていたが、昨日も今日も至って快晴。蝉の音が聞こえてくるほどだ。暑い。アイス食べたい。

高校生活二度目の定期テストを乗り越えた私は、少し軽やかな気持ちで廊下を歩いていた。

先週から始まっていた文化祭の準備も、テストが終わったことでほとんど本格化していく。A組の文化祭実行副委員になったことだし、張り切っていかなくちゃ。

中学までもこの学校で文化祭をしてたけど、高校生になって初めての文化祭はやっぱり思い入れが違う。

ちなみに文化祭実行委員長は香澄、私と同じ副委員には関口くんもいる。香澄は高校編入組だし、関口くんは花咲川初の男子生徒の一人だ。二人とも分からないところがあるだろうし、そこは私がしっかりフォローして……

「関口くんっ！ あの時……！」

と、不意に近くの教室からそんな声が聞こえてきた。

この声は……多分、B組の子のはず。中等部の時に一回同じクラスになった子。

その子の声が聞こえてきた教室は、普段使っていない多目的教室。いわゆる空き教室だ。

授業以外での使用は禁止されているその教室で一体何をしているんだろう。そう訝しむ私の耳に、その答えはすぐ届く。

「好きですっ！ 付き合ってください!!」

ぴよえっ!? これはもしかして……告白、というやつでは……?

は、初めて生の告白聞いちゃった!?

で、でもそうだよね…。共学になったんだし、そういうこともあるよね、うん。

あつ、でもこのままじゃ盗み聞きしてるみたいだし、早くここから離れて……

「あー…。つと…。ありがとう。でもごめん、俺好きな人いるから」  
ほつ、ほつほおう……。!? (興奮)

? ? ? ? ?

「そこでこの日は朝から五十嵐いがらしが働き詰めだから、昼からは休憩入ってもらってー……。山吹さん、聞いている?」

「へっ? あつ、う、うん! 聞いているよ! お昼から五十嵐くんシフト入ってもらうんだよね!」

「鬼畜か?」

文化祭まで残り一週間となった。

高校生になって初の文化祭ということで、俺はそれなりに楽しみにしている。

A組の出し物は喫茶店。俺はその実行委員側に回ってしまったので、こうして同じ実行委員である山吹さんと一緒に当日のシフトを組んでいたわけだが……。どうにも山吹さんが上の空なんだよな。

まあ、何が気になっているのかはだいたい想像がつく。

香澄達のことだろう。あいつら、文化祭でライブするって息巻いて山吹さんのことも強引に誘ってたからな。

山吹さんは昔ドラムやってたらしいが、今は何か理由があつて辞めてしまったらしい。俺も先々月にドラムに誘ってフラれたんだよな。

「…山吹さん。残り俺やつとくから、香澄達呼んできてくんね?」

体育館にいると思うから」

「え? それは悪いよ。私も委員なんだし、仕事くらいちゃんと…。」  
「仕事ほっぽり出してステージの下見に行った実行委員長を呼んできてほしいんだよね。あいつのシフト希望表、見た? ライブの時以外全部出るってよ。さすがにそれはできないから、あいつ呼んできて決

めさせたいんだよ。だから頼むわ」

「そ、そういうことなら・・・」

申し訳なさそうな顔をしながらも席を立った山吹さんの背中が見えなくなつてから、俺は一つ息を吐く。

「あー・・・疲れた」

首を軽く回すと、コキコキと小気味の良い音が聞こえてくる。

ここ最近、Afterglowの件だったりテストだったり文化祭の準備だったりバイトだったりバンド活動だったりと、やけにオーバークすぎた。香澄のやつに推薦されなければ、文化祭の実行委員なんてやらなくて済んだのになあ・・・。

ま、楽しんでるのも事実なんだが。

「おー、お疲れだな関口」

「んあ・・・？ 須田か。ちょうどいいや、購買でコーヒー牛乳買ってきてくんね？」

「そういうと思って買ってきたぞ、雪○コーヒー牛乳」

「天才かよ」

須田に小銭を渡し、○印のコーヒー牛乳を受け取る。

あー、冷たい。きもちー・・・。

「それシフト表か？ みていい？」  
「ん」

受け取ったコーヒー牛乳を額に当てたあと、ぬるくなる前に飲むとストローを挿す。あまうまー。

「須田・・・ 須田・・・ お、あつた。朝からかー。ちよつとめんど・・・ おお!! 牛込さんも同じシフトじゃん!!」

「ふっ、職権はこう使うんだよ」

「ひゅー!! 関口、ひゅー!!」

まあ希望シフトがだいたい被つてたし、俺も山吹さんも須田の気持ちちは知ってるし、なるべくしてなったシフトだよな。

その後もワーワーと騒ぐ須田にドヤ顔を決めていると、須田がふと我に返つた。

「そーいや、俺たちの出番っていつ頃なんだ？」

「んー？ つと… 一日目、午後の四番組。香澄達の次っぽい」  
「なるー」

須田が気にした「俺たちの出番」とは、何を隠そう俺らのライブである。そう、ライブである!! (大事なことなので)

とは言っても、まだドラマーはいないんだけどな。ドラム人口少ない問題つてのは本当だったのか。

ここ最近「文化祭でライブやるんだ!」と騒ぐ香澄達に感化されたのか、須田が文化祭でライブをしたいと言い出した。

『なあ関口。俺、そろそろライブしたい。文化祭とか』

『いや、ドラムどうすんだよ』

『そこはほら、雇うとか?』

『… まあそれでいいならいいけどさ。それで? 文化祭でやるつつつても、曲はどうするよ。さすがに今からオリジナルは間に合わねえぞ』

『俺BLA○KEY JET CITYやりたい』(バカ)

『やっぱお前最高だな百曲やろう!』(アホ)

とまあ、こんな感じ。

とはいえ、これは花咲川の文化祭。外部の人間をドラマーとして雇うのはあまりよろしくないと生徒会に却下され、かといってそんな急にドラマーが釣れるわけもなく、今回は泣く泣く打ち込みになったのだが。氷川さんっていう身内がいるからいけるかなって思ったけど、あの人身内に厳しい人だったわ。

というか、だ。

思ってたより須田がうめえ。ノリでブ○ンキーやろうぜって言つたものの、当初は出来るだなんて思っていなかった。須田がベースを初めて、まだたったの二ヶ月。普通に考えて二ヶ月で照○さんのベースはキツイだろ。それを、完璧とは言わないまでも、須田は他人に聴かせられるレベルにまで弾けるようになった。いや、シンプルにすげーな須田。

「楽しみだなー、文化祭。関口は今までライブとかしたことあるん？」  
「んにゃ、ない。今まで一人でやってたからな。だから俺もめっちゃ  
楽しみ」

しかも最初のライブでブラン〇ーだもんなあ。テンション爆上が  
りだわ。

頭の中で今回やる曲のフレーズを思い出しながら、俺は残りのシフ  
トを埋め始めた。

えっと…五十嵐が抜けた所に若宮さんを入れて…あ、いや、若  
宮さんも働きすぎだな。じゃあここは北沢さんを入れるか。

シフト作んの思ったよりずつとめんどくせえ。世のシフト管理し  
てる人達って凄いなだなって（小並感）

? ? ? ? ?

さて、とうとう迎えた文化祭初日。

我が花咲川高校では、文化祭は土日の二日間に渡って行われる。

二日目の夜にはキャンプファイヤーもやるのだという。いろんな  
問題があつて普通キャンプファイヤーなんてできないもんだが、なん  
でも今回は弦巻家が一枚かんでいるらしい。弦巻がどうしてもやり  
たいって言ったとかなんとか。

本当になんでもありだなあのお嬢様。

「二卓さん、オーダーいただきました！ ミルクデニッシュ、メロンパ  
ン、ミルク珈琲、レモンティーを各一つずつお願いしますー！」

「おっけー！ じゃあこれ、五卓さんにピザトースト二つとココア二  
つよろしくね、若宮さん」

「合点承知！」

A組のカフェがオープンしてから約三時間。満席とまではいかな  
いまでも、席は半分以上埋まっている。

今回うちのカフェで特に戦力になるのが若宮さん。彼女は羽沢珈  
琲店でバイトをしてるし、俺たちより断然接客慣れしている。なによ  
り愛想が良くて可愛い。彼女の元気な声と明るい笑顔で廊下を歩く

男共が釣れる釣れる。

若宮さん以外でホールに出ているのは、俺と香澄、プラス三人の六人だ。香澄以外はみな居酒屋だったりレストランだったり、接客系のバイトをしている奴らだ。その他はほとんどがキツチン。この時間は須田と牛込さん、おたえの三人もキツチンに入っている。ちなみに内装を頑張った連中は本祭での仕事を免除した。

正午も過ぎて、あと十分ほどで俺のシフトも終わろうとしたところ。教室の前のドア、つまりはA組カフェの入口が開いた。

「ヘイラツシャイ！ なに握りやしよーか!?!」

「若宮さん、それ店違う」

若干どころではない間違った日本文化被れの若宮さんは今日も愉快だ。

ちょうど近くにいた俺が軽くツツコミを入れ、若宮さんに代わり挨拶をする。

「いらっしやいませ。何名様で……」

「やつほー海！ 来ちやった♡」

「出口はあちらでございませお客様」

「酷くない!?!」

一度お辞儀をして顔を上げたら、なんか見慣れたピンク頭がいた。帰ってほしい。

「まあそういうなよ海。アタシ達、一応客だぜ？」

ひまりの後ろを見れば、Afterglowのメンバーが勢揃いしていた。

あー、そういや羽丘って今日休みか。そりやそうだ、今日土曜日もんな。

「はあ……。んじゃあつちの奥の席に座ってくれ。ご新規五名様ご来店です」

「おかえりなさいませお嬢様！」

「若宮さん、それも店違う」

何やら楽しんでいる若宮さんにはほかのテーブルに注文を取りに行ってもらい、俺はできた料理とドリンクの提供をするためにキツチ

ンの方へ足を向ける。まあ料理っていつでも山吹ベーカリーから運ばれてきたパンを温めたただけだけどな。

「注文お願いしま〜す!」

料理の提供を終えた俺に、ひまりの声が届く。

「…はい。ご注文は?」

「私チョココロネとカフェラテ!」

「モカちゃんもそれで〜」

「あたしもチョココロネ。あ、飲み物はブレンドで」

「アタシはカレーパンとホットミルク」

「私は… クリームパンとココアにしよっかな」

「あい。チョココロ三つ、カレーパン、クリームパン、ブレンドコー

ヒー、ホットミルク、ココアで。少々お待ちください」

オーダー表にボールペンで走り書きしながら、注文を復唱する。

それを見たモカが、感心したように呟いた。

「お〜。海が接客してる〜。つぐみたい〜」

「あはは。いつもとは立場が逆だね?」

「…海があたし達に敬語なの、なんか新鮮な感じ」

「私と巴はバイト先で見てるから、全然そんな感じしないよね〜」

「だ〜」

そんな会話を聴きながら、俺はオーダー表をキッチンに持っていく。

キッチンではなんか俺とひまり達の関係について色々憶測が飛び交ってるみたいだけど、ひまりと一応は顔見知りの須田がいるし、俺がわざわざ言いにいなくてもいいだろ。それよりまた面白いことをし始めた若宮さんを止めに行かなきゃ。

「ヘイラッシャイ! 何握りやしよ」

「若宮さん、それさつきやった。いらっしやいま…」

「やつほ〜☆ 来ちゃった☆」

「回れ右でございませうお客様」

「ちよ、お客さんに対していきなりそれ〜?」

いや、あんまり知り合いに接客してるとこ見られたくないんです

わ。

Afterglowの次に入ってきたのはRoseliaメン  
バーのリサさん。その後ろには友希那さんもいる。なんでや。

とりあえず席に案内しようと店内（教室内）を見渡す。

席はまばらに空いているが、二人となると奥の窓際の席がいいか  
な。ちょうど二人掛けのテーブルだし。

「じゃあ、あちらの席にお座りください。ご新規二名様、ご来店でー  
す」

「いらっしやいませお客様！」

「若宮さん、それは…… あ、いや合ってるか」

ちよつとだけ残念に思いながら、俺は二人を席に案内する。

「あれ、アフグロじゃん。やつほー☆ 五人も来てたんだ？」

席に座る前、リサさんがそう言う。

それもそのはず、リサさんと友希那さんを案内した席は、After  
glowの隣の席だ。お互いに気付かないわけがない。

「リサさん！ 友希那さんも！ こんにちははー！」

ひまりが笑顔で手を振って返す。

それに続いてつぐ、モカ、巴、最後に蘭がペコリと軽くお辞儀をし  
た。

「あ、海くん、早速注文いい？」

「大丈夫っす」

「ありがと☆ アタシはこの厚切りトーストとブレンドコーヒーで  
！ 友希那は？」

「私は…… 私もりサと同じものを」

「かしこまりました。厚切りトースト二つと、ブレンドコーヒー、ミル  
ク珈琲で」

「ちよつと海、ちゃんと私の話を聞いていたの？ ブレンドコーヒー  
二つよ」

「いや、友希那さん苦いの飲めないでしょ」

「っ!? なんでそれを…… んんっ！ そ、そんなことはないわ」

いや、あなたもいつもCiRCLEのカフェテリアでコーヒー飲む時



めちやくちや砂糖入れますやん。みんな知ってますよ。

「ふふんっ。湊さん、苦いもの苦手なんですか？」

そう言っつて、俺がりサさんと友希那さんの相手をしている間に届いたらしいブレンドコーヒーを啜ってみせる蘭。

いや、蘭はそんなところでマウント取ろうとするな。弱く見えるぞ。… あ、やべ、蘭がめっちゃ睨んでくる。

「じゃあ厚切りとブレンド二つずつで用意しますね」

「…………… あの、砂糖を貰えるかしら」

「かしこまりました」

「五個ほどお願いするわ」

五個で。いや五個で。もはやミルク珈琲より甘いやんけ。体に悪そう。

注文通り、厚切りトースト二つとブレンドコーヒー二つ、それから角砂糖を五個を提供する。それとほぼ同時、俺のシフトが終わったので、そのままキッチン裏に行つてエプロンを外した。まあエプロンつつつても、男は前掛けだけどな。居酒屋かよ。

女子はフリフリした可愛いエプロンを身に付けている。あれ、香澄やおたえ、牛込さん、市ヶ谷さんが山吹さんの家に行つて頑張つて作つたらしいな。市ヶ谷さんは完全に巻き込まれただけだろ。あの子B組だし。

「そっぴいや山吹さん、今日はもう来ないのかねえ」

とつた前掛け<sup>エプロン</sup>を畳みながら、ボソリと呟く。別に誰かに向けて言った言葉ではないのだが、それを拾った人物が一人。

「さーや、大丈夫かな…？」

俺と同じ時間で上がりの香澄が、隣でエプロンを脱ぎながらそう言った。

つい先週くらいに、香澄達のバンド名が決まった。その名も『Poppin' Party』、略して『ポピパ』だそうだ。メンバーは香澄、おたえ、牛込さん、市ヶ谷さん。そして山吹さんも。まあそれは本人

が否定していたが、香澄の中では山吹さんもポピパの一員となってるんだろう。あいつ、良くも悪くも自分の道を歩いてるからな。

そんな大事なメンバーの一員である山吹さんが、今日学校に来ていない。なんでも母親が貧血で倒れたとかなんとかで、病院で寄り添っているらしい。

「心配ならLINEでもしてみる？ 親父さんの話じゃ、お袋さんも本当に軽い貧血らしいし、LONEくらいなら迷惑じゃないだろ。多分」

「！ する！ さーやに電話！」

「いや電話なのかよ」

俺の言葉などガン無視で、香澄は目を輝かせながらスマホをカバンから取り出した。

「……………んー、繋がらない」

「病院にいるからな」

多分スマホの電源を切っているんだろう。最近じゃ病院で携帯の電源を切る必要はないらしいけど、それでもなんか電源切っちゃうんだよな、病院って。

「だから大人しくLINEでも…」

「留守電しよ！」

めちやくちや電話に拘るやん？

「もしもしさーや？ 香澄です。お母さん、どう？ さーなん泣いてない？ じゅんじゅん元気？ さーや…大丈夫？」

無視紛いのことをされてなんとなく悲しい気持ちになった俺の隣で、香澄が本当に留守電を残し始めた。まあ声の方が気持ちとか伝わりやすいだろうし、俺に被害あるわけじゃないしLONEでも電話でもどっちでもいいけどさ。

「カフェはね、大成功！ すごいんだよ！ お客さんみんな、パン美味しいって。持ち帰りする人もたくさんいたの！」

確かに喫茶店は繁盛したし、している。

喫茶店と言っても食べ物には八割が山吹ベーカーリーのパンだ。それを全面に出してるから、山吹ベーカーリーのネームバリューも大きいだ

ろう。地元じゃわりと有名店だからな。

その後も、香澄は楽しそうに今日起こった出来事を話す。

「えへへ、それでねさーや！ お相撲さんが来た時にイヴちゃん  
が…」

「ん？ 沙綾？ 香澄、沙綾に電話してるの？」

「マジ？ おーい沙綾〜!!」

「さーや？ さつき仕事中に山吹ベーカリーの曲作ったから聴いて」  
「いやちゃんと仕事しろ？」

香澄の声を聞きつけたクラスメイト達が、続々とキッチン裏へやつてくる。

キッチン裏といっても、そこまで広くはない。許容人数はだいたい三、四人程度だ。そんなところに五人も六人も入ってきたせいで人口密度はものすごいことに。てか女子しか入ってこないんだけど。なんだこの空間甘い匂いがする。あつ、やめろ佐倉さん、俺の背中を押すな。おたえとの密着度がもんのすごくなってるから、お願いやめて…！

「わわっ!! みんなストップストップ!! … あ、切れちゃった!」  
押し寄せた人混みに手元が狂い、香澄は山吹さんへの留守電を切つてしまったらしい。慌ててかけ直す。

「もしもし!! こっちは大丈夫っ! すごく楽しいよ! すごく、すごく、すつごく!! だからライブも頑張る! さーやに届くくらい、私頑張るからね! じゃあ海くんっ、何か一言!」

「俺? なんで俺?」

「だってさーやと同じ副委員じゃん!」

そう言われ、俺は香澄からスマホを渡される。

「ええ… え、つと。なんだろ。あー…」

咄嗟に言うことが浮かばない。こういう時、気の利いたセリフの一つや二つ出てくればいいんだけどなあ。

「まあ、なんだ。香澄はさつき『大成功』つつただけど、全然そんなことないからな?」

「ええ!? そんなことないよ! 大成功だった!」

「お前が皿割ったり注文取り間違えたり自分の足踏んづけてすっ転んだりドリンクを床や俺にぶちまけたりしなけりやな」

「うっ… あ、あははく！ …ごめんなさい」

シユンとする香澄に、口元を少し緩めて見せる。

全然冗談じゃないしミスはもつとたくさんしてたけど、そう落ち込むなつて。

「ま、そんな感じでき。明日もまた香澄がやらかすだろうから、明日は来てくれよ。香澄の面倒見てくれ。あ、それと今日俺と須田も香澄達のとあとにライブすつから、それもできれば見て欲しい。けどあんま無理はすんなよ。じゃ」

言うだけ言つて、俺は電話を切る。

切つた後で「私も沙綾に言いたいことあつたのに！」とか「山吹さん大丈夫かな？」とか「てか関口と須田もライブするつて初耳なんだけど」とか「海、あんまりくつつかれると嬉しいけど暑い」とか、周りの連中がうるさく言つてきた。知らん、早く俺を外に出せ。いろいろ限界が近いんじゃない。思春期男子なめんなよ。

……正直もうちよつとこのふにゆふにゆな感触に身を任せたい  
(健全男子の本音)

? ? ? ? ?

時間は過ぎ、現在俺と須田は体育館の袖裏にスタンバイしていた。

「うへえ… 緊張すんなあ」

そう言つて、手のひらに書いた『人』という文字を何度も飲み込む須田。よっぽど緊張してんだな、こいつ。

そんな俺たちの目線の先には、ポピパのメンバーが楽しそうに演奏している姿が。その中には、ドラムを叩く山吹さんの姿もある。

「… なんか、やっぱりつうかなんつうか、関口は余裕あるな」  
「は？」

香澄に絆されてほしいポピパのドラマーに就任した山吹さんに「俺の誘いは断つたくせに…」と少しばかり負の感情を込めた視線を

送っていると、須田がそんなことを言ってきた。

「いや、もう次は本番なのに、全然緊張してないし」

「んなわけねーだろ。めちゃくちやビビってるわ。見ろ、俺の手」

「うわ、すっげえ震えてる。プルプルじゃん」

「当たり前だろ。俺だって初ライブだ、緊張するに決まってる。」

まあ人前で楽器弾くのは初めてじゃないし、そりゃ須田よりちよつとは余裕あるかもしれないけど。人前つつつても家族とか友達の前だけで、こんな大勢の前で演奏したことなんてない。油断したら足も震え出しそうだ。

「けどま、ここまで来たらやるしかねえだろ。今朝の合わせは完璧だったんだ、なんとかなるさ」

テキストに須田の背中を叩き、緊張を解す<sup>ほぐ</sup>。

須田のだけではなく、俺の緊張もだ。

そんなことをしているうちにポピパの演奏が終わり、彼女達が俺たちのいる袖裏にやってきた。

「お疲れさん。ライブ、良かったぞ」

「海くん！ ありがとうっ！」

香澄が手のひらを向けてきたので、反射的にハイタッチをする。バチンっ、と乾いた音が嫌に響いた。

香澄に続いて袖裏に入ってきたポピパメンバーとそれぞれ一言とハイタッチを交わし、俺はギターとボードを持ってステージに向かう。

ステージの幕は下りている。オーディエンスの姿が見えないことは救いだが、ガヤガヤとした喧騒がやけに近く聞こえてくる。

淡い照明を頼りに、俺はマイクスタンドのあるステージの中央へと辿り着いた。マイクスタンドの下にボードを置き、次は左斜め後ろにあるギターアンプの元へ向かう。

シールドを繋ぎ、アンプの電源を入れ、ツマミを弄る。

今日のツマミはTREBLEが六、MIDDLEが七、BASSが六。Distortionを三ほどかける。

うん、こつちの音はいいな。あとは足<sup>エフエクター</sup>二元か。

「関口！ 音が出ねえんだけど!!」

「んあ？ …… お前それ、VOLUME上がってねえじゃん」

「？ あっ」

こりや相当緊張してんな、須田のやつ。大丈夫かよ。

まあ俺も人のこと言えねえけど。さつきから本当に指の震えが止まんねえんだわ。ソロちゃんも弾けつかな。

「じゃあ音出しお願いします。まずはギターから」

手をプラプラと揺らして震えを止めようとしていると、PAの人からそう指示された。

一度右手を大きく挙げて了承の意を伝え、テキストにリフを弾く。続いて須田の音出しも終わり、最後にドラムの打ち込みをチェックする。

ちなみにこの打ち込みは、おたえに教えてもらいながら一緒に作ったものだ。打ち込みなんて初めてやったけど案外楽しかったな。

すべての準備が整い、ようやく幕が上がる。

「… やべえ関口、俺逃げたい」

「ふざけろ」

客席から俺たちの膝下まで見えるまで幕が上がったところで、須田が震えた声でほざきだした。ここまで来て逃げられるわけねえだろ諦めろ。

今日やるのは二曲。いや、本気で百曲しても良かったんだけど、氷川さんに止められたんだよな。あと普通に俺も須田もキャパオーバーだし。あと九十八曲は後々、ということ。

とりあえず今日やるのは二曲、『ガソリン〇揺れかた』と『僕〇心を取り戻すために』、ということ。話はまとまった。

「んじゃ、やるぞ須田」

「うっ… お、おう！」

幕が上がりきる前に、俺は最初のリフをかき鳴らす。

セトリ… とは言ってもたった二曲だが、最初は『ガソ〇ンの揺れかた』から。そのあと軽くMCで自己紹介やらドラマー募集やらをして、二曲目を始める。そういう予定だ。

ガソリンはギターのソロから始まる。

ソロを十五秒くらい弾き、そこから歪みを踏むと同時にベースとドラムも乱入。ここで三つの楽器の音が合う瞬間が最高なんだわ。

さつきまであんだだけ震えてた手も、いざ始まってしまえばなんてことはない。楽しいだけだろこれめっちゃ楽しい。サビ入った楽しい。オーデイエンスが湧いた楽しい。ソロきためちゃんこ楽しい。

あゝ気持ちいいんじゃ〜（思考停止）  
ふへっ（絶頂）

? ? ? ? ?

パチパチと、木の燃える音が校庭に響く。

西の空はまだほんのりと明るいが、空には綺麗な三日月が浮かんでいた。

二日間に及ぶ文化祭も終わり、現在は最後の大会イベントが行われている。

沈んだ太陽よりも強い光を放つのは、校庭の真ん中にドーンと組み立てられたキャンプファイヤーだ。大きな炎を囲んでのフォークダンスなんてものをやっている。弦巻家のご令嬢の一声でここまでの準備がされたのかなとか。こんなの漫画の中だけのイベントだと思ってたよ。やっぱりすごいんだなく、あの子。

「それで〜? もうキャンプファイヤーも終わりに近いのに、私なんかと踊ってていいのかな?」

意地の悪い笑顔を浮かべて、私は私と踊っている男の子に問いかける。

彼は関口くん。私のクラスメイトで、ここ最近では文化祭実行副委員長として一緒に頑張った仲の男の子だ。

「いいよ、別に。ほかに踊る女子もいないし」

「む、その言い方はちよつとやだな〜。相手がいなかったから仕方なく私と踊ってるみたい」

「そんなんじゃないんだけど」

「ほんとに〜?」

「ほんとほんと。俺山吹さんとめっちゃ踊りたいわ〜」

いつものように軽口を言い合いながら、私達は拙いステップを踏む。

中等部にいた時は、まさかこんなに親しい男の子ができるなんて思ってもみなかった。高等部が共学になるっていうのは三年生の時に聞いてたけどね。あの時は別の女子校に転校するかちよつと悩んだな。羽丘女学院とか。

けど、今は共学になって良かったと思うこともたくさんある。

まあ、たまに男の子の視線が気になることもあるんだけど。

「実際さ、ほんとにいいの? 私と踊ってて。ほかに誘う女の子とかいないの?」

「ん〜。おたえや香澄とは踊ったし、奥沢さんともお嬢とも踊ったし。若宮さんや丸山さんは仕事あるつつって帰ったし、松原さんは見当たらねえし。〜」

「あ、あはは〜。結構女の子の名前出てくるな〜。〜」

「牛込さんはあつちでずっと須田と踊ってるし」

「え!? あつ、本当だ!」

へえ〜、りみも青春してるな〜。

「あ、じゃああの人は? 風紀委員の。〜」

「あー、氷川さん? そういや見てないな。委員の仕事でもあるんじゃない?」

「じゃあ図書委員の人!」

「白金さんもどこいるのか分からん。てかなんなのさつきから。俺とは踊りたくないの?」

「え? いや、そんなんじゃないんだけどさ? そのお。〜。ね? とても悪いとは思うんだけど。〜」

「?」  
不思議そうな顔を浮かべる関口くんに対し、私の顔はどこか申し訳なさそうなものになっているのが分かる。

「関口くん、好きな人いるって聞いてたからさ」



「は？ あ、もしかして氷川さんとのあれか。あれは誰かが勝手に流した根も葉もない噂で…」

「いや、須田くんが言ってたそれじゃなくて」

「は？」

え、なんか怒った？　なんで？

すっごい須田くんのほう睨み付けてるけど…。

「その…この前告白されてたの、偶然聞いちゃって」

「え？　あゝ…なるほどそういう…。あれ嘘だから。断るのにちようどいい言い訳だと思って」

「えっ、そうなの？」

本当にいると思ってた…。なんだ、嘘だったんだ。

「あんなとつさに言い訳思い浮かぶなんて、告白されるの慣れてるの？」

「んなわけねーじゃん。人生初だったわ」

「そうなの？　なんか意外。関口くんモテそうなのに」

「モテたい人生だった」

「彼女欲しいとか思わないの？」

「思う。すっげー思う」

「なら受ければ良かったのに、告白。あの子、中等部の時一緒のクラスだったけど、普通にいい子だよ」

「んー、誰でもいいわけじゃないんだよなあ」

炎に照らされた彼の横顔を見ながら、会話とダンスを続ける。

それにしても告白されたの人生初だったんだ。関口くん優しいし、顔も整ってるし、ギターもやってるからすごくモテそうなのに。

「そういう山吹さんは？　彼氏、作んねえの？」

「私？　欲しくないことはないけど、今はいいかな。家のこととかあるし」

「ほーん。もったいない。せっかく可愛いのに。優しいし家庭的だし、モテない要素がないんだが？」

「あはは。ありがとっ」

…顔が赤くなるのは炎の灯りで誤魔化せてるかな。

お世辞だつて分かつてるけど、いざ正面から言われるとやっぱ嬉しいし恥ずかしいね。

「ちなみに関口くんはどんな人が好みなの？ タイプとか」

「俺の？ んゝ… しっかりしてる人とかかな。あと本気で打ち込める趣味がある人」

「へえ」

「ま、月並みな言葉だと『惚れた人がタイプ』って感じだと思う」

「あ、それはあるかも」

「須田なんて最初会った頃はギャル系が好きとか言ってたくせに、今は牛込さん一筋だもんなあ」

「そうなんだ？ あの二人には今後も注目だよね。もしかしたらクラスで初のカップル誕生かも」

「いや、五十嵐と澤田さんが付き合ってるから初じゃないよ」

「うええ?!?!」

そんななんでもない… わけじゃないけど。最後だいぶ大事な話だったけど。まあそこそこの世間話をしながら、私達は踊り続ける。

男の子と手を繋いで、こんなシチュエーションで踊ってる。ロマンチックってほどじゃないけど、なんかこういうのすごく 『青春』

って感じ。

うん、お母さん達に言われた通り、来てよかったなあ、文化祭。

結局お母さんや純達は来れなかったけど、来年は来てもらいたい。来年は最初から『ポピパ』として参加して、お母さん達にも観てもらいたい。

夏希達に悪いと思う気持ちはまだある。けど、またバンド活動できるの、すっごく楽しみだなく!!

バンドマンはラーメン好きっていう偏見は間違っ  
てはいない

彼は不思議な男の子だ。

これを本人に言ったら「いや、お前にだけは絶対言われたくない」と  
心底嫌そうな顔で言われるけど。

「むう… むむう…」

「なあ、俺早く帰りたんだけど。いつも通ってるのに何をそんなに  
迷ってるんだよ」

「ヴァイツェンブロートにするか… カルトツオーネにするか…」

「うあい… かるつ…？ なんて？」

「もく。パンの名前一つ覚えられなくてどうするの？」

「ええ…」

困惑したような、呆れたような。

そんな顔をしながら、彼はスマホを取り出した。

「ヴァイツェンブロート… ドイツの小麦粉パン？ へえ。んじや、  
えと… カルトツオーネ…」

ぶつぶつ呟きながら、彼はパンを調べる。

こういうところだ、と思う。特に深い興味があるわけでもないの  
に、律儀にもあたしと話を合わせられるようにする。漫画だつてそう  
だ。あたしが勧めたものは必ず読んで感想を言ってくれる。パンも  
漫画も、あんまり話せる人がいないから、あたしにとってはすごく嬉  
しいことだ。

「ピザと同じ材料で作られるのが特徴… 三日月型のパン… へえ、  
美味しそうじゃん」

「そうなんだよ。むむむう… どっちも捨て難い…」

「いつも通り、欲しいのは全部買えばいいんじゃないの？」

「うーん。そうしたいのは山々なのですが、あたしってばドジっ子属性が付与されたみたいで…。実はお金が足りなくて一つしか買えないのだ」

「のだ、てお前。先週給料日だったんじゃねえのかよ。もう使い切ったのか?」

「ちつつちちち、甘いねえ、考えが。この薄皮こしあんパンより甘々」  
「あ?」

「おー、ちよつと怒った」。

「そのお給料をおろすのを忘れたんだなあ、これが」  
「あつそ」

ため息ついでに漏らした言葉を残し、彼はあたしから目をそらす。

あたしの代わりに彼の視界に入ったのは、カルツオーネだ。

「んじやこつちは俺が食う。ずっとパンの匂い嗅いでたから腹減ったし。半分やるからそつちの小麦粉パン半分くれ」

そう言った彼は、トングで三日月型のパンを掴み、袋に詰めてレジへと向かう。

慌ててあたしもパンを一つ取ってレジへと駆けた。種類はもちろん、ヴァイツェンブロート。

「いいの? パンより米派じゃなかったっけ?」

「ピザみたいなのを食いたい気分なんだよ」

レジで清算してくれた店長兼知り合いのお父さんに二人してペコリと頭を下げながら、あたし達はパン屋さんを後にした。

「ん。うめえ」

「でしよ? ふおつふおつふお、おぬしもパン派に目覚めたかね?」

「バカ野郎俺は生涯米派だ」

こんなやり取りをしながら、赤く彩られた商店街を二人で歩く。

彼は否定するけれど、彼は不思議な魅力で溢れている。

彼は、あたしや、あたし達の心を掴んで離さない、とても不思議な男の子だ。

? ? ? ? ?

「なあ関口、ちよつと今空いてるか」

「むあ?」

文化祭が終わって翌々日。

一日の振替休日を挟んだ今日、いつものメンバー（俺、須田、ポピパ五人）で飯を食っている最中。

香澄から死守したミートボールを頬張る俺に、一人の男子が話しかけてきた。茶髪のベリーショートで、しかもツーブロック。肌は小麦色に染まっており、加えてとてもガタイの良い男だ。

「まあ暇っちゃ暇だけど…どしたん」

ミートボールの代わりにアスパラガスのベーコン巻きを香澄の弁当箱に放り込み、代価として卵焼きを一切れ頂戴する。ほんのり甘くて好きなんだわ、香澄ん家の卵焼き。

「あ、香澄ずるい。私も海のベーコン巻き欲しい」

「じゃあおたえも代わりのおかず出して」

「んく…じゃあこのブロッコリーで」

「ふぎける。肉よこせ」

「こ、こいつら…あの伝説の『おかず交換』を易々と…!」

「あははく。有咲、私と何か交換する? 私ハンバーグ出すよ」

「! 沙綾のハンバーグ、私も欲しい」

「なっ…!? おたえは関口からベーコン巻き貰うだろ! ハンバ―

グは私が貰うからな!」

おたえの弁当箱から一口サイズにカットされたハムカツをかつきらいつつ、俺は再度隣に視線を向けた。

「で?」

「… お前の周りはいっつも賑やかだな」

俺に声をかけてきた男——五十嵐裕太は、苦笑いを浮かべながらそう言った。うるさくしてごめんて。

「いや、ちよつと話あってさ。須田にも」

「ん? おへ?」

箸先を咥えながら振り向いた須田は、不思議そうに五十嵐を見る。てかパン派の須田には珍しく今日は弁当なんだな。なんかピンクの弁当箱持ってるし。

「文化祭一日目のさ、お前らのライブのやつ。観たよ。高校の文化祭でブラ○キー選曲するあたり、お前ら本当に高校生か？　って思ったけど」

「あー… 選曲は終わったあとにちよつと気になったわ。あの中でブ○ンキー知ってるの、多分半分もいなかったよな」

「まあ少なくとも俺と関口は楽しかったしいだろ」

「それな」

盛り上がるに越したことはないけど、結局は自分達が楽しめるかどうかだろ。文化祭のライブとかなると特に。

つか五十嵐のやつ、んなこと言いに来たのか？　だったらいつも通りさっさと澤田さわださん（彼女）とイチャついて、どうぞ。

「彼女持ちは去れ。関口、テメエもだ」

「なんでだよ。五十嵐はともかくなんで俺も。つか今の今まで一緒に飯食ってたろ」

「ハンッ！　自分の胸に手え当てて考えろ！　同罪だクソ野郎！」

「え何怖。須田、お前急にどしたん…？」

「そんでこの前のライブでさー、お前らドラマー募集してたじゃん？」

「五十嵐は五十嵐でなんでど吹く風なんだお前」

「まーまー。それでさー、その話、俺に詳しくおせーて」

「よし来た！　まあ座れよ兄弟!!」

「ははっ、お前らのそういうところ好きだわ」

ドラマーが 仲間 になった ! (話を聞きにきただけ)

? ? ? ? ?

五日後。日曜日の昼。

外の蒸しつとした気温とはうって変わり、ここCIRCLE内のカフェスペースはとても快適な気温となっていた。嗚呼、エアコン…

文明の利器よ…俺アお前に一生着いてくぜ…。

「海兄〜！ 今夜りんりんとイベントクエスト回るんだけど、海兄も一緒にやろ〜！」

「んー？ おー、いいぞー。いつもの時間に噴水前な」

「やったー!!」

今日のRoseliaの練習も終わり、俺達はカフェスペースでゆっくりしていた。

今では見慣れてしまったこの光景も、最初の頃はなかなか人が集まらなかったものだ。主に友希那さんとか、氷川さんとか。俺？ リサさんの手作りお菓子が食えるので用事がない限り毎回参加してます（餌付け）

「そう言えば海。先週のライブ、素晴らしかったわ」

注文したブラックコーヒーに角砂糖をドバドバと入れながら、友希那さんがそう言う。いやだから、それ絶対体に悪いですって。大人しくココアでも頼んどいてください。

「私は風紀委員の仕事があつて見れていないのですが… そうなんですか？」

「うんっ☆ ライブ中の海くん、すっごくかっこよかったよ☆ それにあのベースの子、確か初心者って言ってたよね？」

「そうっすね。あいつ、まだベース始めて三ヶ月くらいなんすよ。スゴいっすよね〜」

先週の文化祭、氷川さん以外のメンバーは俺達のライブを見に来てくれていた。白金さんなんて人混みがあんなに苦手なのに来てくれて… 嬉しい限りだ。

友希那さんやリサさんの感想通り、俺も先週のライブは結構上手くいったと思っている。唯一選曲的なものをミスった気がしないでもないが、まあ知ってる人は知ってるからな、ブラ〇キー。

「それで、ドラマーの件だけけど… 見つかりそうなの？」  
心配そうに、というわけではなく。

ただただ疑問を持って、友希那さんが聞いてくる。

それに対し、俺は少しだけ口元を緩めた。

「それが見つかつたんすよ!! ドラマー! 今日これからそいつと須田... えと、ベースのやつがここに来て、初めての合わせしてみ予定で」

少し興奮していると自覚しつつ、それを抑えることなく友希那さんにぶつける。

「おー。海くん、いつになくテンション高いね☆」

俺の勢いに押され(引き)気味だった友希那さんに代わり、リサさんがそう返してきた。

いやだつて、むりやん? こんな抑えきれないやん? オラわくわくすつぞ案件っていうか?

「なんてつたつて初めてのバンドですからね。この前のは違って、全パート揃つての。そりゃテンションの一つや二つ上がるつてもんですつて」

「確かに、合わせつて楽しいもんね☆」

「? 海兄、そんなにバンドやりたかつたならあこに言つてくれれば良かったのに! あこ、ハードロックも叩けるよ! ツーバス踏めるし!」

「中学生でツーバス踏んでるの意味分かんないんだよなあ。あとね、あこちゃん。気持ちはすげー嬉しいんだけど、そうじゃないんだよ。ね。なんて言うかこう、『自分達のバンド感』つてのかな? なんかそういうのがいいんだよ」

「ふーん。分かんない!」

「そつかー」

そんなやりとりをしていると、ふいに俺のスマホが鳴った。

見れば、須田からのメッセージが画面に映し出されている。

誠『五十嵐と合流したから、今から一緒にCiRCLE向かうなー』  
誠『あと三十分くらい』

須田からのメッセージに『おけ』とだけ返してスマホを机に置く。

今から三十分だと、スタジオを予約した時間の十分前くらいか。バンドマンのくせにちゃんと時間が守れて偉いなあいつら(偏見)

「ねえねえ海くん。今日つて何時からスタジオ入るの?」



「だいたい四十分後くらいです」

「そっかー。アタシ今日バイト無くてさ、ちょこつとでいいから見学してみてもいい?」

「え? まあ俺はいつすけど」

「やたつ☆ みんなも見てかない? 紗夜はこの前見れてないし」

「... そうですね。私もこの後特に用事があるわけでもないですし、見させてもらおうかしら」

「はい!! あこもあこも! あこも海兄達のライブみる!!」

「ライブじゃないけどね」

その後結局Roselia全員が見学していくことになった。

けどまあ、丁度いいっちゃ丁度いい。俺がRoseliaの練習をみているように、第三者から見られることはそれだけで練習になる。多少は緊張感が嵩増しするからな。

それにRoseliaは技術的にはプロといっても過言じゃないレベルのバンドだ。そんな人達に見てもらえる機会なんてほとんどない。バンドは集団競技。いくら個人技がすごかろうが、それだけじゃ成り立たない。自分達では気付けないところも、第三者からなら良く見えたりするものだ。

「さて。んじゃ一回まりなさんに広めのスタジオ借りれないか相談を.....ん?」

よくお世話になるCiRCLEのスタッフ、まりなさんに相談しようとして席を立った俺を引き止める音が一つ。

さつき机に置いた俺のスマホが、再度鳴り出したのだ。しかも今回は単なるメッセージではない。電話だ。相手は.....ひまり?」

「もしもし?」

『あ、海? 今暇?』

「暇じゃない。じゃあな」

『待って! 待って!! あのさ、私達今日の夕方くらいからCiRCLEで練習しようと思ってるんだけど、よかったら海に練習見てほしいな〜って思ってる!』

「あ? あー、なら多分大丈夫。俺今CiRCLEいるし、夕方までに

は用事終わるから」

『あ、そうなんだ。Roseliaの練習とか?』

「うんにゃ? 俺のバンド練」

『行く!!!』

プツリ、と。そこで電話は切れてしまった。

なんだ、ひまりもくるのか? まあどつちにしろまりなさんに広めのスタジオ借りれますかって聞きに行かなきゃだけだな。

「まりなさん」

「あ、話聞こえてたよ。今店長に連絡したら、今日はライブ用のステージが空いてるから使っていいって! じゃあ私準備してくるね」

「?????」

なんかまりなさん、手を振りながらどつか行っただけど…えつと、つまり…何? どういうことですかね?

え? 話が早いなんてもんじゃなくない?? 当事者<sup>俺</sup>着いて行けてないんだけど???

? ? ? ? ?

「おい関口、どうしてこうなった」

「…さあ?」

「さあ、てお前」

それぞれの機材のチェックをしながら、須田が話しかけてくる。

須田の疑問も分かる。というか俺も現状に疑問しかない。というのも――

「わく! ライブだよ有咲っ、海くん達のライブ! 今日CiRCL E来て良かったね!」

「だああ!! 分かったからくつつくな! あちいんだよ!!」

「文化祭の時はあんまりちゃんと見れなかったからね。楽しみだなあ。あ、おたえカメラ持ってきたの?」

「うん。文化祭の時にお父さんから借りたカメラ、まだ返してなかつ

たから。ライブカメラマン…。ううん、カメラウーマンに私はなる」  
「カメラウーマン…。？」

「見て美咲！海がステージに立ってるわ！ほかの二人は誰かしら？」

「ベースの人は文化祭の時海と一緒にライブしてたでしょ。ドラムの人は知らないけど」

「五十嵐くんだよ！はぐみと同じクラスなんだよ！」

「良かったあ、海くん、ドラマー見つけられたんだあ…。」

「ふっ、儂い」

「裕ー！アタシが来てあげたわよー！」

わいわいがやがやどったんばったん。

いっぺんに喋んな誰が誰だか分からないだろ、いい加減にしろ(怒)

まりなさんのありがた迷惑気味の厚意でC i R C L E地下のステージを使えることになった俺たち。の前に集まるR o s e l i a、A f t e r g l o w、ポピパ、ハロハピ、澤田さん。

なんだなんだ、男女比おかしいぞどうなってんだ。オーディエンス女子しかいねえんだが。

「なんだかすげーことになってんな、関口、須田」

「ほんとだよ、どうしてこうなった」

「いやお前のせいだろ関口。ほとんどお前の知り合いじゃねえか」

「R o s e l i aとA f t e r g l o wは否定できない」

「五十嵐の彼女以外はお前でファイナルアンサーだわ、認めろ」

「牛込さんは須田目当てっていう可能性」

「ま?!?!」

「可能性つつつてんだろ落ち着け」

ステージの上でもわちやわちやしていると、なぜか照明が消えた。

そして真つ暗闇の中、突然俺にライトが当たる。なんでや。いや本当になんてや。

困惑しきって何も言わないでいる俺に、PA卓にいるまりなさんからカンペが出される。なにになに…。演奏あくしろ？何言ってるんだあの人。

「おい関口、なんか演奏しろって言われてんぞ」

「あの人ライブか何かと勘違いしてませんかねえ…」

ただの合わせなんだが。

何？ 初めての合わせで本番しろってこと？ スタジオミュージシャンかよ。

確かに今回合わせる予定の曲は先週俺と須田がやったブラン〇ーの二曲。普通より難易度は低いかもしれないけどさあ…。

「まーまー、やってみよーぜ二人とも。俺は完璧だからだいじょーぶ。美穂にいいところ見せなきゃだしな」

「爆ぜろリア充」

彼女に手を振る五十嵐に敵意を向ける須田。んー、なんだかんだで緊張とかはしてないっぽいんだよなー、こいつら。

まあいつか。用意されたもんは仕方がない。予定より少し…いやかなり多いけど、文化祭ほどじゃない。気楽にやろう。

「んじやまずは『ガソリン〇揺れ方』からやっか」

一旦観客のことは忘れて、須田と五十嵐と目を合わせてからそう言う。

須田は真顔で、五十嵐は口角を緩めて、二人とも頷いた。

文化祭では俺が取ったカウントを、今回は五十嵐がスティックを叩いて取る。そして――

？ ？ ？ ？ ？

海の… ううん、海たちの演奏はすごかった。

BLA〇KEY J〇T C〇TYはあたしも知ってる。というか、海が好きだって言うから聴いた。

だからこそ言える。先週文化祭のライブでは本家に忠実に、今回は独自のアレンジを加えてたけど、どっちもべらぼうに上手くて最高だと。

今も昔も、海はあたし達の憧れだ。

「今日のパンはく、あずきクリームコロツケく、スフォリアテツラく、クロナツツにく、それからあく…」

トングとトレイを持って、あたしは店内を徘徊する。

目当ての獲物を見つけては即座に狩る、あたしはまさにパンハンター。

「すふおり…なんて？」

「もく、スフォリアテツラだよ。イギリスのパンで、生地の中にはチーズやクリームが入ってる、すつごく美味しいパン」

「はええ…」

あたしの日課であるパンの買い食い&買い溜めに付き合っているのは、今日は海一人だけ。いつもは蘭たちもいるんだけど、今日はみんなそれぞれ用事があるって言って、練習が終わったらすぐに帰っていったしまった。

「おつ、カルツオーネ。これ美味しいだよな」

「あく、それも美味しいよね。そのパン、あたしが海に布教したパンじゃないっけ？」

「多分そうだろう。俺が山吹ベーカリーでパン買うようになったの自体がモカのせいだしな」

「えっへん」

こうして海と二人きりになるのは、そういえば随分と久しぶりな気がする。高校になってからは会う頻度そのものが減った気もするし。ま、海はあたしのバイト先のコンビニの常連さんだし、週に二回は会ってるけど。

「それにしても、良かったね、海。ちゃんとメンバーが集まってさ」

「バンドの話？ ああ、それはホントにな。一年くらいは軽く覚悟してたもん、俺」

まだ必要最低限の人数が集まっただけとはいえ、あれは立派なスリーピースバンドだった。ドラムやベースのことはあんまり詳しくは分かんないけど、ともちゃんやひーちゃんが言うには結構レベルが高いらしい。特にドラムの彼。名前は…なんだったかな。とにかく、ドラマーの彼のことは、あの場にいたドラマー全員が褒めてたし、相当上手いんだと思う。素人目にもすごいって思った…。素人目より

玄人目の方が絶対肥えてるじゃん？　なんで素人目？　って話、昔海としたっけなく。

「ん？　モカ、今日それだけでいいの？　いつもよりちよつと少なくてね？」

「ん、今日はお昼も買ってるから。控えめにね」

「え、昼も買ってたそれなら多すぎじゃね？　？　お前、高校になって食う量増えたか？」

「このカロリーは全部ひーちゃんに行くのだった…　頑張れひーちゃん、負けるなひーちゃん。キミの明日は輝いているぞ〜！　完」  
「終わらせんな」

実際、あの胸に行ってる説はあると思うんだよね。ひーちゃんつたら、ここ一年で急に大きくなってきちゃって…。海の視線も釘付けだもんね。

ちよつとだけ恨めしく思いながら、あたしは会計を済ませる。

おじさんからポイントカードにスタンプを押して貰って、あたしは店の外に出た。

外はもうすっかり暗くなって、空を見上げればぼつぼつと光の粒が散らばっている。

「最近日は長くなっただけど、さすがに八時回ると暗いな」

「だね。はむ」

早速、さつき買ったばかりのあずきクリームコロッケを頬張る。ん、サクサクあまく。

「そーいや俺花咲川らは来週から夏休み入るんだけど、お前羽丘らっていつから？」

「あたひたひもらいひゆうきやわ」

「まずは飲み込め」

「ふぁーい」

もぐもぐ、もぐもぐ、もぐもぐ、もぐもぐ、もぐもぐ、もぐもぐ。

「ごちそーさまんもす〜」

「…ホント、よくそれで晩飯が入るよな。胃袋どうなってんだ」

「ひーちゃんの体に転移しているのだよ。も、さつきも言った

じやくん。… あ、ひーちゃんで思い出した。ひーちゃん、今年もみんなで遊びに行きたいって言ってたよ？ 海も一緒にくって」

「聞いている。一応ひまりや巴とは休みが被るようにシフト出したから、モカと蘭がその日大丈夫なら行けんだろ。多分」

「そつかく。さてさて？ 今年は氷海かな？ 古跡かな？ 未知の樹海かな？」

「…もしかしてモン○ンの話してる？」

「アイ○ボーン、楽しみだね」

「俺がP○4持つてないの知つてて言ってるよな？ 喧嘩か？」

えへへ、と笑って誤魔化す。

高校生になってから、海と過ごす時間は確かに減った。けど、彼は何も変わらない。相も変わらずあたしを惹き付ける。むしろ会う時間が減った分、よりそれが強くなっている気がする。

つぐはよく、海のことを「お兄ちゃんみたい」っていう。あたしもそう思う。海といることで得られる安心感… 包容力、みたいなものがある。そういうところがおにーちゃんみたい。

でも、だからこそ。あたしは海の隣には立てない。

あたしの見えない場所に、海は立っている。あたしより速い速度で歩き続けている。一生懸命追いかけても、影すら掴めない。中学校の時にそれに気付いて、勝手に諦めた。

そこから少しだけ海との距離感が分かんなくなって、ちよつときこちなくなつた時。海から心配されて、全てを吐き出したことがある。

——— なんだそんなことか、と彼は笑い飛ばした。

『お前がどこにしようが、俺がどんなに速く歩こうが、そんなもんに何の意味もない。お前が俺を呼べばすぐに行く。俺が呼んだら来てくれよ。それが俺たちだろ』

くつさいセリフだと思う。海もそう思ったのか、言った直後に顔を真っ赤に染め上げてた。けど、その言葉はあたしを励ますには十分すぎるもので… まあ、俺たちっていうのは多分《あたしと海》じゃなく《あたしたちと海》って意味だと思うけど。

それはともかくとして。

あたしは海に追い付くことはない。そんなことをする必要はないんだと教えられたから。

あたしは海の隣には立たない。そんなことをしなくても繋がりは消えないと知ったから。

「ねえ海く。またさあ、昔みたいにあたしにギター教えてよう」

「お前十分上手いだろ」

「そんなことないもーん。今日もいっぱい失敗したし〜?」

こんな弱音を吐くのは、海にだけ。蘭に言えないことだって、海になら言える。あたしが心配をかけていいと思ってるひと。

彼は不思議な魅力で満ちている。

あたしが誰よりも惹かれた、あたしたちの一等星。



校長先生だって好きであんな長話をしてるわけじゃない

彼に対する評価は、危険な男。

「ちよつと彩ちゃん!!」

「ぴっ!? ひゃ、ひゃい! 千聖ちゃんごめん! 昨日の間食は出来心で別にいつもドーナツ四つも食べてるわけじゃないですからして!!」

「あ、いえその話じゃ…… ドーナツ四つ?」

「え? …… あっ」

「はあ…… まあそのお説教は後にするとして、今はこつちよ」

「うう…… あとから怒るんだあ……」

「昨日のSNSの投稿、あれはなに?」

「昨日? …… ああ! あれス〇バの新作だよ! 甘くて美味しかった!」

「そんな感想じゃ食レポは難しそうねってそうじゃなくて。アップされた写真と一緒に写ってたの、あれ男の子でしょう? どういうこと?」

「へ? あー、あの子海くんって言ってね? バイト先と学校の後輩で……」

「男の子、それも一般人と一緒にいるところをSNSにアップしない! 芸能人として常識でしょ!」

「げ、芸能人…… へへ」

「——彩ちゃん?」

「ぴっ!!」

パスパレのボーカル、丸山彩ちゃんと親しげな男。

これはスキヤンダルになり得る。危険。

「イヴちゃん。その髪飾り、先週SNSに載せていたものではないですか？  
すごく似合ってるわよ」

「本当ですか？　ありがとうございます、チサトさん！　実はこれ、私の誕生日にクラスメイトの方から頂いたものなんです！」

「あら、そうなの？」

「はい！　セキグチカイさんという、とても親切な方です！」

「…海？」

「今度の休みにはお洋服を一緒に買いに行く約束もしてるんです！」

「…デート？」

パスパレのキーボードリスト、若宮イヴちゃんとも親しげな男。

これもスキヤンダルになり得る。危険。

「ごめんなさいね、花音。昨日は急な仕事でカフェに行く約束を反故に  
にしてみました…」

「ううん、大丈夫だよ。元々私が行きたいって言い出したところだし、  
昨日は別の人に付き合ってもらえたし」

「そうなの？」

「うんっ。バイト先の後輩で… あっ、学校の後輩でもあるんだけど  
ね？　その男の子がちょうど暇してるって言ってたから」

「…　ちなみに、その子の名前は？」

「え？　関口くんっていうの。関口海くん」

「また…」

「あ、そういえば前千聖ちゃんに褒められた香りの香水ね？　あれ、関  
口くんに誕生日で貰ったやつなんだ」

香水をプレゼントする男の心理は『貴女を自分色に染めたい』、『貴  
女ももっと親しくなりたい』。

ただでさえパスパレ二人と親しいのに、ほかの女性にも手を出して  
いる。つまり女の敵。危険。

聞けば聞くほど危険度が増していく。

関口海。一学期は仕事が忙しくて会う機会に恵まれなかったけれど、今日、ようやく私と彼は顔を合わせる。

? ? ? ? ?

「——で、あるからしてえ。えー、皆さんには健やかなる生活と…」

古今東西共通、校長先生の長い長いお話。

要約すれば二分で終わるような内容の話が、かれこれ三十分続いている。長い。長すぎる。早く帰りたいんだ俺は。

今日は終業式。

わりと濃かった一学期が今日で終わり、明日からは待ちに待った夏休みが始まるうとしている。海に山にバンドに労働。やることは山積みだ。恋愛もしたい。彼女ほしい。

「というわけでして。ではみなさん、どうぞ後悔のない夏休みを」と、ここでようやく校長の話が終わる。

半分どころか八割以上聞いてなかったけど、どうせ言ってることは中学の時に聞いた校長の話と変わないだろ。規則は守れとか宿題しろよとかカブトムシの取り方とか。

その後は校歌斉唱、教頭による締め言葉とスムーズに進む。

教室へと戻り、担任から軽い注意喚起がされたのち、俺たちは夏休みへと突入した。

「海。今日この後暇?」

うきうきしながら帰りの支度をする俺に、そんな声がかかる。

顔を上げてみれば、おたえがギターを背負って立っていた。

「なんもないけど、どした?」

「私今日バイトあるんだけど、夕方からなんだ。それまで暇だから、どこかでお昼ついでに時間潰しに付き合ってくれない?」

「ん、いいよ。ちなみにバイト何時から?」

「五時」

言いながら、俺は荷物を詰め終えた鞆を担いで立ち上がる。

今日は須田も五十嵐も用事あるつつつてたし、今日は弁当も持ってきてないからな。

「そーいや香澄たちは？」

「別の用事あるって帰っちゃった」

「四人ともか」

「うん」

あー、そーいや山吹さんは家の手伝いがあるとか言ってたっけか。牛込さんは須田と喋っているとこ見たな。香澄はいつもわちゃわちゃあつちこつちしてるから分かんないけど。市ヶ谷さんは今日も振り回されてんのかなあ。

「海はお昼、何食べたい？」

「んー… 腹は減ってるけど、特にこれってのはないな。おたえは？」

「私？ 私は… パスタ食べたいかな」

「ハンバーグじゃないんだな」

「ハンバーグは朝食食べたから」

「朝からハンバーグ出るのかよ花園家」

昨日の夕飯の残りかな？

そんな他愛もないやりとりをしながら、俺とおたえはそれぞれの下駄箱の前で上履きと靴を履き替える。

さて。パスタが食べたいとなった学生が行く場所は限られてくる。

そこらの定食屋か、もしくはサ○ゼリア<sup>庶民派高級イタリアン</sup>。

サ○ゼのほうが安くつくかなと思いついたところで、俺の中に新たな選択肢が現れた。

「… そうだな。おたえ、俺のおすすめの店行くか？」

「海のおすすめ？ うん、行く」

二つ返事でOKを出したおたえへ俺は満足気な頷きを返し、俺は目的の地へと足を向けた。

と、いうわけで。

「おじさん、こんちやーっす」

ガラス張りの引き戸を開け、レジの前で何か作業をしていた男性に

挨拶をする。

「お、海くん。こんな時間に珍しいね。学校は？」

「今日終業式だったんすよ」

「ああ、なるほど。つぐみのところは確か明後日が終業式だったかな。海くんの学校の方が早いみたいだね」

そう言うって、男性——羽沢珈琲店の店長は柔らかい笑みを浮かべる。

俺のおすすめ、羽沢珈琲店。

だいたい午後二時をすぎると激混みするこの店だが、昼時はわりと空いている。今日も今日とて、近所の人が数組いるだけで、特に混んではない。

「俺、本日のランチセットで」

「私はたらこスパゲティ、大盛り」

席に案内された俺とおたえは、すぐに注文を済ませた。

ちなみに今日の『本日のランチセット』は厚切りナスのミートスパゲティにサラダ、コンソメスープが付いてくるらしい。ナス、美味しいよね。

「ここ、知り合いのお店？」

「幼馴染みのな。味は保証するぞ？　なんたって、もう十年は通ってるからな」

受験期にだって週一は絶対来てた。それくらいにはお気に入りのお店だ。

まあつぐみに数学教わりに来てたのが六割くらいだけど。

「あ、そういえば海。海におすすめされてたアーティストの曲、昨日聴いたんだ」

「お、マジかー。どうだった？」

「びつくりした」

「だろ？」

最近俺がおたえに勧めたのはBBOSというアイドルグループ。俺も姉ちゃんに教えてもらうまで知らなかった、メタル系スクリーミングアイドルとかいうジャンルに属するアーティストだ。姉ちゃん

から教えてもらった時は「えー？ ベビ○タみたいなもの？」とか思ってたけど、普通に女の子がデスボ出してるんだよな。かなりガチの。

「あれ、本当に女の子が歌ってるの？」

「マジで歌ってる。ライブ行って聴いてきたもん、俺」

「すごい。本当に好きなんだ。…ちなみに推しとかいるの？」

「エレク○ロソナー」

「？ そんな人いたっけ」

「ギターの人。マジで上手いし、八弦使うとかいうド変態ギタリストなんだよ。俺、八弦ギターとか初めてみたわ」

てか楽器隊が神すぎる。神。マジGOD（語彙力）

ドラムとギター（ソ○）はキバ○ブアキバというヲタイリツシユ・デス・ポップ・バンドに所属する変態たち（褒め言葉）。

ベースはどこから出てきたのか謎の巨体ベースストだ。この人がマジでデカイ。五弦ベースがちっちゃく見えるくらいにはデカイ。あと上手い。ただただシンプルに上手い。無名だったのが意味分らん。ほんと今までどこに隠れてたんだアンタ、ってレベル。

「いやそうじゃなくて、女の子の…え、嘘。八弦使ってるの？」

「この目で見た。リアルメタル」

「アイドルってなんだっけ？」

「歌って踊って農業する職業だろ」

ちなみに、女性陣の中で俺が推してるのは雲林院カ○ラです。高音デスボのお姉さん。

そんなことを話しているうちに、俺たちの前に料理が並ぶ。

つぐのお父さんの手料理はめっちゃくちゃ美味しい。高校時代は超実力主義の名門料理学校に通い、首席争いをしてきたとか何とか。学校の名前は…なんだっけ。確か月が入ってた気がする。

俺もおたえもうまうま言いながら飯を食っていると、チリンチリーン、と鐘の音が聞こえた。店の扉が開いた時に鳴る音だ。

まあ昼時だし、別の客が入ってくることもあるだろう。わざわざ確認するまでもない。

「この新作のレモンケーキがすつごく美味しくて……あれ？ 関口くん？」

「？ ふあ、ふあつふあふあふあん」

口いっぱいに放り込んでいたパスタを急いで飲み込み、紙ナプキンで軽く口周りを拭いてから、俺は改めて声をかけてきた人物に顔を向ける。

俺の目線の先には、二人の女子が立っていた。その片方が、俺に声をかけてきた人物、松原花音さん。バイト先と学校の先輩で、ハロハピのドラマー。

てかもう一人。サングラスしてるから分かりにくいけど、あの人もしかして……

「あ、この子だよ千聖ちゃん！ この前私の誕生日に香水くれた男子！」

「香水……？ 誕生日に……香水……？」

片や花が咲いたかのような笑顔の先輩、片や瞳のハイライトさんが職務放棄してるクラスメイト。いや後者は何があったんや。

そういや俺、松原さんの誕生日に香水あげたっけか。姉ちゃんが間違っ買って買ってきたやつが未開封のままリビングに置いてあったから、ちようどいいやつって思っ松原さんの誕プレにしたんだっけ。

てかさそれよりも。それよりもだ。

今松原さん、千聖” って言ったよな？

「……白鷺、千聖？」

俺の記憶を総洗い……するまでもなく、目の前の女子が誰なのか分かる。ぶつちやけ、関口家は全員白鷺千聖のファンなんだわ。じいちゃんとかばあちゃんもな。

白鷺千聖が花咲川にいるのは知っていた。一つ上の学年だということも。まあ人気若手女優ってこともあつて結構忙しいらしく、あんまり学校には来てないらしいけどな。わざわざ二年の教室に探しにいくなんてことはしなかったし、今まで直接会ったことはなかったんだけど……本物バリかわいいな。

名前を呼ばれた白鷺千聖本人は、一度松原さんをチラ見してから

ゆっくりとサングラスを取る。

「はいっ。はじめまして、白鷺千聖です」

かわい(放心)

? ? ? ? ?

お昼時。

今日は仕事もレッスンもお休みで、久々の一日オフ。学校も終業式だったから半日で終わってしまい、暇だったところを花音に誘われて商店街の喫茶店へと足を運んでいた。

そこで出会った、私をぼけっと見つめてきた年下の男の子。

花音が言うに、彼が噂の関口海だという。彩ちゃんのSNSの投稿にもギリギリ顔は写っていなかったし、顔を見るのは初めてだ…。確かに整った顔をしてるわね。

「レモンケーキも美味しいですけど、アサイーボウルが昨日から新メニューで出てるんすよ。俺的にはそっちもオススメです」

流れで一緒のテーブルにつくことになった私と花音に、彼はそう話しかけてきた。

アサイーボウル…。最近食べてないし少し食べたいけれど、今日は花音の進めてくれてるレモンケーキをいただく。

「改めまして、はじめまして、関口海くん。花音や彩ちゃんたちからたまに貴方の話を聞いていたから、一度会ってみたいと思ってたの」

私はレモンケーキ、花音はアサイーボウルを注文してから、改めて会話を始める。あとで花音にアサイーボウルを少しだけわけてもらおう。

というかごく自然な流れで同じテーブルにつくことになったけれど、なぜ一緒に座ってるのかしら？

「あー…。俺、丸山さんがSNSに載せる写真に何度か写ってるらしいっすね…。いや毎回やめろって言うてはいるんですが、あの自分分の欲に忠実なところあるんで…」

目の前の男は微妙に表情を固くして、バツの悪そうに頬を掻く。



そこで、彼の隣に座っていた女の子が口を開いた。

・・・ そういえば、この子は誰だろう。関口海の女の一人だろうか。きつとそうね。この女の敵め。

「海、Twitterとかイ○スタとかやってたっけ？」

「Twitterは昔アカウント作ったくらい。アプリ消しちゃったけど。イン○タはインスタールすらしてないな。使い方分かんないし、自分から発信するようなこともないしな」

「そうだったんだ？ よく海の写真がタイムラインに流れてくるから、てつきりやつてるんだと思ってた」

「確かに、関口くんの写真ってよくみるかも。香澄ちゃんとか、こころちゃんとか、よく載せてるよね？」

「俺はフリー素材とちゃうねんぞ」

呆れたような顔をしながら、関口海は自身のスマホを取り出してぼちぼちと弄りはじめた。なにか文字を入力しているようだけど、その手は少しだどたどしい。あまり慣れていないのだろうか？ 彩ちゃんの半分以下の速さだ。まあ彩ちゃんが速すぎるっていうのもあるけれど。

「えーっと・・・ あ、やべ。パスワード忘れた。おたえ、これどうすればいいの？」

「ここ押して、電話番号かメールアドレスで検索ってやればいいよ」  
「あざす・・・ お、なんかメールきた」

どうやらアプリを再インストールしたらしい。これを機に始めようと思ったのだろうか？

まあ今のご時世、SNSを活用していない人は少ない。自ら発信する人や、ただ眺めているだけの人。どちらにしても、SNSでは様々な情報が散乱しているため、やっているといないでは得られる情報量が天と地だ。情弱は死を意味すると言っても過言ではない。特に私たちの業界ではそれは顕著だろう。

などと考えていると、私の前にレモンケーキが静かに置かれた。そして花音の前にアサイーボウルが置かれる。

関口海が不慣れな感じでスマホを弄るのを横目に、私はレモンケー

キを一口いただく…。美味しい。それはもうびつくりするくらいに。なぜか服が破け散る幻覚が見えるほどに。美味しい。

「一応ログインできたけど…。これどうすんの？」

「とりあえず有名人のフォローとか？ あ、何人かはもうフォローしてるんだ」

「ああ、これ？ 幼馴染み。前にインスタールした時は全部そいつらがやってくれてさ。その時にされた」

「ふーん。あ、ちなみに今フォローしたの私だよ。『おたえ』ってやつ」「じゃあ私も、関口くんフォローしようかな。ID、教えて…。？」

わいわいきやつきや。

いかにも学生らしい光景が、目の前で織り成されている。別に羨ましいとかはない。私は白鷺千聖。自分から、彼らのような生活は捨てたのだから。

「関口くんからフォロー返ってきたよ！ よろしくね？」

「あ、はい。よろしくお願いします…。？」

「香澄たちのこともフォローしなよ。私のフォロー欄から探せるよ」「フォロー欄？」

「えつとね。私のプロフィール開いて、そこにフォローとかフォローワートか書いてあるところあるから、そこタップして」

「うん…。うん…。あ、これか。『K a s u m i ☆』ってやつ」

わいわいきやつきや。

「あ、これ、このアカウントお嬢のか」

「うんっ、こころちゃんだよ。それからこつちがはぐみちゃんで、こつちが美咲ちゃん。それからこれが薫くん」

「うわ、瀬田先輩のフォローワーの数えげつな。五万で」

「あはは。すごいよね、薫くん」

…。レモンケーキ、美味しかったわね。

「あ、そうだ、つと…。あつたあつた」

「？ 何か検索したの？」

「ん？ ちょっと白鷺千聖さんを。あ、態度出てたかもですけど、俺白鷺さんのファンなんすよ。いつもテレビ見えます。この前の演劇も

観に行きました。妹のマリー役、めちやくちや良かったです」

あら、そうだったの？

あの劇は私にとっても成長できたものだし、褒められて悪い気はないわね。

「ありがとうございます」

ファンに対して、白鷺<sup>私</sup>千聖は態度は崩さない。たとえそれが女の敵相手だとしても。

「そういえば関口くん。この前行った喫茶店、行き方覚えてたりする…？ 千聖ちゃんにも教えたいんだけど、私一人じゃ辿り着ける気がしなくて…」

「覚えてますよ。新宿まで行って、そこで乗り換えて三駅です。南口から出て、左に曲がって…」

「ふええ… わ、分からないよお…」

「あー… ちなみに白鷺さんは今の説明で分かります？」

「…ごめんなさい。私、どうしても乗り換えが苦手で…」

「二人とも今までよくこの大都会を生き延びてこられましたね？」

くっ、悔しい…！ いえ、私が乗り換えが苦手なのがいけないのだけれど…。しかもよりにもよって新宿駅！ 日本屈指のラビリンスじゃないの！！

「俺このあと時間ありますけど、松原さんと一緒に行っても多分覚えきれないでしょうし… あ、そうだ。この前丸山さんもあの喫茶店行きたいって言ってたんで、丸山さんに教えときましようか？ 明日シフト被ってますし」

「え、と… うん、じゃあお願いします…。ふええ、ごめんね関口くん、面倒かけちゃって…」

「お嬢が持つてくる面倒事に比べたら全然なんで大丈夫ですよ」

お嬢…？ って、ああ。弦巻さんのことね。花咲川<sup>ち</sup>で好き勝手やってる弦巻家のお嬢様。私も一度話しかけられたことがある。確か『あなたはどうかやったら笑顔になるの？』だったかしら。確か最近花音が組んだっていうバンドのリーダーよね。

「？ ねえ海、今から行けばいいんじゃないの？ 二人を連れて、その

喫茶店に」

「いや、ダメだろ普通に。松原さんだけならまだしも、白鷺さんと一緒はまずいって。相手は人気女優だぞ？ 写真でも取られたら終わる」  
女の子・・・花園さんっていったかしら。彼女の提案を、関口海は一蹴する。

なるほど、そこはちゃんと弁えてるのね。同性なら友人で終わるけれど、相手が異性だと雑誌なんかに好き勝手書かれてしまうこともある。ネタを欲しがった記者なんかに見つかったら、花音が写らないよな、いかにも私と関口海が二人で歩いているかのような写真を撮られるだろう。

芸能人のプライベートに同行することへの危機感。それが分かっているなら不用意に彩ちゃんとか出かけるなんてしないと思うけど・・・多分彩ちゃんが強引に引つ張り回してるわね、これ。

「あ、そうだおたえ。俺新しいエフェクター欲しくてさ。歪みなんだけど。これから楽器屋巡り付き合ってくんね？ バイトまでまだ時間あるつしょ？」

「うん、いいよ。私もシールド買おうと思ってたし」

「あぎ。それじゃあ松原さん、白鷺さん。俺たちお先に失礼しますね」  
自分達の分の伝票を持って、関口海と花園さんは席を立つ。

花音は少しだけ名残惜しそうに眉尻を下げたけれど、すぐに笑顔になって二人に手を振った。私も、いつもの笑顔を浮かべて軽く手を振る。

「・・・話に聞いてた通り、って感じだったわね、彼。想像通りではなかったけれど」

関口海たちが完全に店を出てから、私は呟いた。

ついでに店員さん呼び、紅茶を二つ注文する。

「関口くんはいい子だよ？ ところちゃんにも付き合える常識人だし、って美咲ちゃんも信頼してるし」

「弦巻さんのことはあまり分からないけど・・・そうね、悪い人間ではない気はするわ」

女の敵ではあるけど。

しかし、それも無自覚なのかもしれない。いわゆる天然ジゴロというやつだろうか。それなりのスペックを待っていて、周りから好意を寄せられるくせに、自分に自信がなくてその好意に気付かない、気付こうとしない。そんな部類の人間な気がする。

まあ、自覚があろうがなかろうが女の敵は女の敵。そこに変わりはないけれどね。

そのあとは花音による、関口海がいかに優しいか、みたいな話がされた。

アルバイト先で花音がミスした時にフォローしてくれたこと。道に迷った時にわざわざ隣町まで迎えにきてくれたこと。弦巻さんに振り回されている時にそれとなく手助けしてくれたこと。e t c .  
e t c .

いや花音、あなたそれただの惚気話よ？

そう言葉にはせず、私は黙って花音の話を聞いていた。ほぼ右から左だったけれど。

きつと関口海が誰にでも振り撒く優しさの一端なのだろうけれど、女の子がその優しさを受けたら大なり小なり思うところはあると思う。好意なのか、はたまた親愛なのか。そこはまた分かれそうだ。花音のそれも、今はどっちだと断言はできない。予想は容易いけど。

ま、確かに悪い人間ではないと思う。それが分かっただけでも、今日は収穫があった。

彩ちゃんやイヴちゃんには少しキツく言えば問題はないだろう。私の中での『関口海は危険な男』という評価は覆った。

その夜、彩ちゃんがSNSに載せた写真にまた関口海が写っていて、しかもなんか恋人用のストローがささったドリンクも写っていて、私の警戒度は元に戻るどころかそれ以上に跳ね上がることになる。

勘違いをしていること自体が勘違いだったりするこ  
ともある、稀にね

あいつは、人生で初めてできた異性の親しい友人だ…。と、思う。  
あいつがどう思ってるのか知らないから本当に友達なのかは分か  
ねーけど。

「うう… 宿題終わんないよお… 有咲く!!」

「うるさい。口じゃなくて手を動かせよな…。しよ、しよがねーか  
ら分かんないところは教えてやるよ」

「ホント!? ありがと有咲く!! じゃあこれとこれとこれと…。あと  
これも…。あ、こつちもお願ひ!」

「全部じゃねえか!!」

「だってえ…。分かんないんだもん…」

「あ… 関口、パス」

「いやなんで俺。まあいいけどさ。今俺おたえに教えてつから、香澄  
も一緒にやんぞ。あ、答えは教えねえからな。解き方だけ」

「えく!? うう… はあい…」

「有咲ちゃん、ここの問題が分かんないんだけど、教えてくれない?」  
「ん? ああ、そこは答えをxって仮定して二次方程式を使えばいけ  
んぞ」

「ありがと〜!」

「あー!! 有咲、りみりんには教えてる! ズルい!」

「うるっせえ!! あとでみてやつから自分でできるとこまで進めとけ  
!」

最近は見慣れてしまったこんな光景も、ほんの数ヶ月前までは想像

もできなかったものだ。

私の部屋で、私の友人と過ごす時間。

私が憧れていたものを引つ提げてやってきたのが戸山香澄。こいつのおかげで、私の周りは賑やかになった。そのせいで溜まるストレスも少なくはないけどな。

その中で出会った男子が、あいつ。

最初は急に他人ヒト人家チの蔵に入ってきてギター弾きだしたヤベー奴って認識だったけど、話してみると案外いい奴だっということが分かった。

そして何より常識がある。空を飛びたいとか言い出さないし、歯ギターも練習しないし、ライブ中にチョココロネを投げないし、スティック三刀流とか言い出さない。

私のストレスを軽減してくれる安定剤。それがあいつ。奥沢さんも似たようなこと言ってたな。

私にとって、あいつは必要な存在だ。

精神安定剤的な意味ももちろんあるけど、それ抜きでも、私はあいつと友達でありたいと思う。私にとっての大切な人の枠に入っているくらいだ。

最初に壁をぶち壊したのは香澄だけど、そのあとに私の手を引く張ってくれたうちの一人。

あんまり他人に好まれる性格じゃないのは自覚してるけど、そんなに嫌な顔もせず付き合ってくれるような、数少ない私の友達。

——…な、わけなんだが。

「おー、確かにこりや綺麗に見えるなあ、花火」

「どっ、どうでもいいから早く手え離せよな!？」

なんで私、こいつと二人つきりで花火なんか見てんだよ!？」

しかも手え繋いでるし! 手え繋いでるし!!

夏休み初日。

「ねえみんな！ 明後日この辺で花火大会あるんだって！ 知ってた!?!」

「「「知ってた」」」

「ええ!?!」

市ヶ谷家の蔵、その地下。

ポピパことPoppin Partyの練習場となつていているこの場所で、今日も今日とてポピパの面々は楽器を弾いたりお菓子を食べたり本を読んだりと好き勝手に過ごしていた。

いや、夏休みの宿題<sup>敵</sup>を早めに終わらせた<sup>敵</sup>いから手伝つてくれ<sup>敵</sup>って言われて俺今日ここに来たんだけど、さてはこいつら宿題する気ないな? ?

「んな驚くことでも騒ぐことでもねーだろ。毎年やってんだから、その花火大会。街中にそのポスター貼つてあるしな」

盆栽特集雑誌のページを捲りながら、市ヶ谷さんが興味の薄そうなテンションで言う。

確かに、毎年とは言わないけどほぼほぼ行つてたからな、その花火大会。こちら辺では一、二を争うデカイ花火大会だし。

でもそっかー。今年もそんな時期になったのかー。

「花火大会行こー！ みんなで!」

「やだよめんどくせえ。なんでわざわざあんな人混みに自分から入つてかなきやなんねーんだよ。花火見てんのか人見てんのか分かりやしねえ。私はパス」

面倒くさそうに右手をプラプラと振り、市ヶ谷さんは不参加の立ち位置を取る。

まあ確かに、市ヶ谷さんは花火大会とかそういうの苦手そうだな。な。

「やだ！ みんなと一緒に行きたい!」

「地団駄踏むな、子供かお前は。…いや。子供か、お前は」



呆れたような目を香澄に向ける市ヶ谷さんは、パタリと雑誌を閉じて机に置き、代わりに紅茶をその手に取る。

「だいたいなあ。今日だって宿題やろうつつって集まったんだろうが。それをお前、今日一問でも問題を解いたか？」

「ギクツ！」

自分でギクツとか言うやつ、この世に存在するんだな。

しかしまあ、香澄が宿題をするなんてありえない。しかも夏休み初日なんて、ほとんどのやつが宿題の存在を頭から弾き出しているものだろう。

「でも有咲だつて今日雑誌読んで紅茶飲んでるだけじゃん！ 宿題、やってないじゃん！」

「私はもう終わらせたし」

「えっ!? ほ、ほんとに...?」

「たりめーだ。嘘をつく意味もないしな。夏休みが始まったのは今日だけど、宿題自体は学祭終わりくらいから出てただろ」

ドヤ顔で鼻を鳴らしながら、市ヶ谷さんは今日五杯目の紅茶をカップに注ぐ。それにしてもめっちゃくちゃ飲むやん。

「海。ここの間奏の譜割、どうしよつか? 明らかにギター三本鳴ってるけど」

「んー... どっちかがコード、どっちかが目立つ方の単音弾くか。おたえどっち弾きたい?」

「私の方が単音慣れてるし、私そっち弾くよ」

「おけ」

おたえと軽い確認を取ってから、俺は譜面台に置いてある紙にコード名を書き込んでいく。多分これで合ってるはず。知らんけど。

俺とおたえがやっているのは、ヨル○カの曲の耳コピだ。

暇だったから俺がテキストに曲のコピーを始めたら、おたえも同じ曲をコピーし始めたから始まったこのセッション。別にどこかで披露するつもりは微塵もないけど、なかなか楽しいなこれ。いやめちゃうちゃうズいけど。n—b u ○ a は天才、はつきりわかんかね。

「おたえは?! おたえは花火行きたいよね!」

「ん？ 浴衣、着ていこうかな」

「いや行く気満々かよ!？」

気付けばポピパみんなで花火大会に行くことになったらしい。相変わらず仲良いなこいつら。

まあ俺はアフグロのメンバーと別日の花火大会に行く予定だし、明後日の花火大会の日は家でド〇クエでもしようかな。それに明後日は母さんも姉ちゃんも家にいないから一人を満喫したい。

家からでも花火の音は聞こえるから、それをBGMにひたすらレベル上げ。それもまたオツというもの。

つーかひと夏で二回も花火大会に行かなくていいだろ。疲れるわ。

「じゃあ明後日は海くん家の前にしゅーごーねっ!」

「はーい!」

「ん?」

ん?」

? ? ? ? ?

「かーいーくんっ! あっそびーましょっ!」

花火大会当日。夕方。

家でレベル上げてしたら家のインターホンが鳴り、出てみたら浴衣を着た香澄が玄関の前に満面の笑みを引っ提げて立っていた。うーん。やっぱ顔はいいんだよなこいつ。かわいい。じゃなくて。朝顔柄の入った赤い浴衣似合ってるな。いやそうでもなくて。

「…え、マジで来たの?」

今日は徹夜でレベル上げするつもり満々だったんだけど。

夜食に冷凍のチャーハンと餃子買ってるし、晩飯はピザ注文しようと思ってたんだけど。まじ?」

「まじだよ! 冗談だと思ってたの!？」

「いや、まあ、うん。ポピパだけで行くもんだと」

「そんな仲間外れみたいなことするわけないじゃん!」

仲間外れもなにも、俺ポピパのメンバーじゃないんだが (名推理)

てかあれから何も連絡なかったし、冗談か、あるいはその場のノリで言ったんだと思ってた。ほんとに来たんだあ。

「あー…ほかのメンツは？」

「ギーやが下にいるよー！」

「…おけ。香澄も下で待ってる。すぐ行く」

そうやって俺はとりあえず玄関の扉を閉める。

俺の自宅はマンションの七階の角部屋だ。下、つてことはエントランスかマンションの前で待ってるんだろう。夕方とは言え、この時期は普通に暑い。さっさと準備して下に降りつか。

冒険の書を書き、ゲームの電源を切り、ド○ノピザのチラシを片付け、『早く俺のレベルまで上がってこいよ』とプリントされた白Tシャツからマキシマム○ホルモンのバンTに着替え、髭を剃り、軽く髪を整え、鍵とスマホと財布だけ短パンのポケットに突っ込んで外へ出る。

この間、わずか五分。男の準備は楽でいいね。姉ちゃんなんて朝大卒に行くまでに一時間以上かかっているもんな。化粧とかヘアセットとか、本当に大変だな女の人は。いやヘアセットくらい男もするんだろうけど。

「お待ちせ」

エレベーターから降り、マンションから出ると、そこには浴衣女子が三人も立っていた。

右から香澄、山吹さん、牛込さん。香澄はさつき見たから知ってたけど、山吹さんや牛込さんも浴衣なのか。

向日葵柄のオレンジを基調とした浴衣の山吹さんに、金魚の絵が入った赤…ってよりピンク基調の浴衣の牛込さん。うーん、眼福。

「あ、関口くん。ごめんね、押しかける感じになっちゃって」

「まあ、お嬢とか香澄が絡んだらいつもだいたいこんなだし。慣れた」

「あはは、なんだか大変そうだね？ 目が遠いところ見てるよ」

いやあ、香澄のはまだマシなくらいだから。

俺、昨日の晩はニュージューランドにいたんだぜ？ ラグビーの試合

みて感化されたお嬢に拉<sup>つ</sup>致<sup>れ</sup>られてき。まあお嬢がすぐに飽きたから二十四時間以内に日本に帰ってきたけど。

日帰り海外旅行とか意味分かんねえよな。ははっ（死んだ目）

「気にすんな。それに今日は浴衣女子が見れたから。むしろプラスだよありがたいとごごいます」

「えへへ〜！ さーやが着付けてくれたんだよ！ どおどお？ 似合ってる？」

「んー、かわいいーよー」

「なんか心が籠<sup>こ</sup>つてない気がする!？」

いや、実際めっちゃめっちゃ似合ってると思うしかわいいけど、なんかクラスメイトの女子に面と向かってそんなこと言うの恥ずかしいじゃん？

「私達はどうか、関口くん。結構自信あるんだけど。ねえりみりん？」

「えっ？ あ、う… うう…」

恥ずかしがるりみりんかわ… え、今めっちゃくちや背筋凍ったんだけど。こんな蒸し暑いのに寒氣したんだけど。え、何。須田の殺氣か何か？ 嘘でしょ？

「お待たせ〜。… あ、みんな浴衣。良かったね有咲、二人だけじゃなかったよ」

「だなく。っーかおたえと会うまでめっちゃ恥ずかったんですけど… 一人で浴衣着て歩くのヤベエ…」

感想を言うことすら忘れて恐怖を感じていると、おたえと市ヶ谷さんの二人がカラコンコロんと下駄を鳴らしながら歩いてきた。

おたえと市ヶ谷さんも、ほかの三人と同じで浴衣を着ている。

おたえは紫陽花の柄が入った青基調の浴衣だ。ほかの三人に負けず劣らず顔が良いことに加え、おたえのサラサラとした黒髪は浴衣に良く映える。美人さんだな。中身アレだけど。

市ヶ谷さんは、なんか花の柄が入ってる紫の浴衣。なんの花だっけあれ。睡蓮？ ユリ？ なんかそんな感じのやつ。市ヶ谷さんはかわいっていうよりなんていうかこう… 色っぽいな。

「じゃあみんな揃ったし、花火大会にれっつごー!!」

「あつ、香澄あんま浴衣で走んなよっ!!」

「有咲も浴衣で走ったらいろいろ危な… あつ、有咲! 太もも!

太もも見えてるから!」

「え? ちよ、まつ!? みつ、見んな関口テメエ!!」

… とても、いいと思いました(合掌)

? ? ? ? ?

「うわー… 分かってたけど、人すげー!」

そんな辟易とした市ヶ谷さんの声が耳に届く。

花火大会に付き物の屋台。それが並ぶ通りに近付くにつれ、人の数も段々と増えてきた。

ちっちゃい頃に蘭たちと来た時はひまりがはぐれちゃって大変だったっけ。

「花火つてどこから上がるんだっけ?」

「えーっと、多分あっち。けどこっからじゃ見えないかもな」

「え!! 花火見れないの!! やだー!!」

「うっせえ耳元で叫ぶな!!」

そんないつも通りの仲良しを見せつける彼女たちの数歩後ろを、俺はタラタラと歩く。

「海。そんなに離れてるとはぐれるよ?」

「あー… 大丈夫大丈夫。それにほら、あんま横に並ぶとほかの人の迷惑になるじゃん?」

こちらに気を使ったおたえに軽く手を振り、一、二歩分だけ距離を詰める。

女子連中との距離にはちゃんと意味がある。ただ遅れてるだけとか、スマホ弄つてるとか、そんなちやちなことじゃあない。

いや、男女比一対五で歩くの普通に恥ずかしいよね(思春期)

「そんなに騒ぐな… ったく、仕方ねえなあ。あそこ行くか」

「? どこかい場所でも知ってるの? 有咲」

「まあな。着いてこいよ、案内してやつから」

蘭たちとはもう十年くらい一緒にいるし今更恥ずかしいとかはないんだけど、今日一緒に花火大会に来ているのは気心の知れた幼馴染みじゃない。ある程度仲がいいとはいえ、まだ付き合いの短いクラスメイトだ。しかもその五人の仲はめっちゃくちゃにいい。そんなグループがきやつきやしてる中に身一つで入っていく勇氣は俺にはない。

「あつ、屋台だ!! 私ちよつとかき氷買ってくるね! あ、あと焼きそばも食べないな。それから焼きイカと..」

「か、香澄ちゃん..! あんまり一人で離れたら.. うう、わつ、私ちよつと香澄ちゃんに着いていくね! あとで合流しよつ!」

「あつ、おい香澄! りみ! .. ったく、香澄のやつ..」

しかもこれが全員美少女ときたもんだ。緊張の一つだってする。いつも美少女に囲まれて行動してるハーレム漫画の主人公ってすげえんだなって思うよマジで。

ここは学校やスタジオじゃない、完全な非日常の空間。いつもと違う環境下で異性と過ごすのって結構恥ずいんだよなあ。なんだろコレ (思春期特有のアレ)

バンドやってる時とかほかに集中することがあるからいいんだけどなあ。それかあれだよ、せめて一対一とかならもう少しうまくやれてた気がする (フラグ)

「よーし、んじやここを右に.. ってあれ? おたえとさーやは?」

「... うえ?」

うえ? (回収)

★ ☆ ★ ☆ ★

「... うえ? .. あれ、なんで市ヶ谷さんしかいねーの?」

「質問に質問で返すなよ..」

慣れない人混みの中を必死こいて進んできて、ふと後ろをみたら、そこにいたのはどこかフラフラとした足取りの関口だけ。

「どうやら私たちはおたえやさーやはぐれてしまったらしい。いや、目的地を知ってるのは私だけだから、あっちがはぐれたのか？ まあどっちでもいいか。」

「関口、お前一番後ろにいたのにおたえたちとはぐれたの気付かなかったのかよ」

「んー、ちょっと考えごと？ とか、そんなことしてて… すまん」

申し訳なさそうに、関口は後頭部を搔く。

「いや、悪いのは関口じゃねーよな。悪いのは全部香澄だ。あのバカ、あんな人混みの中に入っただけでいつたらはぐれるに決まってるだろ。」「香澄たち、スマホ持ってきてねえの？」

「いや、持ってるはずだけど… あー、やっぱ繋がんねえなあ。祭りだし仕方ないか」

スマホの画面左上に表示された『圏外』という文字を忌々しく睨んでから、私はスマホをしまう。

ちくしょう、こんなことになるんだっけもったいぶらずに場所言つときや良かったかな…。はっ、後悔先に立たずってか。

「仕方ねえし、先に進もうぜ。市ヶ谷さんの言ってた秘密の場所、この先なんだろう？ もう少して火花が始まっちゃう」

「…まあ、それもそうだな」

おたえもさーやも進行方向は分かっているはずだから、もしかしたら例の場所で合流できるかもしれない。確率は限りなくゼロに近いが、この人混みの中で無闇に探し回るよりはマシだろう。

私は素直に関口に応え、人混みが進む方向とは逆方向に体を向ける。

と、その時。私の肩が男の人にぶつかった。

「わっ…！」

相手が男の人ってことと、振り返り際ということもあり、私が力負けて弾かれて後ろによろける。なんとか踏ん張ろうとしたが、足が上手く動かず立て直せない。

あー、慣れない下駄なんて履くから。

そんなことを思いながら、私はお尻や腰にくるであろう衝撃に耐え

るために歯を食いしばった。

……が、痛みがない。それどころか尻もちをついた感覚もない。何か背中を支えてくれてる……？ 帯越しだから感覚もはつきりしないけど。

ふと首だけで後ろを見た。するとそこには、私の唯一と言ってもいい男友達の妙にドアップな顔が。あ、右目にホクロあるんだこいつ……いやそうじゃない。

「すみませんっした〜」

私とぶつかった相手に軽く頭を下げ、何故か関口が謝罪する。

相手も特に何事もなかったらしく、同じように会釈して友達らしき奴らと一緒に去って行った。

「ほら、大丈夫か市ヶ谷さん。足挫いたりしてない？」

ぐつ、と背中を押されて、倒れかけていた体が元に戻る。

この状況になって、私はようやく現状を理解した。

倒れそうになった私を、関口が支えてくれたんだ。

「……だいじよぶ。ありがと……」

「そ、なら良かった。下駄って足首挫きやすそうだもんなく」

私の足元、多分下駄を見ながら、関口は言う。

そして顔を上げたかと思うと、数秒ほどキョロキョロと目線を漂わせたあと、恐る恐るといった感じで手を差し出してきた。

「あー、花火の時間近くなってきたて人も増えてるからさ。市ヶ谷さんが嫌じゃなきやでいいんだけど、その……俺たちまではぐれないようにさ」

どこことなく歯切れの悪い台詞だが、関口の言いたいことは分かる。

要するに、さつき香澄達がしていたように、手を繋ごうと言っているんだろう……。いやいやいやいや。え？ いくら友達だつっても手は繋がねえよな普通。相手男だし。うん、繋がらない。はず……だよな？ え？ 繋ぐもんなの？ わっかんねえよ普通の友好関係がよお……（元ボツチ） そういやさつきおたえは関口とも手え繋ごうとしてたような……繋ぐもん……なのか……？

一瞬とも言える間で、私の思考は駆け巡る。



そして弾き出された答えはと言えば……

「……人混み抜けるまでだかな」

関口の手を取る事だった。

「えっ」

なんでお前がちよつと驚くんだよ。

「人混み抜けたら繋いでる理由もないだろ！」

「あ、いや、そうなんだけどさ……いや、手、繋ぐんだと思って」

「……は？ いやいやいや、お前から手え出してきたんだろ？」

「いや、市ヶ谷さんの浴衣の裾でも握ってりやはぐれないかなって  
思って……」

「は？」

は？

「いやまあこつちの方がいいっちゃいいかもな。裾掴んでたらシワになるかもだし。ちよつと緊張すつけど」

こつちはちよつとどころじゃないんですケド。

てか恥つず。恥つつず!! めちやくちや恥ずいんですけどなに  
これ顔が熱いめつちや熱い。

いや勘違いすんだろ普通よオ!? それとも何か? 私が普通じゃ  
ないってか? バーカ!!!

「こ右に行けばいいんだよな……あ、ってことはもしかして、秘密  
の場所ってあの神社のこと？」

「そうだよバーカ!!! アホ!!」

「ええ……そんな急に罵られても……」

アホ! ボケ! ウストラトンカチ!

真っ赤に染め上がった顔で関口を睨みつけるも、関口は少し困惑す  
るだけで手は離そうとしない。

私の前に立ち、人混みをかき分けるように進んでいく。人の流れに  
逆らって進んでるから、そりや当然歩きにくい。が、関口が先行して  
くれているからさつきより全然歩きやすいし、人とぶつかることもな  
い…… 関口はさつきから結構ぶつかってたりするけどな。 いら  
ねー気回しやがって。

いろいろな感情を込めた目で繋がれた手とか関口の背中とかを見ていると、不意に大きな音が体を打つ。

腹の奥にまで届くような重低音。バスドラのそれと同じかそれ以上<sup>に</sup>重く、そして深く響いているように感じるこの音は、打ち上げられて破裂した花火の音だ。

「うわ、始まつちまつたな。まあ一時間くらいは打ち上げるらしいし……まだ間に合うか？」

花火を見上げつつ、関口が軽く憂いをこぼす。

確かに、この花火大会はここらで一位二位を争う規模の大会だ。だいたい六千発くらいは上がると思う。まだ香澄達と合流できるかもしれないという希望が潰えたわけではない。まあ、あいつらが私の秘密の場所〓神社だつて分かれればの話だけどな。普通に考えて厳しいだろう。

二発目、三発目、四発目と、次々に大輪が夜空を彩っていく。

本来運営側が想定していた〓花火をみる場所〓から離れているため、祭りのために用意された明かりはほとんど少なくなってきたのだが、花火の明かりのおかげで足元もよく見える。

「そーいや、あの花火が上がる時に聞こえる『びゅるるる〜』って音。あれつて花火玉が風を切つて出る音じゃないらしいね。昨日テレビで言つてた」

「あ、ああ。アレだろ？ 笛で鳴らしてるってやつ。親玉が開花する前に小花を開かせたり音を出させたりするために、本体と同時に打ち上げる付加物があるものを曲導きょくどうっていつて、その付加物のうちの上昇中に音を出すのを〓笛〓って呼んでんだ」

「へー。さすが市ヶ谷さん、なんでも知ってんね。ほかに何か花火のうんちくとかあんの？」

「え？ そうだなー……玉屋鍵屋の話とか？」

「あー、花火に向かつて叫ぶやつ？」

「それ。あれは昔、両国川開きで競つてた二人の花火師の名前なんだよ」

リアクションの良い関口に乗せられ、私の口数はどんどん増えてい

く。自分の知識を披露して、それに感心されれば悪い気はしない。

そんな風に多少気持ち良くなりつつ話を続けていた私達は、気付けば目的地である神社の鳥居を潜って境内へと辿り着いていた。

「ここからじゃ神社が邪魔になって花火がよく見えねえな。」

「ああ、だから裏に回るんだよ。座れる場所もあるし、小さいけど池もあるんだ。ザ・風流って感じだぞ?」

「そりゃ楽しみだ」

石畳の参道から外れ、敷き詰められた玉砂利に下駄を取られ苦労しながら歩く。

その間も花火は絶え間なく打ち上がり、ドンツ、ドンツ、という音を身体で感じることができる。なんだかんだ言いつつも、花火を見るのはそれなりに楽しみだった。香澄達がいらないのは少し、本当にすこしだけ不満だけど。

玉砂利から抜け出し、神社の横を歩き、私と関口は神社の裏へと辿り着く。

ふと、そこで気が付いたことが一つ。

…あれ? 手、繋いだままじゃね?

「おー、確かにこりや綺麗に見えるなあ、花火」

神社という遮蔽物がなくなったことで、花火の光が私達を照らす。

夜空の大華に見蕩れるこいつの顔を見て、私の心臓は飛び跳ねた。

「どっ、どうでもいいから早く手え離せよな!」

思わず、大きな声が出てしまう。

「? あっ、わり.:.！」

一瞬不思議そうな顔をした関口だったが、慌てて手を離して私から一歩分飛び退く。

いや飛び退く必要はなかったろ。別に近いままでも.:.ん? いや違う、違うぞ私!?! なんてちよつと名残惜しいとか思っちゃったんのか!?! 違うからな!?!

私も、そして多分関口も。なんだか急に気恥ずかしくなって互いに無言が続く。いや関口でめえ、お前が手え握って行こうつつつたんだろ。先に握ったのは私だけどき、お前が今更照れんな私まで恥ずくな

んじゃねえか!

無言の中で、身体の芯まで届くような花火の音だけが響く。

その音と同じくらい、私の心臓も脈打っていた。よく分からない気持ちの高まりから、視界がぐるぐるすると回る。

いや、分かっているんだ。これってアレだろ? 吊り橋理論ってやつだろ? 私は知ってるんだ。カナダの心理学者が提唱してる勘違い効果。心理学者の名前は忘れたけど。曰く緊張のドキドキと恋愛感情のドキドキを脳が誤認するとかなんとか。実験の内容は確か――

「――有咲」

「ひゃっ、ひゃい!」

突然かけられた声に、更に心臓が高鳴る。

周りは花火の音で煩いというのに、その透き通る高音の声は、大音量に掻き消されることなく私の耳に届く。

…ん? 有咲? 高音?

「有咲。有咲ってば」

私の顔を覗き込む、端正な顔。

サラサラな黒髪が風に靡くその姿は、女の私から見ても綺麗だと思うほど。

「…って、あれ? おたえ?」

「うん、そうだよ」

私の目の前にいたのは、男なんかじゃなかった。

どこかではぐれてしまったおたえが、何故か今私の目の前にいる。いや、おたえだけじゃない。隣ではさーやが関口と何か話している。

「有咲、大丈夫? なんかボーっとしてたけど」

「え? …あ、ああ、うん…? えと…いつからいた?」

「ん、本当に今さっき。名探偵沙綾の推理でここまで来たんだ。ぶい」  
「いや、なんでお前が誇らしげなんだよ…」

どうやら緊張で全然気付いていなかったらしい。

二人で手を繋いでるところは…見られてないよな?

その後、すぐに香澄達も神社へとやってきた。さーや曰く、私と香澄の考え方は似てるらしい。香澄と一緒にするのはやめてくれ。まじで。頼む。

まあなんだかんで最後は全員で集まれて良かったと思う。

今まではちよつと綺麗なうるさいものって認識だった花火も、みんなで見たらうるさいのなんて気にならないくらい楽しいものになった。これはみんなには秘密。バレたら恥ずいし。特に香澄には絶対バレたくねー。

それから…

「なあ関口。お前、氷川先輩と付き合ってるってマジなわけ？」

「は？ あー、確かそんな噂もあったな…。それ、須田が流した真つ赤な嘘だよ。俺と氷川さんは付き合っていない」

「ふーん。そっか」

「？ どしたの急に」

「なんでもねーよ。ばーか」

私のちよつとした心情の変化も、みんなにはまだ内緒だ。

ハッ〇ー!! ジャムツ! ジャムツ! 最高ウ!!!

彼と最初に出会ったのは、バイト先だった。

私が高校二年生になって間もない春。

「あつ、と……はじめまして。俺、一昨日からバイトで入りました、関口っていいいます」

私がバイトしているファーストフード店に出勤すると、初めて見る男の子にそう言われた。

背の高い男の子だ。大人しそうな雰囲気と喋り方だけど、それ故の威圧感っていうか……。なんとなく緊張してしまう感じがある。

「よ、よろしくお願いしますう……」

消え入りそうな声で、私は辛うじて返事をした。

私の数ある欠点の一つ、人見知りなところ。治さなきやと思ってるけど、そう簡単には治ってくれない。

「えと……松原さん? って、花咲川の生徒なんスか?」

「ふえ? そ、そうだけど……な、なんで分かったの……? それに名前とか……」

「いや、松原さんが店に入ってきた時に着てた制服、あれ花咲川のですよね? あと名前はフツーに名札見ただけっすけど。ほら、胸んところにある」

「え? ……あつ」

自分の名札を指差す関口君。それを見て、私の左胸にも同じデザインの名札があるの思い出した。

それに、今日は平日。さつきまで学校があつたから、今日は制服で出勤してきたんだつた。うう……お店に入ったところを見られてるんだつたら、何も無いところで転んじやつたのも見られてたのかなあ……。

「う、うん……私、花咲川の生徒だよ……。一年……じゃない、今年度

から二年生の」

「あ、じゃあ先輩っすね。俺、今年から花咲川に通うんすよ」

「そ、そうなの…？」

花咲川は今年から共学になって、一年生にたくさんの男の子が入ってきた。

風紀委員の紗夜ちゃんが入学式から素行の悪そうな子を見つけたって言ってたけど、男の子ってやっぱり怖い人が多いのかなあ…。この子は普通だといいなあ。

「まだ入学してからそんなに経ってないのに、もうバイト始めるなんて偉いね…？」

「まあ、ちよつと欲しいものがあって。あとバイトってちよつと憧れてたんですよね。なんかこう、学生っぽくて楽しそうじゃないっすか」

楽しそう、かあ。

そういえば昨日、楽しいことを探してるって子に会ったっけ。名前は…。えと、確か弦巻さん。会ったって言っても、二年の教室がある階まで来て、バク転とかしながらどっか行っちゃったのを見かけたんだけど…。嵐みたいだったなあ。あの子も関口君と同じ一年生だよね。

「あ、いらっしやっさせ〜」

昨日のことをぼんやり思い出してたら、お客さんがお店に入ってきた。私より先に気付いた関口君が挨拶をする。ちよつと言葉は崩れてるけど。

そのお客さんは、スマホを弄ったまま関口君のいるレジに行く。

一昨日始めたばかりでまだ慣れてないかな…と少し心配だったけど、彼は特に緊張する様子もなくオーダーを取っていた。お客さんから見えない位置に置いてるマニュアルをチラチラ見てはいるけど…。すごいなあ。私が始めたばかりの頃はすっごく緊張しちゃって、接客どころじゃなかったのに…。

…。あつ、あの手書きのマニュアル、私が彩ちゃんから貰ったのと同じやつだ。

★ ☆ ★ ☆ ★

夏。

たった一週間の命を燃やしながら精一杯鳴くセミに感動していた幼い頃とは違い、今ではミンミンビリビリと鳴き声が耳にまとわりついてただただ鬱陶しい。そもそもあいつら一ヶ月くらいは余裕で生きるらしいじゃん。詐欺だよ詐欺。

まあ、それはともかく。

夏といえやはり海だ。とにかく海だ。俺の名前海じゃなくて海オーシャンな。

どこまでも青く澄み渡り、太陽に照らされてキラキラと光り輝くコバルトブルー。白ペンキで雑に塗られたような雲を見上げながら、靡く風に潮を感じる。なんとも心安らぐ光景だろう。海行きてえ。

——『海に行きたい』、そうT w i ○ t e rで呟いてしまったのが悪かったのだろう。

「うーん!! 潮風が気持ちいいわね、海! 船旅かいって素敵だわ!

あ、目的の島まではあと一時間くらいって、黒服の人達が言ってたわよ!」

誰も沖に出たいとは言ってねえよ (憤慨)

? ? ? ? ?

「うわあ...! 見て見て、かもめさんよ!」

「ホントだ、おつきー! かもめさんってコロツケ食べるかなあ?」

「フツ——目が回る」

「船に酔ったんですね薫さん。あいや、自分には常に酔ってますけど」  
「でも、この辺の海、本当に綺麗だよね...! それにさつきすごくおつきなクラゲも泳いでたんだよっ! あれ、エチゼンクラゲかなあ...」



というわけで海である。  
念願とは違うが海である。  
は？（は？）

俺達は現在、豪華客船もかくやというレベルの大船で真っ青な海の上を突き進んでいた。

東シナ海だか太平洋だかは知らないが、中学の時に修学旅行で行った沖縄と同じくらい海が透き通ってる。きれーい。

今回俺がこんな意味の分からん状況に立たされているのも、例に漏れずお嬢が原因だ。端的に言ってこれ拉致だよ拉致。事件性MAX。助けて国家権力。

日も昇りきらない午前中。どこで知ったか、我が家に突撃してきたお嬢さんの言うことによ、

『海！ ハピハピ島に行くわよ！』

『……なんて？』

『船で行くわ！ あなた、海に行きたいって言ってたからちようどいいと思うのー！』

『待って。待って』

『着替えとかは黒服の人達が用意してくれるわ！ さあ行くわよ！』

『待ってって言ってんだろ!! あっ、こらてめ……っ、ズボンを引っ張るな脱げるから!! たっ、助けてお母さん!!!』

そんな光景を見た我がお母上の言うことによ、

『なあに？ 旅行？ いいじゃない、行ってきなさいよ。希のぞみ（海の姉）

もサークルの合宿で今週はいないし、今日は久しぶりに宅飲みでもしようかね？ 麗花がこの前成人したし、Luxury呼ぶか……

あっ、でも湊たち呼ぶのもいいわね』

『ガツデム!!』

——ということである。ハピハピ島ってなんだよ、幸せそうだなこの野郎。

どうせあれだろ？ 弦巻家が一枚噛んでんだろ？ そんであれだ、弦巻家が持つてる南の島の地図とか見つけて、なんか変なこと思いついたお嬢がこんにちは幸せな世界〜ってやってんだろ？ 俺は知ってるんだ（白目）

「あつ！ みんな見て！ 島が見えたわ！ きつと、あれがハピハピ島よ！」

「ホントだ〜！ あの島のどこかに海賊の宝があるんだねっ！ はぐみ、冒険するのすっごく楽しみ！」

海賊の宝で。

「嗚呼、嗚呼… 世界が、廻る…」

「薫さん、吐く時はトイレで吐いてね。それか海。甲板はやめて、掃除とかめんどくさいから」

奥沢さん無慈悲すぎワロタ。

「あつ、クラゲだけじゃなくてウミガメも泳いでるよ、海くん。なんだか南の島って感じでとつても… ああ!?! ウミガメがクラゲ食べちゃった!?!」

「ウミガメってハブクラゲの毒も効かないらしいっすね〜」

ウミガメ、恐ろしい子。

とまあこんな感じで、なんだかんだお嬢の奇行に慣れてしまった俺は全てを諦めて南の島のプチ旅行を楽しむことにした。人生楽しまなきゃ損だよな。

栈橋に着岸した船から降り、そこらの風景をスマホを取り出してパシヤリと一枚。んー、実物ほどじゃないけどなかなか綺麗。Twitterにでも貼つとこ… 丸山さん、毎回いいね付けんの爆速すぎない？ てか芸能人が公式アカウントで一般人のツイート毎回いいねして大丈夫なの？

「フツ！ 降り注ぐ太陽が夢い！」

「うわ復活はやっ」

陸に降りた瞬間にグロッキーから蘇った瀬田先輩が、いつになく元気に夢いって言ってる。瀬田先輩の夢いってあれだよな、古文でいう

“をかし”。

まあ今はそんなことどうでもいい。

「で、俺はなんでこの…ハピハピ島？ に連れてこられたの。何も聞かされてないんだけど」

楽しむのは楽しむが、とりあえずこの疑問は解決しとかなくちやいけない。いやさつき海賊の宝とか言ってたな…え、マジ？

「宝物を見つげに、冒険するためにきたのよ!!」

「マジかあ…」

今何世紀だよ。

ハピハピ島って名前からして確実に弦巻家が絡んでるだろうし、黒服さん達が慌ててないところを見るに島自体は安全なんだろうけどさ。お宝を求めて島を冒険してお前。どこのパイレーツだよ。

「そんで？ 何を根拠に海賊の宝？」

「これよー」

自信満々の表情で、お嬢が古びた地図を差し出して来る。うーん、羊皮紙の地図かあ…。雰囲気あるなあ。

えっと…『ハピハピ島の奥深く。闇の広間の先、おそろしトンネルの向こう、地の底へ続く坂を抜けた場所。我らの宝、そこに眠る』？ このガイコツっぽいマークがあるところが宝がある場所ってこと？

そんな映画みたいなことある？

「さあ！ 早速冒険に行ってみましょう！」

「おー!!」

元気いっぱい、三馬鹿の皆さんが駆け出す。

荷物とかは全部黒服さん達が弦巻家の別荘に運んどいてくれるらしい。いや別荘あるんかい。てか俺何も持ってこれないんだけど。着替え用意するとか言ってたし泊まり込み確定なの…？

「…奥沢さん。俺帰りたい」

「ははは。逃がさないよ。旅は道連れって言うじゃん？」

「それ絶対道連れの意味違うじゃん？」

「あはは…でも、南の島に来れたのは良かったよね…？」

三馬鹿から少し遅れて、奥沢さんや松原さんと一緒に俺も歩き出し

た。

「まあ先週ニュージーランド行つたばつかですけどね、俺達」

「そう考えると、あたし達つてフツ軽すぎだよ」

「フツ軽つてレベル超えてっけどな」

海外だからな、一般家庭の高校生が思い立って行ける場所じゃねえよ。

「ニュージーランドも楽しかったよね。テカポ湖でみた夜空、すつごく綺麗だったなあ…」

「あー、あれはすごかったですね。満天の星つてあたし初めて見ましたもん。関口くんはラグビー頑張つてたよね」

「お嬢とはぐみに半強制的にやらされたんだけど、思つてたより楽しかったな」

気になつたのは、俺達にラグビー教えてくれてたおじさん。あの人、ちよつと前にニュースで見た気がするんだよなあ。ラグビーニュージーランド代表のコーチとか言つてたような…。

知らないうちにとんでもない経験をしてたんじやないかと改めて震えていると、前を歩いてたお嬢がこちらへ振り返つた。

「ねえ、あなた達は、海賊の宝物つてなんだと思う？ あたしは楽しいものだと思うの！ ピカピカのドングリとか、いい匂いのタオルとか… 美味しいお菓子だったりしたら嬉しいわねっ！」

「海賊つて知つてっか」

「ここらの海賊へのイメージつてどうなつてんの…。金銀財宝とかでしょ、普通に考えて」

「うーん…。確かにピカピカしてるけど、あんまり面白くないわね」  
「悪かつたね、夢がなくて」

お嬢らしいと言えらばらしい宝物像や奥沢さんの現実的な宝物像を聞き、俺も少しだけ考える。

「…ここまでの冒険と、共に旅をした仲間達こそが宝だ」

「うわ、それなんてワン〇ース？」

引き笑いを浮かべた奥沢さんのツツコミを受け、何となく首筋に手を置く。

…わりと好きなんだけどな、そこまでの冒険云々。

とまあ、現実逃避も含めた雑談をしつつ歩くこと十数分。

高級リゾート地もかくやというレベルの景色が続く中で唐突に現れた手付かずっぽい洞窟の前に、俺達は立っていた。

…洞窟。洞窟かあ。

「おれかえる」

「ど、どうしたの海くん!？」

「関口くん、顔色悪いけど…大丈夫?」

バカ野郎お前大丈夫なわけあるかよお前。

何を隠そう…いや恥ずかしいからできれば全力で隠したいところ

だけど、俺暗くて狭い場所ダメなんだわ。

「きつとこの先に海賊の宝物があるのね!」

「わーい! 冒険だ〜!」

「冒険に危険は付き物だ。スリルがあるほど、冒険の価値は上がるものさ」

と、無邪気にはしゃぎながら洞窟の中へと消えていく三馬鹿…まじ? 怖くないん? 俺は怖い。めちやくちや怖い。幽霊とか出そうじゃん。あんま幽霊舐めんなよ、あいつら物理効かないんだからな(戦う意思)

「あつ、コラ待て三馬鹿! ああもう! 関口くん、なんかいつものノリでここまで着いてきてもらったけど、調子悪いなら別荘に戻ってて!」

そう言い残し、奥沢さんも洞窟の中へ消えていく。

騒々しい三人とその保護者がいなくなったことで、この島にきてからは初めてとなる静寂が訪れた。波の音。風の音。不思議なほどに澄んで聞こえるそれらが、今は虚しく聞こえる。

残された松原さんと二人、互いに青くなつた顔を見合わせ――

「海くん…別荘の場所…知ってる…?」

「…知らねっす」

大人しく覚悟を決めた。

私達が洞窟に入ってから、だいたい三十分くらいが過ぎた。

いかにも何か出てきそうな雰囲気、海くんはさつきからキヨロキヨロと怯えた様子で周りを見渡している。そういう私も、さつきからびくびくしつ放しだけど。

「ん？ 今、何か影が動かなかったかい？」

「やめて瀬田先輩そういうのまじやめてはっ倒すぞ」

「はった…!! き、急に物騒なことを言い出すじゃないか… いや、でも確かにその壁に… うわああ!!」

「どーしたの薰くん… って何あれ!? か、壁一面コウモリ!?」

「あら、ホントだわ。あつ、見て！ 天井にもあんなにたくさん！」

「って悠長に言ってる場合か!! うわこっち来たあ!!」

「や、やっとコウモリも落ち着いたみたい…」

「きつと、急に照らしちゃってびっくりさせちゃったんだよ…。ごめんね、コウモリさん…」

「コウモリさん達と遊べて楽しかったわね！ … あら、海はどこかしら？」

「かっちゃんなら薰くんが叫んだ時からそこで寝てるよ」

「いやそれ気絶してるよね!! 関口くん大丈夫!!」

「ふええ!! お、お水…！」

「ん？ 今あっちから変な低い声みたいなのが聞こえなかったかい…？」

「マジでやめろってんですよしまいにやしばきますよ瀬田先輩この野郎」

「ぴあえ!? す、すまない…」

「き、きつと風の音が反響してるんだよ…！」

「そうなの？ なーんだ、幽霊さんとかドラゴンさんがいるかと思っ

たのに」

「いや幽霊はともかくドラゴンで…。今何世紀だと思ってるの、こころ」

「？ 二十一世紀よ？」

「あーそうですかそこでキョトンとしてきますかそーですか」

「あら？ 行き止まりみたいね…。？ この窪み、何か変——」

「ふえ!? ここ、こころちゃんが消えた…!?」

「ほら見ろ！ 霊を舐めたからだ!! …… え、お嬢マジでどこ行った？」

「うっそホントに幽霊？」

「ゆーれーさんっ！ 出っておいで〜！」

「おいゴラ瀬田ゴラア!! あと北沢お前も黙ってろダアホ!!!」

「こらこら関口くん。口が悪い」

「あつ。ねえみんな、ここの窪みなんかちよつとへん——」

「ふええええ!? は、はぐみちゃんも消えたよお!!」

「北沢ああ!! おつ、おまつ、お前が霊なんか呼ぶからだぞバカ!! 悪

霊退散南無阿弥陀仏色即是空ウ!!」

「… いやこれ落とし穴でしょ、どう考えても」

「見て！ きつと、この化石が海賊の宝物なのよ！」

「いや、もう海賊関係ない気がするけど…」

「でも、あの地図にあったのはこれのことだよね…。あつ、みんなあつち、あつち見て！ 茂みみたいになつてるとこ、光が漏れてる…!」

「ふむ、本当だね。どれ、ここはどんな場所に繋がっているのか——おや？ 何か白い建物があるが…」

「あら？ あたしの家の別荘じゃない！ 久しぶりに見たわ！」

「へえ〜！ ここ、こころんちの別荘の裏手と繋がってたんだ〜」

「いやここから入ればあんな危ない目に遭わなくても良かったんじゃない!! 花音さんも関口くんも苦手なの我慢して進んできたのに！」

「やっぱ俺が最初に言った〝ここまでの冒険と仲間達が宝だ〟的なアレじゃないですかヤダー!!」

「あはは… 冒険、大変だったね…?」

とまあ、数時間に及ぶ私達の冒険はこうして幕を閉じました。

「それにしても意外だったなあ。海くんが暗いところ… っていうか幽霊? そういうのが苦手なのって」

冒険も終わり、こころちやんの別荘で早めの夕飯を食べたあと。

水平線に沈む夕日をぼんやり眺めながら、私と彼はベランダのベンチに並んで座っていた。

「そっすか? いやあ、昔っからそういうのは全然ダメで…」

本当は私の方が年上なんだけど、たまに彼の方が年上に見えることもあった。そんな彼の新たな一面を知れて、ちよつと嬉しく思ってる自分がいる。

「しっかし、ほんとに綺麗な海うみつすね。あと二日くらいは滞在するらしいし、明日こそは海水浴しよ」

「海くん、海うみ行きたがってたもんね? 私ももう一回、船から見えたあのおつきなクラゲ見に行きたいなあ。ウミガメに食べられる前に」

「ウミガメも進んでクラゲ乱獲はしらないと思いますけど… でもシユノーケルとかいいつすね。多分道具一式借りれると思うんで、明日ちよつとやりませんか? シユノーケル。あ、いやでもダイビング体験みたいなのもやってたような… そつちも捨てがたい…」

顎に手をやって真剣に悩む彼の横顔を見て、くすりと笑みがこぼれる。

「どつちも楽しそうだよね。そういうえば、バナナボートもやってるみたいだよ?」

「バナナボート! 一回乗ってみたかったんすよね、それ! 乗りま



しようめちやくちや乗りましよう!!」

キラキラに瞳を輝かせる彼は、私達のバイト先でセットのおもちやを選んでる時の子供のそれと同じ表情だ。あんまりにも無邪気に笑うものだから、ちよつとドキツとしちゃった。

普段は大人びてる彼だけど、たまにこういう子供っぽい表情もするんだよね。そういうところもかわいい。

私の日常は、とある春の日を境に崩れ去った。

けどそれは、何も悪いことなんかじゃない。怖いことや恥ずかしいことはたくさんあるけど、それ以上に世界が色鮮やかになった。

その彩りの中に、彼はいる。こころちゃんが太陽だとしたら、彼は空。ふふつ、海なのに空だ。

でもそれくらい、彼は澄んでいる。全てを受け入れるかのように、優しく包み込むように。海うみよりも広くて、もつともつと深い。そんなイメージ。普段は大人びてるのに、興味のあること——特に音楽とか——になるとコロコロ表情が変わるのも、なんだか空っぽいかも。

「うんっ、いいよ、全部やろう?」

「マジすか? 時間足りっかなあ...」

「足りなかったらこころちゃんに相談してみよ? 夏休みだし、一日くらい帰るのが遅れても大丈夫だよ、きつと」

彼が相手だから、私はこんなわがままも言っちゃうのかもしれない。昔だったらこんな事わがまま、絶対言わなかっただろうなあ。

私の非日常な日常は、これからも続いていくんだろう。

文字通りワールドワイドなこころちゃんと一緒にいるんだから、きつと私の想像なんて軽く超えるはずだ。

でもそれは、決して嫌なことじゃない。怖いけど、すごく怖いけど。でもその先にはきつと、たくさんのワクワクが待っている。弦巻ころつていう太陽が導く道は、光に満ちているんだろう。

それに、多分だけど。そこには彼もいてくれる気がする。太陽が昇るには、空が必要だから。

それ以上に、これは私のわがままな願望だ。

私は彼にいて欲しい。隣で私を見ていて欲しい。隣で彼を見ていたい。一緒に歩きたい。一緒に美味しいものを食べたい。同じ景色を見たい。

私は、きつと。そう、きつと。私は、彼のことが――

キラキラしてドキドキしたのなら今日からキミも  
シューティングスターさっ！ (？)

彼の第一印象は、変態。

そして第二印象も、変態。

色々な意味で、彼は変態だった。

そんな彼と出会ったのは、地元から遠く離れた都会の地。

アスファルトから陽炎がユラユラと溢れ出ている、茹だるような夏の日だ。

バスに揺られ、電車に詰められ。

地元とは文字通り桁が違う人の数に酔いながら、死に絶え絶えの満身創痍でやっとき辿り着いた東京は、地元より暑く、そして熱かった。

親に内緒でこんなとこまできちやつたけど……でも、私はこの選択に後悔なんてしていない。

★ ☆ ★ ☆ ★

「……ふふ、花園ランドはすぐそこに……ふ、ふふ……」

そろそろ七月も終わろうかという、夏休みの何でもない日。

俺の自室で俺のアコギをチャカチャカやりながら、おたえが物憂げに言葉を漏らした。物憂げってより病んでんなこれ。

花火大会の一件で俺の家を知ったポピ。パが最近良くウチに突入してくる以外は意外と平和にやっていた俺の元に、何やら不穏げな話が転がり込んできている。なるべく避けたい話だ。蕎麦食いに行こ。近くに美味しい蕎麦屋があるんだよ。

「あのね、関口くん。実はおたえのバイト先のライブハウスが潰れちゃうみたいで」

俺の自室で俺のクッションをドラムスティックでポンポン叩く山吹さんが、おたえが病んでる事情を話した。いやだから蕎麦食いに行くんだよ俺は。これ以上話進めんな。

「そうなの！ だから、そのSPACEの最後のライブにみんなで行よっ！」

財布をケツポケに突っ込み、スマホを手を取ったところで、俺の自室で俺のポケ○ンソ○ドをプレイしてる香澄がそんなことを言い出した。

… 無視して蕎麦食いに行けなくなったんだが。

「まあウチら、まだオーディションに受かってないんだけどな。つか関口達ってSPACEで演れるのか？ あそこ、ガールズバンドの聖地とかなんだろ？」

俺の自室で俺のシンセを弄っている市ヶ谷さんは、呆れたように言った。いや呆れたいのはこっちなんです。

なんで俺が出かける準備してんのにお前らは部屋から出ていく素振りすら見せないの？ 俺ちゃんビツクリだよ。

「お姉ちゃん達も出るから、私出たいんだ、SPACEのライブ。須田くんは『いいよ、出るよ』って言うてくれたんだけど…」

俺の自室で俺の本を読みながら、牛込さんは上目遣いで懇願気味に聞いてくる。てか須田あの野郎、牛込さんだからって絶対安請け合いました。チヨロすぎんなアイツ。

しかしまあ、ライブは俺もやりたい。

それにSPACEか。ちよつと前にRoseliaとかAfterglowもライブしてたな、確か。あそこのオーナー、基本はいい人っぽいけど厳しそうだからなあ。

「いやまあ、出る分にはいいけどさ。俺ら自分の曲なんもねえよ？ てかそもそもバンド名もない」

「大丈夫だよ！ 私昔SPACEのライブ行ったことあるけど、その、こぴばん？ みたいな、プロの曲カバーしてる人達もいたし！ 海くん達三人だし、アレとかいいんじゃないかな！ あのく… なんだっけ？ ゆに… ゆに… なんとか！」

「ユニオンな。UNION SQUARE GARDEN」

「そうそれ！ さすが有咲く」

「引っ付くなー！」

突然イチャつきだした夫婦は放っておくとして。他所でやって、どうぞ。

にしてもユニオンかあ。

「お前そんなん、ゲロ難変態バンドやんけ。あんなんコピーするバンドとちやうでホンマ」

「そこまで!? いや、確かに難しいけど… 関口くん達でもやれないものなの…?」

「まあできるけど」

「できるのかよっ!!」

まあね（フンスツ）

しかしまあ、難しいのは事実だ。あんなん化け物の集まりだからな。

そして一番の問題はベース。いや、田○さんはエグい。マジでエグい。須田がいくら天才だつっても、まだベースを始めて三ヶ月も経っていないのだ。それでユニオンのベース弾けつてのは中々厳しいだろ。

というわけで、とりあえず須田に電話してみた。

『あい、どしたん関口。え？ ライブ？ あありみが言ってたやつな。あ、マジでやんの？ 決定？ やったぜ！ … え、決定じゃなくて仮定？ オーディションとかある？ そんなん死んでも合格してやっぞバカ野郎この野郎。俺めちやくちや練習するわ。ユニオンのコピー？ なんぼのもんじやい』

やれるらしい。マジかあいつスゲーな。

五十嵐？ あいつは何でも叩けるよ俺はそう信じてる。

… あれ？ そういや須田って、牛込さんのこと前から下の名前で

呼んでたっけ？ あれ？

? ? ? ? ?

さて、SPACEのラストライブに出たいねっていう話が出た日の翌日の正午。

今日はお母さんが仕事でいないし昼飯の作り置きもなかったから、姉ちゃんと一緒に近所の蕎麦屋へ出向いてきていた。

「SPACE? 何あんた、SPACEでライブやんの?」

「らしいね」

「らしいってあんたね...にしてもSPACEかあ。懐かしいわ」

「? 何姉ちゃん、SPACE行ったことあんの?」

お待ちどうさん、と俺と姉ちゃんの前に蕎麦が置かれる。

今日は姉ちゃんの奢りだから、思い切ってざるそば大盛りミニカツ丼、それからエビとナスの天ぷらも付けてしまった。なかなかいいお値段である。しかも姉ちゃんも同じやつ頼んでるからすごい。てか姉ちゃんそんなに食うのかよ、そっちもビックリだわ。

姉ちゃん割のいいバイト見つけたとか言って稼いでるからなく。にしても全額ポンと出して貰ったのは嬉しいんだけどちよつと引いた。なんのバイトしてんだろこの人。やべえやつじゃなけりやいいけど。

「SPACEは高校ん時お世話になったんだよね。ほら、あたし高校でバンド組んでたじゃん?」

「ん? んん」

蕎麦を啜りながら、鼻を鳴らして返事をする。

そういや組んでたな。姉ちゃんが高三の時の夏に解散したんだっけか。受験とか色々あって。なんか一人はプロ行つたとかなんとか。「そのバンドでしょつちゆうライブに出させてもらってたんだよね。あ、それとお母さんがそのオーナーと知り合いつぼくて。ちよつと目えかけてもらってた」

「ほええ」

それは知らなんだ。

お母さん顔広いよな。友希那さんのお父さんとも知り合いだし。音楽関係強え。

「あ、そういやSPACEってガールズバンド御用達みたいな話聞いたんだけど、俺らってライブできるん？」

「さあ？ 知らない。まあなんとかなんじゃない？」  
「かつる」

「人生そんなもんだって。あ、それかオネーチャンがオーナーに口聞いてあげよつか？」

「まじっ？」

それはありがたい。

ライブはやりたみがあつたけど、そもそも参加資格があるのかどうかも分かんなかったからな。まあ姉ちゃんにどこまで口聞けるだけの権力っていうか、あのオーナーとの関係を築いてるのはは知らないけど。

昨日聞いたらSPACEのラストライブはRoseliaもAfterglowもハロハピも出るつつってたし、その辺にも頼んでもらおっかな。

「ごちそーさん。ちよつとトイレ行ってくる」

「む、まだあたし食べてる途中なんだけど。トイレとか汚いよ、ちゃんと『熊狩ってくる』って言いな」

「……？ え、何それ。花摘みに行ってくる的なやつ？ まじ？」

初耳すぎる、つーか絶対それ言わないだろって雑学を知ってしまった、面白そうだから今度使ってみようと思いつながら俺はトイレ、もとい、熊を狩りに行く……いや熊狩るって強すぎんだろ。この前ひまわりと動物園行った時に熊見たけど、あれは勝てねえって。せめて芝くらしいにしとけよ。

この蕎麦屋のトイレは一つしかない。

古い店だからか、スタッフどころか男女すらも共有するトイレだ。

俺が小学校低学年の時くらいまではぼつとん便所だった。あれ普通に怖いんだよな。あとくせえ。夏場は地獄。

今はぼつとん便所なんてことはなく、T〇T〇の綺麗な腰掛便器になっっている。ウオシユレット付いてるし、なんか使う度に除菌するのかなんとかかってめちやくちや綺麗なやつ。

昔は鍵とかもなく、一タノツクして誰もいないのを確認してから入ってたけど、今はそんな必要もない。中で店員のおばちゃんと鉢合わせるとかいう最悪のシチュエーションは回避確定だ。…いや、そろそろ男女別でトイレ設置すりゃいいのに。

「ユ〇ゾンかあ。シユ〇ビタは有名だからやつとくとして…新曲やりてえな」

五十嵐は多分なんでも叩けるから大丈夫として、問題は俺と須田だな。いや、俺はまだ歴があるから練習すればいけるとしても、須田がどこまで弾けるかだよなあ。ベース始めたばっかでブ〇ンキーとかユ〇ゾン弾けって言われたら俺なら逃げてる。あいつすげえよマジで。

と、そんな考え事をしながらトイレのドアを開ける。

するとそこには、例の腰掛便器と、それに座っている人の姿が。女の子だ。見た感じ同年代くらい。青みがかかった黒髪で、黒縁のメガネをかけている。

「……………」

「……………」

無言で見つめ合う、俺と半裸の女の子。

どっちも脳の処理が追いついていない中、先に現実へ帰ってきたのは俺だった。

「あお…そーりー、しーゆー」

それだけ言い残し、ものすごい勢いでドアを閉める。厨房の方から「トイレの鍵壊れとるよ」とか声がしたけど知らんよそれ早く教えといてくれおばちゃん。それが張り紙でもしとけ。

数瞬遅れて、トイレの中から悲鳴が聞こえてくる。そりやそうだ。あつちは完全に被害者だからな。とりあえず土下座の準備でもしておこう。



? ? ? ?

翌々日。

中学二年の時に巴の家に遊びに行つて何の間違いか巴の下着姿を見てしまった時以来の全力の土下座を家族(姉)の前で見知らぬ女子中学生に披露した翌々日だ文句あつか、ああん？

まあそれは置いておくとして。

「やりきったかい？」

「そんな言葉じゃ言い表せないレベルでやりきりました」

「血反吐吐くレベルでやりきりました」

「飯と風呂以外全てドラムに捧げたレベルでやりきりました」

「… ふん、合格だよ。来週がSPACEの最後のライブだ、派手にやりな」

つてことでSPACEのオーディションに合格した。やったぜ。オーディションで演つた曲はユ○ゾンのシユガ○タと桜○あと。

変なアルペジオしながら歌うのマジでムズかった。

いや、にしても合格は嬉しいな。ひまり達にも教えてやる。

あとRoseliaと、一応ハロハピと、それから… めんどくせえな。Twitterで眩こ。そしたらみんな見るだろ。多分。

Kai 『バンド名すら決まっていなくせにSPACEのライブ出演は決まりました。うーんこの。謎すぎんなこれ』

ほいツイート、つと。… うわもういいねきたはつや。丸山さんマジで常にスマホ見てんじやねえの？ 今あの人岐阜にロケ行つてんだろ、『君○名は。』特集とかで。ちゃんと仕事してくれ。… にしても今更あの映画の特集なんてするんだ。いや俺も好きだけどき、新○誠作品。言の○の庭とか大好き。

つと、また別の人からいいね来たな。… つと、ロックさん？ この人も最近めっちゃいいね飛ばしてくるなあ。

てか先週ギターの弾き語り動画貼つてからめっちゃフォロワー増

えたんだけど。なにこれ、フオロワー八百人？ ほええ、承認欲求満たされたわ。うれび。

『お疲れ様〜！ かんぱーい!!』

ってことで打ち上げである。

場所は市ヶ谷さん家の蔵。ポピパも合格したから二バンド合同での打ち上げだ。

なんか合格するまでに色々あったみたいだけど、合格したんならモーマンタイだ。モーマンタイって何語なんだろうな。

あと、五十嵐は帰った。

なんか彼女が待つてるからとか言つて、オーディション終わってからすぐにいなくなった。爆発しろとまでは言わねえからせめて沢田さんと幸せになるか溺死しろ。

「海たちの演奏、モニターで見てたよ。すごかった。よく原キーで歌えたね」

「まあ歌にはそこそこ自信ある。身近に化け物みたいなボーカルいて最近自信無くしてっけど」

「いや、関口くんの歌ホントに綺麗だったよ！」

おたえと山吹さんが紙コップ片手にして隣に座ってくる。

いやこれ近くない？ え、マジで最近ちよつとこの子ら距離近くない？ ダメだよ男にそんな気い許しちや。いい匂いする。

「ユニ〇ンのギターって結構難しいよね。あれ弾きながら歌うんだからもつと難易度がって大変そう。たった二日でコピーしたの、本当にすごいと思う」

「まあ、ストロークと歌のタイミングが違うからなあ。リードボーカルって初めてやったけど本当しんどい。一日十六時間練習した」

しかも何がヤバいって、歌とギターの両方とも難しいのが本当にヤバい。ピンボとギター分けるべきだよこれ。つかコピーするようなバンドじゃない。楽しかったけど。

ライブ本番はあと一、二曲増やそうって須田が言ってきたけど本当

にやんのかな。てか須田まだコピーする体力あんの？ いつの間にかスリーフィンガーなんかになってるし、ほんとすげえなあいつ（n回目）

「ポピパもすごかったじゃん。文化祭の時よりめちやくちや上手くなってたし。特に香澄すごかったな」

「たくさん練習した。ぶい」

「うん、おたえも、香澄も、私やりみや有咲も、みんな頑張ったよね」  
自信ありげにおたえが鼻を鳴らし、山吹さんが微笑む。

いや、実際ポピパはマジですごいし、香澄は才能があると思う。須田もだけど、楽器初めて数ヶ月でどこまで上手くなるつもりなんだあいつら。

俺がギター弾き始めてからちゃんと一曲弾けるようになるのには三ヶ月くらいかかったのにさあ。実は初心者じゃないだろお前ら。

そんな須田はソファの方で牛込さんと二人の世界作っている。

え、てかまじ？ 呼び方といい本当にそうなってんの？ え、おめでどう爆発しろ。

「いえーい！ 海くん飲んでるう？」

「酔っ払いうるさ」

「辛辣だった!?! つてゆるか酔ってないよ〜！ お酒飲んでないも

んっ！ 未成年はお酒飲んじやダメなんだよ！ 知らないの？」

「酔っ払いうるさ」

「飲んでないってばあ!! 蔵の奥の方にあつた、高そうな桐の箱に入ってたちよつと苦いぶどうのジュース飲んだだけだもんっ！」

「おいそれワンチャン<sup>ワイン</sup>酒だろ」

「てか香澄お前何勝手に人の家の蔵漁った上に高そうな箱なんか開けてんだ!?!」

「おばあちゃんが飲んでいいよって言ったもくんっ！」

「ばあちゃん香澄に甘すぎんだろ!!」

バカと天才は紙一重つてことわざ思い出した。

まあバンドやつてるようなやつにまともな人間なんていないけど

な（ド偏見）

それから気付けば日もどっぷり落ち切ってしまい、気を利かせてくれた市ヶ谷さんのお婆あちゃんが夕飯を作ってくれたからみんなでご相伴に預かった。佃煮めちやくちや美味かった。

その後もなんだかんだでゆつくりしてしまい、じゃあ来週のライブ頑張ろうなと解散になったのが夜の十時過ぎ。夜も遅いつてことでポピパの面々は市ヶ谷家に泊まることになったけど、俺と須田は帰宅コースだ。見つかったら補導されるでこんなん。

ビクビクしながら家に帰った。

★ ☆ ★ ☆ ★

「うわあ…！ ここがガールズバンドの聖地！」

夏の大きな太陽も随分と傾き、暑さも少しばかりマシになってくる夕暮れ時。

私は一枚のライブチケットを握りしめ、とあるライブハウスの前に来ていた。

ライブハウスの名前はSPACE。SNSなんかで知名度を上げている、ガールズバンドの聖地と呼ばれている場所だ。世はまさにガールズバンド時代！ なんて言われている今のご時世、こういう場所は自然と注目されていく。

「はわわ…！ えと、えと…と、とりあえずチケット持って入れればいいんやつけ…。あれ、お金、ドリンク代は別？ えと、そもそもチケットやお金はどこで誰に渡せば… あ、あそこでいいんかな…」

ガールズバンドの聖地どころかライブハウスに来たのが人生初な私にとって、ただ入場するだけでも大冒険だ。

ビクビクしながらもなんとか入場手続きを済ませ、ラウンジの空いている席に腰を下ろす。ドリンクチケットと交換したオレンジジュースを一気に飲み干し、ホッと一息ついた。

今日のライブは絶対に生で観たかった。

前々から注目してたRoseeliaさんやグリグリさん。そのほ

かにも、いろんなバンドが出演する。しかもガールズバンドの聖地最後のライブだ。観たくないわけがない。

それに、最近私が注目してる人も今日のライブに出るって言うし。。。うう、お母さん怒ってんだろなあ。。。。

「おい香澄！　いつまで外いんだよ、もうライブ始まんぞ！」

「えっ、本当!?　有咲ごめんく！」

「ったく。。。何やってんだよ、飲み物買ってくるって出てったつきり帰ってこねえで。。。」

「えへへ、一番星見つけたから、今日のライブ成功お願いしてきたっ！」

「いや、一番星は流れ星とは違うかな。願い叶える不思議パワーはねーから」

「えく!!？」

何やらキラキラと星の散りばめられた衣装に身を包んだ女の子が二人、パタパタと演者控え室の方に駆けて行く。あの人達も今日のライブに出るんだ。。。すごいなあ。

金髪の人が言ってた通り、もうすぐライブが始まる。ラウンジにいた人達もゾロゾロと会場に入っている。私は。。。後ろの方でいいかな。。。ないとは思うけど、モツシュとかに巻き込まれたら怖いし。。。。

ほとんどの人が会場に入ったあとに私も恐る恐る会場に入り、無事後列を確保。ライブが始まる前に発表されたた出番表を再度確認する。トリはグリグリさん、トリ前はRosealiaさん。そして私が注目してる人のバンドは。。。多分、この一番最初のバンド。

多分っていうのは、その人達のバンド名がまだ決まっていなくてどんなバンド名で出演するのかが分からないから。

最初のバンドは『オスバンド(仮)』って名前なんだけど、私が知ってる限りSPACEでライブをする男の人達のバンドは、あの人達のバンドしかない。だからきつと、これがそう。

先々週くらいにたまたまTwitterで見つけた、一つのギターの弾いてみた動画。スキ○スイツチさんの雫を弾き語っていた。

それが、私が彼を知る原因になったものだ。顔なんかは写ってなかったけど、そんなのは関係ない。私が惹き込まれたのは、彼の演奏と、そして何より、その歌声。すごく綺麗で、透き通るあの歌声だ。あの歌声が、私の心に刺さった。

歌唱力なら彼より上の人は山ほどいるだろう。それこそ、Roseliaさんのボーカルとか。それでも、私は彼の歌声が好き。こればかりは言葉じゃ説明できない。強いて言うのなら……せ、性癖、かな？

そのほかのバンドでも気になっている人達はたくさんいる。

ワクワクしながらライブが始まるのを待っていると、不意に会場が暗くなった。ライブが始まる合図だ。

ステージの幕が上がる。

空前絶後、SPACEで男性バンドがライブをする。

弾き語りも聞いたことがあるけど、バンドとしての演奏はまだない。スリーピースらしいけど、ベースはどんな人だろう。ドラムはパワー型かな、テクニク型かな。そして、あの人はどんな顔をしているんだろう。

ドキドキを胸に、上がる幕裾を目で追う。

期待の籠った、自分でも「輝いてるんだろうなく」って分かるくらいこの瞳に写ったのは——この前お蕎麦屋さんで私に土下座してきた人の顔だった。

「……ほえ？」

そんな私の素っ頓狂な声は、突如鳴り響いたギターのリフに掻き消される。

あ。この曲、ユ○ゾンの新曲だ。

頭の回らない私の耳に、今度は歌声が届いた。

男の人にしては随分と高い、高速アルペジオと共に会場を巡る歌声。間違いない、この声は彼の歌声だ。

えっ？ えっ？ なして？ これは……どーゆー……？

事故だったとは言え、私の……その、下着とか、それより恥ずかしいものとか姿とかを見られた人が？ あのK a iさん……？

『あー…こんばんは、オスバンド（仮）です』

気が付けば一曲目が終わったらしく、土下座のお兄さん…ううん、K a iさんがMCを始めた。

『SPACEで男がライブやんのかよ！　って思ってる人も少なからずいるかと思いますが…うん、なんででしょうね？　人生、なんでも言ってみるもんだしやってみるもんだなって思いました』

ギターのチューニングを変えながら話すK a iさん。ほええ…器用だなあ。私、チューニングしながら喋れないもん。

『今回俺たちが演るのは今やったP h o n t o m . j o k e含めて四曲です。全部ユ○ゾンの曲のコピーなんですけど、いや、やっぱあの人達バケモンっすね。なにこれ、めちやくちや難しいし足元もちよー忙しない…えと…ねえ須田、チューニングまだ終わんない？　俺MC苦手、早く次行きたい』

『ちよつと待って……終わった！』

『よっしじゃあ次行きます。観客の皆さんも野郎なんかより華やかなガールズバンドが見たいと思いますが、あと三曲だけ付き合ってください』

そう言って、ドラムのフォーカウントから次の曲が始まる。

これもリズムとかが難しい曲だ。けど、K a iさんはミスタッチもほとんどなく弾いていく。

ベースの人は…上手いけどどこどころミスが目立つかな。でも確かK a iさんのツイートではベース初めてまだ数ヶ月って話だったし、それであれなら天才の部類だと思う。

コーラスもしてるドラムは音が大きいし手数も本家より断然多い。すごいパワー型のドラマーだ。でもリズムは崩れない。上手い。

よく聴けば、ギターもちよくちよくアレレンジも入ってるっぽい。しかも簡単にするんじゃないで、手数の増えたドラムに合わせるような複雑なのに素早いコードチェンジと、ゴーストノート織り交ぜた単音弾き。ソロではタツピングまで入れてきている。変態だ…。

たった一曲の弾き語りだけでは分からなかった、彼の演奏技術。

タツピングは少しおぼつかないところもあったが、コードチェンジ

については完璧の一言だ。同じギタリストとして感嘆の息が漏れる。

二曲目も終わり、今度はMCなしで三曲目に入った。

落ち着いて、次はちゃんと歌声もしっかり聴く。

…… うん、K a iさんの歌声だ。息継ぎの時のクセとか、多分間違いないと思う。

あの土下座のお兄さんが、憧れのK a iさん……。なんだか頭がふわふわして考えが纏まらない。けど、この歌声は聴いていて心地良い。スつと胸に入ってくる感覚。考えず、感じている。

『じゃあ次ラスト。これ終わったら次はP o p p i n Partyとかいうハロハピと肩を並べるコミックバンドの出番なんで、準備運動もかねてこの曲でノつとくといいかもですね』

私らはコミックバンドじゃねー!!!

そんな叫びが舞台の袖から聞こえてきて、会場に笑いが生まれる。その時、会場を見回したK a iさんと目が合った……。ような気がした。舞台上は照明で照らされていて、会場は暗いから、あつちからこつち私はちゃんとは見えていないかもしれない。

でも、目が合っついていようがないなろうが、関係なかった。

彼がこちらを見た時に浮かべた笑顔。ライブをやっている楽しさからか、笑いが生まれたことへの満足感か。なんにしても、彼の笑顔が目には焼き付いて離れない。

ぼう、つとステージを眺める。

一曲の時間は長くても五分程度。本当に、瞬く間、といった感じだ。演奏が終わり、彼らは一礼してステージから捌ける。そしてすぐに次のバンド——P o p p i n Partyの演奏が始まった。

「……………決めた」

楽器の音と歓声に掻き消される私の声。誰にも届くことのないその声は、私の決意表明。

小さな拳を握りしめ、私はそれを勢いよく突き上げた。

…… あつ、このP o p p i n Partyっていうバンドもすつ



ごくいい。MCの節々にコミックバンド臭が漏れ出してるけど、すごくキラキラしてる。万有引力の擬人化みたい（脳死）

ソイヤツ！（☆そこに言葉は要らず——）

アタシの幼馴染みは、どうにもモテるらしい。

「ねえ巴！」

S P A C E最後のライブ、その翌日。

クラスのやつ三人とラーメンを食べに来ている時、隣に座っていたやつから興奮気味に名前を呼ばれる。

「昨日のライブでさっ、一番最初に演奏してたバンドのギターの人、巴の知り合いなんですよ!?!」

そう言ってきたのは、昨日あったS P A C E最後のライブを見にきてくれていたやつだ。名前は大塚<sup>おおつか</sup>。毎回A f t e r g l o wのライブに来てくれる、高校からの友達だ。

まあ、今日遊んでる三人は全員昨日来てくれてたんだけど。

「え？ ああ、海のことか？ アイツはアタシ達の幼馴染みだぞ」

「海くんって言うんだ！ あの人ちよーカッコ良いよねっ！」

「あっ、分かりみく。でも私はドラムの人の方が好みだった〜」

「あたしはギターの人…えと、海くん？ 派かな。たまに笑ってたけどめっちゃくちや可愛かった」

「そ、そうかあ？」

えらく好評な幼馴染みの顔を思い浮かべて、アタシは少し首を傾げる。

アイツは良い奴だが、そこまで顔が良かっただろうか？ 確かにブサイクじゃないとは思うけど…。

「は〜、わたし、あんな彼氏欲しーなあ」

「辞めときなよ、相手バンドマンよ？ バンドマンはクズって相場が決まってるんだから」

「え〜。巴え、そこらへんどうなの？」

「まあ…海は良い奴だよ。優しいし、いざって時は頼りになるし」

「ほらっ!!」

「ほらっ、てあんたね…。」

空になったラーメンの器を前に、アタシ以外の三人の会話は盛り上がる。

むう…どうも、そういう色恋の話は苦手だ。こう、手の届かないところが痒くなるっていうか。背中がムズムズする。

「あつ、Twitterの垢はっけーん」

「はっや。あんたこういう行動力はあるわよね…。」

「へっへ〜、それほどでもっ」

「褒めてねーよネトスト野郎」

「野郎じゃないし!」

「いやそっち?」

そんな会話をする三人をよそに、アタシはラーメンの替え玉を注文した。

うーん…なんかあれだな。アイツのことを異性として見たことってあんまりなかったけど、アイツってモテるのか。

…なーんかこう、モヤモヤすんなあ。

★ ☆ ★ ☆ ★

『一生のお願い!! 宿題手伝って、海い!!』

「去年も一昨年もその前の年も聞いた気がすんな、その一生のお願い」

まあ、というわけで。

毎年恒例、ひまりの一生のお願いでもある『夏休みの敵を倒す会』(ひまり命名)が今年も開催されることになった。まあ俺はもう宿題終わってんだけどな。

てか高校別れたし今年はないと思ってたわ。

「——って感じで、設問に出てくる重要そうな単語と同じ単語が本文の中にも絶対にあるはずだから。まずはそこを探して、単語を見つけたらその周辺を読む。そしたらだいたい答え書いてあつから」

羽沢珈琲店の角の席。

俺たちが集まって宿題なり雑談なりをする時の特等席と化しているその席で、俺はひまりの現国の宿題を手伝っている。

俺とひまり以外にも、Afterglowの面々は勢揃いしていた。モカ以外はまだ宿題が終わっていないらしく、みんな大人しく問題に向き合っている。モカはなんかあやとりしてる。めっちゃ上手い。こいつ本当になんでも出来るな。

「うゝ… 私、文読むの苦手え…」

「お前普段から本とか結構読んでんじゃん」

「あれは恋愛小説だから面白いの！ でもこれは文章が難しいんだもん！」

「あー… まあ確かに雅文体はなあ」

ひまりが今解いている現国の問題の本文は森〇外の舞〇。

ここら辺の時代の文章は近代文っていうか、古文と現代文が混ざったような文体になっている。確かに、慣れてないとちよつと読みにくいかもな。

「そーゆーのはね、ひーちゃん。フィリングで読むんだよ。考えるな、感じるんだ」

「モカは黙ってて！ 感覚で全教科解けるなんて意味わかんないえっ、何そのあやとり」

「宇宙〜」

「軽率に神秘を生み出すな」

まあ現国は俺もフィリングで解くから、モカのことは言えないんだよなあ。古文とか漢文もほぼフィリングだけど。ほら、読んたら何となく分かんじゃん。答え書いてあんだし。

「ん…… ねえ海。ここ、教えて」

「あいあい、つと。まずは式を展開して… そう。そしたら5x yが共通因数になるのが分かるか？」

「うん。あ、じゃあ、この共通因数でくくればいいの？」  
「そゆこと」

蘭はやればできる子。

中学ん時の一件で勉強に追い付いてないだけで、地頭はいいんだよな。ちよつと教えればすぐ出来るようになる。

「海くん、ここの英文の訳し方なんだけど…」

「んー、つと… 『私は一人暮らしを始めてから寝坊をするようになった』だな。この *apart from* っつのが『くを除いて』って意味で、この文の場合は『家族を除いた生活』、つまり一人暮らし、っつ感じで訳せばいい」

俺も英語が得意なわけじゃないけど、単語と熟語さえ暗記すればあとは国語力でなんとかなる。単語帳熟語帳は每晚確認してるからな。結構覚えた。

まあ毎日単語テストがあるから強制的にやんなきゃなんだけどな。悪い点取ったら居残りさせられるし。進学校怖えよ… 香澄のやつはほぼ毎回居残りさせられてっけど、よくうちの高校合格できたよな。

「海く、おなかすいたく。パン買ってきてく」

「ここ喫茶店だぞ、飯くらい注文しろ。あと人をパシんな物臭姫」

「ふふーん、照れますなあ」

「褒めてねーよ… おいひまり。腕を抓つかんな、痛いだろ」

「うっ!!」

「ちよつ、バカお前もつと強く抓つかつてどうすんの!? いたいいたい!

まっ、ホントに痛いからっ!!」

「ははっ。相変わらず仲が良いなあ、お前ら」

「巴は笑ってないで止めてくれよ!!」

身を捻ひねって抵抗していると、ようやくひまりの攻撃から開放された。いや普通に痛かったんだけど。抓つかられた場所赤くなってるんじやんよ。

なんだこれ。意味分からん。蘭もこつち睨にらんでんじやねえぞ、怖いだろうが。

「わざわざ宿題手伝いに来てやってんのに、なんで俺こんな目に遭ってんだよ……。ちくしょう、もう手伝わねえぞ」

「や!!」

「や、じゃねえつつの腕を抱くな! 離せバカ!!」

「やー!!」

やー、でもねえんだよバカ! 当たってるっつーか挟まってんだよバカ! もう子供じゃねえんだぞバカ! 蘭がめちやくちや睨んでるだろバカ!

「ええい離せ! なんでもイヤイヤ言いやがって、この我儘姫が!」

「!! んふふう……。えへ〜」

「え何」

なにこれ。なんでそこで照れんの意味分かんない。怖いんだけど。とりあえず腕離せ。あつ、蘭テメエ足踏むな。。。!!

「ふんっ」

なしてそげん不機嫌になつとるがですか。

「はいはい。お前からそこら辺にしとけよ、さつさとやんねーと宿題終わんねーぞ?」

パンパンと二回手を打って、巴がようやく仲裁に入る。

渋々といった感じで蘭が、ルンルンしながらひまりが、眠たげな様子でモカが、納得がいかないように俺が、それぞれ自分の作業に戻る。

モカは一瞬だけスマホをいじった後、のっそりとテーブルの端に置いてあったメニュー表に手を伸ばした。

ふむふむ、などと頷いたと思えば、手を挙げてバイトのお姉さんを呼ぶ。どうでもいいけどあの最近入ったバイトのお姉さん、めっちゃ可愛いな。現役アイドル(若宮さん)も働いてるし、この店そのうちうちのバイト先みたいになるぞ(確信)

「すいませーん、ペペロンチーノくださいーい」

「パンじゃねえのかよ」

「あ、それとウーロン茶もお願いしまーす」

思わずツッコむ俺を無視して、注文を終えたモカは再びダラっとテーブルに伏せる。なんだア? てめエ……。

「アタシも腹減ったし、なんか食おうかな。えつと… あ、この、塩とんこつイタリア風スープパスタ、お願いします！」

「それなんてラーメン？」

「塩とんこつラーメンじゃないの。あ、あたしはコーヒーだけで」

「じゃあ私はストロベリーパフェ！」

「ひーちゃん昨日、甘いものは控えるって言ってなかった？」

「うっ…。き、今日はいいのっ！ ほら、勉強したから糖分必要だし！」

「意思よつわ。あ、俺はカルボナーラで」

「あはは…。じゃあ私も何か頼もうかな？ えつと…。くるみルクティーお願いします」

そうして、結局全員が何かしらを注文した。

つぐも、俺たちという時は普通にいろいろ注文して、しかもちゃんと料金を払ってる。自分の家なのに偉いよな。もし俺の家が飲食店だったら金払ってない…。いや、お父さんはともかくお母さんに殴られそうだな、そんなことやったら。

てかくるみルクティーってなに。新商品？ くるみのミルクティーってことか。なにそれ美味しそう、今度頼んでみよ。蜂蜜入ってるかな。

それから十数分ほどして、料理が次々と運ばれてきた。

一旦勉強道具を片付け、俺たちは料理に手を付ける。

「ん〜！ おいしく〜！ つぐの家のパフェはハズレがないんだよね〜」

「ふふっ。ありがとっ、ひまりちゃん」

わりと大きめのパフェを頬張るひまりは、なんとも幸せそうだ。

気持ちは分かる。つぐのお父さんの料理はめっちゃくちゃ美味しい。特にスイーツ。『学生時代は学内最強のパティシエとして幅を利かせたもんよ。』って、昔つぐのお父さんが言ってたな。最強で。

と、不意に俺のスマホが震える。

LiSA『やつはろ☆』

LiSA『友希那に被せるなら黒いネコミミと白いネコミミ、どっ

ちがいい?』

K a i 『黒で』

突然どうしたんだろ。

新しいライブ衣装でも考えてんのかな。

L i S A 『即答ウケるw』

L i S A 『おつけー☆ じゃあ文化祭楽しみにしててね☆』

L i S A 『休み明けにあるから!』

文化祭?

「へー。羽丘の文化祭って夏休み明けなんだ」

『リサさんの猫コスもみたいです』と顔を合わせてたら恥ずかしくて  
言えないような軽口を打ち込んで、LINEを閉じる。

「そうだよ! あれ? 海に言っでなかつたつけ?」

「お前から聞いてない。てか文化祭来てって言われたんだけど、  
女子校の文化祭って男入れんの?」

「入れるんじゃないか? うちの担任は彼氏連れてくるって言った  
しな」

「担任エ...」

「っていうか! 海は誰に誘われたの!? どの女に誘われたの!!」

「どこの女てお前。リサさんだけど」

「海の変態!!」

「何が!？」

さつきからひまりが怖いよう! 助けてトモえもん!

「! 蘭! めっちゃ美味いぞ、塩とんこつイタリア風スープパスタ  
! ちよつと食べてみるよ!」

「ん... ホントだ。美味しいね、このラーメン」

トモえもんんん!!!

「ひまりちゃん、ほかのお客さんもいるからちよつとだけ声のトーン  
落として...」

「あつ... ご、ごめんねつぐ...」

「つ、ツグえもん!!!」

「海くんも静かに」



「アツハイ」

ツグえもん思ったより厳しかった。

「ん、そういやAfterglowはライブしねえの？ 文化祭で」  
「一応はやる予定。申請は出してる」

「今度生徒会と先生達の前で演奏して、それに合格したら文化祭本番でも演奏できるらしいんだ。宿題が終わったらいっぱい練習しなきゃだな！」

ほえく。まあAfterglowの演奏なら余裕だろ。Roseliaとかで感覚麻痺ってるけど、高一であのレベルの演奏できるやつなんて日本全国探してもそうはいないんだし。

てかRoseliaが強すぎるんだよな。ビジュアルも問題ないどころか全員が上の上だし。どっかのレーベルから声かかってもおかしくないだろ。友希那さんめちやくちや嫌がりそうだけど。

つーかRoseliaとアフグロはさっさとCD音源を出せ、俺が買うから。

「まくきつと合格するし〜？ 海く、文化祭見に来てね〜」

「おー、行く行く」

「リサさんに誘われてるもんねっ!!」

「痛い痛い、殴んな暴れんな。またツグえもん怒られるぞ」

「その、さつきからツグえもん？ って何？」

「気にしない方がいーよー、つぐく。相手は海なんだし〜？」

「お前には言われたくねえよ」

と、無駄口を叩いている間に料理を食べ終えた。

例の可愛い店員さんがバッシングにきて、さあ宿題再開だと意気込んだ時。俺のスマホがまた震えた

あや『海くん！ ひま!』

Kai『豚が離婚する時に食べるお菓子つてなーんだ』

あや『離婚する時にお菓子なんか食べてる場合じゃないよ豚さん!!  
まずは仲直りしなきゃ!』

Kai『マジレスなのかボケなのかはつきりしてください』

とりあえずなぞなぞでも出しときや大人しくなるだろ戦法は上手

くいつたらしく、それから数分待っても返信は来なかった。ほかに興味を引かれることを見つけたか、そうじゃなきゃ必死に豚について調べてんだらうなあ。

蘭に数学を教えていると、またスマホが震える。

おたえ『柴犬の歌作った』

K a i 『柴犬の歌』

おたえ『うん』

おたえ『海が柴犬好きって言ってたから』

K a i 『ほーん』

K a i 『今度聴かせて』

おたえ『分かった』

おたえ『今日は今からバイトだから、明日海の家行くね』

S P A C E はなくなつたが、おたえは掛け持ちでやっていたもう一つのバイトの方に精を出しているらしい。

もう一つのバイトも音楽スタジオらしいな。スタジオの掛け持ちバイトしてるって知った時はちよつと引いた。どんだけ好きだよ。将来はそちの仕事に就きたいとかなのかね。

ひまりに古文を教えていると、またスマホが震えた。

今日連絡きすぎじゃね？

松原花音『海くん、お疲れ様』

松原花音『今日、品川の水族館のクラゲのブースがリニューアルオープンしてね？』

松原花音『近いうち、一緒に行かない…？』

K a i 『いいですね』

K a i 『行きましょう』

あの人も本当にクラゲ好きだな。まあ水族館とか長いこと行ってなかったし、普通に楽しみ。

… どうでもいいけど、お嬢なら水族館の一つや二つ建てそうだな。  
な。

「…海、さつきから誰と連絡とってるの…？」

「ん？ 松原さんとおたえと、あと丸山さん… あ、今氷川さんから

連絡きた」

「それなんてハーレム!? どうしちやったの海!!?」

「どうもこうもない... っであっテムひまり! スマホ返せ!!」

「あーッ!! 市ヶ谷さんとか燐子さんとか! ほかにも色んな女の子と連絡取ってる!! 須田さんって誰!?!」

「須田誠だよ知ってんだろお前! 落ち着けバカ!」

た、助けてミッシェル!!! (混乱)

★ ☆ ★ ☆ ★

「ただいまあゝ...」

アタシにしては珍しく、疲れを含んだ声で帰りを伝える。

今はとつぷり陽も暮れた時間帯。別に門限があるわけじゃないが、帰宅時間としてはあまり褒められたものじゃない。

帰りがこんな時間になってしまったのはひまりが学校に数学の参考書を忘れたからで、疲れてるのもそれが原因だ。ひまりに文句を言うつもりはないにしても、もうこんなことは無しにしたい。夜の学校なんか近付くもんじゃないって、ほんとに。

アタシは全然怖くなかったけど、海とかひまりはああいうの苦手だからな、うん。途中なんか海に抱きついちゃったけど、アレはアレだ。ほら、怯えてた海を安心させようとした的な。

「あつ、お姉ちゃんおかえり〜!」

ちようど脱衣場から出てきたあこが、元気にアタシを迎えてくれる。

肌がちよつと赤いを見るに、どうやら風呂上がりらしい。

「おう、ただいま。今日はちゃんと髪乾かしたか?」

「乾かした!!」

そう言ったあこは、トタトタと居間の方に駆けて行った。

アタシは一度部屋に寄って、荷物を置いてから居間に行く。

すると、家族共用のパソコンの前に座っているあこの姿が真っ先に目に入った。いつも通り、なんとかっていうオンラインゲームをやっ

ているのだろう。海とか燐子さんもやってるあれ。なんて名前だったっけ。

帰りが遅れたことは事前に連絡してたけど、一応父さんと母さんに一言謝ってから、取っついておいてもらった夕飯を食べ始める。おっ、今日のおかずはチキン南蛮か。

「あれー？ 海兄まだインしてない」

「ん、まだ家に着いてないんじゃないか？ 解散したのさっきだし。あいつ、途中までアタシ達のこと送ってくれてたからな」

不思議そうに首を傾げたあの背中に、そう声を投げかける。

今日は途中までだったけど、二人で遊んだ帰りは家の前まで送ってくれるんだよな、海のやつ。

「そっかく。まあ今日は約束してたわけじゃないし…。あ、りんりんインした！」

「ゲームもほどほどになく。まだ宿題残ってんだろ？」

「づっ。だってえ…。理科と英語全然分かんなくてえ…。」

「分かんないところは教えてやるから」

「ほんと!? やったあ！ お姉ちゃんありがとう!!」

「教えるだけだぞ、ちゃんと自分で解けよ？」

「はーい!!」

それから十数分して夕飯を食べ終え、テレビを見ながらゆつくりしている、不意にポケットの中に入れていたスマホが鳴った。スマホを取り出して画面を見れば、クラスの友達の大塚からのメッセージ通知が表示されている。

なんでも、Twitterで海のことをフォローしたらフォローバックされたらしい。正直なところ「そっか」としか言い様がない。『良かったな』とだけ返してスマホを机に置く。

ピロン、ピロンと通知が続き、それに既読だけ付けてスルーする。内容を要約したら「海がかっこいい」ってことだったし、特に反応しなくてもいいだろうと思った。

それにしても、大塚は海のどこにそんなに惹かれているんだろう

か。

中学の頃、音楽の授業で海がアコギを弾いた時にちよつとだけ女子から騒がれてたけど、あの時以外では、女子の間で海が恋愛対象として話題に出ることはほぼ無かった。

それに、アタシは小学校一年生の頃から海のことを知っているし、数えきれないほど一緒に時間を過ごしてきた。確かに悪いやつではない。むしろ良いやつだが、そんなに騒ぐほどじゃないだろうと思う。友達としては最高のやつだけだな。

アタシは別に、海のことを異性としては見てないし、あいつもきつとアタシのことを女としては見てないだろう。付き合いが長過ぎて、異性がどうかは全く考えられない。あこが海兄海兄いうもんだから、歳が近い姉弟みたいなもんだと最近では思ってる。

けど、だからといって、大塚と海の仲を応援する気にもなれない。それはなんか違う気がする。海に彼女ができるのは・・・なんか、嫌だ。

「はあ。どーにもなあ・・・」

色恋の話は苦手だ。慣れない。

身内が絡んでくるとなると尚更だ。

今のままじゃ。居心地のいいアタシたちのままじゃ、いられなくなる気がする。

海だけじゃない。蘭やモカやひまりやつぐ。あいつらだって、いつのまにか恋人を作ってもおかしくない年頃になってしまった。

六人の空に、雷雲が漂ってしまう。『今』が変化してしまう気がする、たまらなく怖い。

ピロン、とスマホが鳴る。

K a i 『駅前新しいラーメン屋ができるらしい』

K a i 『今度食べに行こうぜ』

…アタシがわりと真剣に耽ってるって時に呑気なやつだな、こいつは。つは。

けどまあ、こいつは昔からこんなやつか。モカと似てるっつーか、

考えてるのか考えてないのか分からない。

そのくせ、ここぞというときは誰よりも頼りになるし、アタシたちを支えてくれる。

ともえ『おう！』

ともえ『今度みんなで行こーぜ、ひまりの奢りで』

アタシの幼馴染みは、どうにもモテるらしい。

あいつに彼女ができるのは、あんまりいい気はしない。あいつがアタシたちから離れてしまうのが嫌だ。そんなことになるくらいなら、アタシたちの誰かと付き合っしてほしい……何言っただアタシ？

「あー、ばからし」

考えすぎて変な方向に思考が向いてしまった。

アタシたちの誰かが海と付き合うなんてありえない……ありえないよな？ 少なくともアタシはない。好きとかそういうのわっかんねーし。

あー、いろいろ考えたから腹減ったな。全部あいつのせいだ。ラーメンの話題なんてふってくるし。

ともえ『海のせいで腹減ったからラーメン食べに行こうぜ、今から』  
ともえ『海の奢りで』

K a i 『いや意味が分からん』

K a i 『でもラーメンは食べたい。今日お母さん残業らしくて家に飯なかったから』

いや誘い乗るのかよ。フットワーク軽すぎか。

男には、命を賭してでもやらなきやいけない時がある。好きなバンドのコピーとかね。

あの方は、とても親切な方です。  
ブシドーです！（言いたいだけ）

これは、八月に入ったばかりの頃。区の図書館での出来事です。

「あれ？ 若宮さんじゃん。久しぶり〜」

私が図書館でベンキョーをしている時、ふと背後から話しかけられました。

振り返ると、そこには知り合いの男性が立っていました。

「カイさん！ お久しぶりです！」

「図書館じゃ静かにね〜。あ、宿題やってんの？」

「はい！」

「んー、とりあえず声のボリューム落とそっか？」

「カイさんもベンキョーをしに図書館へ来たんですか？ 図書館は素

晴らしいですよ〜！ たくさん本がありますし、静かです！」

「うん、そうだね。よーし、それじゃあその静けさを守るためにも一回外出よっか」

「？ はい！」

「うーんこの」

どこか困った表情で、カイさんは私を連れて図書館の外に出ました。

外は暑いですが、カイさんの買ってくれた麦茶がとても冷たくて気持ちいいです。

「終業式以来だから…二週間ぶりくらい？ テレビでは結構見てるけど。あ、そういや五月くらいにやってたライブの映像解禁されてた

ね。見たよ。めっちゃ良かった」

「本当ですか!?! ありがとうございます!」

元々チサトさんのファンだったというカイさんは、私たちパスパレのこともよくご存知です。たまにイベントなどにも来てくださいます。

「カイさんはこの夏休み、どう過ごしてらっしゃるんですか?」

「俺? 俺は... そうだなあ。ハピハピ島行って宝探ししたり、花火見に行ったり、ニュージージラランドまで拉致られたり、ライブに出たり、明日からはなんかお嬢の誕生日祝うぞっつって南極行くらしくて... あれ? 俺の夏休み、ほぼハロハピに支配されてない...?」

カイさんは一瞬険しい顔をしましたが、すぐにいつも通りの顔に戻りました。

とても楽しそうな夏休みをすごしているみたいですね!

「若宮さんはアイドル業と、あとつぐんところでも週二でバイトしてるんだっけ。それで学校もちゃんと通ってるの、ほんとにすごいよね」  
「いえ、どれもすごく楽しいんです!... あつ、でもベンキョーはちよつとニガテです... 特に現代文が難しくって... 高校生になって、漢字も難しいものが多くなりましたし...」

「おお... なんか帰国子女っぽい弱点きた。現国なら俺得意だから、なんか行き詰まったら全然教えるよ」

「それはとてもありがたいです! 実は、宿題で分からないところがいくつかあつて...」

カイさんはとても頭がいいです。

私達の学年でも特に優れていて、一学期の期末テストは学年で八位でした。すごいです!

そんなカイさんに、私はたびたびベンキョーを教えるもらっています。カスミさんやオタエさんも、教えてもらっているそうです。

カイさんが持つ助け合いの精神、まさにブシドーです! (どうしても言いたいだけ)





八月某日。CiRCLE。

「海。次のライブ、あなたにはRoseliaの一員としてギターを弾いてもらうわ」

「ふあ？」

「Roseliaに全てをかける覚悟はある？」

「なんて？」

突然何言ってるんだこの人。

「もー、友希那ったら。それじゃ海くん混乱しちゃうじゃん」

「そうかしら」

「そうだよ☆」

その会話も十分混乱要因なのですが。

「先日まりなさんに勧められたのだけど、再来週、コピーバンドのみが出場するライブが開催されるらしくて。スキルアップのためにもそれに出てみようということになったの。そこでギターがもう一人必要になったので、関口くんに声をかけることにしたのよ」

状況を見兼ね、氷川さんが補足の説明をしてくれた。わかりやすい。い。

にしても、コピーバンド縛りのライブなんてあるんだな。

「まあ話は分かったんですけど、なんで俺なんすか？俺、男っすけど」

「別にガールズバンドを組もうと思ってRoseliaを作ったわけではないわ。それに、あなたはサポートメンバーという扱いなの。男でも女でも構わないのよ」

「にやるほど」

「可愛くないわ、やめてちょうだい」

友希那さん厳しかった。怖いにやん…。いやキモいな。友希那さんにも睨まれたしもうやめよ。

音楽以外で唯一ネコにだけは本気だよな、この人。しかしまあ、理解はしたが話を受けるかは微妙だ。

最近新しい機材と二本目のギターも買いたくなくなってきたから、バイトのシフト増やしたいんだよな。夏けっこう遊びに使っちゃったってのもでかい。

Rosealiaと演奏するのなら妥協は絶対に許されない。忙しくて練習不足でしたく、なんてのは通用しないし、何より俺がそれを許せない。

なら、最初から断るほうが……

「因みにa crowd of rebellionのコピーをしようと思ってるわ」

「Rosealiaに全てをかせかせていただきます」

機材とギター？　んなもん知るかさっさと練習すんぞオラア!!（作中一のチョロイン）

?? ? ? ? ?

数日後。羽沢珈琲店。

「おい関口！　再来週あるコピーバン限定のライブに出ないかってさっきまりなさんに言われたんだけど！」

「あー、俺それ出るよ。Rosealiaのサポートで」

「俺達も出ようぜ！」

「ま?」

俺別のバンドで出るゆーとるやんけ。正気かお前。

「五十嵐にも声掛けて……うわあいつ返信早。あ、でも五十嵐も暇だから出たたってよ」

「おい待て俺の意思」

「俺この前知ったバンドのコピーやりてーな。さーふ〇す?　っての!」

「いやうちのバンドにシンセイねーだろ」

「シンセイサイザーなら私が弾けますよ!」

「イヴちゃんナイス!!」

若宮さんどっから出てきた?

あー、なるほど今日羽沢珈琲店のシフト入ってたのね。理解理解。……いや、ここに居る以外の理由が何も分からん。え、オスバンド（仮）でシンセ弾くの？ 若宮さんが？ なんで？

「いやでも若宮さんアイドルなんだし、さすがに事務所とかが止めるんじゃない……」

「今連絡したら、『バンド界隈からの認知度上げるためにも行ってきたいいよ』って言われました！」

「何言ってるんだそいつ」

待って待って待って。

話がトントントン拍子で進みすぎだ。

一旦落ち着けお前ら。クールになろうぜ。

はい、りぴーとあふたみー。びーくーる。

「まりなさんに参加するって連絡した！」

「デジマ？」

「？ カイさん、『デジマ』とはどういう意味でしょうか？」

あと二週間でリ○リオンとS u ○ f a c eコピーすんの？ 俺死

んじやうよ？

？ ？ ？ ？ ？

翌日。A f t e r g l o wとききた花火大会会場。

「あー！ そういえば海！ 昨日まりなさんに教えてもらったんだけど、再来週コピーバンドのライブが——」

「その切り口聞き飽きたわ」

花火も見終わり、人の波からも抜けた頃。

突然思い出したかのように言い出したひまりが、俺の服を掴む。

「あ、もしかして知ってた？ なら話が早いね！ せっかくだし一緒に——」

「その切り口も聞き飽きたわ。やんねえよ、俺パス」

「えー!!? 一緒にライブやろうよ海く!!」

「ん？ あこが『海兄と一緒に演奏できるく!』って騒いでたから、R

oseliaとは出るんだろ?」

「うん。それとは別に、例のオスバンド(仮)でも参加すつから、さすがに無理」

本当に死ぬぞ。

昨日徹夜で練習してたけど、リベ○オンがマジでやばい。てかシャウト部分は俺が歌うっばい。シャウトの練習しにカラオケにも行かなきゃなあ。

「ふむふむ、なるほど。海はあたしたちアフグロを捨てて、Roseliaに加担する、と。モカちゃん泣いちゃう」

「言い方」

「そうか、そうか、つまりきみはそんなやつなんだな」

「お前どこのエーミールだ」

なんと言われようと、俺はこの話は受けないぞ。体が持たないからな。

せつかくの夏休み、ギター以外にもいろいろしたいだろ。いやまあいろいろしてしたんだけどさ、今年の夏休みは。でもまだ遊びたい。ギターばつかやってる場合じゃねえ。

「そっか。海が嫌ならいいよ。あたしたちはいつも通り、五人で演奏する」

「いや、別に嫌ってわけじゃ…」

「でも残念だよ」

「? 何がだよ、蘭」

「今回コピーしようとしてるバンド、AcO d B l a c k C h O r r yなん——」

「よし受けよう。いつ曲合わせる?」

「チヨロ」

ばかやろうお前俺はやるぞお前——!!!

こうして、俺の残りの夏休みは死んだ。

? ? ? ? ?

さて、地獄の夏休み後半戦が始まったわけだが、地獄だからと言ってもなにもキツイことだらけではない。

「…一応、曲として通りはしたわね。でも、まだ完璧とは言い難いわ。十分ほど休憩を取って、もう一度合わせましょう」

汗を拭いながら、友希那さんが言う。

今日はRoseliaとの初合わせの日だ。リベリオンはスコアがないから全部耳コピだったけど、何とか今日に間に合わせる事ができた。

やる曲は三曲。『M1907』、『B.I.O.B』、『Anemone』だ。

個人練習は地獄以外の何物でもないが、合わせは天国だ。めっちゃ楽しい。

「氷川さん、ピッキングハーモニクス\*ってできます?」

「一応できるけれど」

「あ、じゃあBメロのここんとこのピッキングハーモニクスしてもらえません? 俺のパートではあるんですけど、俺ピッキングハーモニクスできなくて」

「…意外ね。あなたならなんでもそつなくこなしそうなものだけけれど」

「いやあ、アコギじゃピッキングハーモニクスなんてしませんからね。初挑戦でした。一応練習はしてきたんですけど、なかなか上手くできなくて」

「分かったわ、そこは私が弾きます」

ピッキングハーモニクスは完全に才能の問題だからな。一発でできるやつもいれば、俺みたいに何日かけてもできないやつもいる。

もっと練習すれば俺にもできるようになるんだろうけど、今はそっちに時間をかけてる場合じゃない。

「それにしても海くん、デスポなんて出せるんだね。最悪、普通に

コーラスしてもらえればいっかくらいで考えてたのに」

どこから取り出したのか、タピオカミルクティーを片手にしたりサさんが感心したように言ってきた。いや、ようについていうか本当に感心してるのだろう。

あとめっちゃナチュラルにタピオカ飲み出したけど、CiRCLEってスタジオ内での飲食OKだったんだ。何気初めて知った。いつもりサさんや氷川さんが持ってきてくれるお菓子差し入れはカフェテリアの方で食ってたし。

「あー、練習すれば結構簡単にできますよ」

「そうなの？」

「はい。まずは悪魔を召喚します」

「あはは、まーたおかしなこと言ってる☆」

低音デスポのお姉さんが言ってたことをそのまま言ったらなんか小馬鹿にされた。悲しい。低音デスポのお姉さんは間違ってるん。

あとこれ豆知識だけど、デスポとシャウトはちよつと意味違うからな\*。俺が今回やってるのは主にシャウト。

「悪魔を召喚：ハッ、まさか海兄もあこと同じネクロマンサー：！? 死の淵より響くかの声は、地獄を彷徨う亡者達の怨恨の声だったということか!! まさに死の声、デス・ボイス：何それカツコイ〜!!」

「なんて？」

相変わらずあこちゃんワールドは分からん。

いやでもデスポって、『強い怒りや悲しみなどの感情や、不気味さ、汚さ、痛みや苦しみなどを表現するために使われる。』ってWikieidiaにも書いてあったしな。地獄の亡者ってのは間違ってるのかも。いやそもそもデスポのお姉さん曰く、デスポは悪魔の声なんだけどな？

「しっかしまあ、シャウトしながら弾くのなかなか厳しいな」

「本家は：ピンボーカルの方が：スクリーム役：ですからね：。少し、タイミングを：取るのが：難しい：かも：」



失礼な。ブレイクダウンって案外知られてない単語だから教えとこうと思っただけなのに。別にこれを機にハードロックとかメタル系とかを聴かせようとも思っただけだからな。

あ、でもあとでブレイクダウンの参考バンドとしてBeerying The Mortsでも聴かせようかな。これはシンフォニックメタルとかハードコアあたりに分類されるのかな？ そこから辺あんま詳しくないけど、そのバンドは最近ハマってる。

「まあブレイクダウンは冗談として。結構普通に合ったな、曲。一回目なのに」

ステイックをクルクルさせながら、感心したように五十嵐が言う。

俺たちがライブでやろうとしているのは、S○RFACEの『さ○』と『それじゃ○バイバイ』、『なにし○んの』の三曲。

全部難しいは難しいんだが、これらは全部スコアがあった。耳コピなんかより全然楽。スコアがあるって素晴らしいことだよ。マジで。今日は三曲とも合わせたんだけど、なんか普通に通ってしまった。すげー。

相変わらず才能の留まるどころを知らない須田はスラップをマスターしてきたし、五十嵐も案外おしゃんにドラムを叩けている。若宮さんはちよつと苦勞してるかなって感じだけど、全然違和感はない。

俺？ まあ完璧とは言わないけど弾けてはいるし歌えてもいる、と思う。一応形にはなったし、あとは完成度を上げるだけだ。

「一曲ずつ、もう二、三回合わせて今日は終わりにすつか。今日この後エフェクター買いに行きたいし」

「は？ またかよ関口。お前この前も買ってたじゃん」

「ドラマーからしたらエフェクターなんて全然分かんねーんだけど、そんなに重要なもんなのか？」

「めっちゃくちや必要だよ、俺の性癖を満たすためにも。あとこの前買ったのは歪みな。E○M AのReezaFA○ATzitz 2」

「いや知らねーよ」

まあドラマーはあんまり興味ない人多いよな。五十嵐もあんま興味ない側の人間だろう。



でも須田、お前は絶対こっち側にくる人間だって俺は信じてるぞ。ベース用のエフェクターだってたくさんあるしな。

「今日買いたいのはフランジャーだよ。ほら、『それじゃあバイ〇イ』のCメロの入り、なんかフォンフォン鳴ってるだろ？ ああの音出したいい」

俺の手持ちは歪み二つとりバーブだけだ。

本当はフランジャーより先にデイレイも欲しかったんだけど、財布と相談した結果今回は断念。そのうちワウ\*も欲しい。あとボリウムペダルも必須だな。

金が足りん、働かなきゃ。

「ふむ、わからん。まあ本家っぽくなるんならそうした方がいいよな。よし、んじゃあぱっぱと曲合わせて今日は終わろ」

そう言った五十嵐がステイックを叩いてカウントを取り、曲が始まる。

相変わらず合わせはめちやくちや楽しい。

あと須田のコーラスが上手い。ハモリもできる。本当に才能が留まるところを知らないやつだな。軽く嫉妬するんだが。どこぞの主人公かお前、ってレベル。

? ? ? ? ?

更に翌日。

アフグロとの練習日。

「海。途中で頭振りすぎ。気になって仕方ないんだけど」

「ばかやろう蘭お前、V系は頭振ってなんぼだろ。あと頭振ると眠気覚めるし」

「寝なよ。夜」

寝れたら苦労してねえよ (二徹目)

アフグロと演奏するのはA〇id Black Cherry、通称A〇C。

やる曲は三バンド中最多で、『少女〇祈り』『Black Chor

ry』『SPOLL MAGOC』『黒〇〇adult black  
cat』『ピートル』の全五曲。『少女の〇りIII』じゃなくて普  
通の『少女の〇り』な。無印の方が好きなんだよ俺。

ちなみに、今回蘭はピンボだ。蘭たちが俺を誘おうと思ったのも、  
A〇Cのギタボは厳しいと判断したかららしい。いや、つかA〇C  
はギタボするようなバンドじゃないからな？ ほぼツインリードだ  
し。

それにしても俺、ほんとによくこの短期間でコピーできたと思う。  
今回のこれで、ギタリストとして一つ上のステージに行けたんじゃない  
だろうか。

めちやくちや頼み込んでスコアあるやつだけにしてもらったんだ  
けどな。

「でも、海くんと演奏してるのすつごく楽しいね」

「何気に初だしな！ 海と演奏するの！」

「確かに。そーいや初めてだな」

意外だわ。てつきり何回も組んでると思ってた。いや自分のこと  
だけどき。

けつこうな時間を一緒にすごしてるからなあ。そりや錯覚もする  
さ。

「しっかしアレだなあ。二年くらい前に楽器始めたばつかなのに、も  
うA〇Cなんてコピーするようになったんだな。上手くなったもん  
だ」

「なにそれ。上から目線ムカつく」

「いやお前、Fコード弾けないく、コードチェンジできないく、ミュー  
トできないく、ってずつと言ってただろ。俺がどんだけ蘭の家に通つ  
て教えてたと思ってるんだ」

「…… 忘れた」

薄情なやつめ。

蘭ママとはたまにお茶する仲になったし、蘭パパとも結構気軽に喋  
れる仲になるくらいには通ったぞ俺。

「ひまりもめちやくちや上手くなつたよな。最初の頃は弦抑える力無

さすがに音すら出なかったのに。リズム感も皆無だったのに、今じゃマジで安定してるよな」

「へっへっくん!! ひまりちゃんはやればできる子なのです。もっと褒めてくれてもいいんだよ海く!!」

「モカと巴は最初っからある程度弾けてたし叩けてたけど、二年前とは比べ物にならないくらい上手くなってるし」

「ちよ、無視!?!」

やればできる子って以上にすぐ調子乗って失敗する子だろ、ひまりは。必要以上に褒めたら何か大事な場面でポカをするって経験上知ってたんだ俺は。十年の付き合い舐めんな。

「あとつぐな。一番成長したのって言ったらやっぱつぐだよ。シンセめちやくちや上達したよな」

「そ、そうかな... でも私なんてまだまだで...」

「いやいや、胸張れって。高一でそこまで弾けるやつなんかそうはいないから」

つぐはイマイチ自己肯定が低いんだよなあ。

謙虚なのは日本人の美德だけど、つぐのそれはちよっと行き過ぎてるっていうか、病まないかたまに心配になる。

てか本当につぐは上手い。つぐが比較対象にしてる周りのキーボーディストが異常なだけだ。白金さんみたいなチートが身近にいたら俺だって劣等感を感じるって。

「さて、と。まあとりあえず、ラスト一曲合わせてみるか」

一息ついてから、俺が言う。

今合わせた曲は四曲。つまりあと一曲残ってるわけだが、そのタイミングで雑談を挟んだのには理由がある。

それは、残りの一曲——『ピスト〇』が関係している。

「おう。それが七弦ギターですか。初めて見た」

まじまじと俺のギターを見るモカ。

そう、今モカが言ったように、俺が持っているのは七弦ギターだ。

I b a o e z の R G 7 4 2 0 Z W K なのである。いや、『ピスト〇』って七弦使うらしいんだよね。スコアにそう書いてあった。

黒光りがめちゃんこにイカしてるこのギターは、姉ちゃんの私物だ。

いや、私物「だった」というべきか。

七弦が必要って言ったら、「今使つてないやつあるからあげるよ。三千円ね」って言うから買い取つてきた。

もうこいつは俺のモンだ。大事に使おう。関口海、メタルギタリストへの第一歩である（大嘘）

「いや、七弦こいつを使うの楽しみだったんだ。アンプ通すの今日が初めてだし、昨日からずつとウキウキしてた」

「いや、音作りくらい事前にしてきなよ」

うるせーバカ！ そんな暇なかつたんだよバカ！ 音作りまで間に合わなくてごめんなんだよバカ！

さてさてさーて。それじゃあお待ちかね、音出ししてみるか。

初めはエフェクターは無しで、アンプのツマミはドンシヤリ\*。

そして七弦目を親指で弾く。

「いやひっく」

思ったより低い。ズンツと来る感じ。テンションが上がってしまいますねこれは。

その後軽く『ピス〇ル』のリフを弾き、音を確認める。

続いてエフェクターのスイッチをオン。ブルースドライバードだけでいっかな。

エフェクターを通した音も確認し、特に問題はないと判断する。

「いける。やろ」

「ん。じゃあいくよ、みんな」

そして最後の一曲が始まった。

いつも以上にニコニコしながら、俺は七弦ギターをかき鳴らす。

まあ正直なところ、コード一つ弾くのにも七弦目のミュートが必要になってくるから面倒。ぶっちゃけ七弦目は必要ないと思いましたが、まる（個人的感想です）

『カンパニー!!』

カーンツ、とグラスのぶつかり合う音がスタジオ内に響きます。

コピーバンドのみのライブが終わり、今は会場でもあったC i R C L Eで打ち上げをしているところです。

ライブの参加者には成人した方もいらっしやるのですが、八割方がミセイネンということで飲み物はソフトドリンクのみとなっています。

「若宮さん、お疲れ〜」

「カイさん！ お疲れ様です！」

こちらにきてくださったカイさんと軽くグラスをぶつけて乾杯をします。

「今回ライブ付き合ってもらっちゃってごめんね。そんでありがとう、楽しかったよ」

「いえ！ 私もやりたくてやってみましたし、とても楽しかったですよ！」

「そう？ ならよかった」

そう微笑んで、カイさんはグラスに注いだオレンジジュースを一口飲みました。

カイさんが話したいと思っている方はほかにもいらっしやるでしょうに、この場に知り合いがあまりいない私へ気を使ってくれるのか、カイさんは私の話し相手になってくれます。

「そーいや今日、パスパレのファンも来てたね。あの毎回髪色変える子」

「確かに来てくださってましたね！ …あれ？ カイさんもカノジヨのことをご存知だったのですか？」

「まあ俺も一応パスパレのファンだし。時間と金の都合がいい時はライブとかも行ってるから、あの派手髪は嫌でも目に入るんだよね」

カイさんがパスパレ…特にチサトさんのファンで、サイン会などのイベントに来てくださっているというのは知ってましたが、ライブに

まで足を運んでくださっていたのは知りませんでした。

「関口くん」

と、不意にカイさんへ声かけられます。

その声の主はサヨさん。その後ろには、今日対バンしたバンドの方が数人立っています。

今日はCiRCLEでのライブということもあり、女性の方が多い、というよりカイさん達三人以外は全員女性の方でした。なので、サヨさんの後ろの方達もちろん女性です。

後ろの方達は、大学生の方々でした。カノジョ達は確か、Silent Sirenのコピーをしていたバンドの方々…。だったはず  
です。

「? なんですか、氷川さん」

「彼女達があなたと話をしたがっているの。あなた、今日三つものバンドで参加していたでしょう? それが原因よ、きつと」

「あ…。まあRoseliaやAfterglowのサポートで入って、自分のバンドでは現役アイドルを引っ張ってきてるやつですもんね、俺。確かに第三者が見たらヤベーやつ認定もされますわ」

納得のいったように、カイさんは数度頷きました。

カノジョ達の気持ちは、私にもジュウブン分かります。

今日のカイさんは凄まじく、まるで侍のような気迫を感じました!

さらに、Afterglowと演奏している時はものすごく頭を振っていて、まるで酔拳のようでした。カイさんなら拳法の一つや二つ、マスターしていてもおかしくはありません。

「キミ、関口くんってどういうの? ギターすつごく上手いね〜!」

「歌も上手だったし! 何かレッスンとか受けてるの?」

「将来はバンドでご飯食べていくの? 次のライブの予定とかない?」

「彼女いる?!」

カイさんと(一方的に)話し始めたカノジョ達の勢いは凄まじく、矢継ぎ早、というものはこういうもの(ことを言うんだと私は学びました)。

カイさんは少々面食らったようでしたが、すぐに各応答をしています。声は震えていました。視線もキョロキョロとして定まっていませんが、緊張しているのでしょうか？（軽度コミュ障からくる吃り<sup>ども</sup>）途中でヒマリさんがやってきてカイさんの足を踏んだり、ランさんがカイさんの脇腹をパンチしたり、リサさんとサヨさんが大学生のカノジョ達とカイさんの間に入ったりしていました。なぜでしょう？皆さんの行動は分かりませんが、皆さんがカイさんを慕っているということは分かります！ 私もカイさんのことはとても尊敬しています！

多くの人の心を掴むカイさんの在り方、まさにブシドーです!!（是が非でも言いたかっただけ）

るんっ！ (☆そこに言葉は要らず——V2)

彼は、あたしが嫉妬した初めての男の子だ。

彼を知ったのは、ほんとに偶然。

最初は、彩ちゃんのSNSに時折出てくる男の子、って印象だった。彩ちゃんは、彼の顔だけは絶対に写らないように気を付けてたみたいだけど、直接聞いたら顔を見せてくれたんだよね。

写真の中の彼は、彩ちゃんにアーンをされてて赤面していたり、彩ちゃんに抱きつかれて赤面していたりしてた。ほんとに付き合っていないのこの二人？ 文○砲とか五、六発は飛んできそうだけども。

次に知ったのは、リサちーとのLINE。

お姉ちゃんにはナイショで、お姉ちゃんとリサちーが所属してるR o s e l i aでの練習風景を写真で送って貰った時に、写真の端にちよこつと写っていた。

お姉ちゃんの前で、お姉ちゃんと向き合いながらギターを弾いてる男の子。

この時の印象は、端的に言って嫉妬だね。

だってお姉ちゃんと一緒にギター弾いてるとかズルくない!? ズルだよズル!! 羨ましー!!!

私は彼と、実は直接会ったことはない。T w i t t e rはたまに見てるけど。

ほら、彩ちゃんがすぐ彼の投稿にいいね押すからオススメに出てくるんだよね。よく海外に行ってるイメージ。お金持ちなのかな？

そんな彼と、私は今日初めて遭遇した。

「あー!! せきぐちかいだ!!」



「ヒエツ…」

なんか怯えられちゃった。

★ ☆ ★ ☆ ★

九月一日。

そう、今日は九月一日である。カレンダーをいくら凝視しようがその事実是不変ならない。嘘だと言ってくれファアザー。

「今日九月一日じゃん！ あと一ヶ月は休みあるわ〜」

死んだ目でカレンダーとにらめっこをしている俺の隣で、徹夜明けの姉ちゃんが挑発じみた声音で言う。腹立つな大学生このやろう。

だがまあいい。九州に住んでる俺の従兄弟は先週から学校始まつてるらしいしな。そこと比べれば全然。

県の方針だかなんだか知らないけど、関東より夏休みが一週間遅く始まり、一週間早く終わるらしい。暴動が起きてないのが不思議だ。

朝食を食べ、歯を磨き、懐かしささえ覚える制服に袖を通す。

「いつてきまーす」

欠伸をしながらリビングでゲームをしている姉ちゃんに軽い怒りを覚えつつ、俺は家を出た。

空は雲一つない晴天。九月とはいえ、まだまだ夏の暑さは続いている。

マンションのエントランスで買った炭酸飲料で喉を潤しつつ登校していると、スマホが震えた。

おたえあたりからのLINEかな？ そう思いスマホを取り出すも、どうやら俺の予想は外れたらしい。TwitterのDMだった。

とりあえず開いてみる。

『Dear Mr. KAI SEKIGUCHI  
Hello. I am in charge of Record producer.』

I saw your guitar technique in Twitter.

I am interested in your——』

そつと閉じた。

? ? ? ? ?

「はよーっす」

教室に入り、久しぶりに会ったやつらに軽く挨拶する。

この夏休み、バンドのことかお嬢のお供しかしてなかったからな。ポピパ連中と若宮さん、北沢、須田、五十嵐以外はマジで一カ月ぶりくらいに会う。

あ、ごめん嘘。澤田さん（五十嵐の彼女）にも会ったわ。この前のライブ来てくれてた時に。

挨拶もほどほどに、俺は自分の席へ向かう。

今日は始業式だけで荷物が少ないとはいえ、ゼロではない。とりあえず荷物置きたい。

「おーっす関口く。いちご牛乳飲む？」

「いらない」

俺が席に荷物を置くや否や、須田がヘラヘラとした笑みを浮かべながら近付いてきた。

その手にはパックのいちご牛乳とコーヒー牛乳が握られている。

「なんだよつれねーなー。間違って買ったからお前にあげようと思っただけなのによー」

「どうせそれを俺が貰ったら、代わりに宿題見せろとか言ってくるんだろ。GWの時みたいにな」

「チッ」

あつ、今こいつ舌打ちしたぞ、舌打ち！ チッて!!

「……で。ちなみに何が終わってないのお前」

「英語と数学と化学」

「ほぼ半分だな」

まあ見せてはやらないんだけど。

精々苦しめ。それか牛込さんにも頼んでこい。

「ケチんぼ」

「自業自得だ」

俺は絶対に人に解答は見せないからな。解き方なら教えるけど。

その方がそいつのためになるとか、別にそういうのじゃない。普通に嫌じゃん、自分が労力掛けて解いた問題を他人に写されるの。

シツシツと須田を追い返すと、入れ替わり気味におたえが寄ってきた。

「海。今日放課後暇？ 私、三時からバイトなんだ。お昼と暇つぶし、付き合ってくれない？」

「あ？ あー、いいよ、大丈夫」

なんか終業式の日もこんなことあったなー、とぼんやり考えていると、HRの始まりを告げるチャイムが鳴った。

それを受け、生徒たちはみな自分の席につく。が、うちの担任は少し遅れているのか、未だ教室に姿を表さない。

まあ、教師つつつても遅刻する日くらいあるだろ。人間だもの（か  
いお）

三分ほど経ち、教室でチラホラ雑談が出始めた頃。

廊下からツカツカと足音がした。ちよつと小走りっぽいし、きつとうちの担任だろう。

あ、ちなみにうちの担任は男な。もう筋骨隆々の漢な。絶対体育教師だと思ってたけど、蓋を開けてみればまさかの生物教師だった。学校で飼ってるアルパカとヤギの世話もしてる。

元女子校なら教師も女で、そもそもって美人だったらいいな〜と。そう思っていたのは俺だけではないだろう。そうだよなお前ら？  
元女子校受験するやつなんて下心しかないやつだよな？

だがしかし、俺たちの教室のドアを勢いよく開けたのは、漢ではなく美少女だった。ウチとは違う制服を着た美少女だった。

男子が沸いた。

「体育祭一緒にやりたい人、この指とーまれっ!!」

男子が群がった。

女子に制裁された(残当)

? ? ? ? ?

突然ー現れた謎の美少女アイドル、氷川日菜。

何も謎じゃないことは一旦置いてくとして、彼女は声高らかにこう言った。

「あー!! せきぐちかいだ!!」

「ヒエツ…」

変な声出た。

いやだつて… 突然出てきた他校所属の現役アイドルに、こんなク  
ラスの真ん中で、しかもフルネームで名前呼ばれたらそら怖いや  
ん…。びっくりするでホンマ…。

まあ氷川日菜が俺の顔と名前を知ってること自体は不思議じゃな  
い。

丸山さんに白鷺千聖、若宮さんに俺の顔は割れてるんだから、そこ  
經由で知ってたとしても不思議じゃない。昔ちよつとだけ大和麻弥  
とセツシヨンのなことをしたことあつたし、彼女も俺の顔を知ってい  
るはずだ。覚えてるか別だけどな。一年くらい前の話だし。

それに何より、氷川日菜は氷川さんの双子の妹だしな。

「むー。そんな怯えなくていいじゃーん。てゆうーかなんで怯えてるの  
? … あ、イヴちゃんやつほー!」

「ヒナさん、おはようございますー!」

「うん、おはよー」

気軽に挨拶とかする前に、いろいろ説明くださいませいませなかねえ…。  
脊椎反射で氷川日菜に群がった男子たち含め、この場で現状を理解  
している者は、氷川日菜除き誰もいない。

と、そこで俺たちの教室のドアが強めに開け放たれる。

「ちよつと日菜!?! あなた、一体何を考えているの!?!」

教室に入るや否やそう激昂するのは、我らが風紀委員、氷川紗夜さんだ。

氷川日菜が花咲川に侵入したのを、教師経由か、はたまた自分の目で見たのか、いずれかの手段で知ったのだろう。血相を変えて、の言葉が相応しい顔で俺たちの教室に乗り込んできた。

てか、塩月（A組担任）どこいった？

「あつ！ お姉ちゃん!! 体育祭一緒にやろく!!」

「何を！ 考えて！ いるのっ!!」

「ひ、ひたいひたい、ほっぺたいひっほっぺたいへ」

ちよつと涙目になりつつもどこか嬉しそうな氷川日菜。

状況が何も分かっていない俺たちへ、更なる追い討ちがかかる。

ガツシャーン、と盛大な音を立てて、窓から天災が飛び込んできた。  
弦巻

「話は聞かせてもらったわ!! 面白そうね！ 花咲川と羽丘、一緒に体育祭をやりましょう!!」

『もう好きにしてくれ』

A組の心は、新学期早々一つになった。

? ? ? ? ?

「美味しかったね、魚介豚骨つけ麺」

「めちやくちやな。普段つけ麺食べないけど、これはハマる」  
放課後。

天才と天災の会合は学校側にも大きく影響を与え、というか弦巻家の権力が九割だとは思うが、とにかく花咲川と羽丘の合同体育祭は実現することになった。

まあ別にいいんだけどな、俺としては。教師陣とか生徒会とか、その辺が忙しくなるだけだから。俺に実害はないし。あと蘭たちと一緒に体育祭できるし。

「次は鶏ガラと昆布だしの鰹節風味つけ麺が食べたいな」

「味の大洪水すぎるだろそれ」

おたえの要望でわざわざ池袋まで出てきてつけ麺を食った俺たちは、思いのほか満足して店を出た。

現時刻は午後二時十五分。昼食を摂るにとしては遅いが、おたえのバイトが始まる時間を考えればちょうどいい時間だ。

俺たちは軽く雑談をしながら、駅に向かう。

「そういえば海。昨日Twitterで見ただけど、来月発売のBABOMETALの新譜ね、九弦ギター使ってるらしいよ」

「九? . . . 九? 九って何? それベース二本用意するとかじゃダメだったの? . . . ?」

多弦ギターは基本、太い弦が増えていく。

六弦のレギュラーチューニングで一番低い音が、ベースの一番高い音と同じ音になる。そして七弦ギターの七弦目は、ベースの二弦目と同じ音になる。

つまり九弦ギターは、六弦ギターと四弦ベースを組み合わせた楽器になるわけなんだが. . . それってギターなの? ベースなの?

「分かんないけど、それが“ヘビイメタル”なんだよ」

「めたるしゅごい. . . . .」

「メタルといえば、昨日Iron Saberってバンド見つけたんだけど、海知ってる?」

「パワーメタルじゃん。パワーはいいゾ。<sup>パワー</sup>力こそが全てだ。あとおたえは早くメロデスを聴け。慟哭がお前を待ってる」

「? 慟哭とかはよく分かんないけど、とりあえず聴くね。何聴けばいい?」

「ん. . . ARCH ENEMYとかわりと有名じゃね?」

オタクやんけ!!

青春の欠片もない変態チックな話をしていると、すぐに改札までたどり着いた。

そこでおたえとはお別れ。見えなくなるまで手を振るおたえを見送る。

「さて. . . 俺はどうすっかな」

完全におたえが見えなくなっただけから、俺はふと呟いた。

このまま帰ってもいいんだが、せつかく池袋まできたんだからちよつと遊んでいきたい。まだ三時前だし。

映画は今あんまり観たいのなし、楽器屋は一昨日行ったしなあ。何をしようか考えながら、とりあえず駅を出る。

この辺は水族館とかプラネタリウムとか、遊ぶだけならいろいろあるが、如何せん一人だどこも虚しい。水族館とかプラネタリウムとか、カップルに心をやられそうだな。

「……本屋でも行くか」

テキトーに本買って帰る。

そう思い、頭の中で地図を広げて近くの本屋をいくつかピックアップする。

俺は小説ならなんでも読む雑食家だが、今のマイブームは恋愛小説だ。リサさんに何冊か貸してもらって読んだら意外と面白くてハマったんだよな。有○浩の『阪○電車』とか良かった。リサさんこんなの読むんだあ、って思ったけど。

正直、意外だった。なんかこう、もつと砂糖にハチミツぶちまけたみたいな恋愛話を読んでもんだと思ってたから。ほら、ひまりとかが好きそうな甘々のやつ。

リサさんに勧められてた『ノル○エイの森』、あれば買うか。村○春樹は何から手を付けていいのか分かんなくてまだ読んだことなかったけど、この気に読むのもいいかもな。それか、今度映画化するっていう島本○生の『R○d』でもいい。

そんなことを考え、最寄りの本屋へと足を向けた、その直後。

「あー！・せきぐちかいだ!!」

「ヒエッ!」

二度と味わいたくなかったデジャブを、よりにもよってこんな公衆の面前で味わってしまった。めちやくちや変な声出た。

★ ☆ ★ ☆ ★

「んーつとねー、じゃーあたしはこの、季節のフレッシュフルーツパンケーキってやつにしよう。海くんは？」

白を基調にした、明るい店内。

あたしたちは今、とあるパンケーキ屋さんに来ていた。

前から気になってたんだよねー、この『幸せ〇パンケーキ』ってお店。

結構人気のお店で、普段は行列もできるみたい。今は平日の昼間ってことで待ち時間0だった。ラッキーだね。

ここのパンケーキはインスタでよく流れてくるし、美味しかったら今度お姉ちゃんとも一緒にきたいな。

「え、あ、えと… あ、じゃあバナナホイップパンケーキで…」

とても居心地悪そうに、目の前の男の子はおずおすとメニューを指差した。

「むー。だからさあ、そんな怯えなくたっていいじゃん。あ、それとも甘いもの苦手… なわけないよねー。彩ちゃんと色んな甘いもの食べに行ってるくらいだし」

さつきからずつとこうだ。駅の前でたまたま彼を見つけたから声をかけたのに、ずつとビクビクしてる。周りの目を気にしてる？ なんだでろ。

「そりゃ街中で現役アイドルに大声で呼び止められた挙げ句、手え握られて連行されたら普通にビビりますよ… てか白鷺さんにまた怒られそう」

「千聖ちゃん？ あー、まあ大丈夫じゃない？ 別にパスパレは恋愛禁止ってわけじゃないし。そもそもあたし、キミに恋愛感情とか持ってないし！」

お姉ちゃんとセッションしてたのには嫉妬してるけど！

「そんな眩しい笑顔で言われたらさすがに傷付くんですが… つーかなんで俺連行されたんすか」

「ん？ 別に…？ 特に理由はないよ？ たまたま見つけたからってだけ」

「……… さいですか」



あ、なんか遠い目してる。千聖ちゃんもたまに似たような目してる。どこ見てるんだろ。

「あっ！ そーだ、用事あるよあたし！ 海くんに！」

「はあ、そうなんですか。…… 現役アイドルが？ 俺に？ …… 面倒事じゃないですよね？」

相変わらず居心地は悪そうだけど、どこか吹っ切れたみたい。

さっきまでと違ってソワソワしなくなった海くんに、あたしはお願い事をしてみる。

「そんな嫌そうな顔しないでよ。お姉ちゃんの写真撮ってきてっただけだから！」

「氷川さんの」

「そう！ 勉強してるお姉ちゃんに、部活してるお姉ちゃんに、あと生徒会の仕事してるお姉ちゃんでしょ？ それからバンドやってる時のお姉ちゃんとか！」

「はあ」

「こう、不意のショットがいいなく。カメラに気付いてない、素のお姉ちゃんの写真が欲しい！」

「それもかしなくても盗撮系じゃないですかね。ヤですよ俺、まだ捕まりたくないですもん」

「大丈夫だよ。未成年だから名前は公表されないしっ」

「そういう問題じゃねえ」

少しだけるんっってくる会話をしていると、注文してたパンケーキがあたしたちの前に並べられた。

いちご、キウイ、パイナップルにバナナ。いろんなフルーツがふわふわのパンケーキの上に乗ってて、もう見た目だけでるんっって感じ！

「おいしそー！ 写真撮ろーっつと。…… あ、海くん写っちゃった。んー、じゃあこっちは彩ちゃんに送ろーっつと」

「まてまてまてまて」

「んー…… 一枚目が一番盛れてるなく。まあいつか！ 一枚目SNSに載せちやお〜」

「まてまてまてまてまてまてまてまてまて！！」

全力であたしのスマホを奪いにくる海くんの猛攻を、あたしはひらりひらりと躲していく。

「だいじょーぶだつて〜。顔は写ってないからさ。ほら、いつもの彩ちゃんとのヤツと一緒にだよ」

「いやそういう問題じゃ…え、なんか丸山さんからLINEきたんですけど。『今の何』ってLINEきたんですけど」

「あたし千聖ちゃんから電話かかってきた。なんだろう？もしもーし！」

『日菜ちゃん!? 今上げたインスタのストーリーは何!? まさか関口海ではないでしょうね!』

「え、うん、そだよー。あ、ごめん千聖ちゃん、あたしパンケーキ食べなきゃだから電話切るね。バイバイ」

『ちよ、日菜ちゃん! まだ話は——』

「それじゃあ、いただきまーすっ!」

「どんなメンタルしてるんですかアンタ」

呆れたような目を向ける海くんを一旦無視して、あたしはパンケーキとフルーツをいっぺんに頬張る。

「ソー!! おっいしく!! パンケーキすっごくふわふわだ〜! るるんつてする!!」

ジャンクフードが好きなたただけで、こういう甘味も大好きだ。クレープとか無性に食べたくなる。

タピオカはあんまりるんつてこなかったけどね〜。美味しいは美味しいんだけど、並んでまで食べなくていいかな〜。

「…ほんとだ。めちやくちやふわふわ。卵の味強いですね、このパンケーキ」

「それがいいんじゃない! あ、そつちのも一口もらつていい?」

「え? はい、いいで…返事聞く前に食うんだつたら聞かないでください」

「こつちも美味しく!! チョコとホイップがパンケーキに合う〜!」

「無視かよ」

本当に美味しい。もつと色んなのが食べたいし、これは今度お姉

ちやんと一緒に来なきや！

あと彩ちやんとかとも一緒に来よう。そうすればきつと全種類食べれるよね。

「あ、そうだ。海くんもあたしのやつ、一口いる？」

「…いや、大丈夫です。現役アイドルの食べかけとか貰った日にはファンに呪われるかもしれないんで」

む。

「それさー、『現役アイドル』とか、『アンタ』とかじゃなくて名前です。知ってるよね？ あたしの名前」

「はあ、まあ…じゃあ、氷川さん」

「それじゃお姉ちゃんと区別つかないよ。まあお姉ちゃんとお揃いの呼び方なのは悪くないけど…不便だよ、普通に」

「え。じゃあ…氷川先輩？」

「ノンノン。名前って言ったじゃん。日菜でいいよー」

「…俺、マジでそろそろパスパレのファンに刺されそうなんですけど」

「夜道には気を付けなねー？」

「氷川先輩でいかせていただきます」

本当に冷や汗をかいてる海くんは、焦りを隠せない様子であたしを氷川先輩と呼んでくる。ちよつと面白い。

「まー、夜道とかは冗談だよ。あたし、ファンからも普通に下の名前で呼ばれてるしさー、別にそのくらい気にしなくていいと思うけどねー」

「は、はあ…じゃあ…日菜さんで」

「うんうんっ。それじゃあ海くん、お姉ちゃんの盗撮写真、よろしくね〜！」

「いえそれは承諾した覚えはないです」  
「え〜!？」

素っ気なくパンケーキを食べる海くんは、あたしは不満まみれの声と視線をぶつけてみる。ま、最初っから期待してなかったけどね〜。つてゆーか、男がお姉ちゃんのこと隠し撮りなんてしたらあたしが

許さないし。

こいつがお姉ちゃんの近くにいってもいい奴なのか、ちよつとだけ試してみたくなったんだよね。

結果は、まあギリギリ合格かな。悪い子じゃなさげだし、それに彩ちゃんとかイヴちゃんからも懐かれてるっぽいし。

「ねー、本当に食べなくていいの？ あたしのパンケーキ。あたしだけもらっちゃっててふびよーどーじゃない？」

「……じゃあ、日菜さんが手え付けてない方いただきます」

「もー。別に気にしなくていいのにー…… あ、じゃあこれでいいじゃんっ！ はい、アーン」

「!? ちよ、なにを……!?」

「あはっ！ 彩ちゃんに見せてもらった写真と同じ顔だ〜！ おもしろーい！」

今日、本当は一人で食べにくる予定だったけど、たまたま彼を見つけて良かった。やっぱり話し相手がいた方がるんってするし。

耳まで真っ赤にした彼の顔は、本当に彩ちゃんに見せてもらった写真と同じ顔だ。

あんなに女の子に囲まれてるのに、なんにも免疫ないのかな。

何か重い病気を患ってるんじゃないかって千聖ちゃんが言ってた意味、ちよつとだけ分かったかも。これは不治のやつだね。

「海くんってさ〜、るんってくるよね〜」

「るん……？ それ褒めてます……？」

「褒めてる褒めてる！ キミ、なかなか意味分かんなくてるんってするよ〜」

「褒めてないですなそれは」

ムスツとする彼を置き去りに、あたしはパンケーキに舌鼓を打つ。

羽丘は女子校だし、今まであんまり男の子と接したことはなかった。

お姉ちゃんに付く悪い虫だー！ って思ったりもしたけど、悪い子じゃない。

「うんうん、とってもるんってするよ！」

だから、一応は認めよう。

彼はあたしをるんつとさせてくれる人だ、って。

そして、期待しよう。

お姉ちゃんが認めたこの子が、あたしにもつとるんつを届けてくれるかも、って。

ああ、でもやっぱり。

彼の前で見せるお姉ちゃんの写真。あたしにはなかなか向けられないアレを向けられてるのは、やっぱりちょっと妬ましいかな。

非日常は稀に訪れるからこそ価値がある

ジブンが彼に出会ったのは、だいたい一年くらい前。去年の初夏の頃だったでしょうか。

とあるお仕事で音源の収録をした際、彼と一緒に演奏した事があります。

「あ…えと、はじめまして。関口海です。今日はよろしくお願いします…？」

何故か状況をよく理解していない様子だった彼は、たどたどしくも、ジブンを含めた今回の演奏メンバーに挨拶をしていました。

今回の収録は人気アイドルのCD音源用らしく、当時中学生だった彼がスタジオに現れた時は皆さん驚いていましたっけ。なんでも、そのアイドルの担当マネージャーが彼のお母さんなのだとか。それにしても中学生でプロの音源収録をするのは異常です。というか、中学生でお仕事とかしているんですかね？

まあ、ジブンも高校生の身分でスタジオミュージシャンのお仕事をやらせていただいているので、他人のことは言えないんですが。

彼の担当はギター、それもアコギパートオンリーでした。

スラップ親指で弦を叩く「サムピング」と、人差指などを弦に引つけてハジクことで音を出す「プル」の2つを使って弾く奏法。別名チョップパー。主にベースで見られる奏法だが、ギターでやってもかっこいい。ただし、ギターの場合は1, 2弦が切れやすいので注意。大石昌良さんとかMIYAVIさんが特にすごいギタースラップをします。も入ってくる難しい譜面だったのですが、彼はそのプロ顔負けの演奏でジブンたちをもう一度驚かせました。いやもうホント、なんでも無名なのか分からないレベルの演奏でしたよ。

ジブンより年下の子の演奏でここまで心動かされる日がくるとは

思っていませんでした。ギターのスラップなんて、その時初めて見ましたし。

その後も、彼とは度々会うようになりました。歳が近いということもあり、ジブンと彼はそれなりに仲良くなったと思います。

しかし秋頃になると、受験勉強に本腰を入れるということで、その姿を見なくなりました。

非常に残念でしたが、受験ということなら仕方がないですよ。陰ながら合格を祈りました。

そして、それから一年後。

彼と再会したジブンは——犬耳を付けていました。

★ ☆ ★ ☆ ★

九月四日。

昨日モカに財布の中身が空になるレベルで奢らされた挙句、ネットレスまで強請<sup>ねだ</sup>られた俺は、軽くなってしまった財布から一枚のチケツトを取り出した。

ちくしよう、ただでさえ先週のリサさんの誕生日に買ったプレゼントで懐が寂しかったのに。昨日だけで諭吉が二人は逝ったぞ。モカのやろう、俺の誕生日がきたらゼツテー何か高いもん奢らせてやる。

「はーい、入場券確認しましたー。どうぞお入りくださいーい」

ニコニコと営業スマイルを浮かべる女子生徒からの許可を得て、俺は盛大にデコられた校門を抜ける。

「いらっしやいませ〜！ タピオカありますよ〜！」

「焼きそばいかがですか〜！」

女の子特有の高音ボイスで、そこかしこから集客の呼び声が聞こえてくる。

そう、今日は羽丘女子学園の文化祭一日目なのだ。

さすが女子校。文化祭にも、羽丘の学校関係者から貰った入場券がないと校内に入れもしないらしい。まあ不審者とか怖いもんな。

そんで当たり前だけど、屋台とかやってるのも女の子ばかりだ。

「タピオカ〜！ タピオカいかがですか〜！」

「お兄さん！ いい娘入ってるよ〜」

「茹でたてのタピオカはいかがですか〜!!」

「タピオカアイスありま〜す!!」

タピオカと怪しい店しかないのか（）

「あ、海くんいたー！ やっほろ〜☆」

若干どころじゃなくらいに引いていると、どこからかそんな声が聞こえてきた。

周りが騒がしくて声の出処が掴めなかったが、少し首を回してみると、右斜め前の方でリサさんが手を振っているのが目に入る。

「おはようございます。チケット、ありがとうございます」

「いいっていいって☆ それよりほら、早く友希那のいる教室行こっ

！ 友希那のシフト、朝しかないんだって〜」

「マジすか」

事前に待ち合わせの予約をしていたリサさんと無事合流し、俺はリサさんの後ろに続いて歩く。

最初は蘭たちと合流することも考えたのだが、五人とも朝から仕事があるから無理とのこと。蘭のクラスはお化け屋敷、ひまりたちのクラスはタピオカメインの喫茶店をやっているらしい。タピオカそんなに必要なか？

「そういや、リサさんのクラスは何やってるんですか？」

「うち？ うちはね〜、演劇やってるよ☆ 薫発案の」

「なるほど、シエイクスピアですか」

「あつたり〜☆ ちなみに演目は王道のロミジュリ」

あの人も好きだなあ。

「ロミオ役はもちろん薫で、ジュリエット役が日菜だよ。あ、そういえば聞いたよ〜？ 日菜、この前花咲川に特攻したんだってね」

「うちの教室に現れましたよ、あの天才。なんかうちの天災と投合して、体育祭一緒にやるって言ってましたけど」

「聞いた聞いた☆ 楽しみだね〜。海くん、運動は得意なほう？」



「どつちかっていうと苦手ですかね。体力とかは自信ありますけど、運動神経はそんなについて感じます」

「へー。意外。バスケットか得意そうなのに」

「体育以外での経験がないです」

襲い来るタピオカの押し売りを掻い潜り、俺とリサさんはようやく校舎に入った。

てか本当にタピオカしかないんか？ この学校は。タピオカスパゲッティってなんだよ、ちよつと気になったじゃねえか。絶対食べないけど。

「そういや、リサさんは何役なんですか？」

「アタシは小道具担当だったから、本番は出番ないんだ。準備頑張ったってことで受付の仕事も免除されたし、今日は一日海くんと一緒にいられるよ☆」

「なあ、るほど…？」

「あ、ちよつと顔赤くなった」

「なってますん」

「なってるって☆」

校舎に入ってからタピオカを一切見なくなったことに逆に不安を抱きつつも、俺はリサさんの口撃を軽く流した。流したったら流したんだよ、文句あつか。

「…あ、海」

リサさんから視線を外そうと右側の窓の外を眺めていると、左の方からリサさん越しに声がかかる。

ふとそつちを見てみると…なんか白い布のような何かはこちらを見ていた。変な息漏れた。

言葉が出ない俺に代わり、リサさんがその布に対応する。

「その声は…もしかして蘭？」

「あ、はい」

「…え、蘭？」

「うん」

エジプト神話に出てきそうな白布から、聞き慣れた声が聞こえてく

る。

白布がゴソゴソと身を振り、そのヴェールがするりと脱げた。

「…ほんとに蘭じゃん」

「海、ビビりすぎ。昼の、しかもこんなにいる場所だよ？ お化けが出るわけないじゃん」

「いや、お化けとかじゃなくて。フツーにビビるだろ、突然布に話しかけられたら。ねえ？ リサさん？」

「んー… まあ確かに、ちよつと驚くかな」

「ほら」

「ビビり」

「なんだア…？ てめえ…」

喧嘩売りにきたのかこいつ。

「まあまあ☆ それにしても、蘭はなんで布なんて被ってたの？」

「うちのクラスの宣伝です。うち、お化け屋敷やってるんで…」

ラスが書いてある看板、教室に忘れちやったんですけど」

「はっ、うっかり屋敷」

「仕返しのつもり？ うざ」

「まあまあ！」

いつも通りの軽い喧嘩腰会話をしていると、リサさんが結構本気めに間に入ってくる。

「なんだか昔のひまりみたいだなあ。最近じゃ、全然本気じゃない、ただのじゃれ合いだって気付いて口も挟んでこなくなったけど。」

「うちのクラス、お化け屋敷してるんで。リサさんもぜひどうぞ」

「うっ… お、お化け屋敷かあ…。時間あればいくね…」

「俺は——」

「海はどうせ来れないでしょ。ビビりだし」

「はあ？ お前だつて幽霊苦手なくせに」

「なに？」

「なんだア…？」

「まあまあまあ!! ほら海くんっ、友希那のシフト終わっちゃうから！ じゃあね蘭！」

リサさんに背中を押されるようにして、俺は蘭から引き離される。まあ俺も蘭も、昔遊園地のお化け屋敷に入って二人してなきじやくった経験があるからな。相手を貶したら自分も傷付く。

にしても足とか手とかを触ってくるのはマジで反則だろ、あのお化け屋敷。俺なんて足首にくつきり手形残ってたし。マジで怖かった。あのせいで俺も蘭も暗いところや幽霊系が苦手になったんだぞ。子供にトラウマ植え付けたんだ。

でも、なんでかあのお化け屋敷で触られたのって俺と蘭だけなんだよなあ。ひまりとつぐ、巴も一緒に入ったのに。

「海くんたち、仲良しじゃなかったの…?」

「? 蘭のことですか? 仲良いですよ? 親友って言えるくらいには」

「いや、でもさっきの…」

「軽いじゃれ合いですよ。あ、友希那さんのクラスってあれですか?

アニマルカフェってとこ」

「ええ… ん、まあ本人が言うなら…。あつ、うん。そだよ☆ あそこで友希那がネコミミ付けて接客してる…はず」

「はず」

「確証はないのか。」

「あはは… いやあ、友希那って音楽以外はホントに…なんてゆーの? 不得意っていうか… その、ポンコツでさ」

「おお… 急にデイスるじゃないっすか」

「配膳とかちやんとできるかな、って。最悪『湊さんは立ってるだけでいいから! マスコットに徹して!』ってなってるかも…」

「マスコットにはなるんですね」

「友希那は美少女だから。圧倒的美少女だから」

「やだ… この人、目がマジだわ…」

若干の恐怖を抱いているうちに、俺たちは二年B組の教室、『アニマルカフェ』の前に辿り着いた。

さて、花咲川の文化祭では俺も喫茶店を催した者の一人だ。他校の喫茶店がどの程度のクオリティなのか、しかとこの目で拝ませてもら

おう。

ケモ耳美少女楽しみ！ とかそんなんじゃないよホントだよ。  
湧き上がるワクワクを抑えつけ、俺は教室のドアを潜る。

「いらつしやいませ。何名様で…… あら、リサと海じゃない」

黒いネコミミを携えた美少女がそこにいた。

「グフツ」(吐血) (鼻血)

「リサさんしつかり！ ああ……こんなに血が……！」

「わ、Y：M……T……」(『友希那 マジ 天使』の意)

「逝かないで…… 逝かないでリサさん……!!」

「あなたたち、店先で妙なことしないでちょうだい」

普通に怒られた。

? ? ? ? ?

「あ、俺アールグレイとチーズケーキで」

「じゃあアタシはカフェオレと抹茶ティラミス。以上で〜」

一通りコントも終え、席に案内された俺とリサさんは、友希那さんに怒られるのはもう嫌だったので普通に注文をする。

「……ん。了解したわ、少し待っていてちょうだい」

注文を聞き届けた黒猫美少女こと友希那さんは、俺たちの注文をオーダー票に書き写し、キッチンの方へと帰っていく。

振り向いた際に分かったことだが、友希那さん尻尾も付けてた。

歩きたびにぶらぶら揺れてて、それを見たりサさんがずっと鼻を押  
えてるんだけど、俺は知らないフリをする。この人ガチ勢すぎる。  
ろ。

「あ、そういえば海くんはこのあとどうする予定？」

「ん…… 昼にAfterglowのライブがあるらしいんでそれは  
見に行きたいんですけど、それ以外は特に考えてないっすね。テキ  
トーにブラついて時間潰そうって思ってます」

「蘭のとおのお化け屋敷、行かないの？」

「行きません」

わざわざ怖い思いをしに行こうとする奴らの気が知れない。

あんなん、企画側も利用者側も狂人の思考だろ（個人的意見です）  
そっぽを向いた俺をリサさんがケラケラ笑って見ていると、俺たちの席に料理と飲み物が運ばれてきた。

てかりサさんも幽霊とか苦手じゃん。なにわろてんねん。

「あの…間違ってたらすみません。関口海さん、ですか？」

料理を運んできた犬耳のウェイトレスさんが、おずおずと声を掛けてきた。

何事だろうと、そのウェイトレスさんの顔を見上げる。

するとそこには、わりと見覚えのある、地味めだが整った顔が。

「あつ。大和さん？」

大和麻弥。パスパレドラマ担当、上から読んでも下から読んでも大和麻弥。

そんな現役のアイドルがそこにいた。最近よくアイドルに会うな。

「麻弥じゃん、やつほー☆ あれ？ 海くんと知り合いなの？」

「あ、はい。昔お仕事で少し…」

「仕事？」

高校の文化祭にしてはレベルの高いケーキの写真を撮り終えたりサさんは、こてんと首を傾げた。

お仕事。まあ仕事つちや仕事だったか。俺にギャラ出でないけどな。まあ毎月の小遣いが千円くらいアップしたから何も文句なかったけど。

「はい。音源の収録で何度かお会いしてるんですよ」

「収録？… って海くん、そんなことしてたの!？」

「まあ、ちよつとだけ。でもアレですよ、お母さんの伝手でアコギだけ弾かせてもらっただけです。今はもうしてませんし」

「ジブンのらるの界限では有名ですよ、海さん。中学生であそこまで弾ける人はなかなかいないですから」

そんなに褒められたら照れちゃうよお。

「あ、すみません！ ジブンそろそろ仕事に戻らないと…。どうぞこゆっくり！」

そう言つて、大和さんは駆けていく。

それにしても、今のご時世はアイドルが普通に接客できる時代なんだなあ。丸山さん然り、イヴちゃん然り。さすがに白鷺さんが接客業でアルバイトしてたら騒ぎになるんだろうけど。

「いやあ…驚いたよ。まさか海くんがスタジオミュージシャンやってたなんて」

「そんな大層なもんじゃないですけどね。アコギパートなんて、一曲中に三十秒もあればいい方ですし」

「それでもすごいって！ ギターめっちゃ上手いって思ってたけど、本当にプロレベルだったとはね〜」

えへへ（ガチデレ）

その後もリサさんに褒めちぎられた俺は、終始えへえへ言つて照れながらチーズケーキを食べた。めっさ美味かった。

いや本当にむちゃくちゃ美味しかった。これ高校の文化祭のレベルじゃないよ。ケーキ屋の娘でもいるんか？

★ ☆ ★ ☆ ★

「それでは、ジブンお先に失礼します！」

クラスメイトの方々に挨拶をし、ジブンは教室を出ました。

今日のジブンのシフトは午前中だけ。午後は文化祭を回ろうと思つてます。

まずはタピオカを飲みたいですね。

今年は異常なほどにタピオカのお店があるのですが、その中でも三年C組のタピオカのお店はとて本格的なお店だと聞きました。とりあえずそこに行つてみようと思ひ、目的地へと行くために振り返つたところ。

「あ」

見覚えのある顔が視界に入りました。

「ん？ あ、大和さん」

相手もジブンに気付いたらしく、こちらを向きました。

両手にタピオカの入ったカップを持つ海さんは、ジブンを確認したあとにこちらへ歩み寄ってきました。

「お疲れ様です。仕事終わった感じですか？」

「はい、ついさつき終わったばかりです。海さんは？ リサさんと一緒だったのでは？」

そう。今、海さんは一人です。

先程まで一緒にいたリサさんはどこか行ってしまったのでしょうか？

「あー。リサさんは、なんか色んなクラスから助け求められちゃって、今そっちのヘルプ行ってます」

「助け…？」

「タピオカが上手く茹でれないとか、パンケーキが焦げるとか、演劇のヒロイン役の子が逃げたとか」

「最後のは何があったんですか…？」

「さあ？」

肩を竦めてみせる海さん。

しかしヒロイン役が逃げるとは… ちよつと経緯が気になるところです。

「あ、大和さんタピオカ好きですか？」

「え？ あ、はい」

「じゃあこれあげます。まだ口付けてないんで安心してください」

そういって、海さんは右手に持っていたタピオカのカップを差し出してくるので、反射的に受け取ってしまいました。

「いやー。リサさんとそれ買ったはよかったんですけど、口付ける前にヘルプに行っちゃって」

「な、なるほど… あ、これ三年C組のタピオカなんですか！ ジブン、ちよつどこのタピオカ買いに行こうと思ってたところなんです

よ。… あっ、お金」

「いいですよ。俺がリサさんに払っとくん」

「いや、それは悪いですよ…！」

「今日接客頑張った報酬ってことで。まあちよつとカツコつきたいも

「なんですよ、男って」

「その後もジブンにお金を払わせようとしないうちに、ジブンが先に折れました。ありがたく頂くことにします。」

「……あ、美味しい。幸○堂の味に似てますね。」

「大和さん、今日はもう仕事ないんですか?」

「タピオカに舌鼓を打っているジブンに、海さんはそう聞いてきました。」

「そうですね、今日のところは」

「今後の予定は?」

「予定ですか? そうですね……演劇部の公演も今日はないですし、特にこれといって予定はないです。けど、どうしてですか?」

「いや、できれば一緒に文化祭回ってもらえないかなー、って思いました」

「一緒に……ですか?」

「頭をかきながら、海さんは言葉を続けます。」

「リサさんいなくなっちゃって、知り合いも用事あるっていうし、そうなるって俺一人になっちゃうんですね……」

「まあ、そうですね」

「女子校の文化祭に男一人ってのはどうにも居心地がですね……その、周りの目線とか……」

「あー……」

「合点がいききました。」

「確かに、男性が一人で女子校を闊歩するのは居心地の悪いものがあるかもしれないですね。学外からの来賓者もほとんどが女性の方です。」

「校内の男性の割合は一割程度ではないでしょうか?」

「ジブンが逆の立場だとしたら……うん、確かに誰かと行動を共にしたくなりますね。」

「いいですよ、一緒に回りましょう!」

「! あ、ありがとうございます……! めちゃくちゃ助かりますマジで」



頭を下げる海さんに、周りの視線が集まります。

ちよつと恥ずかしいのでやめて欲しいですね…。

「あはは…。海さんはどこか見たいところとかつてありますか？」

「そつすね…。とりあえずAfterglowのライブは見たいなつて」

「なるほど…。ちなみに、Afterglowのライブは何時からですか？」

「十三時って言っていました」

十三時。

今が十二時前なので、残り一時間くらいですか。

「それでしたら、ひとまず体育館を目指しましょう。道中でお昼ご飯を済ませたりすればちょうどいい時間に——」

「あ、麻弥ちゃんはっけーん!!」

ジブンの声を遮り、ジブンの名を叫ぶ声が聞こえました。

この声は…

「日菜さん？」

「やつほー！ あ、海くんも一緒だ！」

「あ、ども」

手を振りながら、日菜さんがこちらに駆けてきます。

いつも通り元気な明るい声音と表情ですが、一つ、いつもとは大きく異なる点がありました。

「あの一…。日菜さん？ つかぬ事をお聞きするのですが…。その衣装は…。」

「これ？ ジュリエットの衣装だよ！ 可愛いよねっ」

「逃げたヒロイン役つてもしかしなくても日菜さんですよね!？」

意外なところで謎が解けてしまいました!?

「だってー。同じ劇を何回もやるのつまんなーい！」

「いえ、つまるとまらないの話ではなくてですね…。！」

「それより麻弥ちゃん！ これからバンドやろ！ はいこれステイツク」

「なんて？」

思わずステイックを受け取ってしまいました。本当に意味が分かりません。なんで突然バンドをやるうなんて……。あ。

「あ、あのお……もしかしてお仕事です……?」

「? んーん、違うよー?」

違うんすか!!

なら本当に意味が分からないのですが!?

「さっきAfterglowのリハ見てただけど、そしたらムショーにギター弾きたくなっちゃって! あ、海くんも一緒にやろよ! あたしがギターボーカルやるから、海くんはリードね。うん、  
けってーい!」

「???」(訳も分からずに巻き込まれ事故)

「ああ! 海さんが被害者に!!」

…… あ、でもこれ、海さんと久々にセッションできるチャンスなのでは……? (手のひらが返る音)

「じゃああとはベース探せばライブできるね!」

「ライブ? え、ちよつと待ってライブやるの? 今から?」

「麻弥ちゃん、ベースって誰か心当たりある?」

「ねえって。マジでライブやんの?」

「そうっすね…… リサさんの手が空いてれば良かったんですが……」

「あれ、大和さんいつの間にかそっち側に行っちゃったんすか!?!」

日菜さんは有言実行の人ですし、きつと理事長や生徒会、文化祭運営委員からライブ許可は得ているのでしよう。もしくはこれから取るか、ですね。

どちらにしろ、日菜さんはやると言ったらなかなか止まりません。ならいつそ付き合ってしまった方が楽です。最近学びました。

「リサちー? そっか、リサちーに頼もーつと!」

そう言い残した日菜さんは、どこかへと走り去っていきます。

日菜さんの姿が見えなくなってすぐに、日菜さんからLINEがきました。

Hina『十五時半からなら体育館のステージ使っていいらしいから、そこでライブね! 曲はテキストにボカロ曲やろ!』

「テキストな選曲が適当じゃないんですが」

横から覗き込んできていた海さんが、心底疲れたようなため息と共に不満をこぼします。

ジブンも少々テンションが上がってしまいましたが、さすがにこれは海さんにご迷惑が……

「大和さん。ロキやりたいって日菜さんに言っついてください」

「案外乗り気!？」

「いや、もうやるしかないんだろなって思って。どうせなら弾いて楽しいのやりたいじゃないですか」

あ、これ諦めつてやつですね。分かります。

「それにロキつて、この前Roseliaがコピーしてたんですよ。リサさんが巻き込まれても、一回やった曲ならなんとかなるんじゃないですかね」

「あー、なるほど」

「日菜さんはまあなんとかするだろうし、大和さんも一曲ならなんとかなるでしょう?」

「まあ……」

完成度はたかが知れてますが、ある程度では通せると思います。

そこは海さんがジブンを信頼してくれているんですかね……。

「とりあえず俺、家帰つてギター持ってきますね。往復三十分もかかんないと思うんで、すぐ戻ります」

「あ、はい……。すいません、突然ライブなんてやることになってしまつて……」

発端は日菜さんのわがままとは言え、ジブンもそれに乗っかってしまった身。巻き込んでしまった海さんには、悪いことをしてしまいました。

「全然大丈夫ですよ。慣れてますし。海外まで拉致られるよりましです」

拉致は普通に事件なのでは？

「それに、久々に大和さんのドラムでギター弾いてみたいですし」

そう言つてはにかんだ海さんは、くるりと背を向けて歩き出しまし

た。

先程の宣言通り、家へギターを取りに行くのでしよう。

その後ろ姿を見送るジブンは、高揚感を抑えきれずにいました。彼と演奏できる。それが嬉しくて堪らない。

「ふへへ…。」

自然と笑みが溢れてしまいます。

彼がエレキギターを弾く姿を見るのは、初めてではありません。まあ生で見るのは初めてなんですけどね。

以前イヴさんと仮のバンドを組んだ時、その動画を拝見しました。彼の技量は、去年より上がっています。それだけではなく…彼は相変わらず、心底楽しそうにギターを弾いていました。

あまり楽器の得手不得手について言いたくはないのですが、海さんほどの実力者とは一緒に演奏したいと思ってしまうのも事実。

それに、あんなに楽しそうにギターを弾かれては、こちらまで楽しい気分になってきますし。

「楽しみつすねえ…ん？」

不意にスマホが鳴りました。珍しいことに、LINE通話の通知です。

相手は… 日菜さん？

「も、もしも…？ どうしましたか、日菜さん？」

『もしもし麻弥ちゃん？ リサちー捕まえたよー！ ベース弾いてくれるって！』

「そうですか、それは良かった」

『あとねー。事務所ライブやることバレたっぽくて、どうせやるならってことでカメラがくるんだってー。YouTubeで配信するって言ってたー。それだけ。じゃ、また後で！』

「?????」（処理落ち）

なんて???

星の鼓動を聞いたことはあるか

キラキラドキドキしたい！

そう思って始めたギターは、思ってた以上にとってもキラキラしてた。

けど、その全てが輝いてたわけじゃない。

ドキドキを感じた舞<sup>SPACE</sup>台に行きたくて、もっともっとキラキラしたくて。

でも、その道はとても険しかった。

輝く舞台に立つためには、甘いことばかり言うてはいられなかった。

たくさん練習をして、努力を積んで、それでも届かない。

練習は好きだし、努力も苦じゃない。でも、決して楽じゃない。

あの輝きを求めて走ってきたはずなのに、その光を見失った。

『あんたが一番できてなかった』

その通りだった。

どれだけ頑張っても足りなかった。

心が折れ、弱気が体にまで影響を与えだした時。

彼がそっと手を差し伸べてくれた。

『努力は必ず報われる、なんてことはない。けどさ、香澄。努力はお前を裏切ったりはしないよ』

『ポピパはすっげえいいバンドだ。技術だけじゃない、メンバーがな。

お前はお前らしく、仲間に頼ってけよ』

『練習なら俺も付き合ってる。だから香澄、お前は諦めるな』

彼だって、自分の練習で手一杯だったはずだ。

当時はあんまり寝てなかったと思う。目の下のクマ、凄かったし。

それでも彼は、私に声をかけてくれた。手を差し伸べてくれた。支

えてくれた。私の欲しい言葉を言ってくれた。

私がSPACEで演奏できて、今日までバンドを続けてこれたのは、ポピパのみんなと、彼のおかげだ。過言なんかじゃなくて、本当にそう思う。

彼は、私にとって、とても大切な人。

ポピパのメンバーやあっちゃんと同じくらい、とっても好きな人だ。

だから私は――

「ねえ海くんっ！ 今日の放課後デートしよっ！」

「!!!」

彼をデートに誘ってみた。  
???

★ ☆ ★ ☆ ★

「ん〜！ これおいしく！ 海くんのも一口ちよーだいつ！」

「はいはい」

目の前の元気猫少女、戸山香澄に、俺は自分のパフェを差し出す。

九月も半ば。

そろそろ体育祭の準備も始まるかという、残暑の季節。

実力テストなるものをついさっきやり終えた俺たち花咲川の生徒は、今日は午前中だけで学校が終わっていた。

定期テストとは違って赤点はないテストだが、テストはできるに越したことはない。しっかりと対策を立て、昨日まで計画的に勉強していた意外にも真面目な俺は、今日はすぐに帰って寝る予定だったのだ。

そして夜は録り溜めしてたパスパレの出るバラエティ番組を見るはずだった。

しかし、だ。

なんで俺は渋谷で香澄とパフェなんか食ってるんだろう？

「海くんのストロベリーパフェも美味しい！」

「そうかい。そりゃ良かった」

「西〇フルーツパー〇ー、一回きてみたかったんだ。付き合ってたれてありがとねっ、海くん！」

眩しい程に笑顔を弾けさせる香澄。

それを見てちよつとだけドキツとするが、すぐにパフェを食って顔を冷やす。

さて、香澄と渋谷にパフェを食いにきてる理由だが…これがよく分からない。

テスト終わって俺が帰ろうとしてたら教室のど真ん中で香澄から「デートしよ」って言われたところまでは覚えてるんだが、そのあとはちよつと動揺してて記憶があやふやだ。気付いたら渋谷にいた。

俺自身、渋谷にはわりとよく来る。

というのも、渋谷はライブハウスが多いのだ。

注目してるインディーズのバンドも多く渋谷でライブしてるし、それにはよく行くんだ。

タワ〇コもあるしな。

けど、こんなパフェとか、オシャレなところは一回も来たことがない。

周りもなんか女子高生多いし、正直めちやくちや緊張する。香澄の声が大きいのも一因だ。周りの目もちったあ気にしろつての。

「それで？」

「ん？」

ん？ じゃねえよ首傾げんな。

それはこつちのリアクションだろ。

「何、デートって」

「デートはデートだよ！ 知らないの〜？」

あ？（あ？）

「そういうお前は知ってるのかよ」

「ふっふーん、ばっちり知ってるもんねっ」

ドヤ顔すんな腹立つ。

「デートっていうのはね？ 仲良しの男女が一緒に遊ぶことを言うんだよ？ おばあちゃんが言ってた！」

「なるほどな」

つまり恋愛系ではない、と。

ちよつと安心した。

パフエも食べ終わり、支払いも済ませて店を出る。

「んじゃ、このあとどうする。俺、渋谷はライブハウスとタワ〇コと二〇りくらいしかしらねえけど」

「1〇9とか行ったことないの?」

「ない」

「じゃあそこ行ってみよ!!」

「やだ」

「それじゃあレッツゴー!!」

「話を聞け暴走列車」

迷いなく、香澄は俺の手を取る。

恥ずかしいからやめて欲しい。

「海くん、普段服とかはどこで買うの?」

「ユニ〇ロ、G〇、R A〇E B L U E、め〇ま屋」

「めだ〇屋って何?!」

「古着屋」

「なるほど」

古着って便利だね。

ブランドとか全然分かんなくても、「あ、これ古着なんですよ」って言えばそれなりに箔が付くし。

てか正直ファッションセンスに自信がない。今度リサさんに服一式選んで貰おうかな。ひまりでもいいけど。白金さんもわりとそういうの詳しいよなあ。

「香澄はどこで服買うの」

「私? んゝ… W E G 〇とかハニ〇ズかなあ。1〇9でも買うよ!」

やっぱ。こいつJKじゃん。

姉ちゃんが高校の時もW E G 〇でなんか買ってたな。

服買いに渋谷に行きたいのに、その渋谷に行くための服をかうって



都市伝説はマジですか？

スクランブル交差点で馬鹿なことをする迷惑系YOUTUBERを横目で見つつ、俺は109に足を踏み入れる。女性向けのアパレルショップにコスメ用品店。

「いらっしやいませ〜！」

キラキラと輝くような笑顔を向けてくる女性店員さんたち。

彼女らはみんな、例外なくお洒落だ。頭のとっぺんからつま先まで、余すところなくお洒落さんだ。

場違い感パないんだが。

「メンズ服は四階なんだってー。行こつ、海くん！」

俺の手を取って駆け出す目の前のJKは、俺と違ってこの雰囲気には臆することなど決してない。これが現役のJKか。パネエ（思考停止）

香澄に連れられるまま、俺は男の服が売ってあるという場所に着いた。

確かにどれもお洒落だとは思うが…なんつーかあれだな。どれを着ればいいのか全く分からん。

香澄が自分用にもメンズのTシャツを買うと言うので、チラッとその値札を覗いてみた。

ん〜…？　なんか0が二つくらい多くないですかね？

布一枚にそこまで…バント三着は買えるじゃん、マジかよブランド品。

「お前、よくこんなの買えるな…俺の給料じゃ手が出せん」

「え〜？　安いのは安いよ？　私これ買おうと思ったけど、これは五千円しないし」

ほええ……バント一枚分にまで落ちたな。

でもG○とかと比べると高いんだよなあ。

「海くんは買わないの？　服」

「んー…欲しいけど、Tシャツはいいや」

もっと安いところで買う。

「そっかー。あ、じゃあアレは!?!」

香澄が元気に指差したのは、隣の店の商品だった。

店内で大きな声を出すんじゃないやありません、と小言を言う前に、香澄は持っていたTシャツの会計を済ませ、また俺の腕を取って隣の店へと直行する。

「海くん、こういうの持ってたります？」

「いんや、持っていない」

香澄が商品棚から取って広げて見せてきたのは、真っ黒な革ジャンだった。

革ジャンは一着も持っていない。姉ちゃんが持つてるけど、着たこともなかった。

「俺、そういうの似合わないと思うんだけど」

「そんなことないよ！ 絶対似合う！ キラッとするよ！」

「なにそれ日菜さんの真似？」

試着してみなよ！ と騒ぐ香澄に引き寄せられて店員さんまで加わり、俺は革ジャンとその他一式の全身コーデをされて試着室にぶち込まれた。

これ試着までして買わないですって死ぬほど言い難いよな……。

そう思いつつ、俺は渡された服一式を着込んでいく。

まあコーデとは言っても、ジーンズに厚手の白T、その上から革ジャンを羽織り、軽めのシルバーネックレスをつける、といったシンプルなものだ。

とりあえず着てみて、そして鏡を見る。

うーん、似合わん。

こういうのはもっとガタイの良いやつが着るから似合うんだと思うんだが……。

まあせつかく着たんだ。香澄たちに見せないわけにもいかない。

そう思い、試着室のカーテンを開ける。

「……やっぱ似合わなくね？」

恥ずかしさも相俟って、香澄の感想を聞く前に言葉を挟む。

照れくさくて頬をかく俺に、香澄は目を輝かせて一歩近付いた。

「ううん！ そんなことない、すっごく似合ってるよ！ キキラッつ

「してしてる！」

「あ、日菜さんの真似続けるのね」

キラキラってなんだよ。キラキラでいいだろ。

「写真撮っておたえたちに送るね！」

「なんで？」

俺の疑問には答えず、香澄は数枚、俺の写真を取る。

恥ずかしいんだが。

「ポピパのグループに貼るところ！」

ああ、おたえ「たち」ってのはポピパ全員のことなのね。

え、てか本当になんで送んの？ ねえなんで？

まあ、Twitterにはフリー素材なんするものぞとばかりに俺の写真相が貼られている。それと比べれば、特定できる人数にのみ写真を送られるくらいなんてことはない（感覚麻痺）

いやに上機嫌な香澄が送信ボタンを押す。

と同時、どこからかLINEの通知音が三つ同時に聞こえてきた。

奇遇なこともあるもんだな、と流し、俺は試着した物から制服に着替えるために試着室のカーテンを閉める。

「そーだ！ ハロハピとく、Afterglowとく、Roselia

！ あ、パスパレのみんなにも送ろく！！」

「なんで???」

公開処刑ですか？

? ? ? ? ?

その後、わりと強引だった店員さんに流されるがまま革ジャンを購入した俺たちは、109を出てタワ〇コに来ていた。

「お、あったあった」

新作コーナーにて目当てのCDを見つけた俺は、声を弾ませてそのCDを手取る。

「海くーん、何買うの？」

「ヨル〇カの新譜」

「その木の箱が？」

「そ」

香澄の言う通り、俺が今手に持っているものは木箱だ。

この中にヨ○シカのフルアルバムが入っている。しかも初のフルアルバムだ。そのうちサブスクでも配信されるんだろうけど、これはちゃんと買っておきたかった。

「ふーん… それ、そんなにいい？」

「ヨル○カはいいゾ。 n—b○na を信奉しろ」

「しんぽー？」

「崇め奉れってことだ」

n—b○na は天才、はつきり分かんたね。

n—b○na はヨル○カの作詞作曲を担当している。元々はボカロPだったらしく、そっちの方もすっかりチェックした。よきよきのよき。

n—bu○a 以外も素晴らしい。

ボーカルの透き通るようでしたっかりの芯のある声、変態リフギター、オシャンティーベースライン。今回のアルバムに収録されてる『だから僕○音楽を辞めた』ではピアノも入ってくるらしいし楽しみだ。

つかサポートギター、毎度毎度あの変態すぎるリフをどうやって弾いてんだ。下○さん、アンタのことだぞ。

「そっかー。じゃあ私も聴いてみよー！」

「なんならCD貸すよ」

「ホント！ わーい、ありがとー！」

一人勧誘に成功したところで、俺はほかのCDもチェックしてみる。

M○rs P r i n c i p i o m E s t, l y n o h, A n o t  
h e r s t o r y, ユ○ネス、e t c。

いくつか気になるバンドはあるが、今のところはどれもCDを買うほどじゃない。一回サブスクで聴いてみて、めっちゃくちゃ気に入ったら買おう。金は有限だからな。

新しいバンドの発掘も踏まえた物色は続き、気になってメモしたバンドが三つ目になった頃。

ずっと俺の後ろをとことこ着いてきていた香澄が、不思議そうに聞いてきた。

「そーいえば、海くんたちは曲作らないの?」

「俺たち? あー、オスバンド(仮)のことか」

マジでそろそろちゃんとしたバンド名考えなきゃだな。

「うーん、作りたいは作りたいんだけど…誰も作詞が出来ないからなあ」

「作詞は? ってことは、作曲はできるの?」

「まあ。須田は音楽始めたばっかで戦力にならないだろうけど、俺と五十嵐いがらしはできると思う」

ベースラインは俺が考えればいいしな。

五十嵐と話し合えば、作曲できないことはないはずだ。

「そうなんだー。それ、ライブとかではやら、ないの?」

「いや、だからな? 作詞の才能が致命的になかったんだよ。俺も、須田も、五十嵐も」

前に一度試みた時は本当に酷かった。

みんな小学生の作文みたいな歌詞しか書いてなかったんだもん。

俺、国語とはか得意なはずなんだけど。

蘭や友希那さんやおたえのこと、改めて尊敬した。

「? それ、歌がないとダメなの?」

黒歴史と言っても過言じゃない文を思い出していると、香澄は不思議そうに聞いてくる。

「そりやお前、バンドとして歌詞がないってのは…あれ?」

待て。

いや、アリだな、良く考えれば。

歌詞無しの曲、インストインストウルメンタルの略。器楽曲。人声は一切用いず、楽器のみで演奏される楽曲のこと。っていう選択肢は十分にアリだ。

いやでも、スリーピースでインストってのもどうなんだろう。

あー、でもインスタにすればギタボする時より複雑なりフも弾けるのか。

「うーん……アリっちゃアリだな」

「全然アリだよ！ ありよりのあり！」

グツと拳を握つてみせる香澄を見て、俺はふと笑みがもれた。

いつもは突拍子のない事ばかりしでかして周りを巻き込むトラブルメーカー的なやつだが、稀にこんな、一種のカリスマ性のようなものを垣間見せてくる。

人を魅了し、絆す力を持つ。人を導く星、それが戸山香澄だ。

「ありがとな」

「？ うんっ！」

いまいち分かっていなさそうな返事をしているが、実際分かっていないんだろう。

それにまた笑ってしまう。

それにしても、インスタか。

これは、アイツらにも相談してみる価値が十二分にあるな。

★ ☆ ★ ☆ ★

人混みでごった返す山○線にしばらく揺られ、大塚で荒○線に乗り換える。

乗り換え後は席に座れたので、そこでようやく私たちは一息ついた。

「楽しかった〜！ 今日ありがとね、海くん！」

「あいよ。こっちこそありがとうだ。俺も欲しいもん買えたし、バンドの活動も動き出せそうだよ」

ガツタンゴツトン、電車に揺られながら会話する。

男の子とお出かけたのは初めてだったけど、本当に楽しかった。

相手が海くんだったというのが大きいんだろう。どんな会話にも乗ってきてくれるし、面倒そうな態度を取ることはあっても、ずっと私を気遣ってくれてたのが分かる。

私は彼のが好きだ。

ポピパのみんなやあつちゃんたちと同じくらい大好き。

彼ともっと話していたいし、一緒にいたい。

でも、それ以外に…

「ねえ海くん！ 海くんもポピパに」

「入りません」

こちらを見ることもなく、もう慣れたとでもいいかげんに断られる。

ぶーぶー、と不満を口にしてみるも、これは分かっていた返答だ。

なにせ、これまで十回以上勧誘してて、その全てで断られているんだから。

海くんとは一緒にいたい。でも、今日よく分かった。

海くんと、そしてポピパを含めたみんなで一緒にいたいんだ。

だから今日もポピパに誘ってみたけど… 返事はいつもと変わらない。

初めて誘った時こそ少し慌てていたものの、最近ではこの通り。作業のように流される。ベルトコンベヤー、つておたえは言つてたっけ。

「でもでも、Afterglowには入ったじゃん！ Roselia aにも！」

分かりきつてた拒否だけど、それで簡単に引き下がるくらいなら何度も誘ってない。

少しくらいは食い下がってみる。

「あのなあ。AfterglowとRoseliaには入ったわけじゃないって何度言えば…」

「でも一緒にライブしてた！」

「サポートでギター弾いただけだよ」

呆れたように言ってくる海くんに、私は頬を膨らませて対抗する。海くんは一つため息をついて、言葉が続けた。

「サポートメンバーとして、つてことならポピパとも一緒に演奏するよ」

「ホント!?!」

「ほんとほんと。シンセ二本必要なら俺が弾くし、香澄がピンボするんなら俺がギター弾くから」

「じゃあ私とおたえと海くんの三人でギター弾こ!!!」

「まああじい???」

「マジ！ この前おたえが言ってたんだけど… はろーすりーぷ… えと… なんとかってバンド！ ギターが三人必要なんだってー。そのコピーバンドしたい!!」

「あー… 多分Hello Sleepwalkersだろ、それ。確かに、アレは男女一人ずつのギタボとリードって編成だし、俺が入ればちようどいいかもなあ。あ、でもあれシンセいないだろ」

「そこはほらー！ どーにかしよっ！」

「…なるほどなあ」

おたえがイイ感じに編曲してくれる！ ハズ！（他力本願）

更に呆れた顔を向けてくる海くんに、今度は満面の笑みで対抗してみる。あ、顔逸らされちゃった。

「とりあえずみんなに言ってみるね！」

「ん？ ああ、いや、それなら——」

海くんが何か言い終える前に、パパツと文章を打ち込んでポピパのグループに送信する。

「ピロンツ」「ピロンツ」

…？

すごい偶然。さつきー〇9でも似たようなことがあったような…

「なんでお前ら通知切つてないんだよ!! さつき切つとけつて言つたら?!」

「ごめん。忘れてた」

「ごめん、私も… てへっ」

「可愛く誤魔化せばいいと思うなよさーやー！」

どこからか聞こえてくる、ものすごく聞き覚えのある声。

声のした方を見ると、手に新聞紙や雑誌を持ったサングラスと帽子を被っている人の姿が、三人分。

でも、私の思い浮かべた人たちとは違うみたいだ。



「あつれ〜？ おつかしいなあ… 有咲たちの声が聞こえたと思ったんだけど…」

「お前マジか？」

さつきから海くんの表情は呆れ顔ばかりだ。

笑ったほうが絶対楽しいのに。

「あれが市ヶ谷さんたちだろ。今日ずっと後つけてたぞ」

「え?!?!」

「そんな泡食ったような反応されてもな…」

言われてみれば… 金髪のツイントールだし、見覚えありまくるギターケース背負ってるし、パンの匂いもする!!

「有咲！ おたえ！ さーやー！」

「香澄さんやい、ここ一応電車の中な。ちっとボリリューム下げようぜ」

「なんで三人がここにいるの?!」

「お前の耳は飾りなんですか？」

席を立て、三人の元へ行く。

ちようどいいことに三人の隣の席が空いてたから、そこに腰を下ろした。

「か、香澄… おい、お前らのせいで香澄たちに気付かれたじゃねーか」

「有咲のツツコミが決め手だと思っ」

「あはは〜。確かに声大きかったねえ」

怒る有咲に、冷静なおたえに、笑うさーや。

なんで三人がこんなところでいて、しかも変装なんかしてるんだろう。

疑問が解消されない私の前に、海くんが立った。

吊り革を掴み、有咲たちへと視線を落とす。

「お前ら、今日ずっと後ついてきてたろ。市ヶ谷さんはとうとうストーカーにでも目覚めたの？ 香澄の」

「なんで香澄なんだよ!! どっちかつたら私はお前の… あ、ちよま、ちがつ…！」

「香澄ズルい。私も海とタワ〇コでCD物色したかった。有咲が止め

なければ私も混ざってたのに」

「そりや止めるだろ！ なんの為の尾行だと…。」

「尾行って英語に直したらストーカーになるんじゃないやねえの？ 市ヶ谷さんやっぱり…。」

「いやそれは…！ つーかなんでさつきから私ばかり！ おたえやさーやだつて私と一緒にやっただろ!!」

「市ヶ谷さん声でかい。ここ電車内」  
「~~~~~つつつつ」

声にならない叫びを有咲が上げる。

それを見て引き時だと思っただのか、海くんはケラケラと笑うだけで追撃はしなかった。

そうしているうちにすぐに私たちが降りる駅についたから、五人で降りる。降りる時に海くんとさーやが周りのおばあちゃんたちにお辞儀してたから真似してみた。おばあちゃん飴くれた。

その後、結局みんなで公園に行ったり、有咲の家の蔵に行ったりした。

ちなみに海くんを含めてのコピーバンドはみんな賛成のようで、近いうちにC i R C L Eで開かれるライブに応募もした。

今日は残念ながらりみりんがいなかったけど、これが私が求める光景に最も近かったといえる。

おたえと、有咲と、さーやと、海くん。そこにりみりんがいたら百点満点だ。

私はポピパが大好き。海くんも大好き。

海くんがポピパに入ってくれたら最高だけど… きつとそれは叶わない。

だったら、今の関係を続けよう。

みんなで遊んで、みんなで笑って、みんなで過ごす。そんなとつてもキラキラドキドキしてる、この関係を。

とびだせエゴサーチ！

彼と出会ったのは、とある雨の日のことだった。

「あの…これ、良ければ」

雨に打たれて全身びしょ濡れだった私に傘とタオルを差し出してくれた人。それが彼だ。

当時の私は、はつきり言って限界に近い状態だった。

長く険しい研鑽を経てようやく拓けた夢への旅路は音を立てて崩れ去り、絶望の崖に追いやられ、それでも努力し続けることしか出来ない日々。

やつれた心に鞭を打ち、まだ自分に出来ることはないかと模索した結果のチケツト手渡し販売も、人々の心無い声の前に打ちのめされる。

いつか報われると信じた努力は泡と消え、虚脱感が全身を襲っていた。

「…この前のライブ、見ました」

ビクツ、と体が震える。

夢への第一歩となるはずだった、私たちの初ライブ。

人々に夢と希望を届けるはずだった夢の舞台は、残念ながら、それとは真逆の失望を与える結果となってしまった。

誰が悪いなどと言うつもりはないが、それでも後悔は残ってしま

う。

もつとこうしていたら。もしああしていたら。

そんな思いは意味を成さず、零れた水はもう戻らない。

『まだやってたのか』『解散したのかと思った』

もう何度言われたのかも分からない、そんな言葉。

傷つかないわけがない。悲しくないわけがない。

そんな言葉を、またぶつけられるのだろうか。

不安に駆られ、渡されたタオルをギュツと握ってしまう。けれど、彼の口から出た言葉は、今まで聞いてこなかったものだった。

「頑張つて、つてのは失礼かもっすけど……それでも、頑張つてください。応援してます」

そう言った彼は、お金を私に渡してくる。

そしてライブのチケットを取り、駅の方へと駆けて行ってしまった。

それが、彼と私のファーストコンタクト。

絶望の淵にあった私を掬い上げてくれた、優しい会合。

悪口なんて負けない。忘れられてやるものか。

少なくとも、応援してくれてる人はいるのだから。

そう思える、折れない強い芯を持つきっかけにもなった出会いだった。

それから一年ほど経つて、私は彼と再会することになる。

高校の、そしてバイト先の先輩後輩として。

彼が年下だったのには驚いたけど……正直、一緒にいるとどっちが年上なのか分からなくなってくる。

彼はどこまでも大人で、私の憧れの一つで、そして救世主。

つついっ頼りにしてしまふ私の大事な後輩は、今——何故かパスパレの所属する事務所にいた。

★ ☆ ★ ☆ ★

オッス、オラ関口！

オラの演奏が世に出回っちゃまってから何日か経ったけど、オラの青い鳥の垢がヤツベエことになったぞ！ ふおろわーちゅーんが一気に千人規模になりやがった！ へへっ。オラ、人気者になっちゃまったぞ！ ……え？ 瀬田先輩は昨日十万を越えた？ うっせえ

ぶっ〇すぞ。

次回！ 死ぬな須田！ 暗雲漂う体育祭！

みんな、ぜってえ見てくれよなっ！

「とういうわけですすね。関口くん… ああいえ、海くんには我が事務所のアイドルユニット、Pastel? Palettesと共演していただきたく思っています」

「はあ…。はあ？」

羽丘女子学園の文化祭が終わった日、つまりは俺が全国配信された日から約一週間ほど経った土曜日の昼。

バイトも、バンドの練習もない今日は一日家に籠って映画を見るんだと意気込んでいたのだが、仕事中のハズのお母さんが家に帰ってきたかと思えば強引に拉致され、ろくに説明もされないままあれよあれよと事務所の偉いっぽい人と会い、そんで今に至る。

ちよつと頭が追いついてない。

「ええ、息子も快諾しております」

「いや、待ってよお母さん」

「そうですか！ それは良かった」

「え、いやだから待っ」

「では私は次の予定があるのでここで。息子は好きに使ってください。じゃあね海、今日の晩ご飯はおでんだよ」

「このクソ暑い中おでん食うの??？」

夜もまだ残暑厳しいぞ。

…とまあ、俺の知らないところで話が進みきってしまった。

去年もこんなことあったっけな。なんか収録するとか言われてアコギ弾かされたやつ。

もしこれを断れば、俺はお母さんから何をされるか分かったものではない。我が家のヒエラルキートップはお母さんなのだ。ちなみにお母さんの次が姉ちゃん。最下層に俺とお父さんがいる。男は辛いよ。

「悪いね、海くん。先週流した動画、思ったよりファンから好評だね？

「これを逃す手はないと思っただよ」

「はあ…」

「ああ、でも安心して欲しい。別にテレビに出演して欲しいとか、大きなフェスに出て欲しいとかじゃないんだ。うちの所有する劇場で、P a s t e l ? P a l e t t e s のサポートギターとしてちよつとしたライブをして欲しくてね?」

「はあ」

「さ〇り×M Y   F I R S T   S T O R Y のレイ〇イって曲をやって欲しいんだけど」

「それは大丈夫なんですか?」

著作権的なアレは。

「はっは。大丈夫大丈夫。元々はさ〇りのコピーをやる予定のライブでね。許可は取ってあるんだ。ほら、最近是有名アーティストのカバーなんてのも人気だろう?」

「…まあ」

コピーバン縛りのライブがあるくらいだしな。

A B C なんかはカバー曲しか収録されてないアルバムをいくつも出してるし。

「ベースの子も誘えれば良かったんだが、うちのベーシストはもう決まってるしね。その点、ギターならうちは一人しかいないから増やしても問題ない、ってなったわけさ」

ついでだからギタボもさせちやえ、ってなったのか。

なんつーか…色々すげーな、この事務所。

まあ白鷺千聖と一緒に演奏できるっていうメリットは確かに大きい。が、あまり気が乗らないのも事実。

パスパレのファンの前で、パスパレに混ぜって演奏なんかしてみろ。ファンから何言われるか分かったもんじゃない。

ただでさえ先週の一件でパスパレのファンからは睨まれているはずなのだ。まだ直接的な誹謗中傷はないとはいえ、今回の件は火に油を注ぐ結果を招きかねない。

ファンから好評、なんて言ってたけど、過激派は確かに存在する。

まだ間に合う。

お母さんだつて、無闇に俺が傷付くことを良しとはしないはずだ。そう信じたい。

ならまだお母さんに泣きついて、今回の件は白紙に戻すことも可能だろう。

失礼を承知で俺はスマホを取り出し、お母さんの携帯番号を打ち込み――

「ちなみに今回、海くんが必要だと思つた機材は全てこつちで用意するし、それは報酬として海くん<sup>に</sup>差し上げるよ」

「MXR<sup>喜</sup>のEVH<sup>お</sup>5150<sup>受</sup>が欲しいです」

あとデイレイも欲しいし……あ、レ○メイやるならアコシユミも必要だよなく。え？ 不特定多数からの誹謗中傷の可能性？ 知らねえよ俺は負けない（欲には負けた）（安定の作中No.1チヨロイン）

？ ？ ？ ？ ？

「というわけで、サポートギターとして一緒にライブすることになりました。関口です。よろしくお願いします」

「どういうわけなのかしら……」

右手で頭を押さえる仕草をする白鷺千聖は、はあと嘆息した。それすらも絵になる。しゅきぴ（長年のファン）

依頼を受けてから一時間後。

現在俺がいるのは、事務所内に数個あるスタジオの一つだ。

俺と、それからパスパレの全員がそこに集まっていた。

「へ〜。もう一人サポートのギター呼ぶって聞いてたけど、それ海くんのことだったんだ。よろしくね〜」

「まあ先週の動画、再生回数が百万を越えたらしいっすからね〜。海さんが呼ばれるのも納得です」

まあスタジオに集まったからといって、今から練習をするわけではない。

さすがに一時間じゃあどう足掻いてもある程度のコードくらいしか覚えられないし、そもそも俺は今日ギターを持ってきていない。てか契約書みたいなのに目を通したりサインしてたりしたら一時間なんてあつという間に過ぎ去った。

というわけで、とりあえずの顔合わせの場として選ばれたのが、たまたま空いていたこのスタジオだったのだ。

「またカイさんと演奏できるの、私ウレシイです！ よろしく願いいたしますっ！」

「はあ…… まあ、決まっちゃったものは仕方がないわね」

女優も所属する事務所のスタジオってだけあって、このスタジオは随分と広い。壁面には大きな鏡も貼られており、どちらかという演技なんかを練習する用のスタジオに思える。

まあこの事務所でバンドやってるグループなんてパスパレくらいだろうからな。専用の音楽スタジオを用意するより、兼用にしてしまったほうが費用的にも楽だったんだろう。

「ホントに海くんとライブできるの!? ううく……嬉しい！ 私、頑張るね!!」

「丸山さんは頑張るとえげつない失敗しそうなんでほどほどにしといてください」

「そんな!?」

ひまりと似たにおいがするんだよなあ、丸山さん。

まあそれが丸山さんの売りではあるんだけど。

「それじゃあとりあえず顔合わせは終わったってことで……日菜さん」

「んー? なあにー?」

「譜割りしましょう。音源貰ってきたんで」

「えく? めんどくさーい! あたしはビュン! って感じで弾くから、海くんはジャン! って感じで弾いてよ」

「いや、ちよつと分かんないんで。俺が不安だからちやんとやっときましよう」

「ぶー」



頬を膨らませる日菜さんの隣に座り、さつき事務所の人に渡された WALKMAN を起動する。

ポチポチとボタンを押して操作して曲を再生させようとしていると、イヤホンの片方を日菜さんに持っていかれた。

え、何この人。自分だけ聴くつもりなのん？

「これスピーカーに繋ぐんで、イヤホンしなくても大丈夫つすよ」

「えー？ でもイヤホンの方が音良く聴こえない？」

「そうですけど、イヤホンだと一人ずつでしか聴けないじゃないっすか」

「片方ずつ付ければ問題ないって！ ほら！」

そう言っは日菜さんはこちらに寄ってきて、もう片方を俺の耳に突っ込んでくる。

と同時に、別のツツコミも飛んできた。

「ちよつと日菜ちゃん！ そういうのは辞めなさい！ 異性との必要以上の接触は…」

「ダイジョーブだよ千聖ちゃん、ここ事務所の中だし」

俺の心臓が大丈夫じゃないんですが。

えっ、近い近い近い。肌触れてるんだけど。氷川さんと同じいい匂いがする。そりやそうか、双子だもんな。同じシャンプー使ってても不思議じゃないし、少なくとも柔軟剤は同じだろう。

… 違う、そうじゃない。

「日菜さん、ちよつと離れて…」

「えー？ でもこのイヤホンのコードそんなに長くないし、これくらい近付かないとだよ」

と、更に近寄ってくる日菜さん。

辞めてほしい。いや辞めないでほしい（男子高校生の性<sup>さが</sup>）

柔らかい感触に身を任せたい<sup>本能</sup>気持ちと、周りからの視線を気にする<sup>理性</sup>気持ち。

これがもし二人つきりだったら甘んじてこの状況を受け入れたのだろうか、ここには俺たち以外に四人もの目がある。軽蔑の眼を向けられたくはない。けどこの感触を自分から拒絶するのは絶対的に不

可能。

健全なる己とのシーソーゲームに決着が着く前に、外部からの物理的な干渉があった。

「日菜ちゃんっ！ えと、その…：… そ、そう！ 私も曲聴きたいから、スピーカーにしよ！ ね？」

丸山さんだった。

俺と日菜さんの間に入り、少々強引に引き剥がす。

「そうですね。ジブンを確認のために聴きたいですし、みんなで聴きましょう！」

大和さんの助け舟もあり、この場では丸山さんの提案が通される。そつかり、と何事も無かったかのような顔で離れていく日菜さん。俺はホッと安心したような、どこか口惜しいような、そんな複雑な心境に苛まれる。

WALKMANをスピーカーに繋ぎ、曲を流す。

速い一瞬のドラムロールから始まり、すぐにギターとベース、そしてピアノも入ってくる。

十秒ほどのイントロが終わり、まずはさ○りの歌からAメロが始まった。

この曲はさ○りがギター、マイファスのボーカルであるh i r ○がピンボだ。しかし俺たちは違う。俺がギターで、丸山さんがピンボ。俺の難易度は上がってくるが…：… まあユ○ゾンほどじゃないな。いける。

Aメロが終わり、サビへと入った瞬間。一瞬だけ演奏が無くなりボーカルだけになる瞬間があるのだが、よく聴いたらアコギの弦を弾く音が一音だけ聴こえる。ここは気をつけるポイントだろう。

ここが無くては観客は気付かないかもしれないが、物足りなさというか、そういうものがある気がする。ちよつと言葉にしにくいな。

まあぶつちやければ俺が満足したからきちんと気を付ける、つてことだ。やっぱリアコシユミは絶対用意してもらおうと。

「うう…：… この曲、ハモリとか多いんだよねえ…：…」

と、サビの途中で丸山さんが唸った。

確かにこの曲、ハモリやユニゾンが多い。歌唱力の問われる楽曲だ。

前にも聴いたことがあるかのような口振りだが、知っていた曲なんだろうか？

それなら少しは練習も楽になるだろう。知らない曲を一から覚えるのと、知ってる曲で細部を詰めていくのとは、その労力が桁違いだ。

「その辺もしつかり合わせなきやですね。こればかりは個人より二人で練習した方がいいと思うんで、空いてる時間は一緒に練習しときましよ」

「う、うん…！」

そうこうしているうちに、曲はBメロへと入った。

一瞬だけ入ってくるベースのスラップかけえ、とか思ってたらBメロも終わり、サビへと差し掛かる。

今回のサビの入りはアコギの音ではなくエレキ。ピックスクラッチ弦にピックを当てて、ギターのベッドの方向に擦らせて音を出す奏法。キュウウウーーン、っていう高音が鳴る。かっこいい（かっこいい）だった。かっこいい（かっこいい）

サビは一番とほぼ変わらない。

遠くから聴こえてくるピアノが気持ちいい。

サビが終わると、次はCメロだ。

軽いギターソロが入ったあとに、さ〇りのラップへと入る。

ここではアコギの存在が大きくなる… ってか、ほぼアコギとピアノしか鳴ってない。

しかし、ここは簡単なコードしか使われていない。本来ならさ〇りが弾きながら歌っているシーンなのだから、そこまで難しい譜面にはできなかったのだろう。

Cメロが終わる。

Cメロが終わるとどうなる？

知らんのか。ラスサビが始まる。

あとはそのサビを駆け抜けて終わりだ。

曲が終わる。

停止ボタンを押して次の曲が始まらないようにしてから、俺は一息ついた。

「…日菜さん。俺ジャン！って感じで弾きますね」

「うん。じゃああたしはビュン！って感じで弾くね！」

「!?!」

若宮さん以外が驚愕に染まった顔でこちらを向いてくる。なんでそんな感性のみの擬音でどうにかなると思ってるんだ、とでも言いたげな目だ。

けど、これは仕方のないことなんだ。

自分から譜割りしようなんて言っというてなんだが、この曲めっちゃくちゃ分かりやすかった。

いやまじ。多分もう弾けるもん。そのくらい単純。あ、サイドギターの話な？ ほかのパートは知らん。

問題は歌だな。

歌唱力にはそれなりに自信があるが、今回はプロの世界だ。生半かな完成度じゃ認められない。

友希那さんに師事でもしてみようかな。断られるかもだけど。

「あ、そういや聞くの忘れてたんですけど、ライブっていつなんですか？」

事務所の人<sup>m v n e w g e a r :</sup>が垂らした餌に簡単に釣られてしまった俺は、肝心のライブの日程を聞いていない。

後で聞こうと思ってたんだが、今の今まで忘れてた。

「えっ…？ 関口くん、貴方、ライブの日程を聞かされていないの…？」

「そーなんすよねえ」

顔を青くしながら、白鷺千聖が聞いてくる。日程の確認を怠ったことがそんなにダメだったろうか？ ……すまない。本当にすまない

(怯え)

まあ今日から練習始めるんだし、きつと三週間後とかそんなもんだろう (楽観)

「ライブ？ 明後日だよ」

「なんですって？」

「なんですって？（絶望）」

「ライブ、明後日、夕方」

「……………りありい？」

「りありー」

日菜さんにより明かされる衝撃の真実。

最近こういうの多くない？ ねえ多くない？

いや弾けるとは言ったけどさ。違うじゃん。詰める時間が欲しい

じゃん。事務所バルス。

「その反応… 本当に聞いていなかったのね」

呆れたような、憐れむような。

そんな表情を白鷺千聖に向けられる。

「えっ、てかそれ大丈夫なんスか？ 俺だけじゃなくて皆さんは…」

「私達はもう練習していて、貴方抜きで合わせ練習もしているの。あ

とはサポートギターの方を迎え入れるだけだったのよ、元々ね」

「ちくしょう!!」

そりや丸山さんとかが「この曲聴いたことあるよ」的な反応してる

はずだわ!! だって練習してるんだもん、知ってて当然だわチク

シヨウめ!!

「ちよ、俺すぐ家帰ってギター持ってきます!!」

「あ、待ってー！ この後は私別の仕事が——」

白鷺千聖が何か言っていたが、聞いてもらえない。

全速力で帰宅し、ギターを担ぐ。

体力には多少自信があったが、まだまだ暑い今日この頃。

少し西に傾いた太陽は未だ容赦を知ることなく、俺の体力をジリジ

リと奪っていく。

やっこの思いで事務所へとんぼ返りした俺は、とりあえず自販機で

お茶を買ってからスタジオへ向かった。

疲れたが、疲れたと言っただけでいられる状況でもない。

事務所と家の往復で、サブスクを使ってスマホに落とししたレイ○イ

を聴いていた俺は、もうある程度のコード進行は覚えた。

あとは全体で合わせて細部を詰めていく。そうすれば、たった二日の練習期間でもどうにかなるだろう。

スタジオの重い扉を開ける。

空調で冷えた空気が頬を撫でて心地いい。

「すいません！ 今戻りまし… た？」

「あ、おかえりなさい」

スタジオにいたのは、ピンク髪先輩ただ一人だった。

★ ☆ ★ ☆ ★

汗だくの中、海くんは私の持つタオルを渡して、とりあえず楽器は下ろしたら？と提案する。

「えと… ほかの皆さんは？」

お茶をがぶ飲みした海くんは、汗を拭いながら不思議そうに聞いている。

「えつとね？ 千聖ちゃんはドラマの収録、イヴちゃんと麻弥ちゃんは雑誌のインタビュー、日菜ちゃんは… ポテト食ベに行くって言うて…」

「最後の完璧にサボりじゃねっすか」

呆れたように言う海くんは、私はあははと乾いた笑いを送るしかない。

乱れた息を整えた海くんは、さて、と立ち上がった。

「まあいいもんは仕方ないツスよね。このスタジオ、いつまで使えるんですか？」

「えつと… 確かあと二時間は使えたはずだよ」

「ならとりあえず俺たちだけでも練習しましょ」

そう言っつて、海くんはマイクのシールドをミニ卓に繋ぐ。

ポリウムやゲイン、あとよく分からないツマミをいじいじした後、私に別のマイクを渡してきた。

「テキストに声あててください。こっちで調整するんで」

「あ、うん」

言われるがまま、マイクに向かって声を出す。

いつも練習の時は麻弥ちゃんがやってくれるし、ライブとかでは現場のPAさんが全部してくれてた。

手際良く作業を進める海くんの後ろ姿を、思わず見つめてしまう。

「んー… まあこんなもんっすかね。んじゃ早速始めましょう」

そうして、私と海くんの二人っきりの練習は始まった。

ちよつとどころじゃないくらいドキドキしてたけど… すぐに別の意味でもドキドキしてしまうことになるとは、この時の私はまだ知らない。

「丸山さん、今のところ音ズレてます。もう一回」

「丸山さん、今のところ入りズレてます。もう一回」

「丸山さん、歌詞の意味を考えながら歌いましょう。もう一回」

「丸山さん、息継ぎのタイミングが変です。あと一小節ズラしましょう。もう一回」

「丸山さん、今のところ」

びつつつつくりするくらい海くんスパルタだった。

海くん本人がミスした時はすぐ謝ってくるしとても反省するんだけど、私の方がたくさんミスしてる。割合的には一対九くらい。

え、ちよつと海くん歌上手すぎない？ ボーカルは副業なんだよね？

「友希那さんっていうポケモンを間近で見続けてたら前よりもずっと上手くなりました」

「な、なるほどお…？」

海くん曰く、妥協を決して許さないRoseliaの演奏に口を出し続けた結果、アドバイスとかに遠慮というものが無くなってしまったらしい。

下手をしたらボイスレッスンの先生より厳しい海くんと練習する

こと二時間。次は何を注意されるのかとドキドキしっぱなしの二時間だった。

次にスタジオを使う予定だった人達が来たのでスタジオから退散し、今日のところは帰ろうという私の提案が通り、今は帰宅途中の道すがら。

木々の緑は所々赤茶に変わってきていて、暑い中にも少しだけ秋が感じられる。

「ふええく…つ、疲れたあ…」

何度も私と一緒に歩いたことのある海くんは、こちらの歩幅に合わせてゆっくりと歩いてくれていた。

気遣いが嬉しい反面、その優しさがもう少し練習にも回されないかなあ、と内心思う。

いや、ズバズバ言ってくれるのはとってもタメになるからいいんだけどお…。

「明日は合わせ練習できるんですつけ？」

「う、うん…十三時から、えと、今日と同じスタジオ、だよ…」

「…そんなびびんでくださいよ。悪かったですって、今日のは」

バツが悪そうに、海くんは頭をかく。

「でも、今日だけで歌はほぼ完璧になったじゃないですか。楽器隊は多分完璧に仕上げてるんでしようし、もう今日みたいに突っつくことはないですよ」

「ほんと…?」

「ほんとほんと」

それなら一安心…できないよねえ…。

私が明日も失敗したらまた注意されるんだろうなあ。うう…今日の夜、ちゃんと復習しとこ…。

「あ、そうだ」

結構本気で恐れていると、海くんが思い出したように手を叩く。

「さつき借りたタオル、洗濯して明日にでも返しますね。ありがとう



「ごきました」

さつき私が貸したタオル…… ああ、あのタオル！

あのタオル——市販されてる、どこにでもあるような青色のタオルは、実は私が買ったものじゃない。

あれは、元々は海くんのものだ。

一年くらい前の雨の日。

雨に打たれてた私に海くんが渡してくれたタオル。それがあの青いタオルだ。

ドラッグストアとかでまとめ売りされてるような品だから、海くんが覚えてないのも無理はない。

まあちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、覚えてて欲しかったなー、とは思うけど。

本来なら、あのタオルは海くんに戻すべきだ。あと傘も。でも、

「……うんっ。よろしくね」

私はきつと悪い子だ。

あのタオルを手放したくないと思ってる。

あれは、証だから。

私が夢<sup>ア</sup>を与える偶像<sup>ド</sup>であるための、大事な証。

私が私として立っているための、必要な証。

私は一人じゃない、応援してくれている人は必ずいると思いきや、  
てくれる、無くしてはいけない証。

大事な大事な繋がりには、まだ持っていたい。

私はまだまだ一人前にはなれなくて、支えがなければ倒れてしまう  
ほどに脆いから。

だから、彼に助けていてもらいたい。

これは私のわがままだけれど、それでも。

これからもよろしくお願いします。

心の中で私は囁く。

私の大事な後輩に。私の大切な友人に。  
私の、かけがえのない存在に。

## 運動会と体育祭は似て非なるもの

彼との出会いに、多くを語る必要はないかもしれない。

それは小説のように劇的なわけではなく、ごくありふれた日常であつたから。

実を言うと、私は彼との出会いをあまり鮮明に覚えていないわけではない。

内部生としてエスカレーター式に繰り上がった高校の教室で、特に何か話題があつたわけでもなく挨拶を交わした。

一言二言会話をした気もするけれど、その内容は覚えていない。天気が良いねとか、これからよろしくとか、そんなところだったんだろうと思う。

かくして、彼との間では特にイベントか起こるわけでもなく、高校生活も一ヶ月という時が過ぎた。

クラスメイトの香澄ちゃんに誘われる形で始めたバンドもそれに順調で、今までにない充実感を日々に見出し始めたころ。私と彼、というよりは、彼らとの物語は始まった。

始まりは、彼の友人が楽器を、しかもベースを習いたいと言ってきたことから。

それからは彼や彼の友人とも親しくなり、休みの日には遊びに出かけるような仲になる。

人見知りの激しい私だけれど、彼はそんな私に合わせてくれた。

彼の友人は少しばかり強引なところがあつたけれど、荒療治という形で私の人見知りも溶けていく。

彼らとの出会いは、私にとってとても大事な財産だ。

私という物語を彩る、大事な大事な一節だ。

そう思うと、彼との出会いの記憶が怪しいのは少し残念に思う。

けれどまあ、彼の友人との出会いは、今でもはつきりと覚えてるかなあ。

★ ☆ ★ ☆ ★

さて、突然だが今日は体育祭だ。

そろそろ残暑も終わりに近付いてきているらしく、ここ最近では薄手の長袖が必要な日だったたまにある。

まあ今日はめっちゃくちゃ暑いし体操服は半袖半ズボンなだけれども。

女の子の生足が眩しい、って須田が悶えてた。わかる（わかる）

「私たち選手一同は、日ごろの練習の成果を発揮し、これまで支えてくれた家族、学校、部員たちの期待に応えるため正々堂々競技を行い、全力を尽くすことを誓います」

燦々と照り付ける太陽の下、我らが生徒会長、わにべななな鰐部七菜先輩が宣誓する。

まあ会長ってよりグリグリのキーボードの人ってイメージの方が強いんだよな、あの人。

その後も学長やら教頭やらの話が続くが、説法みたいな話を真面目に聞いている生徒なんかほとんどいないんじゃないだろうか。

かくいう俺も、話の内容は右から左だ。

頭の中では昨日見たキーボードの弾いてみた動画が再生されている。

あんまり再生回数の多い動画じゃなかったけど、あれは相当上手かった。パスパレのコピーしかしてないみたいだけど、かなりのファンなんだろうな。友達になりたい。

そんなことを考えながらボケつと壇上の教頭を眺めていると、不意に隣から声をかけられた。

「ねえ海、さつきからどこ見てんの？ 目、死んでるけど」

「教頭のズラ」

声の主は美竹蘭。

俺と幼馴染みの一人であるツンデレ赤メッシュだ。

「今何考えた？」

「教頭のズラについて」

無駄に勘が鋭い時があるんだよなあ、蘭のやつ。

それはそうと、何故他校の生徒であるはずの蘭が俺の隣に並んでいいのか。

それは簡単、これが花咲川・羽丘合同の体育祭だからだ。

俺のクラスと蘭のクラスは同じく赤組に配属されたらしく、今日は何でたくチームメイトということになる。

ついでに、今俺たちがいるのはとある競技場だ。霞ヶ丘のでっかいところ。

多分弦巻家の力なんだろうけど、開催場知った時は普通にビビったよね。

ポツポツと暇潰し的に蘭と言葉を交わしていると、長かった開会式がようやく終わった。

すぐに出番があるという蘭と一先ず別れ、俺は赤組の待機所でもあるテントに向かう。

今回俺が出場する競技は三つ。

『100m走』『男女混合リレー』『二人三脚』だ。

100m走は全員が出るやつで、リレーは男子全員が強制出場。二人三脚はクジで決まった。

今回の体育祭、男子の出番は女子と比べて圧倒的に少なくなっている。

それもそのはず、やっぱり男女間での運動能力の差は必然だからだ。男子の競技への出場回数は制限され、多くても四回までとされている。

運動か得意だったり好きだったりするやつは四回出場するらしいけど、ぶつちやけ俺は運動はそうでもない。身体能力、特に体力面に

はそこそこ自信あるけど、運動神経は人並みだ。

その点、須田は運動ができる。

中学までサッカーをやっていたらしく、運動面で意外な才能を見せてきた。50m走は五秒台らしい。あいつ結構多才だよな。

特に動いたわけでもないのに異様に乾いた喉を潤すため、家から持ってきた水筒を手に取る。中身はお茶だ。烏龍茶。

飲みながら競技場の方を見ると、ちょうど最初のプログラムの参加者達が入場を始めたところだった。

『さあ、ついにやって参りました。待ちに待った花咲川・羽丘合同体育祭。天候にも奇跡的に恵まれ、ここ霞ヶ丘上空には抜けるような青空が広がっております。関東に接近していた台風が突如霧散したことも記憶に新しいですね』

そういやニュースでそんなこと言ってたな。

まあでもどうせ全部弦巻家の力だろ（感覚麻痺）

『今回の実況は私、花咲川学園一年C組、梶原悠斗かじわらゆうとがお送りいたします。そして解説はこの方。空虚という名のつぶらな瞳がチャームポイントキャラクター《ミッシェル》さんです。よろしくお願いします』

『ミッシェルです。よろしく』

なんて？

『さて、第一種目は一年女子による4000m走。続々と出場選手が入場してきております』

『いきなりマラソン？』

『考えたやつはバカに違いありません。バカオブザイヤー受賞は必至でしょう。おめでとうございます』

『おっ、教師陣に喧嘩売るねえ…』

実況の奴、無駄にいい声なのが腹立つな。

『さあ選手全員が入場し終えました。横一列に並ぶ女子、女子、女子。皆須らくレベルが高い。マラソンということはたわわがたわわする時間も長いということ、誠に眼福であります、ありがとうございます。吼えよ男子、弾はじける同志。世界は今祝福に満みたされる』

『とりあえず110番の画面だけはだしとくね』

『男には何かなんでもやらなきやいけない時がある。泣いている女性を背負う時、大切な人が帰りを待っている時、恋人に愛を告げる時。そして美少女を愛でる時であります。通報逮捕なんするものぞ。刮目せよ、アレが我らの白亜城。遙か理想の——ごめんなさい奥沢さん謝る、謝るから警察は止めて僕が悪かった』

何かなんでもやらなきやいけない時じゃなかったのか○

『オクサワ? ボクノナマエハ、ミッシェル!』(通報)

『うわああああああ!!!』(有罪)

うわあ... (ドン引き) !!

そんな茶番を聞いているうちに、4000m走は始まっていた。

放送に気を取られててスタートしたの全然気付かなかったな。悔しい、あんな茶番に気を引かれてたのめちやくちや悔しい。

『さて、お遊びはさせておきそろそろ仕事をしましょうか。現在一位は... 黄組。速い速い、1000mを走った時点で最後尾との差は500m以上... え、待つて速すぎ。さすがに速すぎない? あれ全力疾走でしょ。先頭を走ってるのは... あー、弦巻こころですわねー』

『七割疾走くらいですかね』

『アレで七割。現役の陸上長距離走の選手よりレベチで速いんですけど。なんならアレ、100m10秒とかじゃないです? 目測ですけど』

『ごめんなさい... うちのこころが本当にごめんなさい...』

実況の言う通り、一位を独走しているのは我らがお嬢。てか本当に速い、短距離走と勘違いしてんじゃないだろうな。

次点で赤組、我らが元氣コロツケ娘。てかはぐみも速い。こころほどじゃないけど速い。陸上部も結構参加してるってのに二位で。やっぱりハロハピはハロハピなのか○

「あはははー」

「こころんはやーいー」

長距離走中に喋んな(憤慨)

結局、そのままお嬢が一位でゴール。二位がはぐみだった。

てかお嬢のタイムがおかしい。六分三十二秒ってなに。軽々しく世界記録を塗り替えるな。

はぐみは十二分五秒とまあ常識の範囲内のタイムではあった。ただし世界で戦えるレベルの常識ではあるが。お前らほんと、出るとこ出た方がいいよマジで。

次の競技は蘭も出る借り物競争。

この競技は蘭だけでなく、赤組から瀬田先輩、青組からモカや白金さん、リサさん。それで黄組からは奥沢さんと、知り合いがわりと出るらしい。

今どき借り物競争とかやってるところはうち以外であるのだろうか。少なくとも俺の知り合い達の高校はやってないって言ってた。

『解説のミッシェルさんは、急遽入った全国ゆるキャラ会議のため一時席を外しております』

ふーん。

『第二種目は借り物競争。他人から享受されなければ成功への道は拓けない、まさに負け組の人生を顕著に表した競技と言えるでしょう。… あっ、こちら！ 放送席にゴミを投げるな！』

競技がスタートする。

さすがに一齐にスタートするわけではなく、五人ずつのグループに分かれてスタートするらしい。

最初のグループには蘭がいた。がんばえー。

『酒瓶投げたのは完全に教師の仕業だろ！ 瓶はダメつすよ瓶は！死ぬから！ つーか体育祭のしかも朝っぱらから酒飲むな!! 一応事中だぞ!』

空砲が鳴って、第一陣がスタートする。

どうでもいいけど、俺昔あの空砲って実弾入ってると思ってたんだよね。

『はあ… はあ…、 あっ、もうスタートしてるし！ えっと… んんっ、最初に借り物の書いてある紙を取ったのは黄組の向原くん、続いて赤組の赤メツシュちゃん。… いや、羽丘の生徒の名前とか知ら



んですよほんとに。入学半年で花咲川の全生徒の名前覚えただけで褒めてほしい……。ん？ なんすか塩月先生。え？ これ羽丘の名簿一覧？ 今から覚えろって？ ふざけんな事前に渡しとけ（ブチ切れ）』

全生徒覚えたんか（）

てか一々覚えなくても、〇〇組の選手く、って言い方でいいだろ。借り物の書いてある紙を取った蘭は、少しの間固まっていた。

なんだろ、変なもんでも書いてあんのかな。ひとつなぎの大秘宝とか。

しばらく固まって、せつかく二位でお題を取ったのにばんばん抜かれて行く蘭。幸いなのはまだ誰もゴールはしていないことだが……。

と、そこでようやく蘭が動く。意を決したらしい。後半の海はヤベーらしいから気を付けろよ。

しかし蘭は大海原に乗り出すなんてことはせず、何故か赤組のテント、つまり俺の方へとずんずん歩いてくる。顔が怖いわよ蘭ちゃん。

「……ちよつと海ぎて」

どうやら借り物の対象は俺らしい。

男子生徒とかなのだろうか。それならまあ、女子校育ちの蘭が固まっていた理由も分かる。

「ん、あいあい」

テントという避暑地から出て、俺は蘭と共にゴールへ向かう。

蘭の顔が赤い気がするのだが、日焼けでもしたんだろうか。今日日差し強いからなあ。

『二位でのゴールは赤組メッシュちゃん。借り物は……。どうやら男を連れているようです』

他の選手は借り物を借りるのに苦戦しているらしい。

その点、蘭は当たりを引いたと言える。何せ同じ赤組の、しかも幼馴染でもある俺が借り物の対象なのだ。断るなんてことはまずしない。蘭が敵でもしない。

「で？ 結局借り物ってなんだったの。男子生徒とか？」

「……ん。そんなとこ」

ちよつと違うのか。

まあいいや、無事一位を取って赤組に貢献出来たし。

競技を終えた蘭と一緒にテントへ戻る。テントの日陰に入ると、心做しか涼しい気がした。直射日光があるかないかかってやっぱり大きいんやなつて。

日陰の偉大さを感じていると、何故かこつちにモカがやってきた。手元を見ると一枚の紙が握られていたので、どうやら借り物を仮に来たらしい。にしてもなんで赤組（敵陣）に。

「海く、ちよつときてく。体貸してく」  
また俺か。

呼ばれたので仕方なくテントから出る。敵に加担するみたいになつてしまうが、相手が知り合いなら断るわけにもいかない。

にしても、俺じゃないといけない理由はなんだろうか。バンドやつてる男子生徒とか、そういうピンポイントなお題なのだろうか。

『次のグループでの一位は青組の…えと…待ってね…あ、あつたあつた。青組の青葉モカさん。お題の品は…あれ、また関口？ 男子生徒を連れてますね』

また一位なのか。

もしかして借り物競争のお題、意外と難しい？

「ちなみにモカ、お前のお題って何だったの？」

「んく？ えつとねく、好きな人く」

「……………ふーん？」

ふーん？

「海は誕生日にいろいろ買ってくれたから好きく。パンもたまに奢ってくれるしく」

そう言つて、この前買つてやったネックレスをチラツと見せてくる。

なんだろうね、この気持ち。財布みたいな扱いされてるのに可愛いから許そうかなとか思つちやつて悔しい。絶対俺の誕生日には釣り合い取れるくらいのもん買わせてやるからなちくしょう。

日差しから逃げるようにテントに入り、お茶を飲んで一息ついた俺に、再び声がかかる。

「あの、関口くん…一緒に来てもらっても…いい、ですか…？」  
白金さんだった。

モジモジと赤組のテントの前に立つ彼女の姿は実にしおらしく可愛らしい。気づけば俺は白金さんの隣に立っていた。

にしても、また俺か。あれかな、せっかく共学になって初めて男子を交えた体育祭やるんだから絡みを増やそう的な思惑でもあんのかな。それでお題が男関連のものが多いか。

『続いて三位でゴールしたのは青組の白金さん。お題の品は…また関口？』

さすがに司会も訝しんだらしい。俺もよく分かってないから許してほしい。

「白金さん、お題って何だったんですか？」

「えっと…仲の良い…男子生徒、だったので…ご、ご迷惑でしたか…？」

「いえ全然。むしろ嬉しいです」

そっかー。仲良い男子で俺選んでくれたのかー。ふへへ（恍惚）にしても、やっぱり男関連のお題は多いのかもしれない。

もしかしたらリサさんとか奥沢さんからも求められちゃうかなー！ ふはは！

以後、特に誰かから声をかけられることはなかった。

おこがましかったですごめんなさい。

？ ？ ？ ？ ？

『栄光への近道など存在するわけがない。誰であろうと、初めの一步は小さいもの。頂きへの最短コースは架け橋を渡ることなのだ、そう柚師匠は言っていました』

『違うねそれ』

さて、何だかんだで競技は次々と消化されていき、俺の出る二人三脚の番が回ってきた。

入場口から入場し、俺たちの四つ前のグループがスタートするのを見てから、俺はパートナーの足と自分の足を紐で括り付ける。

今回の俺のパートナーは意外すぎる人だった。

須田や五十嵐<sup>いがらし</sup>辺りなら比較的よく絡むめんつだし楽だな、とは思っていたんだが、全くもって気の休まらない相手と組むことになってしまったのだ。

答えを言おう。俺のパートナーは牛込さんである。

もう一度言う。俺のパートナーは牛込さんである。

は？（は？）

「うく… やっぱりちよつと恥ずかしいね…」

牛込さんがとても恥ずかしそうに言う。顔は真っ赤だ。俺の顔もきつと真っ赤なんだろう。

けどそれも仕方がないんだ。半袖半ズボンの体操服で二人三脚なんかしたら、腕や足の肌は直に触れる。それで体が密着するわけだから、もうモンモンもいい所である。

何故男女でパートナーを組んでいるのかと聞かれると、それが学校の方針だったからと答える他ない。現に、俺たち以外の組も男女で組んでいる。

なんか学校側は男子と女子に仲良くなってもらいたいとかなんとか言ってたが、倫理観念ぶつ壊れてるんだろうか。ワンチャン事案だぞこれ。

ちなみにだが、俺がこの競技に出ることになったのはくじ引きだし、牛込さんもそうだ。牛込さんにとっては特に、不運の結果なのである。

運が悪いのであって俺は悪くないって言ったのに須田から五発くらい殴られた。解せぬ。

三つ前のグループがスタートする。

空いた分一步前へ歩き、自分達の順番を待つ。

『恨ま妬ましい男女二人三脚、特にラッキースケベなどは起こらず、現在のところは順調に進んでおります。絵的にはつまらないが個人的にはこのまま何も起こらないでほしい。僕以外がラッキースケベにあうところを見ても得がない。頼むから何も起こるな、頼むから僕以外がいい目を見るな。そう願うばかりであります』

『欲望に忠実だよ、梶原くん』

『素直に生きることは良いことだ。私が幼き頃、じつちやがそう言っておりまして。漢たるもの、ムツツリよりもオープンであれ。我が家の家訓であります』

『いつ言うか悩んでたけど、すっごいキャラ作るねー』

二つ前のグループがスタートする。

正直心臓バクバクだ。女の子の柔らかい体と、どこからか向けられる視線を受けて。なんだろう、幼稚園の頃に初めてライオンを見て、そいつに何故か睨まれた時のような感覚。冷や汗半端ないんだけど。

一つ前のグループがスタートする。

とうとう俺たちの走る番だ。

スタート地点に立ち、牛込さんと肩を組む。視線がより一層強くなった気がした。視線は人にダメージを与えることができる。関口、学びました。

スタートを告げる空砲が鳴る。

それと同時に、俺は左脚を、牛込さんは右脚を前に出した。

「いち、にっ、いち、にっ、いち、にっ」

隣でそんな弾んだ声を出さないでほしい。萌えちゃう。は？

雑念をどうにかこうにか脳内ごみ箱フォルダにぶち込み、牛込さんと歩調を合わせる。後で絶対、絶対にサルベージしてやるからな（鋼の意思）

ラッキースケベ

『事 故が無いことを祈りますが、今回の出場者には彼がいます。花咲川の女子だけでなく何故か羽丘との絡みも多い関口海であります。彼の存在は事故発生のメタファーなのか、彼を知る全男子生徒が手に汗握り固唾を飲んで見守ります』

『関口くんが何をしたって… あ、』（第六話『恋とか愛とか分からないって言ってる青春はすぐに過ぎ去る』参照）

『…？ まさか奥沢さんも関口となんかあるの…？ オイ野郎共、武器の貯蔵は十分かア!!!』

「いち、につ、いち、につ」

何も気にせずにリズムを刻む牛込さんはベ<sup>リ</sup>ズ<sup>ム</sup>の鑑。つーか実況、さつきからうるせえぞ。俺たちそんなにしやべったことも無いだろ。俺の何を知ってるってんだ。

そんなこんなでカーブに差し掛かる。

実況が実況としての仕事を果たしていないが、現在レースはほぼ横並びだ。俺たちが若干遅れているかもしれない。

いくぞ牛込さん、コーナーで差をつけろ！

「いち、につ、いち、あつ!？」

えっ？

左脚が引つ張られる。地面と熱いバーチョを交わした。

何が起きたのか一瞬分からなかったが、歩調が乱れて転んだんだろうと理解するのにそう時間はかからなかった。てか状況的にそれ以外考えられん。

「ぺっ、ぺっ…牛込さん、大丈夫?」

口に入った土を吐き出し、一旦足の固定具を解いて牛込さんを立ち上がらせる。

幸い怪我とかはしてないみたいだが、その瞳には溢れんばかりの涙が溜まっていた。

「どっか痛めた? 歩けそう?」

「う、ううん… ヒツ… 痛い… もあるけど…」

嗚咽気味に喋る牛込さんは、そのまま言葉を続ける。

どこからか須田の怒号が聞こえてきた気もしたが無視だ無視。「転げちゃって… うちのせいで負けるの、ダメだなって…」

「あ…」

なるほど、そういう。

申し訳なさとか悔しさとか、そういうやつね。

ふむ、と俺は前方を見る。

男女で組まされているからか、どの組もそこまで速くはない。まだゴールしている組はなかった。

まだいけるか。

「ちよつち失礼ー、つと」

「…えつ、えう?」

今にも泣き出しそうな牛込さんの両足に、俺は固定具を括り付け  
る。

後で須田辺りにはまた殴られるんだろうなー、と軽く覚悟を決めつ  
つ、俺は混乱しているらしい牛込さんを抱き上げた。

いわゆるお姫様だつこだ。

『あつ！　なんか関口がお姫様だつことかしてる！　野郎共、武器を  
投げろオオオオ!!』

『物を投げないでくださいーい!!!』

「二人で三本の脚、ってんならこれでもいいだろ、つとー！」

屁理屈と牛込さんを抱えて駆け出す。ペットボトルとかが飛んで  
きたが、やつらは牛込さんに当たることを考慮はしないのだろうか。  
まあ俺にも当たってはいないし、本気で当てる気はないっぽいけど  
さ。

足の速さは平均くらいの俺だけど、とろとろ走ってるほかの組より  
かは断然速い。

みるみるうちに差は埋まり、追い抜く。

そのまま駆け抜け、一位でゴールテープを切った。

何気ゴールテープ切ったのつて初めてだな。気持ちいい。

「ははっ！　ほら牛込さん、一位だよ一位！」

「うえ?　え?　ええ???」

意外にもテンションの上がつてしまった俺は、牛込さんを抱き上げ  
たままはしゃいだ。こんなに喜んだのいつぶりだろ。あいや、喜んだ  
のを表に出したのはいつぶりだろ、かな。

「いや、普通に違反だから。失格ね」

「アツハイ」

審判（教師）に冷水ぶっかけられたし、須田にはグーで殴られた。

★ ☆ ★ ☆ ★

『以上をもつて、午前の競技は全て終了致しました。憎い奴への恩讐を胸に、今は力を蓄える時であります』

『水分塩分の補給はしっかりね。いやほんとに。死ぬから』

午前中の競技が終わり、お昼の時間になった。

私はおうちにお弁当を忘れてしまって、今お母さんに届けて貰ったところ。受け取ったお弁当を持って、香澄ちゃん達のところに向かう。ポピパのみんなで固まってるって言ってたけど、どこにいるんだろう？

お弁当を食べる場所は、競技場の敷地内から出なければどこで摂ってもいいらしい。ほとんどの人は日陰のある観客席で食べてる。香澄ちゃん達がいるのも、例に漏れず観客席の一角だつて言つてた。「あ、りみりーん！ こつちこつちくー！」

人でごった返している中、香澄ちゃん達の姿を見つけられずにいた私に声が届く。

手を振つて、そして香澄ちゃん達のいる方へ向かった。

「待たせちゃつてごめんね…？」

「ううん！ 全然大丈夫！」

笑つて許してくれる香澄ちゃん。

ほかのみんなも、気を悪くしてる人はいないみたい。ホツと安心する。

見れば、みんなお弁当を食べずに待っていてくれたらしい。

「それじゃありみりんも来たしつ、いっただつきまあす！」

『いただきまーす』

香澄ちゃんが大きな声で言い、それに続くように私達四人もいただきますをする。

いつもは沙綾ちゃんの家のココロネをお昼ご飯にすることが



多い私だけど、今日はお母さんが頑張ってお弁当を作ってくれた。忘れちゃったのが本当に申し訳ない。帰ったらまた謝ろう。

「それにしてもりみ、さっきのすごかったね〜」

「さっきの？」

アスパラベーコンを頬張る私に、沙綾ちゃんの声がかかる。

さっきの…… さっきの？ なんのことだろう。

「ほら、関口くんにお姫様だっこされてたあれ。あれは笑っちゃったな〜」

「ふえ!？」

沙綾ちゃんに言われて思い出す。

うう…… 恥ずかしすぎて記憶から消してたのに……。

「海くん、あのあと男の子からすっごく追いかけられてたね〜」

箸先を咥えながら、香澄ちゃんが思い出すように言う。

「つたく、自業自得だっつもの。ほかの女子ともいろいろ絡んでたみたいだし？ ちったあ反省すればいい」

「私もお姫様だっこされてみたい。女の子の夢」

…… あれ？ 有咲ちゃん、なんだか怒ってる……？

「そういえば関口くんは？ 香澄、関口くんもお昼誘ってたよね？」

言われてみれば、彼の姿が見当たらない。

いつもつてわけじゃないけど、お昼ご飯の時は関口くんや須田くんも一緒にいることが多い。

まあ今日はいない方が助かるけど…… 顔見るとまだめっちゃ恥ずかしいし……。

「誘ったよ〜。けどなんか『今お前らと一緒に飯なんか食ったら誰に殺されるか分かったもんじゃやない』って言ってどっか行っちゃった」  
「あ〜…… まあそうかもね〜。私らはまだいいかもだけど、りみと一緒にいたら須田くんあたりが……」

？ 須田くんがどうしたんだろう。

須田くんの姿も見当たらない。

前に約束したおかず交換、やろうと思ってたんだけど。



ない。

彼のようになれたらと、心のどこかで思っているのかもしれない。

そんな須田くんは今、一体どこに――

「須田くんも誘ったんだけどねー？　なんか『逃げたクソ野郎を捕まえてくる』ってクラスの男子全員でどっか行っちゃった」

そういうところがモブ臭を漂わせちゃうんだよ須田くん…。

そして世界は笑顔になった

彼はとても大人で、それでいて同じくらい子供だ。

初めて彼と出会った時、彼は笑っていた。

友達と語り、にこやかに微笑む彼は、はたから見れば「幸せ」を謳歌する普通の男の子。

けれどその笑みはどこか空虚に見えて、中身を伴っていないように思える。

彼は心から笑っていない。彼の心は満たされていない。その姿はとても儂く、淡いものに見えた。

だから私は、彼を『笑顔』にさせたいの！

★ ☆ ★ ☆ ★

とある秋の日。

バイトもRoseliaやAfterglowの練習も自分このバンド練もない、完全フリーの日曜日だ。

今日は天気も良く、風も穏やか。絶好の散歩日和だったので、俺は財布だけ持って散歩に出たのだ。スマホもWALKMANも持っていない。たまには音楽ではなく、自然の音に耳を傾けるのもいいなと思っただから。

特に目的もなく、ただふらふらと街を歩く。

閑静な住宅街だ。柔らかな秋風の音が耳に心地いい。それに加えて、俺の耳にはいろんな生活音が聞こえてきた。

掃除機をかける音、自動車の駆動音、赤ん坊の泣き声、犬の遠吠え、鳥の囀り、ボールを蹴る音、ハロハピの掛け声。

…ん？

「ハッピー！ ラッキー！ スマイル？ イエーイ！！」

「「イエーイ！！」」

逃げなきゃっ (脱兎)

「あら？ 海じゃない！ 奇遇ね！」

遅かった… (本気の絶望)

「… ああ、危遇だな (危機を感じさせる遭遇の意)」

タタタツと駆け寄ってくるお嬢に、精一杯の作り笑いを浮かべてみる。引き笑いの間違いかもしれない。

「そうだわ！ 海、私達今から病院でライブをするのだけど、一緒にやりましょう！」

「えっ、いやでも俺は…」

「打ち込みのギターパートがあるの！ 薫一人だと手が回らないパートがあるのよ、そこを弾いて欲しいわ！」

「ところが、打ち込みを理解している… だど!？」

奥沢さん驚きすぎじゃないですかね。

そりやお嬢でも打ち込みとかくらい知ってたんだろ。曲がりなりにも音楽やってんだし。

「いや、俺今日ギター持ってきてないし…」

「大丈夫よ！」

「譜面とかも覚えてないし… というかやる曲も知らないし…」

「大丈夫よ！」

何がですかね？

「関口様。こちら、関口様が普段使用なされている機材と同じかほぼ同等のものを用意致しました。ライブで演奏する曲が三曲で、こちらが譜面になります」

黒服エ……

「海！ 私達とライブをやりましょう！ みんなで笑顔になるの！」

輝く笑顔という名の拳で容赦なく右頬をぶん殴ってくるお嬢に、俺は大人しく左頬を差し出すしかなかった。お嬢の笑顔には勝てんて。

? ? ? ? ?

「さあ、出発よ〜っ！」

という訳で始まってしまったハロハピライブ in ○△病院。

軽快なタムドラムの太鼓の一種。ドラマーから見ると一番手前にある太鼓のこと。タムにも色々種類があるの音から始まったこの曲は、『にこ×にこ』ハイパースマイルパワー!』という曲だ。

この曲はギターもいいけど、俺はどっちかって言うとピアノが好きなんだよな。ハロハピにキーボードイストはいないから打ち込みなんだけど。機会があれば弾いてみたいもんだ。いや、キーボードつか普通にピアノで超ムズいからやりたくないなやっぱり(フラグ)

そうは言っても、ギターが楽しくないわけじゃない。なんの意味もないけどサビで頭振ったし、返し演者側にちゃんと音が届くように設置してあるスピーカーに足乗せて弾いた。V系かな? 違いますね(素早い自己完結)

元々は瀬田先輩一人で弾く用の曲だし、俺はテキストにバツキング弾いてるだけなんだけど、裏拍刻んでる時とかがめっちゃ気持ちいい。あと許可貰ってちよつとしたアレンジも加えてるし。Bメロでめっちゃくちや早弾きした。

「どんどん行くわよ〜!!」

続いて二曲目が始まる。

次の曲は『ゴーカー! ゴーかい!? フアントムシーフ!』。ハロハピらしいポップな曲だ。ジャズを極端に明るくするところなるのかもしない。

つーかこれ半分くらい打ち込みだろ。これ全部奥沢さんが作ってるんだろ? すげー(純粋な尊敬)

この曲は何故か瀬田先輩が怪盗に扮して登場する。演奏中に分かったことだが、演劇みたいなのが始まって瀬田先輩ほとんどギター弾かなくなっただよな。曰く「いつもはちゃんと弾くけど、今日は仔犬くんがいるから」らしい。まーじで焦るからそういうことは事前に言っついてほしい。てか仔犬くんって俺のこと?

さて、二曲目も終わり、少しばかり休憩が入る。瀬田先輩は着替えに行った。

ハロハピの曲はやってる側も見てる側も非常に疲れる。プラスの意味で。ポピパも大概だけど、ハロハピの観客巻き込み型ライブは尋常じゃない。三馬鹿の運動能力と王子力が遺憾無く発揮され、ステージもフロアもてんやわんやだ。それがまた楽しいしハロハピの味なのだが、演者側で毎回これは本当に勘弁してほしい。奥沢さんと松原さんの苦勞が窺える。どんまい、ファイト、って気持ち。

お嬢と北沢の元氣いっぱいハチャメチャMCが終わり、瀬田先輩が怪盗から王子に戻って帰ってきた。そういやお嬢と北沢はさっきの怪盗Ⅱ瀬田先輩って気付いてないって話、マジなの？

「ごころん！ 怪盗がないよ!？」

「ホントだわ!・・・ あら？ 薫、今までどこに行っていたの？」

マジなんだあ・・・。

「まだまだ行くわよ!」

頼むからお嬢はもうどこにも行かないでほしい（切実）

せめてステージ上でバク転するだけにして。突然なんの説明もなく空飛んだりしないで、マジ頼むから。

最後の曲は『ハイファイブ∞あどべんちゃっ』。

この曲はシンバルとギターから始まる。最初の十秒くらいは瀬田先輩一人で、途中から俺がハモったりピロピロ早弾きしたりする譜割りにした。とても・・・ 気持ちいいです・・・（恍惚）

本当なら原曲を崩すべきじゃないんだが、お嬢に「楽しくやりましょう! アレンジ? どんどんやっていいわよ!」って言われたから常識の範囲内で好き勝手やってる。調子に乗ってギターソロもツインにした。さすがにやり過ぎたかと思って瀬田先輩を見たけど、ニッコリしてたから問題ないだらう多分。

三曲目も終わる。

曲覚える時間が一時間しかなくてマジで死ぬって思ったけど、なんとかなるもんだなあ。いや覚えきれなかったとこテキトーに弾いちやっただけ。それは許してほしい。

しかし終わって見れば早いものだ。

お嬢に乗せられて暴れた俺の額に汗が光る。いい汗かいた、水飲みたい。

さっさと機材片付けて…

「もつとも〜つと行くわよ〜!!」

えっ？ 何それ俺聞いてない。

『諦めなよ関口くん。ああなったところは止まらない』

「進撃のこころちゃん…」

松原さんなんて？

「馬鹿野郎お前、俺はやらない（やれない）からなお前！」

そもそも曲何するんだよ！ それすら知らねえでギターなんか弾けっか!!

「次はカバー！ 『シュガーソング○ビターステップ』よ！」

弾いたことある曲だあ…

——とりあえず全力で弾いた。

終わった。もう無理、頭が無理。あと体力。お嬢動きすぎだしこつちに絡んできすぎ。合わせてたら死ぬほど疲れた。

まあとりあえずこれでライブは終わりだ。はい、お疲れさ…

「止まらないわよ〜つ!!」

止まってくれよ〜つ!!

「次は『G○!G○!MANIAC』！」

知ってる曲だあ…

いやでも知ってるからって弾けるわけじゃないんだぞ!!

「いや無理。俺無理帰る」

『そこをなんとか…。ほら、入院中の子とかおじいちゃんおばあちゃん達がキラキラした目してるし…』



うるせえ！ 無理なもんは無理だ！ 俺は帰らせてもらう！

『あとでデートしてあげるって言っても？ …… 花音さんが』

「ふえ!?!」

「はんっ、そんなもんで俺が釣れるとでも?」

もちろん気合いで弾いた。

? ? ? ? ?

「うーん！ とくつても楽しいライブだったわね！」

所変わって、場所は病院近くのファミレス。

結局、あれからオリジナル曲を三、カバー二曲の合計五曲も弾かされた。全部合わせたら九曲だ。意味が分からない。

毎度毎度うろ覚えの曲を三十秒でなんとか思い出し、ちよこちよこ  
改変することなどでなんとか試練を乗り切った俺。マジで偉い。本当に  
偉い。凄いぞ俺。海、俺がナンバーワンだ… (王子)

「うわ… 関口くん燃え尽きてる…」

「カバー曲、私たちは前にやったことある曲だったからよかったけど…」

「弦巻製の着ぐるみ着てたら視界に譜面くらい出てくるんだけどね  
〜」

made in TURUMAKIってそんなハイテクなの？

モバイルスーツの間違いだろそれ。そのうち空飛んだりしない？ (する)

「そういえば、ミッシェルには弟がいるって設定があるんだよね…」

「… 何で俺見んの?」

「いや、一応知っておいて欲しくて」

俺は絶対にモバイルスーツなんて着ないからな。

「とういか関口くん、前よりも上手くなってる？ 演奏もそうだけど、こーう、なんて言うんだろ。演奏中の振る舞いってというか、そういうのが凄く板に付いてる感じ」

「ん? あ… まあ、経験値が溜まってきたんじゃない?」

「そんなになやってるんだ、ライブ。なんだつけ関口くんのバンド。えと... オスバンド?」

「オスバンドは(仮)だよ。まだ名前決めてない」

そろそろ名前決めなきやなあ、つてもう三ヶ月くらい言ってる気がするな。まあオリジナル曲をライブでやるまでに決めればええやろ。「てかオスバンド(仮)の方は全然ライブやってないな。そろそろやんなきゃ忘れられ... いや、そもそもそんな知名度もないか。コピーしかやってないし宣伝もしてないバンドだし」

Twitterとかでバンドのアカウント作ってみるかなあ。

「オスバンドの方は、つてことは、別でライブやってるの? バンド掛け持ちとかしてたっけ?」

不思議そうに奥沢さんが聞いてくる。

別に隠す必要もないしな、言ってもいいだろ。

「なんか最近、サポートギターやってくれてっていう依頼がよく来るんだよな。んで、それに出てるんだよ。報酬が出るから断る理由もないし。上手くなつたつてんならそれが原因だろうなあ」

ライブパフォーマンスの訓練はライブ本番でしかできない。というか、ライブをやっついていけば勝手に身に付くもんだ。こればかりは現場で積み上げた経験値がものを言う。

「へえ、そんなことやってたんだ」

感心したように言う奥沢さん。

どうでもいいんだけど、奥沢さんの着ぐるみで火照った肌がとても扇情的えっでなんとも視線が定まらない。てか汗かいた後に白いシャツとか着ないで欲しい。

「すごいね、関口くん。どのくらいやってるの? その、サポートギターのお仕事」

「仕事ってほどじゃないですけどね。んー... パスパレのライブに出るから依頼がくるようになって... 大体二週に一回くらいですかね? あ、来週もやりますよ、ライブ」

「そうなの? すごいなあ... あっ、そのライブ、見に行っても良いかなあ?」

若干上目遣いで聞いてくる松原さんあざとい。

「まあ別にいいですけど… どうだろ、大丈夫かな」

「? 何か不安でもあるの?」

歯切れの悪い俺に、松原さんではなく奥沢さんが聞いてきた。

まあこれも別に隠すことじゃないしなあ。

「いや、来週のライブね? 席がもう埋まってるかもなんだよ」

「へえ。そんなに人気のバンドのサポートやるんだ?」

「あー、いや。まあバンドもすげー人気だけど」

軽く頭を搔いて、俺は言葉が続ける。

「その、場所がね? 武道館なのよ」

「武道館?!」

びつくりするよね。分かる。俺も聞いた時はびつくりした。

「今回の依頼人、バンドってよりソロ歌手でな? 俺はバックバンド任されただけなんだけど、その歌手が結構な人気で。チケットとかもう無いかもしれない」

「いやその前に武道館?! 武道館で!」

「えと… 関口くん、武道とかやってたん、だ…?」

「なんて?」

松原さんも冗談とか言うんだなあ。いやスケール大きすぎて分かってないのかもしれない。正直俺もよく分かってない。昨日リハ行ってきたけど本当に意味わかんなかった。ステージ、ためえ回ってんじやねえぞ。

「? 武道館がどうかしたの?」

と、ここでお嬢が話に混ざってきた。

これはダメな予感。早く誤魔化さなきゃ。

「いや、別になんでも——」

「そうだわ! 海がやるのなら、私達もライブをやりましょう! 武道館で!」

がつつり聞いてたんじやないか!

というか何やらかすつもりだこのお嬢様。武道館貸し切るつもりか? いやまあ、弦巻家ならそれも可能っちゃ可能なのか。チケット

め。

「海は来週ライブをやるんでしよう？ だったらその時がいいわね！」

「ストップお嬢」

基本お嬢の蛮行にはなんだかんだで流される俺（自覚アリ）だが、これはちよつとばかり見過ごせない。

「あのな、お嬢。今回のイベントはな？ 俺の依頼人にとってめっちゃくちゃ大事なライブなんだよ。武道館でワンマンライブするってのは、これ以上ないような極上のステイタスだ。それをお前、ただの思い付きでツーマンなんかにしてみる。依頼人からしたら顔面に泥塗りたくられたようなもんだろ」

武道館でのライブは生半可なものではない。お遊び気分で害していいものじゃないんだ。

「つかそんな重要すぎるライブにバックバンドとして雇って貰えたことは嬉しいことだけど、俺が呼ばれた理由は今年度最大の謎なんだよな。なんで俺なんだろ。」

「うーん、そうなのね。分かったわ！」

うん。お嬢は基本いい子なんだよな。話せば分かる。

「じゃあその前日に武道館でライブをしましょう！」

何言ってるんだこいつ。

??????

武道館でライブをするっていうお嬢の願いを黒服さん達が叶えようとするのを奥沢さんが必死に止め、俺自身は無事に武道館ライブを終わらせた翌日の月曜日の朝。

「ふあ、あゝ……」

大きな欠伸を右手で隠しつつ、俺は登校していた。

昨日はライブの高揚感が抜けずにあんまり寝れなかったんだよな。今更眠気がきてる。ちようねむい。

こんな日に限って三限目に体育があるんだよなあ。四限確実に寝

るだろ俺。

「おはよう、海！」

不意に背後から声が掛けられる。

朝からテンションの高いことだ。

「んあ… あー、お嬢か。おはよ」

振り返れば、今日も今日とて輝く笑顔のお嬢がそこにいた。

さらさらとした金砂のような髪が朝日に照らされて本当に輝いてる。これで落ち着いた性格だったら深窓の令嬢って感じがするんだけどなあ。いやまあ、奥ゆかしいお嬢なんて想像できないけど。お嬢は天真爛漫でこそお嬢だ。

「なんだか眠そうね？ しっかり寝なきやダメよ？」

お母さんかな？

「美咲は授業中にたくさん寝てるわ！ 寝る子は育つって言ったの！」

奥沢さん…。

「そういえば！ 昨日のライブ、とっても凄かったわ！」

「あれ、昨日来てたの？ 言ってくれたら… いや、別にどうこうってことはないけど」

百人規模くらいのライブハウスなら、ライブ終わったあとに声掛けるとかあったけど、昨日のは武道館だからなあ。控え室もマジで「楽屋」って感じだったし。

「ええ、美咲と薫とはぐみ、花音も一緒だったわ！ ミッシェルは用事があるって言って来れなかったけれど」

「まあミッシェルは多忙だから」

本当に多忙だよなあ。毎度舵取りお疲れ様。

「あつ！ 美咲だわ！ おはよう、美咲〜！」

噂をすれば、少し前の角から奥沢さんが出てきた。

それを見つけたお嬢は元気に手を振って走っていく。小走りなんて可愛いもんじゃない、世界を狙える疾走だ。スカートでそんなに走んなど言いたいところだが、何故かお嬢のスカートは翻る様子もない。鉄で出来てんじゃないだろうな、あれ。サ○ヤ人の修行かよ。

だとしたらお嬢の身体能力の高さも領けると妙なことを考えながら、俺は奥沢さんに挨拶すべく軽く駆け出した。小走りです。

★ ☆ ★ ☆ ★

彼を笑顔にするのは、簡単だけど難しい。

美味しいものを食べれば嬉しそうにするし、綺麗な景色を見ればそれに見蕩れる。けど、心の底からは笑っていない。そんな感じだ。

そんな彼が唯一、心の底から笑顔になるもの。それが音楽だった。

「ふんふふくん。ここを出てきたミッシェルを、ドカーン！」

「何する気だお前」

放課後。C i R C L Eのカフェテリアでクリームソーダを飲みながら次のライブのことを絵にしていたら、後ろから声をかけられた。

「あら海！ 奇遇ね！ 貴方もC i R C L Eに用事があるの？」

「ちよつとまりなさんに呼ばれててな」

立ったまま、海はそう言う。

お隣どうぞ。

黒い服の人達が椅子を下げ、そこに海が「あ、ども…」と躊躇いがちに腰を下ろした。

「まりなから？」

「そ。どうせどっかのサポートの依頼だろうけどな。あの人、そういうのの仲介役やってるし」

何か飲むかしら？ 今日少し暑いし、クリームソーダがいいと思うの。

黒い服の人達がクリームソーダを海の前に置き、海は「あ、すんません…」と躊躇いがちにクリームソーダを啜る。

「サポート… 昨日の武道館みたいなライブのお手伝いかしら！」

「いや、さすがにそんなポンポン武道館ライブの依頼はこないと思うけどな。てか武道館より普通にそこらのライブハウスでライブしたい。武道館広すぎるし重圧やべえのよ…」

割と本気めにゲンナリした顔をしている。そんなに昨日のライブは疲れたのかしら？ 私にはそうは見えなかったけど。むしろ、とても楽しそうで笑顔が輝いていたわ。

「それなら私達とライブをやりましょう！ ちょうど今週末に幼稚園でライブをする予定なの！」

「え、予告もなく曲増えたりするからやだ」

「場所は羽丘女子学園の近くで、時間は朝の十時からよ！」

「俺の言葉に耳を傾けてくれ」

「ミッシェルをドカーン、海はズドーンね！」

「ミッシェルと俺は死ぬんか？」

「そうだ！ 新曲も作りましょう！ うーんと楽しい曲を！」

すつごく楽しみだったのが、もつともーつと楽しみになったわ！

早速この気持ちを美咲に伝えましょう！ うーんと楽しい曲を作ってもらわなくっちゃっ！

「ねえ海！ 美咲がどこにいるか知らないかしら？」

「いや知らんけど。てか聞いてお嬢、新曲って俺もやるの？」

「うーん… 電話でもいいけれど、やっぱり直接話した方が良いわよねー！」

「ねえ。ねえってばお嬢」

「そうと決まれば街へ出発よ！ 美咲を探すの！」

「いやLINEすればいいんじゃない。てか俺今から用事あるしってよりその新曲は俺も弾くのかそもそも俺ライブ出るの決定なの？」

音楽は人を笑顔にする。

もちろん、世界を笑顔にするのは音楽だけじゃない。演劇も、ソフトボールも、ぬいぐるみも、クラゲだってみんなを笑顔にすることはできる。

けれど彼は、少なくとも彼にとっての一番の笑顔は、音楽だ。

周りの人達から一步引き、まるで俯瞰するように、傍観するかのように、普段の彼の笑顔には中身が伴っていないことが多い。

そんな彼が心から笑う瞬間には、いつだって音楽がある。それが全

てではないだろうけど、それでもほとんどが音楽だ。

だから、私は音楽をする。

彼と、そして彼のような人達を笑顔にするために、私は、  
ハロー、ハッピーワールド!  
私、  
た、  
ちは音楽をやり続けよう。



## 『既存国家の転覆からの迅速な建国』

彼とよく関わるようになったのは最近だけど、彼はお兄ちゃんみたいな人だと思う。

みんなを支えてくれて、歩幅を合わせてくれる、優しいお兄ちゃん。おねーちゃんも信頼してる、すごい人。

彼と出会ったのは、あこがまだ小学校に上がってすぐの頃。

おねーちゃんの友達として、あこの家に彼はやってきた。

最初はすごくびっくりした。知らない男の子が家に来たのだから当然の反応だと思う。だからその時あこに挨拶した彼を無視したあこは悪くない。

その後も、彼はよくおねーちゃんと遊んでたし、たまにうちにも来た。しばらくすれば自然と慣れてきて、普通に挨拶するくらいの仲になった。

そして数年の刻ときを経て、我らは再び相見える。闇の力が集いし狂宴を奏でる地、ライブハウスCIRCLEにて——こう、ドーン！ バーン！ って感じで！（脚色）（実際は顔を合わせただけ）（挨拶もなし）（詳しくは第一話参照ネ！）

★ ☆ ★ ☆ ★

「ライブをやりませう」

CIRCLEの数あるスタジオの一室にて、俺は唐突にそう宣言した。

それはもう唐突だ。なんの前触れもない。思い出したかのように、つていうか実際突然思い出したから口に出した。

そしてそんな俺の宣言を聞いたのは、Roseliaの面々だ。

みんな忘れてるかもしれないが、俺はRoseliaの御意見番、言うなればコーチ的な立ち位置の人間なのである。練習にだって予定が被らない限りは毎回参加してるし、技術的な指摘もちゃんとしてるんだぞう。

「ライブ？ また急だね、いつやるの？」

つかの間の休憩時間。氷川さんが焼いてきてくれたクッキーをパクパクモグモグしながら、リサさんが聞き返してきた。

良かった、ちゃんと反応してくれて。友希那さんとか「そう」の一言で済ませるかもしれないからな。ありがとうりサさん。

「二週間後に、Galaxyっていうライブハウスで。五反田の箱ライブハウスのことなんでちよつと遠いんですけど」

クッキーに持っていていかれた水分を補給するために外の自販機で買った微糖のコーヒーを流し込みつつ、俺は答える。

てか氷川さんまじでお菓子作り上手くなったよな。クッキーに関してはもうリサさんと遜色ない。おいちい。

その氷川さんが、リサさんに続いて質問してくる。

「そのライブハウスは初耳ね。何かのイベントでも？」

「あ、いや。そういうんじゃないんですけど、ちよつとお母…えと、母の知り合いがそのオーナーやってて。最近過疎ってきてるから暇ならライブやってくれて頼まれたらしいんすよね」

それと後から知ったけど、この前武道館でライブやった時に俺と同じくサポートでドラム叩いてた子の親がGalaxyのオーナーらしい。世間って狭いよね、ホント。

「そう言えば…オリジナル曲、出来たって…Twitterで、言っていました、よね…？」

「そうなんすよ。ようやくくって感じですよ」

白金さんの言う通り、ようやく俺たちのバンドにもオリジナル曲が出来たのだ。俺と五十嵐いがらしがあーでもないこーでもない頭を捻って紡いだ音と、たまに須田が思い付きのフレーズをちよいっと入れた、俺たちの曲。

つーか須田はなんなの。あいつがペッて入れてきたフレーズ、め

ちやくちやカツコよくて震えたんだけど。才能マンめ。

「海の作った曲…とても興味があるわ」

「俺たちが作った曲です」

間違いがないように訂正しておく。

俺だけじゃ絶対に作れなかった最高の曲だ。五十嵐と須田の功績を無かったことにしてはいけない。

「…そうよね、ごめんなさい」

「あ、いえ」

いざ謝られたらなんだか怖気付いちやうな（小心）

「あこも気になるー！海兄たちの曲！どんな曲なの？」

はいはい！と元気に手を挙げるあこちゃんは今日も可愛い。

あとでポテチでも買ってあげよう（芽生える父性）

そんなあこちゃんの言葉に同意するように、ほかの面々も俺を見てくる。むず痒いことこの上ない。

「ん…なんだろう、一言で表すのは難しいかな」

「デモ音源はあるかしら？どんな音楽も、直接聴くのが一番よ」

「あく、あるにはあるんですけど…」

歯切れの悪い俺に、友希那さんも、ほかのみんなも不思議そうな目を向けてくる。

「貴方が何を躊躇っているのかは知らないけれど、あるのなら是非聴かせてほしいわ。気になるもの」

「いやまあ、いいんですけど…その、この曲九分近くありますけど、ほんとに今聴きます…？」

「…随分と大作を作ったのね」

少しだけ目を見開き、友希那さんは答えた。

分かる。俺も、あと五十嵐や須田も、曲が完成した時は曲の長さに首を傾げた。

「そういう事なら仕方がないわ。練習が終わったあと、ゆっくり聴かせてちょうだい」

ということ、とりあえずRoseliaの練習を戻ることになった。

てか思うんだけど、俺がRoseliaの練習にいる意味ってそろそろ無くない？ もうあんま指摘するところもないんだけど。新曲できた時に感想聞きにくるくらいでよいのでは？ 関口は訝しんだ。

？ ？ ？ ？ ？

「……随分と大作を作ったのね」

Roseliaの練習も終わり、CIRCLEのカフェスペースで俺たちの曲の録音を聴いた友希那さんは、さつきとまるつきり同じ感想を口にした。

そしてリサさんが作ってきてくれたスノーボールも口にする。

「なんて言うか……すっごいねえ。荘厳っていうか雄大っていうか……」

「すーっごいカッコいい!! ちょっと長いけど、ゆっくりになったり速くなったり……えと、ズーン……とバーン! が折り重なって、今サイキョーに見える! ……あれ? サイキョーに聴こえる?」

「うん。緩急も……凄い、ね。それに、音が揃ってる。すごく……その、綺麗、というか……」

「ええ、これだけ猛然なりフが並んでいるのに、曲としては成立している。初めての作曲とは思えないわね。それに、関口くんはもちろん、もう二人の演奏レベルもとても高い」

これ褒められてるんだよね? やったあ! (歓喜)

「海兄! この曲の名前って何?」

「曲名? 『既存国家の転覆からの迅速な建国』だよ」

「へ? ……なんて?」

「『既存国家の転覆からの迅速な建国』」

既存国家の転覆からの迅速な建国。

「それは……ユニークな曲名ね。海、貴方が考えたの?」

「はい。いやあ、ネーミングセンス無いのは自覚してるんですけどね? 曲のイメージっていうか、そういうのをそのまま曲名にしました」

この曲はインストだが、奏でる音で“ソレ”を表現したつもりだ。  
“ソレ”……即ち、『圧政を敷く権力者への叛逆と、自由国家の建国』までをイメージしたストーリー。一曲の中に一つの物語を収縮させており、物語の進展に伴い、音も重々しく遅いものになれば、颯爽と速いものにもなる。

なんだろうな。ドゥームメタルとスラッシュメタルが折り重なったような、なんとも言えないジャンルの曲だ。

と言っても、何もベ○スみたいなお前それ今別の曲始まったろ」つてレベルの転調をしてるわけじゃない。白金さんの言った通り、あくまで『緩急』で収まる程度だ。

俺は、この曲は見方次第ではメロデス、あるいは一種のプログレ辺りに分類されると思うんだが、須田曰く『すぐくへびいですめたる』であり、五十嵐曰く『エモーショナルヘビイロック。え？ そんなジャンルはない？ じゃあオルタナで』。

元々ジャンルなんてものは曖昧なものだが、これは自由に作りすぎた。作曲者である俺たちがその正体を掴めずにいる。いや個人的にはめちやくちやカツコよく作れたと思ってるけど。

「音楽は自由よ。アーティストのやりたいようにやればいいの」

友希那さんがフォローっぽいなにかをしてくれる。ありがとうございませす。

「二週間後から。まだバイトのシフト出してなくて良かったよ。絶対見に行くね☆」

「え？ いや、Roseliaに出演依頼したいんですけど？」

『え？』

「え？」

え？

? ? ? ? ?

「ライブをやりませす」

Roseliaに出演依頼をした後、ポピパとAfterglow

w、ついでにハロハピにも声を掛けた。返事は全てオツケーというものの。快く受けてくれた。いい友達を持ったもんだ。

そしてどこからこの話を嗅ぎ付けたのか、パスパレの事務所も出張ってきた。『何？ 海くんのバンドが出るライブ？ よろしい、ならば参戦だ』という謎のメールが俺に届いた翌日、パスパレのライブ参加をGalaxyの方から知らされた。いやバカお前、こちとら最大収容人数百人前後の箱なんやぞ。現役バリバリ人気沸騰中のアイドルぶっ込んでくんな。

元々Roseliaっていう、この“大ガールズバンド時代”の“四皇”と評されたりされなかつたりするプロ級の実力と人気を持つバンドが参加するってだけで、今回のGalaxyで行われるライブは業界内で話題を集めていたらしい。

そこに加えてモノホンのプロが来ちゃったら、そりやもうてんてこ舞いだ。ライブチケットが消し飛ぶように売れたらしい。

あまりの出来事に業界が動き、もつと規模のデカイ箱でライブをやるうとか言い出したらしいが、そんなん『過疎ってたGalaxyにもつと光を』のコンセプトの元で開催が決まった本ライブの趣旨に反する。よって俺は何がなんでもGalaxyでライブするぞコノヤローという強い意志があったりしたのだが、まあそんなことはどうでもいい。最終的な結果として、ライブはGalaxyで行われる。

そんでもって、今日はそのライブのちょうど一週間前。

Roseliaの練習が終わり、いつものようにCIRCLEのカフェスペースでリサさんや氷川さんの作ってきてくれたお菓子類をモグモグペロリと平らげていた。

今日の練習はどうだったとか、来週のライブの演出はどうするだとか、そういう話が一通り終わり、多少弛緩した空気感の中でオレンジジュースを飲んでいたあちゃんが、ふと俺に聞いてくる。

「そういうえば、海兄たちのバンドの名前って何？」

「オスバンド（仮）」

「それは仮称でしょう？ オリジナルの曲も発表するのだから、そろ

そろ正式な名前を考えた方がいいと思うわ」

友希那さんの言う通りだ。

ぶっちゃけバンド名なんて忘れてた。オリジナル曲を引っ提げてライブできるっていう興奮の前にはバンド名なんて些細な問題すぎたからな。

「つつても、俺のネーミングセンスは曲名でお察しって感じですし、須田や五十嵐も、あの曲名を止めるどころか『いいジャン！』って言うてましたからねえ……」

ロクな名前が出てくる気がしない。なぜ須田はあれだけ多才なのにネーミングセンスはないのか、これがワカラナイ。

曲名の不出来は曲の内容で黙らせればいいだけだが、バンド名ともなると話が違ってくる。下手なもんは付けられないよな。俺たちの顔になるもんだし、たくさんの人に『カッコいい！』って思ってもらえる名前がいい。

「ちなみにさ、今海くんが思い付くバンド名とかはあるの？」

「……………。朝焼けの慟哭」

「頭大丈夫？」

リサさんに正気を疑われてしまった。

確かにこりやバンド名じゃないよなあ。曲名ならアリか（）  
LINEで須田と五十嵐にも聞いてみよう。

k a i 『バンド名、なんかいい案ある？』

誠 『ビッグゴールデンスターズ』

Y u t a 『サンシャインメモリーズ』

ダメだこりや。

「これは……………」

トーク履歴をみた氷川さんが頬を引き攣らせている。笑いたきや笑えという気持ちだが、これは笑えすらしなのか。本格的にヤベーな。

「はいはい！ あこねく、『カプリス』とかいいと思う！」

今日も元気なあこちゃんが、小さい体を大きく動かして主張してくる。俺たちの壊滅してるネーミングセンスを見兼ねて、案を出してくれたらしい。

てかそれ最近どつかで聞いたことあるぞ。

「それはNFOの最新ストーリーに出てくる味方の新キャラが昔所属していたという伝説的なパーティの名前ではなかったかしら」

あつたねえ、そんな設定。そんな細かい設定、わしゃ覚えとらんて。物語には直接関係のない部分だし、普通に流し読みしてたわ。氷川さん、この前NFOやってから何気どハマりしてるよな。

「そうなんですよ〜！ どこかの国の言葉の意味で、気まぐれって意味らしくて〜」

「確か… フランス語、だったかな…」

ほええ。

「カプリス、いい響きね。でも、単語をそのままというのは少し味気ないかもしれないわ」

なるほどなあ。

「…：… そうね、同じフランス語で「自由」という意味の、リベルテという単語。これを組み合わせる——『C<sup>カ</sup>a<sup>プ</sup>l<sup>リ</sup>i<sup>ベ</sup>l<sup>ル</sup>e<sup>テ</sup>』、というのはいかがかしら」

友希那さん、勉強はできないのにそういう知識は堪能だよな。異国語や、日本語の難しい言い回しの知識。歌詞書くように仕入れてんのかな？

まあそれはともかく。

カプリベルテ、か。スペルはC a p l i b e r t e で合ってるかな。

うん、カッコいいんじゃないだろうか。

「自由気侷に、何ものにも縛られることなく進む。そういう意味を込めたのだけれど…：… どうかしら」

「すっげえいいと思います」

なんであこちゃんや友希那さんが俺たちのバンドの名前を考えてくれたのかは分かんないけど、少なくとも『朝焼けの慟哭』『ビッグ



『ゴールデンスタース』『サンシャインメモリーズ』よりは全然良い。

k a i 『友希那さんから『Capliberte』って名前はどうかって言われた。俺はいいと思うが、キミたちは?』

誠 『腹立つな、その言い方』

誠 『でもまあいいんじゃないかねえの? 横文字カッコいいし。読み方

『カプリベルテ』で合ってる?』

k a i 『あってる』

Y u t a 『異議なし』

俺たちのバンド名がぬつとり決まった瞬間だった。

「満場一致で『Capliberte』に決まりました。ありがとうございます  
ございます」

「そう…。自分で言っておいてなんだけど、貴方たちそれでいいの?」

「カッコよければ万事OKです」

「カプリベルテ、チョーカッコいいよ!! カプリスの百倍くらい!」

あこちゃん、興奮の巻。

…。いや字面がちよつと怪しいな。こんなこと考えたの、何があっても巴にだけは知られないようにしとこ。

? ? ? ? ?

『ライブをやりませう』

再三、俺はそう宣言する。

過去二回は『?』な反応が主流だったが、今日は違う。

なんと言っても、今日はそのライブ本番当日だ。マイク越しに放った宣言は、このイベントの開始を告げる合図となる。

故に、返ってくるのは割れんばかりの歓声だった。共演するバンドの人気もあり、今日のGalaxyは近年稀に見る大満員。動員数百三十四人と、キャパを少しだけオーバーしている状況だ。

この中で俺たち『Capliberte』目当ての人が何人いるかは知らないが、少なくとも0じゃない。さつき『今日のライブ見に来ています!』ってTwitterのDMあったし。嬉しい限りである。これには俺も思わずニッコリ。

『えー、すでに告知はしてあるんですが、改めて。オスバンド(仮)改め、『Capliberte』です。よろしくお願いします!』

俺たちは今回、トップバッターを任された。というより自分らから進み出た。

以前までもいくらかライブはさせてもらっていたが、『Capliberte』としてライブに出るのは今回が初めて。ならば一番最初に出るのがいいだろうという結論に至ったわけだ。

若輩が前座として場を温めるのは世の常よな。まあ単なる前座で終わる気はサラサラ無いけど。

『名前だけでも覚えてっつてくれよなー! カプリベルテな、カプリベルテ!』

須田も名前を売るために声を張り、笑顔をばら撒く。人懐っこさのある須田はこういうのも得意なのかもしれない。

五十嵐? やつにはマイクが無いから。残当。

『今日は三曲やります。さて、早速ですが一曲目。これはカバーです。スリッ○ノットで『Before I Forget』』

言って、俺はリフを刻む。俺が大好き、スリッ○ノットのカバーだ。「お前らに本当の『ドラム』を見せてやるぜ」とでも言いたげにドラム“缶”を叩き出すバンドは他にないと思う。もうね、大好き。

この曲はわりと賛否両論の曲だが、俺はめめためた好きだ。どちらかと言えばハードロックに近いのかもしれない。サビの「ツァーイ!!」のとことかすっげえライブ映えすると思うんだよな。

元々スリ○プノットが好きだった俺は、随分前からこの曲はコピーしていた。それこそ夏休み前くらいから。だから、今回のカバーは大した苦にはならなかった。というか、正直この曲のギターの難易度はそこまで高いわけじゃない。本家がやってないギタボをやるからアホみたいに難しくなってるけどな。そろそろメインボーカル張れる

奴が欲しい。

ギターが一人では、どうしても音圧が足りない。その分は打ち込みではなく、須田に任せている。

ベース用のエフェクターを買わせて、ブーストした音で補っているのだ。最初は「え〜。エフェクターって高いじゃん。」とあまり乗り気じゃなかった須田もあら不思議。牛込さんの協力もあり、無事(?) エフェクターの沼に引き摺り込むことに成功した。ようこそ。これからもよろしくな、ブラザー。

それで今回のカバーで一番の難関。それがドラムだ。スリOPPノットのドラムは異様なほどに難しい。Before I Forgetもその例に漏れない。

しかしながら我らがCapliberteのドラマー、五十嵐裕太はそれはもう見事なリズムキープで叩きこなしている。正直こいつ絶対高校レベルじゃない。

単純なドラムテクニクという面では、五十嵐よりも大和麻弥の方が上だろう。しかしながら、五十嵐はその体格に違わぬパワーと、刻むリズムの安定性なら大和麻弥にも比肩する。パワー型安定ドラマー。これは強い(強い)

そんな俺たちが織り成すスリッ○ノット、最高すぎるな(自画自賛)こいつらとバンド組んで本当に良かったと思ってる。ホントに。

『オオオウラウツ!!!』

曲を閉める。あー、楽しかった。

チラリと観客席を見れば、オーディエンスもそれなりに盛り上がっていたらしいことが分かる。初っ端からいい汗かいてんなお前ら。

これで満足しかけた俺だったが、本番はここからだ。

『えー、じゃあ次。俺たち『Capliberte』の初めてのオリジナル曲、やります。題して『既存国家の転覆からの迅速な建国』』

何だそれ、という野次が最前列から飛んできた。

見ればそれはGalaxyのオーナーの娘ではないか。うっせえネーミングセンスについては黙つとれ、とにかく俺たちの音を聴けただけ言っておく。

静かに、重く、深く。

砂塵に塗れ、氣力を失った人々をイメージした音を奏でる。

ゆつくりと、殊更にゆつくりと。愚かな圧政者により退廃した、乾いた土地。静かに、しかし確実に。這いより迫る“死”を彷彿とさせる。

そこに流星の如く現れた、一人の英雄。

荒んだ人々が望んだ僅かな希望を体現した英雄の活躍やその他諸々により、圧政者は駆逐される。

ここはパワフルに。力こそがパワー、力こそが正義だと言わんばかりに音を暴れさせる。

そして建国。迅速に建国する。

速く、そして鋭く。攻撃的なリフを、より高速に。指つるかと思つた。

——とまあ、そんな感じで。その後も嵐の海のように荒れ狂うストーリーを表現した俺たちの曲『既存国家の転覆からの迅速な建国』は、その音でGalaxyを埋め尽くした。

演奏が終わり、観客席を見る。

彼らの反応はそれぞれだった。通常の曲の二倍ほどはある曲の長さになんか若干ながら困惑する人、ストーリー性への理解が追いついていない人、逆に“こちら側”に精通している面々も少なくはないらしく、静かに噛み締めている人もいる。

初めて、自分たちが作った曲を大勢の人間に聴かせた。

緊張もしたし、恐怖もした。当たり前だ。ライブが決まってから今日まで、俺たちの曲が受け入れられなかつたらどうしよう、という思いは常にあつた。事実、俺たちが作った曲は大衆受けするものじゃないしな。

けど、やはり。演奏を終えたこの胸に踊る感情は、溢れ出るモノは、“喜び”と言って良いだろう。言い表しようのない感動が、俺の中を駆け巡る。

『——ありがとう』

意識もせず、その言葉が漏れ出た。

それは聴いてくれた観客に対する礼であり、場を用意してくれた関係者への謝辞であり、共に演奏してくれた二人への感謝だ。

胸の内がどうしようもなく熱くなるのを感じながら、俺は最後の曲を高らかに謳った。

『それじゃあラスト、三曲目。サ○サイの『チェ○ボム』いつきまーす』  
『!?!?』

★ ☆ ★ ☆ ★

Galaxyの、思ったより広めだった控え室にて。

あこたちRoseliaや、ほかのバンドのみんなは、備え付けの中継モニターに写し出されている映像をじい〜と見ていた。

モニターに写っているのは、海兄たちのバンド『Capliberte』。ちょうどオリジナル曲をやっているところだ。

「かつこいいい…」

隣で見えていたたえちゃんや、ほうと吐息と共に声を出す。

それは一人の感想じゃなく、この場のほとんどの人が感じていることだと思う。

この前聴かせてもらった音源よりも、ずっともつと深い。深淵より這いよりし混沌の…アレが、なんかこうドーンズバーンってして、すつごくカッコいい。

言葉も出ないくらい聴き見入っていると、九分くらいはある曲がもう終わっていた。長いのに短い。もつと聴いていたかった。

「いやあ、変態ですなあ〜」

モカちゃんが呟く。変態は褒め言葉、つてこの前海兄が言ってたから、きつと褒めてるんだらう。変態が褒め言葉なのは全然分かんないけど。

「ちよつと時代に逆行しすぎだと思っけど…うん、海らしい」

「だよなー。こう、媚びないっていうのか？ まあちよつと違うかも

「だけど、そういうところは海らしいよな！」

蘭ちゃんとおねーちゃんも、モカちゃんに続く。

ほかのみんなも、それぞれ感想を言っている。その全部が海兄たちを褒める言葉で、海兄たちの曲はすごくこーひよーみたいだ。

『——ありがとう』

画面の向こう、ステージの上で海兄が言う。

静かだけど、すつと通る声。心が籠っているっていうのかな、そんな声だった。

ラスト一曲。セトリセットリストの略。ライブで演奏する曲の一覧のこと。は聞いてないから何をやるのかは知らない。

何やるんだろー。ハードロック系かな、それともメタル？ 海兄が好きそうなのってその辺だよな。

『それじゃあラスト、三曲目。サイ○イの『チェリ○ム』いつきまーす』  
『!?!』

プロで活躍するガールズバンドの、その中でもけっこー女の子の子供子してる曲が流れ始める。なんだろう、あこ追い付けないよ。急展開が過ぎるよお…！

「ジエットコースター…！」

ゴクリ、と唾を飲むようにたえちゃんが眩く。分かんないよお。

そうこうしているうちに、曲はサビへ。弾<sup>はじ</sup>けて、そしてより甘美に熟すらしい。分かんないよお。

「ぶ、くくつ…：か、海くんの、一番、弱いところ…!!」

お腹を抑えて、くの字にしゃがむ格好で必死に笑いを堪えているリサ姉。

せんじょー的な歌詞だけど、海兄が歌うと何かが絶対的に違う。海兄の声質はいつになく柔らかくて高音だけど、それでも違う。

みれば、さあやちゃんやヒナさんも笑ってた。りんりんとかはちよつと顔が赤い。

何もかもを置き去りに、やりたいことをやりたいように表現する、

海兄たち『Capliberte』。

自由で、気まぐれ。型に嵌らず、煌めき、翔く。闇夜を斬り裂く陽炎が如き赫灼の閃光。聖魔の化身にして…… えと、奥底からなんかすごい力がバーン！

一番かっこいいのはおねーちゃん…… いやRoselia…… やっぱおねーちゃん…… でもでもRoseliaだつて……。

ま、まあとにかく！ 世界で『三本の指』に入るレベルのカッコ良さ！ つまりそういうこと！ でも自由すぎてちよつと人類には早すぎたのかもしれないとも思ひ始めた。

そんなCapliberteの演奏が終わる。

観客席はどういうワケか大盛り上がり。なんだろう、確かに海兄たちはカッコイイけど、今のセトリのどこでそんなに盛り上がったんだろう。あこには難しすぎるよお……。

「…… 私たちも、負けられないわね」

友希那さんが力強く言う。

しみみよーな顔で頷く紗夜さんとりんりん。リサ姉はまだ笑ってる。

あこだけ？ この雰囲気についていけないのはあこだけなの？  
助けておねーちゃああん!!!

## 野球は1人じやできないの

彼は、とてもすごい人だ。

なんでもソツなくこなして、好きなことを本気でやれば誰よりも前に行く。そんな印象。

そして、みんなから信頼されてる。こころんも、薫くんも、かのちやん先輩も、みーくんも、そしてミッシェルだって。みんなみんな、彼を信じてるし、頼ってる。

はぐみもそう。彼を信じて、頼ってる。

「だからな？　ここにxを代入してだな？」

「xさんが代打になるんだね！」

「ああうん、それでいいよ。んでな？　こっちの公式を使ってな？」

「なるほど！　…　んとね…　わかんない！」

「なるほどなあ」

試験が迫るたびに、彼のところへ訪れる。

かーくんと、あとおたえも一緒に。

最初こそ「俺は知らん。もう知らん」とか言ってた彼だけど、なんだかんだで最後まで面倒を見てくれている。とても優しい人だ。

そんな彼は今――

「バカヤロウお前！　俺は打つぞお前!!」

はぐみと同じユニホームを着て、意気揚々と打席に向かって、そして豪快に空振りしていた。

★ ☆ ★ ☆ ★



『二球外にはずれてカウントはフルカウント。両チームのファンも、固唾を飲んで見守ります』

日本プロ野球、日本シリーズ、第七試合目の延長十一回裏で、先攻側が一点リードのツーアウト二、三塁。しかも打席に立つのは、昨日今日と五打数0安打三三振という戦績の選手。前の打者は敬遠され、歩かされている。

これで分かる人は分かるだろうが、試合は近年稀に見る熱狂を迎えていた。

「ふざけやがってえ…！　うちの松○ナメんなよ!!」

今打席に立っている選手の前の打者が敬遠された時、姉ちゃんはビール片手にそう激昂していた。本日八本目のゴールデンボールリード。飲みすぎだろ。

まあ、相手方の考えも分かる。敬遠した選手は、今日四打数四安打と絶好調だった。打たれば同点、外野の深いところまで運ばれてしまえば負ける。そんな状況で好調の選手と勝負するより、戦績の悪い方と勝負したいのは当たり前つちや当たり前だろう。

これが甲子園とかならブーイング間違いなしだけどな。

苦しそうな表情のピッチャーが腕を振り、ボールを投げる。

球は内角高めのストレート。キャッチャーは低めに構えていたから、狙った通りというわけではなさそうだ。

そしてその球を、松○は体を大きく開いてバットを振り抜き、ボールを捉える。

『どうだ打った！　打ったア!!　高く、高く上がった打球はそのまま吸い込まれるようにレフトスタンドヘーッ！　レフトのゲ○ーレ、見上げることしかできません！　マウンド上のク○クも呆然としています！』

「ッしゃオラア!!」

空になったアルミ缶を握りつぶし、姉ちゃんがガッツなポーズを披露する。

どうでもいいけど酔うにつれて徐々に脱いでいくな。もう下着しか残ってねえじゃん。ちゃんと服着ろ、服。

「熱男ーッ!!」  
うるせえ。

しかし、これで日本シリーズも終わりか。明日から優勝セールが始まるんだろなあ。

夏が終わり、秋や冬を迎える霜降の風物詩。その終わりを眺めつつ、俺はふと思う。

「野球、やってみてえなあ」

俺は今まで運動部に所属したことはない。

小学校までは友達と河原で野球やサッカーをした時期もあったが、そんなものは遥か彼方の記憶だ。よく憶えちゃいない。

硬式とは言わないから、軟式とかやってみたい。草野球みたいな。

そう思い、何の気なしにSNSで呟いた。

別に誰かに反応して欲しいとかじゃない。思ったことを、そのまま吐き出す。Twitterってそういう場所だろ？ だからそうした。

——夏の反省を、俺はもう忘れていたらしい。

翌朝の出来事だ。

「「せつきぐーちくんっ！ あっそびーましょっ！」」  
うるせえ。

? ? ? ? ?

二日酔いの姉ちゃんから「外で遊んでこい」というお叱りを受けた俺らは、何故かドーム型の球場にいた。ここ昨日テレビで見た気がするな。気のせいかな。

「野球をやるわよー」

綺麗に整備されたマウンドの上で、俺を連れてきた張本人でもあるお嬢が比較的アレがこうしてる胸を張って宣言する。

いつも通りすぎる非日常。もはや慣れてきた俺は、はあと嘆息だけしておく。慣れたくなんてなかった。

「わーいー!」

「ふっ… 夢い」

三馬鹿の残り二人がなんか言ってる。

松原先輩はふえふえ言ってるし、奥沢さんは俺と同じく諦めているらしい。

そんないつもの非日常の中に、今日はいつも通りじゃない非日常が混じっている。

「今日は須田と五十嵐もいるんだな」

そう。今日は須田と五十嵐の姿もあるのである。珍しい。

「寝てたら黒服の人達が来て…」

「俺も朝トレ（朝の筋トレ）してたら…」

とうとうお前らもこつち側<sup>被害者</sup>に来たんだな。

ようこそ。

歓迎するぜブラザー共。

それにしても野球ときたか。

北沢がいるからソフトボールは分かるんだが、野球はいつちよん分からん。そんな突然やりたくなるやつが… ここにいますねえ。

「海! あなた昨日、野球がやりたいって言っていたでしょう? あたしもちょうど、そう思っていたのよ!」

俺が悪かった。軽率にツイートしたのは反省してるから、そんな目で見ないでくれ奥沢さん。つーかあれだろ、俺が言っただけでもお嬢なら勝手にやってただろ。

半眼を向けてくる奥沢さんに謝罪やら開き直りやらの感情を込めた視線を送る。そんな俺の隣で、五十嵐がふむと口を開いた。

「野球かあ。いいね、俺も久々にやりてえ」

「久々?」

「あれ、言ってなかったか。俺小中で野球やってたんだよ。中学じゃ結構有名だったんだぜ?」

ほええ。それは知らなんだ。

須田もなんかサッカーで全国行ったとか言ってたけど、お前ら才能を無駄にしてない？ 元女子校でバンドなんかやってて大丈夫？ 各界の偉い人に怒られない？

「それはすごいわー！ それじゃあ早速やってみましょう！ ……何をすればいいのかしら？」

「そこからかよ」

というか、今日ここにいるのは八人だ。野球は九人でするもんだし、相手も必要つてなったら最低十八人は必要になるだろ。野球をす  
るしないの前に頭数が足りない。

「あら、そうなの？ じゃあ香澄たちも呼びましょう！」

ま？

？ ？ ？ ？ ？

お嬢が声を掛けて新たに集まったのは、ポピパの五人とAfter glowの五人。Roseliaやパスパレにも声をかけたらしいが、ライブやら仕事やらで断られたらしい。

しかしながら、なんと十八人びったり集まった。お嬢には天が味方しているのかもしれない。

「野球をやるわよー」

再びそう宣言するお嬢を前に、香澄とおたえのみが拍手する。

ほかのメンツは事態をよく飲み込めていないらしい。諦めな。

黒服さんたちに渡されたユニホームに身を包み、同じく黒服さんたちから渡されたグラブを手にはめ、俺たちはグラウンドに立つ。

ちなみに靴はスパイクではなくアップシューズだ。安全面に考慮したらしい。球ももちろん軟式。

慣れない衣服への着替えに戸惑っていた俺とは違い、お嬢と北沢、元野球部の五十嵐、演劇で着替え慣れしている瀬田先輩が先にグラウンドに出ていた。

お嬢と北沢、五十嵐と瀬田先輩という二人一組になり、外野の芝生

の上でキャッチボールをしている。

「いくわよはぐみく！ えーいつ！」

「…わ！ つと！すごいねころん！今のボール、すつごく曲がったよ！」

「このボールさん、曲がるのが好きなのかもしれないわ！」

そう言つて、横から見ても曲がっていることが分かるレベルのエグいカーブだかスライダーだかを投げるお嬢。あれは打てない（確信）  
「よ、つと。薫先輩、いい球投げるつすねー。めちやくちや綺麗な縦回転つすよ」

「そうかい？ ありがとう。でもまだ足りない… 儂さが… 足りない…」

なーに言つてんだあの貴公子。

まあそれはおいといて。

「関口く、キャッチボールやろうぜく」

「ほいさい」

須田の申し出を有難く受ける。

せつかく用意された場だ。タダでこんなに良い球場が使えるつてんだから、目一杯楽しまなきや損というもの。やるぞー。

… 突然投げたら肩痛くなった…。

準備運動は大事、はつきり分かんだね。

? ? ? ? ?

しつかりアップをし、軽くキャッチボールと素振りだけ習った後。せつかくなら試合がしたいということで、九対九に別れてチームを作った。

お嬢率いる赤チームは、松原さん、奥沢さん、蘭、モカ、ひまり、市ヶ谷さん、牛込さん、須田。

対する白チームは、瀬田先輩、北沢、巴、つぐみ、おたえ、香澄、山

吹さん、五十嵐、そして俺。

テクトーにくじ引きで決めたチームだが、わりとバランスはいいんじゃないだろうか。男が固まったわけでもないし、ハロハピもうまくバラけていると思う。

それから俺たちはチームごとに別れて、各二時間ずつ練習するところになった。

レフト側ライト側に別れてとか、そんなちやちなレベルじゃない。球場別で、だ。近くにあったものを当日貸切にしたらしい。どんな金額を積めばそんなことが可能になるんだろうか。弦巻家しゅごい。

「数時間使うくらいならそんなにかかんねえぞ」

「あ、そうなの？」

別球場に移動中、五十嵐に言われてそんなもんなのかと思う。

いやでも少なくとも十万単位だろ。球場二つと備品もいくつか借りてんだから。やっぱ後で黒服さんたちにいくら払った方がいいかなあ。

そんなことを考えているうちに別球場へと辿り着く。

俺たちが使う球は軟式だが、球場は硬式用。軟式用の球場と比べると、主にベース間やマウンドの距離なんかが違う。全体的に長く、広くなってる感じだ。ってさつき五十嵐が言ってた。

「さて、まずはポジション決めなきやな」

グラウンドに一礼してから入る五十嵐を真似て入場した俺たちは、とりあえずファースト側のベンチ前に集まった。

野球経験者の五十嵐を中心にして話が進んでいく。

「キャッチャーは俺がやるわ。中学までキャッチャーだったしな。はぐみはソフトでどこ守ってた？」

「ピッチャーだけど、ソフトボールと野球じゃボールの感覚が違うし… はぐみ、サードがやりたいな！」

「んじやはぐみはサードな。じゃあ次はピッチャー決めつか。誰かやりたいやついる？」

「投手… ふっ、夢いポジションじゃないか」

「何が夢いのかは知らんけど、そんなじゃピッチャーは薫先輩で」

「嗚呼、夢い…」

「じゃあ順番で、次ファースト。やりたいやつ… いない？ ん  
じゃあ巴やってくんね？ 手足長いし」

「ん？ ああ、いいぞ！」

「あぎ。そんでセカンドは… 沙綾で。二遊間は大事だし、沙綾はカ  
バーとかの気がよく回りそう」

「え、私？ できるかな… 頑張ってみるね」

「サード… ははぐみだったな。んじゃショートは… 強い打球とか  
きやすいし、関口頼むわ」

「あいあい、任された」

「レフトはー、どうしょ。香澄でいつか」

「でいつか!?!」

「センターはおたえな。足速いし、体力もあるし。レフトとライトの  
カバーに走ってくれ」

「ん、りよーかい」

「ねえ五十嵐くん！ でいつかって言った!?!」

「最後、ライトはつぐみに任せる。軟式だったらファーストやセカン  
ドと連携取ることもありとあるし、そこは仲良いからいけんだろ」

「う、うん…！ 分かった、頑張るね…！」

「つぐる…？ まあいいや。うっし決まり！ んじゃあノックから  
初めっかー」

「五十嵐くんねえつてばああ!!!」

まあ、そういうことになった。

? ? ? ? ?

「巴ー。お前足腰強いし、もっと足開いて腰落としてもいいんじや  
ねえか？」

「お、おう！ こうか？」

「ん、そうそう。沙綾は、サード側にゴロ転がったら一応ファーストのカバー行つてほしい。俺たち素人の集まりだし、暴投やエラーでボールが後ろに逸れることも多いだろうから」

「分かった〜」

「オラコラ関口ゴラア！ 今のは取れただろ、タラタラやつてんじやねえぞオ!!」

「んだとテメエ!!! やってるわボゲエ!!」

意外とスパルタだった五十嵐のノックを乗り越え、次は打撃練習。打線は水ものとは言うが、練習しないよりは万倍マシだ。つーか守備練よりバッティングの方が俺は楽しい。

コントロールが良い五十嵐がバッティングピッチャーとなり、一人十分程度打席に立つ。キャッチャーは無し。備品のネットを置いて代用する。

打席に立つやつ以外は守備につく。できるだけ自分に当て振られた場所の守備だ。シートバッティング？ つていうらしい。

「薫先輩、センスありますね。ほとんど芯で捉えれてるっすよ」

「そうかい？ ふふ、ありがとう。でもまだ儂さがいまひとつでね...」

「つぐみー。ボール打つ時はちゃんと目え開けー。打てるもんも打てねえぞー」

「う、うん... えいつ!」

「目え開けー」

「おっ、おたえバント上手いな」

「動かざること山の如し」

「上手いこと言いたかったのかもだけど、それは上手くないし意味分からん」

「がーん」

「おいコラ関口ゴラアツ!! ちゃんとバット振れボゲエ!」

「いやいやいやいや! おまつ、今の速すぎんだろボール! 怖



いわ!」

「ド真ん中の真っ直ぐだろウストラトンカチ!」

「うるせえバーカ! つーか今の何キロ出てんだよ、さつきまでより明らか速えだろ!」

「球速141km/hですね」

「うわ黒服さんいつからネット裏に…。え、てかなんて? ひやくよんじゅういち? それはアレですかね、一時間に141km進むっていう意味の?」

「そうなります」

「おま、いや、軟式でそれとか五十嵐ほんとお前、花咲川にきてよかつた人材なん…。?」

「ごちやごちやうるせえ、次投げんぞ! 次真っスラスライダー系の変化をするストレート。な!」

「え、真っスラって何!? うわ速怖!!!」

「振れつつつてんだろ関口イ!」

「うっせえバーカ!! 五十嵐のバーカ!!!」

バットに当たるくらいにはなった。

? ? ? ? ?

お嬢発案、総練習時間約三時間程度の素人が九割を占めるドキドキ? 草野球大会が始まった。まあ大会つつつても初戦から決勝戦なわけだが。

一応、勝者には賞品が用意されているらしい。なんだろ、ハワイ旅行とかかな (弦巻スケール)

「いいか関口。大事なのは“エッジ”だ」

「カッティングの話?」

「耳コピの話じゃねえ」

赤チームのオーダーは、

遊 須田

- 三 蘭
- 二 奥沢さん
- 投 お嬢
- 中 モカ
- 右 ひまり
- 捕 松原さん
- 左 牛込さん
- 一 市ヶ谷さん

対する俺たち白チームのオーダーは、

- 三 北沢
- 中 おたえ
- 捕 五十嵐
- 一 巴
- 遊 俺
- 左 香澄
- 二 山吹さん
- 投 瀬田先輩
- 右 つぐ

五番というクリーンナップに配備されてしまった俺は、試合前にちよつと素振りをしていたのだ。

そこで五十嵐にアドバイスを受けたのである。エッジってなんだろう。

「強い打球を打とうとする時、一番大切なのは体重移動だ」  
「体重移動」

「右脚に溜めた力を、左脚の踏み込みと一緒に腰へ、そこで腕、最終的にバットに移す。これをする時にエッジ、足の裏の内側の部分が重要なんだ」

「足の裏の内側」

なぜ俺はこんなに本格的なバッティング指導を受けているのか。

疑問ではあるが、五十嵐が楽しそうだから黙って受けとこう。今までにないくらい目が輝いてるんだよなあ。

「お前、無駄に筋肉はあるから、スイングは多少アツパー気味になってもいい」

「無駄で」

「あと重心な。体重移動はしろつつつたけど、重心がズレるのはNGだ。目線がブレて打てるもんも打てねえ。腰をしっかりと落として、膝を柔軟に使い」

「重心ズレるのNG」

「こころの玉はよく曲がる。球速も中々だし、高速スライダーの域だ。なんで女子なのに変化球で120km/hも出るんだらうな？」

「お嬢だからさ」

常識なんか通用しないよねえ。

「とにかく、中途半端なスイングをすると、いくら軟式とはいえ球威に負けるからな。しっかりと振り抜けよ」

「あいあい」

正直よく分かんが、とりあえずフルスイングしろってこつたろ。

あと重心ズレるのNGね、覚えた。

「それでは試合を開始します！ 両チーム、整列してください！」

防具を付けた黒服さんが、ホームベース付近でそう宣言する。

主審球審は黒服さんたちがやってくれるらしい。なんか免許も持ってるのか言ってたけど、ほんとかな？

言われた通りに整列し、礼をする。と同時に、球場内に聞き覚えのある声が鳴り響いた。

『日本の皆様、こんにちは。ブラジルの人、聞こえますか？ ついに始まろうとしています、弦巻家主催の軟式野球紅白戦。実況は私、時給二千円で雇われた梶原悠斗がお送りいたします』

時給たつか。いやたつか。

つーか梶原ってうちの高校の？ あいつ何やってんの？

『解説はこの方。中学時代は野球部の敏腕マネージャーとしてブイブイいわせており、今ではギャルの超新星。先月の花咲川ネイルモリモ

り選手権ベスト8に輝いた五十嵐の彼女、澤田美穂さわだみほさんです。よろしくお願いします』

『しまーっす』

ねいるもりもりせんしゅけん。

っーか澤田さんもなにやってんの。あんたら暇なの？

『先攻は白チーム。先頭バッターの北沢、気合いに満ち満ちた瞳で弦巻投手の投球練習を見つめます』

『てかこころんの球エグくない？ あんなのコースに決められたら現役でも中々打てくない？』

相も変わらず、お嬢の球はよく曲がっている。正直打てる気はしない。当たれば御の字って感じだ。っーか松原さん、よくあの球取れるよなあ。

十球くらいの投球練習が終わり、北沢が打席に立つ。

『試合開始を告げるサイレンが無人の客席を駆け巡り——つと初球打ちっ！ 北沢、初球アウトコースのスライダーを綺麗にセンター返しっ！！』

すっげえ… あれ打つんだあ…。

一塁ベース上でガッツポーズをする北沢に、俺は素直な尊敬の目を向ける。しゅごい北沢。

『さて、続く二番は花園。実家では二十羽もの兎を飼育する花園ランド園長、《兎追いし花園》、送りバントの構えをとる——が、空振り！ 弦巻の球は大きく曲がりますからねえ、ただのバントも難しいのでしよう…。多分。きつと。野球そんなに詳しくないから分かんないけど』

『まあシロートにはムズいっしょ』

安心しろよ梶原、それっぽいこと言えてっから。

『ピッチャー二球目投げた！ が、これは外に外れてボール。カウントワンワン。花園、変わらずバントの構えです』

ちなみに、今回は盗塁はナシというルールが設けられた。

松原さんの肩を考えると盗塁なんてしたい放題になってしまっし、

それじゃあ面白くないだろうってなったからだ。逆に五十嵐だと強肩すぎて誰も盗塁できない。

リードはアリらしいので、北沢もギリギリとリードを取る。そういうソフトボールはリードってしちやダメなんだってな。北沢はどこでリードの仕方なんて覚えたんだろう。

『ピッチャー第三球投げて… 花園バント成功！ ファースト側に転がった球をピッチャー弦巻が取るが、二塁間に合わず！ 花園はアウトで、ワンナウト二塁』

『おつ、うまい。ちゃんとファースト側に転がせるのエイいじゃん』  
おお…！ おたえもすごいな、俺バントとか怖くてできないもん。指がボールに当たりそうで怖いんだよね。それにほら、俺ギター弾くから指大事だし（言い訳）

『さあやって参りました、この男の登場です。中学時代はリトルシニアの全国大会決勝進出チームでキャプテンとしてプレイし、U-15にも選ばれた逸材！ 未だプロでも注目しているスカウトは多いとの情報も入っているこの男！ 五十嵐いい…（溜め）… YUUU U T A A A A !!』

… え？ 待って待って待って。え？ 五十嵐お前… お前… え??

『裕太はすごいんだから！』

『いや、実際すごすぎて引くし、つーかなんであいつ元女子校なんかにきたの？』

マジで俺、そつちの世界の偉い人たちに目え付けられたりしない？  
よくも有望株を拐かしたな、とかって怒られない？ 大丈夫？ いや別に俺が拐かしたわけじゃねえけども。

「次はユータね！ 打たせないわよ！」

「悪いなごころ。美穂も見てっし、軽くホームラン打たせてもらうわ」  
『打てー！ 裕太ー！』

おい解説。一方に肩入れすんな。

ちくしょう、股間に自打球当たんねえかな（呪詛）

『ちくしょう、股間に自打球当たんねえかな』

いきなりピンチを迎えた赤チームだったが、その投手であるお嬢に緊張の色は見られない。まあお嬢が緊張してるとこなんて俺見たことないけど。多分どっかの王様と話す時も緊張なんかしないんじゃないかな。

『ピッチャー振りかぶって… 投げた！ 低めに僅かに外れてボール』

二塁にランナーがいるが、盗塁ナシのルール下ではクイックモーション投球動作を小さく素早くすることで盗塁を防ぐ投法のこと。振りかぶるのはワインドアップ。MAJORの茂野（本田）吾郎がよく使う投法だが、リアルでは最近あまりみない。で投げる必要性がない。お嬢はワインドアップの方がお好みらしく、さつきからそれで投げている。

てかどうでもいいんだけど、実況解説がプレイ中の俺らにも聞こえるってどうなのん？

『中々際どいコースでしたが、五十嵐ピクリとも反応しませんでしたね。澤田さん、これは五十嵐は高めを狙っているということなんでしょうか』

『まあ裕太の得意なコースはインハイインコース高め。胸元辺り。だし？ 初球から狙ってないトコの厳しい球に手え出さないっしょ』

いやこれやっぱ聞こえてちやダメなやつっしょ。

そうこうしているうちに、お嬢が二球目を投げる。

お嬢の投げたボールは、なんとということか高めに浮いた球だった。

変化球とはいえ、非常に甘い球。そんなものを世界を相手にできるようなやつが見逃すわけもなく――

『打ったア!! 高アく上がって、センター青葉は見上げるだけー！』

バックスクリーン、ビジョン直撃！ ビジョンの上段です！ 五十嵐の一発が初回から炸裂、先制点を上げるー！』

『ふっ… 裕太なら当然だわ！』

『澤田さんはちゃんとキャラ作ってきてください』

お前には言われたくないだろうなあ。

それにしてもすげえ。さつきからすげえしか言ってなくて語彙力

の無さが露呈しちゃうけど本当にすげえ。マジでホームラン打ちやがったぞ五十嵐のやつ。

悠々とダイヤモンドを回り、ホームベースを踏む五十嵐。なんだこいつかつけえな。

続く四番の巴もレフト前にヒットを打ち、打順は俺に回ってきた。重心ズレるのNG、膝柔らかく、ちよつとアッパー気味、フルスイング。

よし、行ける——!!

『ああーつと！ 関口、ボールをバットの先に擦らせてボテボテのピッチャーゴロ！ 1—6—3のダブルプレーー！ ざまあ関口！』

梶原お前、なんか俺に恨みでもあんのか!?

『カジさー、よく1—6—3とかって言葉知ってんね？』

『さつきルールブックとか死ぬ気で読み込みましたから』

『なんだかんだで真面目だよなー、カジって。ウケる』

『ウケる!?!』

★ ☆ ★ ☆ ★

『試合も終盤に差し掛かってまいりました、七回表。現在得点は弦巻<sup>赤</sup>チームが四、五十嵐<sup>白</sup>チームが三。赤チームが一点リードしている状況です』

『こころんのホームランは分かるけど、美咲っちのホームランは意外だったし。あの子運動神経いいねー。伊達にミッシ』それ以上はいけない』：： そーりー』

今日の試合は七回まで。つまり、このイニングが最終回だ。

今は後攻のこころんチームが一点リードしてるから、もしこの回にはぐみたちが点を取れなければその時点で負け、ということになる。

この回の先頭バッターは三番のゆうくん。今日の成績は三打数二安打一本塁打で、打点は三。つまり、今日の試合の打点は全てゆうくんの功績だ。ゆうくんすごい！

『先頭打者の五十嵐、初球を捉えてライトフェンス直撃の二塁打！

右打ちのくせにライト側に弾丸ライナー打つな！」

『うんうん、裕太はやっぱりすごくてしゅごいの』

『解説の仕事ちゃんとしてください』

続くトモちゃんは粘ってフォアボールを選んで、ノーアウト一、二塁。ゆーくんは足も速いし、右中間辺りに打球が飛ばばホームまで返ってこれるだろう。

「かつちん頑張れー！　ダンって踏み込んでギユンって振るんだよー！」

「いや分からん」

今日のかつちんの成績は、三打数無安打。ピッチャーゴロが一つと、レフトフライ、そして三振だ。あんまり良い成績とはいえない。けど、かつちんのスイングは気持ちがいいくらいの豪快なフルスイングだし、当たれば飛ぶと思う。それに期待する。

『ノーアウト一、二塁。ここで回ってくるのは、本日まったく良いところのない関口です。打てば凡打と三振に倒れ、守ればエラーが二つ。フツ』

「んだコラ梶原ゴラア!!」

『弱い犬ほどなんとやら。負け犬の遠吠えが聞こえてきます。文句があるならそのバットで訴えてほしいものです。恥も外聞もかなぐり捨てたビヨンドマックス打球部が柔らかい素材でできているバット。これで軟式のボールを打つと、引くくらい飛距離が伸びる。を使用しているにも関わらず未だ無安打。高級感のある光沢があった黒のバットも、心做しか色褪せて見えます』

「チツクシヨ…！　バカヤロウお前！　俺は打つぞお前!!」

放送席にバットの先を向けたかつちんは、声を荒らげながら打席に立つ。

興奮状態のかつちんにこころんの球がちやんと見えているわけもなく、ブオンツ!!　という風をきる音と、キャッチャーミットを打つボールの音が虚しく響く。

『プークスクス』

「あゝあ!?!」



『カジさー、そーゆーとこだよ?』

「かつちん落ち着いてー! ボールしつかり見なきや打てないよ!」  
ベンチから声を張る。

そんなはぐみの声が届いたのか、かつちんは一度こつちを見てから、バッターボックスを一步出て屈伸をする。気持ちのリセットとか、そういうのだと思う。

ふう、と息を吐いたかつちんは再び打席に立った。

すつかり落ち着いた様子で、綺麗な姿勢で構えている。

「いつくわよ〜っ!」

こころんがそう言いながら、大きく振りかぶった。

もう百球くらい投げてるはずなのに、こころんに疲れは見られない。さすがこころん、すごい体力だよ!

こころんが投げたボールは、綺麗な横向きの弧を描く。

インコースから決るように変化するこころんの球を、かつちんは芯で捉えた。

鋭く、地面と並行するように飛ぶ打球は——まこちんシヨートのグローブの中へ吸い込まれていく。

「え〜っ」

かつちんのそんな声が聞こえた。

『強い打球だったのがこれはシヨート正面ー! ランナー慌てて戻るも、二遊間素早い連携を見せる! 6—4—3のトリプルプレーーっ!!』

『うーん… 今のはまこつちちゃんのポジションが絶妙すぎだねー。普通なら抜けてるよ、仕方ない仕方ない。というか美咲つちの動きが良すぎない? なんで今の打球で当たり前のようにベースカバー入ってるの? やっぱパないわー、さすがミツシエ』試合終了ー!!! 試合終了ですよ澤田さん!』…? 不起ドワイブチー(ごめんなさいの意)』

… なんととも言えない終わり方になっちゃった。

で、でもまあ! 試合は楽しかったよ!

こういうのは勝ち負けが全てじゃないしね、うん!

ふふつ。つまり、そういうことさ。

シエイクスピア曰く、『この世は舞台、人はみな役者』。

私は舞台に魅せられ、今まで様々な役を演じてきた。

王子はもちろん、村人Aや怪盗役、動物というのもあつたし、おままごとだったとはいえ、幼い頃にはお姫様の役だってしたものだ。

そんな私をして、人生で最大と言える大舞台。それが、『ハロー、ハッピーワールド!』。

世界を笑顔にするために日夜活動するハロハピの一員。これほどまでの大舞台は、今後私の人生において、そう立てるものじゃない。まさかそんな舞台に、瀬田薫の名で立つことになるうとはね。現実は小説より奇なり、ということか。

誰もが自分の役を演じなければならぬのだと、リア王シエイクスピアは言った。私は、私という役を演じている。

皆もそうだ。自分という役を、自分で演じている。本物だとか、偽物だとか、そういう話じゃない。これは人間さがという動物の性なのだろう。皆、〃何者か〃になりたがっている。

——いや、少し違うか。自分が何者でもないことを恐れている、と言った方が正しいのかもしれない。『自分』という役外壁を作り、社会という檻の中で、必死に自らを守っているのだ。

「それもまた儂く、健気だ…。」  
「突然なに呟いてんですか、瀬田先輩。やべーやつ認定されますよ…。」  
「いやもう手遅れか」

この目の前の少年は、非常に多彩な役柄と言える。

ある時は、ただの男子。何気ないことで一喜一憂し、友人と過ごす青春を謳歌せんとしている、ただの男子。

そしてある時は、導者。迷える子猫ちゃんに手を差し伸べ、歩むべ

き道を示し、導く者。

またある時は、道化師。ピエロのそれとは多少異なるが、敢えて滑稽を演じて他者を笑顔にする姿は、まさに道化師。

この世というたった一つの舞台の上で、*彼*という役は様々な顔を持つている。それは稀有な才能で、そして重要な役柄だ。

『愛は万人に、信頼は少数に』。

私は全ての子猫ちゃんを愛しているけれど、信頼している者はと聞かれれば、そう多くは数えられない。

家族やバンドメンバーや幼馴染。そして、彼。私が信頼する、数少ない特別な人。仔犬くん

彼は私に、様々なものを与えてくれるだろう。

私は彼に、それに見合うものを返そう。

「フツ…共に歩もう、この果てしなき旅路を！」

「いやだから。なんなんスカ急に」

嗚呼っ、儂い!!

★ ☆ ★ ☆ ★

これは詳細を省くが、結論だけ言うと俺はミッシェルの弟になった。

は？（は？）

あまりにも意味が不明すぎてあいきやんのつとあんだすたん。

助けてくれブラザーと兄（ミッシェル）に視線を向けるも、その昏い瞳はどこか慈愛を含んだ温かい目をしていた。なんでやねん助けるブラザー（真）。

それじゃあここでみんなお楽しみ、回想のお時間だ。

え？ 別に楽しみじゃない？ そんなこというなよ、悲しくなるだろ。ちよつとだけだから。先っちよだけ。な？

ほら行くぞ！ ほわんほわんせきぐち〜（効果音）

『ミッシェルには弟がいるって聞いたわ！　どんな子なのかしら？  
あたし、すつごく気になるわ！』

『ふうん……………え、待つて。え、え？　なんスカ黒服さん方。な  
んでそんな腰落として俺を取り囲んで……………ちよまつ、アツ——  
!!』

ほわんほわんせきぐち〜(終了)

とまあ、こんな具合だ。

あまりにも意味が不明すぎてあいきやんのつとあんだすたん。  
ニーブラツ!!!じゃねえんだわ黒服よお…………。

助けてくれ兄者………… あつ、こら！　顔背けんな！　今絶対笑つて  
んだろミッシェル兄ちゃん!!

? ? ? ? ?

かくして、ミッシェルの弟ミツケルとなった俺は、わけも分からず  
ハロハピのライブのステージに立たされた。

言わずもがな、例によつて、恒例の。まーじでやめて欲しいランキ  
ング上位入賞必至の『ドキドキ!　ぶつつけ本番の即興ハロハピカ  
バーライブ!』である。本当にやめて欲しい、脳が震えそう(オーバー  
ヒート)

「やあ、はじめまして、ミツケル。聞いたよ、キミはミッシェルの弟な  
んだそうじゃないか！」

「そつすね」

「おや……………?　ふむ、どこか具合でも悪いのかい？　そんなに気落ち  
した声で」

「いや、別に」

突然の出来事すぎて展開に付いていけない俺は、ほとんど何も  
考えずに瀬田先輩へと返事をする。

そんな俺が今回弾くのは、ギターではなくキーボード、シンセサイ

ザーらしい。なんでき。

いやまあ少しは弾けるけどさあ。マイシンセ持つてるし、暇な時はピコピコ練習してるし。でもライブでぶっつけ本番はダメだろう。いやギターであつてもやめてほしいんだけどな？

つかミツケル(きぐるみ)の太いふわふわの指じや鍵盤なんて押さえられるわけないだろ、いい加減にしろ！

「ミツケルはミツシエルの弟、つまりオスという設定なので、爪が出ます」

「爪」

設定つて言っちゃったよこの黒服。

「上上下下LRRLRBAで爪が出ます」

「なんて？」

お前それどこのコナ○コマンド…… うわっほんとに出たあ……。

「うんうん。コ○ミコマンドを使いこなしてこそ、真のふわキャラだよ」

「そんなふわキャラは嫌だ」

というか俺は真のふわキャラなんて目指してない。奥沢さんと一緒にしないで。

ため息混じりに、俺はシンセを軽く弄る。

今回俺が使わせてもらえるのは、ROLANDが出してる『FANTOM-8 MUSIC WORKSTATION』つてやつらしい。シンセのことはよく分からんからこれが良いのか悪いのかは知らないけど、なんでこれ八八鍵なんですかね？ 普通バンドで使うつてやつなら六十一鍵だろうに……。

まあ楽器は全部黒服さんたちが運んでくれるし、重量的なアレは問題ないのか。

「ふーん……。ちなみになんの曲やるの？ これ」

音色の数がアホみたいに多いことに軽く引きつつ、隣でドラムのセッティングをしていた松原さんに聞いてみる。

「え？ 聞いてないの……？」

「まったく」

「ふえ… ごめんね、いつも本当にごめんね…！」

「まあそろそろ慣れてきたんで」

「ふええ… 目が虚ろだよお…。え、えつとね、今日のセトリは、『えがおのオーケストラっ！』、『ハピネスっ！ ハッピーマジカルっ♪』、『キミがいなくちゃっ！』それから』にこ×にこ||ハイパースマイルパワー！』だよ？」

「ふざける」

バカヤロウ 伴奏じゃねえか バカヤロウ。

シンセつてより普通にピアノバリバリあるじゃねえか!! 本当にいい加減にしろ!

… い、いや、落ち着け俺。元々ハロハピにシンセはいなくて、そこは全部DJミツシエルお兄ちゃんが打ち込みの音源を流してるんだ。なら俺は最悪立ってるだけでも…

「あー… ごめん弟よ。シンセの打ち込みの音源、なんか機材トラブルとかで流せないんだよね」

「ガツテム!!」

神は死んだ!

? ? ? ? ?

さて、そもそも何故ハロハピのために奮闘しなければならないのかと本気で思い始めていた俺だったが、まあこれも乗りかかった船。

松原さんのあざと可愛い「ふええ…」と、お兄ちゃんのいつも以上に低い腰に勝てず、結局ライブには付き合うことになった。

「えーつと… ? 右右下上左左左で… ホントに譜面出てきた…」

さすがに今から全ての譜面を覚えるのは不可能だったので、ここはミツケルとかいうきぐるみの性能に頼る。

俺の視界に楽譜がホログラムみたいな感じで投影され、気分はさながらモビルスーツの搭乗者だ。このきぐるみ本当にギミックが満載だし、多分ビームくらいなら撃てるだろ。

「ふふふ、関口くんもコナ○コマンドを使いこなしてきたね……！  
これでまた一步、一流のふわキャラに」

「近付いてません」

どうにも奥沢さんのテンションがおかしい。ふわキャラ仲間ができて舞い上がってるんだろうか？ なら残念。俺は絶対そっち側には行かないからな。

漫才はこの辺にして、そろそろ本番の時間だ。

今日の舞台はとある保育園。月に一回ハロハピが行っているという定期ライブ。

ハロハピ、本当にいろんな施設で定期ライブやってるしゲリラライブもやってマジすごい。ライブ経験っただけならRose liaにも負けてないんじゃないかな。

「みんなー！ 久しぶりねー！」

お嬢が笑顔で声を上げると、観客である園児達が割れんばかりの歓声を上げる。声変わりなんてしてるわけもなく、全員が全員めちゃくちゃに高い声だ。耳がキーンってした。

「うんっ、みんなすーっごく元気ねっ！ それじゃ早速行きましょーう！ 『えがおのオーケストラっ！』」

声に合わせ、松原さんのカウントが始まる。

まずは俺、シンセの出番だ。ピアノの音とは違い、少しだけエフェクトをかけた音色。それを、目前に流れる譜面を追って弾いていく。するとすぐにお嬢の歌が入り、そこからは俺もピアノに近い音に変えて演奏する。シンセで足りないところはお兄ちゃんが音源を流し、補っていた。

っーかそれ、シンセだけ機材トラブルで流せないとかありえる？ 今更だけどさ。ぜってー黒服さんの仕業だろ。

まあ始まってから文句を言っても仕方がない。

今はハロハピのため、そして何より目の前の観客子供たちのために精一杯の演奏をしなければ。

意外と意志通りに動く爪を使い鍵盤を叩いていると、いつもの如くお嬢がこちらに寄ってきた。バク転しながら。びっくりするからや

めてほしいって何回言えばいいかな。

「つないだー手を、繋いでこー！」

サビに入り、お嬢が俺の左手を取った。

「え、ちよ」

「にこにこ顔、咲かせよう！」

うっさい演奏させろ!!

何故か瀬田先輩も寄ってきたし北沢も寄ってきた。そんでなんか知らんけど手を繋ぎはじめた。ばーか！ 演奏しろお前ら！

そんな俺たちを松原さんは苦笑いで、お兄ちゃんは淡々と足りない音を足しながら、園児たちはキラツキラした顔でキヤツキヤツしながら、それぞれ見てくる。いやまあ、観客側が楽しいならそれでいいけどさあ……！

「うーんっ！ みんな元気がたーっくさんねっ！ 次も笑顔で、元気にいきましよう！ 『ハピネスっ！ ハッピーマジカルっ♪』」

二曲目。またしても俺から始まる曲だ。

跳ねるように鍵盤の上で指を走らせ、軽快なテンポで弾く。

ハロハピの曲は楽しいものが多い。観客にとってはもちろん、演者にとってもだ。

なんだかんだ言つて、俺も演奏を楽しんでいる節がある。まあ苦惱もあるんだが、それはそれ。楽しい時は楽しい。

慣れないきぐるみの体をテンポに合わせて左右に振り、軽く頭なんかも振ってみる。楽器弾いてる時は自然とこうなっちゃうけど、ハロハピのは明るい曲だからいつもより余計にるんっ♪て感じで体が動くんだよね。

子供たちも楽しいらしく、もはやじつとはしていられない。

ステージから降りて客席(保育園の教室)を駆け回るお嬢とともに、演者側とコミュニケーションを取りながら飛び跳ね、走り、笑顔の花を咲かせて回っている。

これこそがハロハピの真髄、最大の魅力だ。

演奏技術は、残念ながらそこまで高いわけじゃない。だが、そんな



ものは関係ないとばかりに音楽を楽しみ、笑顔を満たしていく。「世界を笑顔に」だなんていう夢物語も、彼女たちなら実現してしまうんじゃないかと、そう思えるほどの「笑顔」の波状攻撃。

ああ、本当に――

「巻き込み癖さえなければなあ」

「さあ！ もっともくっと笑顔になりましょう！ 『キミがいなくちゃっ！』」

またピアノからかコンチクショウ。

しかもわりとマジの伴奏じゃんやっべえ。指よく回ったな俺…。

この後、『にこ×にこ』ハイパースマイルパワー！』のピアノソロを死ぬ気で弾ききった俺は、当然の如く追加された曲に翻弄され、そして真っ白に燃え尽きた。

もう無理。あと一週間はキーボ触んなくていい。

「明日はあたしのおうちでライブよ！ なんとか大統領？ さんも来るの！ 明日も楽しみましょうね、ミツケル！」

「嫌だ！ 俺は故郷に帰らせてもらうッ!!」

なんとか大統領、めちやくちや日本語上手かったです。

? ? ? ? ?

なんとか大統領とSNSで繋がってしまったから数日後。

十月も暮れ。

ハロウインを間近に控え、世間も少し浮き足立ってくる季節。

高い空に浮かぶ白い粒状の雲を見上げつつ、俺は学校からの帰り道を歩いていった。

あのうろこ雲、正式名称なんだったつけな。巻積雲とかだったつけ。

「あゝ… 焼き芋食いてえ」

落ち葉でも集めて焚き火して、そこで芋焼きたい。風情だよなあ。まあ今のご時世、無許可で焚き火なんかしたら通報されそうだけど。

九州の田舎にあるじいちゃんの家に行けばできないこともないんだらうけど、ここ都内だしなあ。

「おや？ 仔犬くんじゃないか」

妥協してスーパで焼き芋買うか、などと考えていた俺に、そんな声がかけられた。

「あ、瀬田先輩。お疲れ様です」

「ふふ、お疲れ様。偶然だね、今帰りなのかい？」

「はい。ちよつとスーパに寄ってから帰ろうかなと」

振り返り、背景に薔薇のスタンドか何かを発動させながら近寄ってくる瀬田先輩に挨拶する。

羽丘の貴公子にして、姫を守る王子にして、自称世界を彩る役者にして、怪盗ハローハッピーにして、ハロハピのギター担当にして、荒唐無稽の一人芝居者。もう訳が分からないよ。

「スーパか… 何か面白い物でも？」

「ちよつと焼き芋でも買おうかと」

「焼き芋！ いいじゃないか。あのホクホクとした食感。ミルクと一緒に口に含めば、口いっぱいに儂さが広がるハーモニー！」

「そういうことです」

ちよつとよく分かんないけど、多分つまりそういうことさ。

「ふむ… 仔犬くん、私も一緒にさせてもらってもいいかな？ 想像したら食べたくなってしまったね」

「いやまあいいですけど… 貴公子が焼き芋なんて食って、女子信者からイメージ崩れませんか」

「大丈夫さ。ここには君しかいないことだしね」

壁に耳あり障子にメアリー。

やつらの目はどこにあるのか分からない。まあ俺には関係ないけ

ど。

瀬田先輩って普段から本能レベルのキャラ作りしてるけど、本当は雑煮が好きなんだからなあ。焼き芋が好きでも不思議じゃない。

そういや、焼き芋食べたからおならが出るとかいう話もあったな。なんだっけあれ、デンプンが消化されづらくて食べガス作りやすいとか、そんな感じだったっけ？

アイドルもトイレに行く時代だが、王子はトイレに行かないらしい。ひまりがそう言ってた。

そんな王子が放屁なんてした日には、瀬田信者たちはどうなっちゃうんだろうな。いやまあ、瀬田先輩だって人間だし、おならくらい普通にするだろうけど。

「私がトイレに行くのか気になるのかい？ ふふ、いけない子だ」

「勝手に人の心読んだ上に変質者扱いみたいな発言するの止めてください、はっ倒しますよ」

「……キミはたまに、とても強い言葉を使うね」

お互い様だと思う。

まあ、こうやってふざけられるのも、俺と先輩の仲が友好である証拠。さすがにあんまり親しくない人に向かって「はっ倒す」なんて言わない。

「では行こうか、仔犬くん。放課後デートだ、エスコートは任せておくれ」

とまあ、見知った商店街で俺が決めた目的地までの道のりを謎にエスコートされ、俺たちはスーパーに着いた。

入口付近に置いてある石焼き芋を二つ取り、ついでに牛乳とコーヒーもカゴに入れて、会計を済ませる。

退店してすぐ、あちあち言いながら芋の皮を剥く俺と先輩。黄金色をした綺麗な実が現れた。

湯気と共に漂ってくる甘い香りに腹を刺激され、欲望を抑えることはせず、無言でかぶりつく。

またもやあちあち言いつつ、瀬田先輩は牛乳を、これはコーヒーを

流し込む。

「うまああ……！」

あまりにも至高がすぎた。嗜好の中の至高。やはり食欲の秋が大正義か。バターも買つときやよかつたな。マヨネーズはそんなに好きじゃない。お母さんと姉ちゃんはマヨネーズかける派だけど。

「舌で小踊る Good smell… 洗練されたる perfect harmony！」

なんて？

しかしまあ、こうして瀬田先輩とやらんで焼き芋を食う時が来るとは。想像もしてなかつたな、マジで。

焼き芋食つて華々しいスタンドを発生させる瀬田先輩を横目で見て、やっぱり男よりイケメンだなと再確認する。焼き芋食つてる姿が映えるって何事よ。

ファンになる女子たちの気持ちもよく分かる。下手な俳優よりイケメンな上に、全てのファンを労り気にかける気概の持ち主。

手の届かない推しより、会えて喋れる神を信仰するのは必然の理。って牛込さんが言つてた。あの子、たまに豹変するよなく。やっぱり牛込さんもポピパの一員なんだなつて思う。

うまうま言いながら焼き芋を食べ歩いていると、どこからかピアノの音が聞こえてきた。柔らかく、心地の良い、とても綺麗な音色だ。

「おや、見てみなよ仔犬くん。路上ライブだ」

瀬田先輩が指す方を見る。

そこには小さな人集りと、電子ピアノ、キーボードを弾く一人の男の姿があつた。同学年くらいに見える。キレ目の、とても整った顔だ。目に少しだけかかった艶やかな髪は、ちよつとだけ青みがかつている。染めてるのかな。

風に揺れる髪の間から見える耳には、これでもかとかばかりにピアスが付けられていた。バッチバチじゃん、かっけえ。

「へえ… 上手いっすね」

「そうだね。とても奇麗だ」

特に立ち止まることはなかったが、パツと聞いただけでもその実力は分かる。表現力が凄まじい。音の強弱はもちろん、運指が綺麗で正確だからか、いわゆる『粒』が揃っている。小川の流れのような、繊細な音色だ。

弾いているのは、何かのクラシックだろうか。そつち方面は全然詳しくないから分かんないけど、どこかで聴いたことがあるような、ないような。どっかの店のBGMとかで聴いたのかな。

「ピアノかあ。うちのバンドにも欲しいなあ」

俺にお嬢や香澄くらいのコミュ力があれば、蒼髪の彼に声をかけたかもしれない。知らんやつを突然自分のバンドに誘うとか、俺できねーよ。こういう時はお嬢や香澄のことを心底尊敬する。

「キミは弾かないのかい？ 仔犬くん。随分と上手いじゃないか」

「いやあ、俺はやっぱりギターの方が……」

……あれ？

「瀬田先輩、俺がピアノ弾けるって知ってたんすか？」

俺がピアノを弾けることを知ってるのは、幼馴染連中と、カプリベルテの二人くらいだ。あいや、ポピパも知ってるかな。夏休みに俺の部屋に何回か入ってるし、俺がキーボードを持ってるくらいことは知ってる。

けど、瀬田先輩にそんな話をしたことはないし、部屋に入れた記憶もない。唯一見せた時だって、ミツケルとして弾いただけだし……。

「……まさか先輩、ミツケルの正体——」

「いやあ、ひまりちゃんから聞いてね。キミはピアノも上手いのだと。羨ましいよ、私はギターだけで手一杯だ」

俺の言葉に被せるように……というのは、俺の考えすぎだろうか。焼き芋を最後まで食べきった先輩は、何事も無いような様子で俺の少し前を歩く。

軽く振り向いた先輩の顔は、いつも通りキラキラに輝いていた。

★ ☆ ★ ☆ ★

世の中は夢いもので満ちている。

青く高い空、彩り舞い散る落葉、肌を撫でる緩やかな風、焼き芋。今日に見えるものだけでさえ、数え切れず、そして計り知れない儂さが溢れている。

「…まさか先輩、ミツケルの正体——」

「いやあ、ひまりちゃんから聞いてね。キミはピアノも上手いのだと。羨ましいよ、私はギターだけで手一杯だ」

私はそれを愛で、尊び、守る存在でありたい。

『天は自ら行動しない者に救いの手を差し伸べない』

「？ つまり？」

「そういうことさ」

「?????」

「ふっ、夢い（名言の引用に特に意味は無し）

「ほんと先輩、そういうののストックは尋常じゃないですよ」

「そういうの？ ああ、シェイクスピアの言葉かい？ 彼の詩集は常に持ち歩いているんだ。暇があれば読んでいるよ」

いわゆる、私のバイブルというやつだ。

「シェイクスピアはいいよ、実に夢い」

「あー、うん。夢いっすね、夢い」

「…キミはたまに、千聖のようになるね」

私を雑に扱う子はほとんどいない…。…というと、少し驕りが過ぎるかな？ 私は別に他人より優れているわけではないからね。

だが、新鮮な経験ではある。それに彼や千聖は、仲が親密だからこそ私を雑に扱うのだ。そう考えれば、うん。とても夢いじゃないか！「シェイクスピアかく…そつすねえ。正直なところ、ちゃんと読んだことはないんですよ。あいや、ロミジュリの劇くらいは見たことありますけど」

「おや、そうなのかい？ ではちようど良い。実はここに、明後日公開される舞台のチケットがある。演目はハムレットだ。どうだい？

運命を感じるだろう」

「なんたる奇遇。まるで狙ったかのよう」

疑わしげな瞳をぶつけてくるが、これは本当に偶然だ。

千聖と一緒に、とパパから貰ったんだけど、千聖はスケジュールが合わなかった。ハロハピの誰かか、演劇部の誰かを誘おうかとも思っていたけど、仔犬くんにシェイクスピアを知ってもらおう良い機会だ。

「ふふ。それじゃあ明後日、時間を空けておいておくれ。迎えに行くよ、仔犬くん」

『運命は、最もふさわしい場所へとあなたの魂を運ぶのだ』。

運命という方舟に乗り、私は進もう。

ハロハピと共に、どこまでも。

幼馴染を乗せ、どこまでも。

そして彼と並び、どこまでも。

私の旅路は終わらない。世界が私を呼んでいる。私を必要としている子猫ちゃんがいる限り、私の旅路はまだまだ終わらないのだ。

「方舟を押し風は、もう吹いているのだから」

「ちよ、瀬田先輩黙って。もうすぐ開演なんだから。俺まで変な目で見られるでしょ」

嗚呼っ！　なんて夢いんだっ!!!

少しのお砂糖と、過分なスパイス。そして素敵な何か。

あたしにとって、彼は何なんだろう。  
ふと、そう考えることがある。

彼はひまりが連れてきた男子で、あたし達の幼馴染み。でも、その程度じゃない。

ほかの男子より、なんなら女子の友達よりもずっと親しい友達。でも、それじゃ足りない。

いつも暖かくて、あたし達を包み込んでくれるお兄ちゃん…。それはちよつと違う。あいつをお兄ちゃんって思いたくない。

誰よりも優しく、あたしの中に踏み込んでくれる人。幼馴染みっただけじゃない、親友っただけでもない。もっと特別で、大事な人。友達以上恋人未満、とも違う。そもそも、恋人が友達の上にいるっていう考えがおかしい。価値観は人それぞれなんだから。

彼のいない生活なんて考えられない。高校は別々になってしまったけど、それでも週に一回は必ず会う。彼はあたしの『いつも通り』の風景のようなもの。あたしたちを形作る一部。

そんな彼が、最近は色んな人と仲良くしている。

別にあいつの友好関係に文句をつける気はないけれど、少しだけ…。ほんのちよつぴり、一ミリくらい、いやミクロンレベルで、心がざわつく。

彼が離れていってしまうようで、あたしの『いつも通り』がどこか遠くに行ってしまうようで。



それがたまに、どうしようもなく不安になる。

★ ☆ ★ ☆ ★

忙しなく混沌を極めた魔のハロウィンも久しく感じ始めた、十一月十一日。土曜日。

今日は、世間一般では某製菓会社のマーケティング戦略の一部であるポ○キーの日であり、私事では俺の誕生日だ。

「海、誕生日おめでとう~~~~!!」

「ん、ありがとう」

場所は羽沢珈琲店。まだお客さんもあまりいない、朝十時頃。

俺は幼馴染みに囲まれ、誕生日を祝われていた。

これは別に俺が特別というわけじゃなく、ほかの五人が誕生日を迎えた時もこうやって集まる。昔からの行事みたいなもんだ。

「にしても、何もこんなに早く集まなくても良かったろ。朝の十時て」

「だってえ〜！ 早く海の誕生日祝いたかったんだもんっ！」

え、何それ嬉しい。にやにやしちゃう…。あつ、蘭こらダメエ！

横腹つねんな痛い!!

でもあれだな。ひまりは昨日の夜、ってか今日になった瞬間か。深夜0時ぴったりに電話かけてきたし、実は集まる前からもう祝われ済なんだよな。

「海〜ハピバ〜。はいこれ〜ポ○キーだよ〜」

「ポ○キー一本てお前。せめて箱ごと寄越せ」

それとモカ、お前は俺にもっと高いものを奢れ。お前の誕生日に色々買ってやったろ。そうだな、指輪欲しい。それかブレスレット。ライブ用のアクセサリーが欲しいんだよな。

文句を垂れつつも、モカの差し出してきたポ○キーを啜える。うん、美味しい。

「アタシからはこれだ！ 誕生日おめでとう、海！」

そう言つて巴が差し出してきたのは、ギターのストラップだった。Fenderのロゴが入っている、青を基調としたシンプルなデザイン。

俺の本妻はEDWARDSのレスポールだし、側室である七弦ギターはIbanezなんだが、まあそんなことは些細なことだろう。Fender、EDWARDS、Ibanezはそれぞれ別のメーカーの名前。ストラップにメーカーのロゴが入っていることは少ないが、入っている場合はギターとメーカーを揃えることが多い（当社比）。とても俺好みのストラップだ。さすが幼馴染み、俺のこと分かってんな。

「私はこれ。はい、海くん。お誕生日おめでとうっ」

貰った箱を開けると、中にはマグカップが入っていた。柴犬のイラストが描いてある。きやわ。俺、柴犬めっちゃ好きやねん。

ありがとうつぐ、今日からこれでコーヒー飲むわ。カフェイン中毒には気を付ける。

「ふっふっふ〜！ ひまりちゃんからはこれだーっ！」

やけに高いテンションでひまりが渡してきたのは、手のひらサイズの箱。開けてみると、中にはシルバーのネックレスが入っていた。シンプルな造りのリングが二つ付いたネックレスだ。

ふーむ、良き。十年も一緒にいるのは伊達じゃないな。俺がゴテゴテした装飾が苦手なのを分かっているし、俺が欲しいと思つてたものだ。

さすがひまり、ありがとう。明日から学校にも付けていくわ（お気に入り）

残るは蘭か。去年は『地獄の華道ドリル　く決死の入隊編く』って某メカトレみたいな本くれたけど、今年は続編くれるのかな。

つーか去年は蘭のお家事情とかほとんど知らなかったから何も思わなかったけど、今考えたらよく俺に華道の本とか渡してきたよな。もしかしてSOS的な何かだった？　だとしたらごめん、俺全然気付かなかつたし、なんならドリル見て華道の勉強してたわ。

チラッと蘭を見ると、何やらゴソゴソとカバンの中を弄り始めた。

プレゼントを出そうとしているんだろう。本当に何くれるんだろう。『地獄の華道ドリル　く狂気の常緑樹信仰編』とか渡されたら、俺はどんな反応をすればええんやろか。

「あたしからは——」

「お待たせ！　特製誕生日ケーキ『デビルズフーズ・セリーヌアンオアシス　く幻惑の桃源郷』だよ！」

「なんて??」

蘭を遮るようなタイミングで意味の分からんネーミングの特大ケーキを持つてきたのは、ここ羽沢珈琲店の店長でもあるつぐのお父さんだ。

学生時代はお菓子料理人としてブイブイ言わせていたらしいつぐパパの甘味は異様なほどに美味しい。あの弦巻家が羽沢珈琲店のスイーツを鼻肩にしている、と言えばその凄さも伝わるだろう。もはやね、世界の羽沢ですよ。

そんなつぐパパが持つてきたケーキは、ウェディングケーキくらいの大きさはあるチョコレートケーキだった。ただのケーキではない。砂漠の中に佇むオアシスを型どった造形をしている。まるで3Dプリンターでも使ったかのような、立体的で、怖いくらい精巧な造りだ。細部には様々なフルーツやビスケット系のお菓子などが施されており、その一つ一つの配置と装飾に無駄がない。

これはケーキというよりも、一種の芸術品だ。初見でケーキだと見抜くことはほぼ不可能と言える。これだから世界の羽沢は…（褒め言葉）

「わーい！　つぐパパありがとうございまあす!!!　インスタに上げなきゃー！」

随分と軽いノリで、世界の羽沢の一品をスマホの写真に収めるひまり。

それもそのはず。こんな感じの平行ケーキを見るのは、高校生になってからこれで五回目なのだ。

高校生になってから、つぐだけは早生まれだからまだだが、そのほかのメンバーは全員誕生日を迎えている。

誰かが誕生日を迎える度に出てくるのが、このつぐパパ特製パラレルケーキなのである。誕生日を皆で祝う風習は小学校の時からあったし、もう何十回と見てきた。一々驚いてたのは最初の三回までだったな。

ここ数年の楽しみは、毎度の凝ったネーミングだ。

確か蘭の時間が『あの崖の向こうに続く虹』、巴が『あい あむ あけーき』、モカが『宙より高く、海より深き場所』、この前のひまりの時間が『アルドレーヌ・ラ・ノエル くサンタナを感じてく』だったかな。ネーミングセンスについては俺といい勝負だろ、つぐパパ。

「ありがとうございます、つぐパパ。てかこれ金払いますよ。去年までと違って俺バイトやってるんで」

「いいのいいの！ 子供のうちは大人に甘えておくものだよ、海くん」  
つ、つぐパパあ…！

昔一緒に住んだ頃に『かーいーくんっ♡ パパ金欠だから夜ラーメン奢って♡ お母さんにはナイショだよっ♡』って言ってきたうちのお父さんとは大違いやで…！

いや改めて思い出したら腹立ってきたな。当時俺小五くらいぞ？ 小学生の息子に晩飯たかるなよクソ親父。俺あの時お年玉崩したんだぞ（）

「はああ… つぐパパがお父さんにならねえかなあ」

「ふえ!!」

つぐと、そんでひまりの声がシンクロする。

いやなんでつぐが顔染めてんのか分かんないし、ひまりはその掲げたフォークを下ろせ。

「海く、海はほんと、そういうとこだとモカちゃん思うな」

「俺が悪いのこれ？」

「海、とりあえず土下座したら？」

「土下座」

モカや蘭までなんか言ってくる。巴は巴で「仕方ねえなあこいつら」みたいな姉御スマイルかましてるし、何なんだお前ら。

「はっはっは、おじさんも海くんみたいな子が息子だと嬉しいね」

ほらバカお前ら、今の会話はこうやって笑って済ませる会話だろ。つぐパパを見習え。

そう思つてつぐパパを見ると、今まで目尻に皺を寄せていたつぐパパの顔が一気に真顔になった。えっ。

「でも…うちの娘を泣かせたら魚の餌にすんぞ、ガキ」

「ヒエツ…」

修羅が見えた。つぐパパには何があるかと逆らわないし、つぐは絶対に泣かせないって心に決めた。

? ? ? ? ?

つぐパパの特製ケーキ完食とかいう軽いフードファイトを完遂した後、俺たちは外に繰り出していた。

時間は十二時半。ちょうど昼飯時だが、さっきのケーキがまだ腹の中にいるおかげで空腹感はこれっぽっちもない。

そんな俺たちが向かうのはどこか、と聞かれれば、分からないと答えるしかない。

特にあてもなく、ずっと店にいと営業の邪魔だろうからと出てきただけだ。これで解散でもいいっちゃいいんだが、せっかくだしどこか遊びに行きたい。

「みんなはどこか行きたいところある?」

もう俺の誕生日を祝うターンは終わった。

故に、ここは俺の行きたい場所じゃなく、みんなで行きたい場所に行くべきだ。

つてことで、とりあえず行きたい場所はあるか聞いてみた。

「うん…私は特にこれといつてはないかな。ごめんね」

「いや、別に謝んなくてもいいよつぐ。つぐは笑つてて、マジで。頼むから」

「お前、つぐのお父さん怖がり過ぎだろ…」

バツカバお前、あの修羅怒らせるようなことあれば俺ホントに魚の餌になるかもしれないんだぞ!

「ひまりはなんか希望ある? …… ひまり?」  
「うう〜……」

何唸ってんのこいつ。睨むな睨むな、可愛いだけだぞ。

「はいはい、モカちゃんはパン屋さんに行きたいです」

「ほらそこ、美味しいパン屋喜福堂あるぞ」

「近所もいいけど、モカちゃん的には、未開の地に進出したいってゆ〜かあ〜」

「ふーん。つつても俺、お腹いっぱいなんだけど」

「パンは別腹でしょ〜? ねー、みんな〜」

全員苦笑いだぞ。

パン屋巡りは却下な。今度付き合ってやつから。

と、ここで不機嫌そうだったひまりが突如手を上げてくる。

「はい! スイパラ行きたい!」

「腹いっぱいだったつってんだろ」

「じゃあ横浜! 中華街!」

「日本語理解してらっしゃる?!!」

つーかスイパラでお前。さっきあんだけケーキ食ったろ。俺の倍くらい食ってたくせに、まだ甘いもん食べたいのかこいつ。

スイパラも却下。睨むな睨むな、そっちも今度付き合ってやるから。

「巴は… ラーメンって言いそう。却下」

「うーん、間違っていないから怒れないなあ」

間違っていないのか○

え、何お前ら。お前らの胃はどうなってんの? 無限大? もしかしてミニブラックホールドラ○もんの秘密道具。でも飲み込んでおられる?

とかみんなお腹いっぱいなんじゃないの? 好きなもんは別腹ってか、この乙女どもめ。

「じゃあ、そういう海はどこがいいの」

俺が否定してばかりいるからか、蘭がそう聞いてきた。

「んー… 楽器屋?」

「大勢で行く場所じゃないでしょ」

「じゃあカラオケとか… ボウリングとか？」

「まあ、それなら別に」

反対はしない、つまり賛成だと蘭が言う。

ほかにも特に反対意見は上がらず、結局いつも通りの遊びコースになった。何だかんだでいつも通りが楽で楽しいって、それ一番言われてるから。

? ? ? ? ?

「~~~~♪」

というわけでカラオケである。

六人でカラオケに入ると一人の歌う時間が少なくなりがちなのでそんなに好きじゃないんだが、このメンツだったら話は別だ。こいつらとなら、別に歌う時間が少なくなっても不思議と気にならない。なんでかは分かんないけど。親密度とかそんなのかな。

「イヤイヤイヤイヤイヤ！」

と、蘭の歌が終わる。

大阪のガールズバンドの超有名曲は、蘭の雰囲気にとっても合っていた。近いうちにカバーでもすればいいのに。俺が観たい。

あ、でもシンセがないのか。まあいいや、シンセアレンジくらいなら俺がテキストに考えるからぜひアフグロでカバーして。

「… 考えとく」

なんと、ダメ元で頼んでみたらおっけーの返事が返ってきた。

蘭の「考えとく」はほぼOKみたいなもんだ。天邪鬼だからね、仕方ないね。

蘭に続いて、次は巴が歌い始める。

普段はラウドロックなんかをよく聴くらしい巴だが、今回歌う曲はまさかのアニソン。け○おん!の『ふわ○わ時間』。

いやお前、確かに巴の声には合ってるけどさあ…。

「な、なんだよいいだろ!? アタシだってこういう曲聴くんだぞ！」

「何も言っていないしダメとまでは思っていない。意外だっただけ」

もつとこう、友情！努力！勝利！みたいな曲やスピード感と重みのある曲、ドラムの主張が激しい曲なんかを歌うと思ってたから。

しっかし、思ってたよりもしっくりくるなあ、巴の声。もはや本家と言っても差し支えあるまい。そのレベルだ。

巴がカミサマに二人だけのDream nightを要求している間に、俺も曲を選ぶ。

普段はメロデスやパワーメタルなんかをよく聴く俺だが、カラオケの時にそっち系の曲は歌わない。いや必要に駆られたら歌うけど。カバーする時の練習とか。

それ以外で俺が歌うのは、基本邦楽。ラウドやハードロック系の曲は歌うけど、デスボとかは出さない。いや、一緒にカラオケ来てる奴が突然デスボしたら引くだろ？

というわけで、俺はリモコンをポチポチ弄ってとりあえずJ-popから曲を探すことにした。特に「これだ！」って曲もないしな。

五十音順に並ぶアーティスト欄をスライドさせていき、流し見していく。

と、指が止まった。なんとなくなくこう、ビビつときたアーティストの名前をタップする。うーん……これにすつか。

ピッピと液晶を叩いて曲を予約した。それとほぼ同時くらいに、巴がカミサマへmiracle timeを懇願して曲が終わる。

「いいぞ、かわい〜よくトモチーン」

「茶化すなよモカあ！」

巴の姉御、多分可愛い路線も需要あるよ。

巴には黙ってるけど、この前の花咲川・羽丘合同運動会から巴のファンが何人かうちの高校に出始めたからな。男女併せて十人ちよ

い。

体育祭で姉御節を発動させたソイヤ姐さんは、関わったそいつらをその包容力で落としたらしい。ソイヤ姐さんさあ……。

ちなみに巴だけじゃなく、ひまりにもファンクラブが出来た。

構成人数は分からないが、俺の机に入ってた脅迫文の数からして、



少なくとも八人以上から構成されている組織だ。手書きの物が多かったけど、二通だけ新聞の切り抜き文字のやつがあつて本気の恐怖を感じたなあ。さすがに氷川さんに相談したもんな。

「っーかなんで俺なん。別に付き合つてはないんだが? 『我がが姫に手を出すことは許さぬ』じゃねえんだわ。パスパレのファンだつてもうちよい温厚だぞ。」

あとこれは本当に俺の関与すべき問題じゃないが、つぐのガチ恋野郎がC組に出たらしい。奥沢さんが言つてた。頑張つてほしい。でもつぐを泣かせたら土壤の栄養にすんぞ(ガチ勢)

さて、まあそんなことはどうでもいい。特にこいつらに報告するつもりはないからな。

それより歌だ。次は俺の番。巴からマイクを受け取ると、さつき入れた曲の曲名が画面に映し出された。

「あ、B I O M A M A だ!」

ひまりが叫ぶ。

なんだ、知つてるんだ?

「この前観たドラマの主題歌だつたんだよ! season 2の主題歌もその人達が歌うんだつて!」

「へへ」

それは知らなかった。ドラマの主題歌とか歌つてるんだ、B I O M A M A。

けど多分、この曲は違う。俺が今日選んだのは『S P E O I A L S』。これは特に何かの主題歌つてわけじゃなかったと思う。知らんけど(保険)

このB I O M A M Aは、珍しくもヴァイオリンがいるバンドだ。

だが、別に奇を衒つたなんちゃってジャズロック擬きなんかではない。普通にプログレ調のロックな曲になっている。ギターがおざなりになつてるわけでもないし、俺のしゆきな部類のバンドだ。

気持ち良くBメロまで歌いきり、ギターソロ含む間奏とCメロを経てラスサビに入った。

サビは突然の英詩が入ってくる。英詩を歌う時に気をつけるべき

は、やはり発音だ。その中でも特に重要なのが“文字数”だと俺は思ってる。

文字数というより、発音数と言った方が正しいかもしれない。要するに“尺”の問題だ。

例えば、『forever and ever』という一文。これをカタカナに起こすと『ふおーえばー あんど えばー』だが、実際に発音されているのは『ふおーえばー dえばー』といった感じか。『ふおーえばー』の『ばー』と『あんど』の『あん』が被っている。

and をすべて発音してたら“尺”が合わず、聴いていて違和感しかないモノになってしまっただろう。そうなるくらいなら、多少鼻歌みたいになっても“尺”を合わせていくべきだと思う。

ま、きちんと聞き取れる綺麗な発音ができるに越したことはないんだけどな。

そんな英詩のサビも終わり、短いアウトロが流れる。

あー、楽しかった。B I O M A M A のコピーやりたいなあ。ヴァイオリニストがいないからちよつと無理ですね、残当。周りでヴァイオリン弾けるのなんて姉ちゃんくらいしかいね……。まて、姉ちゃんに頭下げれば演れる……？

え、ついでに友希那さんにも頭下げればA I O A もいけるんじゃない……？ キーボは……そんなときやつぐに頼むか。

そんな計画を密かに立てている隣で、モカが『うさぎ○かめ』を歌い始めた。童謡でお前。いやイメージぴったりだけれどもよ。

「つぐは何歌うの？」

気になって、モカとは逆隣に座っていたつぐに聞いてみる。

「私はこれ歌おうかなって。最近よく聴くんだよ！ みんなみたいに上手くないんだけど……」

「気にすんなよそんなこと。好きなもんを好きなように歌えばいいさ。それに、別につぐは歌が下手ってことは……な……い……？」

待って、つぐ待って？

つぐが歌おうとしているのそれ、え、gratiful days  
しておま、えマジ？ ラップ好きなんお前？ びつくりした俺。

いやでもまあ確かに、羽丘の悪そうな奴(某ソイヤと赤メツシュ)は  
友達だもんなあ。

? ? ? ? ?

午後四時頃。

みんなで遊んだ帰り道。

各人を家まで送って、今は俺と蘭の二人きりになっていた。

「日が暮れるのも早くなってきたなあ」

まだ午後の四時。だというのに、もう空は朱色に染まっていた。  
さつきつぐが見つけた一番星が暗くなりつつある空に輝いている、黄  
昏時ってやつだ。

「そうだね」

静かに同意を示す蘭は、どこか少しモジモジしている気もする。

まあそんなもん指摘しようならスクリュー気味の右ストレートが  
脇腹に直撃することは目に見えてるから言わないけど。

にしても、本当に何なのだろうか。今更俺と二人きりになって気ま  
ずくなるようなやつじゃないだろうに。

しばらく歩き、美竹家が見えてきた。

もう一、二分もすれば蘭ともお別れだ。もうすぐ今日も終わる、や  
り残したことは多分ない。

ボケっとそんなことを考えていると、隣を歩いていた蘭の足が止  
まった。

「ん？ どした？」

数歩分前に出てしまったため、少し振り返る姿勢になって問いかけ  
た。

そうすると、ちょうど蘭の後ろに沈んだ太陽の名残りが射すかたち  
になり、蘭の顔に深い陰が浮かぶ。

…少し、嫌な予感がする。

蘭は普段つつけんどんとしている奴だが、その実、とても繊細で傷付きやすい。最近はいくらか強くなってきたようだが、それでもまだ危ういところが多いのが現状だ。

過保護になるつもりはないが、それでも幼馴染みとして…親友として、心配はしてしまう。

何か嫌なことがあったのか。傷付くことがあったのか。

少しだけそんなことを思ってしまうくらいには、今の蘭が纏う空気は緩くはない。

「…ちよつと、付き合つてよ」

言われるがまま、俺と蘭は、美竹家の門前を横切った。

★ ☆ ★ ☆ ★

もう太陽はほとんど沈みきって、空は八割くらいが夜になってきている。

そんな中、あたしは海を連れて、学校の屋上に登ってきていた。

「…お前、ほんと屋上好きだよな」

「うっさい。いいでしょ、別に」

女子校の屋上に男子を連れてくるのはさすがにどうかと思っただけど、海なら別にいいかとも思う。先生とかに見つかったら怒られるだろうけど。

昼はマシだった気温も、太陽が無くなると一気に下がる。

十一月の夜風は、体を冷やすには十分だ。

少しだけ悴かじかんだ手にハアも息を吹きかける。すると、あたしの肩に何か掛けられる感覚がした。

見れば、一枚の上着が羽織らせられていた。オーバーサイズもいいところの、暖かい服。考えるまでもない。海の上着だ。

「…要らないんだけど」

「うっせえ、黙って受け取っとけ」

自分も寒いだろうに、海は強がつて、そして格好をつけていた。

キモい。けど、海の体温を感じるのは…悪くない。  
しばらく、二人とも黙って空を見上げていた。

つぐの見つけた一番星以外にも、ポツポツと星が見え始めている。都会にしては良く見えている方だと思う。田舎だともっとすごい、満天に相応しい星空が見れるけど。都会の空も悪くない。

空を見上げる海の横顔を見て、あたしは口を開いた。

「海。なんか忘れてること、あるでしょ」

「忘れてること？」

目だけ一瞬こつちに向けて、すぐにまた空を見る海。

うーん、と考える仕草をして、そしてすぐに諦めた。

「分かん。中一の時に蘭に貸りた五百円返してないとか？」

「いつの話してんの？ …… 五百円は返して」

「あいあい」

財布から硬貨を取り出した海は、それをあたしに投げ渡す。なんで貸した五百円なのかはもう覚えてないけど、多分貸したんだろう。

って違う。そうじゃない。

ずっと空を見上げてる海を見ながら、あたしは質問を続ける。

「ほかに？」

「ほかあ？ …… ー、あー… …… ほんとに分かん。ヒント」

「… …… 誕生日」

「プレゼント貰ってねえや俺、お前から」

「バカ、やっと思い出した」

ヒントを貰ってから即答した海に、あたしは軽い悪態を投げつけてみる。

悪態をつくのは、あたし達の間ではコミュニケーションの一つだ… …… いや、違う。これはあたしが海に甘えてるだけ。どれだけ悪態をついても、海は受け止めてくれる。受け入れてくれる。そう信じてるから、あたしは海に遠慮しないんだ。

「え、なに。プレゼント渡すために付き合わせたの？」

「そう」

ほんとはちよつと話したいことがあったから。

けど、それは言わない。

海は盛大に息を吐き、脱力したかのようにしゃがみ込んだ。

「はくくくく… あく、心配して損した」

「心配？ なんの」

「いやお前さ、あんな感じで『ちよつと付き合っつて』なんて言われたら、なんか相談事でもあんのかと思うだろ」

「そんなことないと思うけど」

「そんなことあるんだよ。ま、何事もないんだっつたらそれで良かったんだけどな」

立ち上がり、一度伸びをしてからこつちを見る海。

なるほど。さつきまで重い雰囲気で、あたしと目を合わせようとしなかったのはそういうことか。

「それで？ 誕プレは何くれんの？」

『地獄の華道ドリル く狂気の常緑樹信仰編く』

「ま？」

呆けた声を出す海に、少しだけ笑いそうになる。

それを渡す前に、あたしは一つだけ質問をすることにした。

「海、今日はなんであたしたちと居たの？」

「は？」

さつきと同じ、海はたった一文字で疑問を表してくる。

そんな海の目を何故か見れなくて、今度はあたしが空をずっと見上げる側になってしまった。

「海、花咲川に友達たくさんいるじゃん。自分のバンドとか、ポピパとか、ハロハピだっているし… Roseliaとも、仲良いみたいだし」

「あ…なるほどそういう」

何かを納得したような声音だった。

顔は見えないけど、多分呆れた顔をしてるに違いない。そんな声だったから… 想像したらムカムカしてきた。

「俺たち六人の誕生日は、よっほどの理由じゃないかぎり全員揃って祝う。小学校からそう決めてるだろ？」

「別に決めてはないけど」

「細かいことはいいんだよ。ずっとそうしてきたってことだよ」

一息置いて、再び海が話し始める。

「まあ確かに、ポピパとかハロハピとか Roseliaとか、その辺から誕生日やろうって話は出てたよ。蘭の言った通り、仲良くはやってるつもりだしな」

「だったら」

「でも俺は、お前らと過ごしたかった」

遮るように、海が言葉を被せてくる。

「友達との仲の良さみたいなのにランク付けするつもりはないけどさ。俺にとつて何より優先すんのはお前らなんだよ。あ、別に付き合いが長いからつてだけじゃないぞ？ 楽しいんだわ。お前らと一緒にいる時が、一番な」

やけにはつきりと、ストレートに言葉をぶつけてくる。

普段の海は、中々自分の本心を明かそうとしない。その場の喜怒哀楽くらいなら出してくるけど、何を考えてるとか、そういうのは全然だ。

海がこうやって自分の言葉を紡ぐのは、たいてい、誰かのために腰を上げた時。

中学の時、あたしや、あたしたちにしてくれたみたいに。自分を曝け出した上で、あたしたちの深いところにまで入ってくる。だからこそあたしたちは海を拒まないし、受け入れたいくなる……のかもしれない。

「昔、モカにも言ったけどな」

海があたしを見てるのが分かる。

あたしは海を見ていないけど、海はしっかりとこつちを見てるみたい。本当に、さつきとは真逆だ。

「お前がどこにいても、俺が別の道に進んだとしても、俺たちは何も変わらないよ。呼ばれたら行って支えるし、俺だってお前を呼ぶ。必要不必要の話じゃないぞ？ そういうの関係なく一緒にいる。助けて、助けられる。それが、俺たちの『いつも通り』だろ」

思わず、海の顔を見てしまった。

そこにはとても柔らかく、それでいて温かい、「あの時」と同じ顔があった。

それはズルい。とつてもズルい。

羞恥やら歓喜やら、色んな感情が溢れて頬を染めようとしてくる。それを見られたくなくて、あたしはまた空を見上げた。

「…何言ってるの？ 恥ずかしい」

「……………」

急に黙りこくる。

多分、照れてるんだろう。海の本心はそこらの女子より断然ロマンチストだ。いわゆる詩的って感じのもので、海自身はそれを見せるのは恥ずかしいことだと思ってる。

まあ、トドメを刺したのはあたしなんだろうけど。

冷たい夜風のおかげで、頬の熱は引いてきた。

やっぱり屋上にきて正解だったな。

「誕生日プレゼント、やっぱりコレやめた」

言って、あたしは華道ドリルを取り出すことを止めて、次は空じやなく、鉄柵の向こうに広がる街の方を見る。

もう完全に夜に包まれた街は、昼間のように明るい光を放っている。

「誕プレなし？ いやまあ、俺は貰う立場だし文句は言わねえけど」

「違う。誰も無いなんて言ってる」

ちよつとだけ間を置いて、あたしは海を見る。

今からあたしが言おうとしていることは、多分、恥ずかしいことだ。

だから少しだけ緊張してしまう。でも、言いたい。あたしは海に、こう言いたくなった。

「あたしが、いつでも海を支えてあげる。そばにいてあげる。海の親友として、この先ずっと、『いつも通り』と一緒にいてあげる。それがプレゼント」

嘘。これは海へのプレゼントなんかじゃない。

あたしが、あたしのためにする宣言。海を離さないための、醜い欲



望。

恋愛感情なんかじゃない。それ以上の親愛、恋慕よりも強い友愛だ。

「お前なあ、別にそんなこと言われなくても、俺はずっとお前らと友達を——」

「違う。『海が』じゃなくて、『あたしが』海と一緒にいてあげる。そう言ってるの」

海と一緒にいたい。海と、そして幼馴染みのみんなと。ずっとずっと、一緒にいたい。あたしの、唯一の願い。

「なんつー上からな。あー、はいはい。そうだな、そうしてくれると嬉しいよ」

呆れたように、海は手をヒラヒラと振って答える。

投げやりな態度にちよつとだけムツとするけど。まあ良しとしよう。逆の立場だったら、あたしは海の横腹を殴ってる自信あるし。

「ほら、終わったんなら帰んぞ。あんま遅いと蘭の親父さんに殴られちまうし、何より風邪引く」

「寒いなら上着返すけど」

「いーよ、蘭より俺の方が頑丈だろ」

「何それ、バカにしてる？」

「ライブ前に夏風邪引いてダウンしたのはどこのどいつだ。ババンボ様がいなけりやどうなってたか。…」

「ババンボ様？」

そんな会話をしながら、あたしと海は屋上から降りた。

途中で警備員さんに見つかって怒られるアクシデントもあつたけど、それ以外は特に何事もなく帰路につく。

ここが安心する。

海がいて、モカがいて、巴と、ひまりと、つぐがいて。

あたしの世界が構築される。あたしの『いつも通り』が流れていく。ここが好きだ。絶対に失いたくない。誰にも壊させない。あたしの、『いつも通り』。

「海、さっきのプレゼント、忘れてりしないでね」

「あ？ あー、忘れないよ」

テキトーに返事をする海を、ちよつとだけ睨んでみる。

でも分かっている。海は、あたしたちとの約束を破ったりなんかしないし、あたしたちを悲しませることもしない。いつも、そうだったから。

ああ、そう言えば、あたしはまだ海に言っていないことがあった。

「ねえ、海」

「ん？」

今度はしっかりとお互いの目が合う。

街灯に照らされてキラキラしてる海の目を見ながら、あたしは少しだけ笑った。

「誕生日、おめでとう」

生まれてきてくれてありがとう。

あたしの、あたしたちの、大切な人。

やはり、俺の青春ラブコメは始まらない 前編

突然だが、『福引き』というものを知っているだろうか？

まあ知らない人はほとんどいないだろうが、福引きとは、「当たり」や「ハズレ」、または一定の景品があるくじ引きのことだ。

福引きは、デパートや縁日なんかの催しでよく目にするだろう。

そして、我らが地蔵商店街でも、その福引きという概念は存在する。まあ、福引きなんてそうそう当たるもんじゃない。良くて三等の商品券くらいだ。いや、それでも十二分に得なんだが。

一等の『〇〇旅行プレゼント』だったり『豪華・最新家電』だったり、そんなものはまず当たらないし、そもそも当たりが入っているのかも怪しい。

だが、それを込みで楽しむのが『福引き』だろう。何が出るのか分からないドキドキ、「もし一等が当たったら」という夢想や皮算用。

宝くじにも言えたことだが、これは本当に一等が当たることを心底望むのではない。いや確かに望みはするが、それ以前に、俺たちは“夢を買っている”のだ。

「お、大当たりいい!! おめでとうあんちゃん、一等の『箱根温泉旅行一泊二日』大当たりだ!!」

ふええ… (困惑)

? ? ? ? ?

「商店街の福引き当たった」

いつも通り、羽沢珈琲店の窓際の席にて。

C i R C L EでのA f t e r g l o wの練習に軽く付き合ったあと、新作のケーキを食べにきていた幼馴染みたちに向けて、俺は昨日あった出来事を話した。

「商店街の福引き？ ってアレか、一等が箱根旅行の」  
「それ」

「確か二等がご利益があるとかいう怪しい壺で、三等が地元銭湯の夕ダ券十枚だったよな」

巴は福引きの景品まで覚えていたらしい。

さすが『商店街のソイヤ』こと宇田川巴だ。いやそれ俺とモカしか言っていない二つ名だけど。

「それで何が当たったの!? 四等のチ○ルチョコの瓶詰めだったらちよつと分けて欲しいな、なんて」

「ひーちゃん、昨日『明日からダイエツトする』って言ってなかった？」

「うっ…」

明日から、って辺りが実にひまりらしい。それで三日と持たずにダイエツトに失敗するまでが形式美な。

「一等だよ。箱根旅行が当たった」

「なっ、マジか!？」

？ めちゃくちゃ驚くじゃん巴。まあ無理もないか。一等なんてそうそう当たるもんじゃな…

「あの福引きは一等なんて入ってないはずだぞ!？」

「おい待て」

今なんつった巴。

「あはは… いや、本当は入ってるんだよ？ でもいっつも、福引き開始五分くらいで長老さんたちが一等当てちゃうから」

今は長老さんたちぎっくり腰とか風邪とかで福引きどころじゃないんだよな、とつぐは言うが… えと… それは… それはどうなん…？

そういや長老たち、毎年この時期になると旅行行ってんなーとは思ってたけど、まさかそんな…。

ま、まあいいや。いやあんまよくないかもしれないけど、今は置いておこう。

「あー… んでな？ この箱根旅行、十人まで行けるんだってさ。うちの姉ちゃんが引率で来るんだけど、お前らも一緒に行かぬ？」

これが本題だ。

別に「俺一等当てたんだぜ！ いいだろ！」って自慢したかったわけじゃない。ほんとに。そんな気持ちは七割くらいしかないってだよ。

「箱根旅行かく。ちなみに日程はいつなの？ 海くん」

「来週。二十一と二十二日」

「あ、三連休のうちの二日間なんだ？」

「そう」

十一月二十一日と二十二日。こんな時期に箱根に行けるのはついでるとしか言いようがない。ちようど木々が紅葉し、見頃になっている頃だ。

芦ノ湖を横断する遊覧船なんか乗ったら凄いだろうなあ。寒いかもだけど。コート持ってこ。

それに、今回用意されている宿には露天風呂があるらしいし、近場の紅葉はライトアップされているようなのだ。夜桜ならぬ夜紅葉。うーん、風情風情。

「三連休かく。お店の手伝いの都合とかあるから、ちよつとお父さんに相談してみるね？」

「まじ？ ありがと。一緒に行けるといいな」

来週つてのがちよつと急だからなあ。もしかしたらみんな予定があるかもしれない。

「あたしは空いてる。花展が無くなって暇だったし、私行こうかな」

「モカちゃんもバイト、今リサさんに代わってもらったから行けるよ」

え、それはリサさんごめんさい。

「はいはい！ 私も空いてる！」

「アタシも空いてるぞ。十人、つてことはまだちよつと余裕あるよな

？ あこも連れてっていいか？」

「お、いいじゃん。人数多い方が楽しいだろうし」

三連休だし、Roseliaの練習と被んなきやいいけどな。Roseliaは、ってか友希那さんと氷川さんが練習の鬼だし、遊びに行くので練習休みますは通用しなさそう。

とまあ、そういうわけで。Afterglowの全員参加は決まった。

あこちゃんが来れたとして、今んとこ人数は俺と俺の姉ちゃん、Afterglow、あこちゃんの八人か。あと二人誘えるな。んー… 須田と五十嵐誘うか。

kai 『商店街の福引き当たった。一等の箱根旅行一泊二日』

kai 『今月の二十一と二十二日に行くんだけど、お前らも来ねえ？』

Yuta 『三連休か』

Yuta 『その連休は美穂みほん家うちの家族と俺の家族で京都行くから無理そう』

Yuta 『(ごめんね、のスタンプ)』

kai 『ばおん』

誠 『五十嵐はバルス』

誠 『俺も三連休はりみと遊ぶ約束しちゃった』

誠 『遊園地とか動物園とか行ってくる』

誠 『から箱根は無理。ごめんちよ』

kai 『お前に五十嵐をバルスる資格はない』

Yuta 『(がんばれ、のスタンプ)』

うーむ。あいつら青春してやがるなあ。

いやまあ俺もメンツだけ見たらハーレムみたいなもんだけど、全員身内みたいなもんだし…。いや、Afterglowつに文句はないけどさ。

まあとりあえず、須田と五十嵐は不参加、と。

ほかに俺が誘えそうな友達で、Afterglowともちゃんと面識があるやつらってーと。ポピパにハロハピ連中くらいかなあ。いやでも二人しか誘えない状況だし。。

ま、無理して十人で行かなくてもいいか。八人でも十分楽しいし。あ、でもあこちゃんが来るなら白金さんとか着いて来るかもなあ。

「……ん？」

そんなことをぼんやり考えながらホットコーヒーを啜っていると、ふと俺の視界に見覚えのある後ろ姿が目に入った。

近くの中学校の制服に身を包み、青みがかった白髪を肩口辺りで切り揃えた、どこか自信の無さげな背中。こちらに背中を見せてるから顔は見えないけど、あれは多分――

「あ、あの子。いつもバイト先に勉強しにきてる子じゃない？」  
隣に座っていたひまりがそう口にする。

それに答えるように、巴も記憶を漁るような間の後に「ああ、あの」と同意を示した。

「だよな、やっぱ。今日はここでやってんだ」

俺やひまり、巴のいるバイト先であるファストフード店に、週三くらいで通っている女の子。いつも奥の角っこの席でノートや参考書なんかを広げてる子だ。

何回か差し入れてシエイクとか持ってたっけなあ。店長の娘さんも今年受験らしくて、あの子のことも店長がずっと気にかけてるんだよな。

「あの女の子、羽沢珈琲店にもよく来るよ。夏くらいからだったかな？ 参考書持って、一日三時間くらい。いつもあの席に座るから覚えてるんだあ」

「ふーん。頑張るなあ」

今年三年なんだとしたら、もう二ヶ月もすれば試験本番だ。私立を目指してるならそこが山場だし、公立志望だとしても猶予はあと三ヶ月くらいか。

俺も去年、この時期は勉強めちやくちや頑張ったっけなあ。一応花咲川はA判定貰ってたんだけど、いくら勉強しても不安なもの不安

だったし。蘭たちはみんなエスカレーターだったからあんま勉強し  
てなかったけど。

ま、あの子がどこ受けるとかは知らないけど、頑張っつて第一志望に  
受かってほしいもんだ。陰ながら応援しておこう。

? ? ? ? ?

さて、日が経つのは早いもので、今日は十一月二十一日。つまり、箱  
根旅行出発の日になった。

集合場所は新宿。ここからバス、というよりキャラバンが出るらし  
い。

一泊二日ということで、特に多くもない荷物をリュックに詰めて俺  
は朝の新宿駅にいた。隣には缶ビールを片手に持った姉ちゃんもい  
る。

つーか今まだ朝の九時前だぞ。なんでもう酒飲んでんの。

「バッカね、あんた。冬でも結構な量の汗かくのよ?」

何一つ理由になっていないが、まあいい。潰れても世話してやんな  
いからな。

呆れた目で姉ちゃんを見てみると、改札の方から、やけに大きな  
キャリーバッグを引くひまりが手を振りながらやってきた。

「やっほー! おはよ、海! のぞみ希さんも、おはようございます!」

「ん。おはよー、ひまりちゃん。今日もかわいいね」

「え、ほんとですか!? うれしー! …… ってなんでもう飲んでるん  
ですか!」

「あのね、ひまりちゃん。冬も汗はかくの。水分補給を怠ったら死ぬ  
よ」

「す、水分補給…?」

いつからうちの姉ちゃんはこんな酒カスになってしまったんやろ  
か。おばあちゃん（九州人）の血かな。多分そうだな。

「にしてもひまり、その荷物どしたの」

姉ちゃんのカバンから出てきたウイスキーの瓶を見て引いていた



ひまりに、俺はそう言う。

「これ？ 旅行の荷物だけど」

「いや多すぎだろ。旅行つつつても一泊二日だぞ？」

「女の子には必要なものがたくさんあるの！ 希さんだって、カバン二つも持つてるじゃん！」

「姉ちゃんのアレは八割が酒だから」

「ええ………」

ドン引きじゃん。草。

その後つぐ、宇田川姉妹、少し遅れてモカ、と続々集まってきた。残すは蘭だけか。まあ別にまだ集合時間過ぎたわけじゃないんだけど、蘭がモカより遅いのは珍しいな。蘭モカは一緒に来るか、それかモカが遅刻すると思ってたんだけど。

キャラバンも到着し、荷物を荷台に詰め込み終わった頃。

俺が背中を向けている方から蘭の声が聞こえてきた。

「ごめん、お待たせ」

「あー、別に遅刻とかじゃないし全ぜ……ん……？」

振り返ると、そこには赤いリュックを背負った蘭がいた。

それはいい。むしろ蘭じゃなかったらなんだという話だし、荷物もリュック一つくらいでちょうど良いだろう。ほらひまり、蘭を見習え。

しかし。しかしだ。俺の予想にない存在がそこにはいた。

男だ。俺と同じくらいの身長で、眉が見えるほどの短髪。眼鏡を掛けていて、服装は和服とかいう新宿の特異点みたいな格好をしている。

そういう格好の他人が歩いていけば、「ああ、まあそういうのが好きな人なんだな」で終わる話だ。しかしながら、俺はその男を知っている。なんならこの場にいる全員が知っている。

その男は――

「おはよう。遅れてすまないね、準備に手間取ってしまった」  
蘭。パパだった。

? ? ? ? ?

「エビせんを買ってきたんだ。みんなで食べるといい」  
箱根に向かうキャラバン内にて。

言いいながらコンビニの袋を漁る成人男性、蘭パパ。

蘭パパの隣に座っていたモカがそれを受け取り、みんなに配っている。ふうむ、エビせんの塩気を含む香ばしい匂いが鼻腔をくすぐり――いやそうじゃなくて。

「(なあ、なんでお前の父ちゃんいるの)」

コソツと小声で蘭に問いかける。

エビせんを齧っていた蘭は一度それを飲み込み、小声で答えた。

「(いや、なんか今朝あたしが家出る時に箱根旅行行ってくるって言うたら『じゃあ父さんも着いて行く』って…)」

じゃあってなんだよ。

「それにしてもモカちゃん、蘭パパが来るとは思ってたんですけど」  
ポリポリバリポリとせんべいを貪るモカが、ふとそんなことを言う。

俺も蘭パパが来るのは知らなかった。一応主催者とか涉外っぽい立ち位置の人間なのに。宿との連絡取ってたの俺だけど、普通に八人で予約しちゃったが？ 蘭パパ野宿説ある？

「安心したまえ。宿泊施設には『大人一人追加で』と私から連絡してる」

「いや俺涉外を通せよ」

涉外の存在意義がないな、これ。

つーか宿も宿だよ。なんで部外者からの連絡受けて了承しちゃうんだよ。管理体制狂ってんのか。着く前から不安になったんだが？

「まーまー！ 大人があたし一人つてもアレだし、美竹さんに来てもらって良かったってことで！」

やや睨むような目付きで蘭パパを見ていた俺を宥めるように、姉ちゃんが明るく声を上げる。その手にはすでに空になりつつある

ビール缶が握られていたりするのだが、まあそつちは無視一択だな。来てしまったものは仕方がない。いて困ることもないだろうし。

蘭。パパから視線を外し、窓の外を見る。まだ東京から出ていないので目新しいものがあるわけじゃないんだが、まあ手持ち無沙汰ならぬ目持ち無沙汰的な？ 何も考えずに外を眺めていると、それはそれで暇が潰せるものだ。

それにしてもさつきからエビせんのいい匂いが気になるな。朝飯はちゃんと食ってきたんだけど、少し小腹が空いた。エビせん食べた

い。  
「はい、海！ エビせん、クズを落とさないようにね」

「ん、あり」

ひまりがそう言つてエビせんを渡してくる。

うーん、美味しい。これは甘い系の炭酸飲料が飲みたくなるなあ。

「はい、海！ 私のファ○タオレンジあげるっ」

「ん、あざす」

ひまりの飲みかけだったペットボトルに口を付け、中のファ○タを流し込む。口や喉を刺激する炭酸が心地いいな。

十年も付き合つてきてる幼馴染み同士だと、それが例え男女であっても間接キスなんて気にしなくなるもんだ。蘭だけは未だに気にしてるっぽいけど。純情なやつめ。

「相変わらず、ひーちゃんと海はひーちゃんと海ですなあ」

？ 何いってんだろ、モカのやつ。

巴やあこちゃんまで深く頷いちゃったりして… え、何やめて蘭、痛い痛い、肩殴らないで。車内で暴れんな。

こうしていつも通りつちやいつも通りな俺たちを乗せ、キヤラバンは箱根へ向かうのだった。

？ ？ ？ ？ ？

キヤラバンに揺られること数時間。

道中の山道で蘭パパが車酔いするとかいう出来事はあつたが、概ね無事に俺たちは箱根の宿に辿り着いた。

箱根の空は青々としていて、雲が疎らに浮いている。

よく晴れた秋空だ。うん、悪くない。風がちよつと冷たいけど、日が照ってるから体感気温的にはめっちゃくちゃよいな。

今回俺たちが泊まるのは、芦ノ湖から少し離れた、仙石原の宿だ。宿の本館ではなく別館に泊まるのだが、丸々一棟を貸切にするという中々豪華なプランとなっている。たかだか商店街の福引きの景品だつてのに金かかつてんなあ。長老たちの力か。それとも弦巻家が一枚噛んでるのかな。

部屋は全部で四部屋。いくら幼馴染みとはいえ一緒に部屋の泊まるわけにはいかないし、部屋数が多いことはシンプルに感謝した。

チエツクインを済ませ、それぞれ部屋に荷物を置きに行く。荷物を持ちながら歩き回るのはキツイからな。特に姉ちゃんとひまりは。だから先に荷物を部屋に置こうって話になった。

ちなみに、部屋割りは俺・蘭パパ、姉ちゃん・ひまり・つぐ、宇田川姉妹、蘭・モカというもの。まあ夜はみんな一部屋に集まって遊ぶだろうし、俺と蘭パパ以外は部屋割りなんて関係なさそうだけどな。「それじゃー親父さん、俺ら観光行ってくるんで。水とおにぎり、机の上に置いときますから元気になつたら食べてください」

「わ、私も蘭と一緒に観光を…！」  
「いや無理でしょ」

俺の敷いた布団の上にぐったりと横たわる蘭パパを見て、俺はそう言う。

車に酔った蘭パパはそのまま回復することなく、今も顔は真っ青で、心做しか頬も痩けている。道中二回も吐いたんだ、体力も無くなっているだろう。いや、ちゃんと車止めてもらって、降りてから吐いてたのは偉かったけども。

宿に着いてからも、動けなかった蘭パパを俺が背負って部屋まで運んだのだ。そんな人がこれから観光になんて行けるわけがない。大人しく寝てほしい。

「観光は明日もしますし、今日は休んでください。もし日の高いうちに元気になったら、連絡してくれば現在地のマップ情報送るんで」

「私は元、気……」

「寝てろ」

「こちらに手を伸ばす蘭パパにそう言い、俺は部屋を出る。」

「あ、海。父さんどうだった？」

部屋を出てすぐに蘭と会った。

後ろにはチュツパチャプスの棒をピコピコさせているモカもいる。

「ダメ。まあただの車酔いだしそのうち元気になるかもだから、後で合流できりや上々って感じだな。知らんけど」

「なんかごめん、迷惑かけて」

「蘭が謝ることじゃねーだろ。車酔いは別に親父さんが悪いってわけでもないし、誰も悪くねえよ」

「まー、しいて言えば蘭パパの三半規管が悪かったよねー」

「確かに」

「間違いない」

駄弁りながら、俺たちは別館を出る。

外には蘭パパを除く全員が集まっており、何やら話をしているところだった。特に団体行動をしようなんて話はなかったんだが、みんな蘭パパの容態を気にしているのだろうか？

「おまたせ」

そう一声かけて輪に入り、最初に蘭パパの不参加をみんなに伝える。

「まあ残念だけど、仕方ないよな」

巴がそう締めくくり、この話は終わりとなった。

せっかく箱根まできたんだしな。蘭パパには悪いけど、ここは気を取り直して羽を伸ばさせてもらおうじゃないか。

「とりあえずどうするよ？ みんな好き勝手に動くでおっけー？」

目一杯楽しもうと決め、今後の行動はどうしようかとみんなに問う。

俺としては自由行動が一番好ましい。この人数で団体行動ってな

ると、ちよつと面倒だしな。せめて二手に別れたい。

「そうだね。芦ノ湖は明日帰りに行く予定だし、今日のところは自由行動がみんなやりやすいんじゃないかな？」

つぐの一声で、今日はそれぞれが自由に行きたい場所に行くことになった。

聞けば、宇田川姉妹とつぐはロープウェイに乗って紅葉を見に行くらしい。姉ちゃんは…

「ああ、私は宿に残るよ。さすがに美竹さん一人残しては行けないしね」

酔った「モノ」こそ違うものの、同じ酔っ払い同士。少しは面倒を見ることにしたらしい。偉いな、ちゃんと保護者してるじゃん。保護対象は大の男だけでも。

さてさて、そんじゃ俺はどうしようかなとスマホを開く。

正直な話、箱根についてそんなに調べてはいないのだ。だからどこが観光名所なのかとかも知らない。箱根つて温泉と芦ノ湖のイメージしかないんだよな。あと不倫旅行。

というわけでここはグ○グル大先生に相談してネットの海から情報を攫おうとしたところで、ひまりが声をかけてくる。

「ねえ海！ 今日私たちと一緒に回らない？」

「たち？」

「うんっ！ 私と、蘭とモカ！」

ふーむ。まあ蘭。パパの体調が治ったら蘭の現在地教えるって言ったしな。一緒に行動してた方が都合はいいか。

「ん、おけ。どこ行くか決めてんの？」

「星○王子さまミュージアム!!」

へえ。そんなのあるんだ。

マップで調べてみたら、案外近くにその星○王子さまミュージアムはあった。

「バスも出てるっぽいけど… 徒歩でも行ける距離だな。二kmくらい」

「じゃあ歩いていこ！ 天気もいいし、散歩も兼ねて！ 蘭もモカもそれでいいよね？」

「モカちゃんは大丈夫。むしろ賛成」

「あたしも、別に」

まだまだ日は高い。

道中は色鮮やかな紅葉や、茶色に染まった草木なんかも多く見れるだろう。これで寺なんかあれば風流なんだが……いや、温泉があるだけで十分風流だな。

それに今回泊まる宿は、夜紅葉がライトアップされている露天風呂を売りにしている宿だ。普通の温泉よりも、目で楽しむという点では勝っているだろう。楽しみだなあ。実は俺、温泉ソムリエとかいう資格擬きを取るくらいには温泉好きなんだよね。

夜の景観に心を踊らせつつ、今は目の前の観光を楽しむため、ひまわりたちと共に歩を進めた。

やはり、俺の青春ラブコメは始まらない 後半

『星〇王子さま』は、サンIIテグジュペリが手がけた小説作品だ。

この作品は「子供の心を忘れてしまった大人へ向けた物語」だというが、サンIIテグジュペリ本人は「一人の友人に贈る物語」だと述べている。遠く離れて暮らす友人だけに向けた物語である、と。

この物語は、操縦士であった「ぼく」が砂漠に不時着してしまい、そこで王子である不思議な少年に出会う話だ。作者であるサンIIテグジュペリ氏本人も砂漠に不時着して生死をさまよった経験があり、その経験を神秘化、ヌミノース体験として執筆したものだという話も聞いたことがある。

そんな作品に出会ったのは、俺が中学にあがったばかりの頃。当時の俺は、そりやあもう、ひどくこの作品に浸かり込んだもんだ。

最初は『ヒツジの絵』のシーンとか、本当に意味が分からなかった。王子のダメ出しには「自分が描いてって頼んでんのに何言ってるんだこいつ」程度に思っていたのだが、一度読み終え、二週目、三週目としていくうちに、「本当に大切なものは目には見えない」というメッセージを理解した。

いやあ、あの時は感動したなあ。それとタメになった。

あの頃は蘭が荒れてたからな。クラスが別になつたくらいで、なんて思いもしたが、蘭にとってはクラスという「目に見える」繋がりを失って動揺してしまっただろう。

グレた蘭に「目には見えなくても、大事なものはそう簡単に無くならない」とか、知ったような口を利いたっけなあ。

… うーん、今思い出すと俺めちゃんこ恥ずっこいこと言っていない？ 実は蘭から引かれてたりしたらどうしょ。とりま首でも吊ろっかな( )



とまあ、そんな懐か恥ずかしエピソード回想と急激に襲うヘラ気分  
に苛まれつつ、俺はひまりたちと一緒に、わりと楽しみにしていた『星  
○王子さまミュージアム』を一通り見て回った。回ったんだが…

「いやこれ、『星○王子さま』ってより『サンⅡテグジュペリ』ミュー  
ジアムやんけ」

園内のレストランにて少しばかりお高めのレストランを食しつつ、俺は  
ボソツと不ま…んんっ、感想を漏らした。

「ん…まあ確かに、『星○王子さま』って感じじゃなかったよね。  
その…さんたじゅペリ？って人の伝記みたいなの、多かつたし」

俺の感想に便乗するように、ひまりも苦笑い気味に言う。

「あたしは別に。そもそも、あたし小説の内容ほぼ知らないし」

「モカちゃんは楽しかったよ。まあ欲を言えば？バラ園とか紫陽  
花園にもつとちゃんと華が咲いてたらな…って感じ」

「バラはともかく紫陽花は仕方ねえだろ、今十一月だぞ」

バラは種類によつちや秋も冬も咲いてる。大塚駅のバラロードだ  
か何だかに咲いてるの見たことあるし。

まあなんだかんだ言っても、別に不満だけがあつたわけじゃない。  
ちゃんと星○王子さまの世界観もあつたし、サンⅡテグジュペリの話  
も面白くなかつたわけじゃない。ただまあ、もつとこう、ファンタ  
ジー要素バリバリのテーマパークだと思つてたから…。

とりあえず昼飯を腹に入れた俺たちは、ミュージアムを後にする。

「さて、次はどこいくか」

水分確保のために近くにあるらしいコンビニを目指しつつ、そう問  
いかける。

時刻は午後の二時。まだまだ昼と呼べる時間帯だ。このまま宿に  
帰るのは少しもつたない気もする。

俺としてはユネッサンっていう温水プール完備の温泉施設が気にな  
ってはいるんだが、今回俺しか水着持ってきてないしな。

「…あ、これ行きたいかも。ガラスの森美術館」

スマホを弄っていた蘭が、その画面を俺たちに見せてくる。

ふむ…。日本初のヴェネチアン・グラス専門の美術館でヴェネチアン・グラスの名品を中心に約100点を展示、四季折々の花々とガラスのオブジェが楽しめる庭園や、世界各国のガラス製品を集めたミュージアムショップ…。か。

「うん、いいじゃんそこ。俺もそこ行きたい。ひまりとモカは？」

「私はいいいよっ！ ガラス綺麗だし、実は私もちよつと気になってたんだ〜」

「美味しいお茶や料理を楽しめるレストラン…。ほうほう、ハイカラな施設だし、美味しいパンも置いてるかも？」

「ハイカラてお前」

「っーか今昼飯食ったろ。モカの腹は底なしか？ いや底なしだったな。カロリーとかは全部ひまりに行ってるんだっけ。」

「え、なんで海は私のことそんな可哀想なものを見る目で見るの…？」

「いや別に」

「どれだけダイエット頑張っても他人からカロリー強制供給されるひまりさん可哀想。」

「ちなみにここで『ダイエットとかしなくてもそんな太ってないじゃん』とか言っつてはいけない。男には分からない女の事情があるのだと、昔姉ちゃんが言っていた。」

「俺としては少しくらいムチムチしてる方が好みではあるが、まあそんなものは所詮俺の好みでしかない。世の女性が俺のために痩せたり太ったりしていると思ったら大間違いだ。」

「ひまりの彼氏でもないただの幼馴染みな俺が、ひまりの肢体の肉付き事情に口を出す権利なんてない。」

「ただまあ、これくらいは言わせてもらおう。」

「俺は今のままのひまりが好きだよ」

「ぴっ?!?!」

「蘭に三発殴られた。」

?? ? ? ?

時は進み、もう日も落ちてきた夕暮れ時。

ガラスの森を楽しみ、強羅公園を散策して満喫した俺たちは、宿へ戻ってきていた。

途中のバスで巴たちと合流し、わいわい喋りながら宿へと入る。

「つかあれだな、車欲しいな。箱根広すぎ。免許取ったら車でこよ。一人旅なら原付でもいいか。あれって十六歳から取れるんだっけ？俺もう取れるじゃん。金貯まったら取ろうかな。」

費用はあとで調べることにして、とりあえず駄弁るために姉ちゃんと蘭パパがいる（であろう）部屋へみんなで向かう。

結局蘭パパが復活したっていう連絡はこなかったけど、生きてるかなあの人。

「あゝ、おかえりいゝ」

部屋に入ると、姉ちゃんの間延びした声が聞こえてくる。

「姉ちゃんめ、だいぶ酔ってるな？」

「蘭パパは……こつちに背を向けてはいるが、座椅子に座っている。その程度には回復したということだろう。」

「だとしたらこんな酔っ払い押し付けちゃって申し訳ねえな。」

「ただいま。蘭パパ元気になった？」

「げんきげんき、ちよーげんきつ。ねーっ、みたけさあん？」

「そう言う姉ちゃんは、蘭パパと肩を組む。」

「おい姉ちゃん、その人も一応男だから距離感考えろ。」

「ほら見ろ、蘭パパだつて色々当たってるからなかなか動けず……」

「蘭パパ？」

「……………ヒック」

「蘭パパが静かだ。」

「まあ普段からうるさい方ではないんだが、それにしても静かすぎないか？」

「蘭と観光できなかつたことに嘆いているものだと思っていたのだが、聞こえる声といえば小さいしやつくりくらい……しやつくり？」

「……姉ちゃん、蘭パパほんとに元気？」

「え〜？ だから元気だつてえ〜！ お酒もほらっ、こんなに飲めるくらいげんきっ！」

「こんなにな… ってこれ全部飲んだの!？」

後ろから部屋を覗きこんだひまりが声をあげる。

俺も言われてから気付いたが、床に転がっている空き缶の数は十を超え、さらに日本酒らしき空き瓶も五、六本ある。

これを姉ちゃん一人で飲んだとは考えづらい。彼氏に浮気されたとかでヤケ飲みしてた時のペースから考えても、姉ちゃんが飲めるのはせいぜいがこれの八割程度。

つまり、少なくとも日本酒一升瓶程度は蘭パパが飲んでいるということ。え、待って俺らが観光してた時間って五時間もないよ？ その短時間でこれだけ飲んだの？ 嘘でしょ？

「ちよ、蘭パパ大丈夫!？」

「だから大丈夫らつて〜！ 姉ちゃんを信じなっ！」

「うるせえ酔いどれ！」

慌てて蘭パパに駆け寄る。

こつちに背中を向けていて見えなかった顔を覗きこみ、絶句した。

「… ヒック… ウプ… ウウ…」

「ひまり水う！ 水持ってきて！ あと袋！ 袋!!」

顔色真赤こえて真紫じゃねえか誰だこんなになるまで飲ませたの

！ 俺の姉ちゃんだよバカヤロウ！（焦り）

? ? ? ? ?

蘭パパの介抱も終わり、夕食を食べた後。

蘭パパを部屋で寝かせ、俺たちはひまりたちの部屋に集まり人生ゲームをしていた。

『縁起を気にして左足から玄関を出てみた。五百円を拾った』だって！ やったー!!」

ひまりが大袈裟に歓声を上げ、五百円を獲得する。

つーかどういいうマスだよ、縁起が小せえよ。

この人生ゲームの参加者は七人と大所帯だ。

俺、ひまり、蘭、モカ、つぐ、巴、あこちゃん。

姉ちゃんはだいたい酔ってめんどくさくなってたから蘭パパと同じ部屋に投げてきた。布団敷いて部屋暗くして安眠アロマスプレーでもぶち撒いとけば酔った姉ちゃんは簡単に寝る。

異性（蘭パパ）と同じ部屋？ そんなん知らん蘭パパをあんなにしたら姉ちゃんが悪い。絶対に無いとは思うけど万が一何かあっても全部姉ちゃんのせい。……いや普通に嫌だな、自分の姉ちゃんと幼馴染みの父親との間で十二かがあるの。あとで様子だけ見に行こ。

ゲームを初めてかれこれ一時間が過ぎていた。

そろそろゲームも中盤。みんな大人になり、社会の荒波に揉まれてきている。

「次はあたしか！ それっ……ちえっ、一マスか。なにになに……げえ!! 株価暴落したあ!」

「え!?! ど、どうしようお姉ちゃん、あこたくさん株買っちゃったよ!?!」

「だからあたし、株はやめといたらって言ったのに」

女子高生が株株言ってるのちよつと面白いな。

「それじゃあ次は私だね。えいっ……やった、六マスだ！ えつと……ああ! 『会社が倒産した挙句、ヤケでやった競馬・パチンコは両者とも大負けして破産! 全財産を失い、さらに詐欺にも遭い借金三百万円! 一回休み!?! わ、私今まで真っ当に生きてきたのに!?!」

「つぐは一流大出て大手メーカーに就職してたのにね。人生、何が起こるか分かりませんなあ」

ギャンブルに逃げるつぐとか絶対に見たくねえ。現実でもしそうなったら墮ちる前に俺らが面倒みてやるからな。

「それじゃあ次あたし。よつと……三マス。なにになに? 『詐欺に遭うが反撃し、詐欺師から一千万騙し取る』だつて。えへへモカちゃん大金持ちになっちゃった」

「詐欺師騙すとかなんだよそれ。普通に宝くじ当たるとかで良かった

ろ」

「いやでも、モ力なら詐欺師なんかのらりくらり躲して、騙される前に騙し取りそう」

「いや、蘭にそこまで褒められると照れますなあ」

「褒めてないし」

「なんだこの人生ゲーム。社会の荒波が過ぎるだろ。もう少し易しくあれよ世界。」

「次、海の番」

蘭に促され、いやいやながらルーレットを回す。

いや本当にもう辞めたいんだけど。しんどくなる予感しかない。

ルーレットが止まり、針が指した数字は五。

俺は自分の駒を五マス進め、辿り着いたマスに書かれている文を読み上げる。

「えく… 『結婚詐欺に遭い、五千万円を失う』ってこの人生ゲーム詐欺師多すぎだろいい加減にしろ!!」

「つか五千万で！ 破産どころか一気にドンケツだが!？」

「まあ、確かに海は騙されそうだな。悪い女に」

「あこもそう思う！ 紗夜さんも『関口くんは壺とか買っちゃいそうよね。守らないと』って言ってた！」

「えっ」

何それ詳しく。

え、俺そんなに騙されやすそう？ そういうオーラでも出てるの？

自分で言うのもアレだけど、俺わりと利口な方よ？

「てかあこちゃん悪い女知ってるのか世も末だな、あと氷川さんはなに？」

「大丈夫だよ海！ 私、頑張るから！」

「いや何をだよ」

何かを頑張るらしいひまりはフンス、と力む。

「いや本当に何を頑張るの。弁護士にでもなって詐欺から守ってくれるの？」

「とりあえず海は彼女とかが出来たらあたし達に報告して。ちゃんと

見定めるから」

「モカちゃんに任せなさい。定めちゃうよ、剪定しちゃうよ」

「私も、責任持つてその彼女さんが海くんに対応しいか見極めるからね！」

なんの責任があるってんですかね（困惑）

まあこいつらは家族みたいなもんだし、兄妹の恋人が気になるアレなのかもな。俺も姉ちゃんに彼氏できた時はめちやくちや気になったもん。彼氏さんが姉ちゃんに幻想抱いてて、それで付き合うことでそれがぶち壊されてないかなって。

姉ちゃん外面はいいからな。顔とかスタイルもそこそこ良いし、中身を知らなかったら男が惚れても仕方がない。

… ってそうじゃないんだわ。

ゲームと現実をごっちゃにしてはいけない。さっさと次行こう次。

「蘭。次お前」

「ん…… 『父親が詐欺に遭い、三千万失う』」

詐欺多すぎんだろいい加減にしろ（憤慨）

？ ？ ？ ？ ？

人生ゲームはなんやかんやであこちゃんの圧勝で幕を閉じ、夜が更ける。

寝る前に風呂に入ろうということ、みんなで浴場へと向かった。みんなと言っても、当然のように男女は別れている。今日は俺たちの貸切らしいし、入口まではひまり達と一緒にいったから、ラブコメ漫画でよく見る『なんやかんやで全裸の女子と遭遇！』なんてラツキースケベは発生しない。

つーか発生しないでほしい。顔見知りの女子の裸なんて見た日には、気まずいなんてレベルじゃない。顔を合わせられなくなるくらいどうしていいか分かんなくなりそうだからな。

幼馴染みの裸なんか見たくもない。どうせ見るんなら面識のない

年上のお姉さんに限る。いや別に覗きとかはしないけど。

妙なことを考えながら、体と頭をサツと洗い流し、浴槽に浸かる。

露天風呂ではなく、内風呂だ。露天風呂もあるにはあるが、それは本館の方で、貸切ではなく大衆用。てつきり露天も貸切だと思っただんだが、さすがにそこまでの贅沢はないらしい。いや十分贅沢だけど。

別に露天に行っても良かったのだが、せっかく貸切なのだからとこちらにきた。

「わ〜！ こんな広いお風呂貸切なんてすごいね！」

明日の朝方に露天に行ってみるのもいいかな、となんとなく考えていると、そんな声が響く。ひまりの声だ。

発生源は壁の向こう。つまり女子風呂だ。壁はあるものの天井付近は繋がっているため、あちらの声も聞こえてくる。

頑張れば覗けなくもないだろうが、本当に幼馴染みの裸なんて見たくない。興味がないわけじゃないが、今後を考えると絶対に嫌だ。姉ちゃんの裸を見るのとはわけが違う。

「あ、天井となりと繋がってる。おーい、海〜！」

声が届くことに気付いたひまりが声を張った。

うるせえ。そんなに大声出さなくても聞こえるっての。

「何」

無視する理由もないし、十分聞こえるであろう音量で返答する。

「そっちどう〜？ 広い〜？」

「まあそこそこ。そっちと違って完全に一人だし優越感パない」

「いいなく！ 私もそっち行きたーい！」

「はあ!? バツカお前来るんじゃねえぞ！ 絶対来るんじゃねえぞ!？」

フリじゃないからな！」

ひまりのアホならやりかねない。男と女つてのをしつかり意識してくせにたまにぶっ飛んだ行動に出るアホピンクは信用ならない。思わず声も荒らげるってもんだ。なにせ前科があるからな。

あれは忘れもしない、中学の修学旅行で京都に行っていた頃――

「海、うるさい。ひまりも」



なんか普通に蘭に怒られたんだが。

「つーかお前らはちゃんとひまり見張つとけよ。マジで。中学の二の舞は御免だからな。」

「ひまりく、はしゃぐのはいいけど、中学ん時みたいに海に迷惑かけるなよ〜」

「ちよ、やめてよ巴！ その話はもうしないって約束じゃーん！」

「？ ひーちゃん、中学の時に何かしたの？」

「あこは知らないか？ まあ同学年のやつしか知らないのか。ひまりのやつ、ひまりとは思えない小賢しさで——」

「とーもーえー!!」

あれは悲惨な事件だった。

今とは違い、ひまりも中学ん時は色々そうでもなかったから事なきを得たが、今されると俺は理性を失う自信がある。幼馴染み？ 今度の関係？ 知らんよ。男子高校生舐めんな。

いやしかし、ひまりはとても実つたものだと思つて思う。中学卒業間際に突然変異したのだ。当時は男女が湧いた。

もし成長痛なんてものが存在するなら今頃ひまりはショック死していたかもしれない。いやマジで、冗談抜きで一週間くらいでのピフォーアフターだったからな。人体の神秘だよ、うん。

「海！ 今変なこと考えたでしょ！」

「カンガエテナイヨ」

女の勘つてやつはどうしてこう…。

「最低」

「海のへんたい〜」

「え、えっちなのはダメだと思ふな！」

女つてのはどうしてこう…！

蘭のわりと本気っぽい侮蔑は慣れてるし、モカは…ちよつと分からんけどそこまでいろいろ考えての言葉じゃない。そこは許容しよう。

ただつぐの発言はダメだ。ぴゅあぴゅあはーとなつぐからの「メツ」は罪悪感とか嗜虐心とかが胸に響く。なんで嗜虐心刺激され

ちやつてんの俺意味分かんない、変態かな？（変態）

まあいいさ。言葉にしない妄想のうちには全てが許される。いや幼馴染みでそういう妄想はあんましたくないけど。どうせするなら年上の以下略。

「わ〜！ ひーちゃんのおっぱい、ほんとにおっきいね！」

「ちよ、あこ〜！ ダメだつてそんなに揉んじや… ほんとに、ん… ダメ… あつ」

流れ変わったな。

露天行こ（逃避）

そそくさと浴槽から上がったところで、男風呂の入口が勢いよく開け放たれた。

「海くん！ 話は聞かせてもらった！ おじさんもえつちなのはいけないと思うぞ！」

流れ変わったぞ（二回目）

なんか蘭パパが全裸で浴場入ってきた。

なんだテメエ蘭パパテメエしやんな。

つーか何の話を聞いてきたんだつてかキヤラブレてんじやねえか酒残つてんだろ寝とけあとほんと酒入った状態で風呂とか危なすぎるからマジ帰れ寝ろこつちくん（怒涛）

いつそのこと殴り倒して強制連行でもするかと早まろうとしたところ、隣の、つまり女風呂の方から勢いよく扉を開く音がした。

「海の性癖と好きなA○女優知りたい人この指とーまれっ！」

流れ変わったぞ（三回目）

隣の浴場から姉ちゃんの声が聞こえてくる。

まてまてまてまて、おいまて姉貴早まるな。話せば分かる。つーか俺悪くないでしょ何もなくて突然窮地に立たされてんの意味分かんないこの場は誰も悪くないはずだ強いていうなら蘭パパが悪いもうホント何もしないで。

え、てか何これほんと何これ？ え、助けて千聖さん！（混乱）

（――『女の敵は修羅場に圧されて死んじまえ』）

どおうしてだよ千聖さん!!（シ〇ジくん）

「お、ひまりちゃんは想像通りだけどモカちゃんまで聞きたいの？  
海の性癖。いいねいいね、我が弟ながら面白いことになってんじゃないの？」

「海の弱み握っておけば、またパンとかゆすれるんで」

「僕が何をしたって言うんだ！（ほんとに何もしてない）」

「い、いや待て、落ち着け。そもそもだ。別に俺の性癖や好きな女優が暴露されたって何も問題はない。そう、俺はいたってノーマル。模倣的な性欲の持ち主だ。模倣的な性欲ってなんだよ（自問）」

とにかく、暴露されたって「ふうん、男子ってほんとバカ」程度で終わる話。あとで母さんに姉ちゃんの所業を報告して叱ってもらえばいいだけの話だ。いやお母さんはダメか。どうしてマイダディは単身赴任なんてしてんの、マジ秒で帰ってこいユアサンの頼みだ。「みんな何だかんだ知りたいだろうし言っちゃおう。我が弟はね、わりとドよりのM——」

「さすがに待てやクソ姉貴!!!」

「大ボラ吹くな！俺はMじゃない、決してMじゃないぞう!!？」

「……………ないよね？（不安）」

「海くん……」

何か同情でもしてくれたのか、蘭パパが微笑を浮かべてこちらを見ってくる。いやなにわろてんねん。

パーではっ倒してやろうかと思いついて蘭パパを睨むと、なんとも朗らかに微笑む蘭パパが、教えを説く神父のような和やかな声で言うてる。

「『ドMの道』は甘依存」

「寝てろ、永遠に」

トーンで蹴った俺は決して悪くないはずだ。

？ ？ ？ ？ ？

その後逃げるようにして俺は部屋に籠った。

中から鍵を掛けて引き籠った。心配したひまり達が「大丈夫、私達

はどんな海でも受け入れるよ」なんて優しい言葉を掛けてきて枕を濡らした。嬉しさとかじゃなくて悲しみの涙だけだ。

翌日も死んだ目で箱根を観光し、家へ帰った。

みんなの慰めが心に染みだ。虚しさでいっぱいだ。

俺は一週間自室に閉じこもった。

## 12月の北海道の海は冷たい

十二月になった。

十一月末の記憶はほとんどない。引きこもってたからな。

一週間の療養（自治）を経て、俺は無事に社会復帰を果たした。

一週間も休んだせいでクラスメイトや担任教諭に心配され、こんな俺でも心配してくれる人がいるんだと安心を得たのもつかの間。

「はいっ！ という訳で私達Pastel\*Paletteは今、北海道にきていますっ！」

どういう訳だつてばよ。

??????

「さっむーい!! アハハ、雪冷たーい！」

キヤツキヤとはしゃぐ日菜さんを横目に、俺は雄大な青空を見上げる。

東京から飛行機で約一時間半。新千歳空港に着き、そこからさらに車で六時間ほどかけ、俺たちはサロマ湖周辺へと来ていた。

東京と違い、ここ北海道は空が低く広い。遮るものが何も無いからだろう。

二日前に降ったという雪が未だ解けることなく積もっており、空から視線を落としてみれば広大な銀世界が視界を覆う。

東京生まれ東京育ちな俺は、この壮大な景色を前に心洗われる。いや別にビル群が嫌いとかじゃないけど。あれはあれで趣があるし。

大きく息を吐き、外気を吸い込み肺へ送る。冷たくも新鮮な空気が

体を巡るこの感覚。うーん、いとエモし。

長時間乗り物に乗っていたことで凝り固まった体をほぐすために一度大きくノビをする。

…さて、どうしてこうなった。

一旦落ち着いたところで考えよう。一体どうして俺は北海道なんかにいる？

土曜日の朝。そう、土曜日の朝だった。

バンド練もバイトもないってことで散歩にでも行くかと家を出たんだ。

そしたら家の前になんか見知らぬ大人たちがいて、弦巻家の匂いに似たものを感じたからそつと逃げようとしたんだけど見つかって… 気付いたら飛行機乗ってたな。機内アナウンスで行き先知ったくらいだし。

焦り散らして暴れそうになったところを千聖さんに羽交い締めにされて… ああそうだ、なんでか左側の席に千聖さんが座ってたんだ。右側は丸山さんだった。

え… 推しが隣に… というか肌が触れて… トウク… ってショートしてる間に何も分からないまま飛行機降りて、車に積まれて…

え、何これただの誘拐じゃん？

助けて国家権力。

と、スマホが揺れる。

見てみると、お母さんからのLINEだった。

『パスパレの収録、日給一万五千円で二日間収録だからファイト(？・？・？・??)』

何それ知らない。

え、てか待って二日間収録って何？ 今日(土曜)はもうやらないとして、明日明後日でやるってこと？

え、日曜はプリ○ユア見なきやだし、月曜は普通に学校なんだけど。『学校には連絡したから、傷跡残してきなさい(？・？・？・??)』

顔文字やめろ（微ギレ）

「つーか傷跡ってなんだよ。俺別に芸能の道目指してるわけじゃないんだが？」

抗議の電話でもかけてやろうとしたところで、見覚えのある男が近付いてきた。

「パスパレの事務所の人か。名前は… 確か御剣光輝みつるぎこうきとかだったな。ラノベの主人公みたい。

「お疲れ様、海くん。顔色が悪いけど、乗り物酔いでもしたかい？」

「拉致られても顔色一つ変えないのは弦巻家のお嬢くらいっすよ」

「あっはっは、それもそうか」

「拉致って部分は否定しないのか（唾然）」

本気で国家権力に通報してやろうかとするのを、御剣さんの言葉が防ぐ。

「いやあ、悪いね。うちも数字が欲しくてさ」

「数字？」

「そ。この前のライブでのパスパレと海くんの絡み、とつても好評でささ」

「嘘でござる。絶対に嘘でござる」

怖くてエゴサとかはしてないけど、受けがあまり良くないのは自覚してる。

自分の推しと絡む一般の男なんてファンが許すわけないだろういい加減にしろ！

未だ家特定されてないのが不思議なくらいだわ。裏で何か大きな組織が動いているとしか思えない。

「いや、ほんとほんと。ファンレターにも書いてあったよ？ 例えば… ほらこれ、言ノ葉世界さんからのレター」

なにそのペンネーム。腹刺されたり裂かれたりしそうだな。

おずおずとファンレターを受け取り、開く。

『あの男は誰ですか？ どうしてパスパレと一緒にいるんですか？』

『あの男誰よ！』『ねえこの手紙見てるんでしょ？ 返信してよ』

「帰ります」

え？ いやいやいや、怖い怖い怖い。え怖い。

H A R A K I R I (他力) 案件じゃないっすか弦巻家に匿ってもらわなきゃ。

「まあまあ。安心してよ、海くん」

「安心なんかできるわけないだろ!？」

「つーかどこが好評よ！ まんま脅迫文じゃない！ 不満バリバリじゃない！ もういや、国際権力(弦巻家)の元に帰らせていただきます！」

「いやね？ その言ノ葉世界さんって子、顔も住所も割れてるんだよ」

「何一つとして安心出来る材料じゃないし、なんなら事務所への不信感が募る情報だな。え、いくらヤベーオタ相手だとしても、一ファンの住所おさえてるってどういう事よ。」

「毎度髪色をパスパレカラーに変えてくる派手な子でね。ライブにもほぼ一番乗りで来るからこっちも顔を覚えちゃって。あ、その手紙も直接受け取ったんだよ、僕が」

ヤベーオタは色んなベクトルでヤベーのか。

「てか“子”ってなに？ 子供なん？ あと話の雰囲気からしてもしかして女の子…？ 勝手にオッサンだと思ってたわ。いや女の子でもオッサンでもH A R A K I R I 案件は嫌だけれどもよ。」

…ん？ 毎度髪色変えてくるパスパレファン？

「いや知ってんな。その子知ってんな俺。なんなら前に若宮さん入れてやったコピバンライブに来てたな。」

え、俺その子に身バレしてんじゃね？ 怖。

「それにその子、プレゼントとかも送ってくれるんだけど、その子の住所書いてあるんだよね。送り状に」

あー、なるほどー。

「あ、そういえばその子、ピアノが弾けるらしくてね？ エレクトーンとか言ったかな」

ピアノとエレクトーンはわりと違うと思うんですが。

というかいきなり何の話だ。

「和解のためにも、一度一緒にライブをしてみようよ。パスパレコ



ピーバンド結成！ これは金になる予感がビンビンするよ！」  
(金の臭いはし) ないです。

?? ?? ??

まあ何を嘆いたところで状況は好転しないのが世の常だ。

よくよく考えれば、拉致された先が国内なだけでも有難いというもの。いやほんと、目が覚めたらスカイダイビング中でしたとかあったからな。あの時ミッシェルが飛んでいなければ今頃どうなっていたか……。

さつきは不甲斐なくも取り乱してしまっただが、伊達にお嬢らに拉致られ続けてはいない。

北海道、何するものぞ。収録くらい余裕で乗り切って見せようじゃないか！

… いや、やっぱテレビはちよつと恥ずかしいな (小市民)

収録は明日からということで、俺たちは一度宿に来ていた。

やつすいビジホなんかじゃない。高級、とまではいれないが、それなりに綺麗な旅館だ。露天もあるらしい。雪見温泉できるじゃん。

贅沢に一人部屋！ なんてことはなく、スタッフの人らと同室だった。

まあタダで泊まれるんだ、文句は言うまい。服も一式用意してもらえたしな。

「海くーん！」

全てを諦めて、明日の撮影の段取りを御剣さんから聞いている途中。

部屋の扉が開かれ、聞き慣れた元気な声が響く。

「どうしたんすか、丸山さん」

目を向ければ、案の定ピンク先輩がいた。

花でも咲きそうな笑顔を引っさげて部屋に入ってきた丸山さんは、

俺に駆け寄ろうとしてきて、御剣さんを見て止まる。

「あつ、ごめん、お話中だった…？」

真面目だからか、話の邪魔をしたのではと申し訳なさそうにする丸山さん。ちよつと困った顔がかわいいのがズルいよな。

「ちよつと明日の打ち合わせ？ 的なことを。何をするのかも知らないもんで」

「そうだったんだ。じゃあ後で出直した方がいいかな…ですか？」

俺に聞くよりも御剣さんに聞くのが正しいと思ったのか、視線と共に語尾を敬語に直して、御剣さんに窺う。ちよつと控えめな表情もかわいなのが以下略。

そんな丸山さんに、御剣さんは笑って返す。

「あー、いいよいいよ、大丈夫！ 話は夜にでもできるしね。じゃあ僕はちよつとタバコでも吸ってくるから」

言って、軽く手を振りながら御剣さんが退室する。

丸山さんは一度ぺこりと頭を下げ、御剣さんが完全に退室してからこちらに笑顔を向けた。そんな無邪気そうな面持ちが以下略。

「海くん！ その商店街で縁日？ か何かやってて、出店もあるからみんなで回ろって話してたの！ 海くんも一緒に行こっ！」

「え、えー… やです」

「なんで!?!」

なんでってあんた、そのみんなってのはパスペレのメンバーなんでしょう？ だったらやだよ、目立つし。

いや別に目立つのが嫌とかじゃないんだけど。

如何せん、パスペレはアイドルだ。しかもここ最近頭角を現してきた期待の新星アイドルグループ。アイドル界の麒麟児などと謳われているとかいないとか、そのレベルの人気アイドルなのだ。

その人気は、ここ北海道でも変わらないだろう。特に千聖さん。彼女は子役時代から名の売れた女優だ。

そんなパスペレと、半プライベートで一緒に縁日を回る？ 論外だ。ファンに殺される。

P a s t e l \* P a l e t t e 全員と行動するのは仕事の中だけ

に抑えたい。

「まだ命は惜しいんですよ」

「縁日ってそんな殺伐としたイベントだったっけ!」

「いや、縁日どうこうじゃなくてっすね。パスパレのプライベートに同行、つてのが世間にバレたら俺が干されるんすよ」

下手をすればパスパレの人気にも泥を塗る。

それは俺の本意ではない。

「大丈夫だよ！ ちゃんと変装するし！」

「余計心配なんですけど」

「なんで!？」

なんでってあんさん、あんさんの変装が変装として成り立ってないからなんすわ。

目深の帽子にサングラスにマスクなんて付けて外歩く一般人がどこにいるよって話。まあ丸山さんの場合、気付いて欲しい欲が滲み出た結果なんだろうけどな。

「もー！ っていうか私たちがもう何回も一緒に遊びに行ってるし、今更じゃないかな！」

「丸山さん個人とはいいいんですよ」

その辺はもう諦めてる。丸山さんの公式SNSに載せられてるか  
らな。

多少の煙は立つが、「仲の良い先輩後輩。友人」で押し通せるはずだ。バイト先も学校も一緒だし、何とでも言い訳は立つ。さすがに北海道で一緒、つてのはマズイだろうけど。

そんな俺の発言をどう解釈したのか、丸山さんは突然頬を淡く染めてモジモジしだした。何その仕草、あざとい。さすがアイドルあざとい。

「え!?! そ、それってつまりい…その…パスパレとじゃなくて私個人とならいいって、こと…?」

唐突な小○構文。

一体この人は何をテンパって――

「話は聞かせていただきマシタ!!」

「ピュイ!!」

「い、イヴちゃん!」

なぜかモジリだした丸山さんを愛で、かつ訝しげに見ていると、突然天井から若宮さんが飛び出してきた。

これには俺も丸山さんもびっくりである。変な声出た。

ドキドキとうるさい心臓を何とか押さえつけようと試みている間に、若宮さんはゆっくりと、注意深く天井裏から降りてくる。

無事降りると、こちらを満面のドヤ顔で見て口を開いた。

「話は聞かせていただきマシタ!!」

「いや二回も言わなくていいから」

つーかなにしてんの若宮さん。NINJA目指すのはいいけど、心臓飛び出そうになるからこういう登場の仕方はやめてほしい。

「聞かせていただいた結果、この件はチサトさんに報告すべきだと思  
いマシタ!」

「なにゆえ」

「え、ちよ、イヴちゃん!」

「というワケで、チサトさんの、おなあアリイ!!」

「フフフ、話は聞かせてもらったわよ、二人共?」

いつの間にか千聖さんご降臨である。なんだこの流れ。濁流すぎるだろ。

千聖さんは普通に部屋の扉から入ってきたけど、音も気配もなく入ってくるのはやめてほしい。暗殺業でも営んでおいでであらせませ  
すか? …… あらせそうだなあ。

「失礼ね、そんな闇稼業に勤しんだことなんてないわよ」

「シンプルに心読まんといってください。ホンマ、勘弁してほしいわ」

闇稼業に勤しんだことはない、つてところがポイントだな。  
きつとスキルは習得してるんだ。それを本業（暗殺業）には使っ  
ないってだけだぜきつと。

とまあ、テキトーな邪推は置いといて。

なして若宮さんと千聖さんが出てくるんでしょうかね。これがワ

カラナイ。

「パス。バレ<sup>私たち</sup>とプライベートで同行するのは危険。貴方がそう言うことは予想できていたわ。というより、スキヤンダルの元は私が許さないもの」

まあ、そりやそうだ。

白鷺千聖という女優は、人一倍プロ意識が高い。子役時代から何年も芸能界に居座ってる人だからな。今までどんな些細なスキヤンダルも起こしてこなかった千聖さんが、こんなところでいらぬ煙を焚くような真似は絶対にしな——

「というわけで、貴方には女装してもらおうわ」

「ちよつと待て」

どういうわけだ。

「考えてみなさい？ 半分は芸能人みたいな貴方だけれど、性別は男」  
「半分は芸能人てなんすか」

「そんな男が、今をときめくアイドルと共に行動するためには？」

「ダメだ、こつちの話なんざ聞いちやいねえ」

「というか「行動するためには？」じゃないんですわ。」

「それで「答えは女装することです！ Q・E・D・！」でもないんですわ。そうはならんやろ選手権優勝候補だよそんな未完成証明。」

「これにはさすがの丸山さんや若宮さんも啞然と——」

「なるほど！ 千聖ちゃん、あつたまいい〜!!」

「さすがチサトさんです！」

「ヤクでもキメてるんか???(啞然)」

「ダメだ、このアイドルたち。正常な思考能力を奪われている。これが芸能界の闇か…！（違う）」

「それじゃあ関口くん、こつちにいらつしやい？」

「嫌です」

「そんなに怖がらないの。新しい世界を知るのは楽しいものよ？」

「嫌です」

「メイクも任せておいて。私、上手いのよ？」

「嫌です」

「もうっ！ 我儘ばかり言わないの!! イヴちゃん、抑えて！」  
「ガッテンショウチ!!」

「な、え、力強っ…!? は、離して若宮さん!!」

「チサトさんの命令は絶対です！」

「何その忠誠心、怖いわ!!」

「うふふ、大丈夫、安心しなさい。私があつとり、女装の愉しさを教えてあげるわ。うふふふ」

「嫌だあああ!!」

「みんな頑張つて〜」

丸山さんの無慈悲な声援を最後に、俺は闇に引きずり込まれた。

? ? ? ? ?

「へいらっしやい！ そのべっぴんさんたち、イカ焼きどうだい！」  
冬の日没は早いもので、午後三時すぎでも、すでに空が朱色に染まってきた。

そんな西日に照らされる商店街を、俺たちは六人で歩いていた。

その六人は、俺を含むパスパレメンバーである。そんな集団を、出店のおっちゃんは「べっぴんさんたち」と称しやがった。

「ふ、ふふ…：： よ、良かったわね、『べっぴんさん』…？ ふふっ…」

「なにわろてんねん」

こちらを見て、笑いを押し殺すことに失敗している我<sup>千聖さん</sup>が割とガチめな非難の目を向ける。

俺は結局女装させられた。

しかもタダのネタ枠というわけではなく、テレビ局のメイクさん監修の、ガチもガチのガチ女装だ。

俺が千聖さんに襲われている様子をたまたま見かけたメイクさんが悪ノリし、衣装やらウィッグやらを本気で見繕ってきた。すね毛も剃られた。

今の俺の服装は、とても女の子だ。

一見スカートにも見える、クリーム色のサテン生地でできたワイドパンツに、小豆色の少しダボツとしたモックネックセーター。白のモコモコアウターを羽織り、靴は黒のブーツ。

髪は亜麻色のセミロングのウィッグを被らされ、後ろで一つ結びにされている。

化粧は千聖さん作だが、それ以外は芸能界を支える職人さんが手を加えるという、本当に労力の無駄遣いである。どうしてこうなった。給料も出ないのによくやったなメイクさんたち。

てか足見えないのになんですな毛剃られた俺。

「すっごく可愛いよ、海くん！ 声以外は本当に女の子！」

「はい、本当にすごい美人さんスね」

丸山さんと大和さんが、嬉しいようなそうでもないような感想を伝えてくる。反応に困るな。

「海くん！ はいチーズ！」

「え？」

急に丸山さんが顔を近付けてきたと思えば、彼女の持つスマホから、パシャツ、というシャッター音がから聞こえた。

え、何してんのなんでいきなりツーショ撮ったのバカなの？ 女子高生の距離感が分からん。めちやくちやいい匂いした。

「うんうん、これなら絶対分かんないよ！ ね、千聖ちゃん？」

「そうね。まさかこれが男性だなんて、そうそう分かるものじゃないわ。写真で見ると余計にね」

「だよね！ SNSあげちゃお」

「ストップ・ザ・バカピンク」

俺の制止など聞くわけがなく、バカピンクは躊躇なくSNSに俺とのツーショット写真を掲載する。

いやまあ、この格好していれば俺だつてはバレないかもだけどさあ……。ド派手パステルカラーヘアのHARAKIRI少女に狙われている以上、これ以上パスペレとの絡みを公表したくないと思う。いやこの人たちとつるむのは楽しいんだけどさ。

「わー、おいしそ〜！ おじさん、このイカ焼き六つちよーだい！」  
「あいよ！ 嬢ちゃんたち可愛いから値引きしてやろう！ ワハハ  
！」

「ホント？ わーい、ありがと〜！」

日菜さんは日菜さんで、女装の俺に興味を持ったのも最初のみで、  
あとは自由に生きている。

というか、可愛いと値引きしてもらえるのか。美少女強いな。来世  
は美少女カリスマジKになって無双したい。

「はいみんな！ イカ焼きだよー！」

笑顔でイカ焼きを渡してくる日菜さんにお礼を言いつつ、俺たちは  
イカ焼きを受け取る。

千聖さんは「公衆の面前で食べ歩きはしたくない」とか何とか言っ  
ていたが、小腹が空いてくるこの時間に、犯罪級とも言えるソースの  
香ばしい匂いに抗うことなどできず、結局はイカ焼きに口を付けた。

「あ、チサトさん、口の端にソースが付いてマスー！」

そんなことを言いながら千聖さんの口元に付いたソースを指で拭  
き取り、それを舐める若宮さん。

うーん、香ばしい百合の香りがする。いとにほひ。

「海くん、気持ち悪い顔してるけど、あーゆーの好きなの？ 今度私  
も、お姉ちゃんとしてあげよつか？」

「ぜひ」

「アハッ、即答キモーっ！」

口悪いな、日菜さん。

いやこれは俺が百パー悪いか。だいぶメンタル傷付いたけど、発言  
に見合ったりスクだったわ。残当。

まあ本気で罵倒されてるわけじゃない…。： ことはないんだろうが、  
引かれたりだとか嫌われたりだとかはしてないから一安心だ。自分  
の汚点を晒すこともコミュニケーションの一つだし。

いや百合好きは別に汚点じゃないけど。百合は綺麗だし、綺麗なもの  
は正義だから、百合好きもまた正義。断罪されるいわれはない…。：  
何言ってるんだ俺？



ふと宇宙を漂ってしまった思考を現実へと戻すと、すでに太陽は沈みきり、空はほとんど暗くなってしまうていた。

まあ屋台やら街灯やらの灯りで視界は明るいもんだけど。光って偉大だよな。

「こう暗くなってくると、モノノケが出てきそうでワクワクします！」  
「モノノケで」

若宮さんの守備範囲が分からん。

日本被れ（侍）だと思ってたんだが、アニメとかもそこそこ詳しいらしいし、日本のものならなんでも好きなんだろうな。

「モノノケ、妖怪かく。ナマハゲってこっちの方の妖怪だったよね？」  
意外にも妖怪話に食いついた丸山さんに、大和さんと千聖さんが続く。

「ナマハゲは東北なので、少し北すぎかもですね〜」

「というか、ナマハゲは妖怪じゃないわよ、彩ちゃん。男鹿半島などの行事で見られる、神の使いなの」

めちやくちや詳しいな千聖さん。

というか、丸山さんが妖怪に興味を示したのが本当に意外だ。怪談とかめちやくちや苦手そうだと思ってたけど、そうでもないのかな。

できるだけ妖怪の話は聞きたくない俺は、妖怪の話で盛り上がる女子陣から少し距離を取る。

そんな話をちゃんと聞いたら夢に出てきそうだな。神の使いだろうが魔王だろうが、非科学的存在は怖い。

「ナマハゲでも幽霊でも、会えたらるんってするんだろうな。海くんはそういうの好き？」

気配を完全に殺して話の輪に入らないようにしていた俺を、日菜さんは見逃さなかった。

日菜さんに問われた俺に、全員の目が向く。やめて、そんなに見ないで。

「…別に…好きでも嫌いでも…ないっすかねえ…？」

「ワタシ知ってマス！これは『ツンデレ』というものデス！」

「イヴちゃん、それは使い方が違うわ」

「でも確かに、海くんは幽霊とか、そういうのすつごく苦手だったよね？ 前に二人で映画館に行った時、ホラー映画見よって言ったら全力で逃げられちゃったし」

「待って彩ちゃん。映画館に行ったの？ 二人つきりで？」

「やだなー千聖ちゃん！ 海くんとこのデートなんて今更だよ」

「完全に開き直ってるツスね…」

流れ変わったぞ。

「関口、説明」

流れ変わったぞ!?

千聖さんがアイドルとしても、乙女としても出してはいけない低すぎる声を発している。しかも呼び捨てで。

姉ちゃんやお母さんがブチ切れた時と似ている。つまりこれは逆らえないやつだ。

「い、いや、別にデートとかそんなのじゃ… 本屋行った帰り、映画館の前でたまたま丸山さんと会って、流れで… いやほんとそれだけなんすよ」

「でも、そのまま帰ればいいものを、わざわざ映画館に入ったのよね？」

二人で「

おかしい。俺は悪くないはずだ… いや、確かに配慮が足りなかったのかもしれないが、それでも俺だけが怒られるいわれはない。こんな理不尽を許してはいけない。いくら相手が推しても、言うべきことはビシツと言わなければ。

「いや、でも」

「ん？」

怖すぎて土下座した。

推しに逆らっちゃいけないって、それ一番言われてるから。

? ? ? ? ?

夜。

商店街のど真ん中で土下座を披露してきた俺は、宿に戻って風呂に

入っていた。

「あゝあゝ〜」

オヤジみたいな声を吐き出し、湯に浸る。

ここは露天風呂、星空と雪景色の楽しめる中々豪華なシチュだ。

寒空の下を裸で駆け抜けた後の入湯はとても効く。幸せはここに  
あつたんだ。

よく分からないまま北海道に連れてこられ、女装させられ、怒られた一日だったが、温泉に浸かってボーっと空を眺めていると、すべてが小事に思えてくる。温泉は偉大だ。

「おや、海くん。入ってたんだね」

知ってる星座はないかと夜空を見上げていると、御剣さんが露天に  
来た。

さむさむ言いながら湯に入った御剣さんは、「あゝあゝ〜」と俺と  
全く同じリアクションをしてから、俺に話しかける。

「今日は大変だったみたいだね」

「何を他人事みたいに言ってますか。誘拐の主犯でしょ、あんた」

「自由に連れてってください、ってキミのお母様から言われたからね  
〜」

息子を売ったのか、お母様。

「まあ、誘拐じみた方法で連れてきたのは悪かったよ、ごめんね」

「じみた、ってか誘拐そのものでしたけどね」

「あっはっは」

なにわろてんねん。

「そう怒らないで。海くんにとっても、そう悪くないことだと思っ  
ど?。」

「は?。」

「飛ぶ鳥を落とす勢いで今をときめいている現役アイドルと一緒に行動  
できるなんて、そうそうない経験だよ」

まあ、そりやそうだが。

そのせいで被ってる苦労の方が多い気がするな。

「それにあの子たち、千聖ちゃん以外はプライベートでのガード甘々

だから！パンチラくらいはラッキースケベなら報酬として許そうじゃないか！」

「何言ってるんだこいつ」

仮にも担当プロデューサーが、いい笑顔でなんかトチ狂ったこと言ってるぞ。大丈夫かこの事務所。

「僕も、高校生の頃は毎日のようにラッキースケベを夢見たものだよ」

「も」ってなんスか。同類にしないでほしいんすけど」

見たくないこたあねえけどもよ（男子高校生）

「事務所に就職してプロデューサーになったのも、アイドル美少女の近くに合法的にいれるからだしね。レッスンの後の、あの汗水を滴らせ肌を火照らせるJKの姿といったら……おっと、どこに行くんだい海くん」

「ちよつと通報をしに」

「警察に手数をかけるほどのことじゃないさ。そうだろう？」

「いや、わりと案件つすね」

「まあまあまあ」

くつ、無駄に力が強いなこの変態……！

腕を捕まれ、無理やり湯船に引き戻された俺は、とりあえず通報を諦めて湯に浸かる。

「それより海くん、明日の収録の話なんだけど。晴れたら早朝から船でオホーツク海に出るから——」

「わあ〜！露天風呂、すつごく素敵〜！」

「あ、彩さん！寒いです！早く湯船に浸かりましょう！」

竹製の柵の向こう側から、丸山さんと大和さんの声が聞こえてきた。

ペタペタと忙しない足音も聞こえる。この数は二人じゃないな。パスパレ全員いるのか？薄い竹垣を挟んだ向こうに一糸纏わぬアイドルがいるって考えるとちよつとドキドキしちゃうな。

話していた御剣さんも黙ってしまったため、女湯の音がよく聞こえる。

あ、今誰か湯船にダイブしたな。マナーは守ってもらて。

「あつたかーい！」

「日菜ちゃん！ お風呂に飛び込んだらダメよ！ あ、コラ泳ぐのもダメ！」

日菜さんと千聖さんもいるな。

つてことは若宮さんもいるな。

「あれ？ イヴちゃんは？」

「イヴさんはサウナに行きましたよ」  
いないんかい。

(海くん、海くん)

今まで黙っていた御剣さんが、小声で話しかけてくる。

「なんすか」

(竹垣のあの部分なんだけど)

変わらず小声の御剣さんは、コソコソとした仕草で竹垣の一部分を指差す。

何があるんだとそちらに目を向けても、特に目立つものはない。何が言いたいんだこの人は。

(微妙に隙間がある。覗けそうだよ！)

「千聖さーん！ こつち今変態がいるんですけどー!!」

「変態？ ああ、御剣さんね。あとで二、三発殴ります」

リアルな数字が出てくると恐ろしさも倍々だな。

てかこの反応、千聖さんなんか慣れてね？ この変態の変態は今に始まったことじゃないってことか。

「ひどいじゃないか海くんっ！ キミと僕の仲なのに、僕を千聖ちゃんに売るなんて!! 千聖ちゃんのグーパン、本当に痛いんだぞう!」

「別に俺とアンタは大した仲じゃないでしょ」

「海くん、僕に冷たくない？」

そりゃあ、誘拐犯とその被害者って立ち位置だし。是非もなしって  
いうか。

「はあ... まあ、千聖パンチはこの際受け入れるとして...」

受け入れるのか。潔いな。

まあ、それなりの特殊な信頼関係があるんだろう。じやなきや千聖さんの力で御剣さんは今頃クビになってるはずだし。

「それでさっきの続きね。晴れたら船でオホーツク海に出て、釣りをしていく。でも予報だと雪っぽいんだよね。強風とかになったらさすがに沖には出れないし、その場合は屋内での撮影になる予定だよ」

「はあ」

急に真面目な話をしないでほしい。

温度差にびっくりしたわ。

「明日明後日の両日が悪天候だった場合は、釣りの方は明明後日以降の撮影になるんだけど、その場合は海くんには帰ってもらうことになってる。さすがに芸能人でもないのに二日以上学校を休ませるのはよくない、ってキミのお母様に言われちゃったしね」

お母さん、突然常識叩き出してくるじゃん。

けどまあ、金を貰う以上は仕事はきっちりこなさなきゃな。

「それでね？　屋内撮影の場合なんだけど」

「はい」

「『うま〇よい伝説、全力で演奏して踊ってみた』って動画を撮ろうと思うってるんだ」

「はい？」

## 閑話休題：兎は寂しくてもしつかり生きる

十二月初週の月曜日。

私、花園たえは、不満を感じていた。

「むくくく」

「なーにあからさまにむくれてんだ？」

放課後になり、私たちはいつものように有咲の家の蔵に集まっていた。

といつても、今日はポピパの練習じゃない。嬉しいことに、私の誕生日パーティーを開いてくれているため、主役として参加しているのだ。

お祝いの言葉を受け、プレゼントを貰い、みんなが作ってくれたハンバーグとケーキを食べ、一通り終わった頃。

私が朝から抱えていた不満が、とうとう顔に出てしまったらしい。

有咲に指摘され、ハツと両手で口元を隠すも、もう遅い。

有咲だけじゃなく、みんなの視線が集まってしまった。

「別に、むくれてなんてないよ」

「嘘つけ。明らかに『不満あります』みたいな顔してたろ」

有咲はするどい。

私の完璧な誤魔化しを見破るなんて。

「あ、今日は関口くんが休みだったから？」

「すごい。さーや、もしかしてエスパー？」

エスパー・さーやによって、私の心中は看破されてしまった。

そう、私はそれが——海が学校を休んだことが、ちよつとだけ不満だった。

別に、特別なことをして欲しかったわけじゃない。

ただ普通に学校で会って、おはようと挨拶をして。そして、誕生日おめでとうって、そう言って欲しかったなあって。

「そういえば今日、海くん休みだったね。何でだろ。りみりん、須田くんから何か聞いてる？」

「えっと、確か北海道に行ってるって、言ってたような...？」

「は？ 関口のやつ、なんで北海道にいるんだよ」

「パスパレの事務所の人に拉致されたって誠くんは言ってたけど...」

「また拉致られたのか」

「関口くんも大変だねえ。こころちゃんに拉致されたり、事務所に拉致されたり」

「ま、今回は国内なだけマシなんじゃねーの？ すぐ帰って来れるだろ」

みんな誘拐事件に対して慣れすぎてるなあ。

まあ私も、今更海が拉致されたところで驚きはしないけど。月一の恒例行事みたいなものだよね。

でも、ということは、今海はパスパレの人達と一緒にいるのか。

そう思うと、どこか体の内側がモゴモゴする。海が休みだって知った時とは少し違う感じ。なんでだろ？

「あー」

「いきなり隣で大声出すなよな香澄お前。鼓膜破れないまでも普通にビビるわ」

「彩先輩のイ〇スタライブに海くん出てるっぽいよ！」

「聞けよ... え、まじっ？」

「ツ〇ッターのトレンドが上がってた！ 今見てみる〜！」

そう言った香澄が、自分のスマホを机の真ん中に置き、彩先輩のイ〇スタライブを閲覧し始める。

『ねえ丸山さん。俺マジでこういうの出たくないんですけど。これ以上パスパレファンに命狙われることしたくないんですけど』

『まあまあ！ そう言わないで！ ほら見て、海くんが映っただけでこんなにコメント来るんだよ！』

『あんだそれコメント欲しいだけでしょ... えー、「出たな公式の男」「また彩ちゃんのSNSに出てきやがって公式の男」「何度も出てきて恥ずかしくないんですか？」「顔タイプ。ちよっとお尻見せて」。おい最



後のやつ通報案件だろこれ』

本当に出た。

気になってツ○ッターのトレンドも見てみたけど、本当に#パスパレ公式の男、っていうのがトレンド五位に上がってきてる。

というか、海ってパスパレ公式なの？

「うわ、マジで出てんな。っーかちよつとインス○ライブに出ただけでトレンド入りするとか、マジ何者なんだよ関口は」

「アイドルのインス○ライブに一般の男の子が出てるのが異常なことだけどね。あ、そうだ。最近紗南が千聖先輩のこと推してるんだよね。今度海くんがサイン貰ってきてもらおう」

紗南、千聖先輩推しなんだ。

私は箱推しだけど、強いて言うなら麻弥先輩推しかな。何かのインタビューで機材のこと詳しく喋りすぎて周りから引かれてたのに好感が持てる。

『あ、ねえねえ海くん。何かギター弾いてみてってコメントきてるー！』  
『一番何やっていいか分からん要求来たツスね。えー…じゃあパスパレの曲にするか』

『ホント!? じゃあ私、アコギアレンジ聴きたい!』

『うーんこの』

彩先輩、よく分からない無茶振りをしてるなあ。

「なあおたえ。アコギアレンジ? っの、そんな即興でできるものなのか?」

「私は無理。それっぽいコードとかならいいけど、ちゃんとやるならせめて二日は欲しいかな」

しかも、パスパレの曲はアイドルらしく、とてもシンセチックなものが多い。ギター一本で再現しようとするなら、ただの指弾きじゃ足りないくらいの手数がある。スラップも入れれば大丈夫だろうけど、言うほど簡単な奏法じゃない。

『えーつと…じゃあ「しゅわりん☆どりーみん」とかでいっすか』

「おい、関口のやつ、即興でやるらしいぞ」

「海は変態だからね。えっへん」

「貶してんのか褒めてんのかも分かんねえし、なんでおたえが得意げなのかも分かんねえ」

変態は最上級の褒め言葉。私達の界限では常識。

現に海と音楽の話をしてる時は、八割が「変態」「キモい」「えっち」「あほ」の言葉だし。

『あ、御剣さん、アコギありがとうございます。え？ 名前を出すな？ あはは、俺をこんなとこまで連れてきてテレビに出しといてよく言うじゃないっすか。何なら御剣さんも顔出ししましょうよ。こつちの水は… あ、逃げた！ クツソいつか絶対仕返ししてやるからな…！』

「毎回拉致されてるのは大変そうだけど、関口くん楽しそうで良かったね」

「た、楽しそう、かなあ…？」

御剣さんって人への仕返しを誓った海は、気を取り直したようにギターを構える。

『あ、ごめんなさい。三分ください。ちよつと原曲聴きたいんで』『りようかーい！ えっと、それじゃあ普通にお話しよつかな？』

片耳にイヤホンを付けた海は、何かブツブツいいながら少し離れたところでチャカチャカやってる。

その間、彩先輩の繋ぎのお喋りで二分が過ぎ、その辺りで海がイヤホンを外す。

『それでー、板橋の金曜日と土曜日しかやってないっていうカフェに行ってみたくて。海くん三回くらい誘ったんだけど、全部断られちゃったんだよね』

『マジ炎上するからその辺で止めとけバカピンク』

『海くん、たまに先輩への敬意とか無くすよね？』

『敬意を抱く必要がないと思った瞬間はそつすね』

この二分、彩先輩はずっと海のことについて話してた。

といっても自発的に海の話題を持ってきたわけじゃなく、あまりにも海についての質問コメントが多かったため、彩先輩がそれに答えていた形だ。

「彩先輩の話を統合すると、海は優しくギターが上手くてかっこいい、ということ。アイドルがする話じゃないと思ったけど、まあ事実だから仕方ない。」

でも、彩先輩が海を褒める度に誇らしい気持ちと体内のモゴモゴが同時に襲ってきて、何とも言えない微妙な心中だ。

ふと見れば、有咲も微妙な顔をしている。私と同じ感覚を味わっているのかな。だとしたら後で聞いてみよう。原因を知っているかもしれない。

『あ、私普通に歌っていい?』

『あー…。そうですね、普通に原曲通りに歌って貰えば。途中で俺ハモリに入りますけど、引つ張られないよう気を付けてくださいね』  
『分かった!』

『それじゃあやりまーす』

それからは、ほとんど海にしか目が行かなくなった。

まるでギターが二本も三本もあるかのような音数。一切ブレのない、正確なリズム感。音がビビることもなく、一音一音が綺麗に鳴り響く。

スマホ越しで多少音は悪くなっているはずなのに、それでもなお完璧だと思えるほどの調律。

ほぼ即興にも関わらず、この完成度はあまりに異常だ。私だったら絶対できない。

「海くん、やっぱりすっごくじょーずだね!」

「ハモリもめちやくちや上手いな、こいつ」

香澄や有咲と同じく、コメントでも海を絶賛している人ばかりだ。

海のアコギ演奏は、日本でも屈指のレベルだと思う。プロとしてもトップクラスだろうし、高校生の時点でここまでできる人を私は他に知らない。

感想を口にすることすら忘れ、ただ聴き惚れていると、演奏が終わった。もつと聴いていたかったという気持ちがある。私もアコギは持つてるし、今度一緒に演奏もしたい。

『すつつつごかった!! 海くん、やっぱり歌もギターも上手だねっ!』  
『いやあ、ふへへ』

『あ、今のはちよつと気持ち悪い』

『おい、大和さんに謝れ』

『え、自分ツスか!?!』

あ、麻弥先輩もいたんだ。

『もつと海くんの演奏聴きたいけど、そろそろ時間だよね?』

『あー、そうですね。もうそろ出ないと飛行機間に合わないかも』

『だよね、残念だよ…。あ、みんな分かんないよね。私たちは明日からも撮影があるんだけど、海くんは今日帰っちゃうの』

『あ、そうなんだ。じゃあ明日は関口くん学校くるのかな』

『まあ関口のやつは芸能人とかじゃねーしな、一応。あんまり学校も休めねーだろ』

『有咲は芸能人でも誘拐もされてないのに学校休んでるじゃーん』

『私はほら、テストで毎回学年トップ取ってるから出席が免除される的なアレだからいいんだよ』

『え!?! ホント!?!』

『おうとも』

『有咲ちゃん、なんて流れるような嘘を…。』

『私は騙される香澄が心配だよ』

誕生日を当日に祝ってもらえなかったのは残念だけど、まあ良しとしよう。海にだって都合がある。明日、おめでとうくらいは言っただけいいかな? 私の誕生日。L I O Eも届いてないから、もしかしたら忘れてるのかもって気もしてる。

『あ! 海くん帰っちゃうって! お疲れ様ってだけ言っところ!』

有咲に嘘をつかれたことに気付いていない香澄が、スマホをいじってコメントを送る。

『それじゃあ海くんはここでお別れ…。あ、海くん海くん! 香澄ちゃんが「お疲れ様!」って言ってる! 香澄ちゃんやつほく! お疲れ様!』

『マジで一般人の名前本名で出すの止めた方がいっすよ。マジで』

『ポピパとは対バンしたことあるし、その時香澄ちゃん自分で自己紹介してたから問題ないんじゃない?』

『あ、そうなんすか。失礼しました』

『うんうん、謝れて偉い!』

『褒められちゃった(困惑)』

頭を撫でようとする彩先輩と、それは勘弁してくれ殺されたくない  
と必死に回避する海。

彩先輩がむくれながらもなでなでを諦めたところで、海がカメラを  
見る。

『名前だしていいならいつか。どうせポピパ今一緒にいるんだろ。お  
たえ誕生日おめでと。こっちで誕プレ買ったから、明日学校で渡  
すわ』

「! うん、ありがとう」

インス○ライブだからこっちの声は届かないけど、思わず声もれ  
た。

それだけ嬉しかったんだろう。

ただ誕生日を覚えててもらえて、プレゼントを用意してもらっただ  
け。それはありがたいことだけど、今日ポピパのみんなにもしても  
らったことだ。

みんなに申し訳ないな、という気持ちはある。

それでも、私は今日、今の瞬間が一番嬉しかった。

「良かったね、おたえ」

「うん」

さーやが、何だかお母さんみたいな笑顔でこっちを見てくる。なん  
だろ。

ああ、でも、それよりも明日が楽しみで仕方がない。

今日は年に一度の誕生日だけど、これほど早く明日になってほしい  
なんて思った誕生日は今までなかった。

本当に、明日が楽しみだなあ。

ライダーとは漢の憧れであり、いずれ至るべき場所である（諸説あり）

北海道から帰ってきて初めてのバイトの日。

今日はダブルピンクも、巴も、そして松原さんもない。

ピンク一号こと丸山さんはまだ北海道で収録をしているらしく、二号ことひまり、そして巴はアフグロの練習。松原さんは今エジプトの古代遺跡にいるらしい。松原さん、呪われてなきやいいけど。

ダブルピンクは言わずもがな、巴や松原さん目当ての客も多いこの店で、四人ともが休みの日は異様なほど暇になる。

今日も今日とて例に漏れず、いつもなら長蛇の列を成しているレジ前もガラツとしており、店内も老夫婦やもはや常連となった受験生である白っぽい青髪の女子中学生くらいしかいない。

補充等ほかの仕事もない暇な時、最近は例の中学生の勉強をみてあげている。

別に仕事をサボってるわけじゃない。店長に言われたんだ。

その子は俺の姉の母校と同じ高校を受験しようとしているらしい。あの高校、わりと偏差値高いんだよなあ。

少し英語と国語が苦手っぽいけど、まあ平常心で受ければなんとかなるだろう、くらいのレベルだ。受験会場つー圧力渦巻く異界みたいな雰囲気能耐え、普段通りのパフォーマンスができれば十分に受かるだろう。

女の子がペコペコお辞儀をしながら帰っていくのを見送り、以降客も来ず、本当に暇を持って余して年末の大掃除レベルの掃除をしていると、店長室から店長が元気よく飛び出してきた。

「そうだ!! デリバリーサービスを始めよう!!」

? ? ? ? ?

とまあ、そんなこんなで。

俺は教習所へと足を運んでいた。

「それにしても今更ルームサービスなんて。ウーオーとか、最近はそのういがあるでしょう。自店でやったら人件費かかりますよ」

と言つてはみたのだが、店長はやけにやる気だった。

まあ所詮俺は社会をろくに知らない高校生だ。店長には店長なり、社会人としての判断があるんだろう。知らんけど。

そんでなんか知らんけど、店長は俺をデリバリー部隊の隊長にしたいらしい。いや隊長ってなんだよ。バイトリーダーか何かか? 俺の何が店長に評価されてるんや。

まあ、これもいい機会だと思い、デリバリー用に免許を取ることにしたわけだ。デリバリーにはジャイロ使うらしいし。よくピザ屋の配達とかで見る三輪の原付みたいなのやっつ。

原付免許があればいいんだが、今回俺が取りに来たのは普通二輪の免許だ。俺も十六歳になったことだし、せつかくならバイクの免許も欲しい。何度か大きなライブのバックバンドやスタジオオミュージシャンとして働いたからな。金はある(強者の貫禄)

視力やら色覚テストやらを無事通過して、入校手続きを行う。本来ならここで帰り、後日またガイダンス的な学科授業を受けるために教習所へこなければならぬのだが、今日はタイミングよくそのガイダンスが行われる日だったらしい。日を挟むことなくガイダンスを受け、教習へと進めるらしい。やったぜ。

大きめの教室へと案内され、席は自由だったのでテキトーに最後列を選ぶ。

ガイダンスが始まるまであと数分しかないが、教壇に指導員の姿はない。まあ時間までに来てくれれば問題はないため、特に気にす

ることなく、俺はスマホを弄り始めた。

ひまりからLIEメッセージが届いていたのでそれに返信し、まだ時間はありそうだったので将棋アプリを開く。最近ハマってたよ、ね、将棋。全然弱いけど。

俺の使う戦法は居飛車角換わり。

まあこれしか知らないから使ってるだけなんだけど。小学生の頃に九州のじいちゃんに教えてもらった。

CPU(簡単)とかいうコンピュータを相手にボコボコにされつつ、チラツと時計を見る。すると、ガイドンス開始時間を三分ほど過ぎていた。

教壇に指導員の姿はまだない。

教習所の指導員も人間だしな、と思いつつ再度スマホに視線を落とした時、教室後方の扉が勢いよく開かれた。

突然の大きな音に、教室内の全員の目がそちらに向く。

何十もの視線を独り占めたのは、一人の女の子だった。

「ゼエ…ゼエ…教官はまだ来てないな？ よし！ セーフだ！」  
息を切らして何やらガッツポーズを取る女の子。

肩より数センチ上で切りそろえられた金髪に、小豆色のファンシーなイラスト入りスカジャン。中に黒のインナーは着ているものの、丈が短く、その締まった腹部は晒されている。もう十二月だというのに、寒くはないのだろうか？

というか。

俺はあの子を知っている気がするんだが。

「お？ おー、なんだお前、関口じゃん。お前もこの教習所に通ってたな」

何やら嬉しそうに駆け寄ってきたのは、俺らのバンド『Capliberte』<sup>カプリベルテ</sup>としても思い入れのある箱のオーナーの娘。

八百屋の狂犬、佐藤ますきがそこにいた。

佐藤ますき。



ライブハウスオーナーの愛娘にして、業界でも名を馳せるスタジオミュージシャン。

その正体は、都内屈指のお嬢様学校に通うプリティ☆ますき！

「おい、今変なこと考えたろ」  
「考えた」

軽く横腹を殴られた。痛い。けど大丈夫。蘭で慣れてるからね。

…悲しくなってきたな。なんだよ、女の子に殴られるの慣れてるって。そっちの人かよ。

佐藤が入室してきてから数秒ほどで、講義を担当する指導員が入ってきた。

慌てて着席した佐藤は、近くだった俺の隣に腰を下ろしたのだ。

その後、指導員の講義が始まり、今に至る。

指導員の話はちゃんと聞かなければならないが、少し退屈な内容なものも確か。運転の心構えという、大事だが一般常識として持っているものを語る指導員の声をテキストに耳に入れながら、フリッツリの可愛らしいファンシー服に身を包む佐藤、という受ける人には受けそうな空想上の生物を思い浮かべていた。要するに暇。

チラリと隣を見てみると、佐藤は意外にもメモを取って…いや、あれ落書きだな。教本のキャラに髭とか付けて遊んでるな。それでいいのかお嬢様学校の現役生徒。

退屈だった講義も終わり、今日のところは解散となる。

明日以降、学科の講義を受講したり、実技の予約やキャンセル待ちをしたりして、学科と実技両方の必要単位分を受け終えたら試験に望み、合格したら晴れてライダーになれると。

教習所内とはいえ、バイクに乗るのは楽しみだ。何事も「初体験」というものには心が踊る。

内心ワクワクしながら、早速教習所の待合室で実技授業の予約を取ろうとしていると、佐藤が話しかけてきた。

「おい関口。お前、次の学科はいつ行く？」

待合室のソファに座っていた俺の隣にドカッと勢いよく座った佐藤は、そんな事を聞いてきた。

どうでもいいけど、お前本当に白雪んこのお嬢様なのか？

時々、うちのクラスの、夏休みデビューでヤンキー（なりヤン）になつたやつと姿が重なるんだが。タバコとか吸ってないよな？

「とりあえず明日かな。明日の放課後は実技の予約も埋まってたし、とりあえずキャンセル待ちもしつつ受けようかなって」

「明日か……よし分かった、大丈夫だ」

何がだ。

「あたしも明日学科受けにくっからよ。一緒に行こうぜ」

何でだ。

「あたし一人だとサボっちゃうかもしれないし、一緒に受ければ分かるねーところも教えてくれるだろ、お前」

何なんだお前。

「じゃー決まりな！ 明日放課後、お前んとこのガツコの正門前行くから、よろしく」

言いたいことを言って勝手に約束を取り付けた佐藤は、気が済んだのか一人で帰って行ってしまった。

何なんだ一体。三回くらい一緒に仕事したことあるけど、一緒に授業受けるとか、そんな親しい間柄じゃなかったら俺ら。

……つーか待て。あいつ、明日俺の学校に来るって言った？

？ ？ ？ ？ ？

翌日。放課後。

「海。スタバの新作でたの、知ってる？ 飲みに行こう」

「なんだってそんなオシヤンな所に。香澄たちと行けばいいだろ」

「香澄たちとは昨日行った」

「なら俺とは行かなくて良くね？」

前の席のおたえと話をしながら、俺は帰り支度をしていた。

「てか今日は無理。バイクの教習あんだよ」

「え、海、バイクの免許取るの？」

机の中の教科書を鞆の中に移すだけなので、一分もあれば終わる。

早々に支度を終わらせ、そのままおたえと一緒に教室を出た。

「うちの学校、免許OKだっけ？」

「法的にはOK」

「いや、校則的な…」

「法的にはOK」

珍しく鋭い指摘をしてきたおたえをテキトーに躲した。躲したつたら躲した。

まあ校則違反であっても、こっちにはキャンプファイヤーだって可能にした弦巻家がいるんだからな。法律に反してなきや問題ないだろ（大アリ）

「バイクかあ。いいね、免許取ったらドライブ連れて行って」

「バイクのニケツって法的にどうなん」

「ダメなの？　じゃあ私も取ろうかな」

おたえがバイクか…。

見た目はおっとり美人なおたえだけど、根はロックンローラーだからなあ。「ブレーキ？　アクセルだけあれば十分だよ。ベタ踏みだよ」とか言い出して事故りそう。さすがにないかな。

湘南のデスドライブまでは想像できたところで、靴を履き、外に出る。

今日も今日とて寒い。北海道ほどじゃないにしても、東京の冬はそれなりに冷える。朝や夜は本当にしんどい。明日はカイロとか持つてこようかな。

「お、やっと来たな。行くぞ関口」

手持ちにしようか、貼るタイプにしようか。

ほかほかの幸せについて考えていると、前から名前を呼ばれた。

見てみると、黒のセーラー服に身を包んだ、金髪で目付きの悪い女が。

この寒空の下、マフラーや手袋なんかも付けずに制服のみという姿に漢気すら感じるその女の正体は、なんとプリティ☆ますきだった。

いや、知ってたけど。昨日学校まで来るとか言ってたけど。

本当に来たんだあ…。

「…海。あの人誰」

なぜか視線が冷たいとなりのおたえ。なんでだよ。分かんけどその目はやめてほしい。体感温度がちよつと下がった気がする。

「佐藤ますきっていうドラマーだよ。サポートと一緒にバックバンド組んだことがあって、それで昨日教習所で会った。あいつもバイクの免許取るらしいから、なんか知らんけど一緒に授業受けようぜってなつて」

「ふーん」

だから何なんだよ。怖いわ。

俺何も悪いことしてないじゃん。浮気バレた彼氏の気分だよ。そんなもん一生味わいたくなかったわ。

「つーかお前、本当に来たのかよ」

「あ？ 昨日来ると言っただろ。ほら、行くぞ」

手ごと鞆を肩にかけ、俺を促す。

どうでもいいけど、お前が黒のセーラー服着てつとなんか昔のスケバン思い出すな。漫画とかに出てくるやつ。鞆に鉄板とか仕込んでないだろうな…。ちよつと仕込んでほしい（ロマン）

「あいあい。んじゃおたえ、また明日——」

「他校の不良が正門でうちの生徒を睨み付けているという報告がありました！ どのどなたですか!!」

遠くから、氷川さんの怒鳴り声が聞こえる。

教師より先に出てくる風紀委員、まじ有能。でも今それを発揮しないで欲しかった。

「やべっ。おい佐藤、ちよつと走るぞ。見つかると面倒だ」

「あ？ なんで」

「お前の存在もだし、俺がバイクの免許取ろうとしてるからだよ。うちの学校、免許取るの今はまだ禁止なんだ」

「今はまだってなんだよ。近々変わるのか、校則」

「俺が（弦巻家に頼んで）変える」

「革命家か何かなのか、お前」

とろとろ歩く佐藤の背を押し、いそいそと正門を離れようと試みる。

マジで今氷川さんにバレるのは都合が悪い。教習所通うのすら禁止され、教習代として出した大量の諭吉が無に帰すのは避けたい。

「あ、紗夜さん！ こっちで海が——」

「おたえ、明日スタバに行こう。好きなだけ奢ってやる」

「——他校の女の子と——」

「ようし分かった。遊園地だ。夢の国の入国券だって奢ってやろう。お前行きたいって言ってただろ」

「……分かった」

まさかの裏切りをみせたおたえをなんとか買収し、氷川さんからの逃亡に成功した。

くつそ、夢の国っていくら出せば入れるんだ。教習代で貯金もわりと飛んだし、免許取ったら愛車だって買ったけど……まあ背に腹はかえられない。また働こう。

「お前、風紀委員に追われるとか不良かよ」

「風紀委員呼び寄せたのはお前だかな」

というか、佐藤には不良だなんだと言われたくない。

まあ、遅刻もするし、一時期は服装もきちんとしなくて氷川さんに怒られてたけど。でもその程度で不良なんだったら、現代は不良跋扈する大ヤンキー時代に突入してるわ。黎明期なんてとつくに越えて最盛期なまである。

「つーか、白雪は免許大丈夫なの？ 一応、つーかここらでは月ノ森と並ぶ二大お嬢様学校だろ」

「法的には問題ない」

「は？ いや白雪の校則……」

「法的には問題ない」

なんだこいつ（棚上げ）

教習所までは都電で向かう。王子で降りて、そこから歩きだ。

その間、今年の予定を話した。

佐藤はサポートの依頼があるため、クリスマスはライブだそうだ。

てかそれ俺が断ったやつじゃん。「クリスマスはちよつと予定が…」って強がつて。予定なんて無いけどなちくしょう。

佐藤は一緒に演奏できないことに少し残念そうな顔をしたが、俺も少し残念だ。しかもベースは和奏だっていうんだから尚更に。

俺の中での最高のベースリストは須田で、最高のドラマーは五十嵐だが、佐藤と和奏はそれに次ぐくらいに一緒に演奏していて楽しいメンバーだ。

佐藤と音で殴り合い、和奏の安定したベースで音をまとめ上げる。和奏は歌も一級品だから、あいつをベーボにしても大変良い。須田や五十嵐たちと組んでいなければ、二人を誘ってバンドを組んでいただろう。

あー、見栄はんなきや良かった。

そうこうしているうちに教習所へ着き、ちようど始まる学科授業に参加する。

開始五分で寝始めた佐藤をシャーペンでつついて起こしながら、俺たちは免許獲得への第一歩を踏み出した。

? ? ? ? ?

約十日後。

クリスマスを一週間後に控えた昨日、紆余曲折あった教習所通いがようやく終わった。いや、別に何か問題があったわけじゃないけど。検定も一発合格だったし。

色々と上手い具合に予定が進み、ほぼ最短で卒業することができた。

んで今日免許センターで試験を受け、俺と佐藤は無事にライダーへと昇格したのだ。

「おお…」

俺は手元にある免許を眺め、感嘆の息を漏らした。

なんとなく、世界が広がった気がする。まだ公道走ったことないけど。

「いやー、なんかなくなったな」

隣でそう笑う佐藤は、実は学科試験がかなりヤバく、教える側の俺も奮闘した。そういう経緯があるが、まあ無事に合格したのだしよしとしよう。

「なあ関口。お前これから暇か?」

「まあ、予定はないな」

「それじゃあさ、ちよつと付き合えよ」

そう言った佐藤の後に続き、バスに揺られること十数分。

俺たちは、中古バイク屋に来ていた。

「おー、色々あるなあ」

並ぶバイクをキラキラした目で眺めながら、佐藤はおもちや屋に来た子供のようにはしゃぐ。

かく言う俺も、様々なバイクを前にソワソワしていた。これはあれだ。楽器屋に足を運んだ時と似てる。

「関口い、お前はなんか狙ってるヤツあんのか?」

「あるよ」

教習所に通い始めてから、夜は毎日のようにネットでバイクを漁っていた。

特にバイクに詳しいわけじゃないが、見てる分にはよく知らなくとも楽しめる。

その中で、俺は俺の愛車を決めていた。性能がいいとか、そういうのは分からない。けど、ビビつてきたのだ。俺の愛妻ギターを買った時同様、ただの直感。こいつしかないと、そう思った。

… まあカッコつけてみたが、要するに一目惚れである。車体がかっこいいのなんのって。

「ほーん…」

「お前はどうかんだよ」

「あたしはまだだな。ネットでも見てみたけど、やっぱり自分の目で見て決めてえ」

その気持ちは分かる。

まあ俺はネットでマッチングしてしまっただが。いや別にその一目惚れバイクを絶対に買わなければいけないってわけでもないんだけどね。

一応、ほかのも見えてみようと思ひ、店内を見渡してみる。

すると、見るからにふわふわした女性が、こちらに向かつて来ているのが見えた。薄いピンク色の髪を縦ロールにし、歩く度にぴよんぴよんと・・・縦ロール？ 何あれ初めて見た。え、しゅごい。

なんか白のドレスみたいな服着てるけど、店のロゴが入ったエプロンみたいなのしてるし、店の人だろう。バイク屋で白いドレスで。めちゃくちゃ汚れそう（小並感）

「いらっしやいませえ。何かお探しですかあ〜？」

妙に延びる語尾が多少気になるが、対応は普通。

てつきりタメ口きかれるかとも思っただけど、見た目で判断、いくない。

リサさんだつて見た目はギャルだけど中身オカんだし普段から礼儀は正しいし。ギャルとは一体なんだつたのかと思っただが、単に俺のギャルへの偏見が強すぎただけなのかもしれない。ギャル、とても良いものですね。

「あ〜？」

こら佐藤。威嚇すんな。

「えっと、ちよつとバイクを見に来てて。ちよつといろいろ見てみようかなって感じですよ」

暗に、「俺たち自分で見るから気にしないでいいよ。放っておいて」と言ってみるが、空気を読めないのか、あるいは読んだ上で無視しているのか、ゆるふわ店員は押ししてきた。

「あ〜、それならこれなんかオススメですよ〜？」

くつ、言い方が遠回し過ぎたか・・・？

このふわふわした喋り方、俺は別に嫌いじゃないんだが、佐藤が嫌いそう。さっきからすごい目でゆるふわ店員を睨み付けている。怖い。俺が。

ゆるふわの方は特に気に留めることもなく、バイクの説明を始め



た。

「この子はホ○ダのレブ○250っていうんですけどお。もう見た目がゴツゴツのゴツ男くんでき、チョーご機嫌なんですよねえ」  
ゴツゴツのゴツ男くん。

「バイクって言ったらやつぱりフルカウルをイメージするかもなんですけどお、この子みたいな丸目のタイプも最近では多いんですよ。それにいく、この子、カスタムを前提にして考え抜かれた構造でき、オーナーの個性を受け入れる懐の深さもあるんですよお」  
めちやくちや詳しくて草。

いやまあバイク屋の店員なんだから当たり前っちゃ当たり前だけど、なんかこう、浮きそうなくらいゆるふわな人の口からふわふわな声でガチのバイク説明をされると、その…ギャップで萌える。軽率にこの人のこと推しそう。

「おい、お前…」  
一人で勝手にトウシク…していると、佐藤がもの凄い形相でゆるふわ店員に詰め寄る。

おい待て佐藤早まるな。その人は何も悪いことはしてないから。

「おい、佐藤——」

「お前…めちやくちやかわいいな」

転んだ。マジのガチで、昭和の漫才かっつくくらいすつ転んだ。

なんだお前、その眉間にしわ寄せた顔してそんなこと考えてたのか。お前の方がかわいいわ。頭の中が。

「はにゃ？ わあくありがとうございますう。うれぴ」

両手を軽く握り、顎の近くに持つていくという割とあざとめなポーズを決める店員、まじあざとい。はにゃってなんだよ、鳴き声？

存外、悪くないと思います（素直な気持ち）

「…なあ。あのバイク、なんてんだ？」

ふと、佐藤の目が店員から移る。

たまたま目に入ったのか、佐藤は店の隅に置いてあるバイクを指差し、興味を示した。

「おお、お目が高い。あの子はカ○サキのKH400、75年式刀

マツハですねえ。今は無き2スト3気筒っていうシブシブのシブ子ちゃんなんですよお〜」

シブシブのシブ子ちゃん。

「絶版車なんですけどお〜、おとん…：。パパンが壊れて河原に捨てられてたのを拾ってきてえ〜、修理したんですよお〜」

それは色々どうなん。売っていいのそれ？

「あ、これはオフレコでお願いしますねえ〜」

ダメなんじゃねえか。

普通に窃盗だよ。怖えよこの店。

「ちゃんと警察に届けて半年待ったのでえ〜、問題ないんですよお〜」

え、あ、はい。

え、今ナチュラルに心読まれた？ いや違うよな。持って然るべき疑問を抱いているだろうからって思ったただけだよな、きつと。

「そうですそうですう〜。みんなそれを疑問に思うかと思つてえ〜」

「おい佐藤、帰ろうぜ。ここ怖すぎ」

やっぱり心読んでるじゃないですかヤダー!!

てかバイクのナンバー発行できないんじゃないのそれ。どんな手使ったの。怖いよやっぱり。

本当に帰りたくなつた俺は佐藤に目線を送る。ほら、帰るぞ。ラーメン奢つてやるから。な？

「——か」

……か？

「——かっけええええ!!!」

ますきん過去一のテンアゲまじ卍(逃避)

「ほう？ 嬢ちゃん、こいつの良さが分かるのかい」

誰だおっさん。急に出てくんな。

「あ、パパン！」

おとんか。

「こいつあ激マブの単車だ。見た目で惹かれるのは無理もない。だが、大事なのは、単車も人間も中身……音、聴いてくかい？」

「！ いいのか！」

なして佐藤はそこまでテンション高いんだ。

どうにも流れに取り残されてしまった俺を置き、一向は例のバイクを外に出してみんなで音を聴いていた。

やべーマジシブ、超クール、最高だぜ、と語彙力を失ってしまった集団を遠くから眺めながら、俺は店を後にした。

後日、俺は別の店で目当てのバイクを購入したのだが、佐藤は例のやべーバイクを買ったらしい。マジかお前。

? ? ? ? ?

「それで、結局お前は何を買ったんだよ」

後日。

納車期間がまさかの0日という異次元さを見せてきた、デス・ギヤラクシー号と銘打たれたバイクに跨り、佐藤がうちのマンションの前まで来ていた。

てか、なんでお前当たり前のように俺の家知ってんの？

「…ゼ〇アー400、ルミナスビンテージレッド」

別段隠す必要もないと思ひ、素直に教える。

ワインレッドのボディがイカすバイクだ。

一九九五年に世に放たれた、世界に名を売る有名バイク。

お値段もそこそこで、比較的安めの物を選んだが、それでも溜め込んでいた貯金がほぼ底を突いたレベルだ。

まあ、金は使わなきやタダのゴミってお父さんも言ってたしな。また働いて貯めればいいだけのこと。幸い、デリバリーの給料はフロアより百円くらい上がるらしいし。

「へえ。なんか分かんねえけどカッコよさそうじゃねえか。よし、今からちよつくら走りに行こうぜ!」

「まだ納車されてねえよ」

「はあ?」

「お前んところが異常なだけだったの。俺のは二十六日には手元に届く

はずだよ」

俺も早く愛車に乗ってみたいな。

「ちえ、今日は無駄足かよ。んじゃあ二十六日、また来っから。高尾山までぶっ飛ばそうぜ」

「湘南がいい」

「海は遠いし寒いだろ」

「山も似たようなもんじゃん」

「いや、海の方が寒いね」

海岸の方が走ってて気持ち良さそうだけどなあ。

結局俺が折れて高尾山に行くことになった。

当日、たまたま高尾山に遊びに来ていたとかいう宝くじ一等もびつくりなミラクルでポピパのメンツと顔を合わせてしまい、なぜか目が死んだおたえと市ヶ谷さんに詰められたのはまた別のお話。

つーか高尾山って女子高生がわざわざ年末に遊びに行くような場所か???

聖なる夜の時間だオラア!! (深い意味はありません)

クリスマス。

それは、血塗られた歴史の上に成り立つ、悪魔の祭典。幾億もの犠牲の上に、限られた勝者のみが謳歌することを許された、呪いすら蔓延る催し。

かの聖人も、まさか自分の誕生日を祝われるわけじゃなく、それをネタにされてここまでのことが起きるとは思ってもみなかっただろう。

「リア充は爆散しろ」

ここにも一人、恨めしく勝者を睨む敗者の姿が。

まあ、俺なんですけど。

今日は十二月二十三日。

クリスマスイヴの前日。

今年のクリスマスとイヴは土日で、今日は二学期最後の日。今はその放課後だ。

教室には、俺のようにリア充への怨嗟を呟く者や、短い冬休みに何をやるのか楽しみにしている者。通知表の結果が芳しくなく、親への言い訳を悩む者と、様々な生徒がいる。

「お前も十分リア充の部類だろ」

ハロウィン辺りから増えてきたカップルどもを恨む声を上げた俺に、リア充代表、五十嵐が呆れたような声で言い放つ。

五十嵐の呟きに、須田も同意した。

「ポピパ、アフロ、Roselia、ハロハピ。その他の女子とも幅広く交流があつて、果ては現役アイドルのパスパレとも仲が良いお前がリア充じゃないなら、この世にリア充は存在しねえよ」

確かに。恋人がいることがリア充の条件ではない。俺のリアル、日

常生活は充実していると言えるのかもしれない。バンドが出来て、仲の良い友達とも絡むことが出来てるし。

それに、恋人がいても、色々なことがあつて充実していないやつもいるだろう。

しかし。しかしだ。

「カップルは滅びろ」

恋人がいてこそその聖夜だろうがクソがよ（荒<sup>す</sup>み）

「ならお前も付き合えばいいじゃねーか。誰かと」

「そういうんじゃないんだよなあ」

「なんだこいつ、めんどくせえ」

彼女は欲しいが、誰でもいいわけじゃない。

心の底から好きになった人と付き合いたい。というかそうじゃないと付き合つても楽しくないだろ（ロマンチスト）

「五十嵐はいいよな。クリスマス、一緒に過ごすやつがいて」

「いや？ 今年は俺予定ない」

「え？ 澤田さんは？」

付き合つてんだろ。

街中のイルミネーションに、虫のように引き寄せられる予定があるんじゃないの（口が悪い）

そういや今日、澤田さん休みだな。風邪でも引いたか？

「美穂はなんか父親が宝くじでハワイ旅行当てたとかで、明日から年越しまでハワイで過ごすらしい。今日はその準備で休むつつつたな」

「ぶるじよわじー」

大物芸能人か何かの過ごし方じゃんそれ。

凄いな澤田パパ。強運すぎ。

「当の本人、美穂の父親は仕事があるとかでこっち残るらしいけど、母親と妹の三人で行くらしい」

前言撤回。

運は全く無いな澤田パパ。可哀想すぎるだろ。

「つーわけで、三人で遊ぼうぜ非リア共」

「川底に埋めるぞ」

「海にばら撒くぞ」

突然喧嘩をたたき売られたので、言い値で買う。

十二月の海川は冷たいぞ、覚悟しろゲス野郎。

須田がどこからか取り出した荒縄で暴れる五十嵐を縛っていると、山吹さんと牛込さんがこちらに声をかけてきた。

「誠く「やめろ馬鹿共、二人がかりは卑怯だぞ…っ!」…え何? それ、何やってるの?」

「刑罰執行」

「罪人必殺」

「め、目がイってる…」

牛込さんにドン引きされた。

これも全部五十嵐が悪い。ピラニアの餌にしてやろうか。

須田を見る。他でもない牛込さんに引かれたことで一度死に、まだ死にきれねえと修羅となって蘇ってきやがった。こいつの怨念は強いぞ。

「あはは、ほどほどにしときなよー?」

「わかっ、分かったから! 謝るからっ!」

「無理難題」

「悪滅即斬」

「なにその四字熟語縛り。いや違うのも混じってるけど」

山吹さんに呆れられた。

これもまた五十嵐が悪い。キノコの苗床にしてやろうか。

「それより明日の件なだけどさ? 一応聞くんだけど、ちゃんと聞いているよね?」

「?」

「何の話?」

「んー! んー!」

縛り終わり、ガムテープで口を塞ぎ、早速自然の厳しさをその身に刻みつけてやろうと、身動きの取れなくなったクズを肩に担ぐ。

それより明日の件とは。俺も須田も、多分このクズも何も知らな

い。

え、何かあったっけ？

「え、本当に何も聞いてない？ えー、うつそ、ほんと…？」  
何か俺らが把握してなきやヤバいことでもあるんだろうか。

え、もしかしてみんなでクリスマスパーティーするとか、そういう話？ クラスでやるとか、仲良い連中で集まるとか、そういう系の。だったら全然参加するが？ プレゼント交換用のブツはこのグッズの遺品から見繕おう。

「明日ね？ CiRCLEでライブやるの。クリスマスライブ。その参加者一覧にね？ Capliberteも入ってるんだよね」

「は？（ん？）」

？ ？ ？ ？ ？

山吹さん曰く。

今回開催されるクリスマスライブは、まりなさん企画のものらしい。

ポピパ、アフロ、Roselia、ハロハピ。そしてなんとパスパレまで出演が決まっている、わりと繁盛しそうな聖夜ライブ。

出演者はまりなさんの独断と偏見で声がかけており、その中には我らCapliberteも含まれているのだという。

いや、そんな話聞いた事ねえよ。

「どういうわけっすか、これ」

という訳で、俺らはCiRCLEへと足を運んでいた。

もちろん、主催者たるまりなさんに話を聞くためである。五十嵐は巻かれたままだ。

「え、話いつてなかった？」

「来てないですよ。つーか来てたら（クリスマスライブに予定があると分かっていたら）五十嵐が（下手に俺らを挑発して）死ぬこともなかった」

「ごめんちよつと意味わかんない」



五十嵐は無駄な犠牲だったというわけだ。

いやまあ、俺らに喧嘩を売ってきたのはあいつ自身なので、八割方自業自得なんだが。

「死んでねーよ」

「まりなさん、五十嵐に謝ってください」

「追悼の意を込めて」

「…えと…あ、あーめん？」

「だから死んでねーって」

さて、茶番はさておき本題だ。

ブッキングは主催者兼ディレクター兼その他諸々の運営の…いや凄いなまりなさん、優秀かよ。まあそこは一旦置いて。とにかく、今回俺たちへの連絡が無かったことは、まりなさんのミスだ。

今回のクリスマススライブは、すでに告知もされているらしい。その中に出演者一覧もあり、前売り券はとづくに販売開始されている。

自意識過剰とか、そういうのでなければ、Capliberteにもファンがいてくれるはずだ。俺たちの演奏を楽しみに、ライブまで足を運んでくれる人もいるかもしれない。

そんな中で、本番を明日に控えた今日になって、演者である俺たちが初めて出演の話を知る。これは問題だ。

まあ本番当日になって発覚するよりはマシかもしれないが、それでもたった一日で「はい分かりました」と出演できるわけではない。

そこの学芸会や無償で行うイベントと違い、今回は売買が発生している。

お客がわざわざ金を払って見に来てくれるライブで、半端なものは見せられないし、見せてはいけない。

それに、俺たちにはオリジナル曲というものがたったの一曲しかない。あとはコピーするしかないのだが、ライブであれば少なくとも全部で三、四曲はやるべきだ。

たった一日で数曲のコピー。これは、言うほど簡単なことではない。

個人で楽曲を覚える作業があり、バンドとして音を合わせる練習も

必要となる。

要するに、時間が足りないのだ。

「そっか、ごめんね三人とも。あなたたちへの声掛けを香澄ちゃんに頼んで、きちんと確認しなかった私のミスだよ」

「あ、もしもし戸山？ うん、俺今CIRCLEにいるから来い。ダッシュで。は？ 何で走らなきゃいけないのか？ うるせえ黙って走ってこい」

「無駄に詰め寄ってごめんなさいでした」

戸山を呼び出し、その上で三人揃ってまりなさんに全力で頭を下げた。

？ ？ ？ ？ ？

戸山を思いっきり叱ったあと、俺はエゴサを試してみた。

自分の名前ではなく、バンド名でだ。

自分の名前でエゴサしたら殺害予告とかありそうで怖いし。

とりあえずTwitterでエゴサを試してみたところ、

『カプリ出るなら見に行こうかな』

『カプリ新曲あるかな』

『Roselia目当てでチケット買ったけど、Caplibertとかいう時代への超逆バリバンド気になる』

『カプリがクリスマススイヴに女と予定あるとかじゃなくて良かった』

『カプリベルテとかいう野生のプロ集団を見るために彼氏との約束蹴った』

とまあ、色々出てきた。

所々数は少ないもののちよつと夢女みたいなのがいて背筋が凍ったりしたが、俺たちを楽しみにしている人達も少なからずいるということを確認し、今更「やっぱ出ませんってへぺろ」は通用しないだろうなど思った。

というわけで、徹夜で練習開始である。

場所はC i R C L E。まりなさんが「責任は私にもある」といい、オーナーに交渉して一部屋を丸々夜通しで使えるようにしてくれたのだ。

五十嵐は特に自前の楽器は必要ないというので、俺と須田だけ急いで家に帰り、楽器を持ってきて練習開始。

そして数時間が経過した。

「おいコラへばんな五十嵐イ!! 手数減ってんぞ!」

「るっせえ! お前こそミス増えてんぞ関口!」

「あはは、さつまいもアイランド、あはは」

「! ヤバい、須田が壊れた!」

「無理もない、徹夜で十時間は弾きっぱなしだからな...」

「ビーフシチューはね、豚さんのお肉の部位と、トウモロコシの焼き加減が肝心なの」

「落ち着け須田! ビーフシチューはビーフ使ってっからビーフシチューなんだよ!」

「こんなんでも演奏のクオリティはどんどん上がってるから怖いんだよな、このベージスト」

「あ...」

「!? おい須田が倒れた!」

スタジオに籠ってから約十時間。

さすがに疲れが限界を迎えてきたことと、壊れた須田を治すために、一度スタジオを出て、外のカフェテリアで空気を吸う。冷たい空気が肺に入ってくる感覚、嫌いじゃない。

つーかもう空明るいんだけど。白んできたとかいうレベルじゃない、普通に朝じゃん。今何時よ? 九時? 朝じゃん(疲労)

「関口、ライブ始まんのか何時からっつってたっけ?」

自販機で買った水をぶっつけたら復活した須田が、机に突っ伏しながら聞いてきた。

「十三時からリハ」

「つーことは...あと四時間? いやセッティングとかもあるし、長くて三時間ちよいか...」

「まあそこそこ纏まってきたし、あと一時間も練習すれば何とかなるだろ、多分」

ホットのココアを買ってきた五十嵐は一時間あれば大丈夫だという。まあ確かに、あとは最終確認するだけだ。

あとはちよつと仮眠しよう。徹夜でライブつて本当にしんどいかな。ライブ衣装は・・・まあ制服でいいか。須田も五十嵐も私服持ってきてないっぽいし。あと普通に風呂に入りたい。旭湯行こうぜ。

「んじや俺ちよつとロビーで仮眠してくるわ。遅かったら起こしにきてくれ」

ココアを飲み干した五十嵐は、そういいながら大きな欠伸をし、ロビーに向かつていった。五十嵐が起きたら俺も寝に行こう。

つーか俺も何か飲みたい。抹茶オレとかないかな。

温かい飲み物を求めて席を立とうとした時、俺たちに声が掛けられた。

「おっはよー☆ うわ、ひどい顔。寝てないの？」

振り向くと、そこにはリサ姐が。

朝からバチバチにメイクをキメ、こんなにも寒いというのに肩出し太もも出しのニットセーターを着ている。双丘の谷とか朝日に輝く太ももと

か、ちよつと徹夜明けの自分には刺激が強すぎますね。

「人の顔みてうわとか言わんといってください。寝てないですよ」

諸事情により立てなくなったので、飲み物は諦めて席につく。

「香澄から聞いてたけど、ホントに徹夜だったんだ。朝ごはん作ってきたけど、食べる？」

「え、食べない以外に選択肢が？」

「バカヤロウ関口、家宝にするつー選択肢があるだろ」

「それだ。美少女ギャルの手作り飯、食ったら勿体ないもんな？」

「いや食べな？」

呆れつつ、トートバッグから二段の重箱を取り出したりリサ姐。

よくこんな大きな弁当箱持ってきてくれたな。重かったろうに。

蓋を取ると、上段には筑前煮や煮つころがし、他にも色鮮やかなおかずたちが。

さらにその上段を取ると、下段に純白のおにぎりたちが所狭しと詰められている。

小学校の時の運動会を思い出すなあ、これ。

「んじゃあお言葉に甘えて、いただきまーす」

「はいどうぞ、めしあがれ☆」

割り箸を渡された俺は、まず筑前煮に手を伸ばす。

柔らかい人参を口に含み、咀嚼。

「… うつま」

「あは☆ ありがとう」

次にレンコン、椎茸、鶏肉と続ける。

そして口の中にうま味がいっぱいになったところでおにぎりを投入。

えくせれんと（激ウマ流暢発音）、完璧な黄金比率だ。箸が止まらない。

「お味噌汁もあるよ」

魔法瓶から味噌汁を出し、紙コップに注いで渡してくれた。

一口啜る。温かい。朝の冷たい空気で冷えてきていた体が温まっていく。味も美味しい。何これ最高。

「… リサさん」

「ん〜？」

「毎朝俺に味噌汁作ってください」

「え〜、どうしよつかなあ〜」

「日給一万出します」

「ドル？」

「すいません円をお願いします」

とりあえず手付金として一諭吉を財布から出そうとしていると、突然頭を軽い衝撃が襲う。

誰かに叩かれたのか。そう思い振り返ると、そこには氷川さんの姿が。

「あ、氷川さん。おはようございます」

「はい、おはようございます。…ではなく、本当に現金を出そうとしないてください」

「なんだ、聞いていたのだろうか？」

「一体いつからそこにいたんだろう。」

「まーまー紗夜、海くんも別に本気で言ったわけじゃないだし☆」

「え？ いやわりと本気ですけど？」

「リサさんレベルのギャルに毎朝飯を作ってもらえる幸せ。」

「一万円くらいで買えるなら安いもんだと思うけどなあ。」

「へ？ あ、いや：：あ、あはは！ もく、年上を揶揄うもんじゃないよ？」

別に揶揄ってはいないんだけど：：なんとなくこれ以上この話題を続けたらヤバい気もするし、なぜか須田からの殺意がそろそろ痛いレベルなので話を変えよう。

「そういうや、何でお二人はこんなに早いですか？ 今日、十三時からですよ？」

「アタシはほら、海くんたちが徹夜で頑張ってるって聞いたから、差し入れ持って行ってあげようと思って☆ あとアタシたちも本番前に合わせ練習しよってなってたしね」

「なるほど、貴女が女神か」

やはり貢物として諭吉を渡すべきだと思い再度財布に手をかけ、まともや氷川さんにチョップを食らう。

「そんなに痛くない辺りに氷川さんの優しさを感じました、まる」

「紗夜も『疲れた脳には糖分が必要ですよ』って、クッキー焼いてきてくれたんだよ☆ ねっ、紗夜？」

「疲れて本来の演奏が出来ないなど、私たちの対バンとして認められませんか」

「なるほど、女神が二柱、と」

諭吉を出そうとしてまた叩かれた。

「痛くない。優しい。」

「ちなみに、徹夜での練習の成果はどう？ なんとかかなりそう？」

うまうま言いながら朝飯を食べ終え、デザートとしてクッキーを齧っていると、リサさんからそんな質問をされた。

朝飯はちゃんと五十嵐の分も残してある。残してなかったら文句言われそうだし。

「そつすねー。まあどうにかこうにか。あ、新曲も出来たんすよ」

「え、新曲？ たった一日で？」

「はい。まあインストですけどね」

「それでも十分凄いことでは？ 私たちが作る時は、早くても一週間程度はかかるのだけれど…」

「うちのメンバーは変態なもので」

特に須田がヤバイ。

音楽理論もロクに知らないくせに、どんどんフレーズを考えていくんだもん。しかもかつこいいやつ。

「今回の新曲の曲名は？」

「『クリスマスは別にキリストさんの誕生日じゃない』」

「ん？」

「『クリスマスは別にキリストさんの誕生日じゃない』」

クリスマスは別にキリストさんの誕生日じゃない。

「相変わらずですね」

「いやー、それほどでもありますよ」

「褒め言葉じゃないと思うなー」

マジ？ 前回（既存国家の転覆からの迅速な建国）よりかはマシンナーミングだと思ったんだけど。

今回の新曲は、四分三十秒という、まあ比較的平均的な長さになっている。

クリスマスっぽさを意識して作った曲で、プレゼントを楽しむに子供たちの楽しいな雰囲気から、真夜中の子供が寝ねて静けさに支配された街、こつそりと不法侵入するサンタ、そして翌朝の子供たちの歓喜。そういったものをフィードバックで曲に落とし込んだ。

全体的に明るい曲調となっており、楽器隊もゴキゲンだ。

夜の静けさ、つてところは基本須田のベースソロになっていて、こ

こは須田が一人で考えた。世に「須田っていうヤベーベーストがいるってよ」と知らしめることとなるだろう。それくらいかつこよくてオシャンティーなフリーズだし、何より演奏がバチくそに上手い。

時計を見ると、短い針が十を指している。

もう一時間経ったのか。

そろそろ風呂屋行きたい。つーか五十嵐起きて来ねえな。そろそろ起こすか。

「海〜!!」

「ごちそうさまでした、とお礼を言い、席を立とうとする。

すると、遠くから俺を呼ぶ声が聞こえた。

そちらを見ると、ピンク髪とたわわを揺らして走ってくるひまりの姿が。

だから徹夜明けの男子高校生には刺激が強いんだって。今回はまだ立てるけど。あ、須田が立とうとして座った。分かる（分かる）

「海、おはよっ！ 須田くんもっ。あ、リサさんに紗夜さんも！ おはよーございます！」

朝から弾けるくらい笑顔を見せて、今日も今日とてえいえいおーなひまり。ライブ本番だつてのに、元気なことで何よりだ。

初ライブの時は緊張しすぎて夜中まで俺に電話に付き合わせた上、寝不足でフラフラになりながらライブしてたのにな。成長したもんだ。

「はよ。どうしたひまり、まだライブは始まんねーぞ？ リハもまだだ」

「知ってるよー。海たちが徹夜で練習してるって聞いて、朝ごはんまだだろうなって思って！ 朝ごはん作ってきた！」

「えっ」

「はいこれ！ 須田くんと、あと五十嵐くんの分もあるから！」

「えっ」

ひまりが担いできたリュックから、本日二度目となる重箱が登場した。



にっこにこのひまりが箱を開き、中から茶色の強いおかずたちが。

「あ、俺五十嵐起こしてこなきやだから」

「待て。逃げるな須田」

俺の制止を聞かず、須田はスタコラとC i R C L E内に逃げていく。

腹いっぱいなところに油物。しかも徹夜明け。いかに食べ盛りな俺らといえど、さすがに胃に来る。

逃げた須田を追いかけていたい気持ちもあるが、ひまりを置いて行くわけにもいかない。それは申し訳なさすぎる。

こうなったら五十嵐を待つしか…

ピロン（LINE通知音）

誠『五十嵐いねえんだけど。なんか「美穂に見送りに来いって言われたから行ってくる♡ 追伸 十一時半には戻ります」って書き置きあるんだけど』

いやLINEしろよクソ彼女持ちが。文明の利器を使え現代人。

誠『じゃあ俺寝るから。おやすみ。十一時くらいに起こして』

K a i『ふざけんな帰ってこい』

爆速で返信してみるも、もはや既読すら付かない。

マジで逃げやがったなああの野郎。俺を一人にするな。

「あははー、かぶつちやったね。なんか悪いことしたかな…？」

リサさんが申し訳なさそうに頬をかく。

それを見たひまりも、現状に気が付いたようだ。

「え、もしかして、もうご飯食べた…？」

どこか… というより確実に悲しみの籠った声と、少し潤んだ目。

おい待て、そんな顔するな。心がしんどくなってくる。

胃を決し、もとい、意を決し。

箸を手取る。

「… いやあ、徹夜で食べ盛りで男の子だから、お腹が空いてきたなあ」

「え、いや、無理しなくても…」

「高校生で朝でライブ前だからあれがこうなってウルトラ油物が食べ

たい気分だなア!!!」

お母さんと姉ちゃん、ついでにお父さん曰く。『女の子は泣かせるな』

へへっ……——やってやんよ！ 俺やってやんよ!!!

この後、めちやくちや食った。

? ? ? ? ?

さて、ライブ本番。

演奏順は先週辺りにくじ引きで決まっていたらしく、俺たちカプリベルテはトップバッターとなっていた。

くじ引きは俺らの代理としてまりなさんが引いたらしいんだが、その場に俺らがない時点で連絡ミスに気付けと言いたい。まあ過ぎたことだし、なんとかかなりそうだし、もういいんだけど。

『はい皆さん、元気ですかー？ 俺は眠いです』

『おい』

ライブの火蓋を切るMC。

まあ一曲演ったあとではあるんだが、一曲目はインストである『既存国家の転覆からの迅速な建国』だったので、オーデイエンスに向けて声を発するのは初めてだ。

今回もいつも通り、マイクを持っているのは俺と須田。五十嵐はコーラスもないため、マイクを持つ意味がない。

『えー、いろいろありましてね。昨日寝てないんですよ俺』

『寝てない自慢とかすんな、キモい』

須田は文句を言ってくるが、別に自慢とかじゃなく事実だし。

つーか須田はいいよな。いい感じに腹が膨れた辺りで眠りにつけたんだから。まじいいよな。

とまあ、俺らしか分からないネタは置いていて。

『えー…… あんま喋ることないな』

じゃあさっさと始めろ、とヤジが飛んでくる。

おい今叫んだの佐藤だろ。お前今夜ライブあるんじゃないの。いいのにかこんなどころにいて。

『えー…。まあヤジの通りなんで、次いきまーす』

『お前、ほんとこういうの下手だよな。内輪なら饒舌なくせに』

『うるせえ次いくつたらいくんだよ!』

なんだ内弁慶かー(ヤジ)

そういうオタクいるよねー(ヤジ)(悪口)

かわいいと思うでー(ヤジ)(慈悲)

『はい新曲いきます!! いくつたらいきます!! いいから聴け!!』

新曲「クリスマスは別にキリストさんの誕生日じゃない」!!』

全てを振り切るようにギターを掻き鳴らす。

新曲のお披露目って流れじゃない。こんな新曲のお披露目は嫌だった。

でも始めるつたら始めるんだよチクショウ!!!

(新曲披露中)

『はい終わり! 次ラスト!』

『怒んなよ…。』

『サイ○イで「八月○夜」!!』

季節への反逆だ!! クリスマスなんてクソ喰らえ!!! (ヤケクソ)

サンタさんはいるもんっ！

トリのRoseliaの曲も終わり、クリスマスライブの幕が降りる。

やっと終わったと息をついたのもつかの間。

『アンコール!! アンコール!!』

会場ではまさかのアンコールである。

Roseliaだけでもう一曲やるのかと思ったら、これまたまさかの全バンド追いの一曲をやるらしい。さて、練習してないぞ。

「おいお前ら、何なら弾ける?」

恐る恐る須田と五十嵐に問いかける。

最悪、俺たちはやらなくても良いのでは? そう思っていた。だって練習してないんだもん。是非もなし。

「最近聴いてるのはドロ○の閃○。個人的に練習してたから弾ける」

「俺も閃○。映画良すぎて五回見に行った」

「マジかお前ら」

閃○か…。確にかっこいいし、映画も良かったと思う。姉ちやんに付き合わされて見に行った。まあ今までのガンダ○シリーズをそんなに知らないから内容はよく分からなかったけど。絵が綺麗でした(小並感)

と、いうわけで。

「やってみせろよ、マ○ティー!!」(五十嵐)(地声)(クソデカ)

「なんとでもなるはずだ!!」(須田)(マイク)(適正音量)

「厄介なものだな。生きるといふものは…」(俺)(マイク)(哀愁)

十分ちよいでコピーしてやったぞ。誰か全力で褒める。俺を。

須田はまあ…。まあ須田だし。何より練習してたっていうからな。

ほぼほぼ完璧だった。

五十嵐はなんで叩けたんですか？ この曲結構難しいだろドラム。手数多いわ速いわ複雑だわで。まあフィーリングでテキストに叩いてた部分もあるけど、それでも「あく、そういうアレンジもいいよね」みたいな感じだった。化け物め。

んで俺はというと、もう訳が分からん。

とりあえず曲の進行を覚え、明らかにギターが二本ないと物足りないので六弦を三音下げ、五弦を二音下げ、それ以下はレギュラーにして無理やりコードらしきものとリードギターの単音を同時に鳴らした。脳筋とかいうレベルじゃない。というか本当によくなんとなったな。

まあ実際、本家とはだいぶ違った音になっていると思う。ぶっちゃけ全部は覚えきれなかったから半分くらいその場で作って弾いてたし。歌詞に至っては普通に覚えられなかったから譜面台にスマホ置いてた。全然褒められることしてませんね。ごめんなさい。

ライブっていう環境下だったこと、そして「これが俺流のアレンジですが、何か？」ってすました顔をして弾いていたことから、その場の雰囲気はどうにかなったんだろうと思う。

昨日は「金払って貰ってるんだからハンパなもんは見せられねえぜ！」とか言ってたけど、アンコールは勘弁してほしい。応えただけで褒めてくれ、頼む。

最終的に大トリはやっぱRoseliaで締められ、聖夜前昼祭ライブは今度こそ幕を降ろした。

聖夜前昼祭が終わるとどうなる？

知らんのか。聖夜前夜祭パーティーという名の打ち上げが開催される。

パスパレは仕事があるから帰るらしいけど。

「それじゃあ、二時間後にCIRCLEに集合だよ！」

香澄が、今度はちゃんと連絡してくる。

なぜ二時間後かというと、皆一度家に帰ってプレゼントを持ってくるらしい。なんでもプレゼント交換があるんだとか。

皆と別れ、俺たちカプリベルテは「風呂に入りたい」ととりあえず旭湯に向かうことになった。

その後は三人でテキストにプレゼントを買いに行く予定だ。

旭湯に着き、暖簾を潜る。

ここは昔ながらの銭湯で、玄関から入るとすぐに番台があり、そこから男女に別れる、といった作りになっている。

最近流行りのスパ―銭湯みたいに、食事処や寝られるほどの休憩スペースなどはないが、このレトロな感じがなんとも。

温泉ソムリエな俺だが、別に銭湯も嫌いじゃない。むしろ好きまである。特にこの旭湯は小さな頃からお世話になっているため、高校生になった今でもちよくちよく来ている。

「ばあちゃんこんちやー」

「はいはい… あら、海くん。お友達も一緒かい？」

番台に座ってボーツとしていたばあちゃんが、こちらにニツコリと柔らかな笑みを向けてくる。

昔馴染みの旭湯の番台。小さい頃はお年玉なんかをせがみにきた仲だ。

「そー」

「あらあら、海くんが男の子のお友達を連れてくるなんて。ひまりちゃんたち以外にも、一緒にお風呂に入るお友達がいたんだねえ」

「一緒に風呂に入る…？ おい関口。説明」

怖えよなんだよ須田このやろう。

「一緒に入ってたって別に本当に一緒に湯船に浸かってたわけじゃねえからな？ そうだよなばあちゃん」

「… はえ？ なんだってえ？」

「そんな難聴系主人公みたいな…！」

「ああ、そうそう、そうなんだよ。最近、耳が遠くてねえ」

「今のは聞こえたのか。本当に主人公くさいな、このばあさん」

感心したように五十嵐が呟く。なに感心しとんねん。

てか大丈夫かな、ばあちゃん。最近足腰も弱くなってきたとか言っていたし、受付以外は娘さんに任せて番台に座ってるだけとはいっても働いてるのは辛そうなものだが。

「でもねえ、来年からは親戚の子がくるんだよ。それを機に娘に店渡して、あたしや引退だねえ」

「へえ。じゃあ寂しくなるね」

ばあちゃんが番台にいないのは寂しいが、まあそんなことより体の方が大事だ。

「その子ねえ、岐阜に住んでるんだけど、羽丘を受験するらしいんだよ。合格したら、ひまりちゃんたちの後輩さね」

高校で進学のために上京とか。よくやるなあ。

まあ無事合格したなら顔を合わせる機会もあるだろう。この銭湯とか、あとひまりたち経由とか、いろいろ。

面白いやつならいいなあ、と思いつながら、俺は入浴代を払って暖簾をくぐった。

「関口。説明」

まだ言ってたのか。

? ? ? ? ?

時間は過ぎて打ち上げ開始時刻。

「「カンパニー!!!」」

C i R C L Eを貸し切り、かつ弦巻家監修という大クリスマスパーティーが開催された。

出演者だけで二十三人。そこに黒服さんやまりなさんなど、大人を含めると三十人前後になるという大人数。普通に手狭だし、どうせ弦巻家監修なら弦巻家でやれば良かったのでは? 関口は訝しんだ。

「海〜! お疲れ様!」

乾杯の音頭が終わったあと、ひまりがピンク髪と肉団子(最低比喩)を揺らながらこてこてと近寄ってくる。

「お疲れ」

「今日も海すごかったよ！ 新曲もかっこよかったし！」

「だろ？ もっと褒めろ」

「へへへ、すごいすごい」

おいやめろよ。素直に褒めるな。照れるだろ。

てかぶつちやけそんなにすくないからな。アンコールとかひどいもんだつたろ。

「あ、そういえば！ 海、明日って予定あるの？」

「明日？ いや、五十嵐とかいうリア充を東京湾に沈める以外には特にないけど…」

再確認して泣きたくなってきたな。

「あ、クリスマスは予定あるんで！」って意味の無い見栄で仕事断つといて予定なしとか。

「ほんと？ じゃあ明日遊び行こーよ！」

「ええ…？」

「なんか嫌そうな顔された!？」

いやだつてお前。今日の疲れがな？ こちとら寝てないんだ。そのうえこの打ち上げでさらに体力使つて、明日は昼過ぎまで寝るって決めてるんだよ。クリぼつちは寝て過ごすのが一番だ。外に出なければ世間のクリスマス感を見ることもないし。

「せっかくのクリスマスなんだよ!？ 遊び行こうよ！」

「ちなみに行き先は決まってるのかよ」

「え？ えつとねえ… お、お台場… とか？」

「寒い。却下」

つーかクリスマスのお台場とか地獄だろ。デートスポットじゃねえか。

そんなとこ行ってみろ。イチヤイチャしてるカップルを恨み辛みの籠った目で見たあと「ちよつとすいませくん」とか言つてカップルの間を引き裂くように通る遊びくらいしかできなくなるぞ。

「じゃあよみう○ランド！」

「寒い。却下」



「六本木〇ルズ！」

「場違い。あとやつぱり寒い。却下」

「う〜う〜！ あ、すみ〇水族館！」

「水族館は行きたい。でも却下」

「なんで!?!」

デートスポットばかりじゃねえか。バーサークしてもいいなら行くけど。… いやしたくはないな。した後に虚しくなるだけだし。

「遊ぶにしても、どこ行くとかは他の奴にも聞いた方がいいんじゃないかね？ どっか行きたいところあるやつもいるかもだし。寒い場所にや行かんけど」

「ほかのひと…?」

「? いつもものメンツで行くんじゃないの。アフグロの」

「え」

え、何？

「いえーい！ 海くん飲んでる〜!?!」

ひまりの反応を訝しんでいると、元氣ハツラツリポ〇タン香澄がウザい絡み方をしてきた。

「酒臭い。近寄んな」

「私お酒は飲んでないよ!!?!」

デフォで酔ってるからなあ、香澄。

いやでも本当に酒臭い。アルコールの臭いがする。そう、飲んだくれている姉ちゃんを前にした時のような臭いが――

「いえーい！ 弟飲んでる〜!?!」

「ヒエツ」

あまりの衝撃に変な声出た。

「あ、希<sup>のぞみ</sup>さん！ いえーい！」

「香澄ちゃんいえーい！ ひまりちゃんもー!」

「え、あはい、いえーい！」

背後から這い寄る混沌から肩に手を回され、姉ちゃんが手に持っているジョッキからビールの雫が顔に飛ぶ。うわくつき。ビールの臭いって苦手なんだよなあ。

「なんで姉ちゃんがここにいんだよ。今日は彼氏と飯食べに行くつってたら」

「あ、それ聞く？ 聞いちやう？ しよーがないなー、そんなに気になるなら話してやんよー」

「あ、やっぱいいです。どうせまたフラれたんだろ」

「違うやいー！」

ええく？ ほんとでござるかあ？

今までの彼氏にはフラれてきただろ。なんか思ってたのと違うとか言われて。

まあ姉ちゃんの外ではめちやくちや猫被ってるからな。何回か外での姉ちゃんを見たことあるけど、めっちゃ清楚だった。でも蓋を開けてみればコレだもんなあ。詐欺って言われても仕方ねえよ。

「突然『希ちゃんは強いよね。俺なんかがいなくても一人でやっていけるくらいに』とかイミフなこと言われてさー？ なーんかほかの女とコソコソ会ってるっぽいし、シャンパンぶっ掛けてフツてやった！

ねーどー思う!？」

「男を見る目がない」

「あたしが悪いってか!? わーん！ ひまりちゃん慰めてー！」

まあ、今回に限っては男が悪いかなあ。

でも、ひまりに泣きついて胸に顔埋めながら「ふほおー！ 相変わらずいいおっぱい」とか人様に見せられない顔で言ってる姉ちゃんも姉ちゃんだと俺は思う。

「あ、ところで弟よ」

「なんすか姉」

人格入れ替わったんかってくらい真顔なのなに。怖いんだけど。

「明日はあたし友達と朝からやけ飲みしにいくから家いないしオールする予定だから帰らないの、お母さんも仕事で今日から明後日まで家帰れないって言ってたから」

「へー」

お母さんも大変だな。

「へーじゃないの。晩ご飯どころか朝ご飯からずつとご飯ないから、

あんた明日は外で食べてきな」

「あいあい」

「つてことでひまりちゃん、明日この愚弟連れ出してくれる?」

「え?」

え?

「愚弟、あんたちよつとこつち来な」

ひまりの胸から名残惜しそうに、それはもう本気で名残惜しそうに離れた姉ちゃんが俺を連れてひまりや香澄から離れたところまで俺を連れて行く。だから何、怖いんだつてばよ。

「あんたバカア?」

「あ?」

なんだア? テメエ... (ヒエラルキーへの反逆)

あ、ごめん姉ちゃん! 生意気な口聞いてごめん! 拳握らないで

!! (失敗)

「あんたさつきひまりちゃんに誘われてたでしょ。それに行つてきなつて言つてんの」

「え、いやでも」

「でももへチマもないの」

拒否権なしとか。

「あたしや可哀想に思ったよ。ひまりちゃんが」

「なんでさ。てか明日つて蘭とかも入れたいつもの幼馴染メンツで行くんだろ」

「あんたバカア?」

さつきからなんなんだそのエ○アネタは。

「ひまりちゃんは『二人で』つて思つてんのよ」

「それこそなんでだよ。クリスマスにひまりと二人で出かけるとか」

それじゃあまるでカップルじゃないか。

「は? はく... 期待外れなことだけはせんでくださいよ。ほんま、勘弁してほしいわ」

「だからなんなんだよ」

呆れきった顔やめろ。無性に腹立つ。

「ひまりちゃん！ このバカ明日行くってー！」

「え!? ほんとですか!？」

「え、いや俺まだ何も…」

「行け」

「ヒエツ…… ハイ……」

声が女子大生のそれじゃないんよ。ヤーさんとかそっち系のそれなんよ。逆らったら殺される気がする。

というわけで、いや全然どういうわけかは分からんが、ひまりと二人で出かけることになった。

余談だが、どうやら須田は牛込さんと出かける約束を取り付けたらしい。おめでどう。結局クリスマスに予定がないのは五十嵐だけになっちゃったので、須田と二人、全力で「ざまあwww」と言っちゃったら、仏のような顔で「二人とも、一足早い春が来て良かったな」って優しく言われたので己の矮小さを鑑みて死にたくなくなりました、まる

? ? ? ? ?

打ち上げが終わり、時刻は十九時。

外に出てみると既に暗く、星々の微かな明かりが空を彩っている。

プレゼント交換で入手したほぼ実物大の豆柴のぬいぐるみ（氷川さんセレクトション）を抱きながら、俺はボケつと空を見ていた。

ホワイトクリスマスなんてものが世間では人気らしいが、ぶっちゃけ寒いのは得意ではないので雪に降られても震えるだけであまり嬉しくはならない。小さい頃は少しでも雪が降ろうもんなら犬のようにはしゃいだもんだが、今ではそんな純情さは持ち合わせてないんだ。交通機関麻痺するし。

口から漏れる白い息がだんだんと薄くなり、空気に溶けていく。冬には冬の風情があるが、やっぱり夏が好きだな。

そんな事を考えながら帰路に着こうとすると、誰かに肩を掴まれ

た。

別段痛くもないが、不意に掴まれたのでちよつとびつくりした。振り返ってみると、お嬢がいる。彼女は寒さなんて感じさせない太陽のような笑みを浮かべ、子供のような無邪気な声でこう言った。

「海！ 二次会に行くわよ！」

何それ聞いてない。

さて、所変わって弦巻家本邸。

突然目の前が真っ暗になったと思つたら、気付いたら弦巻家に入った。何をされたのか分からなかったが、まあ普通に拉致だろうなあ（いつもの）

拉致誘拐の類いはこの一年で慣れた。慣れてしまった。ので、もう何も思うところはない。以前なんとか大統領と会合した大広間にて、俺は二次会に強制参加させられていた。（26話「ふつつ。つまり、そういうことさ」参照）

「そうだ、ミッシェルとミツケルも呼びましょう！」

などと言い出したお嬢を俺と奥沢さんとか説得し、生身で高級そうな炭酸のジュースを飲み、これまた高級そうなローストビーフに舌鼓を打つ。さすが世界の弦巻、基本「質より量！」と豪語する素人男子高校生でさえ味の違いが分かるレベルのものを用意している。

おいし〜！（知能5）

「お疲れ様です、関口くん」

「んあ、ひふああはん」

「飲み込んでから喋りなさい」

お母さんかな？

もぐもぐごつきゅんと口の中のものを胃に収め、改めて彼女の名を呼ぶ。

「お疲れ様です、氷川さん」

シャンパングラスを片手に登場した氷川さんは、一見すればどこぞの女優のようだ。なんと言うか、品がある。

「なんだか、ものすごい空間に放り込まれたわね」

そう言う氷川さんは、どこか気疲れしているようだった。

まあその気持ちも分かる。体育館くらいあるんでね？というレベルの面積があるただっ広い広間で、全部で三つある出入口にはそれぞれ二人ずつの黒服さん達が立っており、場面はさながら要人の参加する舞踏会のような。俺は慣れてきたが、初めてなら場違い感に戸惑ってしまうのも仕方ないだろう。

「まあ弦巻家についてはこんなものだって受け入れるしかないですよ。遊んでればそのうち気にならなくなります。ほら、今お嬢がバク宙講座してるんで、参加してみたらどうっすか？」

「嫌よ。そもそも、今日はスカートなもの」

ベージュのスカートに手を当て、こんな格好で運動したら中が見えてしまうと示唆する。

そりやそうだ。というかそもそも、体操競技もしていない現役JKがバク宙をしようとは思わない。そう思うのは、どうしても再生数が欲しいティックトックやユーチューバーくらいなものだろう。

「それより、関口くん。貴方、それをずっと抱えているようだけれど、そんなに気に入ったの？」

それ。氷川さんの指す物は、プレゼント交換で手に入れてからずっと抱えている豆柴のぬいぐるみのことだろう。

「ゴンザレスのことですか？ めつつちゃ気に入りました」

「ゴンザレス…？」

左手で胴体と挟むように抱えていたぬいぐるみ——ゴンザレスを一度両手で持ち、目と目を合わせる。くりつとしたつぶらな瞳がこちらを覗き込んでいた。

わんわん〜！（知能3）

俺は犬が好きだ。

犬か猫か、という問いにも犬と答える。まあ、犬猫論争とかいう争いは愚か極まりない行為なのだが。全ての愛玩動物は荒んだ心を癒してくれる。全てを愛せ（過激派）

犬の中でも俺が特に推しているのが柴犬だ。次点でハスキー、ゴー

ルデントトリバー、ポメラニアンと続く。強風に煽られるポメ、大変素晴らしいと思います。

「ま、まあ気に入ってもらえたなら良かったです」

氷川さんも犬好きだからな。

今度柴犬カフェ誘ってみよ（デート）

「氷川さんは紅茶セットでしたっけ？」

「ええ。ティーポットとカップ、それから茶葉が何種類か入っていたわ」

こつちは確か瀬田先輩のチョイスだったか。意外とセンスあるよな。いや、まあ確かに瀬田先輩はセンスの塊みたいなもんではあるんだが。

ちなみに俺が準備したプレゼントは「ジヨジ〇の奇妙な冒険」全巻である。全巻であるッ！ 百三十三冊なのであるッツツ！

購入から会場に持って行くまで、軽いどころじゃない筋トレになりました。

受け取ったおたえは「グレートですよこいつはア」などと供述しており：… ってオメー、さては履修済だな…？ え？ 読んでない？ ネタも知らない？ それであのセリフが出てくるとか、やっぱりおたえは最高ロツクだぜ！

「紗々夜っ！ なあに話してんの〜？」

「ちよ、今井さん!!? なんで抱きついて…!!?」

何やら頬をほんのり朱色に染めたりサさんが、背中から氷川さんに抱きつき、頬擦りをしている。

うーん、これは良き百合のほひ（匂い） 何がどうしてこんなエデンが広がったのか分からんが大変目の保養になる。もっとやれ。

「えへへ〜！ 紗夜いい匂いがする〜！」

「今井さん！ ダメよ、ちよ、あっ…！！！」

光となって消えたい（昇天）

だがしかし、ただのヒューマンである俺には光となることは不可能。

ならせめて、このサンクチュアリを目に焼き付けてやろうじゃない

か！

しかして彼女らの世界に入るわけにはいかない。百合の間に入ろうとする男は死んで然るべし、生きていることを後悔させるべし、そういう法律もある。

よってここでの最適解はゆりゆらららゆりゆりワールドから適切な距離（半径十メートル以上）を取り、完全に気配を消して見守るべきなのだ。

フツ、男（不純物）はクールに去るぜ。

「イエー！ 海くん食べてるウ→？」

クールに去るつつってるじやろがい！！

このノリは絶対に香澄だと思いきその口を塞ごうとしたところで、予想外な顔が目に入る。

え、おまん香澄じゃないやん。山吹どんやん。なして？（困惑）

「あ、おい関口！ さーや止めろ！ そいつ酔ってるぞー！」

市ヶ谷さんが慌てた様子で駆けてくる。

酔ってる？ 山吹どん酔ってる？ なして？（困惑）

「あははっ！ つまりそういうことさア」

「どういうことだってばよ（やはり困惑）」

言われてみれば確かに目が虚ろっぽい。

どうして未成年（姉除く）の会で酔うんですか？

うわ、ちよ、抱きつかないで！ ダメだっていい匂いするから俺だって男なんだから！ こんなところで俺の僕がオツスオツスしたら明日からみんなに冷めた目で見られちゃうだろオ！？

「ば、ほら離れろさーやー！」

「やーん、どこ触ってんの？ 有咲のえっち！」

「うるせえ！ あ、まっ、胸に顔うずめんな！」

「ふわふわたわわ。いい匂い」

市ヶ谷さんが山吹さんを俺からひっぺがし、そしたら何やらくんずほぐれつが始まりやがった。なんだなんだ、百合のバーゲンセールか？（ベジータ）

至高の感触が離れていき、なんとか落ち着いたところでこれだよ。



理性高すぎ高杉くんがブイブイ言わせてる関口さんでも限界はあるのことよ？ 高杉くんなのに関口さんなのか（徹夜&疲労）

「すまねえ関口。あたしが目を離れた、っーか香澄の世話してる間に、さーやのやつウイスキーボンボン食べたんだよ」

「図らずも百合の間に入るような真似をしてみましたので自殺でも決行するかと現実逃避していたところ、市ヶ谷さんから事の始まりを聞く。」

ウイスキーボンボンで酔う？ 何それ漫画？

「ちなみにリサ先輩もウイスキーボンボンでああなった」

ウイスキーボンボンでゆりゆりするギャル、いいと思います。

じゃなくて。

「洋菓子程度でここまで理性なくすとか、そうはならんやろ」

「あ、その返し知ってる！ なつとるやろがい☆」

リサさんもこちらに混ざってきた。そんでこっちにフラフラと寄ってくる。

おい止めろ、ギャル目美人科ってだけでいっぱいいっぱいなのに、その上に酔っ払い艶マシマシ属絡み癖種ってのは俺の深いところによく刺さる！（性的趣向）

ギャルは氷川さんがなんとか押さえつけ、接触だけは回避できた。

良かった、ボディタッチなんてあろうもんなら間違いないく氷川さん市ヶ谷さんにバレるレベルでオツスする。オツスしたらどうなる？ 知らんのか？ ドン引かれる。

それだけで済めばいいが、最悪今までの積み重ねが無に帰すレベルで嫌われる可能性もある。JKに生モノの性を見せつけたらそうもなるだろう。いや別に見せつけはしないけど。

「何か楽しそうなことをしているわね！」

嫌われたくない一心で素数を数え出した俺の前に、バク転でお嬢が乱入してきた。

いいぞお嬢、今ばかりはお嬢の日常的奇行に感謝ッ！

このまま弦巻ワールドでお茶を濁してくれ！

「空を飛んだらもつと楽しいと思うの！ だからみんなでスカイダイ



## 聖なる夜に何を成す

クリスマス。朝の十時頃。

昨日は疲れ切って帰宅後即就寝。九時頃に姉ちゃんが出ていく音で一瞬目が覚めたが、眠気に負けてそのまま魅惑の二度寝を決め込んでいたところに、インターホンが鼓膜を刺激する。

「んあ……はい……」

布団というある種の魔窟からなんとか這い出て、はつきりしない意識の中でよたよたと歩き、玄関を開ける。

うちの玄関は北側にあるので太陽の光が差し込むことはないが、それでも寝起きの眼に流れ込む太陽の光がとても眩しい。つーかめちやくちやいい天気だな今日。

眠気眼が太陽の光に順応するのに一秒程。なんとか目を細めてインターホンを鳴らした人物を視界に収める。

「おっはよー、海！ いい天気だね！」

「…… ああ、ひまりか。はよ」

目の前には、昨日の今日だというのにめちやくちやに元気なピンクの姿が。ひまりが軽く動かたたびに動くものを見てしまい、少しだけ眠気が覚める。意識もだんだんはつきりしてきた。別のものもはつきりしちゃうわ気をしっかり持て俺。

スツと視線を外し、なんとか起床を避けようとする。

そんな俺をどういうわけか上目遣いで見てくる諸悪の根源は、呆れたように嘆息した。

ついでに揺れた。何がと言わんが揺れた。あとカバンの紐がスラッシュしてやがる。あれほど体にフィットするセーターは着るなと……いや、別に声には出してないな。毎度心の中で思ってただけか。

「海へ、きては今起きたでしょ」

「起きてない。いや決して、まだ起きてはない」

「何言ってるの？ 起きてるじゃん」

起きてないもん（鋼の意志）

ダメだ、疲れてるな俺。

一度深呼吸し、朝の冷たい空気を肺に送り込む。

うん、大丈夫。だいぶスッキリしてきた。いやそっちの意味じゃなく。

「すまん、今起きた」

「やっぱりく！ 十時には家に行くからねって昨日言ったじゃん！」

「ごめんて。疲れてたんだよ」

実際、徹夜明けからのライブからの打ち上げ（三次会までであった）は体にくる。若さだけじゃ乗り越えられない限界があった。

「つーかひまり、お前よく朝から起きれたな。昨日はお嬢にあれだけ振り回されたのに」

「被害に遭ったの海だけだし。よく分かんないロボットにさせられて空飛んでた時は夢でも見てるのかと思った」

ロボット（ソリ型飛行機械）

きつとライブでガン〇ムネタをやったことが災いしたんだろうなあ。目をキラツキラさせて「やってみせろよ、マ〇ティー！ ガン〇ムだどっ!? キャツキャツ」とか言ってたし。モビ〇スーツじゃねえよソリだよ（プチキレ）

まあお嬢におもちゃにされるのはいつものことだ。慣れてる。疲労は溜まるけど。体は正直ナノ。

「あー… ちよつと準備すつから。ひまりリビングで待ってて」

「はーい！ あ、紅茶飲む？」

「あ、じゃあ頼む。種類は…」

「アールグレイだよね！」

「ん」

分かってるよねえ。俺の趣味をねえ。

関口家に来ることも多いひまりは、うちのキッチンの配置くらいは

ほんのり覚えているらしい。聞けば、うちの食材等を触る許しも姉ちゃんから出ているとかなんとか。ティーパックの置き場も知っているし、俺の好みも知っている。さすが幼馴染み、と言うべきか。伊達に長く一緒にいるわけではない。

ひまりを家に上げ、リビングに行くのを見送り、俺は自室に戻る。今日どこに行くのかは知らないが、外は年末にしては温かな気温だ。脱ぎ着して調節できる服装がベターだろう。

黒のスキニーに足を通し、上は極暖のヒー○テックに黒のハイネットク。その上にまた黒のパーカーを着る。外に出る時はこれまた黒のライダースジャケットを着る。暑けりやパーカーを脱いでも別におかしくはない格好。にしても見事にまっくろくろすけだ。だが黒は至高。反論は認めぬ。

それと、誕生日にひまりから貰ったネックレスを付けて完成だ。パーカーに隠れて見えなくなるが、脱げば見える、

このネックレス、マジでお気に入りで風呂と寝る時以外はほぼ常時付けてる。学校では制服の下に隠してるけど、これから温かくなつて制服が薄着になつてきたらバレそうだ。対策を考えなければ。氷川さんにポテト渡せば見逃してくれないかな。

一度鏡で全身をチェックし、特におかしいところもなかったので部屋を出る。

リビングに行く前に洗面台に寄って顔を洗い、うがいもしておく。髪は……別に固めなくてもいいだろ。一応櫛だけ通し、寝癖が無いことを確認してからリビングへ向かった。

「お待たせさん」

リビングの扉を開け、入る。

すると、何やらいい匂いが鼻腔を擦った。

紅茶じゃないな、これ。めっちゃうくちや嗅ぎ覚えはあるけどなんだろう。

「あ、ちよーど良かった！ 朝ごはんも軽く作ったから食べて食べて」

喉まで出かけた匂いの正体が分からずにモヤモヤしていると、キツ

チンからひまりが顔を出した。

その手に持っているものは、スクランブルエッグと焼きベーコン。あとプチトマト。嗅ぎ覚えがあったのは焼きベーコンの香ばしい匂いだ。なんかスツキリした。起きてまだ三十分経ってないのにスツキリしすぎだろ、ニユースか？

「悪いな、朝メシ作ってもらって」

「いいよ〜！ 希さんから卵の消費期限近いから使い切っちゃってっ  
て言われてたし」

「俺より関口家の人間してるなあ」

そもそも冷蔵庫に卵があったことすら知らなかったわ。

何やらルンルンとエツグたちおかずの乗った皿を机に置き、キツチンに戻って米をよそうひまり。

白のセーターに赤チエツクの膝より少し高いスカート。その上にエプロンを付けている姿は、何となくくるものがある。いやダメだな、まだ疲れてるのかもしれない。幼馴染にこれ以上男心動かされてたまるか。

机に用意されていた紅茶を一口飲み、一旦落ち着く。

よくよく考えてみれば、女子のエプロン姿なんて見慣れたもんだ。姉ちゃんとか、あと……姉ちゃんとか。いや女子じゃないかもしれないが。

(ブツ転がすぞ)

(ヒエツ……)

何今の寒気、殺気!?

なんか幻聴も聞こえてきたし……やっぱり疲れてんのかな俺。

まあ姉ちゃん以外でも、同級生のなら家庭科実習とかで小中高と何度か見ている。そう考えると、別に幼馴染のエプロン姿がなんだこのやろーという感じだ。うん、大丈夫大丈夫。

「はいっ、お米もどーぞっ!」

「なんだア？ テメエ……」

「なんで!?!」

なんでもないよ (精神統一)

ひとまずお礼を言い、用意された朝食の前に腰を下ろす。

「あれ、ひまりの分は？」

「家で食べてきた！」

「なる。んじや失礼して」

いただきますと合掌し、とりあえずプチトマトを口に放り込む。この酸味と甘みが素晴らしい。世の中にはトマトが嫌いな人も多いらしいが、なんともつたいない。好き嫌いはダメだぞ。農家の人に土下座しろ。

あ、セロリ添えてある。どけとこ（好き嫌い）

「それで？ 今日はどこ行くん」

ベーコンをうまうま齧って米をかつこむ。

ベーコンはパンにも米にも、そしてパスタにも合い、安い速い美味いと三拍子揃った優れたものだ。うんまい。

「とりあえずスカイツリー！ すみだ水族館行って、お昼はソラマチでご飯食べよう！」

「なるほどな」

まあ妥当なんじゃないか？

水族館はデートスポットだしちよいとバーサーカるかもしれないが、ペンギンでも見とけば気持ちも収まるだろ。あそこのペンギン、ファンサめちやくちやいいし。

それにソラマチをふらつくってことは、水族館を出てからもすぐに室内に入れる。スカイツリーはただ高いだけの鉄塔じゃない。めちやくちや施設が充実した観光地だ。最悪、そこにいるだけで一日が潰せるかもしれない。

「お昼食べたら、次は浅草！ 食べ歩きするの！」

昼飯食べた後にまた食べるのか（啞然）

浅草は寒いしこれまたカップル共がウロついてる場所だが、まあお台場とかよりはマシだろう。

「お参りして、そして次は上野公園！ 上野の森パークサイドカフェっていうところのりんごのタルトが絶品らしいんだよ！」

まだ食べるのか（困惑）

ま、まあ上野公園は大丈夫だ。あそこはカップルっていうより家族連れが多いし、バサカる心配もない。だが寒い。どうにかならんのか  
(四季)

美術館とかなら暖房も効いてるしいんだろうけど、俺もひまりも、小中学校の遠足で三回は上野公園の美術館や博物館に行っている。個人的に行った回数も含めれば二桁はいくだろう。なんなら夏くらいにRoseliaのメンバーと動物園行くついでにも行ってるしなあ。

今は特別展もないし、正直あまり唆られはしない。りんごのタルトとやらを食ったら退散して良いだろう。つーか腹に入るかな、タルト。

「その次はアメ横で食べ歩きして、そのまま東京駅の方まで行って晩ご飯食べちゃおっ！」

勘弁してくれ(満腹)

いや食べ過ぎだろ。どう考えてもオーバーフードだわ。吐くぞ。街中で。

ひまりの胃袋は底無しか？ 別腹が五タンクくらいありそうだな。いや少なくとも二つは目に見えたタンクがあるわけだが。

それにしてもよ。ほとんど、つーか最初以外食べてしかいねえじゃねえか。水族館の健全さを見習え。初心を忘れるな。

「む、ちよつと嫌そう…。あんまり良くない？ このプラン」  
考えが顔に出ていたのか、ひまりがちよつと悲しそうな顔で見てる。

ヤメろ、そんな顔しても無理なもんは無理だぞ。胃袋つてもんには限界があるんだ。

「いや、なんつーがちよつと無理があるというか」

「無理？ あ、移動時間とかの話？ だいじょーぶ！ 電車使えば間に合うって、昨日すつごく計算したんだから！」  
すつごく計算したのか。

できてないじゃないか！（胃袋のキャパ的な計算）

「あの、そうではなく」



「違うの？ あ、もしかしてお金の心配？ ふっふっふー、安心してよ海！ 今日はなんと、お母さんがたくさんお小遣いくれたんだよ！」

違う（違う）

いやまあ確かに金の心配もある。そんだけ食べ歩いた後に東京駅周辺で飯を食おうってんだ。さすがに高校生の身分でべらぼうに高い店には入らないだろうが、それでも安い店もないだろう。…え、あるのかな？ 東京駅ってすっげえ敷居高いイメージなんだけど。丸の内〇Lがブランドで身を固めて跋扈してる大人（）の世界ってイメージなんだけど。

単車買ったから、今は俺も懐に余裕があるわけでもないし、あんまり高いところは勘弁してほしい。

「さーらー！ おじいちゃんにお願いしてお小遣い倍プッシュ！ ふふん、今の私は小金持ちなのですよ。どやあ」

自分でどやあって言うのがかわいいと思った（小並感）

おじいちゃんってのは基本孫に甘いもんだからな。いや、うちのじいちゃんはお願いしただけじゃ小遣いなんてくれないけど。将棋か囲碁で勝たなきゃお年玉もくれないからな。なんだよ、「幼き頃より勝負の世界を知るがよい。勝者全取り、敗者に慈悲なし」て。どこの霸王だ。

それにしてもいい笑顔をしやがる。

これはダメだ、行きたくないとは言えない（脆弱の意志）

「…分かった。俺も覚悟を決めよう。幼馴染みの笑顔を守れるのなら、死くらはどうってことないさ」

「何言ってるの？」

いざいかん、暴食の彼方へ。

とりあえず姉ちゃんの胃薬いくつかくすねてこ。

? ? ? ? ?

電車で揺られること三十分と少し。

修羅道の前にあるオアシス、すみだ水族館に入館した。

「ほえー。クラゲの特設コーナーなんて出来たんだなあ」

入ってすぐ、前に来た時にはなかったクラゲの展示を眺めていた。クラゲといえば松原さんだなあ、と連想していると、ひまりに脇腹を殴られる。

「んだよ」

脇腹パンチは蘭にやられすぎて慣れているのか、あまり痛くは感じない。いや、慣れてるのも嫌だな。

それでも痛がっている風に殴られた部分をさすってみせる。

ひまりはとても不服そうに俺を睨み上げていた。こいつ、ちよつと蘭に似てきたな。悪い傾向だ。早く矯正しなければ。

「今、花音先輩のこと考えてたでしょ」

「まあ、クラゲついたら松原さんだろ」

「むー！」

素直に答えたら、今度はポカポカと連打してきた。

最近加減の無くなってきた蘭の鋭い拳には及ばないが、叩かれていい気分はしない。そっちの道は未開拓だし、開拓する予定もないのだ。

「やめろやめろ」

「むー！」

「人語を話せ」

いい加減周りの目も気になる。水族館は比較的静かな空間だ。些細な喋り声ならいざ知らず、むーむーと唸り男を殴打する女など、悪目立ちしないわけがない。

「ほらひまり、機嫌直せって。行くぞ」

ポカられていたひまりの手を取り、そそくさと順路に沿って移動する。

もう少しゆっくり見えたかったが、クラゲ展はお預けだ。

手を握った瞬間なぜか大人しくなったひまりと歩き、続いて見えてくるのは大水槽の上層部だ。

この水族館で一番大きいこの水槽は、縦に長い。そのため、二階と一階の両方から見る事ができる。

二階の部分からはエイなどの大型が回遊している姿がよく見える。近くにソファもあるが、そちらには座らずに水槽の近くで泳ぐ魚たちを眺めた。

「俺、エイって好きなんだよな」

「分かる！　かわいいよね」

完全に機嫌の直ったひまりが同意してきた。

何が原因で機嫌が良くなったのかは知らないが、悪いより断然マシだ。ここは深くは突っ込まず、この流れに任せるべきだろう。

「ああ。あのマヌケな顔がなんとも」

「お腹のとこのって顔じゃないんだよ。知らないの？」

「そんなくらい知ってるわい！」

キヤツキヤと笑うひまりは、先程とは打って変わってとても楽しそうに見える。

本当に、コロコロと表情を変えるやつだ。

それを面倒だなと思うことも、まあ確かにある。機嫌が良い時はいいが、悪い時には宥めるのなだにそれなりの労力を使うからな。

けど、それを差し引いても、ひまりといえるのは楽しいと感じる。

悪く言えば面倒だが、良く言えば、ひまりといえると飽きない。

それに、ひまりのそんな性格に救われたことだって少なくはなかった。

「？　どうしたの海、黙ってちゃって。あ、もしかしてバカにしたの怒った？」

「バカにした自覚はあるのか」

自慢ではないが、俺は友達を作るのが下手だと思う。

好きなもの……例えば音楽とか本とか、そういうもので繋がった人となら、好きなものについて話しておけば大概打ち解けることができるからいいんだが、そうではない初対面の人は少し苦手だ。

現に、今の高校だって、バンド関連で絡んでる奴ら以外の友達はほとんどいない。もしいたんなら、普段から遊んでる。いないから、ひまりたちやポピパなど、ガールズバンド連中と遊んでいるわけで。

須田や五十嵐にしても、最初に声をかけてきたのはあっちだ。

入学式の日、もしも須田に話しかけられていなかったら。きっと、  
Capliberte<sup>カプリベルテ</sup>も結成していなかっただろう。

そんな俺の、全ての始まり。

小学校一年生の頃、みんなと何を話せばいいのかと思いつき、自分の机で呆けながら、仲良さげにおしゃべりするクラスメイトを眺めていた俺に、ひまりは話しかけてきた。

それがなければ、蘭たちと仲良くなることもなかったはずだ。蘭とは特に。

「まあ、なんだ。ひまりは今日も元気だなんて」

「そう？　まあ楽しいからね！」

薄暗い水族館内でも分かるくらい、ひまりは本当に楽しそうに笑っていた。

その笑顔を見ると、こちらの顔まで弛んでくるから不思議だ。

外は寒いし、クリスマスつてことでカップルもアホほどいるし、正直あまり乗り気ではなかったが――

「そうかい。俺も楽しいよ」

――来て良かったと、そう思えた。

? ? ? ? ?

時間は過ぎ、今はもう夜の七時頃。

ひまりの立てた予定通りに進んできた俺たちは今、東京駅にいた。

「あ、ラーメンストリートだって！　ここ気になってたんだよね〜！」

ひまりは相も変わらずはしゃいでいる。

目をキラキラ輝かせてラーメン屋を見るひまりとは対照的に、俺は

淀んだ目でラーメン屋を見上げ…。そして、込み上げてくる吐き気と必死に戦っていた。

水族館を出た後。俺は、来たことを軽く後悔するほど、めっちゃくちゃ食べさせられた。

食べすぎて限界を超えるとお腹痛くなるんだって、俺初めて知ったよ。食べ歩き（暴食ツアー）怖い。

というかひまりはなんであんな元気なん？

「海はとんこつ好きだよね！ この俺〇純ってお店、とんこつだつて！ ここにする？」

ええい、ひまりの胃袋は化け物か！

つーか殺す気か!? 俺見るからに苦しそうにしてるだろ、勘弁しろ!!

「ひまり…。俺ちよつと無理、どっかで休んでくる…。」

喚き散らす元気もなく、というか大声を出したら絶対に吐くと確信し、呻くように言う。

「え!? ちよ、大丈夫!?!」

「だいじよばん……………」

ここでようやく俺が不調なことに気付いたのか、焦ったようにひまりが駆け寄ってきた。

おいやめろ、背中さするなマジで。吐くぞ（脅迫）

込み上げてくるものをギリギリのところまで塞ぎ止めていると、ひまりが背中をさするのを止め、どこかへ駆けて行ってしまった。

どこに行ったかは分からない。それを確認する余裕もない。今はじつとしてなきやマジで吐く。

ゆっくりと、そして深く、深呼吸をする。

三回、四回と深呼吸をしていると、心做しか楽になってきた気がした。

まだ立ち上がって歩き回るのは危ないかもしれない。そう思い、首

を回すだけに留め、ひまりの姿を探す。

あのやろう、俺を置いてどこ行きやがった。

「海〜！」

少し恨みがまじく視線をうろちよろさせていると、ひまりが駆け足でこちらに向かつてきているのが目に入った。

その手にはペットボトルとビニール袋が握られている。

「これ、水と袋！ 水飲んで、吐きそうだったらこの袋使つて！」

近くまできたひまりは、そう言い、水の入ったペットボトルと、某大手コンビニエンスストアのレジ袋を差し出してくる。

ありがたいが、さすがに駅中で、しかも親しい女子の前で吐くのは俺の沽券に関わってくる。できるだけ吐きたくはない。

一応どちらも受け取りつつ、絶対に吐かないぞという強い意志を持って、再び深呼吸を試してみた。

「ありがと。ちよつと楽になってきたから大丈夫」

「ほんと？ 吐きたい時は吐いちゃった方が楽だってお父さんも言ってたから、無理して我慢しないでね？」

それ多分二日酔いの時とかの話だな。姉ちゃんもそんなこと言つてしょつちゆう吐いてる。

俺のことを本気で心配してくれているのだろう。大丈夫だつってんのに、ひまりは俺の背中を優しく摩つてくれている。

ありがた迷惑とはまた少し違うが、勘弁して欲しい。俺は吐きたくないんだ。

…あまつて。吐きそう。本当に吐きそう。すつぷ。ひまりすつぷ。

「…おえ…」

塞き止められていたダムが決壊し、中の物が吹き出すように逆流してきた。

なんとかビニール袋を口元にやり、床にぶち撒けることだけは回避する。

消化しきっていないあれやこれやが胃液と共にビニール袋の中に貯まっていった。自分のモノとはいえ気持ち悪いな。

「よしよし、いっぱい出せたね」

バブみを感じる（瀕死）

やめろ。ママ感を出してくるな。オギヤリたくなるだろ。

それと言葉のチョイスに気を付けろ。変な性癖に目覚めたらどうしてくれる。責任取れんのか？ あ？（錯乱）

この後、ラーメンは食わずに、ひまりに送ってもらって家まで帰った。

「じゃあね、海。ちゃんと胃薬飲むんだよ」

去り際まで保護者だったひまりに生気のない声で「うん」とだけ返事をし、風呂にも入らず布団に潜り込む。

もうお婿に行けない。

人生十六回目になる聖なる夜、枕を濡らして夜が明けた。

彼はとても大人びていると、いろいろな子の声を聞く。

確かに、彼はしつかりしている。私が高校生の頃の同級生の男子たちと比べると、断然。

だからだろう。彼の周りには、人が大勢集まる。

彼は「友達が少ない」というが、そんなことは決してない。少なくとも、彼と仲良くなりたいと思っている子は、男女問わず多いはずだ。まあ、彼を異性として見ている子も少なくないと思う。実際、うちに来ているバンドの子たちの中にも、ちらほらそういう子を見かける。

彼は成熟している。これは誰もが認めることだろうが… それでも、私から見たら、まだまだ子供だ。



「女性とクリスマスケーキは同じ」と言い出したのは、一体誰なんだろう。

クリスマスも過ぎ、十二月二十七日の深夜。もう時計の針がてっぺんを越えているから二十八日か。

ギターを弾きながら、ふとそんなことを考える。

「まりなさんって今何歳なのかな」

社会人女性に対して最大の禁忌、実年齢について考えていたところで、LINEの通知が鳴る。

噂をすればなんとやら。相手は俺が今考えていた張本人、まりなさんだった。

クリスマスライブの打ち上げ時。



今後、何かのライブ依頼があれば直接俺に連絡が取れるように交換していたのだ。

まりなさんからLINEで連絡がくるのはこれが初めてで、一体何の用なのかと手早くスマホのロックを解除し、LINEを開く。

まりな『お疲れ様！ 突然なんだけど、年末って暇？ 三十日とか』

K a i 『お疲れ様です！ 特に予定はないです』

そういや年始には単身赴任中の親父が帰ってくるらしいけど、別段どこかに出かけるような用事はないな。

例年なら三十日くらいから年明けにかけて九州にある祖父母の家に行くのだが、今年はお母さんは仕事で、姉ちゃんは友達と予定があるとかで、九州には行かないことになっている。

まりな『ほんと！ 良かった！』

K a i 『何かあるんですか？』

忘年会とかだろうか。C i R C L Eでやるとか。

ゆーてクリスマス会（打ち上げ）したばっかなんだよな。まあ、みんなでわいわい騒ぐのは何度やっても楽しいからいいけど。

まりな『うん！ 年越しライブやろうって話が出ててね！』

K a i 『アホなんですか？』

アホなんですかね？

？ ？ ？ ？ ？

アホのまりなさんから連絡があつて、一晩が経った。

今日は昼過ぎまでバイトがあるため、とりあえず職場まで来て、フライドポテトを延々と揚げている。

「ポテトあがりまーす」

揚げたポテトに塩を振りかけ、紙のパックにかきこみ、前に出す。他のスタッフがそれを持ってお客に提供する。

そんでまた注文が入るので、揚げて積んで詰めての繰り返しだ。にしても今日いつもよりポテトの注文多いな。氷川さんでも来てんの

か？

単純作業の繰り返しのため、考え事するにはもってこいの時間。普段は次にコピーする曲は何にしようとか、好きな曲のギターフレーズを頭の中でリピートするとか、そういうことをする時間だ。

しかし、今日ばかりは違う。

「(ベーベーベー、やっベーよマジで。リアルマジ。バイトなんかやってる場合じゃあねえ)」

涼しい顔をしているが、頭の中では焦り散らし、今にでも地面を駆け回りたいたい気分に戻り立てられていた。

時間は昨夜、たわけなまりなさんから連絡があった後に遡る。

さすがに二日三日の練習期間でライブをやるなど、至極控えめに言っても正気の沙汰じゃない。

その愚痴を言うためにカプリベルテのLINEグループに連絡してみたことが間違いだった。

K a i 『月島まりなどかいう考え無しから、「三十日にライブやる」とか連絡きたんだけど』

K a i 『普通に考えて無理じゃんね、俺たちをなんだと思ってるんだ』  
誠 『いいじゃん!』

K a i 『は?』

Y u t a 『まあ三曲くらいならなんとかなるな』

K a i 『は?』

Y u t a 『やってみせろよ、マフティー!』

誠 『なんとでもなるはずだ!』

K a i 『マフティーじゃねえしなんとかなんねえよ、アホか』

というわけで、なんでか分からないが三十日のライブに出演してしまふことになった。なってしまったのだ。

今日が二十八日。ライブは三十日の午後三時からだと聞かされている。

そうなるよ、今日バイト終わりからライブ直前まで練習するとしても、猶予は五十時間も無い。

… 五十時間って聞くときちよつと余裕ある気がしてきたな（狂）  
五十嵐は三曲ならできると言った。須田もそれに関して否定はしていない。ということは、マジで三曲やるつもりなんだあいつら。

俺らのライブは、必ず一曲はサイ○イをやる。  
別に決まりってわけじゃないが、いつもそうだから今回もそうだろう。

サイ○イならまあ問題はない。キーボードがよく鳴っている曲はギターアレンジでどうにかする必要があるため面倒だが、結局は自己アレンジ。どうとでもできる。

問題は残り二曲だなと思ひ、バイト上がりの時間が来たため、足早に帰る準備を始めた。

控え室の中の男子更衣室でパツと着替え、スマホを見る。  
カプリのグループから通知がきていた。

Y u t a 『C r o s s f a i t h やんね？』 「R x O v e r d r  
i o e」と「S o u l S e o k e r」  
『ちゅー』

思わず声出たわ。

え、いやまあ、お前（五十嵐）がいいなら別にいいけどさ。

誠『激アツだな』

誠『サイ○イ枠は「フジヤ○ディスコ」やりたいんだが、よろしいか？』

むしろこっちがよろしいか？だわ。

え何、なんでお前らそんな自分で自分の首絞め殺すような選曲なの？

いやまあ、ほんと、お前らがそれでいいならいいんだけどさあ…  
っーか、俺ら以外にどのバンドが出るんだ？

この前クリスマスライブやったばかりなんだ、あの時のめんつは無いだろう。普通、そんな短期間でライブなんか出るもんじゃない。

じゃあ誰が出るんだ。グリグリとかか？

「お、海。今から帰りか？」

とりあえず帰って練習するかと思っていたところで、控え室に巴が入ってくる。

「おう。巴は今から？ 今日シフト入ってたっけ」

今朝見た限り、シフト表に巴の名前はなかったはずだ。

ついでにひまりや丸山さん、松原さんも入っていないかった。その辺とシフト被らないのは珍しいなって思ったから覚えてる。

「いや？ ちよつとステイック忘れたから取りにきたんだ…。お、あつたあつた」

自分のロッカーを漁り、和太鼓のキーホルダーが付いたステイックカバーを取り出す。

「わざわざ取りに来たのか。明日はシフト入ってたろ。明日でも良かったし、なんなら連絡くれれば届けたのに」

「いや、今日使うんだよ。あこに借りても良かったんだけど、あいつも今日練習らしくてさ。予備も全部この中だったし」

なるへそ。

「こんな年末にまで練習か。大変だな」

まあ、俺も人のこと言えないんだが。

「ははっ、大変なのはお互い様だろ？」

「え？」

軽快に笑って、巴は続ける。

「海も出るんだろ？ CiRCLEの年末ライブ」

「もっ」

A f t e r g l o w は正気じゃないのかもしれない（なお自分）

? ? ? ? ?

A f t e r g l o w が正気じゃないことが判明したあと、もしかしてと思い R o s e l i a、ポピパ、ハロハピに確認してみたら、全バンド参加するらしいことが発覚した。

お前ら人間じゃねえ!! (タケシ)

パスパレは仕事があるとかで不参加らしいけど。それでも仕事はあるのか。大変だな。

「よし。まあ初合わせならこんなもんだろ」

タオルで汗を拭く五十嵐が、満足そうに笑った。

人間じゃねえのは俺らも同じで、本番前日によく初合わせを済ました俺たちカプリベルテ。

初合わせにも関わらず、なぜかほぼ完璧に通るんだから不思議だ。サイサイはともかくCrossfaithとかよく通ったな。我ながら意味がわからん。曲決まっってから一日も経たないうちの出来事だぞ？

「やっばい、耳痛い。お前ら音出しすぎだろ」

自分で自分が分からない…。とか言っていると、須田が耳を手で覆う仕草をしてみせてきた。

「だって五十嵐のバストラグが」

「いや、関口のギターが」

「どっちもだっつってんだろ」

呆れたように言い、須田はスタジオから出ていく。トイレか、水でも買いに行っただらろう。

実際、俺と五十嵐の音は爆音だ。

俺は「聞き手の鼓膜を破ってからの勝負だ」という宗派で、五十嵐は単純にパワーバカ。

新曲を作ろうってなったら、だいたい俺と五十嵐が音で殴りあう。そしたらそれを須田のクソキモベースライン(褒め言葉)にねじ伏せられ、黙らせられている。まじであいつ見ると自信無くなってくるわ。才能マンめ。

「実際どうよ?」

「あ? 何が」

「俺らの音」

五十嵐の質問に、少しだけ考える。

確かに、バンドはバランスが大切だ。一人でやるなら何をしようが構わないが、バンドというチームで音楽をやるのなら、多少の歩み寄りが必要だろう。

だが、

「別にいいだろ」

「いいのか」

考えるまでもない。

「この世には大きい音しかないらしい」

「何言ってるんだお前」

三分の二が爆音なんだから、残りの三分の一を爆音に染め上げればいいだけのこと。これこそが民主主義国家だ（違う）

つーかまあ、音が出てればそれは音楽だからな（バカ）

音は大きければ大きいほど良いんだ（アホ）

「須田が戻ってくる前にベースのボリューム上げとこうぜ」

「いじめか？」

失礼な。須田に本当の“音”ってやつを聞かせてやるんだよ。

?? ? ? ? ?

年末ライブ当日。

リハも終わり、景気付けにカツ丼を食べ、あとは本番を演りきるだけ。

人が足りないとかで昨日の夜までバイトをこなし、深夜から朝方までスタジオに籠もるとかいうありえないくらいハードワークだったが、なんとか生きてこの日を迎えることができた。

… なんか俺、ライブ前日に徹夜しすぎじゃない？

「海くーん！ お疲れ様ー！」

控え室でギターのチューニングをしていると、香澄が入ってきた。

見れば、ポピパ全員が続々と控え室に入ってきている。

「おう、お疲れさん」

演奏順は俺たちカプリがやった後にポピパ、その後ハロハピ、Af

terglow、Roseliaと続き、トリがグリグリとなつてい  
る。

本当は俺たちの出番はアングロの次だったんだが、今回カプリはコ  
ピバンしかやらない。そんなバンドが後半に演るのはどうよ、とな  
り、というか俺ら自身が言い出し、一番目になった。

つか、ガールズバンドが犇めくライブでCrossfaithや  
るとか場違いもいいところなんだよな。客の情緒も考え、最初にやるの  
がベストだろう。

そろそろ俺<sup>カプリベルテ</sup>らの然るべき居場所を見つけてえな。いつまでもガ  
ルズバンドの中で異彩放つてのも考えもんだし。

もう少しメタラーに近付けたらそういう場所を探しに行くか。

「お互いあんまり練習時間なかったけど、調子はどう？」

山吹さんの質問に、俺は不敵な笑みで返してみる。

「何キモい笑いしてんだお前」

市ヶ谷さんにキモがられたでござる。もうむり、リス飼お。

まあ、確かに今のはキモかったかもしれない。自重しよう。もしく  
は耐性を得よう。

それで今の俺らの調子の話だったっけ？

「まあ順調だよ。な？ 須田」

「オレ、大キイ音、スキ。オレ、大キイ音、食ウ」

「ほらな？」

「何が？」

キモがった上にそんな目で見るなよ、照れるじゃないか(耐性取得)

「須田くん……」

「ほらおたえ、お前もこのバカどもに何か言ってやれ」

「大きい音は正しさしかないから、須田くんは正しいよ。ようこそ、こ  
ちら側へ」

「そうだったな、お前もバカ側だったわ」

「それほど……」

全く、市ヶ谷さんは褒め上手だなあ(超越者)

「Capliberteさん、出番です」

スタッフの人から呼ばれ、ギターを抱えてステージに向かう。  
須田の説得（洗脳）も無事間に合い、準備は万端だ。恐れることは  
何もない。オーデイエンスの鼓膜、ぶち破ってやろうぜ!!

? ? ? ? ?

『お疲れ様でーす!』

グラスがぶつかる音が、C i R C L Eのライブ会場に響く。  
年末ライブが無事終わり、今はその打ち上げの時間。

各々ずいぶんと無茶をしての参戦になったこのライブだったが、特  
に大きな問題もなく終わって何よりだ。

「う、ううん……はっ!? お、俺は一体なにを……? た、確かスタ  
ジオで練習してて……それで突然大きい音が……大きい音……?  
食、う……? うっ、頭が……」

特に大きな問題もなく終わって何よりだ。

さすがに疲労が溜まっていたので、何の漫画の影響か「かめ〇め波」  
の練習し始めたお嬢には捕まりたくないと思んなから距離を取り、  
隅っこでイチゴ牛乳を飲む。

うん、甘くて美味しい。

最初はひまりや蘭なんか話しかけにきていたが、今は俺一人。ひ  
まりはお嬢の餌食に、蘭は友希那さんとお喋りに興じている。

……あ、ミッシェルが気功波出した。

「お疲れ様、関口くん」

弦巻家の技術はすごいなー、と眺めている俺に、まりなさんが声を  
かけてきた。

最近はいろいろあつてまりなさんへのヘイトも少々溜まってきて  
いるが、別に無視するほど本気で嫌っているわけでもない。短く返事  
をする。

「ライブ出演の依頼、前回に続いて直前の連絡になってごめんね?」

「そう思うなら次からは一ヶ月前までの連絡を厳守してください」





「マジで体壊すかと思いました」

伏して謝れ。

「じゃあ、その時間が五倍……いや六倍になったら？」

「え？ ……まあ、今回よりは余裕あるかもですね」

六倍ってことは三百時間？ なんかデカい数字でよく分かんないけど、そんだけあれば新曲も作れるかもしれないな。

「六倍の期間があればライブ参加できる？」

「まあ、三百時間あれば……」

「じゃあそれでいこう！ だいたい三百時間後、ライブ参加お願い！」

「え、あ、はい」

まあ三百時間もあるなら大丈夫か（疲労脳死）

「それじゃあライブ、よろしくね！」

「はい」

パーフェクトパライイ（意固地）をキメた俺は、笑顔で離れていくま  
りなさんに手を振る。

いやあ、まりなさんも話せば分かってくれてって俺信じてたよ。今  
日やって正月にまたライブとかほんと正気じゃない。つーか客も追  
いつかんだろ。

「…なあ、関口」

イチゴ牛乳がなくなつたため、次はコーヒー牛乳でも飲もうかと  
思っていたところに、なんとも微妙な顔をした市ヶ谷さんが寄ってき  
た。

「お前さ、疲れてるんだろうけど……あれだ、詐欺とか気を付けろよ  
？」

「え？」

何言ってるんだこの子。

誰が詐欺になんて引つかかるかっての。冷静沈着、頭のキレるでき  
る男とは俺の事よ。詐欺ろうとしてきたやつを逆にカモれる自信す

らあるね（圧倒的カモ）

? ? ? ? ?

コミュ障を發揮してグリグリとはほとんど喋れない打ち上げが終わった後。

結局ミツケル（弟）になって魔閃光を出した俺は、酒でも飲んできたんかっつてくらいフラフラな足取りで帰宅、即ベッドイン（単騎）

大晦日くらいゆつくり過ごすんだ。

明日はポ○モンやってタマザラシ乱獲するんだ。

そう心に誓い、アラームもかけずに目を閉じた。

翌朝。

小鳥の囁りこそ聞こえないものの、暖かな光に刺激されて目を開けると、そこにはマリ○カートに興じるポピパがいた。

は？

「あ、海。おはよう」

ごく自然に。まるで教室で居眠りをしていたクラスメイトへ声をかけるように。

俺が目を覚ましたことに気が付いたおたえが挨拶なんぞをしてくれやがる。

返事をする余裕など当然なく、俺は慌てて辺りを見回した。

もしかしたら寝ている間にまた拉致られたのかもしれない。そう思ったのだが、予想に反してここは俺の自室。

つまりこのポピパとかいうコミックバンドは、男の部屋に、男が寝入っている間に、勝手に入ってきて、許可なく人のマリ○カートをやっているということ。

……え、何……？ 怖……

「? そんな怯えた目なんてして、どうしたの? 怖い夢でも見た?」  
夢ならばどれほど良かったでしょう(米津)

「あー! おはよう海くん! お邪魔します!」

「え、あ、うん。おはようございます」

恐らく諸悪の根源であろうコミックバンドリーダーがいやに元気に挨拶してくるので、思わず返事をしてしまった。

寝起きと恐怖で思考がまとまらない。

今、これはどういう状況だ?

『俺が寝ている間に女友達が俺の部屋に入り、寝ている俺の横でゲームをしていた件』

ラノベのタイトルみたいだな。

「もう少ししたら蘭ちゃん達も来るって! そしたらこころちゃんの家に行こ!」

蘭も来るのか。なんで?

お嬢の家に凸るのか。だからなんで?

「あー!!」

え何。

「誰だカミナリ使ったの! せっかいいい感じで進んでたつてのに!」

「ふっふっふ。ライバルをどう邪魔して蹴落とすか。それがこのゲームの在り方なんだよ、有咲」

「さーやちゃん、悪い顔してるね...」

もうほんと怖いんだけど。

てか市ヶ谷さんら三人は常識人枠のはずだろ。なんで家主(俺)に挨拶もせずゲームに熱中してんだ。つーかその前に不法侵入を止めろ。アホ共を咎めろ。

特に市ヶ谷さんはポピパのストッパー的ポジションだろ。ほんと頼むぜ。まじで。

五分ほど経ち、いろいろと落ち着いた（意味深）ためようやくベッドから出ることが出来た俺は、とりあえず顔を洗いに洗面所へ向かった。

「…これからお嬢の家に行くのか…」

鏡を見ると、なんとも気落ちした酷い顔の俺がいた。

本来、女の子の家に行くつーのは大手を振って狂喜乱舞するべきイベントだ。ほかに集まるのがもれなく美少女ときているのなら尚更。

普通の男子高校生なら「へへっ… ったく、しよーがねーなー／＼」つってまんざらでもないどころか前屈みで臨むところだが、俺は違う。というか環境が違う。

中ボスとラスボスと裏ボスが一堂に会するサバトの生贄にされた村人Kくらいの気持ちだ。

まんざらだし全くしよーがなくなーい。俺はまだ死にたくないんだ。逃げたい気持ちでいっぱいだが、そんなものは叶わない。

逃げたところでどうなる？

知らんのか。拉致られる（経験則）

冷水を顔にぶち当て、毛穴と一緒に気を引き締める。

この半年と少しで俺が学んだことは、理不尽なものに立ち向かうこととは無駄だということだ。

早々に諦め、与えられた環境下でいかに損害を減らすか。そこに注力した方が明らかに建設的なのである。

「うしっ。今日も一日、頑張るぞい」

そう一人呟いたところを山吹さんに見られて本当に恥ずかしかったです（感想文）

★ ☆ ★ ☆ ★

大晦日。

仕事もない今日はガキ使でも見ながら一杯…。じゃさすがに済まないだろうけど、ゆっくりしっぽり過ごそうと思っていた。

ライブに出てたあの子達も疲れただろうけど、私も働き詰めで疲れちゃったんだよね。

昼前によく布団から這い出て、コーヒーを沸かしながら髪を梳かし、トーストとサラダを食べた。

食器を片し、YouTubeを見ながらヨガを始める。いい汗をかいてきた。

ア○フェを飲んでから、汗を流すためにシャワーを浴びる。

ここまでが、私の休日朝のルーティン。いやもう昼だけだ。

昔インスタグラマーのルーティンに憧れて始め、当時の友達から「見せる相手もないのにヨガとか笑」などと言われて以降、ムキになつて続けている。

汗も流し、スッキリした気持ちで下着を身に付け、髪を乾かす。

ヘアケアは夜にするとして、しっかり髪を乾かした私は、下着姿のままキッチンに向かった。

冷蔵庫を開け、少し前に復刻されたア○ヒ生ビールの缶を取り出す。

冷えた缶を片手に、次は流し台の下の収納棚から、かねてより隠しておいたツマミにんにくを取り出した。

「えっへっへ…。」

思わず笑みがこぼれる。

天気の良い休日に、部屋でビールとおツマミを頂く。この怠惰が何よりも至高なのだ。

いざ、怠惰の頂きへ——

トウルトウトウルトウトウルトウトウン♪（着信音）

……今、すごくいいところなのに。

一瞬無視しようかとも思ったが、相手に悪いなと思いスマホを手取る。

相手は……希のぞみちゃん？

三、四年くらい前にCIRCLEで出会った年下の女の子で、今では良い飲み友達。

ついでに最近知ったんだけど、海くんのお姉さんらしい。世の中ってほんとに狭い。

「もしもしっ？」

大晦日にまで飲みのお誘いかな、と思いつつ電話に出る。

『あ、まりなさん？ やっはろ〜』

「うん、やっはろ」

『ははっ、ウケる』

なにが？

『まりなさん今日暇？』

このノリは飲みのお誘い確定かな。

でも今日は一人でお酒飲みたい気分だし……外飲みだとお金かかるしなあ……

「あー……ごめんね？ ちょっと用事あって」

『カレシ？』

「いや、違うけど」

『だよねw』

なんだこいつ（素）

『でもそっかー。用事あるのかー』

「うん。ごめんね？」

『ううん、大丈夫。けど残念だなあ』

こうして誘ってくれるのは嬉しいけど、やっぱりその日の気分があるからね。

本当に申し訳ないけど、今回はこのままお断りを――

『今日弦巻さんちで宴会あって、お高めで美味しいお酒が飲み放題な

のに。まあ仕方ないか。また今度——』

「用事無くした。集合何時？」

『ははっ、マジウケる』

世界の弦巻家で高級酒飲み放題。

それを先に言わないとか、希ちゃんほんとイジワル。

『集合は昼の三時かな。あ、あと麻雀大会もあるからよろしく。じゃー！』

なんて？

そんなこんなで、現在午後五時頃。

三時前には弦巻家：ハロハピのころちゃんの家に出向いていた。

こころちゃんの家で宴会ということは、まあ当然のようにハロハピのみんながいる。

そしてそのほかにも、ポピパ、After glow、Roselia、パスパレ、そしてカプリベルテのみんなもいた。

これじゃいつもの打ち上げじゃん。

そう思ったが、出てくる料理は美味しいし、お酒はすごい。

そう。お酒に関してはなんかもう美味しいとかではなく、ほんとうにすごいのだ。

さつき黒服さんが注いでくれたワインのラベルにはROMANE E—CONTIって書いてあったし、なんか1945っていう数字も見えた気がした。

ロマネコンティの1945年ヴィンテージっていえば、過去最高の声も高い最高級の中の最高級ワイン。もう世界に一本しか残っていないとまことしやかに囁かれている代物だ。

そんなものの味が分かるだろうか？

いや、分からない（反語）





そんな約束してたんだ。

普通空なんて望んでも飛べないけどね。

「元気出しなよ関口くん。これからも仲良く空… 飛ぼ？」

「嫌でござる！ そんな可愛く言われても絶対に嫌でござる!!」

「ふざける余裕あるなら大丈夫だね。これを機に最下位だった市ヶ谷さんも一緒に空飛ぼつか？ ミツシエルには妹もいるって設定なんだよね…」

「いいか？ 奥沢さん。人は、空を飛ばない」

「ミツシエル族は飛びます。あいや、飛ばされます」

「いいか？ 奥沢さん。私は、ミツシエル族じゃない」

仲が良いなあ。

「ドンマイ海！ こころちゃんのアレは仕方ないよ！」

「ひまり…！」（軽率バブ化）

「あたしらの中で一番歴長いのに飛んで負けるとかダサ」

「蘭…！」（怒り）

仲が良いなあ。

「飛んで負けた結果飛ぶ（飛行）なんて、中々トンチがきいてるじゃない。今度御剣さんに相談してみましようか？ 関口くん、空を飛ぶって企画をやらないか」

「マジで勘弁してください。つーかそれ数字取れないでしょ」

「大丈夫だよ！ 私達も一緒にスカイダイビングするから！ そういうことだよね、千聖ちゃん？」

「いいえ？ 関口くん単体飛行よ。パラシュートも無いわ」

「千聖ちゃん!？」

「せめてミツケルにならせてください…」

仲が良いなあ。

なんだろうか。海くんにはある種のカリスマでもあるのだろうか。

まあ確かに、同年代から見たら彼はすごいぶん大人びて見えるんだろう。実際大人びていないと言ったら嘘になるし。

それに彼は聞き上手でもある。人間、自分の話を親身に聞いてくれ

る人とは仲良くしたいと思うものだ。恋に恋する年頃の子からしたら、そこから恋愛感情に発展するのも無理はない。

それなのに、当の本人はその好意に気付かない。

ほかの感情……例えば、他人が少し落ち込んでいるとか、虫の居所が悪いとか、そういうものは怖いくらいに察することが出来るのに。

恋愛っていうモノが絡んできた途端、海くんのソーシャルスキルは極端に低下するのだ。

私の経験上、高校生くらいで本当にモテる男の子は、こういう子が多い。

原因はいろいろとあるだろう。その一つとして、極度の自己否定が上げられる。海くんは多分、その部類だ。単なる勘だけど、女の勘はよく当たる。

別に、壮絶な過去があるとか、そういうものではないだろう。

幼少期の小さなトラウマが肥大化した。或いは海くんの場合、希ちゃん実の姉が優秀で昔から比べられてきた、というのもあるかもしれない。

まあ真実は分からないし、知ろうとも思わないけど。

そんなものに首を突っ込んだところで、待っているのは面倒事だけ。私にメリットがない。

仮に、私が海くんの事を好きだというならそれなりに動いたかもしれないけど、そんなこともないし。

海くんとはこれまで通り、少し仲が良いバンドマンとスタジオスタッフ、という立ち位置でありたい。

彼が大学生になれば、たまにお酒を酌み交わすのも良いかもしれないけど。

けれどまあ、周りの女の子たちのためにも、もう少しだけ気持ちを汲み取れるようになってほしいなど、星に願っておこうかな。

閑話休題：アコースティックギターという完成された  
楽器

三賀日。

日本の代表的な祝日だ。

そう、三賀日は祝日。日本国民たるもの、休むべき三日間なのだ。だというのに、俺は全く休めなかった。

一日はひまりたちに連れられて激混みの神社へ初詣、からの新年会 in 弦巻家。なんか見覚えのある、というか夏にインスタを交換した大統領がいた。日本語めっちゃ上手くなった。

二日は限界アルバイト。朝から夕方まで働いて、夜はなんか知らないけど店長に「新年会やんぞオラア！」って言われて何人かでカラオケオールした。ひまりと松原さんもいた。

三日は久方ぶりに帰ってきた親父に連れられ、親戚のおつちゃんらとの飲み会に参列。俺以外全員成人なので、一人酔うこともできずに延々と酌しやくをしていた。姉ちゃんが吐いた。

散々である。マジでホントにもう散々なのである。俺のライフはゼロに等しい。

そんな激動の三賀日を越え、一月四日。  
ブチ切れながら、自室で久々にアコギを手にとった。

「えー。それじゃあ配信始めます」

【速報】関口、YouTuberになる。

? ? ? ? ?

「あー… 見えてんのかなこれ」

カメラ… まあスマホだが、その画面に向かって話しかける。

その隣にはmy PC。YouTubeに接続し、俺の配信を開いている。

「お、見えてるっぽいな」

やつほー、と手を振ってみる。

現状の視聴者数は一。つまりは俺だけだ。

まあ無理もない。俺がこのチャンネル作ったのって十分前くらいだし、登録者はおろか認知すらされていないのだ。逆にこれで視聴者がいたら怖いまである。

「人生初のYouTuber配信始めました、っと」

自身のTwitterアカウントでURLと共にツイートしてみる。

最近はテレビの露出もあったからか、フォロワー数は二千五百と少し。プチ有名人と言っても過言ではないだろう。

… いや過言か。瀬田先輩はこの前フォロワー十五万人いったらしいからな。どこまでいってしまうんだあの人は。

まあ俺の配信は一人が二人くらい見てくれたら嬉しいな。

そう思い、ギターを構える。

一フレにカポを噛ませ、ポディを軽く二回叩いた。

まずは六弦、三フレットを親指で弾き、隙間無くGm7。一度六弦のゴーストノートを挟み、続いて六弦二フレ、F#7と刻む。

似たようなことを何度かやり、ボーカルを入れていく。

丸○内サディステイック。その軽いアレンジだ。

まあアレンジじつっても、大○昌良さんがやってることとそんなに変わってないけどな。

Aメロを歌っている時、視聴者数のカウントが一増える。誰か見に来てくれたのか。そう思い、演奏しながらも歌うことは止め、コメント欄に目を向ける。

「あ、丸山さんだ。こんちわ。え？ 『祝Youtuberデビュー』 あはい、ありがとうございます〜」

俺の記念すべき配信視聴者第一号は丸山さんだった。多分ツイート見てきてくれたんだろうけど、あの人いつつもSNS見てるよな。俺は基本ツイートなんざ月に一回か二回くらいしかしないんだが、だいたいツイートから十分以内にはいいねとかの反応してくるし。俺のツイートの通知がくるように設定でもしてんのか？

「あ、ちようどいいや。丸山さん、なんか曲のリクエストありますか？ 弾き語りするんで」

サビに入っただくらいで演奏を止め、画面の向こうにいらるであろう丸山さんに問いかける。

せつかくのリアルタイム配信なんだから、こういうのを楽しまなれば。

何がくるんだろう。パスパレの曲とかかな。

そう予測しているうちに、視聴者数が二から十五に変わる。突然増えたな、丸山さんが俺のツイートをRTでもしたか？

と、丸山さんからコメントがくる。

「みなさんあけおめでーす。… あ、残〇散歌？ 鬼〇ですよ。面白いつすよね、あのアニメ。一期しか見てないけど」

無限〇車編見たいなって思い続けて結局見てないんだよな。

言いながら、PCで開いていたYouTubeから、俺の配信を出て曲を検索する。

「えっと… あ、MVあんのか。これでいいな」

動画をクリックし、イヤホンを付けて聞いてみる。

うーん、普通に良曲。やっぱりAiOerの声は耳触りがいいな。

I b o g y o uとかも好きだよ俺。

「イントロが… えー、まあ単純にコードで… Bじゃないな。カポ付けた方が楽そう。Dmとかそんなもんかな… これだ。えっと、

こっから… F… E… まあEでいつか」

ピアノの音をギターに置き換えて出し、ボディを叩いたり弦ごと指板を叩いたりして、バスターやスネアの真似事なんてしてみる。この技法なんつうんだったっけな。スラムだったかパームだったか。

スネアの真似事の方は、全ての弦を叩くんじやなく、ローのみ、まあ六弦と五弦だけでいいだろう。そこだけを叩くようにするのがポイントだ。

そうすると、コードの音は消えることなく響き続けるため、あたかも複数の楽器がなっているかのように聞こえる。

もう少し時間があればトレモロ奏法、まあ簡単に言えばベースラインとメロディをギター一本で出すっていう奏法など、いろいろとやってみてもいいところなんだが、即興耳コピでそこまでやらなくてもいいだろう。

そんなこんなでとりあえず一番だけなんとかし、あとはノリと勢いでどうにかするとして、曲の頭から弾いてみる。次はちゃんと歌も付けて。

「たーったーらったーらったーらた」

気分よく口ずさみ、PCで開いている歌詞ページの文字を追う。さすがに歌詞までは覚えられなかった。

二度目のサビが終わり、Cメロ前の間奏に入る。

バンドであれば、ここはスーパージタータイムに入る。つまりソロの時間だ。

最近はギターソロをスキップするなんていう輩がいるそうだが、そんなのはマジ愚か（個人的意見です）

曲の最大の絶頂ポイントをスキップするやつに本当の音楽好きはいない（過激派個人的意見です）

まあそれは置いて。

アコギ一本でやるなら、普通にコードとか弾いとときゃいい。

そのままCメロまで駆け抜け、最後、Amで終わる。

うーん、我ながら耳コピ早くなつたな。エセゆゆ〇たみみたいな真似

ができるようになってきた。

これも地獄の連続ライブを乗り越えてきた賜物かな（白目）  
「まあこんな感じで……うわっ。何これ、めっちゃくちや人増えてんじゃん。あ、あけおめっす〜」

演奏に集中してて全然気にしてなかったんだけど、気付いたら視聴者数が五百を越えてた。

すげーな。まだ配信始めて三十分も経ってねえぞ。

コメントもたくさんきている……。あ、なんか投げ銭されてんな。スーパーチャットつてんだっけ。

「え、マジか。こんなテキストな弾き語りモドキに千円も投げてくれたんすか。あざす。えと……『夜に駆けるききたいです！』？ おけっす。これは前に暇つぶしでコピったからすぐできるな」

ほかにも曲のリクエストはいくつかきていたが、せつかく金を出してまでコメントの権利を買った人の頼みだ。応えなければ不誠実というもの。

カポは一フレットに付けたまま、とりあえずG、A、Fと弾いてみる。多分こんな感じだったはず。

一分くらい確認をした後、完全に思い出したので曲の頭から演奏、歌っていく。

この曲は、はつきり言って難しい。

テンポはまあ普通、ないしゆっくりめだと思うが、それは俺が日常的にメタルなんてものを聴いているからだろう。一般的にみたら少し速いくらいなのかもしれない。

ギターテクニクの面でいうと、初心者なら夢に出てきそうなくらいカットイングが多い。あとミュートも少し面倒かな。

まあ俺が原曲のエレキギターにつられてカットイングの山になってるだけで、もう少し楽に、簡単にできる部分はあるんだろうけど。

そして何よりこの曲の難しいところ。それは歌だ。

シンプルに高いし、ボーカルのikoraさんの技術もハンパじゃない。表現力っていうのかな。抑揚があげつないし、あと元から超高いのに転調もすんのはただのイジメ。



これを男が歌おうとしても、原キーで歌えるやつはそうそういないだろう。女性でも厳しいかもしれない。

ま、俺は歌えるんですけどね（急なドヤリ）

「~~~~~♪」

気持ち良くサビを歌い、静かに語り、ラスサビで喉をかつぴらいて最高音を叩き出す。

まあ正確には喉を開くっていうか、声の向きを上側にするイメージに近いかな。

普通に声を出したところで、それはどうやっても中音域を出ない。高音を出したい時は少し工夫が必要だ。

音楽の先生が、ウツボみたいなアホ面を晒して口を開きながら、手で山のような弧を描く仕草をしていた。そんな記憶はないだろうか？

そんなことをしている時はたいてい「腹から声出せ」とか運動部みたいなことを言ってるんだが、高音を出したい時のイメージ自体はそれ似ている。

腹から鼻にかけて、空気の流れを一直線にするようなイメージだ。

口蓋垂のつけ根に向けて、という感覚も似てるかもしれない。

とにかく、普段まっすぐ出している声を、上に向けて出してみる。そういうイメージが大事。

まあいろいろ言ったが、あとは喉が潰れるまで高音を出し続けて、しばらく療養期間を取ってからまた限界まで高音を出し続けるのが良い。

そしたら筋肉の超回復みたいになって、いつの間にか高音出るようになるから。マジで。

※※※※※※※※※※※※※※※※

これは正しいトレーニングではありません。独学でのボイストレーニングは危険が伴う場合もあるので、良い子は軽率に真似をしないでください。悪い子は覚悟しといてください。

※※※※※※※※※※※※※※※※

最後、B mの音をチャツ、チャツ、チャツ！と区切って鳴らし、曲が終わる。

うーん、気持ちイイですねえ（恍惚）

『確かに上手いがドヤるな』

『キモいゾ』

『顔さえ無ければ惚れてた』

コメントうるせえザンス。

「つて、は？ 何、何で視聴者千人超えてんの？ みんな暇なの？

あ、はい、あけおめです」

自分で始めといてなんだが、予想以上の視聴者数に軽く引く。

コメント数も伸びてるし、スパチャもいくつかきて・・・は？

「オイオイオイ、死んだわこいつ」

思わず無意味なセリフが漏れる。

それも無理のないことだと思つてほしい。

俺の目に止まった一つのスパチャ。

そこには数字の五と、四つの0が並んでいる。

おきづき だろ うか。

いやお前、五万円のスパチャ飛んできたらどんな反応するのが正解

なんだよ。怖えよ、誰だよ、何が目的なんだよ。

「え怖・・・何書いてあんの？」

数字に気を取られて内容まで目がいっていなかった。

恐る恐る、その五万円のスパチャの内容を読んでみる。

『今日の晩ご飯代にどうぞっ（\*・・\*）』

あ、あと崎○蒼士の五○雨とか弾いてくれたら嬉しいです！ 自分

で耳コピしようと思ったんですけど、全然わからなくて・・・チラ（

・ω・

「よーっし。今夜は庶民派高級イタリアンで満漢全席だ！」（混乱）

この後、全力で崎○蒼士の五○雨のギター講義をした。

? ? ? ?

一月五日。

今日は昼までバイトをした後、少し宿題をやってからアコギに手を伸ばす。

最近はずっとエレキを触ってたからか、昨日の弾き語り配信が楽しすぎてな。高額スパチャ? あれはただの脅迫文だった。

今日は事前にT w i t t e rで配信の告知をし、時間通りに開始する。

「こんちやっす。昨日に引き続き配信始めまーす」

開始早々数十人の方が見に来てくれており、少し嬉しくなった。自己顕示欲が満たされていくのを感じる。

「昨日指摘のあったマイクとかの機器なんですけど、時間なかったので準備できてないっす。今月中には買い揃えたいな」

インターフェースとかもあればエレキもやれるな。ミニアンはあるからそっちからの音でもいいんだけど、さすがに近所迷惑になりそうだしな。

… あ、なんかもうスパチャきた。機材代って一万円も。ほんと正気かこいつら? ありがたいけどさ。

『昨日何食ったの?』。ああ、昨日は久々に家族四人でサ○ゼ行っただっす。俺の奢りで」

機材代をくれた人が一緒に投げてきた質問に答える。

家族四人で飯を食うのはマジで一年ぶりくらいだったから嬉しかったつちや嬉しかったけど、俺の奢りって知った瞬間アホみたいに酒をバカスカ頼むの止めてほしかった(過去形)

終わってみれば、俺らの卓にはマグナムの空瓶が十一個転がっていた。

マグナム一本が千五百ミリリットルだから、かける十一で、総量一万六千五百ミリリットル。

一万ミリリットル以上の飲酒なんて…… わけが分からないよ

(キユ○べえ)

でもそれだけ飲み食いしても合計は二万円を超えなかった。ワケワカンナイヨー!!! (テ○オー)

「ほんじやまあ今日も弾き語りの垂れ流しってことで。曲のリクエストとかありますか?」

そう言うと、何曲ものリクエストが飛んできた。

基本は最近流行りのJポップか。いや、ボカロ系も多いな。

お、スパチャ。五百円か…。うん、正しい値段だ。こういうのでいいんだよ、こういうので。

あんまり高額だと気が引けちゃうからな。

「じゃあスパチャくれた人のリクエスト優先で…。君じゃなきや○メみたい。またムズいのきたなあ…。まあ俺は弾けますけどネ!

…。『ドヤ顔定期』? うるせえ、得意分野でくらい威張らせろ」  
言いながら、チューニングを合わせる。

この曲は三年くらい前、中一の夏くらいにコピーした。

それを音楽の授業中に弾いたら、その後女の子にたくさん話しかけられたっけな。二週間くらいで突然なくなっただし、その後はなんか遠慮気味に話しかけられること増えたけど。なんだったんだろ。

まあ当時は恋愛対象としては同級生に興味なんてなかったからな。特に落ち込むこともなかったけど、今同じことやられたら落ち込みそう。

チューニングを終え、改めて構える。

あ、歌詞だけ出しとこ。

六弦、十二フレットを抑え、右手の親指で六弦を弾きながら、左手を一フレットに向けてスライドさせる。

そこから、かの有名なスラップが始まる。

六弦開放、三弦開放を人差し指でプル、からの三弦一フレをハンマリング。

一度六弦を叩くようにしてゴーストノート、まあ昨日言ったパームと同じようなものか。

四弦二フレ、六弦開放、三弦開放からの一フレハンマリング。  
とまあ、こんな感じでスラップしていく。

スラップは難しいというイメージが先行しすぎている節がある気がする。

まあ確かに難しくないことはないが、超絶技法、つてわけでもない。言っちゃえば叩いて引つ張ればいいだけだからな。

一朝一夕では確かに上手くないかもしれないが、何事も継続が大事だ。やり続けていればできるようになる。

… まあ、須田とかいうウチのベージストはスラップっていう技術を知った二時間後にはほぼ完璧に習得してたけどな。化け物め。

改めて須田という化け物に恐れ戦いているうちに、曲が終わる。

ふう。この曲疲れるんだよな。めちやくちや楽しいけど。

「こんなもんでどっすか」

渾身のドヤ顔を晒すと、面白い具合にコメントがくる。味をしめてしまった。

と、気になるコメントがちらほらあるな。

『スラップめちやくかっこいい』『スラップできる人本当にギター上手いなって思う』か。そーなんすよ。スラップってインパクト強いからめちやくちやカッコよく見えるんですよ。実際そんなに難しいこととしてないんですけど」

さっきも言った… あいや、俺が勝手に思ってただけか。

「個人的には早弾きとかより簡単だと思いますよ。極論、叩いて引つ張るだけっすからね」

そう言うコメント欄が荒れる荒れる。

そんなに簡単だったら苦労しないとか、そんなこと言ったらジミ○ンとかもただ弦弾いてるだけになるとか、そういう類のコメントだ。

まあ、コメントが正論だわな。

「そんじやあちよつとスラップ講座やります？ はい、ギターが手元にある人は構えて」

簡単つっても即座にできるほど甘いもんでもない。

「スラップつてのは二つの弾き方でできてるんですよ。親指でやるサ

ムピングと、人差し指で引つ張るプル。んであとはサムピングの亜種みたいなのでゴーストノート。まずはサムピングからっすね」

言って、何度かゆっくり六弦を叩く。

「最初はこれがなかなかできないって人が多いですかね。ベースと違って弦の隙間が狭いんで、なかなか狙ったところが叩けないって」俺もそうだった。

「何事もまずはゆっくりやってみようってことで、サムピングだけをゆっくり。突然叩くとかじゃなくて、最初は六弦に指を着けた状態から、こう弾いて、それで親指を五弦に着地させてあげる感じですね」ゆっくりと同じ動作を繰り返す。

単純だが、反復は一番効率がいい練習方法だと俺は思ってる。

「それで慣れてきたら、次は少しステップアップして、親指を六弦より上から振り下ろして六弦に着地、弾いて、五弦に着地。これを繰り返してみてください」

「それをどんどん速くしていきます」

「はい、これでサムピング完成。慣れれば簡単ですね。次はプルです」

そんな感じに、スラップの動きを少しずつ説明していく。

今度、本格的にギター講座とかやってみるのもいいかもしれないな。

最近じゃあ大ガールズバンド時代なんてもんが襲来してるみたいだが、男もたくさん楽器をやるべきだ。

世に楽器演奏者が増えるのはなんだか嬉しい。それでギタリストが増えるのはもつと嬉しい。

「プルも単体でできるようになったら、あとはサムピングと合わせてやりましょう。ゆっくりで大丈夫です。慣れてきたらだんだん速くして行って、気付いたら高速スラップもできるようになってますよ」そう締めくくり、スラップ講座は一旦終了させる。

「そんじゃ本筋に戻して。さっきもらったリクエスト曲やりまーす。えと、『リユックと添○寝ごはんのあたらしい朝、お願いします！』…リユックと添○寝ごはん??? 何それ初めて聞いた」

「そういうバンド名流行ってんのか？」

漫画のタイトルみたいだな。

知らないバンドだったので早速YouTubeで調べてみる。

お、MVあるな。とりあえず一回聞かか。

「スリピなんすね…………… あー、なるほど。一般大衆受けしそうな曲。いや悪口じゃなくて。なんだろ、なんか既視感っぽいのがある。この場合既聴感か？」

曲を流すと著作権がどうこうっていうので訴えられそうなので、イヤホンからの音を俺だけ聴きながら感想を口にする。

にしても、まじでなんか既視感っぽいがあるな。

「… あ、スピ〇ツ！ そうだ、スピ〇ツっぽいんだ」

コメントをチラツとみたら『令和版スピ〇ツみたいなもん』っていうのがあった。

それをみて、なんとなくスッキリする。su〇ikaにもちよつと似てる気がするな。

「うーん、これなら全然いけそう。難しいことはしてないっすね」

とりあえず、MVの中でギターの人はカポを二フレットに付けていたので、俺もそこに付ける。

「最初はCかな、んでGで、こうなって… なんかスピ〇ツで似たようなコード進行みたことあんぞ」

いやまあ、音楽理論的に作曲するならコード進行は似てる曲も多いんだが… ダメだな令和版スピ〇ツに引っ張られてる。

その後、十分程度で簡単な耳コピを終わらせ、披露する。

お褒めの言葉をたくさんいただいで気分がいい。褒められるってほんと嬉しいのよ。

満足して次の曲へ進もうとしたとき、事件は起こる。

「そんじゃ次のリクエストは『大石サーキュレーション』…？ ってあれか大〇昌良さん版の——」

「弟ー！ 代えの弦持ってない？ 切れちやってさ。持ってたら寄越せ。無かったら買ってこい」

山賊（姉ちゃん）が乱入してきた。

ノックはしろってあれほど… 年頃の弟の部屋に入ってくんの怖くないのかよ。アレをコレしてる場面に出くわしたらどうすんだ。

「姉ちゃん、親しき仲にも礼儀ありつつな。せめてノックくらい」「あ?」

「なんでもないっす。あ、弦はその箱に入ってるっす、はい」

俺は!! 弱いッ!! (ル〇イ)

「貰ってくねろ… ってあんた、何してんの」

「え? あ、配信です。昨日デビューしました」

『姉か?!』『実の姉に敬語なのウケる』など、姉ちゃんに対するコメントが溢れていた。

「配信ン? 何してんの」

「え、ああ。今は大石サーキュレーションをリクエストされてて、それのコピーでもしようかと」

「大石サーキュレーションって昌良版の恋愛サーキュレーション?」

「うん、多分」

共通認識なのか ( )

俺が勝手に言ってるだけだと思ってたんだけどな。意外と一般知識なのかもしれん。

「あたし先月辺りサークルで弾いたよ、それ」

「マジか」

「まじまじ。アコギ貸してみ」

言って、姉ちゃんは俺からギターを奪い取る。

文句はない。絶対的なヒエラルキーがあるので、俺のものは姉ちゃんのものだからだ。

「お、視聴者さんけっこういるじゃん。あんたパスパレ公式の男とかって言われて認知度はあるもんね。はいこんには。愚弟の姉です」

挨拶してから、姉ちゃんはギターを弾き始めた。

相変わらず歌も楽器も上手いんだけど、なんで俺の配信で姉ちゃんが弾き語ってんだ?

まじでやりたい放題だなこの女。



憎たらしいくらいに完璧な大石サーキュレーションを披露した姉ちゃんは、満足そうにギターを返してくる。

「弟。楽しくなったから久々にセッションするよ」

「セッション」

「ほら、コメントでもあたしの歌聴きたいって人けっこういるし」

「あ、はい」

そんなこんなで、何故か姉ちゃんと一緒にギターを弾くことになった。

ゆ○の夏○とか、千○桜とか弾けて楽しかったけど、一体どうしてこんなことに…………。

それで姉ちゃんが出てからYouTubeの登録者数が倍くらいになって、マジで泣きそうになった。

一体…………どうして…………。

あと収益に関して、なぜか六対四で姉ちゃんに取られることになった。

とっおっしってったっよっおっおっお!!!

## 前話の蛇足

1 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
【速報】公式の男、YouTubeデビュー

2 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
むしろまだなつてなかったんか

3 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
パスパレのYouTubeには出てたし今更感はある

4 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
今見てるけど、普通に弾き語りしてる  
けどなぜかパスパレがない、なぜだ

5 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>4 公式の男の個人チャンネルだからだと思っただけ

6 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
>>4

コメント欄に彩ちゃんとイヴちゃんいたぞ

7 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>6  
まじ? コメント見に行こ

8 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

彩ちゃん、公式の男との距離近すぎて千聖様から怒られてるらしい  
じゃん

9 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
>>8

なにそれめっちゃおもしろい

10 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx  
>>8

公式の男なんだからもういい気もするけどね

11 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>10

お父さん許しませんからね!!!!

12 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>8

千聖ちゃんはパスパレのママだから...

13 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>11

出た、保護者目線のファン

親だったら娘にガチ恋できないだろ

14 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>11 >>>13

分からないぞ、パパになることでしか悦びを見いだせない性癖なの  
かもしれない

15 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>14

どんな過去があればそういう性癖に目覚めるんだ

16 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>13

ガチ恋勢なのか

17 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

公式の男、マジでギター上手いし歌も上手い

はやくメジャーデビューした方がいい

18 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>17

パスパレのところの事務所でデビューしてるんじゃないの？

19 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>>18

してないんだよなあ、これが

20 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>19

公式の男なのに？

21 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>20

公式の男なのに

22 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>20

業界七不思議の一つです

23 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

公式の男って自分でバンド組んでるよな

24 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>23

Capliberteってバンド組んでる

基本コピーばかりだけど、オリジナルでインストも出してるよ

25 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

歌上手いのにインスト？

26 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

カプリベルテの公式Twithterで、

あまりにも歌詞を考える才能がないのでインストに逃げました

って言ってた

27 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

一応考えた歌詞の一部のつけてたけど、確かにひどい

小学生の感想文でももうちよいいこと書いてる

28 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>27

逆に気になるな

29 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

Capliberte公式Twithterより抜粋

俺たちはジャングルに向かった

世界の真理があると信じて

荒れ狂う storm sea 襲い来る strong bea

st

うんざりだ

奴らに反逆しろ 内なるものを開放しろ

心を研ぎ澄ませ

力を感じ 真に求めるモノを勝ち取るのだ

そうすれば世界はお前のものとなる

3 0 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

なんて  
????

3 1 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

厨二チックなものを感じるな

3 2 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

いい感じにダサイ

3 3 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

>>>3 2

いい感じか: : ?

3 4 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

まあヤバいけど、9ミリとかもそんな感じじゃね?

3 5 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

ダサイものをつっこよくするのにはありえないくらいの才能が  
る

3 6 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

>>>3 5

B' ○とかそうじゃんね

歌詞だけをみたらわりとダサイこと歌ってるけど、曲として聞いた

らめちやくちやくつこいい

3 7 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

>>>3 6

稲○が歌って松○が弾いてたらそれはロックだから: : .

3 8 : 名無し : 2 0 x x 年 0 1 月 0 4 日 (水) I D x x x x x

>>29

洋楽とか、和訳したらそんな感じじゃない？

メタル系は特に

39 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>38

それだ

カプリも英語で、しかもデスボとかで歌えばカッコよく聞こえそう  
40 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
メタルとかそういう激しいのは最近の流行的になあ:・

41 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
公式の男は流行とか関係なく好きなことやってるだろ  
インスタもただのメタルだからな

42 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
公式の男、ハードロックとかメタルとか好きて言ってた気がする  
最近はメロデスに傾倒してるらしい

43 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>42

メロデスってなに？

44 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>43

メロディックデスメタル

メタルジャンルの1つやで

45 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>43

メタルの中にもいろいろとジャンルがあってじゃな  
デスメタルにNWOBHMの旋律を取り入れてドラマティックな  
展開を持たせたもの、とかいう定義があるんじゃないよ  
マジで曖昧なジャンルじゃけどな

46 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>45

メ、メタルおじさん:・!

47 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>46

メタル爺では

48 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>46 >>47

ふおっふおっふおっ

どちらでもよろしおす

49 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>44 >>45

ありがとうございます!

50 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
誰一人としてggrksって言わない世界

優しすぎる

51 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>50

ggrksって今日日聞かないな

52 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>50

メタラーって意外と優しいから

むしろこれを機にメタルを聞いてほしいって思ってると思う

53 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
やさいせいかつ!!!

54 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>53

もう飽きたわそれ

55 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
>>54

ぜんぜん優しくなくて草

56 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx  
公式の男さんに、僕が前に耳コピしようとして挫折した崎○蒼士の

五○雨って曲弾いてって言ったら、完璧に弾いてきたどころか解説し

始めてくれたんだけど

57 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>56

お前が5万円ニキだったのか

58 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>56

どうでもいいけど「公式の男さん」がツボwww

59 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>56

公式の男、あわあわしてたな

60 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>59

可愛かった

61 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>59

公式の男っていつても、実際ただの高校生だからな

初めての配信で突然5万も投げられたら普通ビビる

62 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

公式の男の話まだー？

63 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>61

公式の男が常識的な思考してて俺はホツとした

パスパレとの共演とか武道館ライブアーティストのサポートとか

してるっばいし、金銭感覚狂ったクソガキだったら嫌いになってた

64 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

>>62

公式の男の娘は北海道事変以来目撃情報がないらしい… もう一

度だけでも拝みたい… そして舐めたい

65 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx

Hey Siri! 警察へ通報

66 : 名無し : 20xx年01月04日 (水) IDxxxxxx



>>65

あまり軽率に通報してくれるなよ、泣くぞ

67 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>66

泣くのか

抵抗するでもなく

68 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>67

うん

だってどう考えても変態(俺)が悪いもん

69 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>68

なんだこいつ、、

70 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

時を戻そう

如何にして公式の男に男の娘の格好をしてもらうのか。意見を募

ろうじゃないか。

71 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>70

どこに戻った

72 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>70

そんな話題だったか・・・?

だが意見は聞こう

有識者カモンヌ

73 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>72

有識者・・・?

74 :名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>70

女装は千聖ちゃん主導で行われたっぽいし、千聖ちゃんへのファン

レターに

「公式の男の女装がまた見たいです」

って書くのはどうだろうか

75 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>>74

貴様、我らが千聖様のお手を煩わせるつもりか…？

76 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>>74

ヤバいつ！ 早く謝れ！

やられるぞ!!

77 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

千聖教ってまじでなんなんだ

78 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

ここまできると逆に教祖(千聖ちゃん)に迷惑かかりそう

79 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

多くの信者を手玉に取って悪女ムーヴかましてる千聖ちゃん想像

したら体が気持ちよくなった

80 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

アレクサ！ 千聖教に通報

81 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>>80

世界一怖い通報を見た

82 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

>>>80

通報ってより告発か？

83 : 名無し:20xx年01月04日(水) IDxxxxxx

千聖教には逆らうな

これ、パスペレファンの界限では常識だから

初心者みんなは気を付けてくれよナ！

…

.....

506 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x 千聖様「彩ちゃん..... 電気.....」

507 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x 消してええええええええ!!!!

508 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x リライトしてええええええ!!!!

509 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x 唐突なリライト好き

510 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x アジカンは簡単なことしかしてないのにかっこいい  
そういうバンドが1番かっこいい

って公式の男が言ってた

511 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x >>510

ほんそれ

512 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x >>510

簡単.....? (ベース)

513 : 名無し : 20xx年01月05日 (木) IDxxxxx

x >>512

確かにベースはちよつと難しいっていか面倒だよな  
って公式の男が言ってた

514 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
公式の男の意見に左右されてて草

515 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
公式の男、ベースも弾くん？

516 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
>>515

ベースは触ったことないって言ってた気がするけど、バンドやつて  
たらなんとなく分かるんじゃない？

知らんけど

517 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
どうでもいいんだけど、公式の男の配信に公式の男の姉出てきた

518 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
ほーん

519 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
>>517

どうでもいいっていか、ここは公式の男スレだからどうでもよく  
なくない

520 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x  
>>518

興味なさそう

俺もソウナノ

521 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

実際俺らが興味あるのってパスパレと絡む公式の男だからな

522 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

パスパレと絡む公式の男好き

公式の男単体推し

公式の男の娘教

(姉の入り込む隙は) ないです

523 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

公式の男のお姉ちゃん、めつつちや美人だった

524 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>523

ほーん

詳しく聞かせろ

525 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>523

私、気になります！

526 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

草草の草

527 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

ねじきれんばかりの

528 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

まあ公式の男が顔いいし、その姉も顔が良いってのは想像つく

529 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>524

いや、まじでかわいい、美人

てかやっぱ姉弟だからかな、公式の男女装バージョンに似てる

530 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

俺、公式の男の姉推しになる

531 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

軽率に起こる推し変

532 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>530

結局男の娘が好きなのか、それとも顔が好きなのか...

533 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>532

顔だろ

534 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

もはやパスパレ関係ないんだよなあ...

535 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

公式の男、姉の尻に引かれてて草

羨ましい

536 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

ギターの弦かっぱらわれるのに文句言ったら「あ?」の一言で黙らされたからな... ヒエラルキー...

537 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>536

そんな傲慢な姉なんて……最高じゃないか!!!

538 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>537

そうか?

539 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

実際に姉のいる身で言うと、身内に萌えるってことは絶対にないで  
すね

540 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>539

美人か否か問題定期

541 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>540

いや美人ですが? まあ美人ってよりかわいい系ですけど

公式の男にも容姿褒められたっぼいし

542 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>541

立派なシスコンで草

って言って流そうとしたけどちよつと待て

543 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>541

お前の姉ちゃん、公式の男と知り合いなんか?

544 : 名無し : 20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>541

大事な情報がサラッと出てきたな

545 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>541

老婆心から言うけど、個人特定できそうな情報は絶対にネットに書き込まない方がええで

特にこんな掲示板とかではマジで

・・・で、キミのお姉さんと公式の男はどういう関係？

546 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>545

ご忠告ありがとうございます！

お姉ちゃんは学校とバイト先が公式の男と同じって感じですよ

547 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>546

忠告ガン無視じゃん

548 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>546

草

549 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>546

つてことはアレか

彩ちゃんとも知り合いなのか

550 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

彩ちゃんとも仲良いっぽいんですけど、どっちかっていうと千聖ちゃんも仲良いですかね

うちにも何回か遊びに来たし

551 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx



X

聞けばなんでも出てくるなこれ

552 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

おぢさん、キミのことが心配だよ...

今度いろいろと教えてあげるから、直接会わないかい？

553 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>552

千聖様へ近付こうとする不審者を発見、排除する

554 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

どっちが不審者かわつかんねえなコレ

555 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>553

いやだなあ。千聖ちゃんに近付こうなんて思っただけですよ

ただ、目が肥えているであろう公式の男が褒めるほどの容姿を持つ姉を持つ男の子に会おうってだけで...

556 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

おい通報民ども、今こそ仕事をする時だ

557 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

全裸待機していたので即座に職務を執行しました

558 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>557

貴方が通報されるべきなのは...？

559 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

>>>558

多分家の中だろうし全裸くらい許してやれって..

560 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

まあ2次元姉と3次元姉は違うからな

冷静に考えたら実の母に萌えを感じられるのか? ってのと同じ

話だから

561 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>>560

確かに、そう言われるとしんどいものがある

562 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>>560

それが何か問題か?

俺はイけるが

563 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>>562

なんのアピールだ

564 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>>562

つわもの、お前もう船降りろ

565 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

強いのにクビになるのか..

566 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

まあ強すぎるものは和を乱すから..

567 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X 出る杭は打たれるしな

568 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X ところで公式の男の姉の話は?

569 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X かわいい! ギター上手い! 歌も上手い! 踏まれたい!  
以上!!!

570 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X >>>569  
雑すぎて草

571 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X >>>569  
なんだ、ただの公式の男(女Ver.)か

572 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X >>>571  
公式の男に踏まれたいのか:?

573 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X >>>572  
まあ:./././

でも踏みたい気持ちもある、公式の男ちゃんのこと

574 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X 公式の男逃げて、超逃げて!!!

575 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

X

次回！ 公式の男、掘られる！

ワセリンスタンバイ！

576 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

>>575

準備いいな

577 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

多分公式の男は、同性には容赦なくレスポール振り下ろしそう

578 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

じゃあ>>573の方が危ないやん

>>573逃げて！ 超逃げて！

579 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

でもパスパレ、特に彩ちゃんからあれだけ接触されてて手を出さない公式の男、そっちのケがある可能性

580 :名無し:20xx年01月05日(木) IDxxxxx

x

無限の可能性があるなあ、公式の男

ハードロックのない人生なんて、ワサビ抜き寿司みたいなものだ

一月六日。

短くも激動だった冬休みが終わり、今日からまた学校が始まる。制服に袖を通し、朝飯として米と納豆、味噌汁を胃にぶち込む。姉ちゃんはまだ寝ている。

姉ちゃんも今日は大学があるらしいが、三限かららしく、昨日一緒に配信をした後に友達と電話しながら飲み耽っていた。

夜遅くまで部屋でうるさくしてたからな。三限に間に合うかも微妙なところだ。

「? LINE? こんな朝っぱらから誰だ」

歯を磨き終え、時間に余裕があったため朝のニュース番組をボケッと眺めていた時。

スマホが揺れ、画面には通知が表示されていた。相手は須田だ。

誠『おはよう、親愛なる友、関口くん』

K a i『キモい』

誠『はっはっは。ナイスなジョークだ』

K a i『宿題なら見せぬえぞ』

誠『D a m n i t  
!!!!!!』

つかせめて昨日までに連絡してこいよ。

まあ今回宿題出来てないのはライブのせいっていうのもあるだろうから、教えてやるくらいはしよう。

K a i 『教えるくらいならしてやるから早めに学校にこい』

K a i 『俺も今から向かうから』

誠 『この量が写さずに終わるのか…？』

誠 『やらないよりましか…』

誠 『お願いします…』

まさか手付かずなのか？

まあいいや。

コートを着て、マフラーを首に巻く。

今日の空はどんよりとした鉛色の雲に覆われていた。予報によれば、午後から雪らしい。

寒いのは本当に苦手なんだけどなあ。

嫌だなと思いつながら、傘を持って家を出ようとする。

と、ここでまたスマホから通知音が鳴った。

また須田かと思つたが、これはT w i t t e rの方か？

サポート依頼がD Mで届くこともあるからな。そつちだろうか。

『何度も何度も連絡しているのに、返事も寄越さないなんて、舐めてるの？』

あ？

… ああ。いつものか。

夏休み明け辺りからちよくちよく連絡がくる、なんかレコードプロデューサー？を自称するやつからのD Mだった。(第18話『るんつ！(☆そこに言葉はいらす——V2)』より)

月に一度くらいの頻度で連絡がきていたが、答えたことは一度もない。だって怖いし。英文で送られてくる不特定な相手からのメールに返信しちゃいけませんって、今時小学生で習うことだ。

しかし、今回は日本語か。初めてだな。

なかなか高圧的じゃないか。

こういうのは返信してしまうと、いろいろと面倒なことになる。

ネットが教えてくれた。

フィッシングだかマルチだか、まあ分からないが、世の中には様々な詐欺の手法があるのだからか。

というわけで、無視である。

是非もなし。何処の馬の骨ともわからない相手に返事をするほど、現代の若者は甘くはないのだ。

…でも本当はヤバくない人だったらあれだしな。

とりあえず『DM送ってくる場合は素性を明かしてもらわないと怖くね?』って空リプしとこう。

最近速くなったフリック入力でササッとツイートし、今度こそ登校を始める。

どんより天気でテンションはガタ落ちだけど、今日も一日けっぱるぞー。

? ? ? ? ?

始業式の日、学校は半日で終わる。

高校に入ってから始業式と終業式を三回経験したが、そのうち二回はおたえと飯を食いに行った。残り一回は徹夜練習マンになった。

おたえと昼飯イベントがあつた過去二回は、その後にデカいイベントが控えていた。

推し（千聖さん）との会合、そして日菜さんとのスクープだ。

学校が半日で終わる時、俺は平穩から遠ざかってしまう。

楽しくないといえば嘘になるが、刺激が強すぎてストレスになることも少なくはない。

「海。これから暇? お昼ご飯、食べて帰りたいんだけど」

「あー、すまん。今日はパス」

今日こそはゆつくりまったり過ごそう。

そう決意し、心苦しいがおたえの誘いも断った。

つかかなんでおたえは毎回俺を誘ってくるの? 香澄たちと行け

よ。いや誘ってくれるのは嬉しいんだけどさ。

「? 何か用事あるの?」

「いや、別にそういうわけでもないんだけど」

ここで「ほかに用事がある」なんて嘘をつくことはしたくない。何となく後ろめたくなっちゃうからな。

「そっか。残念。ハードロックカフェに行ってみたかったんだけど」

「何つつ立ってんだよおたえ! 早く行こうぜ!」

ちよつと面倒だからって女の子の誘いを断るとか、男のすることじゃねえよなあ!?(いつもの)

? ? ? ? ?

というわけで、上野に来た。

瞬間、蘇る聖夜の記憶。

上野... 飲食... 女子と二人... ウツ、頭が。

「海、顔色悪いけど大丈夫?」

心配そうに見てくるおたえに「大丈夫」と一言だけ返す。

人生の汚点のような記憶はさっさとデリートしなければ。

あの日は、まあ相手が幼馴染みひまりだったとはいえ、記念すべき俺の人生初クリスマスデートデイ。水族館に行つて楽しい時間を過ごした、ただそれだけだ。いいね?(自己暗示)

上野駅の構内を歩き、改札を出てから徒歩一分。

構内にある「Hard Rock cafe」と書かれたネオンの看板を見つける。

「おお...!」

まだ店内にすら入っていないが、気持ちが高揚しちゃうな。

入口にはギターの絵がプリントされており、その横にはハードロック(仮)の写真がデカデカと貼られている。誰かは知らない。アーティストの顔ってあんまり覚えてないんだよな。

「おお...!!」



ドキドキしながら入店すると、そこはまるでバーのような大人の空間（小並感）が広がっていた。すげえ、カウンターの上にグラスが吊るされてやがる。

ニューヨークの店舗の天井にはすっげえデカイギブソンのレスポールが吊るされているらしいが、ここにはない。まあ地震多発国でそんなデカイもん吊るせねえよな。知らんけど。

おたえと二人で早くも興奮していると、スタッフに席まで案内される。

カウンターではなくテーブル席に通され、机に置いてあつたメニューを二人で見た。

ハンバーガーに肉。それから・・・ナチョス？　なんだそれ。

『コーンチップスにランチビーンズとチーズソースをのせてオーブンで焼き、ピコデガロ、ハラペーニョ、レッドオニオンピクルス、グリーンオニオン、サワークリームで仕上げた一番人気のアペタイザーです』ってなんだそれ。よくわかんね」

「何の話？」

「このナチョスってやつの説明」

そもそもアペタイザーってなんだ。

まあこういう時はグー○ル大先生に頼って、っと。

アペタイザー・・・英語でメインの食事の前に食べるもの、すなわち前菜。

なんだ前菜か。

じゃあいいや。メインだけがつつり食べたい。

「私はこのレジエンダーバーガーっていうのにしようかな。海は？」

「うーん・・・俺は肉だな。ベイビーバックリブってやつにする」

BBQソースを塗りたいくりながら焼き上げたという骨つきあばら肉。美味しくないわけがない。

まあ値段があげつないことになってるが、ここまできて金値段を気にす

るのは無粋だ。

使う時は使う、貯める時は貯める。何事もメリハリが大事なのである。

注文し終え、そわそわと店内を見渡してみた。

「お、あれ見てみるよ。ギターがショーケースに入って飾ってあんど」  
「あつちにはツアー缶バッジが飾られてる。すごい、誰が集めたんだろ」

「ほんとだ。Black SabbathにGOTTHOR、spiritual bogsarsまであんのか。スゲーな」

どういうラインナップなんだろ。メジャーどころばつかり集めた感じでもないしな。ガ○ズとか無いし。

あ、ツエツペ○ンはあるな。

なんだろ、店長の趣味か？ なら友達になりたい。

「GOTTHARDって何？」

飾られている缶バッジの中で知らないバンドもチラホラあり、ドキをムネムネさせていると、おたえからそんな質問が飛んできた。

「意外だな。おたえは知ってそうなもんだけど」

「何でもは知らないよ。知ってることだけ」

「なぜ今そのセリフ？」

最近そのアニメでも見たんだらうか。

俺もそろそろ見なきゃなあ。姉ちゃんから見ろって言われたし。

シリーズ多すぎて何から見ればいいのかわっかんねえんだよな。

あとでおたえに聞いとこ。

「GOTTHARDってのはスイスのハードロックバンドでな？ スイス史上一番売れたバンドなんだよ」

スマホを弄って、サブスクに入れていた曲を一つ選ぶ。

「俺が好きなのはSilverってアルバムかな。あと#13も好き。メロディアスハードロックって括りらしいけど、マジでいいんだよ」

俺が流すのはSilverに収録されているSilver Riverという曲。最高にロックだ。

「前任のボーカルが事故で亡くなっちゃってな。その後に出たアルバムは界限では賛否両論だけど、俺は後任のニックも好きなんだよ」

Silver というアルバムは彼らの二十五周年アルバム。

兎にも角にも、ニックが踏ん張ったというか、批判の多い中でしっかりと自分を出してきたアルバムだと思う。なんだろうね。前任のステイブにも似せてる部分はあるのかもしれないけど、その中に確固たる自分があるっていうか。

「ハードロックだけど、なんかポップな感じだね。あとなんだろう、ちよつと盛り上がりが少ない？ 私は好きだけど」

とりあえず一曲だけ聴いたおたえが、そう感想をもらす。

「ヨーロッパのハードロックってそんなもんじゃないか？ まあこのアルバムは全体的に地味なところあるけど」

渋さがあつて俺はいいと思うんだけどね。なんかこう、大人のロック、って感じがして。

俺がこのバンドを知った時はもうボーカルは代わってたし、何よりニックがボーカルしてる曲から聴いたから、別に不快感とか物足りなさとかはなかった。

「隠れた名曲って言われる曲にありがちな、いわゆるスルメ感が強いかもな」

「それはあるかも。帰ったらゆっくり聴いてみるね」

「おう。あ、おたえが好きそうなのって言ったたら多分初期の方、Gってアルバムがいいかも。そっちも合わせて聴いてくれよな」

「そうなの？ 分かった」

そう締めくくったところで、都合良く料理が運ばれてくる。

俺のあばら肉も、おたえのハンバーガーも、中々のボリュームだ。さすがアメリカ発祥の店、規模が違う。アメリカの店だともっとデカイのかな。

現代人らしく食べる前に料理の写真を撮り、いただきますと手を合わせてから食事を開始する。

ナイフとフォークを使うなんていうお行儀の良い食べ方はしない。つーか骨多くてできない。

手で掴み、かぶりつく。

「うっまー」

初めて食べるバックリブは、ちよつと感動するくらい美味かった。ソースがよく染みてる。作り方としては蒲焼きとかと似てんのか？

スペアリブとバックリブは同じあばら肉だが、少し味が違う気がする。スペアリブは食べたことあんだよ俺。

なんだろ、なんとなくサツパリしてる気がする。あと柔らかい。豚ってこんな柔らかいもんだったっけか。

「！ 美味しい」

俺が豚肉に夢中になってる前で、おたえもハンバーガーに夢中になっていた。

ハンバーガーといったらマクド○ルド。そういう認識があるが、こちらより断然存在感がある。

肉とトマトレタス、あとベーコンとかもあるのか。それらをパンに挟んでるってところは一緒なのに、何がここまで違うと感じさせるのだろうか。

場の雰囲気かな。

俺もおたえも、以降は無言で食べ続けた。

だって美味しいんだもん。

人間、美味しいものを食ってる時は口数が減るってじつちやが言ってたけど、あれはマジだな。

しばらくして食べ終わり、ソースでベツタベタになった口周りを紙ナプキンで拭く。

正面を見れば、おたえはまだハンバーガーと格闘しているところだった。

あれデカいしな。食うのは時間がかかるだろう。

っーか女の子ってなんであんな口小さいの？ 小さい口で頑張ってるハンバーガー齧ってるのかわいいな。

ソースの味がまだ残っている口内に水を流し込みながら、そんなこ

とを考える。

と、不意に店内のBGMが耳に入った。

「お、キ〇スか。やっとハードロックなの流れてきたな」

さつきまではエド・シ〇ランとかブルー〇マーズとか、あとは知らない洋楽とか、ハードロックじゃない曲ばかりだったからな。

洋服屋の曲選だった。古着屋とかの。

「は、ほんほは、ひっふは」

「飲み込んでから喋りなさい」

早く飲み込もうと頑張って咀嚼してるのかわいい。

「キ〇ス、いいよね」

「めちやくちやな。ハードロックのレジエンドだし」

ハードロック草創期を駆け抜けた偉大なるバンド、それがキ〇スだ。

コープスペイントをいち早く取り入れたバンドとしても有名かもしれない。

コープスペイントは一般人が「メタルってこういうのでしょ」とよく想像するような、白塗りの化粧のことだ。日本じゃデー〇ン閣下とかが有名かな。

ハードロックなのにメタルみたいな化粧？　と思うかもしれないが、元々ヘビメタルってのはハードロックの発展型の音楽ジャンルだからな。

ハードロックの中でもより重々しい、禍々しい、闇の強い部分というモノが抽出されたのがヘビメタルというジャンルだ。自論だけどな。

まあ音楽を言葉で表現しろってのが土台無理な話。

結局は「聴いて覚えろ」という暴論（真理）に落ち着くのである。

要するに頑張れってことだ。ファイト、ビギナー。

「ごちそうさまでした。あ、そうだ。キ〇スといえば」

「ん？」

心の中で勝手にHR/HM初心者のみんなへエールを送っている  
と、ハンバーガーを食べ終わったおたえが何かを思い出したように

言ってくる。

「ジヨ○ヨ、六部の途中まで読んだよ」

「よくやった、さすがだぜブラザー」

「シスターだよ」

そこなのか。

「途中っていうとどこまで？」

「ウエザー○ポートが出てきたところくらい」

「あー。まだ序盤の方が」

五巻くらいだったか？ ウエザー○リポート出てくるの。

「ジヨ○ヨって面白いね」

「だろ？」

「私は五部が好きかな。エアロ○ミスの子が好き」

「スタンド名でしか覚えてないのか」

「バンドの名前だから覚えやすくして。ウエザーリ○ートもバンド名だよね？」

「ああ。確かジャズ系のバンドだったかな。あんまり聴いたことないけど」

ジャズは嫌いじゃないけど、全然掘れてないんだよな。シンプルに時間がない。今はメタルだけで手一杯なんだよ。

「私達が有名になったら、ポップンパーティーっていうスタンド、出るかな？」

「世界で売れたらいいんじゃないね。知らんけど」

「私、頑張るね」

頑張るベクトル、というかモチベの出処が違う気がするが、まあいいか。

荒木飛○彦さんは石仮面使った吸血鬼だから寿命とかないし、むしろ若返ってるまであるから、俺らが死ぬまでに世界進出して売れたらワンチャンあるかもしれないね。

「でも、本当に面白いよ、ジヨジ○。私、漫画ってそんなに読まないんだけど、お正月とか暇な時はずっと読んでたもん」

「正月暇だったのか。羨ましい」

「? お正月ってお休みの日だし、家でゆっくりしたりして、普通時間があるものじゃない?」

「そうだよ、そのはずなんだよ（憤慨）」

「普通って何なんだろうな（哲学）」

「海は正月何してたの?」

「俺? 初詣に連行されて、働いて、働いて、おじさんに酌してた」「ふーん」

「そっちから聞いてきたのに興味なさそうだなこの野郎。」

「昨日一昨日は配信してたな。弾き語りの」

「え、何それ聞いてない。いつやったの?」

「だから昨日と一昨日だって」

「話聞いているのか聞いてないのか分かんないんだよな、おたえって。」

「見たい。まだ見れる?」

「アーカイブ残ってるし、見れるんじゃない?」

「帰ったらすぐ見る」

「今日はやることいっぱいだ、と謎に意気込んでいる。別にすぐすぐ見なくてもいいと思うけどな。」

「... あ、そうだ」

「今度はなんだ」

「いつかき、私とやってよ、弾き語りデュエット。小さい頃以来デュエットとかあんまりしてこなかったし、海とやりたい」

「弾き語りデュエット。まあ要するにセッション。」

「瞬間、蘇る昨夜の記憶。」

「あのクソアマ、いつか絶対ギャフンって言わせてやるからな！（強く出れるのは内心でだけ）」

「ま、いいよ。今度な」

「うん、約束」

「そこからお互い、他愛のない話をする。」

「最近ハマってるバンドとか、冬休み明けの実力テストがヤバそうとか、牛込さんの姉でありグリグリのギタボの人が卒業後は海外に行くだとか、ちよつとベースにも興味があるとか。」

そんな話をしていると、とてもダンディな男の人が俺たちの席の横を横切った。

まあ街を歩いていけばイケメンや美女なんて結構な確率で目撃するもんだが、今回は少しばかり気になることがあった。

「…ここ、タバコ吸えるのか」

そう。ダンディなイケおじから、タバコの匂いがしたのだ。

「海、タバコ吸いたいの？」

意外そうにおたえが聞いてくる。

でもこれあれだな。俺が喫煙者だと思ってるな。

「俺は別に吸わないけど、ちよつと憧れはあるよな。カッコいいし、ロククンロールって感じがする」

ウチはお母さんもお父さんもタバコを吸う。

姉ちゃんも一応喫煙者だ。まあ、家以外では吸わないし、その時々彼の趣向に合わせて辞めてる時もあるけど。

今はフリーだし普通に吸ってるんじゃないかな。

「それはちよつと分かる。タバコ吸ってるバンドマン、ちよつとカッコいいよね」

「おたえはクール系だし、タバコ似合いそうだよな」

「そう？ 吸ってみようかな」

「はいはい、ちゃんと二十歳になったらな。俺も気になるし、その時も普通に話す仲だったら一緒に吸ってみるか？」

「すうー」

おう、元気が良くて何よりだ。

まあ大学が同じか分かんないし、二十歳になった時も一緒にいるかは分かんないけどな。

つーか軽率に約束したけど、二十歳になった時におたえに彼氏でもいようもんならヤバいな。相手によっては殺されるかもしれない。

ま、あと四年先の話だ。

その時の問題はその時に片付けよう。

「でもタバコって、一本吸うと寿命が五年縮むっていうよね」

「五分な。五年だったなら今頃喫煙者は全滅してるよ」



お母さんは随分なヘビースモーカーで、一日一箱は必ず吸っているらしい。

えっと、一箱が二十本だから、一ヶ月だと六百本で、一年だと七千二百本。かけることの五分で、三万六千。わって六十の六百時間。さらに二十四時間でわって…えと…二十五日か。

え、お母さん毎年二十五日も寿命縮んでんの？ エグ。

「タバコっていくらくらいするんだっけ？ 高いっていうのは聞いたことあるんだけど」

「物にもよるけど、お母さんが吸ってるやつは一箱で五百四十円らしい」

「高いような… そうでもないような…」

まあタバコなんてこれから死ぬほど値上げされていくだろうからな。

俺たちが吸える歳になった頃には一箱千円とかいっててもおかしくはない。

まあ破産しない程度に楽しみ、つてこつたな。

てか今ふと思っただけど、俺ら制服着てるじゃん。

タバコの話とかしてて補導されねえかな（ビビリ）

補導はまだしも、氷川さんとかに聞かれたら色々面倒そうだな（フラグ）

「高校生がタバコタバコと、一体どういうつもりですか！」  
早いよねえ。回収がねえ。

? ? ? ? ?

「落ち着きましたか？ 氷川さん」

「ええ、まあ」

「どうぞ紗夜さん、粗茶です」

「ありがとう花園さん…粗茶？」

さて、突如として現れた風紀戦隊ヒカレンジャー、隊長の氷川紗夜

さん。

俺らと同じくハードロックカフェに興味があり、俺らとは違いきちんと一度帰宅して着替えてからここまで来たらしい。

それで、ちようど入店してきて俺らを見つけ、一声かけるか悩んでいたところで、さつきのタバコ発言だ。

さらに都合良く、「二十歳になってから」の部分だけ聞こえなかったらしい。どういう耳してんだ。スタジオの入りすぎで耳がイカれたか？

「はあ… 喫煙はあまり褒められた行為ではありませんが、国で定められた年齢制限をクリアしてからであれば、それは自己責任です。さすがにそこまでうるさくは言いません」

おたえに渡された粗茶（ウーロン茶）を啜りながら、氷川さんは一息つく。

「ま、勘違いとはいえ、俺らの非行を必死に止めようとしてくれたのは感謝します。そういう、きちんと注意してくれる人って貴重ですからね」

まあ、店のど真ん中で、怒りで顔を真っ赤にしながらタバコの危険性を説かれた時はどうしようかと思っただが。

この話は一旦置いておこう。

楽しい話でもないしな。

それよりだ。

「氷川さんもハードロックカフェに興味あったんですね。ハードロック、好きなんですか？」

「ええ、好きよ」

意外だ。

まあ氷川さんの場合、ギターやってバンドにも参加してて、つてことがもう意外だからなあ。

「意外ですか？」

「まあ、正直」

おたえも頷いてる。

「ちなみに、好きなバンドは？」

「そうですね…。あまり面白くないかもしれませんが、N i r o a n aが好きです」

最高じゃないか！

「面白くないことはないと思いますけどね。最高じゃないですか、N i r v o n a」

有名どころを好きというのがニワカっぽいという風潮、ダメだと思います。

というか良いものだから有名になるんだし、良いものは好きになるからな。

巷ではワン〇クが好きって言ってるラウド好きはニワカ、みたいに言われてるみたいだけどな。いいだろ、ワ〇オク。かつこいいじやん。

「俺はB☒〇が好きです」

「私はジミ〇ンかな」

「意外ですね。花園さんはともかく、関口くんはもつとコアなバンドが好きなんだと思っていたわ」

「まあそつすね。ほかにも好きなバンドはたくさんありますけど、あえて一番を挙げるならB☒〇かなって」

B☒〇は俺が一番最初に聴いたハードロックだ。

まあ日本人ならそういう人が多いんじゃないかな。世界的に見たら、まあ無名とまではいかないだろうが、有名じゃないだろうけど。

国内じゃ評価が高いが、一部、というか自称・音楽評論家達からは不評らしいな。なんでも彼らにとっては松本さんのギターは下手らしい。

意味が分かんないよな。あれが下手だったら何が上手いんだ。

「ま、好きは人それぞれ。有名だろうがニツチだろうが、自分が好きなものを堂々と好きって言うのが一番ですよ」

結局、自分の好みなんて他人に左右されるもんじゃない。

むしろ、他人の評価を気にして自分の好きなものを決めてるやつの方がダサイ。もつと自分に芯を持ってよ。

この後、ギタリスト三人で各々好きなギターソロを発表し合うという超絶楽しい空間が広がった。  
やっぱり音楽は偉大だ。音を摂取するだけでストレスからも解放される。

一時間ほど話し、そろそろ帰ろうかと席を立った。  
外は予報通り、雪が降ってきている。

「うわ、降ってんなあ」

「海って雪嫌いなのか？」

「雪つつーか寒いのがちよつとな」

寒いと指動かしにくくなるし。

ギター弾くのすら辛くなってくるからなあ。

「寒い日の朝にランニングするのって空気が澄んでいいよね」

「人が寒いのが苦手ってのに同意を求めんな」

マイペースすぎるだろ。

いや、空気が澄んでるってのは分かるけど。

「花園さんはランニングをしているの？」

「はい。朝はランニング、夜は素振りをしています」

「野球部か？」

「？ 違うよ？」

小首を傾げるな。

「素振りって何をしているんですか？」

「ストローク素振りです。イメージトレーニング」

「いや弾けよ、そこまでするなら」

相変わらず分からん奴だな。

こんな調子で会話を続けながら同じ電車に揺られ、途中で俺だけ降りる。

さようならと二人に手を振り、乗り換えの為にホームを移動した。

始業式の放課後。

最初はしぶっていた寄り道だが、今は来て良かったなど心から思う。それくらい楽しかった。

明日は土曜日だが朝からバイトだ。

頑張る英気を十分に養い、俺は軽い足取りで家に帰った。

ピロン（LINE通知音）  
ん？

Y u t a 『来週ライブあるんだろ？』

Y u t a 『さすがにそろそろ練習始めっか』

ライブ？

誠 『そうだなー』

誠 『何やる？』

ライブ・・・ライブ・・・

ああ！ 年末ライブの打ち上げでまりなさんに言われたやつか。

え、でもあれって三百時間くらい余裕あったよな？ 来週？

Y u t a 『新曲作るか？』

Y u t a 『昨日関口のスレ見てたんだけど、面白いこと書いてあつてさ』

俺のスレって何。

Y u t a 『歌詞、英語にしてデスポッとけばいけんじゃね？ って』

誠 『それだ！』

誠 『考えたやつ天才か？』

Y u t a 『んじや明日その方向で新曲考えてみっか』

Y u t a 『関口もそれでいいよな?』

何も分かん (脳死)

え、もつと余裕あると思ってたライブがもう来週で? 俺のスレが

立ってて? 新曲作るの?

何も分かん (逃避)

K a i 『あ、うん』

K a i 『いいよ』

∴ 明日から寝られっかなあ、俺。

『革命前夜にランナウエイ　くお国に逆らうもんじやない〜』

「高速クロマチックからの多スライドしてハーモニクスからの開放弦だああ!!!」

「マシンガンツীবスを喰らえ！　もっと熱くなれよ!!!」

「あー!!　大きい音しゆきなのおおお!!!」

こんなノリで新曲が出来た日曜日の夜。

歌詞はどこぞの俺スレで提唱されたらしい「ダサかったら英語にしてシャウトやデスポで歌えばいいじゃない」を採用して意味の分からないモノが出来上がった。

俺スレってなんだよ（微ギレ）

そして月曜日の昼休み。

一晩明けて冷静になった頭で、出来上がった新曲の音源を聴く。

「…何やってんのコレ？」

「もう一回同じこと叩けって言われても俺無理だな」

「そもそも昨日の記憶が『音を喰った』以外にない」

結論、誰も理解できていなかった。

深夜テンションみたいなきらな感じで作ったからな。

というわけで、放課後。

巴に土下座してバイトのシフトを代わってもらい、スタジオに入る

た。

カオスすぎた曲を聴き、つめていく。

「ギターソロ、五十秒くらい入れるか？」

「俺の負担重すぎだろ」

「はい！ ベースソロやりたい！」

「んじゃあギターソロ三十秒のベースソロ二十秒な」

「どうして五十嵐は五十秒に拘るの？」

「俺の名を呼んでみろ」

「五十嵐？」

「そういうことさ」

「意味が分からん」

「まずはドラムソロから入るか」

「まあいいんじゃないやね。カツコイイし」

「なあ。俺デスポ出したいんだけど」

「おっ、いい傾向だな須田。よし、デスポイスの極意を教えよう。まずは悪魔を召喚します」

「関口のその教え方なんなの？ それじゃさすがの須田も…」

「こうか？ ヴオオアオオオオアアアア！！！！」

「なんで出せるんだよお前はよ」

「デストロオオオオイ！！！！ デストロオオオオイ！！！！」（須田スクリーム）

「■■■■■■■■■■ーッ！！」（関口グロウル）

「なんなんだお前ら」

「おいおい五十嵐。茶なんてシバいてる場合じゃあないぜ。お前も須

田を見習ってデスヴォイス（激うま流暢発音）を出すんだよ！」

「出さねえよ」





須田 は デスボ を 覚えた ！  
五十嵐 は シャウト を 覚えた ！  
新曲 は 完成 しなかつた ！

? ? ? ? ?

五十嵐に半殺しにされかけた翌朝。

一晩経って気持ちが悪く落ち着いたつぽい五十嵐と爽やかに挨拶を交わし、油断したところを背後から殴られた後。

「今日はどうするよ。スタジオに入るか？」

朝のHR前の時間。

俺と同じく背後から殴られたらしい須田が言ってくる。

「ライブ本番まであと三日とかだろ？ 入っておきたいよな」

「そうだな。とりあえず新曲くらいは今日中に完成させておきたい」

五十嵐の意見に同意を示す。

新曲が完成すれば、俺らCapliberteのオリジナル曲も三曲になる。そうなれば、オリジナル曲だけでライブに出ることも可能だろう。

俺が同意したことに、五十嵐が頷く。

「よし。んじゃ入るか。サ○サイの練習もしなきゃだしな。今回は曲、何にする？」

まだサイ○イやんの？

オリジナル曲三曲もあるのに？

なんで？

「俺『天下○品のテーマ』がいい。シンセもあんま目立ってないしいけそうじゃね？」

須田もなんで乗り気なんだ？

まあ面白そうだからいいけど（コミックバンド）

てか天下○品のテーマってどんな曲だったっけ。

確認のため、YouTubeで検索してみる。

MVもあるけど…。お、ライブ映像があるな。こっちの方がいいや。音源を聴いたところで、存在しない二本目のギターに翻弄されるだけだからな。

再生ボタンを押し、広告をスキップ。

『てれれーれれ、てれれれれー』

「チャルメラじゃねーか」

天下○品なんじゃないの???

いやラーメンなことに違いはないけどさ。

ドラムから入り、聴きなれた音がする。

うーん…。まあ簡単つちや簡単か。ユニ○ンとかと比べちゃうとやっぱりな。

暫く聴き、間奏に入った。

違う曲始まったんか？ ってくらい色が変わったな。遊びポイントか。

すると、ゆ○るん（キーボード）が突然天下○品の旗を掲げて前に出てきた。

『みんな！ 天下○品のコツテリ、食べてるかあ〜!』

「ホル○ンか??？」

もうね、コツテリって聴くだけで思い出しちゃうよね。マキシマム○ホルモン。

そこからラップも始まるし…。何だこの曲、楽しいな。

「確かにキーボはなくても気にならない曲だな。し、ギター部分はどう覚えたしすぐ弾けるぞ。歌詞は昼休みにでも覚えとく」

「たった一回聴いただけで覚えたの？」

「人のことバケモノだキチガイだ言ってくるけど、お前も大概だよな」  
失礼な。須田ほどじゃねえよ。

けどまあ、この一年でコピーの速度だけは異様に早くなったのは実感がある。そうしないとどうしようもない一年だったからな。

「とりあえず、サイ○イのこの曲と、今作ってる新曲。あとは既存国家の三曲でいくか」  
「さんせー」

「異議なーし」

五十嵐の言葉に二人で賛同する。

クリスマススの歌はクリスマスにやるべきだよな。それが真夏。

「とりあえずスタ練やるか。よーし、ツグるぞー！」

? ? ? ? ?

というわけで、ライブ当日。

本番の二時間ほど前。

「やつほー、海！ 観に来たよー！」

そう言っただけで楽屋（待機所）に現れたのは、今日も今日とてパイストラをキメるひまりだ。

「よー、ひまり」

お、須田が座った。

そろそろ耐性できてもいい頃だと思っただけだなあ。

「お、ひまりちゃんいらっしやい。せんべいとあつたかいお茶あるよ」

「わーい、ありがとー！」

五十嵐は大人（○）の余裕を見せている。

彼女がいるやつだ。経験値が違う。

殴っちゃおっかな（嫉妬）

演者でもないのに楽屋の菓子を食べとお茶を飲むひまりの食い意地に少しだけ呆れつつ、質問してみる。

「ひまり、今日一人？ ほかは？」

「Roseliaとポピパのみんなは外にいるよ。巴とつぐも！」

モカは究極のパン探しの旅に行っちゃって、蘭は家の用事があるんだって」

「ほーん」

蘭はともかくモカのやつは何なんだ。

「今日の人達、みんな知らないバンドらしいけど…海、大丈夫？ ちゃんと話せてる？」

「バカにしてんのか」

本気で心配そうに聞いてくるひまり。  
極めて心外だ。俺だって初見の人と話すくらいできるわい。…音楽の話なら（内弁慶）

ひまりの言う通り、今日のライブ、顔馴染みのバンドは一組もない。

RoseliaやAftergrowを始め、いつものメンバーは参加を断ったそうさ。

まあそりやそうだな。こんな頻度でライブなんかしてられつかなよ。

ならアホなスケジュールでライブしてる俺らは何なんだっていう話は一旦置いて。

じゃあ今回の参加バンドはどんな人達かというと、まりなさんがかき集めてきた「重めの音楽を好むバンド」の皆々様だ。

その気遣いに感謝…ッ！ 圧倒的…感謝ッ…！

まあCIRCLEでやるだけあって全部ガールズバンドではあつたんだが、女性だからと侮るなかれ。

リハを見た感じ、ゴリゴリのデスボを出す人こそいなかったものの、メタルやハードロックをリスペクトしていると感じられる音楽をやっていた。

リフとねえ…バスキッドラがねえ…重いよねえ…（恍惚）

試しに好きなバンドを聞いてみたところ、ドラゴフォースやHELLOWEEN、Rhapsody of Fireなど、出てくる出てくるメタルバンド名。

つかみんなパワーメタル好きなの？

あと、一番かっこいいなつて思ったバンドのボーカルの人が好きって言ってたFRÖZEN CROWNとかいうイタリアのバンド。

俺も知らなかったので聴いてみたら、なんとまあ素晴らしい、悶絶するほどのメロディックデスメタル。いや、パワーになるのか？ その辺のジャンルはあんまり知らないけど、“良い”“”っていうのは分かる。北欧メタルってイイよね。

「えー？ 海ってあんまり人と話すの得意じゃないじゃん。特に初対面の人とか」

「はっ、いつの話をしてんだよひまり。俺は成長する男だぜ？ おい五十嵐、俺の完璧なファーストコンタクトをこいつに教えてやってくれよ」

メタラー相手にこの俺が臆するわけないだろ。

中々巡り会えない同胞だぞ。逃がしてたまるか。

「関口のやつ、ちよーどもってたよ。オタクくんさあ… って俺思ったもん」

「ほらやつぱり！」

「五十嵐さん!？」

「そんな!？」

俺のパーフエクトコミュニケーションをテメエ！

《関口海のパーフェクトコミュニケーション(妄想ver.)》

関口「ギター、めちやくちや上手いですね！」

S子「え、ほんとですか？ ありがとうございますっ！」

関口「音作りもすっげえ良かったっす！ <sup>エフェクター</sup>歪みは何使ってるんですか？」

S子「Electro-Harmonixのmetal muffってやつなんですけど、これ歪み具合がすっごい強烈で！ それに3バンドイコライザー積んで、低音が——」

《関口海のパーフェクトコミュニケーション(現実)》

関口「あつ、その、あれつす、えと… ギター、めちやくちや上手いですね…」

S子「え？ あ、はい。ありがとうございます…?」

関口「音もすっげえ良くて… あ、エフェクターとかって、あの、何使ってるんすか？」

S子「え？ あー、Electro-Harmonixのmeta l m u f f ってやつです。歪み具合がすごく強烈で、あと3バンドEQっていうの積んでて、低音調整とか中音域のカットとか、めっちゃ便利でー」

関口「え、めっちゃいいっすねそれ」

S子「……………。あつ、はい。そうですね」

「あんなキョドってる関口、俺初めてみた。自分から話しかけたくせにアレとか」

「海ってそういうところあるからね。妙に緊張しいで。特に女の子相手だとね。あ、でもやるときはすっごく頼もしいんだよ？ 普段からじゃ考えられないコミュ力発揮するし」

そ、そんなに酷かったか…？

自分では「よし、楽しく話せたな」って感じだったんだけど…。

「あ、でもあのボーカルの人とは上手く話せてたな。あつちも楽しそうだったし、いい雰囲気だった。なんか飯食いに行く約束してたよ」

「……………へえ？」

「ひまりさん!？」

こっつっつわ。

何今の、殺気？ 姉ちゃんがキレた時のソレじゃんよ…。

こういう時の対処法、俺知ってるんだ。

とりあえず謝っつけ。こうなった女に逆らうのは得策じゃない。

ということでプライドなんて犬のエサにしてDOG☆GE☆Z☆Aをキメていたところを例のメタラーボーカリストに見られ、

「えっ、あつ、その…わ、私、関口くんに彼女さんがいるとか知らなくて…！ その、ごめんなさい！ 略奪とかそういう趣味はないんですぅ〜！」

などと言われるという事件(?)が発生するが、それはまた別の話。

? ? ? ? ?

「まあそう泣くなって関口」

「泣いてねえよ」

なぜか成し遂げ顔のひまりが楽屋を去った後。

俺は、男の子の時間(意味深)から復活した須田に、謎の慰めを受けていた。

いや意味が分からん。

まあ確かに、メタラーボーカリストさんのお食事会がご破算になったことは残念だ。

俺の知らないメタルバンドの名前を出してくる人なんて、今までは姉ちゃんくらいだった。

メタルに関して深い話ができる人なんて、それこそ姉ちゃん以外にいたことないからな。いろいろ話せるかも、という期待はあった。

おたえ? あいつはロックンローラーで、メタラーとはまた少し違うから。あいつと音楽の話してるのもめっちゃくちゃ楽しいんだけど、メタルの深いところまでは話せないからなあ。

加えてメタラーボーカリストさんは年上美人(大学三年生らしい)だったので、まあ残念な気持ちも非常に強い。

けど泣いてはいねえよ。

まあ、それはともかくだ。

「ちよつと無茶言うけど、今から一曲増やさね?」

本番まであと一時間と少し。

こんなタイミングで曲数を増やすなんて正気の沙汰じゃないが、どうしてももう一曲やりたくなった。

元々この短期間でライブやること自体正気じゃないからな。狂っ



てるのは今に始まったことじゃない。

「んー… 曲による。五十嵐は？」

「俺も曲によるな」

即拒否してこない辺り、やっぱりこいつらも狂ってるんだよなあ。

「HELL○WEENのKeeper of the Seven Keysってやつなんだけど」

「アホか？」

「？」

五十嵐は明確に俺を蔑む目を、須田はわけがわかっていないように首を傾げる。

むう… やっぱりしんどいか。

「なあ五十嵐、そのキーパーオブ… なんとかつての、そんなに難しい曲なん？」

「あー… 難易度も低くないけど… その曲な？ 十三分あるんだ」  
「十三分」

長いよねえ。

でもまあメタル界限じゃよくある事だぞ。

「んじやあ同じアルバムに入ってるEagle Only Freeとかどうよ。こっちは五分くらいの曲なんだけど」

ここで仕掛ける。

以前俺がまりなさんに仕掛けられた心理トリック。そう、『Doo r in the face』である!!!

十三分という長さから五分程度の曲を提示するというこの手法。俺が騙されたんだ、こいつらが騙されねえわけがねえ!! (確信)

「まあ… 五分もないんなら…？」

「短いよな」

計 画 通 り 。

チョロ過ぎてこいつらの将来が心配になるぜ (棚上げ)

「でもよく関口。HELL○WEENってあのHELL○WEENだろ？ お前がたまに、俺や五十嵐に布教してくる」

「ん？ ああ。素直に聴いてくれたのは五十嵐だけだったけどな」

「おめエが無理やり聴かせたんだろうがよ。美穂(彼女)まで巻き込んで。つーかあいつ、お前の布教のせいで最近ずっとメロデス聴いてんだぞ。どうしてくれる」

え、まじ？

澤田さんメロデス聴いてんの？

何それ、めちやくちやお話したい。

「まあ今は五十嵐の彼女はどうでもよくて」

「美穂の話はどうでもよくねえだろ」

「一旦置いていて」

「まあ… それなら…」

ホントに大丈夫かコイツ？

「それでさ。関口お前、言ってたじゃん？」

「何を」

「HELL〇WEENはツインリードが美しい、って」

「ああ、言ったな。反論があるなら聞くが？」

完全論破してやんよ。

「いや別に反論とかじゃない… あいや、まあ反論っちゃ反論になるんだが」

なんだ？

歯切れの悪い。

「俺らスリピだしギター関口しないねえけど、お前それでいいの？」

「！… へへっ。さすがだぜ、ブラザー…」

「なんだお前」

五十嵐の蔑むような目は無視して、今は須田だ。

こいつは素晴らしい。最も危惧すべき問題をしっかりと分かっている。

いつもならギターが二本鳴っているように俺が強引に弾き倒していたが、今回はそうはいかない。

いや、やろうと思えば出来なくもないんだろうが、俺がそれを許さない。

HELL〇WEENはツインリードでないとイケない。

「まあそんなに心配そうな顔すんなよ須田。対処法はもう考えてある」

「いや、別に心配とかはしてねえけど」

と、いうわけで。

「こちらギタリスト、牛込ゆりさんです」

「りみの姉のゆりです！ みんなよろしく」

お、須田がひっくり返った。

？ ？ ？ ？ ？

「おいバカ口。展開が急すぎて俺はついていけないんだが」

「須田に胸ぐらを掴まれる勢いで詰め寄られる。」

やめろ、熱いんだよ。ここ結構暖房効いてんだから。

「いやな？ この前の年末ライブでLINE交換してて。そんでついさつきHELLOWEENって知ってますかって聞いたたら、なんとEagle Only Freeを今聴いてるって言うじゃありませんか」

「あーりませんか、じゃねえんだよ」

「なんでこいつはコミュ障のくせにコミュ力高いんだ…」

おい五十嵐。俺はコミュ障じゃない。ちよつと初対面の人と話すのが苦手なだけだ。

「海くんから聞いたけど、HELLOWEENやるんだって？ しかも今から覚えるとか！ りみに聞いてたけど、キミたち無茶が好きだね」

「いえ、決して好きなのわけではないんです。DMなのは関口と五十嵐だけです。信じてくださいお義姉さん」

こいつ今ゆりさんのこと「お義姉さん」つつたぞ。

「あはは。まあ性癖の話は置いといて」

置いてくだけなのか…。

「ほんとに大丈夫？ 私は前に練習したことあるから弾けると思っ  
ど」

練習したことあるのか…。

まあ俺もちよつと練習したことあるし、五十嵐は聴いたことあるっ  
ぽいし、俺らは大丈夫だろう。問題は曲を聴いたがことないらしい須  
田だな。ベースソロとかあるし。

「メタル系はベース単純なこと多いし大丈夫だとは思いますが…  
耳コピかあ。間に合うかな」

「それならネットにTAB譜落ちてると思うよ」

さすがにビビる須田に、ゆりさんは自分のスマホの画面を見せる。

「えつとね、このsongsterってサイトに… あ、ほら。ベ  
スTAB譜あったよ」

「マジですか！ めっちゃ助かります！ ありがとうございますお義  
姉さん！」

「さつきからその『お義姉さん』っていうの何？」

「気にしないでください」

へえ、そんなサイトあるのか。

えと… そんぐ… お、これかな。

スマホでサイトを開き、中身を確認する。

様々な曲が入っているようで、トップページの一番上に出てきたス  
コアはメタ○カのMaster of Puppetsだった。

それを開き、TAB譜を見てみる。

おー。パート毎にTAB譜が分かれてるのか。カラオケ音源も一  
緒に流れるし… っておい、ギターが四本もあるわけないだろいい加  
減にしろ！ …… え、ないよね？ (不安)

ま、まああれだ。

TAB譜があれば、須田なら三十分で仕上げてくるだろう。

その後CIRCLEの空きスタジオで十分くらい合わせをすれば  
大丈夫だ。

「視」えたな、<sup>路</sup>がよお。

ちなみにだが、俺らCapliberteの出番は最後、このライブのトリだ。

カプリ初、そして俺の人生初のトリを任された。

いつもは周りに遠慮して辞退していたが、今日のライブはHR/HMのライブ。俺たちがトリを飾ってもなんら不自然はない。よって辞退する理由もなく、責任を持って務めさせていただく所存だ。

それ故の一曲追加でもある。

どのバンドも、主に北欧メタルを起源に持つていそうな演奏をぶちかましてくる。

となれば、その北欧メタルの先駆者、パワーメタルの教科書みたいな音楽をしているHELLOWEENのコピーが盛り上がらないわけがない。

「そんじゃあか is powerってことで、HELLOWEENコピー頑張りましょう！」

「「おー！」」

これを聞いていた別のバンドの人らに「あいつら、マジ変態じゃん」とキラキラした目で大絶賛されるのだが、これもまた別のお話。

? ? ? ? ?

なんやかんやあって、ライブは最高潮。

猛者共のヘドバンで会場が熱気に包まれる中、俺たちCapliberteの出番がくる。

「それじゃあとリ、カマして行ってねー！」

例のメタラーボーカリストからハイタッチを求められ、ちよつと気恥しい思いもありながらそれに応える。

薄暗いステージ。

PAの人らが準備してくれた楽器が佇むそこに、SEに合わせて登場した。

まずは五十嵐。

バンドマンにあるまじき爽やかさに、前列の何人かが若干どよめく。

真冬だというのに半袖のTシャツを着ているため、五十嵐の見事な腕が晒されて、立派な胸筋が浮き出ているからか。数名の女性オーディエンスからちよつとした黄色い声が上がった。あと何故か突然バク宙を決めやがってどよめきも起こった。

澤田さんはどんな気持ちなんだろうな。

まあ五十嵐が浮気するなんざ夢にも思っていないだろうし、自慢の彼氏を持つて誇らしい気持ちなんだろうか。それともやっぱり、少しばかり嫉妬というか、そういう黒い感情が出てくるものなのだろうか。

続いて須田。

こいつもこいつでバンドマンにあるまじき明るさを持っている。

人懐っこい笑顔で観客に手を振りつつ、自身の立ち位置にまで軽快に歩いていった。

最初のライブ、文化祭で緊張に震えていたことが嘘のようだ。この一年……いや、半年くらいか。そんな短期間でずいぶんと場馴れしたもんだと感心する。立ち姿も随分と様になっている。

才能だけじゃない。人一倍練習もしているからこそ、全身から『自信』が溢れ出ていた。

そして、俺。

五十嵐のような爽やかさや筋肉も、須田のような明るい人懐っこさもない俺は、ただ淡々とステージが上がった。

それでもパスペレとの絡みや人気アーティストのサポートで武道館ライブを経験したことがあるからか、観客からは少なくない声がかかる。

素直に嬉しい。そして恥ずかしい。

人に注目されるのってそんなに得意じゃないんだよな。

あ、ひまりたちが奥の壁際にいる。めっちゃ手振ってるな。ちよつと振り返しとこ。

Roseliaとポピパのめんつもその辺に固まってるな。まあさすがに、狂ったようにヘッドバンする前列には混ざれないか。

ギターを構え、五十嵐と須田を見る。

二人とも準備は万端なようで、いつでも演れるぞとこちらを見ていた。

「うし。やるか」

観客側には聞こえないくらいの声でそう言う。

頷いた五十嵐が、ステイックで四カウントを刻んだ。

始まりは、『既存国家の転覆からの迅速な建国』。

序章はより遅く、より重く。ギターもこれでもかかってくらいに歪ませる。

暫くすると、メロディアスな曲調へ移行した。

多少低音をカットし、中域から高音のリフで押す。北歐らしく、荘厳で雄大。叙情的なメロディを全面に出し、聴く者を惹き込む。

一度ペースを落としたあと、一気に速度を上げた。

激しく苦しい闘争を表現するように、長く、重々しく、息の詰まるようなブレイク。

からの、爽快な、音像がはっきりしたギターソロ。オクターバーを使い、ハモリを入れる。

これだけで音の厚み、表現の幅が全く違う。まあ個人的にギターソロのハモリが好きってこともあるけど。

ソロが終わり、曲は終息に向かう。

またも速度を落とすし、しかし重くなりすぎず、凱旋のような煌びやかなイメージ。

音楽理論なんてない、俺たちのやりたい音楽。

きつと聴く人が聴けば呆れてしまうような構成を、俺たちは満足し

て演り終えた。

最後の音をしっかりと刻み、集中で止まっていた呼吸を再開した。と同時に、大きな歓声上がる。

——ああ。なんて気持ちの良い。

今までは、ここまで盛り上がることもなんてなかった。

それもそうだ。そもそも、客が求める音楽と俺たちの奏でる音楽は全く違っていたのだから。

異質な世界観と、自分でいうのも何だが、俺たちのテクニックで観客を黙らせてきた今までとは大きく違う。

沸き上がる観客。襲い来る熱気。

その全てが、初めて見る、初めて感じる光景だった。

「ははっ。最高だな、おい」

五十嵐のそんな声が聞こえる。

全くだ。こんなの、俺は知らなかった。

今までのライブも十分に楽しかったけど、ここまで変わるものなのか。

オーデイエンスの趣味趣向が今までと違う、というのもあるし、何より、ここがライブの最高点、トリという位置だからということが大きいだろう。

本当に、最高だ。

『初めましての方は初めまして。お久しぶりの人はお久しぶりです。Capliberteです』

歓声が響く。

あつちはマイクなんて通してないというのに、腹の底まで届くような大歓声。

『俺ら、ライブのトリ務めるのって初めてなんですけど、これめちゃくちゃいいですね。控えめに言っても最高です』

パスパレやサポートで行った武道館のライブではこれ以上の大音



量を浴びたが、そのの百倍は気持ちがいい。やっぱり、自分のバンドだと全く違う。

『今日演<sup>や</sup>つてくれたほかのバンドは本当に上手だし、あの人たちのトリを務めるのって少し緊張してたんですけど… 辞退しなくて良かったです』

これは少し嘘が入る。

確かに、ほかのバンドも上手かった。

だが、俺たちが一番かっこいい。Capliberteが一番凄<sup>い</sup>い。

俺たちこそが一番だと、俺はそう確信している。

『はい、じゃあ次の曲。サイ○イの「天下○品のテーマ」やりまーす』

それはもう、ありえないくらい盛り上がった。

? ? ? ? ?

サイ○イも終わり、頬を伝う汗をタオルで拭い、水を飲む。

『いやー、皆さんノリが良くて大好きです』

HR/HMを聴きに来たはずであろう観客がサイ○イでここまで盛り上がってくれるとは。

まあみんなヘドバンしてて世界観はぐっちゃぐちゃだったけど、楽しければOKだ。

『えー… まあ話すこともそんなにないんで、次の曲行きます。新曲っす。歌詞ありっす』

おおー!!

と観客が沸く。

『それでは聴いてください。「革命前夜にランナウェイ　くお国に逆らうもんじゃないく』

おおお!?

と観客がどよめく。

ドラムから入り、四小節後にしつとりとしたコードを入れていく。加えて、ここは静かに歌う。

決起前夜、嵐の前の静けさをイメージした譜だ。

同じフレーズを三回繰り返したところで、一度音を消す。

数秒の空白の後、突如解放される、重い音。

まだまだスローペースだが、徐々に徐々に速度を帯びていく。

一定の速度に達すると同時、また一度全ての音を消し、そして咆哮。

そこからは速度が命だと言わんばかりのツীবラスと、叙情的でメロ

ディアスなミドル気味のギターを入れていく。

これは完全に俺の個人的な主張だが、メタルにおいて、ボーカルは歌手ではない。

歌うのはリードギターだ。主旋律はギターが奏で、デスボイスはその下地。

メタルにおいて、声は楽器になるし、楽器は声になる。

まあ要するに、皆すべからく“音”であるということだ（？）  
サビに入る。

ここからは俺だけでなく、須田も声を出し始めた。

一フレーズずつ分けて声を出し、最後は一緒に大咆哮。もうめっちゃくちやだが、それがいい。

ギターソロをかき鳴らし、締めにはチョーキングをカマしてからシャウトする。

そこから更に激しく、荒々しく、Cメロを走り抜け、終焉。

全体的にメロデスのような芳醇な香りと、パワーメタルのような男臭さを内包した、いわゆるメロパワー系の曲だ。

革命前夜にトンスラこいた男の話を表現した曲だが、そこには彼なりの正義があり、雄々しさを全面に出した曲である。

うーん、我ながらなんと芳<sup>ッ</sup>ば<sup>ッ</sup>しい。

けどやっぱりメタルをやるならギターがもう一本欲しいし、ピンボがいれば万々歳。キーボードがいても面白い。

そのうち募集でもしてみるか。

『次、ラストっす。例の如く話すこととかないんでさっさと始めようと思うんですが、その前に』

一拍おいてから、ステージの袖へ目線と手を向ける。

『サポートで呼んだ、Glitter\*Greenの牛込ゆりさんです』

一部から驚きの声が上がった。

普段からCIRCLEのライブに顔を出している人らは、ゆりさんのことをよく知っている。

普段の彼女を知っていれば、今この場に出てくるのは場違いもいところだと感じるだろう。だから驚いている。見ろ、あのクールビューティRoseliaの皆さんでさえ口あんぐり開けてるぞ。

『お呼ばれました、グリグリギターボーカル、牛込ゆりです！』  
堂々と自己紹介をするゆりさん。

さすがに慣れてるな。

『ラストは、きつとみんな大好きあのバンドのコピーなんですけど、ギターが二本欲しかったので呼びました。来てくれてありがとうございます』

『本当に感謝してよね！ 普通、本番の1時間前に突然呼び出されて了承する人なんていないんだから！』

『マジありがとうございます』

よく考えたら嫌な後輩だな、俺。

『えー、これ以上延ばすのもアレなんで、ラスト始めます。ラストはこの曲』

一旦溜め、はっきりとした声で曲名を告げる。

『HELLOWEENで、「Eagle Only Free』

曲名を聞いた観客たちの間で狂乱が巻き起こる中、俺たちは演奏を始めた。

ジャーマンメタルの先駆者、メロスピの始祖。そんなHELLOW

EENの代表曲と言っても過言ではない、このEagle Oly Freeという曲。

かの有名なアルプス一万尺を彷彿とさせるメインリフから始まるこの曲の見どころ、もとい聴きどころは、なんと言っても楽器陣のソロだ。

ギターはもちろん、ベースとドラムのソロもある。

その間、脅威の一分間。

ギター↓ギター↓ベース↓ギター↓ドラムの順で織り成されるソロの嵐は圧巻の一言に尽きる。

ヘヴィメタルにしては随分とポップな曲だが、歌詞の内容は、現代社会に対する疑問や人間の本质について揶揄的に歌っている。まさにヘヴィメタルだ。

加えて、メロディアスにスピード感がありながら見事に絡み合うツインギター、リズムを保ちながら歌い上げるように曲を支え盛り上げるベースライン、パワフルにバスドラを踏み鳴らすドラム。

それぞれの楽器の見せ場を持ちながら、一つの曲として完全に融合している。

メロディ、歌詞、曲の構成、演奏技術と全てにおいて非の打ち所が無く、まさに“完璧”な曲だといえる。

オラ、お前らはこの曲大好きだろ。音に身を任せて首がもげるまで頭振れ。

? ? ? ? ?

HELLOWEENコピーで演者観客両方から飛んでくる大絶賛を浴びた後。

アンコールの嵐を受け、二十分でX Japanの紅を仕上げて演奏するなどした。

共演バンドの皆々様やオーディエンスが優しいメタラーでよかったです。

一部にはいるからな、Xを歌謡メタルだとかそもそもメタルじゃねえとか言つて嫌悪してる人つて。

歌謡メタルだろうがハードコア・パンクだろうが、カツコよけりやそれでいいのにな。変なところで争いたがる輩がいるもんだ。

まあ何にしろ、次からはちゃんとアンコール用の曲も練習しとかないとな。

いつも直前に急ピッチでコピーとかしてられるか。いや、自分らの曲をもっと作れば解決する話ではあるんだが。

「んじゃあ、お疲れ様でした〜」

いつもならライブ終わりにそのままC i R C L Eで打ち上げ、つていう流れなんだが、今日はそうではない。

というのも、参加バンドのほとんど、というか俺らカプリ以外は全員大学生らしく、打ち上げは飲み屋でやるとのこと。

ということ、俺らはここで解散である。

別に飲み屋に行つてもいいんだが、酒飲めないのに酔っ払いに囲まれるの嫌だからなあ。

一応、俺らに気を使って飲み屋以外にしようという話もあるにはあつたんだけど、みんな本当に飲みたそうな顔してたからな。

レポートがあるとか行つて二日酒を断つた姉ちゃんと同じ目をしてたもん。さすがにこっちが遠慮した。

健全（ ）な打ち上げはまた後日ということ、一足先にC i R C L Eを出た次第である。

カプリベルテはクールに去るぜ。

「あーあ。酒、早く飲めるようになりてえなあ」

「それな。でも須田は弱そう」

「んだコラ五十嵐」

全然クールじゃなさそうだな。

とはいえ、なんとなく悲しいことも事実。「飲みに行く」つて言う

の、ちよつとした憧れもあるしな。

酒が似合う大人になりたい。姉ちゃんみたい呑べえじゃなく、優雅に上品に酒を嗜める大人になりたい。

というか、実はもう酒は用意してある。

姉ちゃんに買ってきてもらったものだ。

と言っても、別に今すぐ飲むものじゃない。俺が二十歳になった瞬間に飲むためのものだ。

アルマニヤック……なんとかっていう酒だ。

種類はよく分かんないけど、とりあえず俺の生まれ年のウイスキーを買って欲しいついたら買ってくれた。たまには優しい時もあるんだよな、姉ちゃん。

まあ酒の話は置いていて。

「これからどーする？ 飯、食いに行くか？」

須田と五十嵐に向けて問いかける。

ライブが終わってハイ解散、ハイ帰宅では少し味気ない。

せめて庶民派高級イタリアンにでも行って豪遊したいところだ。

「――関口海さん」

C i R C L Eを出てすぐ、ふと、俺を呼ぶ声が聞こえた。

聞いたことのない声だ。

声のする方へ目を向けてみれば、やはり見知らぬ人が立っていた。

ここらでは見ない制服を着て、ネコミミのヘッドホンを頭に付けた、小さな女の子。

「……俺？」

誰だか知らないが、この女の子は俺の名前を呼んだ。

フルネームっていうのがちよつと怖いが、まあ俺も去年までは千聖さんのことフルネームで呼んでたしな。

プロ野球選手とか、世界的ギタリストとか、メデイアを通して一方的に知っている相手をフルネームで呼ぶ。まああるあるなんじゃないだろうか。プロ野球選手や世界的ギタリストを引き合いに出すのは自分でもどうかとは思うが。

この子は俺を一方的に知っていて、わざわざ声をかけてきている。

と、いうことは。

「ああ、ファンの子?」

「違います」

ん、死んじやおつかなく（恥ずか死）

「まあ、ファンといえればファンなのかもしれないけど」

なんだア...? テメエ...

「こうして会うのは、はじめまして。何度も何度も連絡したのに、よくも無視し続けてくれたわね?」

「は?」

なんのこと..... あっ。

「心当たりはありました? まあいいわ。それじゃあ改めまして、ご挨拶でも」

少しばかり不満を帯びた女の子は、不遜に笑ってみせる。

小さな体で目一杯ふんぞり返り、自信満々にこう言った。

「私はチュチュ。音楽プロデューサーをやっています。Capliberteの皆さん。この私が貴方たちをプロデューズ致します。この大ガールズバンド時代に、私たちが終止符を打ちましょう」

音楽を愛せよ、さすれば救われる。知らんけど

「くあ……」

欠伸とともに、冷たい空気が肺一杯に広がる。

冬。快晴。朝の通学路。

昨日の疲れが取れきれず、眠気がいつにも増して襲ってくる。  
ライブ

「あー……きみ」

痛いくらいの冷たい空気が頬を撫でた。

とはいえ、そこまで嫌悪感はない。むしろ身が引き締まり、気持ちがいいまでである。

冬は寒いので嫌いだが、よく晴れた冬の朝はそこそこ好きだ。

冬はつとめて、とも言うしな。

大都会・東京の汚れきったきったねえ空気でも、冬の朝なら少しは澄んでいる気がする。

それに今日は、すこぶる気分が良い。

疲れがあるし、体は本当に辛い、それよりも。

「昨日のライブ、ほんと気持ち良かったなあ」

昨日の余韻が、一晩経った今でも抜けきらない。

人生で最高と言っても過言ではない時間だった。

自分のやりたい音楽を、同じ価値観を持つ人々の前で、好きなように表現する。

本当に最高だ。

場を用意してくれたまりなさんには感謝だな。

「あ、海くんだ！ おはよ〜！」

一人で勝手に悦に浸っていると、後ろから大きな声をかけられた。朝っぱらからこんなデケー声をかけてくる奴ってのは限られてく



る。お嬢か香澄だ。

ワンチャンひまりってパターンもあるが、登校中はないな。道が違うし。

そんでくん付けってことは、十中八九香澄だ。

フツ、朝から推理が冴えてるな。いや声で分かることではあるんだが。

振り返れば、俺の名推理（笑）通り、ギターを背負った香澄が満面の笑みで駆けてきていた。

「はよ」

香澄の後ろにはポピパの面々、そして須田の姿もあった。

各々と挨拶を交わすも、なにやらおたえの様子がおかしい。

どこか不機嫌そうというか、挨拶も返してこないしこつちを見ようともしない。

「おい、おたえ」

「っーん」

この調子である。

っーん、なんて言うくらいだから本気で機嫌が悪いってわけじゃないんだろうが、何かしらに食わないのだろう。

なんだろ、朝から俺と会ったから、とか言われたらさすがに泣いちやうぞ？

「山吹さん、おたえのやつどうしたの」

「あー… あはは。いやまあ、昨日ちよつとね」

「昨日？ …… え何、俺が悪いの？」

「うーん… まあ、悪いっちゃ悪い？ 感じ？」

「まじ？」

心当たりとか一つもないんだけど。

「おたえ。俺が何したってんだ」

「っーん」

「あれか？ 帰りにお前らに挨拶せずに帰ったことか？」

「違うよ。っーん」

なんだこいつ。

あまりの面倒くささに辟易していると、市ヶ谷さんが呆れたように言ってくる。

「おたえのやつ、昨日のライブでお前がゆりさん誘ったのが不服なんだよ」

「は？」

「違うよ。ゆりさんを誘ったことじゃなくて、私を誘ってくれなかったのが嫌だったの。っーん」

「は？」

「同じ意味だろそれは。っーわけで、関口はそんなに悪くねえよ」  
そんなに、なのか。

全面的に悪くない気がするけど。

ふうむ…何が悪かったのかは一切分からんが…あれか？友達に遊び誘って貰えなくて悲しい、みたいなやつか？それならまあ、分からないでもないか。アフグロ全員で遊んでのに俺だけ誘われなかったらちよつと悲しいような気がしないでもないしな。

まあ何にせよ、とりあえず謝っておこう。こういうのはこつちが折れないといつまでも好転しないからな。十数年もの間、姉ちゃんの相手をし続けて学んだことだ。

「あー…悪かったよおたえ。次やる時はお前誘うから」

「絶対だからね。約束」

「え？ あ、おう」

なんか圧があるな。

まあおたえなら全然俺らにも着いてこれるだろうしな。問題はな  
いだろ。

「え、おたえちゃん入れてライブやんの？」

牛込さんと話してた須田が、こつちの話に首を突っ込んでくる。

「ああ。そうだった」

「そうだったのだった。ぶい」

ぶい、じゃねーわ。楽しそうだなお前。

ひまりもそうだが、女子つてのはどうしてこう機嫌がコロコロ変わるんだらうか。難しすぎるんだが。

「いーじゃんいーじゃん！ 何やる？ つーか次のライブいつやる？ 来週？」

「なわけないだろ。落ち着け」

こいつ、感覚が狂ってきてやがるな。

普通そんな短いスパンでライブなんかやんねえんだよ。せめて一ヶ月は空ける。

だが、今はその一ヶ月後ですらライブの予定がない。

まあどうせ間近になってからまりなさんに出演依頼を受けるんだろうけど。『来週ライブがあるんだけど、出演予定だったバンドが一組出演できなくなっちゃって。Capliberte、出演できない？』とかな。ははっ（建築）

Pr r r r :

ん？ 電話？

俺のスマホだな。

「はい、もしもし」

『あ、もしもし海くん？ おはよう。えつとね？ 来週開催するライブに出演予定だったバンドが一組、インフルエンザで出演できなくなっちゃって。急で申し訳ないんだけど、Capliberte、出られない？』

学べよ、関口海。

言霊は存在するってことをよお…（回収）

? ? ? ? ?

例の如く突然舞い込んだライブ出演依頼。

いつもなら断る（断れた実績は無し）ところだが、今回ばかりは都合がいい。

昼休み。

須田と五十嵐、そしておたえが俺の机に集まってきて、緊急会議が開かれる。

「来週のライブに出ます」

「「おお〜」」

何の感嘆だお前ら？

まあいいや。

「まーたまりなさん経由の急な出演依頼だけど、まあなんとかかなんだろ。な？」

「毎回言うけど、曲による」

そう言いつつも毎回完璧にこなしてくる五十嵐、好きだよ（告白）

「何やる〜？ ベビータ？」

「テメエは俺らを殺す気か」

気軽そうに毎回エグいこといつてくる須田、怖いよ（ガチ引き）

まあベビータはやりたいたので次の機会ってことで。シンセも連れてこなきやだからな。今回は間に合わん。

やるなら白金さんと友希那さん連れて来ようぜ。メギ○ネとかギ○チョコやりたい。

ギミチョコやるなら丸山さんとかにも声かけてみつか。大所帯だな。

「んじや関口は何がいいんだよ」

「俺？ んー…フーフア○ターズとか？」

「あ〜『水』だアアア〜〜〜来たアア——!!! チュルチュル

チュル〜ツッ！」

「お、おたえちゃん!! おい関口！ おたえちゃんが壊れたぞ！」

「この『水たまり』はもう全てわたしなのだアアア!!!」

「関口!？」

「諦める須田。こいつらは理解できる奴らじゃあないんだ」

まったく、おたえは最高だぜ！

「まあそれはともかく、スタンドじゃなくてバンドな。バンドのフーフア○ターズ」

「びっくりするから突然正気に戻るのやめろお前」

五十嵐の冷めた目が痛い。

でも（ふざけるのは）やめられないとまらない。だってロックンローラーだもの。テキトーにラリってる方が人生楽しいよ、いやホン

トに。お嬢みたいなのはちよつとやり過ぎだけど。

「はい。コピーなら私、A〇／DCやりたい。ランドセル背負ってギター弾く」

「おいおいおたえ、ブレザーと半ズボンも忘れんなよ?」

「もうホント怖えよこいつら」

須田に本気で怖がられたでござる。解せぬ。お前の方が怖えよ(才能的な意味で)

まあ、モカ然り日菜さん然り、天才はいるからな。悔しいけど(トウカ〇テイオー)

それに比べ、狂人はそうそう見ない。本当はたくさんいるんだけど、みんな正常なフリをしてるからな。そういう点でオープンクレイジーな俺やおたえは目立つんだらう。

お嬢? アレは次元が違うから。

香澄? あいつは…そうだな、あいつはこつち<sup>狂人</sup>側だな。

つーか須田。「大きい音しゅきなおおお!!」とか言ってるお前も十分“こつち側”だからな? 分かってんのか?

「話が進まん。とりあえずなんだ、フーフア〇ターズとA〇／DCを一曲ずつ、それとサ〇サイを一曲やる。これでいいな?」

デカめのため息をついた五十嵐がテキストにまとめに入る。

ううむ、さすがにふざけ過ぎたかもしれない。そろそろ真面目にやるか。

「そうだな。俺らの持ち時間、転換込みで二十五分らしいし、三曲でちようどいいだろ。俺はThe Pretenderがやりたい。FFの方な」

「ファイナ〇ファンタジー?」

「フーフア〇ターズ」

須田さんよお。こつちが真面目にやろうつて時になんでお前がボケ始めるんだ。空気読めや(棚上げ)

「んー…やりたいのはたくさんあるけど、私はやっぱりBack In Blackかな。伝説、海たちと演<sup>や</sup>ってみたい」

お、なんだなんだ。そこはかとなく嬉しいことを言ってくれてない

か？

よろしい、ではやろう。

「そんじゃあその二曲は確定で。それでサ○サイはどうする？」  
またサイ○イやるのか。

なんで？（困惑）

まあやるけど（楽しい）

つかそろそろ公式から連絡きそうだな。お叱り系のやつが。

「おたえもやるか？ サイ○イのコピー」

「うん、やろうかな」

「歌うか？」

「ううん、海が歌うのが正解だと思う」

不正解なんだよなあ。

なぜ女子がいるのに女子が歌わないのか、これがワカラナイ。  
でもまあいいか。ちよつとやってみたいこともある。

そんなこんなで、とりあえずやる曲は決まった。

ちようど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、英語教諭が教室  
に入ってくる。

ライブはライブ、勉強は勉強。

曲がりなりにも俺らは学生、勉強が本分だ。授業はちゃんと受けな  
きゃな。

オラ香澄。まだ授業始まってもないのに机に突っ伏して寝る準備  
始めんな。

？ ？ ？ ？ ？

放課後。

眠い眠い古文の授業をなんとか切り抜け、少しばかり清々しい気持  
ちで帰り支度を済ませます。

今日は三時間だけバイトをして、そこからは自由。さっさと帰って

ギター弾かなきゃ。スタジオに入るのは明日だ。

「そーいやお前ら、バイトとかしてんの？」

上履きから靴に履き替えながら、隣にいる須田と五十嵐に聞いてみた。

「俺はやってないな。家の手伝いくらい？」

「須田ん家<sup>ち</sup>って何やってんの？」

「飲み屋」

須田の高いコミュカの根源が見えたな…

「五十嵐は？」

「俺はやってるぞ、バイト。トレーニングジムの受付」

「トレーナーじゃないのか」

「そつちもたまに。けどまあ、俺じゃまだ知識が足りねえからなあ」

五十嵐のデカイ筋肉の真髓を見た。

てかいつバイトしてんだこいつ？ いつも俺らとバンドしてる

か澤田さんとデートしてるかだつてのに。

「関口だつていつも俺らといるか女の子侍らせて遊んでるかだろ。お

互い様だ」

「侍らせてはないんだよなあ」

テメエに分かるかよ。目が覚めたら「知らない天井だ…」つてなる

あの時の気持ちだよ。

ずいぶん長いこと一緒にいるのに案外知らなかった友人のバイト

事情を知りながら、正門に向かって歩く。

と、正門の陰から、何やら小さな影が飛び出してきた。

「Hey! やつと来たわね、Capliberte!」

ここらじや見慣れぬ制服を着た、ネコミミ型のヘッドフォンを堂々と頭に引っ付けている女の子。

昨日声を掛けてきた自称・音楽プロデューサー、チュチュちゃんだった。

「チュチュちゃん？ 昨日ぶりく、どしたの急に」

「「ちゃん」って付けないで！」

手を振りにこやかに笑う須田と、それに反抗するように毛を逆立たせて威嚇するチュチュちゃん。うーん、思春期の兄弟感があるなあ。「まあまあそんなに怒らないでチュチュちゃん。ほら、カルパスいる？」

「チュチュちゃんゆうーなー!!」

怒りつつもカルパスは貰うのか。かわいいなこの子。つーか須田はなんでカルパスなんか持ってるの？

「そんで？ ホントに何しにきたの、チュチュちゃん。こんな他校の前にまで」

「貴方までちゃん付け…！ ふん、まあいいわ。話が進まないし、今日だけは大目に見てあげる。今日だけだからね！」

「分かったよ、チュチュちゃん」

次からも絶対ちゃん付けで呼んでやる（芽生える嗜虐心）

「私が来たのはほかでもないわ。Capliberte! 貴方たちに昨日の答えを聞きにきたのよ！」

偉そうにふんぞり返るチュチュちゃん、子供臭くてかわいい。

にしても昨日の返事——ガールズバンド時代を終わらせるために俺らをプロデュースしてやる、だったな。

「それなら昨日断ったはずだけど」

「But! 昨日渡した音源。それを聴いてから考えて、と私は言っただわ」

「あー、これな」

言いながら、俺はカバンからネコ型のUSBメモリを取り出す。

てかこの子、ほんとネコが好きだな。友希那さんと気が合うんじゃないか？

ま、趣味の話は置いといて。

本題はこいつの中身だ。

「聴いたよ。昨日、三人で。いや、本当に凄かった。正直圧倒された」二人に同意を求める視線を向けると、しっかりと頷いていた。

それを見たチュチュちゃんは、非常に満足そうに、ニンマリと笑う。

「そう。なら——」



「だが断るッ!!」

「ピヤッ!? い、いきなり大きな声を出さないで!」

ごめんね (素直)

「というか今あなた、断るって言った…?」

「ん? ああ、うん」

チュチュちゃんの才能は本物だ。音楽プロデューサーを名乗るのも領ける。というか、今まで無名だったのが不思議なレベルだった。

だが、それとこれとは話が別。

Capliberte<sup>俺たち</sup>がやらなきゃならない音楽じゃない。

「Why!? どうして!? 私の音楽は最強よ! 絶対に売れる!」

「そこだよ」

「What!?!」

そのルー大柴みたいな話し方、どうにかならない? いや面白いからいいんだけど。シリアスぶってるときは止めてほしいかなって。

P r r r r r …

電話? 俺だな。

相手は…:店長?

「ごめ、バ先の店長から電話だ。出ていい?」

「はあ!? …まあ仕事なら仕方がないわね。出なさいよ。But!

電話が終わったらきちんと理由を教えなさい! 私が納得するまで、今日は帰らないんだから!」

キミは帰らないのか。

俺は帰るけど。

まあどの道、氷川<sup>風紀委員</sup>さんが出てくる前にどうにかしたいところだ。ずいぶん騒いでるから、周りに注目されてきてるんだよな。

とりあえず今は店長か。

なんの用だろ。牛乳買ってこいとか、お使い系かな?

「んじや失礼して。…:はい、関口です。お疲れ様です。はい、はい…:…:は? あいや、はい、分かりました。急いで向かうっす」

電話を切り、今言われたありのままをチュチュちゃんに伝える。

「最近入った新人が『バイトなんか辞めてやるよ!!!』って叫んでどつか

行っちゃったから早く来てって、店長から連絡が<sup>SOS</sup>」

さすがに行かせてくれた。

? ? ? ? ?

「あっさした〜」

数分前まで客がいた席をダスターで吹き、気の抜けた挨拶で客を送り出す。

今日は丸山さんこそいないものの、ひまりと松原さんが出勤している。それ目当ての客も多く、平日にしてはそれなりに混んでいた。

つーか今日飛んだっていう新人くん、丸山さん目当てでうちのバイトに応募してきたらしい。

最近は丸山さんも本業（アイドル業）が忙しくてシフト減らしてるからな。それを知って、作業量と給料が見合わないと逃げ出したって話だ。

志望動機と仕事放棄はまあ別として、給料云々の話は新人くんが正しい気がしないでもない。マジで給料上げてくれ。本当に見合わん。

「Waiter! ナゲツト追加!」

退勤まであと三十分。余程忙しくならなければもう少しで自由の身だ。

そう思いながら床に落ちていた食べカスを掃除していると、少し離れたところから声が投げかけられた。

今フロアに出ているのは俺だけだし、何よりこれは俺の知っている声。ウェイターとは、まず間違いなく俺のことだろう。

「注文はカウンターでお願いしますね、お客様」

ため息混じりに、そう返答する。

声の主。それは、もう三時間近くも店に居座り続けているチュチュちゃんだ。

「Sorry. 日本の文化に疎いもので」

「嘘つけ」

まだ店内にはお客の姿がチラホラあるものの、満席というわけではなく、カウンターで注文待ちをしている人もいない。

比較的暇だったので、少し話すかとチュチュちゃんの席の傍まで歩く。

「つーかチュチュちゃん、さつきから食べ過ぎでしょ。チーズバーガー二つにポテトのL、ナゲットももう三つめっしょ？ 晩飯食べれなくなるよ?」

「いいのよ。今日はこれをディナーにするから」

ファストフードでもディナーと言えば多少は高級に見える…わけもなく。

「お母さんに怒られるよ」

勝手に外食して帰り、用意されていた夕飯には手を付けない。俺がそんなことをした日には、お母さんに軽く引くほど怒られる。

チュチュちゃんのためを思って忠告していたが、何やらチュチュちゃんの顔がだんだんと暗くなっていった。

「…怒られないわよ。ママはいないもの」

……えっ。

え、マジ? 俺地雷踏んだ? 罨すぎるだろこんなの。普通気付かねえよ。

「今頃、あつちは昼かしら」

つぶつぶ!

あーね、あーね、そっちね。海外暮らし的なサムシングね。いや焦った、マジで焦った。

心臓に悪いから紛らわしいこと言わないでほしい。

「んじやお父さんだ。その歳でお父さんに怒られるって中々しんどいものあるだろ」

「…怒られないわよ。パパもないもの」

……うーん、これはどっちだ?

いや、多分母親と一緒に海外なんだろう。

「あつちは今頃夕方かしら」

「どっちだよ」

わっかんねーよ（プチおこ）

こつち（日本）も今夕方だから。

え、残業でいっつも帰り遅いとかそんな感じなん？

わっかんねーよ（二回目）

「どうでもいいでしょ。それより早くナゲットを持ってきて！」

「だからそれはカウンターで頼め」

「つか海外被れだろうと注文の仕方は変わんないだろ。ウチの本社があるのアメリカだぞ。」

「つたく。」

このままわーきやー騒がれてもたまらないしな。

ちよつとばかし癩だが、代わりに注文してやろう。ナゲットくらい奢ってやんよ。

ため息を一つ残し、カウンターに向かう。

「松原さん。ナゲット一つお願いします」

暇そうにカウンターに立っていた松原さんにナゲットを要求する。

財布はロッカーの中なので手持ちの金はないが、あとで払えばいいだろう。こちとら従業員だ、そのくらい許されるだろ。電話番号や家の住所を抑えられてるんだ、逃げようもないしな。

「あれ？ 海くん、もう上がり？」

不思議そうに聞いてくる。

こんな静かな店内で、さっきのチュチュちゃんの大声が聞こえていなかったんだろうか。

「いや、あの子がナゲットナゲットうるさくて。黙ってもらおう代わりに奢ることにしました」

「え？」

何言ってるんだこいつとばかりに松原さんから見つめられる。

理由はどうかあれ、かわいい人に見つめられると照れちゃうな。オイやめろよ、纯粹無垢な男の子を弄ぶなよ（邪心）

「まあアレっす。別に知らない中でもないですし、一応俺の方が歳上っぽいんで、ナゲットの一つでも奢ってやるかと」

騒がれると他のお客さんにも迷惑なので黙ってもらいたいし、別に

ナゲットを奢るくらい、今の俺の収入ならわけがない。歳上の威厳ってやつを見せてやるぜ。

松原さんからナゲットを受け取り、チュチュちゃんの元へと届ける。

「ほら、ナゲット。奢りだよ」

俺はドヤ顔でそう言った。

「…… ナゲット程度で大きな顔しないでくれる？」

「ぶん殴ったるかテメエこの野郎」

なんちゅーガキだ。親の顔が見てみたいな。

金のありがたみを知らんのか。ナゲット奢りを笑うやつはナゲット奢りに泣くぞ。

「施しを受ける気はないわ。はいこれ、代金」

施して。お前は若宮さんか？

差し出されたのは三枚の硬貨。三百円だった。

「ナゲット代には多いけど」

「Chipよ。ただでさえサービス外の仕事をさせてるんだもの」

ほええ。そこんこはちゃんと洋風だし律儀なんだな。

まあいらないけど。

「いらないよ。奢りって言ったろ」

「そういうわけには——」

「いいんだって。確かにたかが二百円だけど、奢られる側は黙って感謝でもしときな。それが礼儀ってもんだよ」

「…… そうなの？」

「そうなの」

お父さんが言ってたもん。

まああの野郎、俺の金でラーメン食ってる時にそんなこと言ってたから、手首に二回しっぺしてやったけどな。

「…… それじゃあ、ありがたくいただくわ。ありがとう」

「どういたしまして」

素直にお礼を言ってナゲットを口に運ぶチュチュちゃん。

俺も昔、つっても去年とか一昨年とかの話だけど、姉ちゃんの友達

や当時の彼氏さんに肉まんとか奢ってもらってたからな。

奢られた分は誰かに奢り返す。こうやって社会は回ってんだよ。知らんけど。

ちっほけなプライドを磨き上げ満足したやつすい俺は、気持ち良く仕事に戻る。

つつてもやることなんてほとんどないけどな。掃除もほとんどやったし、客もこないし。

? ? ? ? ?

「お疲れ様でした〜」

「お疲れっす〜」

「はい。お疲れ様、ひまりちゃん、花音ちゃん。海くん、キミは最近私に対する言葉遣いが悪いね。減給だ」

「あ、俺もちよつとバイト飛びたい気分だな〜」

「誰だいな減給なんて言ったのは。海くんはこんなにも頑張ってるって聞いてくれているっていうのにな? 安心しなさい。誰がなんと言おうと、

キミの給料はそのままだ」

「上げろや」

バイト終わり。

深夜シフトの大学生の人達と交代で退勤し、店長に挨拶をしてからスタッフ控え室を出る。

最近では店長とも仲が良くなってきて、少しくらいならナメた口を聞くことができる仲になった。

まあ年上相手に普通に失礼なんだが、これを許してくれる店長は寛大な心の持ち主ということだろう。

でも給料は上げろ (プチキレ)

「やつと退勤? 遅かったわね」

さて帰ろうとしたところで、チュチュちゃんにそう声をかけられる。

この子まじでずつといたな。暇なんか?

「あれ？ 海、この子知り合い？ ちっちゃくてかわいく！ 何これ、ネコミミフォン？ かわいく！」

「な、何よあなた…！」

やめろひまり、チュチュちゃん怖がつてんだろ（保護者）

松原さんも「あ、さっきの」とチュチュちゃんに興味を抱く。まあ同僚が勤務中に飯奢つてたからな、記憶にも残るだろ。

「知り合いだから、無理に撫でようとすんのやめろひまり」  
「え〜」

注意されたひまりは、残念そうに手を引いた。

ひまりってそんなに子供好きだったっけか。今度お嬢の幼稚園ライブに参加させてみるか。

頭の端っことでそんなことを考えながら、俺はチュチュちゃんに声をかける。

「そんで、夕方の続きだっけ？ 話、今する？」

「する。そのために待ってたんだもの」

ふむ。そんなにか。

明日とかでもいいと思うんだけど、待っててもらったのに帰るのもなんだか可哀想だな。

仕方ない、と俺は店内を見渡す。

幸い、席は十分に空いていた。

「んじゃ、ちょっとだけな。ひまり、松原さん。俺、ちよつとこの子と話あるんで、先帰ってもらって大丈夫っす」

そう言い、二人を見送る。

ひまりはこつちの話に興味があったらしいが、松原さんに連れて帰ってもらった。

これは俺らCapliberteとチュチュちゃんの話だからな。部外者が聞いていて楽しい話じゃないだろうし、聞かせる気もない。店から出ていく二人に手を振り、俺は空いている席に腰を下ろした。

それに続き、チュチュちゃんも対面にちよこんと座る。

「単刀直入に聞いわ。なぜ私の誘いを断るの？」

座るが早いか、チュチュちゃんは早々に切り出した。

ちよつとコーヒーでも買ってこようかと思つてただけど…  
まあいつか。

「やり方が違うから」

「やり方…?」

訝しげに顔を覗いてくるチュチュちゃんに、俺はまつすぐに答える。

「昨日、俺らも話し合つたんだよ。んで、これはCapliberteの総意つてことになる」

おふぎけは無しだ。真剣にいこう。

「まず、俺たちはガールズバンド時代なんてもんを潰す気は無い」

音楽の流行に反逆するつもりはあるけどな。

「…売れたくない、つてこと?」

「そうじゃない」

なんでそこがイコールになるのか。これが分からない。

まあ価値観の違いなんだろうけどな。

「売れたくないか、つて聞かれたら、そりや俺らだつて売りたいさ。自分の表現が世間に見向きもされないのは誰だつて辛い」

「なら!!」

「でも」

チュチュちゃんの声を遮り、しつかりと目を見て言葉を続ける。

「誰かを踏み台にしたいとか、時代に勝ちたいとか、そういうのじゃないんだ。まして金を稼ぎたいつてわけでもない。そんなもんは俺たちの音楽じゃない」

「そんなの矛盾よ! 売れるつていうのは、生存競争で勝ち残るといふこと。ほかに勝たなきゃ、売れたとは言わない!」

わけが分からないと、チュチュちゃんは叫ぶ。

当然、周りの目を集めるわけだが… もういいや。注意されるまでは続けよう。

「感性で勝ち上がる、才能で有象無象をねじ伏せる、自分という存在を世界に認めさせる! それが音楽、それが表現つてことでしょう!」



違う、とは言えない。

むき出しの感情を乗せた音楽は、認められることで満たされる。そういう側面も確かにあるから。

けどやっぱり、それは、俺たちの音楽じゃない。

「音楽は勝ち負けよ！ 勝つことで生き残る、生き残った音楽にだけ価値がある！」

「それは違う」

正面から否定の言葉を浴びせられたからか、チュチュちゃんはビクツと身を引き、言葉を詰まらせた。

悪いことをしたかもしれない。まだ幼い女の子にとって、高校生の男に否定されるというのは怖いことだろう。

そして何より、彼女は立派な表現者だ。

己の価値観を否定されるのは、自分の生き方を否定されるのと同じ義。何も思わないわけがない。

だがそれでも、俺は彼女の今の言葉を認めたくない。

「確かに、売れるつてのは重要なフアクターだ。大勢の人に知ってもらいたい、聴いてもらいたい。それを満たすためには、売れることが大前提になる」

「なら……っ」

噛み付こうとしてくるチュチュちゃんを目で黙らせ、話を続ける。

「でも絶対に、そう、絶対にだ。『売れないモノが無価値』だなんて、そんなことは絶対にない。ありえない」

それだけは、表現者として絶対に言っちゃいけないことだ。

売れなきや金にはならない。

そういう面では確かに価値が薄いのもかもしれないが、そうじゃないだろう。

俺たちが好きになった『音楽』は、もっと自由だったはずだ。

「音楽は楽しむものだ。自分の欲を満たすって意味じゃ同じだけど、優劣を決めて悦に浸るものじゃない」

まあそんなもの、チュチュちゃんは分かっているはずだけどな。

彼女が持ってきた音源は、本当に素晴らしかった。

自分の感情を落とし込み、煮詰め、最後にはひっくり返す。『自分をさらけ出した、まっすぐで、泥臭くて、それでいて綺麗な音楽。あんな音楽を作れる人間だ。』

音楽が好きで好きで、たまらなく好きで。ひたむきに音楽に向き合ってきたはずだ。

チュチュちゃんは俯いている。

その表情は分からないが、明るい顔でないことだけは確かだ。

「もう一度言うよ、チュチュちゃん。俺たちはキミの道具バンドになる気はない」

ふるふるとチュチュちゃんの体が小刻みに震え出した。

怒っているのか、泣いているのか。

その辺は分からない。どっちの感情もが混在して、より大きな感情となっているのかもしれない。

可哀想ではあるが、俺にだって譲れないものはある。

だからこそ、俺は彼女にこう言うのだ。

「それよりチュチュちゃん。俺たちと音楽バンドをやる気はない？」

## 昨日の敵は今日も敵

私が彼を見つけたのは、半年ほど前。

むしむしと暑い、夏の日だった。

まあ、私は空調の効いた部屋で過ごしていたから、夏の暑さなんて感じてはいなかったけれど。

日本の殺人的な湿度をもともしない科学の力に守られながら、何も考えず、流れていくSNSのTLを眺めている途中。ふと、一つの動画が目にとまった。

それは、とあるライブハウスの投稿した動画だった。

そっちの界隈ではそこそこ有名で、「ガールズバンドの聖地」だなんて言われているらしいライブハウス。その閉業ライブの映像だそう  
だ。

ライブハウスなんて、この世に掃いて捨てるほど存在する。有名だかなんだか知らないが、ライブハウスがたった一つ潰れるからといって、別段気に留めるようなことではない。ないのだが……

「……なんで『ガールズバンドの聖地』で男のバンドが出演してるのよ」

その動画のサムネイルには、少しだけ、私の興味を引くものがあった。

Twitterに貼ってあったURLからYouTubeにとんで、動画を見る。

圧倒的。

彼らの演奏を観て、そんな単語が頭に浮かんだ。

有名なスリーピースのバンドの曲をコピーしているだけ。だが、そのクオリティが段違い。高校生としては頭一つ抜けている。

ベースは、多少粗が目立つが、リズムキープはしっかりと出来ているし、要所は抑えている。ミスの仕方を見るに初心者のようなだが、初心者がこのレベルの曲をコピーできている時点で才能の塊と言っただろう。

ドラムは、とにかくパワーがすごい。かといって走りすぎることはなく、バンド全体を包んで引張っている感じ。ベースのミスをかバーするように調節したり、ギターと張り合うかのようにオカズを増やしたり。パワー型技巧派、などというある種完成された域にいる。

そして、ギターボーカル。

彼のギターテクニクは見事の一言に尽きる。スムーズで正確な指の動き。ミュートをしつかりとしているからだろう、音がビビることもなければ、余計な音も一切聴こえない。ドラムに挑発されるかのように本家よりも難しいアレンジも加えているが、それでも絶対に崩れなかった。

歌も上手い。音程はもちろん、声の質や息継ぎのタイミングが良く、聴き手を惹き込む力がある。

そして何より、彼らは終始自信に満ち満ちている。羨んでしまうほど輝いて、私を魅了した。

「……見つけた」

私が求めていたモノ。

私の夢を叶えるために必要なピース。

私とは違い、表舞台に立つ資質を持った眩しい光。

そうなれば話は早い。思い立ったが吉日、善は急げ、ともいうらしい。

早速SNSで検索をかけ、ギターボーカルの男のアカウントを発見し、勧誘のメッセージを送り、無視され続け、痺れを切らし直接会いに行き、そして――

「なんやかんやあり、私は今、そのギターボーカルの男を引つ叩いている。」

★ ☆ ★ ☆ ★

「関口く。昨日あれからどうだった？」

「チュチュちゃんを俺たちのバンドに誘った翌朝。」

「教室に入ると、挨拶よりも先に須田がそう聞いてきた。」

「改めて断ったよ。んでこっちに誘ってみたけど、断られた」

「そっかく、残念」

「軽口ではなく、須田はわりと本気で残念がっている。」

――先日、HR/HMライブの帰り。

「俺と須田と五十嵐でチュチュちゃんが持ってきた音源を聞いたあと、俺たちは話し合った。」

「まあ話し合いとは言っても、全員の意見が一発で一致したので、そこまで深く話し合ったわけではないんだけど。」

「話し合いで出た意見は二つ。」

「チュチュちゃんの誘いを断ることと、逆にチュチュちゃんをCapliberteに勧誘すること。」

「チュチュちゃんの思想に賛同こそ出来なかったが、彼女の音楽は三

人とも気に入っている。

俺たちCapliberteに曲を書いてもらおうと、そういう話になった。

「まあ、あっちの誘いは断るのにこっちの望みを聞いてくれ、つてのはむしが良すぎだよな」

須田の言う通り、失礼な話ではある。断られることは承知の上だ。それより、と須田が続ける。

「サイ○イでやりたい曲、昨日グループLINEしたじゃん？」

「あー、merry—g—roundだよな？ いいんじゃないね、俺は好きだよ」

相変わらず可愛い歌すぎて男が歌うもんじゃないとは思うけどな。

「ホントにいいのか？ この曲、めちゃくちゃキーボード鳴ってるけど」

須田が心配そうに聞いてくる。

そりやそうだ。おたえが加わるとはいえ、キーボード担当はうちにはいない。

けどまあ、そこは問題ないだろう。

「ああ、大丈夫。キーボ、俺が弾くから」

？ ？ ？ ？ ？

夜。

スタジオでの練習を終え、帰宅し、風呂に入り、丸山さんと若宮さんが出ているバラエティ番組を見ながらギターを弾き、さてそろそろ寝るかと自室のベッドに潜って部屋の電気を消した、その三分後。

半分寝ていた俺の耳に、けたたましい騒音が飛び込んできた。

「ホア!？」

驚いてベッドから転げ落ちそうになりながら、何事かと周りを見渡す。

すると、スマホの画面が明るくなっていることに気がついた。音の発生源もそこだ。

ようやく頭もクリアになってきて、鳴り響く騒音が着信音であることを理解する。

あービビった。そうだ、スタジオで音量MAXにしたまんまだったんだわ。

隣の部屋から壁ドンの音が聞こえてくる。姉ちゃんだ。まあ夜にデカイ音鳴らしたらそりゃキレるわな。まだ十時過ぎだが、十分夜中とも言える時間帯だし。

心の中でゴメンと謝りながら、スマホの音量を下げ、急いで電話に出る。

「もしもし？」

慌ててたもんだから、相手が誰なのか見るのを忘れた。こんな時間に誰だ？

『あ、もしもし海？ ごめんね、寝てた？』

受話口の中から流れる、少しだけ申し訳なさそうな、そしてとても聞き慣れた声。

「ひまり？」

電話越しだとリアルの声とは少しだけ違って聞こえるが、ひまりとは電話もしょっちゅうしている。聞き違えたりはしないだろう。多分。

「なんだよお前、こんな時間に。フツーに寝てたわ」

まあ「寝る寸前だった」が正しいが、どっちも変わんないだろ。

『ごめん。えと、私今、バイト帰りでね？』

なるほど。理由になつてない。

『それでね？ 今日躑躅森さん（つっしもり）（バイト男子大学生）から聞いたんだけど... 海、昨日、あの女の子と修羅場になって、泣かせて、顔叩かれたって...？』

お、なんだ？ 急に寒くなってきたな...。

俺の事心配してる... って感じじゃねえなこれ。何？ なんか怒ってる？ なんで？

『私、あんまり信じたくないんだけど... 海、あんな小さい子に手を出してたの...？』

「は？ なわけねーだろ」

何がどうなっただらそういう結論に辿り着くんだ。

『だって躑躅森つっじもりさんが！ 「あいつ彩ちゃんやひまりちゃん、巴ちゃんだけじゃ飽き足らず、あんな小さい子にまで手え出してんのなく。俺なら一人の女決めて真っ直ぐ一途にいくのにな」って!!』

突然大きくなった声が、俺の鼓膜にわりと大きめなダメージを与える。

びつくりしてスマホから顔離したわ。

てか待て。は？ え、あのクソ野郎(五つ年上) 何言ってるの？

今度会ったら三発くらい殴ってやろうか。

ひまりを狙ってるんだか知らないが、なんでそこで俺の評価が下げられなきやいけないんだ。

つーか俺が色んな異性に手を出してるみたいな言い方はなんなんだ？ こちとら彼女いない歴〃年齢のバキバキ童貞なんだが!?! . . . あ待って、ちよつと泣きそうになってきた。

「待って。待ってね。いやまあ、確かにあの子には泣かれたし顔も引っ叩かれたけど」

『やっぱり！ 海の変態！ ロリコン!』

「俺はロリコンじゃない！ 年上好きだつってんだろ！」

隣の部屋からまた壁ドンされた。

ゴメン姉ちゃん。けど今のはひまりが悪いと思うんだ、俺。人のことロリコン呼ばわりしやがって。

「いいかひまり、よく聞け。泣かれたり叩かれたりは本当のことだけど、ちゃんと理由があるんだ」

『海が女の子の心を弄んだからでしょ!』

「話を聞け」

え、なんかこいつ泣いてない？ なんで？

訳は分からないがとりあえずヤバイ。早く誤解を解かなくては。

「昨日の子な？ なんでも音楽プロデューサーとからしくて、

俺... っていうか、Capliberteを誘いにきたんだ」

『嘘！ あんなちっちゃい子がプロデューサーなワケないじゃん!』



「本当なんだって。なんなら須田とか五十嵐とかにも聞いてみるよ。あいつらも知ってっから」

と言うと、数秒おいてから電話が切れ、二分後にまたかかってきた。

『…ごめん、ほんとだった』

「だろ？」

まあ確かに、信じられないのも分かる。俺も最初は絶対嘘だと思ってたし。

てか須田か五十嵐か、この時間の電話に大人しく出たのか。優しいなあいつら。

「で、だ。昨日はその子… チュチュちゃんっていうんだけどな？」

チュチュちゃんの誘いを、正式に断ったんだよ。そしたら泣かれた」

『…ほんと？』

「本当だよ」

『…じゃあ、叩かれたのも？』

「それは… まあ、また別。作詞作曲はガチでレベル高かったから、逆に俺たちに曲書いてくれって頼んだら引つ叩かれた」

『それは海が悪い。うん、海が悪い』

「それは言い訳のしようもない」

ひまりの声も少し落ち着いてきて、順調に誤解が解けてきたことを確信する。

良かった。これで俺がロリコンだという悪評が広がることもないだろう。

『…ごめんね、海。夜に突然こんなこと』

「いやーよ。全部躑躅森さんが悪い」

そんなこんなで誤解も完全に解け、おやすみと言って電話を切る。

いやはや、近年稀に見る訳の分からなさどめんどくさムーヴだったな。

普段ならこの程度のことであそこまで感情を出してくるやつじゃ… いや結構出してるな。どうでもいいことでむくれたりするし。

けど今日はちよつと異常だった。まさかあそこまでナイーブにな

るなんて。

まあ夜だし、仕方ないのかもしれない。夜つて変に考え込んじゃうし、そのまま妙な方向に迷走しがちだよな。分かる。いやなんで俺の女関係でひまりが病むのかは知らんけど。

にしても躑躅森め、絶対に許さないからな。

バイト歴でいったら俺の方が先輩なんだ。次シフトが被ったらめちやくちやこき使つてやる。

年上の後輩への復讐を深く心に誓い、俺は再び布団にくるまった。

? ? ? ? ?

時は過ぎ、ライブ当日。

いつもより余裕をもって練習をすることができた俺たちは、もう本当に余裕をぶっこいて一バンド目のオーディエンスとして会場を温めていた。

「結構いいな、このバンド。初めて聴いたけど」

一バンド目を聴いて、ボソツと感想をこぼす。

高校生バンドなんだけど、特別上手ってわけじゃない。まあ上手いは上手いんだけど、良くも悪くも高校生レベル。ベースだけ逸脱して上手いけど。

でもなんというか、このバンドの良いところは演奏の上手い下手つてところにはない気がする。なんて言うんだろ。青春を感じる、みたいな? ポピパと似た感じがする。

「なんてバンドだったっけ?」

そう須田が聴いてきた。

俺は出演者一覧を記憶からサルベージし、どうにかこうにかバンド名を思い出す。

「えつと... 確か、ナイロンロックス? だった気がする」

「なんだそれ、変な名前」

「自分のバンド名を『ビッグゴールデンスタース』にしようとしてたやつが何言ってるやがる」(※第24話『既存国家の転覆からの迅速な建国』より)

けどまあ、確かにネーミングセンスは少しズレてるかもな。俺たちの『朝焼けの慟哭』や『サンシャインメモリーズ』といい勝負してる。「そろそろ裏行こうぜ。準備しなきゃだろ」

「おー」

五十嵐に言われ、人を掻き分けながら出演者控え室に向かう。

俺たちの出番は三バンド目。

今、一バンド目のナイロンロックスさんがラストの曲に入っている。出番までもう一バンド挟まるので時間ギリギリってわけでもないが、そう余裕があるわけでもない。まあちょうどいい時間だな。控え室に入ると、先にいたおたえが座禅を組み瞑想しながらギターを弾いていたが、こいつの奇行は今に始まったことではないのである。

自分のギターを取り出し、指板に潤滑剤を振りまく。

ちなみにだが、おたえはちやんとランドセルを持ってきた。なんなら今まさに背負っているし、ブレザーと半ズボンも身に付けている。本当に大した奴だよ。

まあ俺もランドセル、ブレザー、半ズボンの三種の神器を揃えてきたんだけどな。

しかもしつかりすね毛まで剃ったんだぞ。前に北海道で女装させられた時に芸能人御用達のシェービングクリームと剃刀を貰ったしな。綺麗に剃れた。

アンガス・ヤ○グ役はおたえ一人で十分なんだが、俺もコスプレがやりたかったんだい。文句あつか。

「二応セトリの確認すんぞー。一曲目がフーフ○イターズで、二曲目がAC／OC。ラストがサイ○イな」

「ほーん」

五十嵐のこういう、リーダーシップ的なのを発揮してくれるの、本

当に助かるんだよな。楽で。

と、そこで舞台側から演奏を終えたナイロンロックスの人らが戻ってくる。

お疲れ様ですと挨拶をすると、ピンクジャージを着たリードギターの子にめちやくちやオドオドされた。俺、なんか怖がらせることしたつすかね（服装）

次のバンドの演奏が始まる。控え室のモニターから、彼女たちの演奏が流れ始めた。

こつちも良いバンドだ。確かC i R C L Eの常連の人達だったよな。

須田がナイロンロックスのベースの人とのベーストークに華を咲かせ、五十嵐はドラムの人と明るくコミュニケーションを取り、おたえもギタボの人と何か話している。

そんで俺の近くにいたピンクジャージの人は、なぜかゴミ箱の中で丸まってプルプル震えていた。

「あー…ギター、上手いっすね」

「ひうつ… あ、あ…：… アリガトウコザイマス…」

うーん。なんだろ、俺が悪いのかなこれ。

この人、演奏中はなんかそこまで上手い感じじゃなかったんだけど、節々が上手いんだよな。ソロとか凄かった。

多分、今までずっと一人で弾いてきてバンドに慣れてない、みたいなタイプだと思うんだよなあ。

「Capliberteeさん、準備お願いしまーす」

俺もギター談話したいなあと思ひ、何とかしてコミュニケーションを図ろうと試みている中、PAの人が俺たちを呼びに来た。

少しばかり残念だが、今は交流を図ることは諦めた方がよさそうだ。まあライブの打ち上げもあるし、それ以降でもバンド続けてりやいつかまた会うこともあるだろ。

一言だけ挨拶をしてから、ギターを持って控え室を出る。

キーボードはあとでPAさんが持ってきてくれるらしい。

舞台袖に着くと、ちょうど前のバンドが終わったようで、肩で息を

した面々が満足げに降りてくる。

あつちのボーカルが軽く手を上げてきたので、それに応えてハイタッチ。ちよつと恥ずかしいが、それもまた青春ってことで。

SEが流れる。

選曲はニルヴァーナのEndless, Namelessだ。

一曲目にフーフオイターズを演ると決めた時点で、SEはニルヴァーナの曲にすると決めていた。幸い、バンド内で反対の声も出なかったしな。おたえに至ってはめちやくちや目え輝かせてたし。

五十嵐、須田、俺、おたえの順でステージに上がる。

俺とおたえがステージに上った際に会場がザワついたが、想定内なのでスルーだ。

ギターを構え、テキストに手首の柔軟をしながら、俺はステージを見回し、メンバーと目を合わせる。

始めるぞ。

そう目で伝えると、三人とも頷きを返してくれた。

PAの人にも目配せをし、SEを止めてもらう。

六拍ほど空け、俺はギターを弾き出した。

☆

The Pretenderは静かなギターから始まり、しつとりと声が入る。

デ○ヴ曰く、この曲の歌詞には「政治的な意味合いがある」らしい。Pretender。日本語で詐欺師や偽善者などと訳されるが、今回の場合は『悪を成す権力者』、『私欲に塗れた政治家』なんてものが当てはまるだろう。

そんな『悪』達に叛逆する。歌詞からは、そういったテーマが感じられた。

であれば、入りは静かに。されど鬱々とした悲哀は無く、滾る不満と怒りを押し殺したような雰囲気。

まさに悲壮感をダダ漏れにした情緒でもって、この曲は始まるべき

だろう。

そして、決起の時。

『お前の秘密を暴く時がきた』と立ち上がり、サビで一気に叛逆を開始する。

少し掠れた声を出す。必死に『ブリテンダー悪』へ立ち向かう、そんな感情を乗せるために。

闇に身を隠し、だが『ソコ』にいる『悪』。

お前の正体は何だ？と問い掛け、そしてこの歌は終わる。

そしてそのまま、途切れることなく次の曲へ入った。

The Pretenderが『悪に叛逆し、正義を成す』というコンセプトなのに対し、このBack in Blackでは『仲間の死から再起する』という強い意志が感じられる。

歌詞の全体的な訳としては、『首吊りの呪縛から解放され、暗闇に戻ってきた。俺は死なない。悪の要としてこの暗闇に帰ってきたんだ。誰も俺を裁けない。俺は俺の道を行く』といったところか。

このBack in Blackという曲は、初代ボーカルであるボン・スコットが亡くなり、ブライアン・ジョーンズが加入してから最初に出たアルバムのタイトルトラックだ。

仲間の死と懸命に向き合い、再起しようという強い意志がそこにはあると、俺は思う。

ハードロックらしい、力強い曲だ。

だからこそ、祝うように歌う。

彼らは乗り越えた。死の呪いを跳ね除け、未来に進んだ。

悲しいことではあるが、ボンのためにも、この歌はお祝いでなければならぬのだと、遺された彼らは言ったのだという。

最後はAlbum Verではフェードアウトになっているが、全力で力強く引つ張った。

須田と一緒に低く構えてみたり、おたえと二人でソロをハモらせてみたり。

そこに悲しみは無く、楽しく賑やかに曲を終わる。追悼する

☆

『あー… Capliberteです、どうぞよろしく』

二曲目まで終え、MCに入る。

俺の一言目で突然五十嵐がドラムを鳴らし始めた。良いパフォーマンスだ。ナイス五十嵐。でも打ち合わせに無いことは極力しない。次の曲始まったのかと思ってビックリするから。

『今日はサポートのギターがいます。ポピパの花園たえです。ギター、上手いです』

おたえがソロを弾く。

うん、良い。パフォーマンスだ。こういうのなら打ち合わせに無いことでも安心できる。紹介した後だから自然だし、曲始まる雰囲気もないし。

つーかお前それポール・ギ○バートだろ。Down to Mexicoのイントロ。マジでおたえは趣味が良いよな。

お返しとばかりにMr. bog (Gt. ポール・ギ○バート) の Oddy, Brother, Lover, Little Boy の高速トリルソロを弾く。これにはおたえもニツコリ。

『お前ら遊ぶな。本番中だぞ』

須田に怒られた。シュンです (死語)

そんなことをしていると、PAの人がキーボードを持ってきてくれた。

俺はギターを下ろしてスタンドに立て、キーボードを受け取り、そしてストラップを肩にかける。

このキーボードはシオルダーキーボード。

鍵盤部分をギターのように肩からストラップで吊るして演奏できるようにした、いわゆるキーターというものだ。

この日のために姉ちゃんから買い取った一品、R O l a n d の A X  
— E d O e である。

もう使わないっていうから安く買い取れた。

確か元値が十三万くらいって言ってたかな。それを一万で譲ってくれた。姉ちゃんマジ神。「姉ちゃんまじ太っ腹！」って言ったら「あたしはボンキュッボンだ！」って頭叩かれたけど。意味わかんね。『えー、まあそんな話すこともないし俺らの持ち時間ももうそんな無いんで… それじゃあラスト、C a p l i b e r t e お家芸「男サイ○イ」はじめまーす』

まあ今回はおたえがいるから完全版男サイ○イじゃないけど。

五十嵐がシンバルを四回打ち、ギター、ベース、そしてキーボードが入る。

今回、俺は人生で初めての『シンセボーカル』に挑戦する。そのためのキーターだ。一回やってみたかったんだよな。

存外これがそこまで難しくなく、なんならユニ○ンのギタボの方が難しいまである。練習の時からそこまで苦しむこともなく、楽しんで演奏することができた。

けどまあ、やってみて再確認した。

やっぱり俺はギターの方が好きだなあ。

? ? ? ? ?

「最っ高… だった… !」

出番が終わり、袖で待機していた次のバンドの人らとハイタッチしてから控え室に戻った後。

興奮冷めやまぬ、といった具合でおたえが震えた。

「ポピパはもちろん楽しいんだけど、それとはまた違うっていうか… うん、すごくすごかった」

語彙力無くしてんなこいつ。



まあ気持ちは分かるが。

ジャンルが違うからな、俺らとポピパの選曲じゃ。ポピパがHR/HMをやる…。うん、全然想像できねえ。

あいつらは青春全開！キラキラ輝いてこー！みたいな雰囲気だし。音楽を楽しみむって点じゃ同じだが、スタンスとしては対極みたいなもんだろ。

「ねえ！　またやろうよ、ライブ。Mr. b〇gもやりたいし、ジミ〇ンとか、ヤー〇バースもやりたい！　それから…」

「落ち着け」

頬を紅潮させて目を輝かせるおたえを、とりあえず宥める。よっぱど楽しかったんだな。一緒に演奏した身としては大変嬉しい。

そこまで言ってくれるんだから、もちろんまた一緒にやりたい。

「そうだな。またやろう、俺も楽しかった」

俺だけでなく、須田や五十嵐もそう思っているようで、二人ともニツコリしている。野菜生活（そろそろ死語）

普段はここから「あれ、もしかしてアンコールある…？」と戦々恐々曲の練習を始めるところだが、今日に限ってはその心配もない。

というのも、今日は出演バンドの数がそこそ多く、アンコールをやったとしても大トリのグリグリーバンド分くらいしか尺が余っていないらしいのだ。

そんなバンド数がギリギリくらいなんだったら俺らが代行する必要も無かったろ、とも思ったが、結果楽しかったので無問題。

安心して汗を拭き、冷えたスポドリを喉に流し込む。冬だつてのに暑いつたらありやしない。まったく、これだからライブは最高だぜ。

「失礼します。Capliberteのみんな、お疲れ様。おたえちゃんもね」

椅子に腰を深くして座ったところで、控え室にまりなさんが入ってくる。

なんだろ、緊急代行のお礼だろうか。よせやい、俺らとまりなさんの仲じゃないか。

「お客さんの要望でCapliberteにもアンコールお願いします

ことになったから！ 一曲だけでいいから、よろしくね」  
「おい待てや」

報・連・相！ 三つ揃って社会人の基本だぞ！  
テメエ一番大事な『相談』が抜けてんじゃねえか!! 事後連絡して  
くんな！ バーカバーカ！

これにはさすがの須田たちもブチ切——

「あ、了解ッス」

「既存曲ならいけるだろ。おたえはどうする?」

「弾いていいなら弾きたい！ ふっふっふ、実は『革命前夜にランナ  
ウエイ くお国に逆らうもんじゃなく』の第二のギターパート、考  
えてるんだよね。えっへん」

なんだコイツら（迫真）

★ ☆ ★ ☆ ★

私は今、とあるライブハウスに来ている。

重い足を引きずり入ったライブハウスでは、ちょうど私の気を重く  
させる元凶が、ステージの上でライトに照らされていた。

『あー… Capliberteです、どうぞよろしく』

モゴモゴした声で、元凶——関口海は喋る。

先日、私は彼の頬を思いつきり引つ叩いた。

理由はよく分からない。普段、声を荒らげることはあっても人に手  
を上げることなんてしないから、自分でも驚いたくらいだ。

感情がぐちゃぐちゃになり、思考が纏まらず…… 気付いたら、彼  
を平手打ちしていた。

… それにしても、あの格好はなんだろう? ふざけてるの?!

ダメだ、この前の出来事に拍車をかけて腹が立ってくる。

『お前ら遊ぶな。本番中だぞ』

Capliberteのベース、須田誠に注意された彼は、少しシユンとしてギターを下ろした。

そしてシンセサイザーをギターのように構え、Capliberteのお家芸だというSileOt Sirenのコピーを開始する。

彼がギターを持っていないことに多少の違和感があるが、それでもやはり、彼らはひどく輝いて見えた。

「音楽は楽しむもの。」

先日の彼の言葉通り、Capliberteの面々は、いつでも楽しそうに演奏する。

「…はっ。なんてぬるいのかしら」

やっぱり、腹が立つ。

音楽は武器だ。

音楽は戦争だ。

自分たちの音で、努力で、才能で。

己の全てで他を圧倒して、蹴散らして、理解させる。

そうだ。音楽というものは、そういうものはずだ。

私は自分では奏でられない。その才能がない。

でもその変わり、創作には才能があった。

その一点で、私はのし上がる。もう誰にも否定させない。そんな隙は与えない。だからそのために、最強のメンバーが必要だと考えた。探して、探して、探して。

世界に挑むための一手。私の最強を奏でることができる希望を必死に探して、そうしてようやく見つけたその光は、あつけなく遠くへと飛んでいってしまった。

——去り際に、私を否定して。

ステージの上で、彼らはキラキラと輝いている。

対して私は、暗いライブハウスの隅っこで、ただそれを妬むように眺めるだけ。

全く酷い対比だが……この対比が、如実に今の現実を物語っている。

ひどく、惨めだ。

どうしてこうなったのだろう。

彼は私に言った。『お前の信念は、自分たちの音楽と相容れない』と。

売れることを考えることがいけないことなのだろうか？ 勝つことに拘るのは断罪されるべきことなのだろうか？

否、そんなことはないはずだ。

彼は『全ての音楽には価値がある』と言うが、そんなものは詭弁だ。綺麗事だ。

だって、演奏が上手でない私は、あんなにも否定され、追い込まれたのだから。

音楽は所詮、実力主義の世界。

それぞれの『音の価値』には、必ず優劣が存在する。

オリコンチャート然り、再生数ランキング然り。この世界は、常に勝敗がついて回るようにできている。

だから、彼の言うことは、現実から目を背けた詭弁で、エゴに染まった綺麗事だ。

「……見てなさい、Capliberte。関口海。私は、あなたたちをぶっ倒して、私の正しさを認めさせてみせるわ」

私の新しい目標。絶対に達成してみせる野望。

待っていないさい。

私は、私の全てを以て、必ずあなたたちを否定してみせる。

だから今は、精々音楽を楽しんでいるといいわ。

その輝かしくも憎たらしい、甘ったれた偽りの音楽を。

ギャルは基本的に怖いけど気に入った相手には優しく振る舞うという都市伝説

「リサのクッキーはいつも美味しいわね。いくら食べても飽きがこないわ」

とある土曜日の昼下がり。Roseliaのバンド練終了後。

暖かい太陽の光が差すCiRCLEのカフェテリアで、Roseliaの面々と俺は、リサさんの手作りクッキーをいただいていた。

「そうですね。何か隠し味などあるのでしょうか?」

「隠し味? んーっとね…みんなへの愛情、かな☆ なんちゃつt」

「リサ姉からの愛情頂きましたア!!!!」

「ちよつ、海くん!」

美少女ギャルからの愛情、美味すぎる。もつと食べたい(食べる麻薬)

五つくらい一気に頬張ったらすすがに口内の水分が全て持つていかれ、軽く喉に詰まらせた。

「ほらもー、変なこと言ってるから。はい、アタシのレモンティー飲みな?」

差し出されたペットボトルのレモンティーを何も考えずに受け取り、蓋を開けて口に流し込む。

「あゝ…ありがとうござー」

…ちよつと待て。

今のペットボトル、開封済じゃなかったか?

それに、中身の量も満タンじゃなくなかったか?

Q. 蓋が開いていて中身が減っているペットボトル。その意味は？

A. すでに誰かが飲んだ後。

Q. 飲んだ人は？

A. ペットボトルを渡してきた人の可能性大。

Q. つまり？

A. リサさんと間接キッスの可能性アリ。

Q! E! D!

は？(は?)

「…え、何？ 海くん、顔赤くない？」

「…いえ、なんでも」

とりあえずもう一回レモンティー飲んどいた。

ダメだこれ。顔から熱が引かない。火い出るでこれ。

いかん、これはいかん。

こういう時は野郎の事でも思い出すんだ。そうすりゃ萎えるだろ。

そうだ、昨日の放課後にちょうど、珍しくクラスの男連中だけで遊びに行ったじゃないか。くだらない話をしたはずだ。思い出せ。

ほわんほわんせきぐち〜 (回想開始)

クラスメイトA「そーいや昨日、いい動画見つけてさ」

関口「なんだ藪から棒に」

クラスメイトA「枢木あ○いって人の動画」

五十嵐「誰？ YouTuber？」

須田「あー知ってるその人。女優だろ。見たことある」

クラスメイトA「そうそう。結構可愛くてさ」

関口「へー。なんかのドラマとか出てんの？」

クラスメイトB「ぼつか関口、俺らが『女優』つつたらA〇女優に  
決まってるだろ」

関口「いや知らねえよ」

須田「俺声好き」

五十嵐「うっし、りみに報告しとくか」

須田「そういうのマジでやめて。マジで」

クラスメイトC「たまたま俺も昨日見たわ。良かった。関口と五十嵐にも後でリンク送っついてやるよ」

関口「ほいほーい」

五十嵐「いや俺はいい。美穂に見つかったら殺されそう」

クラスメイトC「分かった。彼女持ちってのも大変なんだな」

クラスメイトA「っーか同じ動画見たとかいう報告やめろ。なんかヤだわ」

ほわんほわんせきぐち〜（回想終了）

クソが！ 俺のクソが!!

確かにくだらないボーイズトークだけど！ ナニ思い出してんだ！  
！ しっかり昨日の夜見たわ!!（健全な男子高校生）

「海くん、ほんとに大丈夫？ 風邪？」

「いや、大丈夫です。ほんと、はい、元気つす」

お母さん、いや姉ちゃんだ！ 昨日の姉ちゃんとのやりとりを思い出せ！

ほわんほわんせきぐち〜（回想開始）



姉「弟く。カポぶつ壊れたからお前の寄越せく」

弟「うつわ何だよ急に入ってくんな」

姉「は？ 今更何言つて… あ？ … あく、何？ そういうこと？ まあ海も年頃だもんねえく？」

弟「なんだよニヤニヤすんなよ！ 出てけよ！」

姉「姉にその口のきき方はなんだ」

弟「え、あ、ごめん姉ちゃん！ ごめ、やめつ、コブラツイストはやめて痛い痛い痛いっ!!」

ほわんほわんせきぐちく（回想終了）

ふう…（萎え）

さすが姉ちゃん、昂ったりビドローが一瞬にして那由多の彼方に消えていった。ありがとう。

にしても痛かったなく、あのコブラツイスト。最近技に磨きがかかってきてるんだよな。やめてほしい。

なんとか落ち着きを取り戻し、氷川さん辺りにいろいろバレて軽蔑される、なんてことも無く。

いつも通り、穏やかな練習後のティータイムを楽しむ。

リサさんのクツキー美味しいな。これが愛の力か。

「あ、それ紗夜が作ったやつだよ。ね、紗夜☆」

「あ、そうなんですか？」

「え、ええ、まあ… 今井さんほど上手くは作れなかったですけど」

「そんなことないよ。ね、海くん？」

「はい。すごく美味しいです。なるほど、これが氷川さんの愛…」  
氷川さんに頭を叩かれた。

痛くない。やはりこれが愛なのかもしれない。

「紗夜のクツキーも美味しいわ」

「はい！ 私、リサ姉のも紗夜さんのもどっちも好きです！ 美味し

くて!」

「私も…好き、です…優しい味…というか…」

「皆さん…ありがとうございます」

照れてる氷川さんかわいい。

でもなんで俺だけ叩かれたんだろう? 俺もみんなみたいに褒めたのに。やっぱり愛じゃないんだろうか? ぴえん。

「そういえば、話は変わるのだけれど」

溶けきらないくらい大量の砂糖をぶち込んだコーヒーを美味しそうに飲んでいた友希那さんが、そうやって話を切り出す。

「昨日、枢木あ〇い、という人の動画を見たのだけれど」

「?!?!?!」

友希那さん

!?!?!?!?!

? ? ? ? ?

「まったく、何をやっているのですかあなたたちは」

「ゲホ、ゲホッ…す、すいません…」

まさかの発言に思わず吹き出してしまい、口に含んでいたミルクティーがキラキラと宙に舞った。

幸いテーブルにもクツキーにも、そして人にもかかることはなかったが。

「大丈夫? りんりん?」

「え、えっ、あ…う、うん…だ、大丈夫…」

なんか白金さんも噎せてるな。なんで?

え、知ってるの? 枢木あ〇いを? 白金さんが?

え? 何それ、むつつりんりん…ってコト?!

「まったく…お茶です。飲みますか?」

「あ、はい。それじゃあ…」

氷川さんから手渡されたペットボトルのお茶を口に流し込み…え待ってこのペットボトル開封済だし中身ちよつと減ってなかった? それってつまり間せt (ry

ダメだ。これは、ダメだ。何が？ 全てが。  
深く、それはもう深く深呼吸をする。

…… うん、よし。ちよつと落ち着いてきた。

「それで、その枢木あ○いさんの話なのだけれど。海や燐子も知ってるの?」

「へっ? あー…… えと、はい、昨日知りました……」

「わ、私は、その…… 名前を…… 聞いたことが…… ある、くらい…… です…… ほ、本当…… です……」

ええ〜? ほんとでござるか〜?

「そう。彼女、声が良いのよ。燐子も聴いてみるといいわ」

「えっ!? …… あ、は、はい…… ひやう……」

「り、りんりん!」

白金さん、顔真っ赤にしてテーブルに顔突っ伏しちゃった。無理もない、白金さんは年頃の女の子なんだから。

そんでその白金さんと同じ年である年頃の友希那さんはどうしてそんなに真顔でA○女優の話をしてるんですか?

え、俺たちがガキ過ぎるってこと?

「あー…… そういや須田も言っちゃいましたわ。声好きだつて」

つーかなんで俺はこんな話をRoseliaの前でしてるんだ?

なんだよ声が良いって。別に俺そこ重視してねえわ。いや良いに越したことはないけどもよ。

「海はそう思わなかったの?」

「え、俺っすか…… えー…… いや、正味あんまり声は覚えてないって  
いうか……」

「そうなの? じゃあ次からは注意して聴いてみて。YouTube  
にも動画があるから」

YouTubeにある!?! A○女優の動画が!?!

おいおいコンプラはどうなってんだ、コンプラは! 仕事しろよYouTube  
利用規約!

「とても感情が乗っていて、歌詞にも合っていると思うわ」

「はあ…」

声に感情が乗ってるってそりやまあ役者さんだし… え？ 歌詞？

「確か曲名は… 白夜〇月、あと s e a r 〇 h l i g h t と言ったかしら。私の使っているサブスクリプションには入っていなかった曲なのだけれど、とても好きだったわ」

曲名？ え？

「サブスクリプションに入っていた曲だと、テサ〇リロンドかしら？

白夜〇月などと違ってバンドチックで… ギターソロもしっかりしていたわ。海は好きでしょう？ ギターソロ」

「へ？ はいまあ、好きですけど」

曲聴く時の最重要点と言っても過言じゃないくらいですけど。

いやそうじゃなくて。

「あのー… ちなみになんですけど」

「何かしら」

「友希那さんの見た動画って、一体どんな…」

「これよ」

スツとスマホを取り出し、手早く操作して Y o u T 〇 b e を開く友希那さん。

再生リスト「音楽」を選択し、その中から『圧倒的歌唱力を誇る枢木あ〇いが全身全霊で熱唱ライブ！』という動画を開いて、俺たちに見せてくる。

「へー。ほんと、確かに声綺麗だね」

「ええ。湊さんが褒めるだけはある」

リサさんと氷川さんも、その動画を見て素直な感想を口にした。

ふーん。なるほどね？ ほーん。

っすうー……………

「俺と白金さんは、心の汚れたイケナイ子です」

「「「?」」」

「!?」

おいおい白金さん。そんな驚いた顔してんなよ。

俺たち、仲間……だろ?

? ? ? ? ?

リサさんが『枢木あ○い』をググるといいう大問題にまで発展したむつつりりん事件の後。

若干気まづくなくなった俺たちは解散した。

女子高生だけに留まらず思春期真っ盛りな女子中学生の前でとんでもないアンジャ○シユムーヴをカマしてしまい、恥ずかしさやら何やらで俺の心は疲弊していた。

んー、死んじやおつかなく。などという種前向きな気持ちにもなったが、白金さんの気持ちを思えば踏みとどまれる。

今回の一番の被害者はぶつちぎりで白金さんだからな。次点で友希那さんか。本当、ご愁傷さまです。

というわけで帰宅後。

「声。声ねえ……」

今まで気にしてこなかったが、そういう視点もあるのかと気付かされた。

今はちようど、家に誰もいない。玄関の鍵はちやんと閉めてあるの  
で、姉ちゃんの乱入があつた場合にも対応できる。

ウチは女社会の家だ。普段はお母さんと姉ちゃんが跋扈しており、  
男として当然の衝動もそう易々と発散できるわけじゃない。

このチャンスを逃すものか。

いぎ、新視点のその先へ——!

?ピロン／(LINE通知音)

「ヒュワツ!」

変な声出た。

通知オフにしとくの忘れてた。

ちくしょう、誰だ? 須田とかだったら許さねえからな。

L i s a 『海くん』

L i s a 『ちよつと話あるんだけど』

俺、わいせつ罪みたいなので殺されるんか? (飛躍)

? ? ? ? ?

「作詞コンテスト?」

リサさんに呼び出され、死の覚悟を決めてから集合場所のファミレスに来た俺は、リサさんから唐突にそんな単語を聞かされていた。

「うん。アタシ、作詞に挑戦しようと思って。ほら、R o s e l i a の作詞っていつも友希那がやってるでしょ?」

「そうですね」

いつも友希那さんがネコのぬいぐるみと添い寝して考えてるって聞いたことある。

「R o s e l i a のためにアタシができることないかなうって考えてて。そうだ、作詞しよ☆ ってなったの」

「どういう思考回路だ?」

「友希那の負担、少しは減らせないかなうって思ってた  
「なるほど」

「そういう思考回路ね。」

「で、作詞コンテストっていうのが近々あるらしくて! それに応募

しようかな〜って」

「どういう思考回路だ？」

「まあ経緯は分かりましたけど…なんでそのコンテストに応募する必要があるんですか？」

「ん〜…まあ、目標？　かな。どうせやるならコンテストに入賞するくらいの作りたいし☆」  
「なるほど」

まあ、目標ってのは立てておいて損はないからな。つぐも言つてた、「何事もチャレンジだよ」って。あいつ意外とアクティブなところあるからな。

「それで、なんで俺は呼び出されたんです？」

「問題はそこだ。」

別にリサさんがどこそのコンテストに応募しようが、俺にはあまり関係のないことのはず。

よもや俺に作詞の手伝いをしろ、だなんてそんなバカなこと——  
「いやあ、それがさ〜？　昨日からずっと歌詞考えてるんだけど、中々書けなくて…。書きたいことはたくさんあるんだけどね〜」  
「なるほど」

「そこで！　海くんには作詞のアドバイス貰おうかと思って連絡したんだ〜」

「正気ですか？」

「え、何が？」

よもやよもやだ。

やれやれ。リサさんとはもうかれこれ半年以上の付き合いだが、ここまで俺という人間が理解されていないとは。

「いいですか？　リサさん」  
「うん」

ここは一つ、理解わからせておこう。

俺という人間が、どんな人間なのかということ。

「俺は自分らのオリジナル曲に『既存国家の転覆からの迅速な建国』なんて曲名をつける人間ですよ？」

「ネーミングセンスは無いよね☆」

「グハッ！」

関口は 十の ダメージを 受けた！

いや自分で言っついていなんだが、切れ味鋭い言葉を投げってくるこの人。やっぱギャル怖い。

「でもさー。この前の新曲、歌詞付きだったじゃん？ なんだっけ？

ほら、革命うんちやら」

「革命前夜にランナウェイ くお国に逆らうもんじやないく』ですかね」

「そう、それ！ その変な名前の曲！」

「ガハッ！」

関口は 十の ダメージを 受けた！

ここ最近、リサさんの俺に対する遠慮つてものが無くなってきている気がする。仲良くなっている証拠なんだろうか？ そうだといいなあ。

「あれつて海くんが考えたんでしょ？」

「え、ええまあ… 五十嵐や須田に手直しはしてもらいましたけど」

「じゃあ作詞できるつてことじゃん☆ あれカツコよかったよ。英語で何言ってるか分からなかったけど」

この人、本気で褒める気あるのか？ ないだろ（断言）

「ま、まあ、アドバイスするくらいなら… でも、それって俺じゃなくて、友希那さんとかに聞いた方が早いんじゃない？ 作詞つてことなら俺より慣れてるでしようし」

「それはちよつと… 友希那に手伝ってもらっちゃったら、友希那が作ってるのと変わんなくない？ それに、完成するまで黙ってた方が、みんなビックリするでしょ☆」

そう言つて悪戯つぽく笑うリサさんは、非常に美少女だと思いました、まる

「それに、海くんに声掛けたのは、もう一つ理由があるんだよね」

「なんですか？」

「海くんも一緒に、この『作詞コンテスト』に出てみようよ！」



「ヤです」

何が悲しくてそんな自分の恥部を晒しに行かなきゃいけないんだ。

こちらら作詞の才能ないって言ってるんだろいい加減にしろ！

「まーまー、そう言わずにさ？ 前に海くん、作詞上手くなりたいうって言ってたじゃん」

「… まあ、できるに越したことはないんで、それなりに書けるようにはなりたいたいと思いますけど」

「じゃあやつぱり、このコンテストに参加するのは良い経験になると思うんだけどなく？」

「はあ… 本音は？」

「一人だどちよつと恥ずかしかったり心細かったりするから道連れが欲しい！」

このギャル今道連れつつったか？

「それにアドバイス貰いたいのもホントだよ？ 海くん、音楽理論とか詳しいでしょ？」

「そりや一般人より詳しいですけど、歌詞書くのに理論とか無いっすよ」

「でも、ある程度のコードは必要じゃん？ 曲の完成系を見据えるためにも。アタシ、そういうの全然分かんなくてさ〜」

なんだかんだと言葉を並べるが、要するに、さっき言った通り道連れが欲しいんだろう。

まあ道連れっていうより、モチベ向上とかのために一緒に頑張ってくれる人が欲しい、ってところか。

気持ちは分からないでもないが、やつぱり面倒くさい。申し訳ないが、ここはきつぱり断らせて――

「あ、そうだ！ 一緒に作詞する時は、お味噌汁作ってあげる☆ この前作って欲しいって言ってたよね？（第33話『聖なる夜の時間だオラア!!（深い意味はありません）』より）」

「やりましょう」

やつぱりバンドマンたるもの、作詞くらいはできるようにならんくちやネ！（いつもの）

? ? ? ?

翌日。

「おじやましませ〜す☆」

美少女ギャルがうちに来た。

クラスメイトに言えば処刑必至な状況だ。絶対にあいつらには教えない。

一旦俺の部屋に通し、飲み物を用意する。

「粗茶です」

「コーヒーじゃん」

いかん、動揺してるな俺。

もう一度キッチンまで戻り、戸棚にあつた高そうな洋菓子を引つ張り出す。

多分お母さんのだけど、まあ大丈夫だろ。怒られたらお嬢のツテでもつと良いお菓子を返せば済む話だ。

「カステラです」

「バームクーヘンじゃん」

似たようなもんだろ（暴論）

用意された座布団にちよこんと座るリサさんは、ソワソワしながら俺の部屋を見渡している。

大丈夫、隅々まで掃除したし、変なものも置いていないはずだ。普段からポピパやらハロハピやらひまりやらがアポ無しで突入してくるからな。元から変なものは目に見える場所に置いていない。ちやんと昆虫図鑑とかマクベスとかのフェイクカバーをしっかりと被せて本棚の奥に隠してある。

念の為に今朝めちやくちやコロコロしたし、抜け毛とかゴミも落ちていないはず。そういやあのコロコロ、正式名称は粘着カーペットクリナーって言うらしいな。この前市ヶ谷さんに教えてもらった。

「いや〜…ノリで来ちやつたけど、アタシ男の子の部屋入るのって初めてで…なんかこう、緊張しちゃうね…?」



す」

「へー。なんだかバンドマンっぽい☆」

「ふへへ」

「あ、その笑い方は辞めた方がいいよ。マジで」

「大和さんに謝ってください」

「麻弥はいいんだよ、アイドルで可愛いから」

「ぐぬぬ……」

一切の反論の余地がないド正論で殴られた。悔しい。

「それにしても、ネタ帳か。アタシもそういうの作ろっかな」

「そっすね。突然アイデアが降りてくることもあるんで、持っていると忘れないうちにすぐメモできて便利です。まあスマホのメモ帳アプリでもいいんですけど」

「あ、確かに。海くんはなんでノート使ってるの？」

「いや、普段はスマホなんですけど……この前、操作ミスってデータ全部消しちゃって。今後そういうことがあっても大丈夫なよう、バックアップ用につてノートにも書いてるんですよ」

あの時は泣くかと思った。

「なるほどー。データが消える……そういうこともあるんだね。ちなみに、そのネタ帳には何が書いてあるの？」

「見ます？」

「見たい見たい☆」

ちよつと恥ずかしいが、いずれは曲にして世に出すかもしれないネタたちだ。ここでリサさんに見せても問題はない。

「えーつと、なにになに……『Parallel』東京都心はパラレルだし、パラレルワールドで離さないでいてほしい。佐賀に住んでる従姉妹が東京に出てきた時「これが東京……しゅごい……！」って言った。新宿と渋谷の駅は魔境……何これ？」

「ネタっす」

「こんなのでもいいの？」

「いいんじゃないですか？」

その時感じたことを率直に書いて、あとで吟味して味付けする。

歌詞にするってなるともつといろいろ考えなきやいけないんだろ  
うが、俺が作曲する時にはこの程度で十分だ。

まあ、今考えなければならぬのは作曲ではなく作詞。もつと具体  
的な、言語化できるレベルのイメージが必要だろう。

「そうですね… 例えばラブソングとか、その人の経験を元に書いて  
たりしそうじゃないですか？ マイ〇アとか」

「あー、確かに。実体験をそのまま歌詞に、っていうのはよく聞くか  
も」

「ちなみにリサさん、恋愛経験は？」

「あるように見える？」

「ゴリゴリに」

「マジ？ ないよ〜悲しいけど。うち女子校だしね」

ええ〜？ ほんとでござるか〜？

「リサさんならたいていの男引っ掛けられそうですけどね」

「それ褒めてる？」

「バリバリに」

リサさんくらい美少女なら彼氏の二人や三人、いても全然おかしく  
ないだろ。

「あはは、じゃあ、ありがと？ そういう海くんは？ 恋愛経験、ある  
？」

「あるように見えます？」

「うん。ゴリゴリに」

マジ？

リサさんの目は節穴なんだろうか。

「俺もないです。人を好きになるって、イマイチよく分からなくて」

「あー、ちよつと分かるかも」

正直、愛情と性欲の違いがよく分かっていない。所詮は子孫繁栄の  
ための本能だろ、とか思っちゃう。

こんな「斜に構えてる俺カッケー」みたいな厨二思考だからモテな  
いんだらうな。

「まあ、じゃあラブソング系は却下ってことで」



ウリユステウスに命じられた十二の難題解決はあまりに有名。国立西洋美術館入口にある銅像。

あー、アレか。弓引いてるマップの男の像。そうだそうだ、あれ、作品名のところにヘラクレスとか書いてあったな。そういや十二の難題も、いくつか絵画が飾られてたっけか。

そうだな…ヘラクレスの十二の難題解決を題材にしようか。

まず一つ目がネメアのライオン。どんな武器も炎も通さない強靱な皮を持つ猛獣相手に、素手で戦いを挑む。うーん、ロックだ。

暴れる猛獣相手に素手で戦いを挑む。男臭さが全開だから、ドイツのパワーメタルを参考に…

「つて、え？ ちよつと海くん、なんでギター弾きだしてんの？」

「え？ なんてつてそりやあ曲を作るために…」

「アタシたちが考えてるのつて歌詞だったよね？」

「……あ」

完全に作曲に走ってたわ。

? ? ? ? ?

俺とりサさんが作詞を始めてから、だいたい二十分が経った。

時折隣から聞こえてくるりサさんの吐息や、漂ってくる甘い香りなんかと懸命に戦った二十分だった。作詞どころじゃねえよこれ。何も書けなかったわ。

「ダメだーっ！ ぜんっぜん書けない！」

投げ出すように叫んだりりサさんは、大きく伸びをした。

そのまま後ろにあった俺のベッドに背中から倒れ込む。

「ん？ あー、ごめん。海くんのベッドに突っ込んでんじやって…あれ？ なんかいい匂いする…」

やめろ匂うな。掛布団に顔を近付けるな。あんたの匂いが移るだ

ろ。今夜の俺の身にもなれ。

「あー…柔軟剤じゃないっすか？ 昨日洗濯してたんで」

「へー。なんかアタシの好きな匂いだなく。柔軟剤は何使ってるの？」

「さあ？ 俺、洗濯とかしたことないんで」

「そうなんだ？ 家事とか今のうちからしといた方がいいよ？ 今時、男の人も家事をする時代だし」

「一人暮らしし始めたなら考えます」

「絶対やらないやつだよそれ。親とかいない時、ご飯とかどうしてるの？」

「外食ですかね。あとは姉ちゃんが変な気配りしてきて、ひまりが飯作りにきたりもします」

あれはわりと意味が分からないんだよな。

ひまりも嫌な顔こそしないけど、突然人の家に飯作りに行けとか言われたら普通に嫌だし迷惑だろ。

いや、飯作ってくれるのは助かるから毎回ありがたく頂いてるんだけど。

「えー、通い妻じゃん。あ、もしかしてアタシ、ここにいたら浮気になる？」

「ならないでしょ。別にひまりと付き合ってるわけでもなしに」

ひまりはそういうのじゃないからな。

P r r r r …

と、スマホが鳴る。

画面を見ると、そこにはお母さんの名前が。

「ちよつとすみません、おかあ…母からです」

「あはは！ そんなかしこまらなくても。お母さんね、どうぞ☆  
了承を貰ってから電話に出る。」

「もしもしっ？」



『あ、海？ 今大丈夫？』

「うん、大丈夫」

『そ。今日、仕事で帰れなくなったから。ご飯はお姉ちゃんに作ってもらいなさい』

「姉ちゃんも今日飲み会あるって言ってたけど」

『そうなの？ カップ麺も確か切らしてたし…。じゃあテキトーに外で食べてきなさい。レシート貰ってくれば、明日その分のお金あげるから』

「はいはい」

そう返事をし、電話を切る。

「今日、親帰ってこないそうです」

「わ、やらしー」

「何が!？」

「あはは！ ジョーダンジョーダン！」

この年上ギャルめ！ そんなに年下の男を弄んで楽しいか!? もっと別ベクトルでの弄びを要求する！

「じゃあ今からひまりがくるの？ なら変な勘違いされちゃう前に帰ろうと思うんだけど」

「いや、今日はこないんじゃないですか？ 外食してこいって言われたし」

「そうなの？」

ふーん、と意味深な眩きを見せるギャル。

なんだ？ 何か企んでんのか？ 痛いのはやめてね。

「じゃあさ、アタシ、作ってあげよっか」

「？ 何をですか？」

「今日の海くんの晩ご飯」

☆確変、突入——

人に優しいギャルは人間国宝に認定する、って古事記にも書いてある

いっけなーい！ 混乱混乱！

俺、関口。16歳！ どこにでもいる至って普通の男子高校生！  
でもある時、知り合いの美少女ギャルと自宅で作詞にチャレンジしていたら、親が帰ってこなくてギャルと家に二人きりになっちゃって  
もう大変！ しかも美少女ギャルから今夜のご飯を作ってあげるって  
言われちゃって!?

一体俺、これからどうなっちゃうの〜?!?!?

「さーてとつ。海くん、苦手なものとかある？」

「あ、セロリ……」

「セロリねー。りよーかい☆ まあセロリはあんまり使わないし、大丈夫か☆」

いや、ほんとにどうなっちゃうの？

うちのリビングのうちのソファで何作ろつかなくと思案顔の美少女ギャル、リサさん。

この状況、正直嬉しさよりも懐疑心が勝つ。

なんだ？ いつの間にリサさんルートに突入した？ あとで法外な金でも迫られるのか？ いやリサさんに限ってそんな……でも相手はギャルだし……

と、リビングの隅っこで震えている。

「よしー」

「ヒヤイツー」

変な声出た。

「買い物行こっか、海くん！」

「宝石とかはちよつと…そんな大金持ってないので…」

「何言ってるの？ 宝石？ アタシ、そんなの買わないよ？」

良かった。宝石とかじゃないらしい。

じゃあ何を買わされるんだ。高級車とかか？

「近くにスーパーあったよね？ あ、エコバッグある？ レジ袋代、節約しないと☆」

スーパー？

「ほら海くん、何突っ立ってるの？ 夕飯の買い出し、行くよ〜」

？ ？ ？ ？ ？

あれよあれよという間に、近所のスーパーまでやって来た。

そして今、俺はリサさんと一緒に精肉コーナーを周っている。

「お、豚肉安いじゃん。ラッキー☆」

精肉コーナーとか久しぶりに来た。小学校以来か？

自分じゃアイスやお菓子が置いてるところくらいしか行かないし、お使いを頼まれた時も肉は北沢精肉店に買いに行ってるからなあ。

高い買い物させられることはないと分かって安心こそしたが、未だに「リサさんが俺の晩飯を作ってくれる」という状況が飲み込めない。

「あの、リサさん」

「んー？」

「飯、何作るんですか？」

「えー？ ふふん、ひ・み・つ♡」

ドチュン！（ハートを撃ち抜かれる音）

ふんふんと鼻歌を歌いながら買い物カゴに商品を入れていくリサさん。何これ、新婚？ 自分、幸福死してもよろしいか。

カゴの中には、豚肉とじゃがいも、にんじん、玉ねぎが入っている。「豆腐も安い！ いいスーパーだね☆」

言いながら、豆腐を一パック手に取り、カゴに入れる。

へー、この豆腐安いんだ。普段買い物とかしないから全然分かんねえや。

ということは、リサさんは普段からよく買い物をしている…？

何それ、家庭的ギャル？ 好きになっちゃおう♡

「あ、いちご割引になってるやつある。海くんっていちご好き？」

「あはい、好きです」

「そ？ じゃあ買っちゃおう♪」

嬉しそうに、二割引きのシールが貼られたいちごのパックをカゴに入れる。

なんだこれ。もしかしてこれが「幸せ」…？ やっぱり自分、幸福死してもよろしいな？ ヨシ！（錯乱）

「なんだかこういうの、同棲したてのカップルみたいだよね☆」

やあ！ みんな、俺だ！

人は過度な幸福で死ぬ！ 俺は灰になって消える！ それじゃ！

「…え？ え、ちよ、海くん!? え？ ひ、膝から崩れ落ちてどうしたの!?!」

燃え尽きたんですよ… 真っ白な灰にね…

「ねえ〜！ 恥ずかしいから立ってよく！ ほら、周りから見られてるからあー！」

? ? ? ? ?

「いやあ。一時はどうなることかと思ったけど、なんとか帰ってきたね」

「すいませんでした」

訳の分からない核兵器みたいな言葉の暴力を受けた脳がショートしてしばらく動けなかったが、そのおかげか、復活後は少しは冷静になれた。

よくよく考えてみれば、美少女がうちに飯を作りにくるなんざ慣れたもんよ。うちのひまりを無礼<sup>ナメ</sup>るなよ。あいつだつてリサさんに負けず劣らず顔整ってんだからな！（錯乱継続中）

「たっだいま☆ うゝさむさむっ」

俺の家に「ただいま」と行つて上がり込みリサさん。無意識なんだろうけど、この人はどうしてこう、俺の心を不要に擦るのだろうか。

「暖房付けますね」

「ありがと☆」

「ホットカーペットも付けたんで、そのうちコタツも暖かくなるはずです」

うちのコタツは食卓も兼ねている。

飯を食う頃にはちようど良く温かくなっているだろう。

「ありがと☆ いやあ、コタツの魔力はすごいからね。亀になっちゃう前に、さっさとご飯作っちゃお」

上着を脱いだリサさんは、「ちよつと置かせてもらうね」とソファの上に畳んで置いた。

良かった。ここで流れるようにハンガーラックを使われていたら、本当に同棲していると錯覚するところだった。

「あ、何か手伝うことがあります?」

「んーん！ 大丈夫！ 海くんはゆっくりしながら待ってて」

「いやでも、それはさすがに申し訳ないっていうか…」

「んゝ… あはは、ごめん」

なぜ謝罪。

「ひまりから聞いたことあるんだよね。海くん、引くほど料理下手… っていうか、料理は全くできないって」

「えっ」

「中学の調理実習でハンバーグ作った時、なんか緑色の物体を創り出した上に、家庭科の先生に食べさせて病院送りにしたってマジ?」

ひまりの野郎、次会ったら俺特製のスープ食わせてやるからな！

ということ、誠に遺憾ではあるが、被害者を出さないためにも俺は待機となった。

いや、分かってるんだ自分でも。俺の作るモノはヤバいって。

これでも「このままじゃ将来生きていけない」と奮起して料理を覚えようと思った時期もあったんだ。けど、味見の段階で俺がトイレから出られない体になってしまうので、料理の腕が上がる前に俺の心が折れてしまった。

「料理は外で食った方が美味しい、自分で作る価値は一つもない。材料費だつて一人分だと高い。結局は外で食った方が美味い<sup>上手</sup>」

「何やってんの?」

「作詞です」

ポロロン…とギターを鳴らしてみる。

不甲斐なさで泣きそうだ。

それはそうと、姉ちゃんのエプロンを身につけたリサさんがそこにいた。なんだただの新妻か。絶対幸せにしよ。

俺の細君（偽）はサラダの入った皿を二皿持ち、食卓の上に並べている。

「あれ、もう出来たんですか?」

「ううん、まだまだよ。サラダだけ先に出しちやおうと思つて」

キャベツの千切りにプチトマトが二つずつ。

すげえなこの千切り。めっちゃ細い。もうプロじゃん。

そーいやキャベツつて豊胸にいいらしいな。姉ちゃんも高校生くらいの時、狂つたようにキャベツ食つてたっけ。

「リサさんつてキャベツ好きなんですか?」

「え? ーん… まあ嫌いじゃないかな。よく食べるよ」

ふーん。

そーいやひまりも、うちで飯作る時はよくキャベツ出してくるなあ。

K a i 『ひまりー』

K a i 『お前さ、キャベツ好き?』

H i m a r i 『好きといえば好きだけど』

H i m a r i 『どうしたの急に』

なるほどね (理解)

K a i 『なんでも。ただちよつとした確認』

k a i 『お疲れ様です』

K a i 『特に深い意味はないんですが、キャベツってよく食べますか?』

白金燐子 『お疲れ様です!!?? ( ) ☒?☒( ) ???』

白金燐子 『キャベツですか? (。・?・?)』

白金燐子 『週に数回は食卓に並びますね (・ω・)??』

やっぱりな (完全理解)

こりや市ヶ谷さん辺りも食ってんな、キャベツ。謎は全て解けた。

「キャベツは万能、みんなの夢が詰まってる。ロールキャベツに回鍋肉、千切りサラダにキャベツ焼き」

「何やってんの?」

「作詞です」

A R O F a とかホル○ンとか岡○体育辺りでありそうだなよな、キャベツの歌。

「海くんって頭良いのに、ちよいちよいアホだよね」

なんだと! (憤慨)

「おかずもすぐ出来るから、もう少し待っててね☆」

「はい」

おかずって何が出てくるんだろう。わくわく。

ちなみに私が好きな食べ物は何じゃがです。あとオムライスとハンバーグも好き。

少し時間もあることだし、曲のコピーでもしておこうか。最近はいブに追われてて好きな曲のコピーってやってなかったからな。

いや、ライブでやるのは好きな曲ばかりだから、好きな曲をコピーしてるっちゃしてるんだけど。なんかこう、気持ちが違うじゃん。ライブでやんなきゃいけないっていうのと、好きなようにやるつてのではさ。

アンプに繋ぐ時間はないが、まあ暇つぶしだし生音でいいだろ。

スマホにイヤホンを差し、曲を流す。

完コピもいいが、めっちゃくちゃなアレンジしてみるか。ボーカルを邪魔する感じで。バンドじゃ絶対にできないことだから、こういう時にやるに限る。

「ごめん海くん。おかずは出来ただけどお米炊けるまであと十分くらいあるから…。あれ？　なんかその曲聞き覚えあるような…」

原曲には存在しないギターソロを弾き始めたところで、リサさんがキツチンから顔を出す。そこで初めて、俺が弾いているギターの音をちゃんと聴いたようだ。

「あ、これBLACK SHOUTです」

「うそ、そんなリフないよね？」

「勝手に作りました」

「すごー！　えー、もつと弾いて弾いてー！」

キラキラした目で見てくるリサさん。ふへ、緊張しちゃうな。

イヤホンを外し、スマホから音源を流し始める。

イントロは一切手を付けない。このゴシックメタルみたいな入り、とても好き（告白）

メタル特有の「クサさ」こそないが、退廃的かつ神秘感がある中で妙にキャッチーなところもある。こんなのを現役女子高生が考えたつてんだから驚きだ。やっぱすげえよ、Roselia。

下手に手を入れて雰囲気がぶっ壊れるのは俺が良しとしない。めちゃくちゃに歪ませてリバーブをかけた六弦の開放弦を薄く鳴らしせばまだ良い感じになるかもしれないが、今は生音だしな。

三十秒ほど経ち、友希那さんの「SHOUT!」の言い終わりと同時にギターを入れていく。

ここも基本は原曲に忠実に。だがしかし、次のコーラスが入る寸前



でテキストな早弾きを入れた後にチョーキング。ここはドラムに合わせた。

Aメロもそんな感じで、ほとんど原曲通り。途中のベースソロも俺は好きなので介入しない。Bメロも同じだ。

だが、サビからは違う。これでもかどピロピロ鳴らし、ボーカルを邪魔するように前が出る。

友希那さんが聴いたら、多分嫌な顔をするんだろうな。

そう思いながら間奏でもシンセを喰う勢いで弾き倒し、チョーキングで伸ばしながら二番Aメロにイン。

二番も一番と同じように弾きつつ、二回目の間奏に入る。

ギターの真髓はここからだ。

最初はプチブレイクダウン、そしてベースのスラップムーヴメント。それが終われば、俺の番。

本来はシンセが出てくるところをギターで喰う。

トリルにタツピング、チキンピッキングにビブラートで『泣き』を作りながら、最後はやっぱりチョーキングで締める。チョーキング、大好きナノ。

Cメロにはアルペジオを。その後ラスサビに入る前の一瞬の空白が気持ちいい。

ラスサビまで弾き切り、最後はコードで終わる。

うーん、これこれ。バンドも楽しいけど、こういう「誰にも気を使わずに遊び散らす」っていうのも楽しいんだ。

「すつご〜！ほんと上手いね、海くん！」

パチパチパチと手を叩いて褒めてくれるリサさん。いいね、褒められると嬉しくなっちゃう。

「まあ、友希那さんにはあんま聴かせられないやつですけどね」

「え、なんで？」

「いや、ボーカルの邪魔がハンパないですし」

「あく、確かに。怒ることはないだろうけど、バンドなのに音で喧嘩しちゃうのはよくないよね」

うんうん、と腕を組んで納得している。

バンドなのに音で喧嘩するのは良くない、か…耳が痛いな（↑新曲を作るたびにドラムと音で殴り合ってはベースの才能にねじ伏せられてる人）

「アタシももう少し上手ければなく。Roseliaの足、引っ張ってばっかだし」

「？ リサさんは十分上手いでしょ」

「そうかな？ ほら、誠くんとか、まだベース歴一年もないのにすっごく上手いじゃん？」

「アレと比べたらダメっすよ」  
化け物

あいつはマジで狂ってやがる。まだ一年も続けてないくせにスリーフィンガーとして覚醒するわ、スラップやスウィープも半日でほぼマスターするわ。あとそうだ、ベース始めて一ヶ月と少しの頃にユ○ゾンのphantom jokeを完璧に弾いてきたこともあったな。

バンドに誘った俺、マジで今世紀最大のフラインプレーだと思うわ。

「この半年間の上達率で言えばリサさんも中々でしょう？ 初めて会った時よりめっちゃ上手くなりましたよ」

「そう？」

「はい。最初は『コーラスしながらリズムキープするのムズい』とか『指板見ないで弾くのムズい』って言ってましたけど、今はもう完璧じゃないですか」

「あはは！ え、その頃の話はちよつと恥ずかしいね。でもまあ、うん。成長はしてる…のかな？」

「してますよ。ちよーしてます」

Roseliaは最初から上手かったけど、最近はもつと上手くなってきた。

あこちゃんもそうだが、この二人の成長が特に著しい。たくさん練習したんだろうな。素直に尊敬できる。

「あ、そうだ。初めて会った時といえはさ」

テレテレしててかわいいなこの人、と思っていたら、突然思い出し

たように話題を変えてくるリサさん。

初めて会ったのは…あれか、C i R C L Eでひまりたちにギター買ったの自慢してた時か。

「実はね、アタシ、その前から海くんのこと知ってたんだ」

「え？」

何それ、怖い話？

「海くんさ、楽器屋さんでギター値切ってたでしょ」

「え…え、なんで知ってるんですか？」

その話は誰にもしてなかったはずだ。

だって値切り交渉したとか、ちよつと恥ずかしかったし。

え、まさかここに来てリサさんストーカー説浮上？

「あ、別に後をつけてたとか、そういうのじゃないからね？ だからそんな怯えた顔しないで」

ホンマか？

美少女とはいえさすがにストーカーは引いちやうんだが。

「あの楽器屋さん、鵜沢さんがバイトしてるじゃん？」

そうなの？

「アタシもよく弦とか買いに行ってるんだ。海くんを見たのはたま。ほら、結構おっきな声で値切ってたでしょ？」

マジでか。アレ聞かれてたの？

いやまあ、確かに興奮して周りなんて見てなかったし、声も大きかったかもなあ。恥つず。

「まあ、見た、って言っても、その時は顔見れなかったんだけどね」

「そうなんですか？」

「うん。あの時海くん、急いでお金下ろしに行ったでしょ？ 顔見る前にいなくなっちゃって」

結構細かいとこまで覚えてんなこの人。

「その後、C i R C L Eで偶然の再会！ さらにはR o s e l i aにアドバイスとかして貢献してくれるコーチ？になるなんてね。これってなんて運命？ って思っちゃおう☆」

運命は大袈裟すぎひんか？

そんなこと言ったらたまたま席が近かっただけで一緒にバンドすることになった須田はどうなるんだ。あいつには感謝してるし感動もしてるけど、あいつと運命で出会いましたとか嫌だぞ。

「そうだ！ 海くんとのお会いを歌にしてみよっかな」

「やめてください」

そんなのがコンテストに出されるつても恥ずかしい、Roselia内で共有されるのも恥ずかしい。つか仮に良いの出来たらRoseliaの楽曲になるんだろ？ 自分が歌にされるのは普通に恥ずいから嫌だわ。

キツチンの方から「テーレーテーレーテーレー」と軽快な音が聞こえてくる。米が炊けた音だ。いつも思うんだけど、なんでキラキラ星なんだろうな？ 香澄とか好きそう。

「お、炊けたね。じゃあよそつてくるから。お茶碗とかつてどこ？」

「あ、さすがにそれくらいは手伝います」

「ほんと？ ありがとう☆」

別に感謝されるようなことじゃないと思うが、リサさんに感謝されるのは気持ちが良いので甘んじて感謝されよう。

飲み物も準備したらもつと感謝してくれそうだな（子供の手伝い）

「リサさん、飲み物お茶でいいですか？」

「あ、うん。ありがとう☆」

やったぜ！

米をよそつた茶碗を二つテーブルに運び、一旦戻ってからお茶をコップに注いでテーブルに持つていく。

「米とお茶運びました。あと何か持つてくものあります？」

「じゃあお箸お願い。あ、アタシが使っていいお箸とかある？」

「えっと・・・姉ちゃんのかお母さんのでいいですかね？・・・あ、待つてください、使ってない箸が確か食器棚のこの辺に・・・っと、あったあった。百均のお徳用みたいなヤツっすけど、これなら未使用です」

「じゃあそれで☆」



「いや鏡見なよ」

一旦顔を洗いに洗面所に行き、冷水を顔にぶちまけることでようやく落ち着いてきた。

今のはヤバかった。『リサさんがうちで飯を作ってくれる』っていう今の状況ですら脳内処理ギリギリ(?)だったのに、ちよくちよく飛び出るセンチティブな照れ顔と発言で溜まりに溜まったアレが暴発しかけたな。

一発頬を叩き、気合いを入れ直す。

これ以上粗相をしたり無礼を働いたり、無様を晒すわけにはいかない。他でもない、善意で俺の飯を作ってくれているリサさんに対して失礼にだろう。

決意の籠った足取りで、俺はリビング（食卓）へと向かう。

「お待ちせしました。結婚しましょう幸にし——うっ！」

「え!? なんで自分の頬を打つの!?!」

「すいません口と手が勝手に」

もう（俺の理性が）ダメかも分からんね。

? ? ? ? ?

「落ち着いた?」

「... なんとかか...」

混乱を解除するために十分ほど時間を貰い、シャワーを浴びてみた。

シャワーを浴びている途中「えこれ事前?」とかも思ったが、シャワーを冷水に切り替えたことで身も心もスッキリ! 引き締まる越えて風邪引くでこんなん。

しかし、極寒を味わった甲斐があり、歌詞作りの時から少しずつ積もってきていたいろいろな欲望が冷水と一緒に流れていった。

「さあ、ご飯を食べましょう。もう何も怖くありません」

「何がそんなに海くんを苦しめてるの…?」

アンタだよ（ぷち怒）

まあそれも済んだこと… いやまだ済んでないかもしれないが、とにかく一旦は終わったことだ。

気を取り直して飯にしよう。

テーブルの上を見れば、俺が用意した米とお茶、先にリサさんが持ってきてくれていたサラダ、味噌汁、いちご（練乳添え）。

そしてそれらの真ん中に堂々と鎮座する今晚のおかず——肉じやがの姿があつた。

わーい肉じやがだー！（退行）

「海くん、肉じやが好き?」

「一番好きです」

「そうなの? 良かった☆ ちなみに二番目に好きなのは?」

「カレーとハンバーグの同着です」

「小学校男子、って感じだね」

悪かったな。

好きなもんは好きなんだよ。美味いだろ、肉じやがカレーハンバーグ。肉じやがとカレーは同じようなもんだけど。

グウ…

好物を目の前に腹の虫が食卓に響く。

「お腹すいたの? ご飯食べようね」

急にバプみを出すな心臓に悪いだろ!

バプ…  
まったく

バプバプバプバプバ。

「バプー！（いただきまーす!）」

「なんて?」

まず最初に、いきなりメインディッシュの肉じやがに手をつける。

普段はまずサラダを食べてからおかずに行くのだが、今ばかりは我慢が効かない。ずっと己と戦ってたから腹減ってたんだよな。

肉じやがの肉を真っ白な米の上に乗せ、一緒に口に放り込む。

「むー！ ふえっひゃふふあい!!」

「ちゃんと飲み込んでから喋りなく？」  
もぐもぐごつくん。

「めちやくちや美味いです!」  
「そう? お口に合って良かった☆」

正直俺は馬鹿舌で味の細かい部分はあるまり分らないが、これは本当に美味しい。

あとなんだろ。米が良い。いつも食ってるやつより水分が少ないのかな? 肉じゃがの汁をよく吸う。

じゃがいもも一口。うーんホクホク。どうしてあの短時間でこんなにホクホクになるんだ?

「じゃがいもは先にレンチンしたら煮込むより早く柔らかくなるよ」  
なるほど。

サラダを皿の半分ほど食べ、味噌汁を啜る。美味しい。心做しかサラダもいつもより美味しい気がしてきた。同じ草なのにな。

「そういえば、海くんの家は麦味噌使ってるんだね」  
俺の反応を見守っていたリサさんも食事を始める。

俺とほとんど同じタイミングで味噌汁を啜り、「へー」と感心した様子だ。

「うち、母方の実家が九州で。味噌汁は昔から基本麦ですね」  
「そうなんだ。アタシ、麦味噌って初めて使ったよ。こんなに色も味

も変わるんだね」  
こつちも美味しー、と味噌汁を味わっている。

確かに結構違うよな。お母さんが九州出身だから、うちで出る料理は基本九州に寄っている。

醤油も甘いし、ラーメンはとんこつ麺細めバリカタが主流だ。  
「海くんは麦と米、どっちが好き? やっぱり母の味だし麦?」

「いや、俺はどっちかっていうと赤色系の米味噌の方が好きですかね」  
「そうなの?」

小学校に上がって初めて給食で味噌汁を食った時、わりとデカめな衝撃を受けたことを覚えている。

米味噌の方が味が濃いな。麦味噌のあっさりした感じもい



いけど、俺は味がしつかり濃い方が好きだ。

こうやって濃い味のものばかり食べるから、どんどん馬鹿舌になっっていくんだろうな。

「じゃあ次はアタシのうちで作ってあげる☆ うちには米味噌だから」

「彘?」

「言ったっしょ? 一緒に作詞する時はお味噌汁作ってあげる、って」

「マジだったんすか」

「マジだったんすよ☆」

☆幸福、続行——

そうか、まだ続きがあるのか。

よく考えればまだ作詞終わってないしな。コンテスト出す用のやつ早く考えなきゃ。

「アタシ、こういうので書こうかなって思ってるんだ」

「こういうの?」

「うん。こういう、同棲みたいなの? ただのカレカノってところからちよつと進んだカップルのラブソング」

「ゲホッ! ゲホッ!」

「ちよ、大丈夫!?!」

肉じゃがの出汁が変なところに入った。

何言ってるんだこの人。正気か?

「ほら、アタシ恋愛小説好きじゃん?」

「まあ... そつすね」

リサさんにおすすめしてもらった恋愛小説面白かった。『阪急○車』とか『世界の中心○愛を叫ぶ』とか。

「恋愛ドラマとか恋愛映画も好きじゃん?」

「はいですね」

そんでキスシーンとかで赤面してそう。

は? かわいいかよ。この乙女め。

「だったらやっぱラブソング書くつきやないでしょ!」

そうかなあ？

「つてことで、今回のこれも作詞の取材？　みたいな感じ！　付き合ってくれてありがとね☆」

なるほどなあ。

なんで突然『平凡な僕のもとにやってきた美少女ギャルが夕飯を作ってくれる件について』とかいう絶対に売れないラノベ的な展開が巻き起こったのかと思ってたら、そういうことだったのか。

いやどうということだよ。

「あ、取材とは別にちやんとお礼のお味噌汁は作るから！　なんなら次はアタシの家でご飯食べてく？」

なんだこのギャル、誘ってんのかよいい加減にしろ（激おこステイツクファイナリアリテイぷんぷんどリーム）

「食べるー！」

「あはは！　元気が良くてよろしい！　次はハンバーグ作ったげるね」

「やったー！」

口が勝手に動いた。

大人はいつだつて汚いが、それが社会を生き残る術でもある。

とある日の夜。

「おまたせ〜！ ご飯できたよ〜」

「うーい」

テレビで歌番組を見ていると、キッチンからそんな声が聞こえてきた。

テレビは付けたまま立ち上がり、配膳を手伝うためにキッチンへと向かう。

「お米はどのくらい食べる？」

「大盛り」

二人分のお茶を用意し、コタツ<sup>食卓</sup>へと運ぶ。

ついでに箸も、お互いの専用のを食器棚から取り出して持って行った。

ふとテレビを見ると、最近話題の男アイドルグループがキラキラした笑顔で踊り歌っていた。

はー。あんなに動いているのに笑顔を保ったまま歌えるの、ほんとうに凄いな。

「あ、この曲知ってる〜。今やってる恋愛ドラマの主題歌だよ」

「へー」

最近ドラマとか観てないな。

いやそもそも恋愛ドラマはそんなに観ないんだけど。ミステリーとか大河とかはたまに観る。

コタツに料理が並ぶ。

今日のおかずはチキン南蛮か。

「タルタルソースも自作なんだよ！」

「まじ？ すげーな」

ソースを作るとか、俺じゃ絶対にできないしやらない。自分で作るより市販のものを買った方が美味しいし安全だから。

「じゃあ食べるか」

「うん！ 召し上がれっ」

飯を用意してくれた人——ひまりに「いただきます」を言っから、俺はキャベツの千切りに手を付けた。

? ? ? ? ?

今日はお母さんは仕事、姉ちゃんは飲み会と、家に俺以外いない。こういうのは良くあることだし、そういう日はたまにひまりが飯を作りに来てくれる。

昔は変な感じがしたもんだが、今となっては慣れてしまった日常の一つだ。

「うーん、やっぱり選ばれたのはキャベツでした」

野菜にもいろいろあるのにわざわざキャベツを選択してくるあたり、やはり豊胸効果説は濃厚なのか。

「海、キャベツ好きなんでしょ?」

「いや? まあ嫌いじゃないくらい?」

どこ情報だそれ。

「そうなの? この前急に『キャベツ好き?』って聞かれたから、てつきり好きなんだと思ってた」

俺情報だったか。

訂正しようかとも思ったが、掘り下げたところで出てくるのは「キャベツに豊胸効果があるかどうかの確認」というセクハラ発言のみ。いくら幼馴染み相手とはいえ、そこまではつきり言うのは気が引ける。

よってスルー。話題を変えよう。

「お、チキン南蛮美味しい。あとタルタルも。やっぱりひまりの飯はうめーわ」

「そ、そう!?! えへへ…」

実際かなり美味しいと思う。馬鹿舌判断なのであてにはならないと思うが。

そんな馬鹿舌でも分かるくらい、ひまりって料理の腕上がったよな。なんか俺の姉ちゃんに料理教えてもらったりもしてるんだっけ。「なんつーか、関口家の味に近付いてきてるよな。また姉ちゃんになんか教えてもらったの?」

「うん! 今日使ってるので言うときキン南蛮の甘酢ダレのレシピとか、それ以外だどこの前がめ煮の作り方教えてもらったよ」

がめ煮。

あれ美味しいんだよな。今度作ってもらお。

「お味噌汁もちゃんと麦味噌使うようにしたし! … まあ正直、いつも私の家で使ってる米味噌の方が好きなんだけど…」

「俺も」

「え!?! そうなの!?!」

「おん。ひまりん家の味噌汁美味しいよな」

「じゃあ早く言ってくれよ! 今日のお味噌汁、麦味噌で作っちゃったよ!?!」

「別に、どっちも好きだしーよ。どっちかってゆーと米味噌の方が好きかなってくらい。味が濃いから」

「あー… 確かに海、味が濃いもの好きだもんね。だから馬鹿舌になるんだよ」

「なんだと!」（憤慨）

自分で言うのはいいけど、人に言われると無性に腹立つことってあるよな。今がそう。

しかし、先日あんなにも取り乱した『ドキドキ♡ 美少女ギャルとの新婚ごっこ』と似たようなシチュなの、今日は全くかけらも緊張しないな。

これが幼馴染みの力か。

まあうちにはひまり専用の茶碗やら箸やらが置いてあるくらいだしな。もはや親戚くらいのノリだ。ノリ〇ケおじさん。



電話を無視したところで鬼電がかかってくるだけだし、何より無視をする理由がない。

『あ、海くん久しぶり〜』

言うほど久しぶりか？

一週間くらい前に会った気がするけどな。弦巻家の新年会で。

「お久しぶりです。何か用事ですか？」

『うん、ちよっとお仕事の電話〜』

「仕事？」

なんだ？ またパスパレのライブに出るとか、パスパレと一緒に口ケ行つてこいとか、そういう話か？

沖縄だったら行くわ。暖かそうだし。

『え、何？ 彩ちゃん』

『え!?! いや、なんでもないよ!』

『彩サンは「私が電話しようと思つてたのに〜!」と言つてます!』

『ちよ、イヴちゃん!』

『え〜? 別に誰がしても良くない?』

なんだなんだ。何だか騒がしいな。

声が遠くて全部は聞き取れないけど、丸山さんや若宮さんもそこにいるのか？

『彩ちゃんがうるさいからサツと要件伝えちゃうね〜』

日菜さんのそういう悪意がなくてドライなところ、俺は好きだよ。

丸山さんがちよっと可哀想だけど。

『海くん、つていうかCapliberteになんだけど、曲作つて欲しいの』

「曲つすか」

『そー。パスパレ用のやつ』

なんで?!

『横から失礼するよ。久しぶり、海くん』

突如聞こえてくる男の声。

この声には聞き覚えがある。

「出たな御剣! 次こそはアンタもテレビに顔出しさせてやるからな

！」

『あつはつは！ うんうん、そういう年上を一切敬わない態度、嫌いじゃないよ』

うるさい！

ネットには『俺スレ』とかいうのが立ってるらしいんだぞ！ 内容は怖くて見てないけど、肯定的なのが多いけど批判的なものもあるって五十嵐が言ってたぞ！ 全部お前のせいだかな！ 誰が敬うかバーカバーカ！

『それはそうと、日菜ちゃんが今言った通り、楽曲提供を依頼したくてね』

だからなんで？

『ああ、作曲だけでいいんだ。作詞の方はキミのお友達… Afterglowに依頼しようと思ってる』

「は？」

『だってキミら、曲はカッコよくても作詞は目も当てられないらしいじゃないか』

なんだア？ てめえ…

『その点、Afterglowの等身大な歌詞には熱いものを感じる。キミらCapliberteの作編曲と、Afterglowの作詞。この二つが合わされば、シナジー効果で最高の曲ができると思わないかい？』

思わないかい？ じゃねえんだわ。

確かに楽しそうではあるが、なぜそれを他人に言われてやらなきやならんのか。それが分からない。

『もちろん、CapliberteにもAfterglowにも利点はある。第一に宣伝効果だ。こっちは芸能事務所、プロの世界で活動している。全国にキミたちの名を知らしめることができるよ…』  
なるほど。

要するに、広告してやるから曲を寄越せ、ってことか。

「ナメんな。そんな目的で音楽やってるわけじゃないんですよ」

『まーまー。宣伝のほかには、もちろん報酬だね。さつきも言った通



り、こつちもプロだ。相応の対価は支払うさ』

「だからナメるなつての。金目的でもないんすわ」

『でもお金は欲しいだろう?』

そりやもちろん欲しいけどさあ。そういうのじゃないんだよな。

いやまあ、そこは価値観というか、生きている界限せうがいの違いか。

俺らは趣味として音楽をやってるが、あつちは音楽そんがくで飯を食って

る。プロである以上、ビジネス的な価値観は付いて回るもんだ。

『え、あ、ちよ、千聖ちゃん? やめてスマホ取り上げようとししないで

! ま、まっつてその関節はそつちには曲がらな——うっ!』

『——もしもし?』

「... え、千聖さん?」

なんだ、何が起きた。

御剣さんは痛めつけられたのか? ヨシ!

『こんばんは、海くん』

「あ、はい。こんばんは...」

耳元から推しの声が聞こえる。

心臓が悪い。

『さっきのアホの話だけだ』

御剣さん、千聖さんに「アホ」って呼ばれてるのか。いい気味だ。

『楽曲の提供について、私からもお願いするわ。ただこれは、今までの

「少しライブに出る」とか「ちよつと一緒にロケをする」とは違う、大きな話』

「ライブもロケも十分デカイ話だと思いますけど」

『ビジネス規模の話よ。あるいは、貴方たち... いえ、私たち含め、全員の成長も加味すれば、間違いなく過去最大の話だと思うの』

「はあ...」

まあ、CapliberteやAfterglowはプロの楽曲に関われることで視野やそれぞれの世界が広がるし、パスパレは系統の違う曲をやることで幅が広がって、かつ話題にもなるってことか。

ライブやテレビ出演とは違って、楽曲となると動く金も長期的なものになる。

アルバム販売もそうだし、最近だとサブスクなんかの再生数でも売上が発生する。

パスパレは人気アイドルグループ。ロイヤリティだけでも中々な金になるだろう。

あー、やだやだ。

ライブに出て収入を得るのはまだいいんだけど、それ以上は求めてないんだよ。そういうのを考えて音楽やるのがやだ。

『それに私としては、そういう大人の話より、貴方たちの作ったものを演奏してみたい、という気持ちが大きいわ』

…ん？

『え、何？ 彩ちゃん… はいはい、分かったわ。海くん？ 少し彩ちゃんに代わるわね？』

『も、もしもし！ こんばんは！』

声でっか。耳痛い。

「…今の声、彩先輩？」

ひまりが復活した。

一瞬マイクを手で覆って、こっちの声があっちに届かないようにする。

「今パスパレの事務所から電話かかってきてんの。仕事の話だって」

「仕事？ 海も大変だね」

「今回はお前らも巻き込まれる側だぞ」

「え？」

「あ、もしもし。お待ちせしました」

「え、ちよつと海、どういうこと!？」

ひまりがうるさいが放置だ。

あとで説明してやつから、とアイコンタクトで伝える。絶対だよ！

とアイコンタクトで返ってきた。

『いきなりごめんね？ こんな話。迷惑だよね…？』

「いや、迷惑とかじゃないですけど…」

困る話ではあるよな。

第一、こんなの俺だけで決められる話でもない。須田や五十嵐には

もちろん、Afterglowとも話し合う必要があるだろう。

『でも、さつき千聖ちゃんが言ったみたいに、話題作りのためっていうより、私たちが海くんたちの作った曲を演奏したい、歌いたって気持ちがあるの!』

…うーん。

そういう風に言われると悪い気はしない。

そこには確かに大人たちの思惑があるのだろうし、その辺は嫌いだ  
が……丸山さんや千聖さんの言葉には応えたくない。

「…一旦考えます。メンバーにも相談しなきゃなんで」

『! う、うん! 分かった! ありがとう!』

「あ、あと千聖さんへの伝言頼んでいいですか?」

『へ? あ、うん。いいよ』

「御剣さんをもっといたぶってください、お願いします」

『ふええ!』

松原さんみたいな声出たな。

? ? ? ? ?

翌日の放課後。

俺たちCapliberteとAfterglowは羽沢珈琲店  
に集まり、窓際の特等席を確保していた。

「それでは諸君、重要な会議を始める」

時刻は午後四時前。

いい感じに射し込む夕日がバックになるように、俺は一番窓際の席  
を陣取ってからそう言った。

昔、何かの余興で使った楕円のサングラスをかけ、後光に照らされ  
てレンズが白光りする。気分はゲ○ドウだ。

「おお。ラスボス気取ってる雑魚キャラみたい」

おいモカてめえ。

「ひまりから聞いている。パスパレに曲を書く、って話でしょ?」

俺がモカを睨んでいると、コーヒーを啜っていた蘭が今日の議題を口にした。

俺が言いたかった……

「ん？　なんだ海、そのサングラス外すのか？　カツコよかったのに」「もう……いいんだ……」

哀愁を漂わせてみるが、別にゲ○ドウのモノマネをする必要もない。というかあのキャラよく分かんないし。

サングラスを机に置くと、それをモカがかけて遊び始める。あいつ雰囲気がぼわぼわしてるからか、サングラス全然似合わねえな。お笑い芸人のネタ用コスプレみたい。

「それでお前ら。曲の件について、実際どう思う？」

お、五十嵐がサングラスつけた。

あいつがつけるとイカちいな。クラブのセキュリティみたい。いや、本物のクラブのセキュリティとか見たことないけど。

「あたしは反対。あたしたちの歌はあたしたちだけのものだし……なにより、作詞と作曲を別で頼んできるところがムカつく」

「だよなー。アタシも蘭と同じ、反対だ。そりゃあ海たちの曲はカッコいいけどさ。それとこれとは話が違うだろ」

まあそうだよな。

俺は昨日直接言われたが、「Afterglowの歌詞だけ欲しくて曲はいらない」って言われてるんだ。腹が立たない方がおかしい。「せめてAfterglowとCapliberteで一曲ずつ、どっちもから欲しいってんなら話聞くけどさー」

全く巴の言う通りだ。

そういうところだよな、大人って。

P r r r r r ……

「おい関口、スマホ鳴ってるぞ」

「あ、俺か」

須田の指摘で気付く。

こんな八人も集まったら誰のスマホが鳴ってるんだか分からない。

机の上に置いてあった俺のスマホの画面を、たまたま巴が見る。

「…おい海。さすがに『アホ』で名前登録してるのは相手に失礼だろ」

ああ、御剣さんか。

昨日名前登録し直したんだよな。

「俺この人に拉致られたこともあるから」

「…いや、なんでそんな人と連絡取ってんの？」

蘭の呆れた目が突き刺さる。

もつともな意見だ。

「パスパレのプロデューサーなんだから仕方ないだろ」

「マジかよ。ヤバいなパスパレの事務所。犯罪者雇ってるのか」

巴の呆れた目も突き刺さった。

ふふっ、御剣さんめ、現役JKに犯罪者呼びわりされてやんの。いい気味だ。

「はい、関口です」

笑いを堪えて電話に出る。

『あ、もしもし？ 御剣です〜』

「あんた今、現役女子高生に『犯罪者』って言われていますよ」

『ご褒美だね』

なんだこいつ!?

『それはそうと、楽曲提供の件なんだけどね』

大人って怖い…

「それなら今話していますよ。Afterglowと一緒にいます。あとCapliberteも全員」

『そうなのかい？ 丁度良かった。Afterglowの子たちには直接依頼してないからね。今日このあと依頼のメールをするところだったんだ』

「電話、代わりますか？」

『いや、海くんたちCapliberteにも関係のある話だし、どうせならいっぺんに話そう。今、スピーカーにできるかい？』

チラッと店内を見る。

チヲホラ客もいるが、まあ地元のジジババたちだ。聞かれて困るよ  
うな話でもないだろうし、大丈夫だろう。

「分かりました」

返事をし、スピーカーに切り替える。

『Afterglowの皆様、はじめまして。Pastel\*Palette担当プロデューサー、御剣光輝です』

御剣さんの声が響く。

その声は全員に届くには十分すぎるほどだ。ちよつと大きすぎる  
な。音量下げとこ。

『すでにそちらの関口海くんからお話があったと聞いていますが、改  
めて。Capliberte

Afterglowに、楽曲の提供を依頼したく思っております』  
蘭と巴は不満そうな顔だ。

そのほかはひまりとつぐが蘭たちを不安そうに見てて、五十嵐はど  
んと構えている。須田とモカはまだサングラスで遊んでいた。お前ら  
話はちやんと聞けよ。

『本来であれば私もからご連絡しなければはらないところ、遅く  
なってしまい申し訳ありません』

にしても御剣さん、やけに丁寧だな。俺と話してる時とは別人みた  
いだ。

まあAfterglowは取引先みたいなもんだ。そりや社会人  
として丁寧な態度の一つも取るか。

… 待て。そういう理論で行くと、俺って御剣さんから取引先とし  
て扱われていない…？ こちとらライブにもロケにも同伴してん  
だぞ、相応の態度見せろや！

『それで、昨日海くんに伝えた内容から少し変更がありました』  
変更。

『昨日の話ではCapliberteに曲を、Afterglowに  
歌詞をお願いしたいというお話だったのですが、本日の会議で「それ  
は失礼にあたるのではないか」。それから「Afterglowの魅  
力は歌詞だけでなくその曲にも寄るところがある」という話になりま

して』

ほう。

『本来一曲のみ提供していただく予定だったのですが、何とか予算を組んで二曲までならどうにかなるようになりました』

へえ。

『つきましては、Capliberteから一曲、Afterglowから一曲、という方向でお願いしたいのですが、宜しいでしょうか?』  
変わったな、流れ。

? ? ? ? ?

結論から言うと、CapliberteもAfterglowも、事務所からの依頼を受けることにした。

御剣さんからの電話では一旦結論を保留にし、再度各バンドで話し合った結果だ。

Afterglowでは色々とおつたらしいが、Capliberteの方は案外すんなり決まった。須田も五十嵐も、基本何も考えてないからな。直感で面白そうだと思った方向に舵を切る傾向がある。そういうところが好き(急なデレ)

さて、そこで問題になってくるのはCapliberteの作詞である。

「どうすんべ、これ」

依頼を引き受けてから早二日。

作曲・編曲の方は無事完了したが、作詞がなかなか終わらない。

今日も今日とて放課後に、今回はCIRCLEでも羽沢珈琲店でもなく俺のバ先に集まっている。

この時期のカフェテリアは寒いし、羽沢珈琲店は満席だったからだ。

俺と須田と五十嵐がかれこれ一時間は顔を付き合わせてうんうん

唸っているが、何も良いものは浮かんでこなかった。

炭酸は体に悪いとかいう急なアスリート発言を打ち出した五十嵐が、烏龍茶を一口飲んでから口を開く。

「関口お前、作詞コンテストとかいうのに応募する予定なんだから。それ出せよ」

『『キャベツの歌』と『自炊の歌』と『ヘラクレスの歌』、どれがいい?』  
「何を作ってたんだテメエはよ」

俺もそう思う。

『『ヘラクレスの歌』ってカブトムシ?』

「いんや。ギリシャ神話のヘラクレス」

「どっちにしるアイドルに歌わせるもんじゃないだろ」

そこなんだよなあ。

ただでさえ作詞は苦手だったのに、今をときめく現役JKアイドルに歌わせると思うと余計に思いつかない。

英詩、シャウトで誤魔化す手法も使えないし、ほとんど詰みだ。

「海〜! 須田くんは五十嵐くんも、お疲れ様!」

頭を悩ませていると、ひまりがこちらに駆けしてきた。

ひまりはさっきまで働いていたのだが、今は学校の制服姿だ。

「お疲れ。もう上がったの?」

「うん! あ、座つていい?」

「どーぞ」

ありがと〜、とお礼を言いながら俺の隣の席に腰を下ろす。

手にはいちごシエイクが握られていた。寒いのによくそんなの飲めるな。

「曲の進捗はどう?」

「作曲編曲は終わった。歌詞がまだ。何も思いつかん」

「むしろ歌詞以外終わってるんだ... 相変わらず早いね」

まあ、その辺は須田も五十嵐も優秀だからな。

基本的なコード進行さえ考えれば、編曲なんてすぐ終わる。いつも通り、俺と五十嵐の殴り合いと、須田の才能でちよちよいのチヨイだ。

「Afterglowはどうよ?」



「んー…今、蘭が頑張つて歌詞考えてるところ。私たちは歌詞ができてから演奏を考える派だから、まだ何も終わってないの」  
なるほどなあ。

蘭も苦戦しているらしい。俺らより断然作詞に慣れてるとは言っても、やっぱりアイドルの歌つてなると難しいんだろう。

そういえば今日、モカからひまりに関する面白い連絡があったな。「マジで何も思いつかない。ひまりー、お前ちよつと丸山さんのモノマネやってよ」

「なんで!？」

「いやほら、この歌歌うのつて丸山さんだろ？ だったら丸山さんをイメージした方がいいと思うんだ。ひまりも丸山さんも同じピンク担当だろ」

「え、えく…？ 蘭たちもそんなこと言つてたけど…」

乗り気じゃなさそうだな。

でもあと一息つてところか。

「そーいや近々、羽沢珈琲店の新作スイーツが出るつてな？」

「え、何急に。ま、まあ出るらしいけど…」

「奢つてやるよ」

「ホント!？」

羽沢珈琲店のスイーツはマジで美味しい。

一説には国のお偉いさんも好んで食べる、なんて話もある。まああの弦巻家が羽沢印のスイーツを取り寄せてるらしいし、マジで世界の羽沢まであるけどな。

甘いもの大好きっ子であるひまりも、羽沢珈琲店スイーツの虜だ。食いつきが良い。

「その代わり…分かるよな？」

「う、うう…」

悩むひまり。

だがこれは時間の問題だろう。

三十秒ほど経ったところで、意を決したようにひまりが立ち上がった。

「ま、まんまるお山に彩りを♡ ふわふわピンク担当、丸山彩でーす」  
ドツ（爆笑×3）

「ちよつ、そんな笑うことないじゃん!!」  
ギヤハハハハ!

「似てる似てる!」

五十嵐が笑いながら手を叩く。

須田は腹抱えてた。いや俺も笑ったけどそこまでか？

「あーっ、笑った。サンキュ、ひまり」

「ううく…それで、何か歌詞思い付きそう…?」

「いや何も」

「はあ!？」

「怒るな怒るな。ちゃんとスイーツは奢ってやるから。須田が」

「俺!？」

「お前が一番笑ってたからな」

是非もなし。

「俺は思い付いたぞ」

「マジ?」

ケラケラ笑って須田に金を出させようとしていると、五十嵐から意外な発言があった。

「冬の裸の山肌が春になるにつれて新緑に色付いて、それで山桜でピンクに染まる。俺、パスパレのことはあんまり知らないけど、結成からいろいろあったんだろ? その黎明期っていうか、パスパレってグループが開花するまでの物語を山に喩えた歌詞ってのはどうだろう」  
まともなこと言い出しやがった。

「曲名は『冬から春に至る山の神』でどうだ」

やっぱまともじゃねえな。

神はどっから湧いてきた?

「いやいや、それより『枯れ枝に芽吹く春の息吹』の方が良くない?」

須田は須田で何言ってるんだ?

薄々思ってたけど、こいつらわりと厨二だろ。そういうところも好きだよ。

「待て待て。こういうのはどうだ? 『雪解け山と春うらら』」

「ダサイ」

「海ってほんと、ネーミングセンスないよね」

お前らなんか嫌いだ!!!

★ ☆ ★ ☆ ★

「Capliberteから曲のデモが送られてきたよ」

Pastel\*Paletteが練習している事務所のスタジオに入り、僕——御剣光輝は一枚のCDを掲げながらそう言った。

「わー! ホントですか! 聴きたいです!」

「彩ちゃん、落ち着きなさい」

丁度休憩中だったらしく、彩ちゃんを先頭にわらわらと集まってくる。

現役アイドルが僕に向かって寄ってくる。何度味わっても甘美な光景だ。本当、頑張ってアイドルのプロデューサーになって良かった。

「ちなみに、曲名は『憂鬱なる厳寒の冬山、努力の先に咲き誇る山桜』だそうだ」

「なんですって?」

千聖ちゃんの真顔は今日も綺麗だな。

しかし、曲名はどうかならなかったんだろうか?

実は、僕もまだ中身を確認していない。タイトルから分かる通り、Capliberteのセンスは『本物』だ。歌詞がどうなっているか分からない恐怖がある。

最悪書き直しを依頼しなければならぬか、などと考えながら、CDをプレイヤーに入れて曲を流す。

「おお…！」

曲が終わり、最初に声を上げたのは麻弥ちゃんだった。

感嘆の籠った声で、表情も興奮しているように見える。

「流石ですね、Capliberteの皆さん！ 素晴らしい曲です！」

しているように、じゃないな。この子は今、興奮している。

「キーボードもあるんですね！ カイさんたちはキーボード担当の方がないので、キーボードは入っていないかもしれないと思っていました！」

「ベースも比較的弾きやすそう… 普段の彼らの演奏を聴いていて、もつと難しいものが届くと思っていたのだけれど」

二人とも、意味は違えど安堵の色を見せている。

キーボードに関しては最初から心配していなかったが、ベースの難易度は少しこちらからお願いしたことがある。

それは「ベースはなるべく簡単なもので、それでいてカッコいいものにしてくれ」というもの。

何分、彼らはプロの業界でも「上手い」と評判のバンドだ。

ギターとドラムはうちの天才と秀才がいるから問題ないと思っていたが、ベースは別。

千聖ちゃんならある程度難しいフレーズでも練習して弾けるようにしてくるだろうけど、彼女にはバンド活動以外にも女優としての仕事がある。大きな負担はかけられない。

「スコアも貰っているよ」

コピーしてきた楽譜を五人に渡す。

ギターパートだけ異様に音符の数が多かったが、まあ日菜ちゃんなら大丈夫だろう。

それにしても、Capliberteはとても良い楽曲を提供してくれた。

特に歌詞。正直非常に心配していたが、良いものが出来たようだ。

曲も歌詞も、決してキャッチーとは言えないが、刺さる人には深く刺さると思う。

高校生でここまで出来るのは圧巻の一言。

僕は音楽に関しては完全に素人だけど、そんな僕から見ても、彼らの実力は本物だと分かる。

いくつかのレコード会社も、彼らの取得に向けて徐々に動き始めているらしい。

ここは一つ、僕たちの事務所も動き出すべきだろうか。

いや、すべきだろう。

幸い、海くんとは懇意にさせてもらっている。

今回は楽曲も提供してもらった。

この勢いに乗じて、Capliberteを引き込んでみよう。

そうとなれば楽曲のお礼も兼ねて早速電話だ！

「もしもし、海くん？ 楽曲、確かに受け取ったよ。僕はもちろん、パスパレのみんなも大満足だった。ありがとう」

『そっすか？ 良かったっす』

「時に海くん。キミらCapliberteはメジャーデビューなんか——」

『興味ないっす』

「まあまあ、そんなこと言わずに。僕とキミの仲じゃないか。話くらい——」

『御剣、敵。絶対、倒す』

そう言っただけ電話を切られてしまった。

うーん……僕、そんなに海くんにかたいことしたかなあ？（拉致）（半強制的テレビ顔出し）（海の信条に反する依頼）

つつぐつつぐにしてやんよ

俺は、甘いものが好きではない。甘いものじゃ米食えないし。

かと言って嫌いというわけでもなく、本当に「どっちでもいい」と思っている派の人間だ。別に否定的な意味じゃなく「あつたら食べるし、なければそれでいい」的な意味で。

だが、それにも例外は存在する。

「うめ~~~~~!!」

ここ、羽沢珈琲店の甘味である。

正確にはつつぐのお父さんが作る甘味だが、これはマジでレベルが違う。

つつぐのお父さんの甘味食べると幸福度がグンと上がる。新作が出る度に食べにきてるからな。

しかし、今日食べているのは新作の中でも試作品の類。来月のバレンタインに向けた、チョコレートパフェの試食を仰せつかったのだ。

「はは、良かった。そんなに幸せそうな顔をさらると、作った身としては嬉しいよ」

つつぐのお父さんが柔和な笑みを浮かべる。

つつぐ。パパは良い人だ。俺の周りにいる大人の男たち（御剣、父親）とは違い、本当に良い人だ。俺もこういう、優しくて余裕のある人格者な大人になりたい。

御剣さんはアホだし、お父さんは息子に飯をせびるロクデナシだからな。ああは絶対にならないぞ。

「ところで、今日は俺だけですか？ ひまりとか、試食会なんて何を差し置いてでも参加したがると思うんですけど」

そう、今日この試食会に来ているのは俺だけだ。

つつぐは店の手伝いとして店内にはいるが、それ以外の幼馴染みズが見当たらない。

「今日は海くんしか呼んでないよ」

「? どうしてまた」

「だって、ここが血の海になるかもしれないだろう?」

「は?」

は?

え、何。背中に阿修羅が見えるんだけど。なんで修羅ってんのつぐパパ? やめてよ怖い幻覚見せないで。

「毎年のことなんだけどね」

笑顔が怖い。

「つぐみが、キミにチョコレートを作るって言ってるんだよ」

「... え、いや、友チョコでしょ? ひまりたちにもあげますよ多分」

「でも男の子にはキミだけなんだよ」

開かれた目には光がない。

ハイライトさん仕事して。頼む。

「つぐみも海くんも、もう高校生。男女の仲になってもおかしくない年頃だ」

「い、いやいや... 無いでしょう、普通に考えて。俺とつぐですよ?」

十年近く一緒にいて何もなかったんだ。

今更なにあるっていうんだ。

「ほう? つまりキミは、うちのつぐみには魅力がないと。そう言いたいんだね?」

「えっ、いや、ちが、そうじゃなくて——」

「今夜は騒がしい夜になりそうだねえ?」

あ、これ俺死んだわ。

? ? ? ? ?

「海くん、大丈夫?」

父親の恐怖を一身に浴び疲弊しきった俺を癒してくれるのは、聖女

のような慈悲の表情を浮かべるつぐだった。

お前のせいで死を覚悟したんだけどな。

いや、別につぐは何も悪くないんだけどさ。

「お父さんも、何もあんなに怖がらせなくていいのに…」

まあ、父親としてはいろいろと思うところがあるんだろう。

蘭。パパも過保護だし、俺のお父さんも姉ちゃんに対してはデレデレで異様に大事にしている。

やっぱ娘つてのは可愛いのかね？ どっちも娘からウザがられてるのは何とも言えないけど。

「ま、つぐ。パパも別に本気で俺を脅してたわけじゃないし」

今日俺だけを呼んだのは、別に俺を血祭りにあげるためじゃない。たまたま俺以外は用事があったからだそうだ。

そんでちようどいいから、ちよつと脅かしてみようと思ったそう。要するにただのお茶目なイタズラだ、とつぐ。パパは笑ってた。

アレは絶対に本気だったけどな。

「そういや、つぐはもう上がりなの？」

俺は甘い物の後はブラックコーヒーと決めている。そのコーヒーを注文する前に持ってきてくれたのがつぐだった。

そしてそのまま、自分の分のココアも用意して俺と同じ席に座っている。

「うん。ちよつとシールドの調子が悪いから買いに行きたいって言うたら、今日はもう上がっていいよってお父さんが」

「じゃあ今から楽器屋行くのか」

「うん。せつかくお仕事上げさせてもらったし、明日練習だしね」

ふーん。

「俺も一緒に行つていい？ 楽器屋」

「全然いいよ！ 何か買うものがあるの？」

「カポ欲しくて。つーか聞いてくれよつぐ。この前姉ちゃんにカポ持ってかれてさー。全然返ってこないでやんの。昔っからそうなんだ姉ちゃん。俺のおやつも盗るし、漫画も盗るし、反抗したら暴力を振るう。ジャイオンかよ」



「あはは… 姉弟って憧れるけど、大変って人も多いよね。香澄ちゃんとか沙綾ちゃんのところは楽しそうだけど…」

「そーいや香澄って妹がいるんだっけ？」

「山吹さんとはともかく、香澄が長女とか信じらんねえよな」

行動が末っ子のソレなんよ。

妹さんには会ったことないけど、香澄に負けず劣らずの自由人か、もしくはしつかり者の苦勞人だと思うね。

「あんまりそういうこと言っちゃダメだよ？」

「へいへーい」

全く、つぐは優しいな。普段の香澄を見てたらそういう反応だったくなるだろ。

優しいところはつぐパパの血だろうか？ いや、確かつぐママも優しかったな。

うーん、やっぱいいなあ羽沢家。

「俺、つぐが姉ちゃんが良かった」

「そんなこと言って。海くん、なんだかんだ言って希さんのこと好きでしょ？ ……。そ、そんな嫌そうな顔しなくても…」

死ぬほど嫌な顔をしてしまった。

仕方ない。魂に刻まれてるからな。

まあ確かに姉ちゃんのこと嫌いだ。普段は接しやすしいし、姉弟だけあって話も合う。

だが怖い。姉なるものは理不尽だ。あんなマジで山賊かジャ○アンだぞ。

あれだ。映画版になると妙に優しくなるじゃん、ジャ○アンって。あんな感じ。

うちの姉ちゃんにも「話しやすくたまに優しい姉ちゃん」と「傲慢不遜で暴力的な篡奪者」の二つの側面がある。割合的には四対六くらい。

その反動だと思うんだよなあ、俺が年上好きになったの。俺が小六の時にうちに遊びに来た姉ちゃんの友達が優しすぎて感動したのを覚えてる。もしかすると、あれが俺の初恋だったのかもしれない。

まあその人、高校卒業してすぐにどこぞのIT社長とデキ婚したけどな。今年も年賀状には元気なお子さんの写真が載ってたわ。

ま、そんな悪魔的失恋は置いといて。

「すぐ飲むわ。ちよつと待ってて」

「そんなに焦らなくて大丈夫だよ」

甘味後のコーヒーうめくくくく。

? ? ? ? ?

ホットコーヒーをがぶ飲みして無事口内を火傷した後。

俺はつぐと一緒にショッピングモールへ向かっていた。

一度江戸川楽器店に寄ったのだが、今日は休業日で閉まっていたので、こうしてショッピングモールまで足を運んでいる。

楽器屋にも休業日とかあるんだな。まああつちも人間だし、休みたいうこともあるか。

「そういや、つぐと二人でモール来るの初めてじゃね?」

二階にある楽器屋を目指し、エスカレーターに乗っている途中。ふと、そんな事を思った。

「そういえばそうかも。いつもはみんなと一緒にだもんね」

「あいつらと来ると絶対にフードコートに寄ることになるんだよな」

「あはは。確かに」

ひまりは甘いものを食べたがるし、巴はラーメンを食べたがるし、モカは座りたがる。蘭とつぐは基本意見がないからみんなに流されるし、俺に拒否権はない。拒否したところで気付いたらフードコートにいるんだよな。

「つーかこのモール来るの自体久々だわ。最後に来たのっていつだろ。夏に映画観に来た時以来?」

「そうなんだ。何を見に来たの?」

「ガン〇ム」

「あれ？ 海くんってガン○ム好きだったっけ？」

「嫌いじゃない、ってゆーか詳しくない。姉ちゃんに連れられてきたんだよ。なんか特典が貰えるから来いって」

二階のフロアに着き、エスカレーターを降りる。

楽器屋はわりと端っこの方にあるので、ここから更に歩きだ。まあ三分も歩けば着くけど。

そうだ。映画といえば。

「もうすぐスラ○ダンクの映画公開だな」

「バスケットボールのやつだよな？ ちよつと昔の」

「そ。一昨年だったっけか。姉ちゃんに勧められてアマ○ラでアニメ見たんだけど、これがまた面白くて。映画も観に行こうと思ってたんだ」

スポーツ系のやつってあんまり見ないんだけど、スラ○ダンクは面白かった。

当時の姉ちゃんの彼氏がバスケットで、その影響だったかな。

俺は水戸○平が推し。あいつバスケットじゃないけど。

『バスケがしたいです』と『あきらめたらそこで試合終了ですよ』は聞いたことあるかなあ」

「興味あったら見てみてよ。そんで一緒に映画観に行こ」

一人で観る映画も良いが、友人と観るのも大変良い。観たあとに感想とか言い合えるからな。

須田も五十嵐もバスケにはそこまで興味がないらしく、スラ○ダンクも観たことがないと言っていた。

一応勧めてみたが、返答は「暇があれば観てみる」とのこと。絶対観ないだろそれ。

「バスケットって私あんまり詳しくないんだけど、大丈夫かな？」

「大丈夫大丈夫。作中で詳しく説明してくれるし。主人公が初心者としてバスケットに入部するって設定だから」

そりゃバスケの知識があった方が楽しめるんだろうが、問題はないはずだ。

実際俺もバスケのルールとかトラベリングとダブドリくらいしか

知らなかったけど十分楽しめたし。

ただ、昔の漫画だからか、暴力的なシーンも多い。「バスケがしたいです」のどこなんて酷いもんだ。つぐは喧嘩とか嫌いだし、その辺をクリアできるかが唯一の問題だな。

「まあ無理のない範囲で。気に入ったら教えてちょよ」

「うん、分かった」

「巴にも勧めてみるか。」

あいつ、普段は少女漫画がメインだけど、熱血系も嫌いじゃないからな。

ちよつとだけわくわくしながら歩いてみると、楽器屋に着いた。

まず俺たちを出迎えるのは、壁一面のギター。その少し奥にベースもある。

「ワインレッドかつけ〜」

ワインレッドのレスポールが目がいく。

今回の目的はシールドとカポだが、楽器屋に来たらとりあえず楽器見ちやうよね。買う予定ないけど。

「ギターにもいろいろ種類あるよね」

「そうだな。とりあえず大きくはレスポールとテレキャス、あとストラトだな」

今俺が持っているのはレスポールで、比較的太めの音が出る種類のギターだ。

まあ本当に耳が肥えてなきや、その辺の細かい違いは分からない。生音ならまだしも、ギターはエフェクターをかませるし。

「テレキャスちよつと欲しいんだよな」

「やっぱり、音って結構違うものなの?」

「違うけど、分かるやつの方が少ないと思う。まあ九割自己満の世界だよ」

聞き手からしたらマジで違いなんか分かんねえよ。俺が満足すればそれでいい、の気持ちだ。

ギターを眺め、次にベースも眺めてみる。

ベースは正直まったく分からん。須田曰くパツシブだったりアク

タイプだったりっていうのがあるらしいけど、それもイマイチだ。確かアクティブの方が音が大きいんだっけ？　ならアクティブが正義だ。音が大きいんだから。

ベースを眺めてたら店員さんに声をかけられたが、「大丈夫です」と遠慮する。買う予定もないのに営業かけられたら俺にも店側にも利点ないし。

ササツと目的シールドとカポのものを買い、楽器屋を出る。

途中エフエクター売り場で心が踊ってしまったが、今は必要なエフエクターも金もないので泣く泣くスルーした。

エフエクターって一つ数万するのマジでどうかしてるよな。バンドマンとかただでさえ金ないのに。

「お、デイス○ユニオン。ごめんつぐ、ちよつと寄っていい？」

「うん、大丈夫だよ」

フラフラ歩いていると、見ると安心してしまう看板が目に入った。

吸い寄せられるように店舗に入る。

「さすが実家。落ち着く」

「実家じゃないよ？　海くんって時々変なこと言うよね」

実家のような安心感。

つぐに呆れられながらも物色を開始する。

うーん、いろいろ新譜入ってんなあ。お、ニツケ○バックの新譜もあんじゃん。まだ聴けてないんだよなこれ。

買うかどうか悩んでいると、向かいの棚で流れているMVを見たつぐが声をかけてきた。

「あの人達って、前に海くんが好きって言ってたアイドルバンドだったけ？」

「ん？」

言われて見ると、流れていたのはBroken By The Scream、通称BBOSのMVだった。

「あー、多分そう。つぐにも勧めた気がする」

アイドルバンドつづてもたくさんいるし、俺が好きって言ったグ

ループも多い。

ベ○メタをはじめ、P a s s C o d eとか、I R O N B U N N Yとか、仮○女子とか、エトセトラエトセトラ。

まあパスパレとか見ると、彼女らを「アイドルバンド」って言う方がいいかは微妙なところだけだな。

「ほんとに女の人が歌ってるの？ これ」

「そうだな。実際ライブ見に行ったけど、低音デスボお姉さんすごかった」

男でも腰を抜かすほどの低音グロウルをぶち込んでくるアイドルに、つぐが感心している。

分かる。最初ってそうなるよな。気付いたらクセになってっから。

「このMVを見る感じ、演奏は三人？ 海くんたちC a p l i b e r t eでできそうなのに、まだやってないんだ？」

「そうだなー。まあ演奏だけならやれないことはないけど、キーボいいないし。あとボーカルがな。デスボ二人必要だし……いや、須田がやれるか……？」

何度でも言うが、須田という人間は天才だ。

多少残念な部分もあるが、音楽の才能があることは間違いない。

そんな須田が、最近「俺デスボ出したんだよね」なんてことを言い出し、ちよつとしたシャウトは習得した。

なら俺が低音、須田が高音を捻り出せば、B B O Sをすることも不可能ではない……？

いや、あのベースを弾きながら歌わせるのは、いくら須田が天才だっけいってもちよつとと厳しいかな？ まあ大丈夫か。須田だし。というか須田より俺が厳しいな。やるならしっかり練習しなきゃ。

「このバンドってキーボードもいるの？」

「いるよ。長○憲治って人」

G L A S S T O Pのキーボードをやっている人なんだが、この人がなんでメタル系の楽曲やってんとか分かんないんだよな。

B B O Sで初めて知った人だけど、この人のB B O S以外での演奏はザ・Jポップって感じだし。

「なら、私、弾いてみてもいい?」

「え?」

つぐが? BBOSを?

…なんで?

「聴いてないから難しいかどうかも分からないけど、Afterglowとは違った感じの演奏だと思うし…私、もっと上手になりたいんだ」

「つぐは十分上手いと思うけど」

「ううん、全然だよ。燐子さんとか、有咲ちゃんとか、周り比べて、私は全然」

うーん… まあそう言われれば確かにそうなんだが…

「いや、比べる相手がおかしいだろ。特に白金さんなんて、マジで超高校級つーか、プロと比べても上位層だぞ」

市ヶ谷さんだって昔からピアノやってたんだろ? 確か音楽教室も通ってたんだっけ。

比較対象として間違っている。

それに。

「そもそも、他人と比べてどうこうってのは違うんじゃない? そりゃ上手い下手はあるけどさ。そいつがどれだけ真摯に音楽に向き合ってるか、どれだけ努力してきたか、つてのが一番大事だろ」

どれだけ演奏が下手つぴだとしても、音楽に対する想いとか、これまでの努力とか、そういうものは聞き手側にしっかり伝わるものだ。

その点、つぐは努力家だし、音楽に対しても真剣だ。

つぐ本人は「個性がない」と悩んでいるらしいけど、少なくとも本気でAfterglowのファンやってる奴らはつぐを高く評価している。

なんで分かるって?

俺がAfterglow応援団ファンクラブの団長会長だからだよ。

Afterglow結成の三日後に創った。今では団員数は八百を越えてきている。

ちなみに、応援団ファンクラブについてはAfterglowも認知している





ぶんぶん、という音が聞こえてきそうな形相で騒ぐひまり。  
ごめんで。

ところでお前、なんでそんなデカイパフェ食ってんの？ ダイエット始めるって昨日言ってたっけ？

「和太鼓を担いだ経験が無かったら海をここまで運べなかった。和太鼓に感謝だな！」

お前はいろいろと何言ってるの？

「二人とも、ありがとね。私だけじゃどうしようもなくて… ほら、海くんもお礼言ってる」

「あざーっす」

「もうっ、またそんなテキトーに言ってる！ ちゃんと言わなきゃダメだよ！」

溢れるつぐの母性<sup>ママ</sup>。

俺の周り母性持ってるやつ多すぎだろ。助かる。は？

「ところで、海たちはあそこで何やってたんだ？」

ラーメンを食べている巴からそんなことを聞かれる。

何をやってたか、要するにどういう経緯で俺が倒れるハメになったのか、ってことだろう。

説明に困るな。どう言えばいいんだ？ 俺の恥はできれば伝えない方向で。

つぐの方を見ると、つぐも回答に困っているのか「うーん…？」と首を傾げている。

こういう時はあれだ。嘘で乗り切ろう（最低）

「最高すぎる『音』にたくさん触れて昇天してた」

とっさに出た嘘が酷すぎワロスwww

これはさすがに無理があるか…？

「なるほどなー」

「もう、ほどほどにしときなよ？」

なんだお前ら、少しは疑えや！

俺が普段からそんな奇行ばっかりやってるみたいじゃねえか！

(やってる)

「そういうお前らは何やってたんだよ。今日は用事があったんだろ？」

「あれ？ 私たち、用事あるって海に言ったっけ？」

「つぐパパから聞いた。今日、新作スイーツの試食会だったのに、お前ら来なかったろ」

なるほどー、とひまりも巴も納得している。

巴はともかく、ひまりがつぐパパの新作スイーツ試食会を断るほどの用事だ。よっぽど大事な何かだったんだろう。

「アタシはちよつと町内会の手伝いでな。ほら、もうすぐ節分だろ？」なるほどな。

町内会の元気担当である巴は、節分みたいな子供たちが絡むイベントで特に重宝される。

そりゃ確かに大事な用事だわ。

「ひまりは？」

「私は薫先輩の演劇見に行ってた！ すつごくカッコよかった!!」

食欲を上回ったのは推しへの思いでした。

ひまりはやっぱりひまりだったか。

「え、何その目。もしかして嫉妬？」

「なわけあるか。呆れてんだよ」

どこに俺が嫉妬する要素があるってんだ。

「手伝いも終わって、ちよつと腹が減ったからラーメン食べようと思っただけ。それで近かったからモールに来たら、入口でひまりとばったり会ってさ」

ほーん。

「薫先輩が眩しすぎて叫んでたらお腹すいちゃって。りみと一緒にだったんだけど、なんか誠くんと会う予定があるとかで、巴に会う直前に別れちゃった」

ふーん。

「お、おい海。そのボールみたいなもの、どっから出したんだ…？」

「基本装備だ」

「物騒すぎるだろ… とうかそれで何する気だお前」

「須田とかいう幸せ者を祝いにな」

「祝うって言葉が一番似合わない道具だぞ、それ」

巴がドン引きしてる。

「さすがにそこまでやんないよ。ジョークジョーク」

物理的な攻撃はしない。

とりあえず牛込さんと二人でデートしてるところを写真に収めたいな。それをクラスでばらまいてやろう。魔女裁判さながらの制裁待ったナシだ。

俺は忘れてないからな。あいつが俺と氷川さんが付き合ってるって吹聴したことを。

あとおたえと山吹さんと市ヶ谷さんにも手を出してるとかなんとか好き勝手言ってるやがったのを。

俺は忘れてやらねえからな。

「ジョークでバールみたいなものを持ち歩いてるのかお前。怖いな」

巴のドン引きはまだ終わっていなかった。というかひまりもつぐも引いている。

けど、こっちはジョークでもなんでもないんだよな。

「このくらいは必要なんだ。自衛の為にも」

「自衛？ 過剰防衛すぎるだろ」

「馬鹿言え。こちとらネットで殺害予告出てるんだぞ」

「は？」

「え？」

巴とつぐが揃って首を傾げる中、ひまりは「あー…」と何か納得していた。

「二人は見てない？ 海のスレッド」

「う、ううん。見てないけど…」

「ていうか海のスレッドがあるのか？」

あるんだよねえ。なんでだろうねえ。

まあ俺は直接は見てないけど。俺スレの内容の一部は五十嵐が教えてくれている。その中に殺害予告があったってワケ。怖くておちおち寝てもいられない。

ま、本当にヤベーやつらは弦巻家がなんとかしてくれるだろうけど。

黒服さんたちに頭を下げて、いろいろと手を打ってもらった。いや、もらっている。

何をしているかは知らないが、五十嵐曰く、最近は俺への悪意が籠ったスレ、発言等は少なくなってきたらしい。黒服さんたちすごい。

でもそのせいでお嬢からの無茶ぶりを断れなくなったんだよな。まあ命の代償としたら安いもんだ。

「私、たまに見て海の悪口書いてる人たちに反論してるんだけど」「おい待て」

こいつ今何だった？

「え？ お礼なら大丈夫だよ！ 私のためにやってるから！」

なんだこいつ（微ぎレ）

ネット民に反論するとか、火に油どころの話じゃねえぞ。

「ひまり。お前、今後俺スレに関わるのは一切やめてくれ」

「え、なんで？ だって海の悪口言われるとか、頭にくるじゃん！」

なんで俺よりこいつの方が怒ってんだ？

「気持ちには分かった。ありがとう。でも違うんだ。頼むからもうやめてくれ」

「で、でも…」

「ガチで。ほんとマジで、頼むから」

「う、うん… 海がそこまで言うなら…」

言いたいやつには言わせとけばいいんだよ。

過激なやつへの対処は弦巻家がしてくれるし。

「けど、ありがとなひまり。正直ありがた迷惑だけど、嬉しいは嬉しいよ」

「一言余計じゃない？」

真実だからな。

「ひまりちゃん、そこは海くんの照れ隠しだよ」

「なるほどー」

「違うから」

「海は素直じゃないからな。蘭と同じで」

「確かに〜!」

「違えつつてんだろ。あのツンデレと一緒にすんな」

「え? 海って蘭並のツンデレじゃん」

「そうだな。海はツンデレだ」

「でもデレ成分は蘭ちゃんより多いかも?」

「そりやつぐが相手だからだろ」

「なんだこいつら、好き勝手言いやがって。」

「お、おいなんだよひまり、その目はなんだ。ハイライトさん職務放棄してるぞ、すぐ呼び戻してこい。え、てか何、その固く握られた拳は... や、やめろ、俺は女の子に殴られて悦ぶ趣味はないんだ!」

「話題を逸らそう。そうだ、そうしよう!」

「と、ところでつぐ、さっきの話だけだ」

「さっき? 私がお姉ちゃんなら良かったのに、って海くんが言った話のこと?」

「違う。前すぎ」

「一緒に映画行こうって、海くん誘われた話の方?」

「違うよ!」

「オイオイどうしたよつぐみさんよお。なんでそんなこと言うんだよオ。」

「そんなこと言ったらひまりが怒るだろ! こいつ、遊びに誘われなかったって知ったら不機嫌になるんだから!」

「でもこの前つぐ、蘭、モカで遊び行つたって話を聞いた時は「そうなんだ! どこ行ってきたの?」って普通にしてたな。なんでだ?」

「BBOSやろうって話。やるならクリーンボーカルも二人欲しいから、ひまりと巴に頼もうぜ」

「とにかく今は話題変更だ。」

「BBOSをやりたい気持ちはあるしな。」

「BBOSってアレ? 夏頃に海がどハマりしてたアイドルの「そう」」

ひまりさんの右拳が解かれた。良かった。良かった。てか言うほどハマりしてたかな？

してたな。

「いいと思う！ ひまりちゃんや巴ちゃんと一緒にできるなら嬉しいな」

つぐも嬉しそうだ。

良かった良かった。

「演奏をカプリとつぐでやるから、歌をお願いしたい」

「え、私も巴もデスボイスなんて出せないけど」

「そっちは俺と須田がやるから。クリーンボーカルが欲しいんだよ」

「っ！かひまりや巴の喉からデスボが出てきたら腰抜かすわ。」

その後惚れると思う。

「あ、なるほど。そっちなら私はなんとか。巴は？」

「ん？ アタシも大丈夫だぞ！ ボーカルだけでドラム叩かないのはちよつとムズムズしそうだけどな」

ボーカル二人が釣れた。

ヨシ!!!

須田と五十嵐は… まあ大丈夫だろ。五十嵐は文句言うかもだけど、なんだかんだ完璧に仕上げてくるしな。

「そんじゃあみんな、つぐるぞ〜！ えいえい」

「おー！」

「二人とも私の時は絶対言ってくれないの!?!」

それはほら、様式美だから。

是非もないよネ。

何であれ、やるからには負けちやダメ

とある土曜日。

俺はアルバイトに明け暮れていた。

「関口くん。ちよつと配達デリバリーが忙しくなってきたから、関口くんも配達に行つてきてくれる?」

「うーっす」

店長に言われ、揚げ場を後輩(歳上)に任せて、裏スタツフルームに戻つてから防寒着を着る。

今日は快晴だけど、風が冷たいし、バイクは普通に寒いんだよな。早く春になつてほしい。

手袋とネックウオーマーも装着し、覚悟を決めてスタツフルームを出る。

「じゃあコレとコレとコレ、お願いね」

「はい」

渡された商品を手に外へ出て、バイク置き場まで向かう。

「あゝ… さむ」

悴かじかむ手で社用スマホを操作し、配達場所を確認する。

ちよつと遠いな。三件持ちで、帰つてくるまで三十分はかかるか? 頭の中で出来るだけ信号の無い順路を考えながら、バイクに跨る。

「… 関口くん?」

いざ出発とエンジンをかけたところで、名前を呼ばれた。

声のした方を向いてみると、そこには氷川さんの姿が。

「あ、氷川さん。こんちやっす」

「はい、こんにちは… ではなく。何をしていますか?」

「え? いや、普通に仕事ですけど」

制服着てるんだから… あ、いや、制服は今見えないのか。防寒着着てるから。

でも店のロゴが入ったバイクに乗ってるんだから、仕事でだつていうのは分かりそうなものだけだな。

「それは見れば分かります。そうではなく、何故バイクに乗っているのか、ということですよ！」

何をそんなに怒って… あつ。

「我が校では在学中の免許取得を原則禁止としているはずですよ！ 貴方、免許を取ったの!？」

そうだった。そういやダメじゃん、氷川さんの前でバイク乗っちゃ。

弦巻家を間に挟んだ学校側との交渉（）で免許取得OKにしてもらう話は付いているが、正式な施行は来年度からだし、校則が変更になるって公表されるのももう少し先だった。

「氷川さん」

「なんです、開き直りがあれば聞きますが」

開き直りて。

「いつも思ってたんですけど、私服、素敵ですよ」

「……はっ。」

「制服とかバンド衣装でのスカートもいいですけど、今日みたいなパンツもすごく似合うと思います。やっぱり氷川さんには青系統ですよ」

「な！ 何を言ってる…！」

よし、いいぞ。

いい感じに動揺している。

氷川さんは褒められることにあまり耐性がないみたいだな。日菜さんと比較して卑屈になつてるところあるし。褒め殺しは成功だ。まあ私服が素敵なことは事実なだけだな。

もつといくぞ。

「あと白のシャツも、フリルが付いてて可愛いです。控えめなのが良いですね。アウターも大人っぽいし、あとマフラーで後ろ髪がモフッ



てなってるの、俺的に癖へきです」

「そ、そうですか…?」

「そうですね。今日はポテトを食べに?」

「え、ええまあ、そうですねが…」

「Lサイズが安くなってるのでぜひ。それじゃあ自分仕事戻るんで、ごゆっくり」

言って、俺はバイクを走らせる。

数秒遅れて「あっ! ま、待ちなさい!」という氷川さんの声が聞こえてくるが、待てと言われて待つ罪人がどこにいるのかという話で。

フハハハハ! 生身でバイクには追いつけまい! 逃げるが勝ちだ!

…… 帰ってきたらたくさん怒られるんだろうなあ。どーしよ。憂鬱だ。このままどつか遠くに逃げちやおつかな。

? ? ? ? ?

まあ、当たり前のように逃げられるわけもなく。

「アルバイトが終わったら私のところまでくるように」

配達から帰ってきた俺は、ポテトを頬張っていた氷川さんから呼び出しを受けた。

憂鬱すぎる。仕事が終わったら説教が待っているんだ。

そう思っって非常に落ち込んだまま仕事をしていたら、松原さんに心配された。優しすぎる。一緒に着いてきてくれないかな。そしたら氷川さんもそこまで怒らないと思うんだ。

「ごめんね。私、この後ハロハピの定例会があつて…」  
泣いた。

仕事終わり。

結局俺は一人で氷川さんのもとに向かう。

足が重い。こんな気持ちは中学の時に悪ぶって学校をサボったのがお母さんにバレた時以来だ。

「お、お待たせしました・・・」

背中を丸めつつ、氷川さんの待つ席の前に立つ。

てかこの人、ずっと店にいたな。あれから三時間は経ってるんだが。延々とポテトを食べていた。

なんでそんなにポテト食ってんのにこんなに痩せてんだこの人？  
どんな体質してるんだろう。ひまりが聞いたら泣くぞ。

いや、実は着痩せしてるだけとか？

・・・これ以上は止めておこう。乙女ってだけで扱える謎パワーで心を読まれた挙句、丁寧に殺されそうだ。

「お疲れ様です。どうぞ、座ってください」

言われ、向かいの席に座る。

ここだけ生徒指導室みたいな雰囲気があるな。ファストフード店なのに。

「早速本題です。関口くん、あなた免許を取ったわね？」

「い、いえ、取ってません」

とりあえず誤魔化してみるか。

もしかしたら奇跡が起こるかもしれない。

「交差点で左折する時は？」

「巻き込み確認」

・・・ あっ！

「免許を取っているわね？」

「取ってません」

い、いや、まだ大丈夫だ。

無免許でそのくらい知っていてもおかしくない。

「バイクは重いと聞きます。車体が倒れた時、女の私でも起こせるかしら」

「大丈夫ですよ。腰を落として車体にしっかりと体を密着させれば、脚

の力だけで簡単に引き起こせます」

・・・ あっ！

「やっぱり免許を取っているわね？」

「取ってません」

ズルいぞ！

これが風紀委員のやり方か！

「嘘はやめなさい、佐藤」

「う・・・ は、はい・・・ ごめんなさい・・・」

・・・ いや、佐藤って誰だよ。

「いつから持っているの？ 免許」

ポテトを一本食べて一息ついた氷川さんが、再び聞いてくる。

どうでもいいけど、氷川さんにとってポテトってコーヒーとかお茶みたいな存在なのか？

「えと・・・ 年末から・・・」

「法律は守っていたのね。ひとまずは安心しました」

法を犯していると思われるのか。

失礼な。俺は従順な国民だ。犯罪なんて、落ちてる金を拾って自分の財布に入れる程度しか犯してないぞ。

「では校則違反ということだ。その免許は没収します」

なんの権限があつて!?

さすがにそれは越権行為だろ。一般高の風紀委員にそんな権力があつてたまるか。

「いや、話を聞いてくださいよ姉御」

「誰が姉御ですか！」

あんただよ。

「これには非常に綿密に組まれた抜け道があつてですね」

「抜け道と言っている時点でダメでしょう」

確かに（納得）

「学校側とは話が付いてるんです。そのうち免許取得OKになる予定なんですよ」

「・・・ は？」

「証拠が…… あ、これです」  
スマホを取り出し、ボイスメモを流し始める。

海『学園長！ P T A長！ 自動車免許の取得を許可してください！』

P T A長『ダメです』

学園長『P T A長がダメって言うならダメ』

海『… そんなことを言ってもいいんですか？』

P T A&学園長『？』

海『こつちには弦巻家がついてるんですよ？』

P T A&学園長『!!』

海『何を隠そう！ 俺は弦巻家と懇意だ！』

海『ほらほらどうします？ 認めますか？ 認めますね？』

P T A&学園長『ぐぬぬ……!!』

海『弦巻家からの出資がひとつ、ふた……』

P T A長『！ …… 仕方ありません。許可しましょう』

学園長『P T A長がそういうなら』

海『やったぜ』

ふっ。弦巻家<sup>虎</sup>の威は偉大だったぜ。

「脅しではないですか！」

「違います。説得です」

説得の真髄は力<sup>パワー</sup>だ。

やはり力は全てを解決する。俺も力持ちになりたい。

「それに実際、免許が解禁されたら助かる人は多いと思いますよ？  
特に俺らの学年は」

「… それはなぜ？」

いい質問だ。

「俺らの代から、花咲川は共学になりましたよね？」

「ええ」

「男共がこぞって受験、入学してきましたよね？」

「そうね」

「男共は夢を見たんですよ。元女子校共学化の第一世代になれることに」

「はあ…： そうなんですか？」

そうなんですよ。

「その結果、うちの男共は遠方から通っているやつも少なくありません。俺の知ってる中で、一番遠いやつは成田から来てます」

「は？」

さすがの氷川さんも呆れてるな。

俺もソウナノ。男ってバカだよな。

「電車だとバカ遠い。そこでバイクです。高校付近の狭い道でも、バイクならするする抜けられるので、だいぶ時間短縮になります」

まあ嘘だけど。

電車がいない、ないし本数が少ない田舎ならいざ知らず、成田から都内っていう長距離なら確実に電車の方が早い。

けど、こうやって自信たっぷり言うことで相手に「本当にそうなのでは？」と思わせることができる。

現に、氷川さんも「うーん、確かに…：？」と少し納得し始めている。

もうひと押しだな。

「さらに！ 今ならなんと——」

「おねーちゃんん!!!」

「きゃっ!?!」

突如横から飛び込んできた水色の物体が氷川さんを急襲する。

誰が物理的に押せつつあったよ。つーか押しすぎだバカ。氷川さん、椅子から落ちちやっただろ。

「もー！ おねーちゃん帰ってくるの遅いよー！ 迎えに来ちやっただろ！」

元気いっばいに、水色の物体——日菜さんが氷川さんに頬擦りして感情を表現する。

百合じゃん。いいぞ、もつとやれ。

「ひ、日菜?! 静かにしなさい、あと離れなさい! 公共の場よ!」

公共の場じやなきや触れ合って良い... ってコト?! うーん、これは上質な百合の匂い。供給ありがとうございます。

「あれ? 海くんじゃん。何幸せそうな顔してるの?」

俺の存在に今気付いたのか。本当にお姉ちゃん＊川さんのことにしか興味がないんだろうなあ。だがそれでいい。

「樂園エデンを見ることができたので」

「アハ! 相変わらずキモいこと言ってる〜!」

最近俺のメンタルも強くなってきた。

ちよつとくらい日菜さんに罵られたからって落ち込んだりしないぞ。むしろ心地良く感じるくらいだ(才能開花)

「ところで、お姉ちゃんと二人で何の話してたの?」

「え? ああ、えつと... ——っ!」

突然悪寒に襲われ、大きな身震いをしてしまう。

え、何、殺気?

日菜さんからじゃない。いやまあ日菜さんからも多少は感じるが、それとは別に複数のものを感じる。

チラつと店内を見回してみると、何人かがこちらを睨むように見ていた。

ストローを噛んでいる人、ハンバーガーを握り潰す人、指をバキバキ鳴らしている人。

突然なんなんだと思ひ困惑する俺だったが、すぐに原因に思い至る。

「ねえねえ、何話してたの〜?」

「日菜、とりあえず抱きつくのはやめなさい」

「え〜? なんぞ?」

目の前に広がる樂園。

これは「百合」と呼ばれる文化遺産であり、純金にも勝る価値を持っている。当然、傷付けることは許されていない。ましてや不純物男を交ぜるなど、極刑すら生温い罰で裁かれて然るべき。

「……………」

スツ、と身を引く。

殺気が少しだけ柔らかくなった。

日菜さんはお姉ちゃん氷川さんにしか興味がないし、氷川さんは日菜さんの相手で俺への注意は散漫になっている。

やはり俺じゃあ（百合の世界に介入するには）役不足だったよう  
だぜ！（男なので）

ここは明日また改めて出直すとすつか！

関口はクールに去るぜ。

? ? ? ? ?

つてことで翌日。

放課後、俺は生徒会室に呼び出されていた。

「なにも校内放送で呼び出すことないでしょう…。あ、お茶ありがとうございます」

「いえ」

生徒会長である鰐部先輩に温かいお茶を入れてもらうという贅沢を甘受しつつ、若干の不満を漏らしてみる。

そう。今日俺は、突然校内放送で名指し呼び出しを食らったのだ。しかも学年クラスまでしっかり名言して、だ。

普段からアイドルと行動したり、プロのアーティストのサポートをやったり、弦巻家とつるんだり、と色々目立ってしまっている自覚はあるが、こういう「明らかに悪いことしただろ」みたいな注目は浴びたくなかった。

いや、確かに俺が悪いのかもしれないが。

「そうしなければ逃げるでしょう、あなたは」

「いや、逃げないっすよ」

「昨日は逃げたでしよう?」

「クールに去っただけです」

「同じことよ」

違うもん。

落ち込んだようにしゅんとして見せると、ちよつとだけアワアワした氷川さんが見れた。可愛い。

面白いからもう少しだけ落ち込んだフリをしておこうと思ったところで、生徒会長から大きめな咳払いが一つ。

「生徒会室は痴話喧嘩イチヤコラするための場所ではないのですが」

「な——ッ!」

お、氷川さんが茹で上がった。この人本当に年上か? 可愛いなあ。

「ちつ、違いますっ! 私と彼は付き合ってなんていませんっ!」

慌てて否定に入る氷川さんさん。そりやそうだ。だって本当に付き合っていないんだから。俺なんか氷川さんと付き合うとか烏滸がましい。

けどまあ、それはそれとして。

「え... いや、そんな全力で否定しなくてもいいじゃないですか...」  
「えっ」

嘘泣き... はできないので、目一杯消沈した表情を作る。

冷静に考えれば『付き合ってもいないのに妙なことを言い出す面倒な奴』なのだが、氷川さんはドがつくほどの生真面目さんだ。

一瞬困惑したあと「いや違うんですこれは...!」とか言い出して、目に見えて焦り散らしている。

ホントに面白いなあ、この人。

「... 氷川さん。あなた、彼に遊ばれてるわよ」  
「!?!」

鰐部先輩が呆れながら氷川さんへと真実を告げる。ここが引き際ってことか。

氷川さんを見れば、握った拳が震えている。これ以上はヤバか——



「かつ、彼はそんなことをする人ではありませんっ！」

「!？」

なんだなんだ、どうしたどうした。

怒りでどうとうおかしくなっちゃったの？

「彼は確かにバカなことを言いますし」

うっ

「よく奇行に走りますし」

ぐえっ

「学校のルールも守れないダメな子ですが！」

ピッ

「根はいい子です！ 女性を弄ぶだなんて、そんなことをするような人間ではありません！」

「…え、つと…何か勘違いしてる…？」

意味不明で唐突なオーバーキルを食らって膝をついた俺と違い、鰐部先輩は冷静に、かつ呆れて氷川さんの勘違いを指摘していた。

つまりなんだ。氷川さんは、俺が鰐部先輩に「お前は女を弄ぶクズ男だ」って言われたと思っただけで怒ってくれてるってこと？

何それ嬉しい。けどなんでそんな結論に行き着いちゃった？ あとなんかお母さんみたいな言い方が気になる。

「ですよ、関口くん！」

訴えかけるような目で見てくる氷川さん。鰐部先輩の言葉は耳に入っていないらしい。この人もたまたまに結構な暴走列車になるよな。日菜さんとの血の繋がりを感ずるわ。

さて、ここでとある問題が出てくる。

それは「俺が女を弄んでいる」ということが、あながち間違いつてわけでもないことだ。

いや、別に色々な女の人を引つ掛けて何股もかけてるとかではなく、氷川さん単体を弄んでいる。

弄ぶっていうと聞こえが悪いな。氷川さんをからかって遊んでいることを「弄んでいる」と表現され、そこを否定はできないって感じだ。

けど、ここで「いや俺は氷川さんのこと弄んでますよ」なんて言うてみる。とうとう話の収集がつかなくなる。それはめんどくさい。

「…オレ、イイコ」

「ほらー」

「…もう好きにしてください」

とりあえず氷川さんには三日ほど仕事を休んでもらおう。

俺と鰐部さんで話して、そういうことになった。

「それはそれとして、本題に入りますが」

近所のコンビニまで甘いものを買いに走り、氷川さんに献上した後。

温かいココアとチロルチョコを食べて落ち着いたらしい氷川さんは、改めて俺の前に座った。

「あなたの運転免許取得に関する話の続きを——」

「ああ。それなら昨日校長から通達がありましたよ。運転免許の取得を全面的に認める、と」

書類を捌いていた鰐部先輩が、書類から顔を上げることなくそう言った。

一瞬の沈黙。突然の情報を処理しきれていないのか、氷川さんは固まってしまった。

コツ、とハンコを押す音が生徒会室に響いたところで、氷川さんの意識が戻ってくる。

「い、いえ…でも関口くんは以前から免許を——」

「それも問題ありません。現時点で取得している者には反省文を書かせるように、とのことです。元々、あつてないような校則ですからね。校則を無視して免許を取る人達は多かったですよ。まあさすがにお咎め無しとはいきませんが、そこまで重い罰を与える必要もないだろう、との判断でしょう」

その他、通学に使用する場合には申請が必要なこと。事故を起こしても学校側は一切の責任を持たないことなど細々としたことはいく

つかあるらしいが、今は「自動車免許の取得が解禁された」ということが分かれば良い。

氷川さんが再度固まる。

まあ、生真面目な人だからなあ。校則違反者に対する、学校側のだいぶ緩い対処に思うところがあるんだろう。

だが、古いルールに縛られてばかりでは進化は望めない。組織には改革が必要なのだ。要するに「とりあえず言ってみよう」の精神は大い事、ということ。

『校則を塗り替えた男』… ふふつ、どこかのタイミングで誰かに自慢してみよう。後輩とかに。

「ふっ。弦巻家の権力は世界一イイ!!」

「くっ…!」

「うるさいですよ関口くん」

鰐部先輩に怒られちった。今のは俺が悪い。

勝ち誇り、俺は席を立つ。これからバイトなのだ。胸を張って配達業務に勤しむとしようじゃないか!

「ああ、そうだ。関口くん。それから氷川さんも」

「はい?」

「なんででしょうか」

悔しそうに俺を見てくる氷川さんへ全力の笑顔を向けていると、鰐部先輩から呼び止められた。

ところでなんで氷川さんはそんなに悔しそうなの? 俺を叱れなかったから?

「お二人に… あ、いえ。CapliberteとRoseliaに、グリグリ主催ライブへの出演依頼をしたいのですが」

? ? ? ? ?

翌日。

昼休み。

教室の一角で机を連結させ、ポピパとカプリ、あと澤田さんという

五十嵐の彼女

結構な大所帯で昼ご飯を食べていた。

「あ、そっぴやライブの出演依頼受けた。グリグリの主催ライブ」  
うちのタコさんウィンナーと市ヶ谷家の卵焼きを物々交換しながら、俺は須田と五十嵐に言う。

あ、こらおたええ！ ハンバーグ取るな返せ！

「おっけ。来週とか？」

おたえとの激闘の末、ハンバーグの代わりにブロッコリーが俺の弁当箱の中に放り込まれる。

敗北の味を噛み締めていたところで、須田が軽い調子で返してきた。

「お前、最近毒されすぎだぞ。普通ライブの出演依頼って二、三ヶ月前くらいにはしとくもんなんだからな」

「けど俺ら、別に問題なくライブできてるじゃん」

いや、問題が何も無いわけじゃないんだけどな？

けど確かに、毎回なんだかんだで何とかしてしまう。してしまうから「Capliberteはギリギリの依頼になっても大丈夫」とか言われるんだ。

一回大きな失敗をしないと学ばないんだろうな。

まあそれはともかく。

「今回のライブは大体一ヶ月半後。三月の頭にやるらしい」

「おー。良心的な期間じゃん」

タップパーいっぱい詰め込まれた白米をかき込んだ五十嵐が、感心したように言う。

こいつも手遅れだったか。

この誘いを受けた時、鰐部先輩「少し急な話で申し訳ないですが……」つってたんだぞ。正直俺も全然余裕のある期間だと思ってたけど、世間一般じゃ一ヶ月半前でも遅いくらいなんだよ。

いや、できるできないの話じゃなく、普通に礼儀として。

数日前とかに突然連絡してくるまりなさんCIRCLEがイカれてるんだ。

「それ、私たちも出るよー」

香澄が元気に手を挙げて発表してきた。

どうでもいいけどお前口の中のもんちゃんど飲み込んでから話せ。

「香澄、お前何回言わせる気だ？ 口の中にもものがある時に喋るな。」

口の中のもんが飛ぶだろ」

「うっ… ああ。ごめんなさい有咲ママ」

「誰がママだ!!」

こいつら、いつも楽しそうでいいなあ。

「ポピパが出るのは聞いている。あと出るのがアフグロとハロハピ、返事待ちが俺ら、Roselia、パスパレらしいな」

完全に身内フェスだ。

「俺らも出るって返事していいよな？」

「おう」

「大丈夫」

一応二人に確認してみるが、二人とも快諾だった。

さっそく鰐部先輩に連絡しておこう。

「ところでポピパ。お前らに相談があるんだが」

? ? ? ? ?

放課後。

今日はバイトも無く、バンドも無く、友人との予定も無い、完全のオフの日だ。

最近はこういう日がなかった。常に何かしらの用事が入っているのは嬉しい反面、少し疲れてしまうこともある。

今日くらいは大人しく家に帰って、暖かい部屋で年末年始に撮り溜めたテレビを見ながらギターでも弾くか。

そんなことをぼんやり考えながら昇降口で靴を履き替えていると、少し前に見知った背中を見つめる。

「氷川さん。お疲れ様です」

少し大股で歩いてその背中に追いつき、声をかけた。

俺の声に驚いたのか、氷川さんは若干肩を跳ねさせてから振り向く。

「お疲れ様です。…… おや、今日は一人ですか？」

「そつす。年がら年中誰かと一緒じゃないつすよ」

どっちかかっていうと陰キャ側だしな。

本来人と関わるのってそんなに得意じゃないんだ。音楽の話ができる人は除くけど。

「そうですか？ 基本誰かと一緒にいるイメージですが。特に女子と」

「あははは面白い冗談ですね」

「いえ、冗談でも何でもなく」

そんなわけあるめえ。

昨日はバイト帰りに丸山さんに捕まってカラオケに行つて。

一昨日はバイト終わりに氷川さんから逃げた後ひまりや巴と飯食いに行つて。

その前はおたえと楽器屋行つて。

そのまた前は放課後松原さんとカフェ巡りして。

…… いや、女子しかいねえなあ。

なんだ俺。リア充か？

「はあ。今日の獲物は私ですか？ 節操がないですね、このバンドマン」

「はっ？ えっ、いやっ、ち、違うつすよ!?!」

「冗談です」

キレッキレすぎるだろ…。 血圧上がった気がする。

「今日はアルバイトやバンドの方は？」

鼻から息を深く吸って高鳴る鼓動を抑えていると、氷川さんが聞いてきた。

「今日は何にも予定無しつすね。直帰します」

「おや、珍しい」

そうかなあ。

(最近の放課後を回想中)

そうかも。

「氷川さんは？」

「私も直帰です。駅まで一緒に帰りますか？」

「え、」

何それ、畏？

ここで「是非！」なんて返した日には「やっぱり節操のない人なんですね」とか言われそう。

かと言って断るというのも失礼な気がするし、何より氷川さんと一緒に帰ることは嫌じゃない。

一体どう答えるのが正解なんだ…！

やはりNOだろうか。冗談だったとはいえ「節操がない」「バンドマン」と二つも悪口を言われているのだ。いや、バンドマンは悪口じゃないけど。

うん。少し考えたが、一旦柔らかく断って

「嫌ですか？」

「ご一緒しますアすー！」

女性のお誘いを断るなんて男じゃねえよなあ!?

? ? ? ? ?

冷たく、そして透き通った空気を肺に入れる。そこから吐き出す息は白く、暫く漂った後に溶けていった。

迎春だなんて言うけれど、当たり前のように一月は寒い。悴む手を擦り温める。

「俺の手袋使いますか？」

隣を歩く男の子、関口くんが黒い手袋を差し出してくる。

手袋を渡される、という経験が母親以外に無かったため、私はそれを受け取る前に一瞬固まってしまった。

「…あ。いや、ちゃんと昨日洗濯したばつかで今朝も使っていないやっなんで全然汚くないというか嫌なら全然大丈夫なんすけど」

それを変に解釈したのか、関口くんは焦ったように、若干早口で弁解のようなものをしてくる。

そこが可愛らしい、と思う私は、随分と彼に絆されてしまったのだ

ろうか。

「いえ、そこは気にしていませんよ。関口くんは使わないんですか？」

「俺は大丈夫なんで」

そう言われると、断るのも悪い。

「では、ありがたく使わせてもらうわね。ありがとうございます」

手袋を受け取り、手にはめる。とても温かい。

と、その瞬間、私のスマホが鳴った。

LINEの通知で、画面を見ると相手は日菜だ。今日は仕事だと言っていたが、早めに終わったので今から一緒に帰れるか、という連絡だ。

「日菜さんからですか？」

「他人のスマホを盗み見るのはマナー違反ですよ」

「あ、いや、ちよつと目に入っちゃって… すいません」

まあ、私だって他人のスマホの画面が目に入ってしまうことくらいある。

こちらの不注意、相手の不可抗力。こんなことにまで腹を立てるほど、私は余裕がないわけではない。

「日菜から『今仕事が終わったから一緒に帰ろう』という連絡です」

日菜は今東京駅の方にいるらしい。

今から合流するのでは、お互い少し面倒な動きをすることになるだろう。『もう学校を出て暫く歩いたので、一緒には帰れない』と返し、仕事を終えてきた日菜へ劳いの言葉も送っておく。

すぐに返信がきたが、どうせ文句の言葉が書かれているだけなので、これに対する返信はしなくても良いだろう。

「本当に仲が良いですね、氷川さんと日菜さん」

感心したように言う関口くん。

このような姉妹になれたのはごく最近で、姉妹仲修復に至る私の心境の変化には当時の関口くんの言葉などが少なからず関与しているのだが…… それよりも。

「前から思っていたのだけれど、関口くんは日菜のことを名前で呼ぶのね。私のことはいつまでも苗字なのに」



「えっ」

実際に気になっていたことだ。

日菜だけじゃない。湊さんや今井さん、宇田川さんのことも名前で呼ぶ。この扱いの差のようなものは一体なんなのだろうか？

「いや、日菜さんは、えつと、苗字で呼ぶとお姉ちゃん和被って分からないから名前で呼べて言われて、その」

焦っているのが目に見えて分かる。

普段は飄々としていて、余裕ぶって、年上の私をからかうことすらある彼だが、こういう一面も持っていると思えると分かると、途端に「ああ、この子も年下の男の子なんだな」と思える。

「日菜のことを名前で呼ぶなら、私のことも名前で呼ぶべきなのではないかしら。どちらも『氷川』なのだから」

たかが呼び方、されど呼び方。

些細なことだと分かつてはいるが、それ一つで目に見えない「壁」を感じてしまう。

彼とはそれなりの仲だ。

喧嘩するほど仲が良い… というわけではないが、基本的に人見知りで他人を尊重する彼がわざわざからかってくるくらいには仲が良いと自負している。

腹が立つこともあれば呆れるようなことも多いが、ギターでは教わることも多いし、私や Roselia が困っている時などの頼もしさと言ったら、本当に年下なのか分からなくなるほど。

そんな彼との間に、ありもしない「壁」を感じるのが嫌だった。それに、

「日菜は良くて、私は駄目なんですか？」

仲が修復されたとはいえ、日菜に負けるといいうのも嫌だった。

いや、別に勝ち負けのある話ではないのだが、なんとなく、あつちは名前呼びで自分だけ苗字呼びなのは負けた気がする。

「いや、駄目ってことは…」

日菜だけじゃない。

湊さんにも、今井さんにも、宇田川さんにも。

何も競うようなものでもないのに、なんとなく、負けている気がして、嫌だった。

「この際です。今後は私のことも名前で呼んでください。紗夜、と」

「あいや、さすがに呼び捨ては…」

「そこまでは求めません」

今はまだ。

「さん付けでも、先輩付けでも。名前で呼んで欲しいんです。駄目ですか？」

… 思ったよりも大胆なことを言っているんじゃないだろうか、私は。

こんな風に言う予定じゃなかった。もっとう、自然に。さりげなく名前呼びをしてもらう方向に運ぶつもりだったのに、どうしてこうなった。

「いや、駄目とかじゃ全然、えと、はい……」

けどまあ、これはこれで良かったのかもしれない。

キョドる、というのかしら。落ち着きの無い様子でオロオロとしている関口くんを見るのは、少し新鮮で面白い。

熱くなる頬と、ニヤけてしまう口を、マフラーで隠す。

暫く関口くんを観察していたが、十秒ほどして、彼は意を決した様子でこちらを見たあと、すぐに地面に視線を落とし、躊躇い気味に口を開く。

「……… さ、紗夜……… さん………」

絞り出した声。少し震えているのは、寒さとはまた違う理由があるのだろう。

「はい。海くん」

相手に名前で呼ばせる以上、こちらも相応の対価を支払うのが世の習わし。

家族以外の人を名前で呼ぶのなんていつぶりだろう。そんなことを頭の片隅で考えながら、私は彼の名前を口にした。

彼の頬が紅潮していくのが分かる。なんとも可愛らしい反応だ。

少し苛めてみたくなる。

「こうして『名前を呼び合う』という行為に特別な雰囲気を持たせることで女の子を誑かしてきたのですね。このバンドマン」

「それはさすがにあまりでは!?!」

赤かった顔を途端に青くさせ、こちらに抗議してくる関。いえ、海くん。

彼の言う通り、私の言い分はあまりに酷い。

だが、いつも悠然としている彼が慌てる姿は、見ていてとても気分が良い。

「ふふっ。冗談です」

彼との関係は心地が良い。

腹が立つし、呆れることも多々あるが、それを考慮してもプラスになるほど、彼の存在は大きなものだ。

一緒にいると心が安らぐ。他人と比べて負けていると「壁」を感じることに不快感がある。

…… ああ、なるほど。

そうか、これが。この感情こそが――

## 受験期前半は団体戦、後半はバトルロイヤル

二月になり、初めての土曜日。

「おー、寒」

極暖のヒートテック、裏起毛のパーカー、保温性の高いアウター。下にはこれまた裏起毛のズボンという完全装備でもなお寒い。

大寒を過ぎ、あとは温かな春を待つだけ。

夏と冬どちらが好きかと聞かれれば夏だと即答する俺としては、早く暖かくなつて欲しいところだ。こうも寒いと命の危機を感じる。地球温暖化とやらはどこに行つてしまったんだ。

さむさむ言いながら駆け込んだのは、羽沢珈琲店。

今日は幼馴染ズに呼び出されたわけでも、つぐパパの節分限定スイーツを食べにきたわけでもない。

なんと珍しく、五十嵐に呼び出されたのである。

「いらつしやいませ。おや、海くん。今日はつぐみはいないよ？ A

fter glowの練習とか言つてさつき出ていったけど」

店に入るなり、つぐパパがそう教えてくれた。

「こんちやっす。いや、今日はつぐに会いに来たわけじゃなくて…」

「おい関口く。こつち」

奥の席から声がかけられる。

見ると、いつも俺らが特等席にしている窓際の席で五十嵐が手を挙げていた。

「今日はいつらと待ち合わせつす」

「あ、そうなんだ。ゆつくりしていつてね。飲み物はコーヒーでいいかな？..」

「あ、はい。お願いします。あとミートスパゲティを一つ」

「分かったよ。ちよつと待つててね」

つぐパパにお辞儀し、五十嵐の待つ席へ向かう。

「悪いな。急に呼び出して」

「別にいいけど、どしたの」

五十嵐から呼び出されたのは初めてだ。

須田はたまにあるけどな。三人で遊び行こうぜって。

「ちよつと勉強教えて欲しくて」

「勉強？」

学期末テストが近いからか？

つつても五十嵐はそこまで成績悪くないだろ。良くもないが。赤

点は回避し続けてるはずだ。

「俺はいいんだ。今回も多分ギリギリなんとなかなる」

それもどうかと思うけどな。余裕を持つのは大事だぞ。

にしても、五十嵐は大丈夫ってことは、こつちってことか？

「ぐつちゅ!! 勉強おじええー!!」

何故か泣き声で必死に懇願してくる女子。

クリーム色の長い髪を巻き、ド派手なネイルを施したギャル。

五十嵐の彼女、澤田美穂だ。

? ? ? ? ?

「古文とか漢文とかまぢイミフ! どーして現代人のあたしらが昔の人の言葉勉強しなきゃいけないの!?! てゆるか漢文に至っては中国の昔の言葉ちゃん! どこで使うんだってーの!」

喚き散らす澤田さんを横目に、俺はミートスパゲティを口に運ぶ。

うーん、美味い。さすがつぐパパだな。スイーツ以外も絶品だ。

「大学受験かなあ」

「そんなん知らんし! あたし理系行くもん!」

「美穂は数学とかも苦手じゃねーか」

「そおだけどお〜!」

理系でも古文漢文は使うと思うけどな。センター試験とかで。私立なら使わないところもあるのか？

ま、それはそうと。

「澤田さんって勉強苦手だったっけ？」

そんなイメージじゃなかったくないんだが。

補習とかも受けてないだろ。香澄とかと違って。

「ニガテだよ。いつつも赤点ギリギリ！ ヤマカンが奇跡的に当たってるから赤点は回避してる！」

ヤマカンが当たって赤点ギリギリ…？

相当だな。

「でも、なんで突然勉強する気になったの？」

「パパが『次のテストで平均六十点以下ならお小遣いを減らす』とか言い出してさ〜」

なるほどな。

「弟が今年受験なんだけど、その横で遊びすぎたから怒られてえ〜」

そんな理由で。

俺が高校受験の時、姉ちゃんは隣ですつとゲームしてたけどな。当時お母さんは何も言わなかったが、他人の家だと怒られるのか。

「てか澤田さん、弟いるんだ？」

「いるよ。四月から高校生。花咲川受験するって言ってた」

「へ〜。なら受かったら後輩だ」

「弟は勉強ちよ〜得意だから、絶対受かるよ。男子の先輩としてよろしくね〜」

へえ。弟さんは頭良いのか。

まあ身内最良の可能性もあるけど。

「あ、そういやあたしの弟、最近メタル聴き始めたんだ〜。っていうかあたしが勧めた。ぐつち〜に教えてもらったやつ全部」

「全部」

「そ、全部。けっこ〜好きらしくて、勉強中も聴いてるっぽいよ」

逸材だな。入学してきたら仲良くしよう。してこなくても仲良くしよう。

「でもそのせいで最近ちよつと勉強に集中しきれないっぽい」

「澤田さん戦犯すぎるでしょ」

「巡り巡って責任はぐつち〜にあるから。責任取ってあたしに勉強教

えて」

「あ、俺も頼む。成績上げて親に臨時の小遣い要求するから」  
「なんだこいつら。」

「まあ勉強を教えるのは構わない。自分自身の復習にもなるしな。」  
「ぐつちーって成績良いよね？　いつもどのくらいなの？」

「この前の期末は学年七位」

「ヤバ、キモ」

「帰るぞ」

「わー！　ごめんごめん！　キモくない、キモくないから！」

キモいつてなんだよ。ただ勉強頑張っただけなのに（泣）

まあ最近俺のメンタルも強くなってきたからな。キモいとか蘭とか日菜さんからしよつちゆう言われてるから慣れたわ。…嫌な慣れだな。泣きそう。

ミートスパゲティを食べきり、口元に着いたソースを拭き取ってからコーヒを啜る。

「んじややるか。澤田さんは古文漢文と数学、あと何が苦手なの？」

「えつとね、現代文と英語と世界史と公共と生物基礎！」

「全部じゃん」

「全部じゃないし！　保健体育と家庭科は得意だし！」

何それ、ちよつと卑猥。

「まあいいけど。五十嵐は？」

「英語以外は自信がない」

「むしろ英語は自信あるのか」

「ああ。俺、将来はメジャーリーガーになるから。英語はちゃんと勉強しなきゃな」

なるから、って決定事項かよ。すげー自信だな。

「つーかそこまでの気持ちがあるのに高校野球はしなくて良かったのか？　甲子園とか、全野球経験者の憧れじゃないの。」

「花咲川に野球部があったらやってたけどな。今はお前らとバンドしてるのが楽しいし、トレーニングは一人でも十分できるから」

そもそもなんで花咲川に来たんだって話だが…まあそこまで他





図書館なりで勉強しているんじゃないだろうか。

あ、そういや羽沢珈琲店にもちよいちよい出役してたんだっけ。あつちはどうなんだろ。

「うちの娘、受験のストレスからか、最近僕へのあたりが強くてねえ。クソ親父とか言われちゃって。僕は高校は推薦で行ったからあんまり分からないんだけど、中々精神削るらしいね。あの子のことも心配だよ」

あんたの娘さんのはストレスってより正常な思春期だと思うが。

俺の姉ちゃんも中学高校くらいからお父さんへのあたりが強くなった。お父さんの下着と一緒に洗濯しないでって言ったじやん！みたいな生易しいもんじゃない。本気でゴミを見るような目を向け、無視し、お父さんが仕事から帰ってくるたびに舌打ちしていた。

店長の娘さんもそのうちそうなるかもしれない。そう思ったが、俺は優しいのでそんなことは言わない。「受験が終わったら遊園地に連れて行ってあげるんだ。喜んでくれるかなあ」と幸せそうな顔している中年を地獄のどん底に叩き落とすことは俺にはできない。

「あんまり過保護にならないほうがいいですよ」

「無理な話さー！ だって目に入れても痛くないくらいだからねー！」俺の父親もそんなこと言って姉ちゃんに嫌われてた。

まあ、何があっても強く生きてくれ。健闘を祈ってます。

??????

バイト帰り。

見たいテレビがあつたため駆け足で帰路につく。

今日は白鷺千聖がゲストで出るバラエティ番組があるんだ。録画もしているがリアタイでも観なければ。

そんな逸る<sup>はや</sup>気持ちがあつたからだろうか。曲がり角で向かい側にいる人に気付かず、出会い頭に衝突してしまった。

「うわっ、とー！」

「きゃっー！」

容姿は確認できなかったが、声からして相手は女性。俺の方が体格が良く、相手は尻もちをついてしまった。

「やっべ……！ す、すみません、大丈夫っすか!？」  
慌てて声をかける。

怪我でもさせていたら事だ。場合によつちや慰謝料案件。そうでもなくても女の子の人に怪我をさせるとか最低すぎる。

「いたた…… あ、はい、大丈夫です……」  
良かった。

とりあえず胸を撫で下ろし、手を貸そうとしたところで、相手の顔をちゃんと認識する。

「…… あれ、倉田ちゃん?」

「え? …… あ、ファストフード店の……?」

ぶつかった相手は、例の受験少女。

最近見ないなど店長が心配していた、倉田ましろちゃんだった。

「ごめんね。前、ちゃんと見てなくて。立てる? 怪我とかしてない?」

「あ、はい。ほんとに大丈夫です……」

遠慮がちに俺の手を取ったので、そのまま引き上げる。

「あの、私の方こそすみません。私も前見てなくて……」

スカートに付いた汚れを手で払い、おずおずと謝ってくる。

元気がないようにも見えるが、この子はいつもダウンナーだ。

どのくらいダウンナーかという点、うちのバイト先で「メランコリック受験ガール」っていうあだ名がついているくらいにはダウンナーだ。

だが今日は、いつにも増して元気がないように見えた。

まあ受験のストレスもあるんだろう。

何しろ彼女の志望校はあのお嬢様学校、月ノ森だ。偏差値も花咲川なんて目じゃないほど高い。

前に店長命令でちょっと勉強を見た時は十分合格できるレベルだったが、安心出来ない毎日に精神を削られているんだろう。

なんだかんだ、俺は余裕を持って受験に臨んだ身。確かに不安もあったが、よっぽどじゃなければ落ちないという確信もあった。

そんな俺が彼女に言えることなんてない。何を言っても気休めにもならないだろう。

が、やはり気にはなるし、多少関わりを持った年上の身としては少しくらいお節介も焼きたくなる。

「倉田ちゃん、この後つて空いてる？」

「え？ あ、はい。帰って勉強するくらいですけど…。」

「じゃあちよつとだけ時間貰ってもいいかな。そこまで長くはならないから」

「え？」

困惑した様子の倉田ちゃんに、精一杯の笑顔を見せてみる。

大丈夫だよ、怖くないよ、ふへへっ（不審者）

？ ？ ？ ？ ？

倉田ちゃんを連れ、赴いたのは近場のカフェ。

ここには二度訪れたことがある。最初は姉ちゃんに連れてきてもらって、二回目は松原さんと来た。

「ここ、コーヒーが美味いんだ。倉田ちゃんはコーヒー飲める？」

「あ、はい」

良かった。うちの店でコーヒーを飲んでいる姿は見たことがなかったし、もしかしたら苦手なのかも、と思ってた。

「コーヒーだけじゃなくて甘味も中々だから。まあ羽沢珈琲店程じゃないけどね。大きな声じゃ言えないけど」

飲んでいる姿を見ないってことは、少なくとも好んではないという。さすがにそんな子を相手にコーヒーが美味いだけの店へ連れてくるほど考え無しじゃない。

俺はコーヒーを、倉田ちゃんは甘い物を食べればいい。そう思って連れてきた。甘い物は幸せホルモンを分泌するらしいな。まあ甘い物が苦手って言われたら泣いて謝罪するけど。

俺はコーヒーとチーズケーキを、倉田ちゃんはコーヒーとチョコ

レートケーキを注文する。

「今日も勉強帰り？」

「あ、はい」

なんか萎縮してるな、倉田ちゃん。

バイト中暇な時は勉強も教えてたしちよつとは懐いてくれたかと思つてたけど、やっぱりまだ怖いのかなあ。まあ年上の男なんて怖いよね。

「頑張ってるんだね。偉いね」

とりあえず優しく褒めておこう。イメージするのは最強のお母さん。

俺はお母さんに「優しく」褒められたことなんてないけど、ひまりやひまりママには何回かある。あれをトレースすれば多少の警戒心は薄れるんじゃないだろうか。俺はそうだった（バブ）

まあ俺じゃママには役不足だし、あんな包容力を出せないけどな。「怖くないよ」ってことが伝われば良いんだ。

怖くないよ。

「……あ、はい」

……やめよ、ドン引きされてる気がする。

暫く無言の時間が続く。

元来俺はコミュ力のある方ではないし、倉田ちゃんも自分から話すタイプじゃない。

蘭とかとなら無言の時間でも何ら気まずくないが、倉田ちゃんとの無言は少しばかり気まずかった。何か話題を探さなければ。

……ないな。倉田ちゃんの趣味も知らないし、話題が思い付かない。こういう時須田とかならいろいろ話せるんだろうな。そういうところは素直に尊敬する。

仕方ない。さっさと本題に入るか。

「えっと……勉強の方は順調？ 何か分からないところがあれば教えるけど」

受験生の暗い表情。それは九割が受験、進路関係だ（当社調べ）  
倉田ちゃんも自信がなくて不安になっているんだろう。そう思っ

てこの場を設けた。立ち話で出来るような話題じゃないしな。

倉田ちゃんの志望校の受験日は二月の頭。来週だ。ぶつちやけ今から焦って勉強したところで結果はほとんど変わらないだろうが、第三者から見ても、倉田ちゃんは十分合格ライン。緊張に押し負けず本来の実力が発揮できれば問題はないはずだ。

「べ、勉強の方は……大丈夫とは言えないですけど、やれることはやりました」

……ふーん？

なんだ、案外落ち着いてるな。まあ確かに倉田ちゃんは頑張っていた。やれることはやった、というのも決して過大評価じゃないだろう。

けど、だったらなんでこの子はこんなに沈んだ表情をしてんだ？

勉強の「方は」って言ってんだ。何かほかに理由があるんだろう。

もしかして友人関係とかか？　そういうデリケートな問題だとちよつと手に負えない可能性があるな。

「……何かほかに気になることが？」

意を決して聞いてみる。

ド地雷の可能性もあるが、ここまで来てもらった以上、何もしないというのも後味が悪い。

困ったらひまりか巴を呼ぼう。あいつらも倉田ちゃんのこととは知ってるし、力になってくれるはずだ。

「……その、自分についてなんですけど」

少しの沈黙のあと、倉田ちゃんは口を開く。

俺が覚悟を決めたように、彼女も考え、話すことを決めたのだろう。

だったら、それを聞いてやるのが先輩としての務め。いや俺から聞いたって話も聞かないとかありえないけど。良い解答が出せるかどうかは別としてね。

「私、自分を変えたくて月ノ森を受験しようって決めたんです。私には何も無いけど、あそこには眩しい人達がたくさんいるから、もしかしたら私も変われるのかもしれない。何か特別な存在になれるかもしれない、って思ってる」

まあ確かに、あそこはお嬢様高校だ。色んな人間がいるだろうし、英才教育なんかを受けた特別な才能の持ち主も大勢いるだろう。そもそも住む世界すら違うから、交流次第で様々な価値観を知ることができるはずだ。

「でも、やっぱり私、自信がなくて…。私なんかが変われるのかなとか、周りのキラキラに押し潰されちゃうだけなんじゃないかなとか、そういうのばかり考えちゃって……」

変わるかどうかなんて結局は自分次第。どれだけ特別な場所にいようと、受動的なようであれば結果は変わらない。

頼るのはいい。自分一人で難しいと感じるなら、他人や環境に頼ることは悪いことじゃない。だが、『ここにいれば、この人と一緒にいれば、自分も勝手に変わることができる』なんて、そういう風に考えるのがダメなんだ。

自分を変えることができるのは自分だけ。能動的に考えて行動しなきゃ何も変わりやしない。

…なんて、知ったような口で高説垂れることもできるんだろうが、そんなことをしても意味はないだろう。

そも、俺がそれを実行できていない。

俺もコミュ障な自分を変えたいと思っではいるが、結局はいつも他人頼り。流されているだけだ。

小学校の頃に俺が孤立しなかったのはひまりのおかげだし、中学の頃も幼馴染連中のおかげで友達ができた。

ひまりたちに頼りすぎはよくない。自分の力で友達を作ろう。

そう思った高校でも、結局俺から声をかけたのはおたえくらい。しかもギターを弾いてたからほぼ反射的に話しかけただけで、翌日は口々に目も合わせなかった。その時はあっちから声をかけてくれたから今の交流がある。

入学当初、須田が話しかけてくれて、あいつ経由でクラス内でも何人か話せるやつができた。おたえの紹介でポピパと交流を持った。

俺の人生、あいつらがいなけりや友達もバンド仲間もできず、孤独

で寂しいものになっていただろう。

日本人は変化を恐れる。ちよつと主語が大きいかな？ けどまあ全体的にそうだろう。自分を変えたいなんて思っても、変わることを怖がってしまう。

その変化は失敗にも言い換えられる。「話しかけたいけど、上手く話せなかったらどうしよう」みたいなことを想像し、怖くなって結局何も行動に移せない。

まあ要するに、そんな変わることを怖がっているチキンな俺が『自分を変えることができるのは自分だけ』なんて言ったところで説得力なんぞ皆無だ、ということ。

倉田ちゃんが聞きたいのはそんな上っ面を見繕った、正しいと見せかけただけの言葉じゃないはずだ。

「…ふーん。ま、なるようになるでしょ」

「……………え？」

上手なことは言えない。倉田ちゃんの不安を一発で拭い去ることができる言葉は持っていない。

だからせめて、素直な感想を伝えておこう。

「変わることでだけが正解じゃないとは思うけど、倉田ちゃんが変わることを望んで、変わることができそうな環境に行こうと頑張ってるんですよ？ なら、あとはその環境に頼るだけだよ。少しは自分でも頑張んなきゃだろうけどね。なるようになる。うん、俺の好きな言葉だ」

倉田ちゃんは啞然としている。

俺が励ましの言葉でも贈ると思っていたんだろうか。もしくは、もつと的確なアドバイスでも投げるのかも、と。

申し訳ないが、そんな人間じゃないんだよ、俺は。

「失礼します。ブレンドコーヒー二つと、チーズケーキ、チョコレートケーキになりますー」

男の店員さんの少し間延びした声とともに、注文した品が運ばれてきた。

テーブルの中心に置かれたチョコレートケーキとコーヒーを倉田ちゃんの前に配膳し直し、俺も自分の分のケーキとコーヒーを取る。「俺もさ、変わりたいなって思って、でもまだ変われてない人間なんだ」

さすがに「なるようになる」とだけ言うのも違うかと思ひ、続けて話す。

「俺は思ってただけ。だからなるようになった。変わってないまま、変わらないまま日々が過ぎてる」

「… 変わらない、まま…」

今倉田ちゃんが一番恐れているのはそこだ。

変化は怖いけど、でもそのままなのも嫌。だから頑張ってるのに、それでも変われなかったらどうしようかと。

少し飛躍するかも知だが、努力しても結果が得られないと、自分の価値に疑問を覚えてしまうことだってある。

「でも、倉田ちゃんは俺とは違う。最終的には他人頼りになっちゃうとしても、そこまでの過程で努力してる人間だ。世の中結果が全て、なんて言う人も大勢いるけど、過程だって大事だよ」

コーヒーを啜り、一息ついてから話を続ける。

「それに、変わるかどうかなんてのは、今考えることじゃない」  
「… え？」

コーヒーをじっと見つめていた倉田ちゃんが顔を上げた。泣きそうじゃん、ごめんね俺が悪かった。なんかデジャブがあるな41話『音楽を愛せよ、さすが救われる。知らんけど』のチュチュ

「考えたり、悩んだり。それは『変われなかったあと』でいいんじゃないかな。変わろうって思ってる時に『もしかしたら変われないかも』なんて、そんなのは皮算用だよ。変われなかった時に、それでもまだ変わりたいと思うか、そのまま身を任せて変わらなのままの自分で生きていくのかを悩んで、考えて、結論を出す。それでも遅くなんてないと思うよ」

まだ十年やそこらしか生きてない俺が言っても説得力なんてないが、俺らはまだ若い。今はただ信じて頑張ればいい。努力が報われな



かった時のことは、その時に考えれば済む話だろう。

「大丈夫、なるようになるさ。結果に満足出来なかったら、その時また考えて、また頑張ればいい。だから今は、愚直に頑張れ。気楽にしよう。不確定な未来を憂いても、それこそ何も変わらないよ」

言いたいことは言った。あとは全部、倉田ちゃん次第だ。

「…なるように…なる……考えるのは、その後で…」

倉田ちゃんは再び俯き、うわ言のように呟いている。

今悩んでいる人間にかける言葉として、決して正解とは言えない俺の解答。勇気を出して、もしかしたら俺を頼ってさらけ出した不安への解答がその程度のもので、落胆してしまったかもしれない。

けど、俺に言えることはこれだけだ。

ごめんね、頼りにならない先輩で。

心の中で謝りつつ、チーズケーキを頬張る。うーん、羽沢珈琲店ほどじゃないけどやっぱ美味しいな、ここのチーズケーキ。

「…あの、ありがとう、ごさいます」

「んあ？」

二口目を頬ばろうと口を開いたところで、倉田ちゃんがお礼を言うてくる。

「お礼言われるようなことしてないよ。むしろごめんね、的確なアドバイスとかできなくて」

「い、いえ。ちよつと、私が思い詰めすぎだったかなって思いました」  
「そ。まああれだ、何度も言うけど、なるようにしかならないからさ」  
考えすぎても鬱になっちゃうだけだ。気楽にやったほうが楽し  
楽しいよ。

倉田ちゃんもチョコレートケーキに手をつけ始めた。

お、いい顔するね。実は甘い物好き？ ここのケーキは美味しいだろ。でも羽沢珈琲店の方が美味しいから、合格したら合格祝いとして奢ってあげよう。

「あ、あの、ところで…」

「ん？」

次はコーヒーを啜ろうとしていた時に話しかけてくる倉田ちゃん。

タイミング悪いね。それかもしかして狙ってる？

「さつき、『俺も変わりたいって思ってた』って… 関口さん、もう完璧に見えるんですけど…」

「んなことあるめえ」

俺が完璧？ 笑わせる。ダメなところばかりだよ。

… なんだよその「信じられない」みたいな顔は。キミ、俺の事なんてほとんど何にも知らないだろ。

「そうだねえ。ダメなところはたくさんあるけど… 俺って若干コミュニケーションなどこあつてさ」

「…？ 関口さんが…？」

「そ。一人じゃ初対面の人どころか、何回か会ったことある人にも話しかけられないの」

クラスメイトでも怖いし、他クラスや上の学年なんて以ての外。三回以上話したことがある相手じゃないと自分からなんて話しかけられない。

ひまり曰く、俺は典型的な内弁慶。特定の人間にだけ懐く野良猫みたい、なんだそうさ。俺は猫より犬派だから犬でありたいんだけどな。

「で、でも、私に話しかけて…」

「倉田ちゃんは、うん、なんか大丈夫だった」

同類の匂いを感じたからだろうか？

あとは年下の子だし、年上として…っていう見栄や義務感みたいなものもあるだろう。

「倉田ちゃんとは仲良くなれそうだしさ。高校生になってからも、たまにでいいからうちの店に顔出してくれると嬉しいな」

俺だけじゃない。店長も喜ぶだろう。

ひまりや巴も倉田ちゃんの話は気にかけてたし、遊びに来てくれたら嬉しいんじゃないだろうか。

「まあ何にせよ、まずは受験だよな。来週だったっけ？」

「あ、はい」

最後のチョコレートケーキの欠片を咀嚼し終えたことを確認して

から声をかける。

「平常心で臨めば、倉田ちゃんの実力ならきつと合格できると思うよ」

「は、はい… ありがとうございます…」

締めに入ってきたし、これ以上倉田ちゃん受験生の時間を奪うわけにもい  
かない。

「もう大丈夫？ おかわりとか」

「あ、はい。大丈夫です」

「ん。じゃあ帰ろっか。ありがとうね、時間くれて」

「い、いえ… こちらこそ、その、ありがとうございます」

伝票を取り、立ち上がる。

倉田ちゃんもお金を出そうとしてくるが、年下の、しかも中学生に  
金を出させるほど甲斐性無しではない。「俺が誘ったわけだし」と言  
い、出させる前に会計を済ませる。

「あ… ありがとうございます、ご馳走様です」

「いーのいーの。じゃ、またね。合格したら店に報告来てよ。店長、  
すっげー喜ぶと思うよ。ポテトとか、もしかしたらバーガーも奢って  
くれるかも」

「い、いえ… ！ そんな、ねだるみたいな… ！」

バーガーくらい店長なら払えるよ。大人だもん。

でもその心は優しくて良いと思う。そのまま純粹でいてほしい。  
モカに爪の垢煎じて飲ませたいくらいだ。

最後までペコペコしていた倉田ちゃんに手を振る。

合格できるといいな。

そう願いながら、俺は白鷺千聖が出ている番組の最後くらいはリア  
タイで観れるかもと少し足早に帰路についた。

## イベント事にはとりあえず便乗しとけ

バレンタインの起源は今から十数世紀前、三世紀頃にまで遡る。

時のローマ帝国皇帝・クラウディウス二世の時代。「故郷に愛する者がいると士気が下がる」という理由で兵士の結婚が禁止されていた中、密かに兵士達の結婚式を執り行っていたキリスト教司祭・ヴァレンティヌスが処刑された。

後世の人々は司祭の功績を称え、彼を『聖バレンタイン』と祀るようになった。

そして、そんな『聖バレンタイン』が処刑された日こそが、二月十日。この日を『聖バレンタインの日』とし、お祈りするようになったと言われている。

要するに、バレンタインデーとは聖人の処刑日、命日なのだ。

「聖バレンタインは拷問された上で撲殺された、なんて話も聞く。そんな日にチョコ、チョコと騒いでさ・・・日本人は宗教のイベントを何だと思ってるんだ。つーかそもそも日本人のほとんどは神道系だろ。クリスマスといい、都合のいい時だけキリスト教にあやかりやがって」

「そーだそーだ！ 関口のゆうとーりだ！」

「オタク共がまたなんか騒いでらあ」

五十嵐の処刑日も二月十四日でよろしいか？ よろしいな？

明日を楽しみにしてるよ。震えて眠れ。

というわけで二月十三日、金曜日。朝。

バレンタインデーなどという愚の祭典を明日に控えた今日、登校途中に二人と会い、須田と共に五十嵐の調理方法を考えながら学校まで

の道を歩いている。

須田はともかく五十嵐が俺らと一緒に登校するのは珍しい。普段は登校中に顔を合わせても澤田さんと二人でいることを優先する奴だし。まあ正しい判断ではあると思うけどな。

ではなぜ今日は五十嵐が俺らと一緒にいるのかというと、いつも一緒に澤田さんがいないから。

じゃあなぜ澤田さんが一緒じゃないのかと五十嵐に聞いたところ、今日はバレンタインのために一日休んで準備するからとかなんとか。いやマジかあのギャル。何作るつもりだ？

とまあそんな話の流れがあり、そもそもバレンタインは何なのかという話題になった。

「やつぱり東京湾かな。近いし。それとも足を伸ばして富士の樹海にする？」

「いや、それじゃ芸がないな。微妙に遠いけど奥多摩湖とかどうだ？」  
「多摩かー。運ぶのが面倒だけど、生かして連れてってあっちでシメればいいか」

「殴殺でいいかな。バールのようなものなら護身用で持ってるけど」  
「お前の護身怖えよ。でもそうだな・・・あ、前に漫画で見たんだけど、氷塊で殴れば指紋とかも残らないらしい。湖だし溺死させるのもアリだと思う」

「溺死の方がより苦しむかな」

「お前からウキウキで俺の殺害方法話し合うのやめろ」

楽しい(楽しい)

「てかお前らもチョコ貰えるだろ」

俺らが貰える貰えないの問題じゃない。別にお前が澤田さんからチョコを貰えるから殺ろうとしてるわけじゃないんだよ。煽ってきただからやり返そうとしてるだけで。

むしろ付き合ってるのに貰えなかったら憐れむわ。そのあと全力で笑ってやるけど。

つーか俺貰えるかなあ？

幼馴染連中とか姉ちゃんとか、身内からなら貰えるかもだけど。ひまりとつくは毎年くれるけど、『友チョコ』だしな。姉ちゃんからは彼氏（候補）に渡す用のやつの味見役として渡されるだけで、アレらで「バレンタインにチョコ貰った！」って言うのはチョコ0より悲しくなるからヤダ。モカに至っては要求してくる始末だしな。

須田は牛込さんから貰えるだろうな。羨ましい。幸せになれよ。

「関口は貰えるだろうな」

「須田だって貰えるだろ」

「……………」

「……………」

「へへっ、そ、そおおお？」

「なんだお前ら気持ちわりい」

？ ？ ？ ？ ？

そんなこんなで学校到着。

いつもより早い時間に登校したからか、普段登校中によく会うポピパやハロハピの面々に会うこともなく校門を抜けた。

「…なんか今日、人多くね？ 特に男共。いつももつと始業ギリギリに来てるだろ、こいつら」

五十嵐が訝しんで周囲を見渡す。

確かに、いつも俺より遅くきてる連中もチラホラ見受けられる。

五十嵐は普段からこの時間に登校しているらしく、違和感に気付いたのだろう。

「今日がバレンタイン前最後の登校日だからじゃね？ 全員浮き立ってるんだろ」

須田の言う通りかもしれないな。

みんなどこかソワソワしてる。手鏡なんか持つてずっと髪型をイジってる奴も何人かいるな。バレンタイン当日にそんなことして何

か効果あんの？

「ったく… どのつもこいつも落ち着きのない。製菓業界に良い様に使われてるだけだっけ気付けよな」

「関口の言う通りだ。恥を知れ、恥を」

「まったく。同じ男として恥ずかしい限りだぜ。」

「ああ、だからお前ら二人も今日は朝早かったのか」

「チガウヨ」

「ソナナワケナイダロ」

「もつと隠す努力しろよ」

「違うもん。ね、須田。」

アホの五十嵐の呆れたような、憐れむような目を全力で無視し、下駄箱に向かう。

「ん？ なんだあいつら、下駄箱の前でソワソワと」

五十嵐の言葉で周りを見渡すと、確かに何人かが下駄箱の前でソワソワと落ち着かない様子だ。

ウロウロしていたり、何度も下駄箱を開け閉めしていたり、膝を着いて項垂れていたたり。

「何やってんだろ。」

「奴らは亡霊だ」

「突然どうした須田」

須田のシリアス顔久々に見たな。

五十嵐の調理方法考えてる時だっけここまで真剣な顔してないぞ。ライブ中より迫真の顔じゃねえか。

「戦いは既に始まってることさ。奴らはその戦いに敗れた敗北者。未だ希望を捨てきれない、生きた亡霊に成り下がった哀れな者共」

「何言ってるんだこいつ。」

わけの分からないことを言い出した須田を横目に靴を脱ぎ、下駄箱を開ける。

「つまりだな——」

ぼとり。

俺の下駄箱から何かが落ちた。

上履きじゃない。長方形の何か。

ワインレッドの包装紙、ピンクのリボンで締められた箱。

名刺くらいの紙が貼られており、そこには「関口へ」というひどく綺麗な文字が。

「——下駄箱にはチョコが入っている。そういう可能性があるってことだ」

瞬間、俺は周りの亡霊共に簀巻きにされた。

? ? ? ? ?

「…… えーっと。これ、どういう状況?」

登校し、教室に入った私——山吹沙綾は、教室内の異様な光景に思考が追い付かず、誰に向けたでもない言葉をぽつりと漏らした。

「お、沙綾。おはよ」

「え? あ、うん。おはよう、五十嵐くん」

教室の入口付近で『異様な光景』を遠巻きに見ていた五十嵐くんは挨拶される。

挨拶ついでだ。五十嵐くんに聞いてみよう。

「あのさ、アレ、何?」

『異様な光景』——荒縄でぐるぐる巻きにされた関口くんが、何かどす黒いオーラを纏った男の子たちに囲まれて天井から吊るさされている光景を指差し、五十嵐くんに説明を求める。

「ああ、アレ? 関口への断罪」

「だ、断罪?」

「そ。もっと直接的な言葉を使うなら、関口の処刑だな」

なんでこの人はこうも落ち着いて友人の処刑を見ているんだろう。てゆーかちよつと笑ってない? 五十嵐くんたち、友達だよね?」

「関口のやつ、チョコ貰ったんだよ。あいつの下駄箱に入ってた。それを見られたから、哀しき亡霊たちに襲われてんだ」



「チョコ？ あー、明日バレンタインだから。え、誰から？」

「さあ？ 匿名っぽい」

匿名かあ。まあ関口くんモテるもんね。

「やつ、やめろお前ら！ 落ち着け！ まだ女の子からのチョコだつて決まったワケじゃないだろ?! 誰かのイタズラかもしれないじゃん！」

「遺言はそれだけか？」

「遺言じゃねえよ！」

「詛咒通常都是一種使他人不幸的？言或？愿……」

「何何ナニ怖い怖い怖い！ え、俺死ぬの!? 今から俺死ぬの!?

お、おい五十嵐助けて！ お前の筋肉でこいつらを追い払ってくれ！ 頼むから!!」

関口くんのあんな必死な顔初めて見た。

「…その、助けないの？」

「なんで？ 面白いじゃん」

「面白いかなあ？」

「それに俺、あいつと須田には、いわゆる『リア充イベント』のたびに殺害方法とかウキウキで話し合われてるんだぜ？ 助ける義理とかないっしょ」

え、Capliberteって実は不仲なの？

普段だいぶ仲良さそうに見えるんだけど…

「ま、亡霊<sup>あいつら</sup>達も本当に危害を加えることはないと思うし。そこまでバカじゃないよ… 多分」

うーくん…… 多分かあ…

というか荒縄で縛り上げられてるのは『危害』判定じゃないんだ。「もし本当に関口が危ないんだつたらさすがに助けるし」

あ、そうなんだ。

なんだかんだで仲はいいんだ。男の子特有の友情、みたいなものなのか。私にはちよつと分からないけど。

「被？呪的人不必在？、也不必知道他被？咒了」

「除？句外有??呪也伴随有手？」

「？呪的原因往是？怒或者？☒或者」

「何なんだよお前らはよオ!!? 何の血イ引いてんの!!? 全員陰陽師の

末裔か何かか!!? す、須田！ 助けて須田あ!!」

「須田ならりみとどつかに消えたぞー」

「……何？」

「須田罪犯。須田処刑、執行！ 執行！」

「落着、須田何処所在不明。誰知？」

「我知！ 二階空教室可能性有！」

「了。誉。出発！ 出発！ 須田罪犯。即処刑、執行！ 執行！」

「た、助かった……」

「関口共処刑！ 連行！ 二人墓地二階空教室！ 或屋上所望？ 何

方選？ 選択肢贈与。選択」

「はあ!!? い、嫌だ！ おいやめろ、俺は置いてけよ！ 須田の処刑だ

ろ!!? なあ!!」

…… 関口くん、連れて行かれちゃった。

ごめんね、私じゃ助けられそうにないや。頑張つて生き残つてね。  
アーメン。

? ? ? ? ?

「酷い目に遭った」

一時間目の休み時間。

何故か一時間目の現代文が急遽自習になったため、その時間を使つて俺と須田はじっくりと処された。自習時間なんだから勉強しろお前らクソがよ。

「おい、あんま近付くなよお前ら。呪詛が伝染る」

なんだてめえ。腹立つな五十嵐この野郎。

「まあ良かったじゃねえか。亡霊共、アレで満足したんだろ？」

ケラケラ笑っている五十嵐を本気で殴りたくなる。マジで奥多摩湖に連れて行ってやろうか。

本来なら五十嵐も処刑対象のはずなのだが、今日のところはチョコを貰っていないため無罪放免ということになったらしい。卑怯者め。

「で？ 須田は無事りみから貰ったとして、結局関口のあれは誰からだっただ？」

「全然無事じゃないが」

須田の目が死んでる。

ずいぶん怖い思いしたもんなあ。

人間に脳に備わっている忘却機能をフルで使いおぞましい記憶を消しつつ、下駄箱に入っていた箱をカバンから取り出す。

「わっかんねえ。女子からかどうかとも分からん。これで男からのイタズラとかだったら本気で許さねえからな」

俺が処刑を受けた意味が完全に無くなる。

せめて女子からであってくれ。

「お疲れ様。大変だったねえ」

中身を確認してみるかと思ったところで、タイミング良く山吹さんが話しかけてくる。

あの制裁を見て「お疲れ様」って言葉が出てくるのおかしくない？

「おはよ、海。須田くんと五十嵐くんも」

山吹さんに続き、おたえも挨拶してくる。

「そーいや今日は生き延びるのに必死でまだ挨拶してなかったな。」

「おはよ」

挨拶は大事だ。千聖さんもそう言った。千聖さんが言ってるんだから間違いない。

「さつき、なんで海と須田くんはあんな目に遭ってたの？」

「こいつらがチョコ貰ったから」

俺らは悪くないはずなんだけどなあ。

「…… チョコ？」

「バレンタイン前日だからな。関口密かに人気あるし、まあ貰うだろ」  
おい待て、密かに人気あるってどこ詳しく。なんで潜んでんだよ、表に出て来い。

…… いや、やっぱいいや。周りの男共の目が怖いし、なんだか面倒くさそうだ。好きになった人に好かれればそれで十分。

「そういえば匿名って話だったけど、相手、ほんとに分かんないの？」  
「分かんないんだよね、これが。俺の苗字だけ書いてあるんだけど、この字に見覚えとかある？」

山吹さんに紙を渡す。

まあ字だけで誰かを特定するなんて余程じゃなきゃ無理だろう。マンモス校程じゃないしろ、この学校に何人の生徒がいると思つて

「あ、これ有咲の字じゃない？ ねえ、おたえ」

「うん。有咲の字」

マジでか。

? ? ? ? ?

「かつ、勘違いすんなよな！ 関口には日頃香澄の事とか色々世話になつてつからチョコくらいやるかと思っただけで、他意はないんだからな！」

なんだそのテンプレじみたツンデレ発言。

昼休み、いつも通りにポピパ連中と飯を食べるために集合した時、チョコの差出人は市ヶ谷さんなのかと尋ねたところ、そんな返事が帰ってきた。

まあ確かに市ヶ谷さんは香澄とデキてるから（実現希望妄想）俺への本命って訳じゃないだろ（名推理）

いくら義理とはいえ直接渡すのは恥ずかしかったから下駄箱に入れたのだろうか。いじらしい。市ヶ谷さんらしいな。

「ずるーい！ 私も有咲のチョコ食べたい！」

「お前の分は明日渡すから」

「ほんと!? わーい、やったー! 楽しみ〜」

「お前マジでそのすぐ抱き着いてくんのヤメろ! 人前だぞ!」

「やっぱりデキてるじゃないか! 大変ありがとうございます。や  
るな(満悦)」

「まあなんであれ、ありがとね市ヶ谷さん。嬉しいよ」

「あつ、うう……」

「? 有咲、顔熱いよ?」

「顔をくっ付けるなあ!!」

「チョコもだけど美しい百合をありがとう。本当にありがとう。」

「とりあえず拝んどこ。」

「海、甘い好きだったっけ」

「てえてえ…… てえてえ…… と合掌している俺を若干引き気味に見

ている山吹さんの隣から、おたえが聞いてくる。

「嫌いじゃないよ。あつたら食べる」

「そうなんだ。じゃあ明日私もチョコあげるね」

「マジでか」

「マジでか。」

「チョコ作ったことないから、さーや、今日の放課後作り方教えて」

「え? あ、うん。いいよ〜」

「しかも手作り!」

「マジでか!? 『元女子校に入学した俺、ガールズバンドの美少女た

ちと仲良くなる!』おたえ〜」に突入してる!? どの選択肢

でそうだった。

「須田くんと五十嵐くんにもあげるね」

「友チョコじゃねえか。」

「まあ確かに俺とおたえは友達だしな。さすがに残当。そもそもお  
たえに限らず誰ともフラグ立てた覚えはないし。」

「じゃあ私も作ろっかな。皆にあげる用のやつ」

「山吹さんも手作りチョコをくれるらしい。」

「友チョコとはいえ嬉しいな、女の子からの手作りチョコ。」

「明日、海くんたち時間ある？」

「昼にスタジオ入るくらい。C i R C L E」

「じゃあ私たちもC i R C L E行くね。おたえもそれでいい？」

「うん、大丈夫」

バレンタイン当日にクラスメイトの女の子からチョコを貰えるとかいう素敵イベントが発生した。

やったぜ！ 明日、しかもスタジオならバカ共（花咲川男子生徒陣）に見つかることもないだろうし、本当にやったぜ！

ピロン（LINE通知音）

H i m a r i 『明日暇？』

ひまり？

昼休みに連絡を寄越してくるのは珍しいな。

明日ってことは、毎年恒例のチョコか？

k a i 『昼スタジオ入る予定あるけど、そのあととかなら』

H i m a r i 『分かった！』

H i m a r i 『じゃあ羽沢珈琲店集合ね！』

k a i 『あいあい』

今年のはどんなのかなあ。

去年はチョコレートケーキだったっけ。あれ？ それは一昨年？

「海くんたちは明日練習のあと暇？ 良かったらそのまま遊び行かない？」

「あ、ごめん。ちょっと予定ある」

「そっかー。残念」

女の子のお誘いを別の女の子との予定で断るとか、俺ってばどんだけ恵まれてんだよ。

そこから恋愛に発展することはないと思うけど、それはそれとしてこんなにも仲良くしてくれる異性がいるってのは感謝すべきなのかもな。

「海、日曜日空いてない？ 楽器屋さん巡りたいんだけど」

「日曜はー… バイト終わりなら大丈夫。渋谷新宿の方の楽器屋、ちよつと気になってたんだよな」

「じゃあそこ行こう」

俺、女の子と予定立てすぎじゃない？

この前の氷k… 紗夜さんの言葉が蘇るな。

「お前らつてけっこーな頻度で楽器屋行ってるよな。何やってんの？」

何やら牛込さんから弁当のおかずを分けて貰っていた須田が聞いてくる。

「何ってお前、楽器屋に行く理由なんて一つだろ。楽器や機材を見るんだよ」

「お前らもう十分持つてるだろ。まだ買うのか？」

「ギターは何本あっても困らないし、エフェクターも同様なんだよな、おたえ」

「うん、そう。あんまりお金なくてウインドウショッピングになりがちだけど、見るだけでも楽しい。店舗に行ったら試奏もできるし」

それより須田さんや、お前牛込さんと付き合ってるの？ 最近距離近過ぎない？

どうでもいいけど付き合ったならちゃんど報告してね。ちよつとの祝福のあとイジリ倒すから。

「みんなチョコあげるの？ じゃあ私も海くんたちにチョコあげるっ！」

「わーいうれしー」

「棒読み!? 温度差すごくくない!？」

「お、すごいな香澄。温度差なんて言葉知ってるのか」

「馬鹿にされてる!」

いやまあ実際嬉しいけどな？

なんとなく照れくさくて（思春期）

しかし今年は幸運だ。こんなにもチョコをくれるという女の子がいるなんて。

今年も本命は貰えそうにもないが、そんなのは贅沢だ。そもそも本命を貰ったところで困るのは俺だしな。初めての彼女は好きになつた相手がいいんだけど、今んとこ好きな人とかいないし。推しは何人かいるけど。あ、でもリサさんとかに『本命だよ☆』とか言われたら落ちそう。まあそんな未来は存在しないんだけどな。残当。

まあ今はただこの幸運を噛み締めていこう。この世全てに感謝。

「有咲く海くんが冷たいよお〜！」

「だからくっ付くなつて言つてんだろ〜！」

本当に…感謝ッ…！！

?? ?? ??

放課後。

「関口く、帰ろうぜ〜」

鞆を肩に掛けながら、五十嵐が間延びした声で言ってくる。

「…お前、もつとほかにかける言葉とかないの？」

「あん？ 何がだよ」

いつもと変わらぬ様子で、何ならいつもより無関心そうに五十嵐が返す。

「だから———さんざ男共から制裁を受けた俺に対する<sup>いたわ</sup>労りの言葉はねえのかつて聞いてんだよ」

体の節々が痛む俺は机に突っ伏したまま、呑気な五十嵐に生気の薄れた目を向けた。

あれはそう、昼休みも後半。昼食を食べ終わり、ちよつとトイレに行こうと教室を出ようとした時だ。

ほわんほわんセキグチ〜（回想）



ゆり「あ、海くん」

海「ゆりさん？　こんちわ。どうしたんすか、一年の教室まできて。あ、牛込さんならさつきお手洗いに行きましたよ」

ゆり「んーん、今日はりみじやなくて海くんに用事」

海「俺っすか？」

ゆり「そー。今日バレンタインでしょ？　あいや、ほんと明日だけど、明日会えないし。今日チョコ渡そうと思って」

ガタツ!! (起立の音×n)

海「ゆりさん、発言には気を付けてください。俺の命がかかってるんで」

ゆり「なんのこと？　海くんは相変わらず変なこと言うよねー」

海「相変わらずずってなんスか。俺はいつだってBe cool e r。常識に塗れた健全で清廉潔白な紳士ですよ」

ゆり「そういうとこだよ。まあそんな虚言より」

海「そんな虚言より!?!」

ゆり「はい、これチョコ。あげるね」

男子共『ひとおつ…』

海「…あ。アレですよね？　須田や五十嵐にもあげる、みたいな。おーい須田ー、五十嵐ー」

ゆり「あ、いや違って。須田くんと五十嵐くんの分は(二人とも相手がいるから)用意してないんだよね。私からあげるのは(今彼女がない)海くんだけ」

亡霊共『ふたaAつ…!』

海「なんなんだよそのカウント。怖えんだが」

ゆり「あ、それとそのチョコ、私の手作りだから。ありがたく食べてね♡」(特に深い意味はない)

悪霊憑依『みmいT k あg っ W k T うU !!!!!!』

海「!? ヤベェ! 邪神が降りてきた!?!」

ゆり「…じゃ、私次移動教室だからもう行かなきゃ」

海「待つて! ゆりさん待つて!! ちゃんと説明して! コイツら

浄化してええええ!!!」

ほわんほわんセキグチ〜（回想終了）

「授業しに来た塩月（担任教師）が吊るされてるお前を見てそつと教室出ていったのは笑ったなあ」

「お前に人の心つてもんはないのか？」

「死ぬ事以外はかすり傷っていう名言がある」

この人でなし!!

人の痛みを知れ（↑クリスマスに五十嵐を簀巻きにして東京湾に沈めようとしていた男）

「まあ良かったんじゃねーの？ ゆり先輩からチョコ貰えて。お前、年上好きだろ」

・・・まあ、それは正直そう。嬉しかった。

「もしかして本命だったり？ だとしたら須田と兄弟になれるじゃん」

「そこはかとなくキモいことを言うな」

ちよつと鳥肌立ったわ。

それはそうと。

「中に手紙入ってて、『私たちの主催ライブに出てくれるお礼だよ！

ちゃんと義理だから安心してね♡』だそうだ」

「ちゃんとして何だよ」

「俺が知るかっつての」

なあにが「手作りだからありがたく食べてね♡」だ。期待を持たせるだけ持たせといてこの仕打ちですよ。純情な少年の心を弄んで楽しいかよ！ でもチョコはありがたいとごごいます大切に食べます。

それにしても『P. S. 彼女がいる五十嵐くんとりみがいる須田くんには怖くて渡せなかったけど、ありがとうって伝えといて』とか書いてあったが、須田の奴は姉公認の仲なんですか？ そこんとこ詳しく。

「それはそうと帰ろうぜ。お前、今日バイト無いつつてたよな？」  
それはそうとつて何だよ。

「すまん、俺この後ちよつと呼び出し受けてんだよね」

「なんだ、また女か？」

「言葉には気を付けろよ」

殺気を向けるな男共。

「ちよつと氷川さんに呼び出されててさ。さつきLINEがきた」

「やっぱり女じゃねえか」

「言葉には気を付けろつつつてんだろバカ」

ステイだ、落ち着けアホ共。まだ慌てる時間じゃない。

「生徒会室に呼び出されたよ。心当たりは一切無いけど、また何か悪いことしたんだろ。俺が」

「授業妨害じゃね？ お前のせいで五限なくなつたし。まあ俺としては『せい』っていうか『おかげ』って感じだけどな。午後一の授業ダルいし」

俺は悪くくない？

あまりにも理不尽だ。妨害したのは周りの男共だろ。俺はむしろ被害者だつての。

「ま、つーわけで俺はもうちよい学校残るから」

「りよ。じゃあ今日は俺一人か」

「？ 須田は？」

「須田はりみと二人で先に帰っちゃまった」

俺よりアイツの方が制裁されるべきなのでは？

関口は訝しんだ。

?? ?? ??

「失礼しまーす」

ノックをし、中から「どうぞ」と返事が来てからドアを開ける。

前にノックをせず入った時、氷川さんに軽く怒られたからな。あれから学んだ。

生徒会室の中には、氷川さんの姿が。ほかの役員の姿は見えない。氷川さんしかいないっぼい。

にしても、今日は何で呼び出されたんだろう？

もしかして本当に午後の授業の件についてか？ だとしたら氷川さんよりも先に教師陣に呼び出されるはずだよな。そもそも俺は悪くないんだけど。

「急に呼び立ててしまい申し訳ありません。予定は大丈夫でしたか？」

何にせよ呼び出されたつてことは怒られるんだろうな。

そう思っていた俺の耳に、予想外のセリフが飛び込んでくる。

この感じ……もしかして説教じゃないのか？

「あ、はい。大丈夫です。今日は何も無いんで」

「そうなんですか？ 意外ですね。てつきり色々な方に呼び出されるなりしているものかと」

何の話だ？

あー、遊びに誘われてないのか、みたいなこと言いたいのかな。金曜だし、部活をしてない奴らはカラオケなりボーリングなりに行くことも多い。

「そつすね。特に予定も無しで、強いて言えば帰ってギター弾いてゲームしようと思ってました」

「そういうえばNFOの新しいイベント、今夜からでしたね」

「そうなんですよ。限定装備が結構使えるって評判なんで、あこちゃんと一緒に周回しようって誘われてて。あ、氷川さんも一緒にやります？ きつとあこちゃんも喜んで——」

「紗夜」

？ …… あ。

「えっと……その、紗夜さんも一緒にどうですか？ あこちゃんも喜ぶと思いますけど」

「そうですね。時間が合えば、一緒にさせてもらおうかしら」

やっぱまだ慣れないな、紗夜さん呼び。一年近く氷川さんで呼んできたし、無意識に苗字が出てきてしまう。

「…とっ、ところでですね。その…え、NFOの新イベントの話なのですけれど、今回は何のイベントだったかしら」

「なんか突然雰囲気変わったな。」

「どうした？」

「バレンタインイベントだったと思いますけど」

「そ、そうですね。バレンタイン、明日ですものね。バレンタイン…」

「??？」

「モゾモゾして一体どうしたんだろう。」

「…海くんはチョコ、もう誰かから貰ったんですか…？」

「え？ あ…市ヶ谷さんとゆりさん、あとクラスメイトからと、前にちよつと話したことのある隣のクラスの女子から貰いました」

「…結構貰ってるんですね。このバンドマン」

「…その悪口、ブームなんですか？」

「知りません」

「ピイツ、じゃないんだわ挙動が可愛いなこの人。」

「でもなんで不機嫌？ 俺が異性関係にだらしの無い典型的なバンドマンだと思つての嫌悪感か？」

「だとしたら誤解もいいところだ。」

「全部義理、つていうか友チョコみたいなもんですけどね。クラスメイトから貰ったやつはクラスの男子全員に渡してたやつですし、市ヶ谷さんのは日頃のお礼、ゆりさんからは今度のライブに出てくれるお礼だつて言っていました」

「隣のクラスの女子は「関口くんって芸能界入りするかもしれないんですよ？ だったら今のうちに粉かけときたい！」とか言ってたな。」

「芸能界入りする予定とかないし、なんだよ粉かけとききたいって。」

「…そう、ですか。薄々感じてはいたけれど、貴方、中々に疎いみたいですね。感情の機微には敏感なのに」

「？」

「何でもないです。ちなみになんですが、上原さんなどからは？」

「ひまりですか？ 明日くれるっぽいですね。これでも十年くらい付き合いですし、義理とはいえ毎年律儀にくれるんですよ。三倍返しが狙いだとは思いますが」

「はあ」

ため息!?

「…まあ、分かりました。貴方はそういう人なんですね。ある意味良かった、というべきか。これは私も気合いを入れていかないですね」

分かんないけど、何か勝手に呆れられてないかこれ？

え、何。俺何か悪いことした？

「本題に入ります。こちらに来てください」

紗夜さんの反応が理解できず困惑しつつも、言われた通り近寄っていく。

なんだろ。とりあえず謝っておけばいいかな。

土下座まですることはないだろうけど一応準備しとくかと頭を下げる決心を固めていたところ、不意に紗夜さんが何かを差し出してきた。

見れば、それはクッキーだった。

透明なラップピング袋に包まれたクッキーには粒チョコが入っている。いわゆるチョコレートクッキーというやつだ。

「…その、バレンタインのチョコです。貴方に渡そうと思い持ってきました。明日は会えないかもしれないかもしれないので、今日」

バレンタインのチョコ？

紗夜さんが？ 俺に？ なんで？

… あ、なるほど。日頃のお礼的な。

確かに俺、たまに紗夜さんのギター指導したりするしな。普段からお菓子なんかで報酬は貰ってるが、せつかくのイベントだし渡しておこう、と。そういうことか。

「言っておきますが、日頃のお礼、などではありません。いえ、そういう側面も確かにありはするのですが…」

????

じゃあなんだ？ 日頃のお礼以外で俺が紗夜さんからチョコを貰える道理がないが…

「理由は自分で考えてみてください。そう難しいことではないですよ。単純なことです」

ええ…？

… あ、もしかしてあれか。

手前味噌だけど、紗夜さんと一番仲が良い男の後輩は俺だと自負してる。去年まで花咲川は女子校だったし、今までは渡す相手がいなかった。でも今年はそこそこの仲の良い後輩ができたから、イベントに乗っかってチョコを渡してみよう、と。最近お菓子作りを覚えたこともあるんだろう。

なるほどね、完全に理解した。

「… 何か勘違いをしている顔をしています。まあ良いです。今のところはこのくらいで」

何を言う、俺は完璧に読み解きましたよ。

紗夜さんだって、大人びてはいてもまだ華のJKですもんね。イベント事に振り回されることもあるってもんですよ。俺だってそう。

「私からの用事は以上です。それでは、私はこの後Roseliaの練習があるので失礼します」

「あ、紗夜さん」

カバンを肩にかけながら立ち上がる紗夜さんに声をかける。

どんな理由があるにせよ、言っておかなければならないことがあった。

「クッキー、ありがとうございます。紗夜さんから貰えたの、すっごく嬉しいです」

義理だろうが何だろうが、バレンタインにお菓子を貰えることは非常に嬉しい。

だって相手は、他でもない『俺のため』にお菓子を用意してくれたのだから。

その感謝は胸の内にはしまっておいてはいけない。恥ずかしさはあるが、きちんと言葉にして相手に伝えるべきだ。

気持ちをもそのまま垂れ流した言葉に、紗夜さんが振り返る。

「———そうですか。喜んでくれたのなら、頑張って作った甲斐がありました」

柔らかく、ほんのりとした笑顔。

心做しか紅葉を散らしているような、温かさを感じる顔がこちらを覗く。

「お返し、楽しみにしていますね」

そう言い残し、紗夜さんは足早に生徒会室を出て行ってしまった。

… 紗夜さんの刻む足音が消えるまで、俺はその場から動けなかった。

去り際に見せた紗夜さんの顔が頭から離れず、なぜか思考が上手く回らない。

しばらくしてようやく現実に戻った俺が思ったことは、ただ一つ。

「… 鍵、どうすればいいんだろ」

その後、鰐部先輩が生徒会室に来るまで、俺は紗夜さんから貰ったクッキーを黙って食べていた。



馬つて平均時速60kmとかで走るんだっただっけかなあ

バレンタインには苦い思い出がある。

巴の作った『とんこつラーメン味チョコ』とかいう兵器を食って腹痛を起こし二日くらいトイレの住人になったこともそうだが、それ以外にもあまり思い出したくはない、けれど決して忘れてはいけない出来事があった。

『ねーひまり。あんた、関口くんのこと好きなの?』

中三の冬。バレンタイン。

受験へのラストスパートをかけるこの時期でも、バレンタインというイベントは当たり前のように、或いは“こんな時期”だからこそ、教師陣に軽く怒られる勢いで開催された。

うちの中学は中高一貫だったが、何故か高校が女子校で、男子生徒は皆外部受験を迫られる。女子側が外部受験しない限り、男女はほぼ確実にバラバラになってしまふ、ということだ。

そんな卒業前というバイアスもあったのか、例年以上に盛り上がった今年。『友チョコだから』と念を押されてではあったが、去年よりも五個ほど多くチョコを貰った俺は、ホクホクで帰宅していた。

しかし、学校に大事な大事な参考書を忘れてきてしまい、仕方なくそれを取りにトンボ帰りしたところ。

教室の中から、そんな声が聞こえてきたのだ。

『え？　なんで？』

『いや、態度見てれば明らかだから。今年もちゃんど手作りのチョコあげてたし』

こんな盗み聞きみたいな真似は良くない。

そう思いつつも、息を殺し、聞き耳を立てる。

俺の都合のいい妄想や自意識過剰じゃなければ、多分、ひまりに好かれてるんだらうってことは何となく分かっていた。

しかもその「好き」は「Like」ではなく「Love」、つまり異性として、俺はひまりに好かれてるのではないかと、と。

直接告白されたわけじゃない。誰かからそんな話を聞いたわけでもない。

ただ普段の接し方、距離感。そんなものでだいたいは察せられる。年上好きを公言し、事実俺は年上のお姉さんがドタイプだが、ひまりのことは嫌いじゃない。正直なところ「異性」つつーより「友達」の方がしつくりくるが、「異性」として全く見ていない、ということもなかった。

当たり前だ。こんな身近で可愛い女の子がほぼゼロ距離で接してくるんだ、意識しないわけが無い。

『で、どうなの？　好きなの？』

教室の中にいるのは、ひまりと同じクラスの女子の二人だけ。いや、声がしなかっただけでもっと居たのかもしれないが、俺が確認できたのは二人だけだった。

生唾を飲む音がいやに大きく響いたように感じ、バレてしまわないかというほど強く鼓動が脈打つ。

『えー？　うーん…いや、好きだけど、友達として？　ほら、好きは好きでもLikeの好き、つてやつ』

『はっ..』

.....  
は？

『マジで言ってるの？ あんた、同学年だろうが後輩だろうが、去年までは先輩に対してさえ牽制してたじゃん』

『あー... あはは、いやまあ色々あって』

.....  
えと... つまり、その... なんだ？

あそこまで露骨だと思っていた距離の詰め方も、そこまでやるのかといっそ呆れさせしたアピールも、全部俺の思い違いで...？

ひまりのことを、特別愛していたわけではない。

もちろんほかの女子、それこそ蘭たちよりもちよっぴり特別視していたところはあるが、そう大差はないと思っていた。

しかし、蓋をあけてみればどうだ。『異性としては好きじゃない』とフラレまがいのことを言われ、俺は酷くショックを受けている。

なんで俺はこんなにショックを受けているんだろう。もしかして、俺はひまりのことをちゃんと異性として好いていたんだろうか？

...  
気持ち悪い。

ほかの誰でもない、俺自身がこの上なく気持ち悪い。

年上好きを公言して、同学年には興味がないと語り、ひまりの気持ちに気付いているつもりで、その上で気付いていないフリをし続けた。

「ひまりは俺のことを好いてくれているんだろう」なんて、そう勝手に思い込み、その気持ちには応えられないかもしれないなんて偉そうに浸って、だと言うのに心の奥底ではひまりのことを「異性」として認識していたことが、実に滑稽で、恥ずかしく、気持ち悪い。

意識されているから意識し返した。

当たり前と言われれば当たり前前なことだが、「意識されている」とい

う前提が崩れ去った今、俺はただの勘違い野郎。

『いやいや嘘つしよ。恥ずかしがってるだけじゃなくて?』

『いや、去年ってゆーか、三年に上がったくらいまでは大好きだったよ? でも海つてば「俺は年上好きだから」とか言つてき、あたしになんか全然興味なさそうだったじゃん。なんかもう諦めがついたく、みたいなの?』

『あゝ、なるほど。まあ分かるわ。修学旅行でひまりがあそこまでしたのに告白の一つもしてこないアイツが悪い』

『ちよつと! 修学旅行のアレは忘れてつて言つたじゃん!』

何やら会話の続きをしているようだが、上手く耳に入らなかつた。聞く必要もない。これ以上盗み聞きをするのはひまりにとつても、俺にとつても良いことなんてないだろう。

話が上手く聞き取れないくらいには狼狽しているにも関わらず『バレないように』ということだけはしっかりと覚えていて、足音を立てないように気を付けながら教室を離れる。

これがバレンタインの苦い思い出であり、今後俺が間違えないための教訓。

勘違いしてはいけないのだ。俺なんか好かれるわけがない、好かれる理由がない。

相手がどんなに露骨なアピールをしてきても、見え見えな気持ちだと思つても、それは全てまやかした。相手は何とも思つていない、その行為に深い意味はない。それらはただのスキンシップやその程度の軽い行動でしかないのだと、女性というのはそういう生き物なのだ、心に刻んで生きていくべきなんだ。

? ? ? ? ?

「ハッピーバレンタインー！」

土曜日、バレンタイン当日。

CIRCLEでの練習が終わり、まだまだ寒いカフェテリアではなく室内の休憩スペースにて、香澄の元気な声が響く。

その声とともに、香澄がチョコを三つ差し出してきた。俺、須田、五十嵐それぞれの分だ。

「ありがとさん」

お礼を言い、チョコを受け取る。

桜色の包装紙に包まれた手のひらサイズの直方体だ。

香澄は普段の言動こそアレだが、顔は中々整っているし、一部の男共の間では人気らしい。まあ大半は「可愛い女子」ではなく「突拍子もないことを言って場を盛り上がらせるムードメーカー」っていう認識だろうな。

本当、普段の言動はマジでアレだが、うちのクラスどころか、一年の間でも中心に近い奴だ。不意に笑顔を向けられ、親しげに話しかけられ、勘違い的に好意を抱く男も少なからず存在する。

怖いね、コミュ力おぼけは。

「じゃあ私も。ハッピーバレンタイン。あ、美穂（五十嵐の彼女）には許可取ってあるからね」

「お、マジか。気遣いまでサンキューな」

山吹さんからもチョコを貰う。

こちら香澄のものと同様、桜色のラッピングがされた箱だった。

山吹さんも、男子から密やかに人気がある。

もちろん顔が整っていることもあるが、明るい性格や面倒見の良さもあり、香澄同様何の気も無しに男共に優しく振る舞い、勘違い恋心が発生しているのだ。

怖いね、弟持ちの包容力。

「私からも、はいっ、関口くんと五十嵐くん」

「わっ 私からもほら、須田と五十嵐に。せ、関口だけにやるのもアレ

だしな」

そう言い、牛込さんと市ヶ谷さんもチョコを渡してくる。牛込さんのは白の包装紙に青色のリボンが付いたもの。市ヶ谷さんのは昨日俺がもらったものとは少し違い、透明な袋にクッキーが入ったものだった。

それぞれお礼を言い、あとはおたえかと彼女の方を見る。昨日作ってくれるって言ってたし、きつと貰えるんだろう。

「ん、じゃあ大トリ、私の番。はい、ハッピーバレンタイン」

おたえが渡してきたチョコは、香澄や山吹さんと同じ、桜色の包装紙に包まれていた。

ありがたく受け取り、お礼を言う。

「ありがとな、おたえ」

「うん。あ、感想聞きたい」

「え？ あ、うん。嬉しいよ？」

「そうじゃなくて、チョコの味。すごく上手くできた自信あり」  
味。

今ここで食べるってことか？ まあ小腹空いてたし別にいいけど。

普段貰ったプレゼントを家で開ける時はアメリカの子供のように包装紙をビリビリに破って開ける俺だが、さすがに送り主の前でそうするわけにもいかない。

慎重に接着面を剥がし、破けないように綺麗に開ける。

中から出てきたのは、一口サイズの球体のチョコレート。ピノのように並べられており、その数は六。こういう形のチョコは、確かボンボン、プラリネとかつて言うんだっけか。昔つぐパ。パに教えてもらったことがある。

「んじゃ、いただきます」

一つ取り、口に運ぶ。

板チョコよりは柔らかく、生チョコよりは硬い。サイズもあり、食べやすいチョコだ。

味の方はというと――

「…うん、うまい」

普通に美味しい。

こういう時「普通に」とか言うのと相手に失礼なんだろうから口には出さないが、良くも悪くも「普通」だ。

まあ「おたえの手作り」っていうバフがかかっているから市販のやつより全然美味く感じるけどな。

でも意外だ。おたえだし、何か変なものを入れててとおかしくないとかよつぱり警戒してたんだが、本当に普通のチョコだな。美味しい。

「どの辺がおいしい？」

どの辺が???

うーん… 難しい質問だな。俺ってばそもそも馬鹿舌だしな。正直高級イタリアンと下町食堂みたいなこのパスタでさえあんまり区別がつかないし、なんなら下町食堂の方が味が濃くて好きまである。

「うーん… まあ味に関しちや俺くっそ素人だし馬鹿舌だから上手くは言えないけど、あれだよ。おたえの手作りつてのがポイント高いよな」

おたえも黙ってれば美少女だ。何も考えておらず、脳内花園ランドで、口を開けばトンチンカンな事か音楽のことしか喋らないが、紛うことなき美少女だ。そんな女子が作ってくれたチョコが美味しくないわけがない。

必死に平常心保ってるけど、今マジで小躍りしちやいそうなくらいには嬉しいからな。

「… ふふん。ありがとう」

味についての言及はしなかったが、なんとか乗り切れたらしい。おたえもニッコリだ。

「…………… おい関口。わ、私のチョコはどうだったんだよ。もう… 食べたか… ?」

「市ヶ谷さんの？」

昨日貰ったチョコか。

中身は抹茶のチョコタルトだったな。

「食べたよ。美味しかった」

「そ、そっか！ …… ちなみに、どの辺がおいしかった…？」  
またか。俺に食レポを求まないでほしい。そんなに舌肥えてないんだって。

「うーん… さつきも言ったけど俺馬鹿舌だから、ここがどうだった、みたいなのはあんまり言えないんだけど… そうだね、手が込んでいるなって思ったよ。あと抹茶ってところが市ヶ谷さんらしいなって」  
市ヶ谷さんって『和』ってイメージなんだよな。盆栽好きだし。

「… それだけか？」

マジか。おたえと同じでこれで乗り切れると思ったが、市ヶ谷さんは手強い。

必死に昨日食べたチョコの味を思い出す。

うーん… うめえうめえつつて食べてただけで、マジで「美味しい」以外の感想がないな。

「… そうだなあ… 手作りってだけあつて真心？ みたいなのが感じられた… みたいな？ 抹茶抹茶してなくてちゃんとチョコの味もして… えー、甘すぎなくて食べやすかった。市ヶ谷さんに作って貰えたの嬉しかったし、また食べたいなとも思ったかな」

「… 私に作ってもらえて嬉しかった…」

え、何？

「… つたく、しよ、しよーがねーな！ また暇な時作ってやるよ！」  
マジでか。

俺抹茶味のお菓子とか好きだし、本当に美味しかったし、また食べられるのは嬉しいな。今度また市ヶ谷さん家の蔵行こ。

「へー。関口が貰ったのつて抹茶タルトなんだな。俺らの普通のチョコだけど。な、五十嵐」

「なっ!? い、いやそれは！ あの… あれだ！ 材料！ 抹茶の粉末がもうなくて…！」

「そうなの？ 俺も抹茶タルト食べてみたい。抹茶好きなんだよね」

お、須田も好きなのか。一緒だね♡ あんま嬉しくないな。別に嫌でもないけど。

「… 須田、お前ちよつと空気読めよ」



「え？」

「誠くん。誠くんの分の抹茶タルト、今度私がつってあげるから、ちよつと黙ろうね？」

「え？ え？」

牛込さんの圧こつわ。なして圧かけてんの？

… あ、そつか。須田が市ヶ谷さんの手作りお菓子食べたいとか言ったからか。そらしやーない。須田が悪い。

… いやいや、え？ 何お前ら。やっぱ付き合ってるの？

だったら報告あくしろ！

？ ？ ？ ？ ？

「そういえば練習、どんな感じ？」

次の予定までまだ時間があつたため、しばらくCIRCLEの休憩スペースで時間を潰すことにした俺たちは、まりなさんに許可を取ってから軽くお茶会（偽）を行っていた。

お菓子はもらったチョコ、お茶は自販機の午後ティーだ。

やはり香澄とおたえは山吹さんと一緒に作ったのか、三人のチョコはほぼ同じ形、同じ味がする。香澄のだけいくつか星型みたいなのがあつたくらいだ。

これらをうめえうめえと食べている途中、不意に山吹さんがそう聞いてきた。

「ん、順調」

順調すぎて怖いまである。

今までこんなにしつかり準備して挑むことのできるライブがあつただろうか？ いや無い。

サポートでなら何度かあつたけど、Capliberteのライブに限ったらマジで初めてなんじゃないか？ 今までよくやってたな俺ら。

「順調すぎて暇まである。コピー曲練も新曲ももう終わったし、暇す

ぎて全然関係ない曲のコピーとかしてた」

まあた須田がなんか言い出しやがった。けど本当に完璧だから困る。

「お前凄いやな。俺、まだコピー曲のドラム完璧には叩けねえもん」

「へえ。五十嵐くんがそう言うなんて、ずいぶん難しい曲やろうとしてるんだ？ 何やるの？」

「んー、まだナイショ。本番を楽しみにしててくれ」

五十嵐には苦勞をかけるな。今回の、ってか毎回だけど、コピー曲は難しいのもあるし、手数が多いわ速いわで普通に大変そうだな。

かく言う俺もコピー曲には苦戦することが多い。ギターが二本、あるいはそれ以上鳴っている楽曲をする時とか、ただコピーするだけじゃなくアレンジを考えたり、さらにはリードボーカルをしたり、つてのが大変なんだよな。まあ楽しいんだけどさ。

「ホント、須田が天才すぎて困る」

やれやれ、と大袈裟に肩を竦めていると、五十嵐が呆れたように目を細めてこちらを見てきた。

「いや、お前も中々だろ。練習中、須田が突然弾き出した曲に即興で合わせにいきやがって」

ばか言うな。俺は天才なんかじゃない。十年続けてきた努力の賜物だぞ。

「そうなんだ。どんなメタル弾いたの？」

おうおうおたえさんよ。どうしてメタルと決めつけるのか。いやまあ、ある意味これも日々の賜物か？ メタルジャンキーだと思われるてんのかな俺。

「メタルじゃないよ。J-POP？ 星街す○せいの『灼熱に○純情』って曲」

「星街す○せい？」

「そ。V T u b e r の人。歌上手いし楽曲が良いから俺CDも持ってんだけど・・・須田はよく知ってたな。普段こういうのよく聴くの？」

「そーいや俺、須田が普段何聴いてるとか知らないな。前に聞いた時は「好みとかはまだ分かんない。ライブでやる曲聴いてる」とか言っ

てたし。

「いや？ 昨日りに薦められて、今朝練習くる途中に初めて聴いた」

「クソがよ」

「何が!？」

なんで今朝ちよつと聴いたくらいのレベルなのにあの曲のベースをほぼ完璧にコピーできるんだよ。意味わかんねえ。あーあ、これだから天才はよお。

「でも、須田がそんなに暇ならライブでやる曲増やすか？ たしか、まだ持ち時間には余裕あつたよな？」

わりとガチで須田に対し引いていると、五十嵐がそう提案してきた。

「持ち時間は二十分くらい余裕あるし、曲増やすのはいいけど… お前が大丈夫か？」

「まあなんとかかなんذار。まだ本番まで期間あるし」

こいつもこいつで中々なんだよな。

「あー… じゃあ増やすか。何やりたいとかある？」

「俺は特にねえかな。須田は？」

「んー？ んー… なんでもいい！ 曲増やすのは賛成」

なんでも良いが一番困るんだよ（主婦）

そうだなあ… あ。

「じゃあX J A O A N やろうぜ。二曲くらい」

「曲は？」

「んー、紅はやりたいし… そうだな、R u s t y N O i i とか？」

「お、それならいける。紅はこの前のライブで叩いたし」

「俺もいーよ。X J A O A N 楽しいし」

「んじゃ決まりな」

R u s t y N O i i やるならキーボード欲しいな。つぐに頼んでみるか。紅はギターでなんとかなるとして… ギターが二本欲しいところだけど、まあキーボード入るならなんとかかなるか。

「X J A O A N やるの？ 私もやりたい」

「おいおたえ、私らもそのライブ出るんだぞ？」

「分かってる。大変だと思うけど、どっちも手は抜かないよ。海たちとライブするの、すつごく勉強になるんだ。ポピパのためにも私もっとギター上手くなりたい」

「おたえお前…」

「おたえちゃん…！」

… えっ 何？ なんてちよつと「感動した！」みたいな空気になつてんの？

「… ま、いいや。じゃあおたえ、一緒にやろうぜ」

「やった。私、頑張るね」

むんむん！ と気合いを入れるおたえ。まあこいつなら大丈夫だろ。リードリードギター。ツインギターにおいて、主にピロピロ鳴ってる方のギターのこと。もう一つのコードを弾いている方をバックギター、リズムギターなどという。バックギターの方が負担が少ないことが多いは俺が弾くし、そこまで負担はかけないつもりだ。紅はこの前おたえも弾いたしな、いけるだろ。

「おたえちゃんが入るならほかのコピー曲にも入ってもらおうか？ 関口、もう一人ギターが欲しいいつってたら」

須田が提案してくる。

まあ居てもらった方がありがたいっちゃありがたい。本家はギター一本だが、明らかに二本以上鳴ってるんだよな。

「やっていいならやるよ。たくさん弾けばたくさん上手くなる」

うーん、脳筋。だが真理でもある。一日八時間練習しろ（ミ〇ク）「じゃあ決まりで。X J A O A Nはキーボードも欲しいし、あとでつぐにも声かけとくよ」

そういうことになった。

？ ？ ？ ？ ？

C i R C L Eを出て、一人羽沢珈琲店に向かう途中。

「ふええ…。」

道に迷っている松原さんを発見した。

いや、まだ迷っているとは決まっていけないが、あんな何も無い道端で一人で「ふええ…。」ってたら迷子一択だろう。松原さんだし（決め手）

仕方ない。ちよつと助け——

「おや、花音。こんなところで偶然だね。どうしたんだい？」

白馬の王子様が来やがった。

比喻でもなんでもない。白馬に乗った王子様瀬田先輩が来やがった。

面倒くさい予感がプンプンする。瀬田先輩が来たし松原さんも大丈夫だろ。ここは見なかったことにしよう。

「か、薫さん…？ 良かったあ…！ えつとね、道に迷っちゃつて…。」

やっぱり迷子だったか。

つーか馬にはノータッチか？ まあいつか。俺には関係な——

「おや？ そこにいるのは仔犬くんじゃないか！」

見つかったア…（逃○中）

「あら、海じゃない！ こんにちは！ 今日も良い天気ね！ なんだか良いことがありそうだわ！」

お嬢もいるとか聞いてないが!?

今どつから出てきた!？ さつきまで絶対にいなかったら、瞬間移動の類か!？ お嬢ならやりかねないな（絶対的信頼）

「…うつつ」

見つかったからには無視するわけにもいかない。別に嫌いってわけじゃないしな。突然『笑顔大作戦』なるものに巻き込まれたり拉致られたりするのが怖いだけで。

「あ、海くん、こんにちは」

松原さんは癒しだが、お嬢と瀬田先輩がいる中じゃ申し訳ないけど戦力にならない。奥沢さんプレイヤー役どこいった？

「海は何をしていたの？」

お嬢のいる所奥沢さんミツシエルありだと思っただけだが、どうにも見当た

らない。マジで何やってんの、あんたお嬢の保護者だろ。目を離しちゃいけませんよ。

「ちよつとこれから用事で——」

「あたしたちは楽しいことを探している最中よ！」

「話聞けや」

そつちから振つてきといてそれはないだろ。

「仔犬くんの用事は急ぎのものなのかい？」

お、瀬田先輩もたまにはこつちの話を聞いてくれるんだな。いやまあ、毎回ちゃんと聞いた上で無視してる節はあるけど。

「急ぎつちや急ぎですかね。ひまりたちアフグロと待ち合わせしてるんですけど、約束の時間、そろそろなんで」

あんまり効果はないが、この後付き合うことはできないよと示しておこう。お嬢もそこまで他人の事情を考えないやつじゃない。そう信じたい。

「あ、そういえばひまりちゃんが『最高の友チョコを見つけた！』って、言つてたような…？」

見つけた、なのか。

じゃあ今年は手作りじゃないんだな。ちよつと残念だけど、まあ俺もお返しは毎年市販品だし、文句は言えないか。

「友チョコ？ それはどんなチョコなのかしら」

「あれ、お嬢知らない？ バレンタインで友達同士で渡すチョコのことを友チョコって言うんだよ」

「そうなのね！ じゃあこれは友チョコだわ！」

これ？

お嬢は何も持っていないように見えるが…

「黒服さん！」

「はい。こちらが本日、ハローハッピーワールドの皆様にお配りするチョコになります」

うつわびつくりした。突然虚無から出てこないでほしい、心臓に悪いんだよそれ。黒服さんも中々神出鬼没だよな。忍者か？

それにしてもそのチョコ、なんか高級そうな紙に包まれてるけ

ど… まあ「そう」じゃなくて実際超高級なものなんだろう。なんせ世界のTURUMAKIだし。

「あ、そうだ！ 海にもあげるわね、友チョコ！」

お嬢の言葉に従い、黒服さんが箱を渡してくる。

宝石とか家具とか絵画とか、そういつたガチで億単位の品物すら持たされてきた俺だ。今更高級チョコ程度で腰が引けることはないが… それはそうと緊張はするな。

「あ、ありがと。でもいいの？ これ、今からハロハピに配るんでしょ？」

「大丈夫よ、たつくさんあるもの！」

さいですか。

このチョコ一箱でエフエクターくらいは買えそうだなあなんて思いなながら、背負っていたギターケースのポケットにチョコの箱を入れる。

「すまない仔犬くん。私もチョコをあげたいところなんだが、生憎と今日はハロハピの分しか持っていないくてね。また後日、ということです許しておくれ」

「あいや、別に大丈夫です。そんな気を使わなくても…」

「いや——いいや！ 仔犬くんにはお世話になっているし、今後とも良き隣人でありたいと思っている。このくらいはさせてほしい。せめてもの気持ちさ」

なんか薔薇咲いたんだけど。何これ、幻術？

それにしてもクツソ顔がいいなこの王子。ちよつとくらいクサイセリフを吐いたところで滑稽じゃないっつーか、むしろ様になっている。羨ましい。

ま、この人に限っては普段の言動の方が滑稽だけだな。

「ご、ごめんね？ 私も、明日バイトの時に渡すつもりで、今日は持ってきてなくて…」

「いや、マジで大丈夫です。てか松原さんもくれるんすか。嬉しっす」  
やったぜ。

バ先で貰うとちよつと変な噂が流れそうだが、まあいつか。学校と

は違い、周りが鬱陶しくなったら辞めればいい。責任感がないと言われるかもしれないが、こちとらただのバイトだしな。

それにうちのクラスメイトがやったみたいなのな制裁は待ってないはずだ。多分。

「では仔犬くんもこの後用事があるようだし、私たちも行こうか。美咲やはぐみとの待ち合わせにはまだ余裕もあるが…『安心、それが人間の最も近くにいる敵である』。つまり、そういうことさ。花音、私の後ろに乗るといい」

「ふええ…？」

最近の瀬田シェイクスパアはわりと的を得たこと言ってるな。前もつと脈絡もない名言ぶっぱなしてたけど。

つーか馬に乗れって、いくら瀬田先輩と松原さんが軽いつつても馬への負担ヤバすぎだろ。しかもここコンクリだぞ。動物愛護団体が黙っちゃいなさそうだな。

「あたしも乗りたいわ！」

「すまないところ。シルバーは二人乗りが限界なんだ」

スネ夫みたいなこと言うな。せめてシェイクスパアの引用であれよ。

でもこれは意地悪とかじゃなくガチ理由っぽいな。そもそも二人乗りすら怪しいって俺は思ってるけどね。

「そうなの？ お馬さんに乗ってみたかったけど、それなら仕方ないわね」

「お嬢様。馬の用意が出来ました」

「あら、ほんと？ ありがとう、黒い服の人達！ いったいどんなお馬さんなのかしら。すっごく楽しみね！」

馬の用意が出来ました、じゃないんだよな。相変わらず異能力みたいな対応しやがって…。俺も乗馬体験してみたい。今度頼んでみようかな（順応）

「それじゃあ海、また会いましょうねー！」

「ふっ… 儂い…」

「ふっ ふええええええ……………」

「!!？」



瀬田先輩の愛馬と不思議パワー（黒）で召喚された馬に跨り走り去る三人と、その馬と併走して行った黒服さんたちを見送り、俺は再び羽沢珈琲店を目指して歩き出す。

「……馬って平均時速六十kmとかで走るんだっつけかなあ」

やっぱあ黒服さんの人ら人間じゃねえ。

お嬢やはぐみなんて目じゃあない。本物の“怪物”はあの人らだっただ。

黒服さんらだけは敵に回さないようにしよう。そう心に決めた。

ラブコメじや幼馴染みは負けるのが定番だけど、これは現実なんだから。

バレンタインデーには、色んな思い出がある。

巴がとんこつラーメン味のチョコを持ってきて軽いテロを起こしたこと。蘭が「バレンタインとか馬鹿じゃないの」って言いつつしっかりお高めな良いチョコを用意してきたこと。つぐが覚醒して『ノイシュバンシユタイン熊本城 くバーストエンド』とかいう神秘の塊みたいなチョコ(?)を作ってきたこと。

そして、好きな人に「お前のチョコが一番美味しかった」と微笑んでもらえたこと。

彼は「バレンタインなんて、上級者」しか嗜めない贅沢な祭典だ。贅沢は敵だ」とか「聖人の命日になに騒いでやがる、宗教ニワカ共め」とか、そのほかにもわりと危険思想じみたことを色々言っではいるが、なんだかんだ毎年渡したチョコはしっかり食べてくれるし、お返しもきちんとかくれる。

今年もきつと、いつも通り。

チョコを渡して、「ありがとう」とか「美味しかった」とか月並みだけど嬉しい言葉を返してもらって、照れ隠しにホワイトデーのお返しを要求してお茶を濁す。今まで何回も繰り返してきた、いつも通りバレンタイン。

.....  
それでいいのかな？

高校生になって、海の周りには女の子が大勢集まってきた。

もちろん、みんながみんな彼に恋愛感情を向けているとは思わないし、海も今のところ好きな人がいる雰囲気はない。

けど、それがいつまでも続くなんて思えない。

海は魅力的だ。とつてもとつてもかっこいい。いつも海と一緒にいる女の子の誰かがコロッと堕ちてもおかしくない。それに海だけで、誰かを好きにならないなんて保証はどこにもない。

現に昔、希さん（海の姉）の同級生に恋していたと本人が言っていたことがある。その人はデキ婚してしまい失恋に終わったから良いものの、次はないかもしれない。

バレンタインデーは不思議な日。

女の子に勇気をくれる特別な日。

こうしている今も、もしかしたら誰かが海にアタックしているかもしれない。私がいとも通りやっていたら、先を越されるかもしれない。

そんなのは嫌だ。私の方が前から好きだった。一度諦めたことがあるといつても、そんなのはたった二、三ヶ月の話。何年も想ってきた気持ちは再燃し、今なお高まり続けている。この気持ちは誰にも負けない自信がある。

誰にも盗られたくない、だなんて思って何も行動しないんじゃない、ほかの誰かにあつきり横取りされても文句は言えない。

だったら、行動に移さなきゃ。フラれちゃったらどうしよう、ウザがられたらどうしようっていつもは怖がって尻込みしてばかりだけど、何と言っても今日はバレンタインデー。女の子に勇気をくれる特別な日。

今日は少しだけ、いつもよりたくさんのアプローチをしてみちゃおうかな。

? ? ? ? ?

カランコロン、と来店を告げる鐘が鳴る。

うっすらと暑さすら感じるほどの暖房が効いた店内に外の風が吹き込み、弛緩していた肌がキュツと締まった。思わず伸びた背筋を少し捻り、店の入口を見る。

「やっぶく…」

寒風と共に入店してきたのは、今日の主役であり脇役の海くん。

彼の登場に、窓際の席から声が上がる。

「海おっそーい！ こっちだよ、こっちく！」

元気の良い声だ。若干元気すぎる気もするが、今日くらいは許そう。何と言っても今日はバレンタインデー。彼女も気合いが入っているんだろう。

「うっせ、店内だぞ。あ、お邪魔します」

「いらっしゃい、海くん。今日はいつもとより濃にいめがいいのものが良いかな？」

「あ、それをお願いします。ありがとうございます」

今日は甘いものを渡されるだろうから、それに合わせていつもより苦いコーヒーが欲しいかと思いついて提案してみたら、ドンピシャリ。

律儀にお辞儀をしてくる海くんに「すぐ淹れるね」と言い、準備を始める。

チョコや糖分の多いお菓子とコーヒーの食べ合わせは案外悪い。チョコ、コーヒー両方に含まれるカフェインの過剰摂取、またカフェインには糖質を中性脂肪に変える働きがあるためだ。

しかしまあ、そんなものを無視できるほど、甘いものを食べた後にはコーヒーが飲みたくなる。僕なんかとは違い、彼はまだ若い。糖尿病の心配もそこまでする必要はないだろう。

「もうみんな揃ってたんだな」

「海が遅いんだよっ」

「時間通りだろうが。全然待つてないよの一言くらい言ってみろ」

「そういうの、普通は男側が言うセリフなんじゃないの」

「甘い蘭、その発言は炎上の元だよ。今どき世間はそういうのうるせーんだからな。なあ巴」

「なんでその流れでアタシに振るんだよ」

「海の中でトモチんって男判定なの？」

「ちげーよ。巴は女子だろ。なあつぐ？」

「え、なんで次は私…？」

「特に意味なんてないでしょ。海だし」

海くんには悪いが、きつと蘭ちゃんの言う通りだろうな。

聞こえてくる会話からそう考えながら、コーヒー粉を入れたドリツパーにゆつくりお湯を注いでいく。うちは長年ペーパードリツプで一杯一杯コーヒーを淹れている。ここをおざなりにしては、美味しいコーヒーは淹れられない。

粉全体にお湯が浸み込む程度に、中央から外側に向けて螺旋状にお湯を注ぐ。

「ま、海も来たことだし、そろそろ始めるか！ チョココ交換会！」

「バレンタインのことチョコ交換会って言ってるの巴くらいじゃね」

「だってそうだろ？ あ、海は時差交換だけだな」

「時差交換」

巴ちゃんは何んと言うか、昔から変わらないなあ。

二回目の湯注ぎを始めつつ、感想を抱く。

二回目は風味が一番良く出る工程だ。今度は全体ではなく、中央に集中してお湯を注ぐ。ドリツパー内の湯量が増え、表面が平になるまで注いでから一旦止める。こうすることで風味豊かな味わいが引き出されるのだ。

「んじやアタシからな！ 今年はクッキーにしてみたんだ。あこが『リサ姉や紗夜さんみたいなクッキー作りたい！』って言うから、一緒に作ったんだよ」

「…………… な、なあ巴。ちなみにこれってさ… その……………」

「ん？ あー、味か？ 安心しろって！ 前にとんこつ味を出して失敗してるからな。いやアタシは失敗だなんて思ってたないんだけど」

「アレを失敗じゃないって言えるって、ある意味才能だよな」

「俺はまだ忘れてないぞ、あの日の衝撃を」

「あはは… ま、まあ、独創的な味… だったよね…？」

「な、なんだよお前ら！ そこまで酷くはなかっただろオ!? なあモ

カ、ひまりー！」

「のーこめんとー」

「巴、食べ物ってね？ やっぱり食べ合わせとかあると思うの。美味しい×美味しい＝超美味しい！ じゃないんだよ」

酷い言われようだ。可哀想になってくる。が、確かにアレは凄かった。僕も興味本位で一つ貰ったが、訓練していなければ危なかった。なんというか…………… うん……………

三回目の湯注ぎを始めようとし、過去の思い出が蘇る。

三回目からはタイミングが重要だ。中央が窪み、二回目で出来た泡の表層が崩れないうちに三回目を注ぐ。湯量は二回目の時より少なめに。三回目以降は徐々に減らしていくのがマストだ。

「だあア!! わーってるよ！ だから今回は普通にチョコ味だから！」

「ならいいんだ。ありがたく貰おつと」

「ん、ありがと巴」

「トモちゃんさんきゅー」

「私も一袋貰うね？ ありがとう、巴ちゃん」

「チョコ味なら私も貰うー！」

「お前ら、たまにひでーよな…。」

「あはは……。えと、それじゃあ次、時計回りでいく？ モカちゃん」

「ほいほーい。はっぴーばんぱれびーん」

「なんて？」

「気にしない方がいいよ、巴。モカの狂言に付き合ってたらキリないから」

「モカちゃんからのお菓子は、じゃじゃーん、チョココロネ」

「モカ、去年もチョココロネだったじゃん」

「ちつつち、甘いのお菓子ちゃん。去年のはスーパードで特売だったやつで、今年のは山吹ベーカリーのやつなんだよ」

「え、そんなに違うの？ 同じチョココロネじゃない？」

「それが全然違うんだな。トンビと鷲くらい違うよ」

「また微妙に分かりにくい例えを……。」

山吹さんのところのパンは一味もふた味も違うからなあ。美味しい、食パンは山吹ベーカリーから仕入れてるくらいには僕もファンだ。

四度目のお湯を注ぎ終わり、今日はまだ食べていない山吹ベーカリーのパンに思いを馳せる。

海くんに出す用と、自分用で二杯分、ちょうど良い量のコーヒーが完成した。いつもなら仕事中に商品を自分で飲むなんてことはしないけれど、なんてったってバレンタイン。この後のことを考えれば、コーヒーが飲みたくなる。今日くらいは許されるだろう。

「… あたしのはチロルチョコ。手作りとかできないし。味の種類だけは揃えてるから、好きなもの持ってって」

「とか言ってるモカちゃん知ってるんですよ？ 蘭がわざわざ書店で買ったチョコ作りの雑誌を見て、夜な夜な試行錯誤、手作りチョコを作ろうと頑張ってる、でも結局上手く作れなかったんだよね？」

「は？ 違うから。雑誌じゃなくてサイトを……。あ、違う今

のなし。練習とかしてないから」

「蘭、手作りしてくれようとしてたの!? うっそ、ホントに? 嬉しー!」

「つたく、素直じゃねーな」

「蘭ちゃんの気持ちだけで嬉しいよ!」

「は、いや、ホント違うから! モカが勝手なこと言っただけでホント...!」

「照れんなって。にしても蘭の手作りか。食ってみたいな。抹茶とか入ってそ... っっていつてえ!!?」

「うっさい。ほんとうるさい」

「なぜ俺だけ殴る!?!」

蘭ちゃんも相変わらずだなあ。俯瞰して見れているから可愛らしい一面だつて分かるけど、十代で、しかも同期のアレを楽しめるほど噛み分けた子はそうそういないだろう。海くんなら理解できそうなものだけど、あの子、実害（拳）を被ってるしなあ。

温めておいたコーヒーカップにドロップしたコーヒーを注ぎながら、そういうのを経験してみんな大人になっていくんだよと内心アドバイスを試してみる。

最初にお湯を注ぎ始めてから二分と四十秒。中々ベストな時間で完成したコーヒーを持ち、海くんたちのいるテーブルへ向かう。

「それじゃあ次は私だね。ハッピーバレンタイン! 私はチョコカツブケーキだよ」

「お、今年は普通な感じなんだな。一昨年みたいなあのヤベーやつみたいなのじゃなくて」

「あー... ごめんね? 期待外れだったかな...」

「え? いやそんなことは全然——」

「発言には気を付けろ小僧。僕は今、アツアツのコーヒーを持っていく」



「マジで期待外れとかじゃなくてわーいチョコカップケーキすっごい美味しそー!! 食べていい? いいよねいっただきまーす!!!  
..... あ、めちやくちや美味い」

命拾いしたな小僧。それで『普通に』美味しい』とか言つてたら今頃この熱々コーヒーがキミの洋服とフュージョンしていたところだ。構えていたコーヒーをテーブルに置きながら、本当に美味しそうにつぐみのカップケーキを食べる彼の横顔を見る。嘘はついていない様子だ。なら良し。

「じゃあ最後は私! ふっふっふー! 今年はすごいよ?」

自慢げに胸を張るひまりちゃん。

なんとも可愛らしいことだ。

「あー。ひまり、なんか『最高の友チョコ』つてのを手に入れたんだって?」

「え!? ど、どうしてそれを...!?」

「さつき松原さんから聞いた」

「海、花音先輩と会ったの!? さつき!」

「おん」

「チョコ貰ったんでしょ! 絶対そうだ!」

「いや、貰ってねーよ。なんか今からハロハピで友チョコ交換会があるんだってさ。お嬢と瀬田先輩とも会ったぞ。お嬢からめちやくちや高級そうなチョコ貰ったけど」

「うわーん!!! そんなのと比べられちゃ勝てないよお!!」

「あー、よしよし。おい海、ひまり泣かせんなよ」

「え、これ俺が悪いの?」

海くんが悪い。

今からチョコを渡そうって子に対して「ほかの女の子からチョコ貰ったぜ」発言はダメだよ。さすがに擁護できないね、これは。

「えー... いやごめんて。でも『余ってるからあげるわ!』的な感じだったし、何よりここで貰うチョコが一番楽しみだったよ」

「ほんと……？」

「ほんとほんと」

お、今のは良いフォローなんじゃないか？

多数チョコを貰ってます発言はどうかと思うが、言ってしまった後のフォローとしては妥協点だと思う。

「…ちなみに、こころ以外からも貰ったの？」

おおー。結構攻めるなあひまりちゃん。ダメな方に。

そんなの「貰った」って返事が返ってくるに決まってるのに。自分から自分の地雷踏ませに行ってるよこの子。まあそういうの、この年頃の子は自分じゃコントロールできない感情なのかもしれないなあ。

「ありがたいことに貰ったぞ。友チョコと…あと変なの」

「変なの？」

ほらやつぱり。でも変なのって何だろう？

蘭ちゃんの質問への返答に聞き耳を立てながら、ゆっくり配膳していく。

「いや、なんか将来俺が有名になるかもだから、今のうちに唾つけときたいって。突っ返す訳にもいかないから受け取ったけどさ、アレまじ何？」

なんだそれ…

まあ海くんのバンドはどうやら人気があるし、海くん自身もテレビに出たことがあるから、もしかしたら有名になるかもしれない。けどその下心を口に出して、しかも本人に伝えるっていうのは、照れ隠しだとしてもちよつと、いやかなりセンスが無いかな。

「おおく。じゃあモカちゃんも今のうちにサインもらつとこーかなー」

「どうすんだよそれ」

「海が有名になってプレミア付いたら売る」

「おい」

せめて飾ってあげなよ、と思いつつ配膳し終わり、「ごゆっくり」と言い残してテーブルを離れる。

しかし海くんも罪な男だ。ひまりちゃんはずっと片想いだし、高校

生になってからも着々とガールズを増やして行って…ほんと、刺されないように注意しなね。

? ? ? ? ?

私の想い人は、どうやらたくさんチョコを貰っているらしい。

さつきは知らないフリをしちやっただけど、花音先輩が海にチョコをあげるつもりがあるのは知っている。この前先輩から直接聞いたから。

それをとやかく言う権利は、今の私にはない。

海が誰と仲良くしようと、誰に想いを寄せられようと、誰と付き合おうと…ただの幼馴染でしかない私に口を出す権利はないんだ。

毎年恒例のバレンタインイベントが終わり、そのまま皆で遊びに出かけ、その帰り。

皆と別れ、各々の家の前まで送って、その最後。

蘭も送り届け、私は海と二人きりになった。

「…ね、ねえ海。ちよつとき、寄り道していかない?」

日はとつくに地平線に沈み、辺りが薄暗くなってきた時間。

私を送ると言い一緒に歩いてきた海に、そう言う。

「いいよ。そういう商店街の方に新しいラーメン屋が出来てたな。そこ行くの?」

「いやラーメンじゃなくて」

「じゃあ甘味系? スイパラとか」

「甘味も食べないよ!」

「…大丈夫か?」

「何が!」

海は私のことなんだと思ってるの!?

うう…食べる量減らそうかなあ…せめて海の前だけでも…

「そうじゃなくてその、ちよつと散歩というか…」

「散歩？ … あーね。おけ、いいよ」

何の納得なんだろう…

ま、まあいいや。おっけーしてくれたし。

家へ向かう道から外れ、お夕飯の匂いが漂う住宅街の中を海と歩く。

お魚を焼く匂い、お肉を焼く匂い、ソースの匂い、塩の匂い、変わり種でパンケーキの匂いもしてくる。うう、お腹鳴りそう…

『突撃！ 隣の晩ご〇ん』って番組、昔やってたよな」

急に海が眩く。

お夕飯の匂いを嗅いで思い出したのかな。

「あー、やってた！ 私たちが小学校低学年くらいの時に終わっちゃったやつだよな」

「終わってはねーよ。放送局変わったただけで。まだやってるんじゃない？」

「そうなの？」

「知らんけど」

ポチポチとスマホを操作する海。

数秒程して、画面を見ながら「あー…」と漏らした。

「ごめん、今はやって… いや？ 昼ごはんver.ならやってんのか？」

「へー」

「うわ、興味無さそう」

「え？ い、いや、そんなことないよ？」

実際そんなに興味はない。

けど、ちよつと昔のことを思い出したな。

「そういえばその番組、小学校の頃一緒に観たことあるよね」

「そうだった？」

「そうだよ！ 忘れたの？」

首を傾げる海に、少しだけ感じた不満を隠すことなくぶつけてみる。

そうすれば海は困ったようにさらに首を傾げ、目を閉じ、必死に思い出そうとしていた。可愛いなあ、なんて思う私はきつと意地の悪い子なんだろう。

「ほら、海が初めて私の家で晩ごはん食べた時！」

「え〜…？ …… いや、あの時はへき〇ゴン見てたろ」

「え、そうだったっけ？ いや絶対隣の晩ご〇んだったよ！」

「いや、へき〇ゴンだね。俺、その日に初めて『羞〇心』聞いたんだもん」

『羞〇心』！ なつつかし〜！ 昔海が弾き語りやってたよね〜」

「あー、やったやった。今思い出すと全然弾けてなかったのにさ、自慢げにひまりたちに聴かせてんの。恥っずいわ」

「え〜？ かわいいーじゃん。あ、そういえばさ、小学校の頃——」

会話が弾む。

昔話に花が咲く。

… そう。昔話にばかり、花が咲く。

私たちはずっと一緒にいた。同じ時間を刻んでいた。お互いの生活で知らないことはほとんどなかった。

朝の眠たそうな顔。授業中の真剣な顔。給食で好きなものが出てきた時の顔。昼休みの何気ないお喋りで笑っていた顔。

それを今、私は見ていない。

海と学校の話になると、知らないことばかり耳にする。

高校になったら別々になる。それは私が内部進学をすると決めた時から分かっていたことだ。

けど、やっぱり——

「ねえ、海。海はさ、今、楽しい？」

ふと、そんなことを口にした。

なんで出したのか自分でも分からないセリフ。

「今？ そうだなあ。バンドも出来てるし、バイトもまあ楽しいし、学校も——」

「私はね、ちょっと寂しいよ」

自分から聞いたのに、海が言おうとした言葉をそれ以上聞きたくなくて、咄嗟に遮ってしまおう。

こんなことを言うつもりは無かった。けど、一度口に出すと止まらない。

「学校に行つて、授業を受けて、お弁当を食べて、蘭たちとお喋りして、バンドの練習をして。いつも通りだけど、いつも通りじゃない。これがいつも通りになって欲しくない」

小説なんかで『ダムが決壊したように』なんて表現を見るけど、アレはこういう気持ちなんだろうなって、少し俯瞰している自分もいる。

不思議な気分。きっと良くはないんだろう。海もどう反応したらいいのか分からなくて困つてみるみたい。

悪くなって思いながら、でももうちょっと困らせたいだなんて思つてもいる。気持ちが安定しない。頭の中で纏まる前に、口から言葉が吐き出される。

「私ね、海と同じ学校に行けば良かったなって、時々思うんだ。蘭たちと一緒に嬉いよ？　けど、花咲川に行つて、海とまた一緒に学校行つて、一緒に授業受けて、一緒にお弁当食べて、みたいなの。昔みたいなの『いつも通り』が懐かしくて、寂しいなって思うの」

なんの話をしてこんな話になったんだっけ？

あんまり覚えてないけど、ここまできたら言い切つてしまおうか。そんな気持ちになる。

「…んなこと言つてもお前、今でも十分一緒じゃんか。バイト先も一緒だし、こうやって遊んでるし。週に二、三回は会つて——」

「足りないよ」

全然足りない。

海の事は全部知つていたい。

何を見たのか、感じたのか、考えたのか。

誰と仲が良い、誰のことが苦手。

アレが面白かった、悲しかった、嬉しかった、腹が立った。

全部全部、海の全部を知っていたい。  
…これはちよつと重すぎるかな。

最後の最後で働いた理性のおかげて、そこまで吐露することはなかった。ありがたい。よく踏ん張ったね私の理性。これからもよろしく。

「……もつと遊ぶ頻度を増やしたいってことか？」

こういう時、まるでわざとなのかってくらい海の勘は悪くなる。

いつもは気付かれたくないことまで読み取ってくるくせに、ホント、何なんだろうこの男は。

「……ううん、なんでもない。ごめんね？ 突然変なこと言つて」

遊ぶ回数が足りないとか、そういうことじゃない。

そう言おうとして、やっぱりやめた。

一度流れた言葉は中々止まらないけど、一度理性によつて塞き止められたら簡単に止まる。単純で難しい人間の心理。

「……」

「……」

無言の時間が流れる。

私はもう止まってしまったし、海も何か考えているんだろう。真剣な顔で、ちよつと眉間にシワが寄つてて。少し下を向いて歩いてる。いつもならお互い無言でもそんなに気にはならなかったけど、今はとつても居心地が悪かった。

周りはすっかり真つ暗になっていて、空には薄らと星が見えていく。

目を凝らし、星々を見つめ、ゆっくり歩いた。

「……ねえ、海」

立ち止まつて、海の方を向く。

下を向いてた海の顔がこつちを見た。たつぷり三秒、目と目が合う。

一度視線を外して、カバンから小包を取り出し、それを差し出した。不思議そうに小包を見る海に、作った笑顔を向ける。

「はいこれ、プレゼント。バレンタインの」

そう言って、受け取ってほしいと小包を更に前に突き出す。

一瞬迷っていた海だけど、すぐに受け取ってくれた。

「バレンタインって、チョコはもう貰ったけど」

受け取りながら、やっぱり不思議そうに聞いてくる。

『友チョコ』じゃないよ。言っただでしょ？ プレゼント」

「プレゼント？」

「うん、そう」

海は友達、親友だ。だからチョコをあげた。蘭たちにもあげたものと同じ、『最高の友チョコ』を。

でも、海は私の特別な男性ヒトでもある。だから、友チョコじゃない、バレンタインのプレゼント。

まだ、そんなことを口には出さないけど。

「…ま、くれるってなら」

疑問は晴れないけど…と書かれた顔で、海は確かにプレゼントを受け取った。

「ね、開けてみてよ」

「(´▽`)?」

「うん」

もう空は真っ暗だけど、街灯に照らされて道は明るい。

包み紙を丁寧に開けて、海はプレゼントの中身を取り出した。

「これ、ピアス？」

右手に取り出したプレゼントを乗せて、私にそう聞いてきた。

「そうだよ、手作りピアス！ ハンドメイド教室行ったり、動画で勉強したりして作ったんだ。どう？ けっこー綺麗でしょ」

「いやまあ、確かに綺麗だけど…」

ゴテゴテした装飾が苦手な海も気に入るようにと、黒い天然石が一つだけ付いたシンプルなピアス。それを片耳分。

年が明ける前から準備して、何度も何度も失敗して、ようやく出来た自信作。

「でも俺、ピアスの穴無いしなあ」



「開けよーよ」

「いや、校則が」

「ワガママ言って学校に免許取得を認めさせといて何言ってるの？」

ついこの間、自慢げに言ってきた「俺は校則を塗り替えた男」というセリフ。

内容を聞けばただこのころの家の権力を借りただけで海は何もしていないけど、あんな自慢をしてきたのに今更ピアスは校則違反だー、だなんて言わせないから。

「実は私、今日ピアッサー持ってきてるんだよね」

「ここで開けんの!？」

逃げるように数歩下がり、バツと耳を隠す海。

あははと笑って怯える様子の海を見る。

さつきまでの無言が嘘みたいに騒がしく、楽しい雰囲気。

「ジョーダン、ジョーダんだよ海! 今からウチ行こつ。あ、でもここからだと海の家の方が近いかなあ」

「いや、つーか俺まだ開けるとは一言も言ってるな——」

「あれ〜? もしかして海、怖いのか?」

「はあ!? ベつ、別に怖くなんかありませんけどお!？」

少し挑発してやれば、簡単に乗ってくる。

相変わらずチョコロチョコロのチョコロ助さんだなあ。そういうところも可愛いんだけど、ちよつと心配でもある。悪い女に騙されないよう、私がしつかり見とかなきゃ。

「あははー。じゃあ行こつ!」

海の手を取る。

異性の手を握るなんて好きじゃない男の人には絶対しないんだけど、そういうの、海はきつと分らないんだろうな。

それだけじゃない。

ピアスをプレゼントすることの意味も、海の誕生日に私があげたネックレスの意味も、海はきつと知らないし、やはり気付きもしないんだろう。

それでいい。今は、それで。

でも、もし海がプレゼントの意味に気付く日が来たのなら。その時は――

「海っ！」

私に引つ張られる形で着いてくる海に、自然と湧き出たとびつきりの笑顔を向けて高らかに言い放つ。

「ハッピーバレンタイン！ これからもずっとずっとよろしくねっ！」

今できる、精一杯の告白を。

男の子には隠すべきものが多いから女の子はアポ無しで部屋に入ってくるな。

「あゝゝゝ… さつぷ…」

朝。

登校するために家を出ると、冷たい風が肌を刺した。カチカチと鳴る顎を隠すようにマフラーを巻き、エレベーターに乗って一階へと降りる。

「… やっぱなんか違和感あるんだよなあ」

エントランスを抜け、通学路に入ったところで左耳を軽く触った。一昨日、半ば無理矢理ぶち開けられたピアス穴。まだ少し痛みがあるが我慢できないほどではなく、痛みよりも違和感の方が強い。

そのうちピアスも付けてみたいとは思っていたが、こんなに早い段階で付けることになるとは思っていなかった。

「あ、そうだ」

思い出し、スマホを立ち上げる。

昨晚、俺が寝た後に届いたらしいひまりや丸山さん、リサさん、松原さん、それから須田からのLINE通知が画面に表示されていた。軽く確認するが、どれも特に緊急性はない他愛のない内容。すぐに返信する必要はないだろう。

そう判断し、それらを一旦無視してとある人物へ電話をかける。

「あ、もしもし黒服さんですか？ おはようございます。ちよつとお願いしたいことがあって… はい、はい… また校則を変えたくて… はい、ええ、対価は前回と同じお嬢のワガママに文句を言わず付き合う券三枚で。はい、よろしくお願いします」

ということまで黒服さん（弦巻家の威光）を頼り、学校側にピアスを許可させる準備を始める。

まあ準備とは言っても、俺がやることはここでほとんど終わり。あとは黒服さんたちが万事上手くやってくれるだろう。

信号待ちしている間にLINEの返信を打つ。

『クラゲドリーム館、俺も気になります。機会あれば行きましよう』、っと。松原さん、ホントにクラゲ好きだな」

クラネタリウムなるクラゲ展示がされているという、クラゲドリーム館という愛称の水族館。山形県にあるらしいその水族館が気になって今度一緒に行ってみたいと言う松原さんに、同意する返信をする。

にしても山形は遠いなあ。電車じゃしんどそうだし、行くならやっぱり誰かに車を出してもらうのが良いか？ 姉ちゃん…はダメだな。いや、ダメっつーか嫌。対価に何を要求されるか分かったもんじゃない。

まあその気になれば弦巻家が車でもヘリでも出すだろう。俺は最近色んなことお願いしすぎて気が引けるから、松原さんをお願いしてくれないかなあ。

「あ、海くん！ おつはよくー！」

信号が青になり、横断歩道を半分ほど渡ったところで後ろから声をかけられる。

振り向けば、ギターを背負った香澄が小走りでこちらに来ているのが見えた。その後ろにはいつものように市ヶ谷さんもいる。

「おはよ。市ヶ谷さんも」

「お、おはよ…」

走ったからか、若干息を切らしながら挨拶を返してくる市ヶ谷さん。

「今日も寒いねー！」

「全然寒そうじゃねえけどな」

香澄は体温高そう。

市ヶ谷さんは逆に低そうだな。

「すつこい寒いよっ。ほらー！」

そう言い、香澄が自分の手を俺の首筋に当ててくる。

うーん、まあ冷たいけど十分温かいんだよなあ。

…いやそうじゃない。

「やめろ、そんな簡単に男の子に触れちゃいけません」

「え？　なんで？」

なんでじゃねえんだよこの女。

「おい香澄、お前マジそういうのやめろって。それでも年頃の娘か？」  
年頃の娘で。市ヶ谷さんらしいといえばらしい言い回しだなあ。

「えく？　でも海くんの首、温かいよ？　有咲も触っていいよ！　ほらー！」

「はあ!？」

「いや、つーか俺の首なんだが。なんで香澄が許可出す側なんだよ」

一步横にズレて香澄の手を離す。

香澄の手、というか指は案外硬かった。ギターの練習を頑張ってる証拠だな。えらいえらい。

「思春期男子はそういうの敏感なの。分かれ」

「あ！　ピアスだ！」

「な、ピアス!？」

「聞けよ」

香澄の手を無理矢理離れたからか、マフラーが少しズレて左耳が露出した。目敏く…ってわけでもないか。クラスメイトが土日挟んでピアスぶち開けてきたらそりや気付くよな。

「いつ開けたの!？　土曜日は無かったよね？」

「土曜の夜」

「いいなー！　私も開けよっかな」

「つーかウチの高校ピアスって良いのか？」

「良くする」

「良くするってお前…」

「大丈夫。俺達には弦巻家が付いてる」

「……それ、ダサいからやめた方がいいぞ」

関口の メンタルに 100の ダメージ！

ダサイ：… ダサイかなあ… 使えるものは使った方がいいと思うんだけどなあ…

若干凹みつつ、香澄と市ヶ谷さんと歩く。

話題は俺のピアスの話から来月のライブの話へとシフトしていた。

「お願いされてた曲、昨日出来たよ！」

「お、マジか。ありがとな」

「んーん、全然！ ってゆーかすっごく素敵だと思ったし！」

グリグリの卒業ライブに向けてポピパに依頼していた曲。それが完成したということ、仕事の早さに感服する。

「曲書くのは賛成だったけど、わざわざ私らに頼まなくても関口たちが自分で作れば良かったんじゃないか？」

「俺たちだと雰囲気崩れそうだから。ほら、俺らって作詞のセンス終わってるし。それに曲のコンセプトにはバラード系がいいじゃない？ 俺らよりポピパの方がそっちの曲は得意だろ。あと牛込さんいるし」

「私がどうかしたの？」

「うおっ」

不意に声をかけられ、思わず声が漏れる。

振り返れば、こてんと首を傾げる牛込さんの姿が。ついでにその後ろには須田もいる。最近ほぼ毎日一緒に登校してない？ さすがに今度須田を拷問<sup>問い詰め</sup>するか。

「りみりんおはよー！」

「おはよう、香澄ちゃん。有咲ちゃんに、海くんも」

「はよ〜」

「おはよ、牛込さん。須田も」

「おっす」

五人になり、並んで歩くのは周りの迷惑になるため前列<sup>俺、香澄、市ヶ谷さん</sup> 三 人、後列<sup>須田、牛込さん</sup> 二人になって歩く。

「いや、この前ポピパに頼んだ曲の話してて。俺らが作るよりポピパの方が合ってるし、何より牛込さんがいるからって話してたの」

「あ、そうなんだ」

というか。

「昨日って俺おたえと遊んでたけど、いつの間に作ったの？」

昨日俺はおたえと渋谷で遊んでいた。

渋谷と言っても別にキラキラした109なんかに行つたわけじゃなく、楽器屋やCDショップを巡っただけだけど。めちやくちや楽しかったな。ディスク○ニオンにはヘヴィメタルのCDがいっぱい♡

けど、曲を作るならおたえは絶対に必要なはずだ。確かポピパの作詞はおたえがやってるって聞いた記憶があるし、ギターアレンジも最終的にはおたえが決めるはず。

「二昨日の夜、有咲の家でお泊まり会やつたんだ！ その時に作ったの！」

ほええ。そうだったんだ。

時間もあるのにわざわざ泊まってまで。

「おばあちゃんが作ってくれたご飯美味しかったな。夜差し入れにおまんじゅうくれたし、それも美味しかった！」

「お前はまんじゅう食ってすぐ寝たけどな。作ったのはほとんどりみとおたえだ」

「えへへ」

マジのお泊まり会じゃねえか。

「徹夜で作ったんだけど、朝起きたらおたえちゃんもういなくて」

「私は会ったよ！ おばあちゃんの作ってくれた朝ごはん一緒に食べたんだ」

お前食ってばっかだな。

紗夜さんレベルのバーサーカーじゃないにしろ、ポテトもよく食べるだろ。紗夜さんもただけでなんでそんなに細いの？ いや香澄は意外と胸がゲフンゲフン。

「みんなおはよ」

朝から妙な思考に陥りそうになっていたところ、またも声がかかる。おたえだ。

「おはよっす」

一度立ち止まり、おたえと合流する。

ギターを背負っての駆け足だったが、息切れをしている様子もない。さすが、気が向いたら朝ランニングしてるだけあるな。体力がある。

「昨日ネットでピアッサー注文したんだ。今日届く」

突然なんだ???

「昨日海がピアス開けてるの見ていいなって思った。私も空けたいなって」

行動力。

「え？ あ、ホントだ！ 関口くん、ピアス開けてる！」

「マジじゃん。不良だ」

すごい速度でバレていく。

一応マフラーで隠してたんだけどな。香澄め。ま、教室に着いてマフラー外したらバレただろうから別にいいんだけど。

「海、今度私の耳に開けて」

「なんでだよ」

「自分でやるの怖いから」

「なら病院行ってこい」

無理だよこえーよ他人の体に穴ぶち開けんのは。自分の体ですら無理なのによ。ひまりに開けて貰った時、俺がどれだけ暴れたと思っ  
てんだ。

… いやまあ？ 全然痛くなんてなかったですけどね？（↑幼馴染に半ベそを公開した人）（無駄な強がり）

「大丈夫、怖くないよ。怖いのは一瞬だけ。大丈夫。大丈夫」

「なんでお前が励ます側なんだよ、おかしいだろ」

「こう、プチッとやってくれればいいから」

「そんなカワイイ音は出ねえよ。ピアッサーのガシヤンって音しか聞こえん」

「そうなの？ 耳たぶのお肉がプチプチって音鳴らすのかと思ってた」



「おい止めろよおたえ、朝っぱらから痛い話すんな」

市ヶ谷さんが顔を顰めて耳を押さえながら言う。

「そうだぞ。せつかく天氣が良い朝なんだ。もっと楽しい話しようぜ。メタルとか」

「楽しい話はどこいった、楽しい話は」

「メタルの話は楽しいだろオ!!!?」

「デケエ声出すな」

よし、楽しく話せたな（話題変換）

俺のパーフェクトコミュニケーションが炸裂し、そのまま音楽の話題に移る。

「だからな、香澄？ ランダムスターを使ってるなら絶対にLOUDNESSのコピーをやるべきなんだ」

「そうなの？ なんで？」

「LOUDNESSのギター、高〇晃<sup>タッオン</sup>ってマジのランダムスターギターヒーローなんだよ」

「つつてもそのバンド、メタルバンドなんだろ？ うち<sup>ポビパ</sup>らには合わねえって」

「そんなことあない！ メタル女子は良いだろ！ 良さしかないだろ！ おたえもそう思うよな？」

「LOUDNESSやりたい。STAY WILDとか」

「いいねえ〜!!! あれ完全にジュ〇ダスジュードス・プ〇ースト。

《メタル・ゴッド》の愛称で知られるボーカリスト、ロブ・ハル〇オード有するイングランドのメタルバンド王。聴いてみな、トぶぞ。だよな。激アツ。ということまでポビパにはLOUDNESSのコピーをやってもらいます」

「おー！」

「やらねえよ」

「やってもらいます」

「やらねえって」

「おー！」

「おたえは黙ってるよ。このギターお化けめ」

「えへへ…」

「照れんな褒めてねえつての」

ギターお化けはわりと褒め言葉の部類では？

まあポピパとLOUDNESSの雰囲気アレンジしよが合わないは完全に同意だ。けどやれ。キーボードがない？俺が作ろう。ツインリード？

俺が弾こう！（自分がやりたいだけ）

そんなことを話しているうちに学校に着く。

こんなにも寒いというのに、校門の前には風紀委員の面々が立っていた。あの人たちも大変だなあ。あ、紗夜さんだ。

耳ピアスを隠すため、マフラーを巻き直す。

「須田。これ耳、見えてない？」

「別に見えてねえけど。なんで？」

「風紀委員に見つかるの、ちよつと避けたい」

「なるほ。まー時間の問題だとは思うけどな」

それな。

まあ時間稼ぎができればいいんだ。もうすぐ校則変わるから。

ちよつとだけドキドキしながら校門に向かう。

「紗夜さーん！ おつはよーございまーつすー！」

香澄が元気な声を張り上げ、ついでに手も上げて紗夜さんに挨拶する。

先陣を切った香澄に続き、俺達も紗夜さんやほかの見知った風紀委員に挨拶をした。

「戸山さん、皆さんも。おはようございます。服装は…問題ないですぬ」

それぞれの格好を上から下まで確認した紗夜さんが、満足そうに頷く。

実は肌着に黒のバンTを着てたりなんならピアスなんていうゴリゴリの校則違反をカマしている俺も、少しだけある罪悪感とアウターを着ているのだからバレるはずがないという確信の元、満足して紗夜さんの横を通り抜けた。

「あら？ 海くん、今日はいつもよりマフラーを嚴重に巻いているの

ね」

目敏すぎる…！」

「き、今日は寒いですからね」

「そうですね。風邪をひかないよう、十分注意してください」

セーラーツプ！

おいこら須田、笑ってんじゃねえぞ。

低気温とは別の寒さに襲われながら昇降口まで逃げ切った。マジで危なかったな。

「…？ 紗夜さん、海のこと『海くん』なんて呼んでたっけ？」

おたえもおたえで目敏すぎんだよ。普通気付かな…いや、呼び方は気付くか。俺も須田が牛込さんのことを『りみ』って呼び出した時はすぐに気付いたしな。

「まあ色々あって、名前で呼び合うようになったんだよ」

「色々？」

深掘るな深掘るな。

市ヶ谷さんも「ふーん…？ 別にい…？」じゃねーんだわ。別に特別なことはねえよ…多分。

？ ？ ？ ？ ？

放課後。

『一年A組、関口海くん。関口海くん。今すぐ生徒会室まで来なさい』  
帰り支度をしていたら校内放送で生徒会室に呼び出され、待ち構えていた紗夜さんに「貴方、少しそのマフラーを外してみなさい。早く」とピアスが即バレして普通に怒られつつバレンタインチョコの感想を求められるというアクシデントはあったものの、黒服さんの活躍で事なきを得た後。

今日は特に用事もないので真っ直ぐ家に帰る。

「おかえり弟よ。ついでだからコンビニでアイス買ってこいよ。雪見

だいふくな」

「なんのついでだよ」

リビングのコタツで亀になっていた姉ちゃんから謎の命令が飛んでくる。

訳が分からん。俺今帰ってきたばかりだぞ。外は寒いんだ。もう出たくない。

「行ってこい」

「……うす」

俺は!! 弱い!!!

弱い弟は姉の一睨みに逆らえない。逆らったらプロレス技が飛んでくる。マジで暴君だよ理不尽だ。弟は奴隷じゃあねえぞツツツ!!!  
なんて心の中で文句を垂れつつコンビニに行き、雪見だいふくと自分の分の肉まんを購入。肉まんを頬張りながら足早に家に帰る。

「ほいアイス」

「ありく。あ、お釣りはあげるわ」

「そもそも金を貰ってないんだが」

「そうだったけ?」

そうだよ (憤慨)

でもまあたまに昼飯奢ってもらう時もあるしな。別にアイスくらい奢る。けどパシリはやめろ。

肉まんの包みをゴミ箱に投げ入れ、これ以上何か命令されたくはないと逃げるように自室に向かう。

あーあ、寒かった。部屋で暖房効かせてギターでも弾こ。

そう思い部屋のドアを開け、

「あ、海! やあつと帰って来たのね!」

勢いよく閉める。

あれ? おかしいな。今お嬢が見えたな。声もした気がする。

いやいや、そんなわけがあるめえ。ここは俺の家、俺の部屋だ。まして今の今まで部屋主の俺が家にいなかったってのに、お嬢がいるわ

けない。

きつと疲れてるんだな。幻聴幻覚だ。うん、そうだ。きつとそうに  
違くない（暗示）

気を取り直してもう一度。

ギイ…（ドアを開ける音）

「やあ仔犬くん！ 今日も寒いね。シェイクスピアいわく」

ダアアアン!!!（ドアを閉める音）

増えとるやんけ!!!

まてまてまてまて。まて。まて。まて。落ち着け俺。いや世界。百歩  
譲ってお嬢は認めよう。さつき見えたし。けど瀬田先輩は居なかつ  
ただろ。絶対に居なかっただろ。なんだ？ 弦巻家はとうとう『どこ  
で○ドア』でも開発したのか？ だとしたら今度俺にも使わせてくだ  
さい。

理解が追いつかないと頭を抱えていると、トイレの水が流れる音が  
する。

「さつむう…：… あ、関口くん。お邪魔してまーす」

ウチのトイレからクマが現れた。

「奥沢アアアア!!!」

「オクサワ？ ボクハ、ミッシェル!!」

うるせえ  
!!!!!!

? ? ? ? ?

「びゅー」

自室で仁王立ちをキメて、正座させた馬鹿三人を見下ろす。

「遊びに来たわ!」

「聞いてんのはそれじゃねえ。不法侵入についてだこの野郎」

正座させられてるのに楽しそうにしてんじゃあねえよ、このお嬢様  
が。

「あ、いやね関口くん。部屋に勝手に入ったのは悪いんだけど、一応関  
口くんのお姉さんに許可は貰ってて」

は？

「おいコラ姉ちゃんツ!!」

リビングにいる姉ちゃんに大声で批判を飛ばす。

あの姉何やってんだ。男の子の部屋に準備もなく女子を入れんな。今回は何も無かったから良かったものの、隠すものが多いんだよ男の子は！

「あー？ あー。安心しろってー。ひまりちゃんには言わないからさー」

ひまり？ 何の話だ？

それより部屋主の許可無しに他人を入れたことに対して謝罪をしろ。

まあ姉ちゃんが俺に謝るわけがないか。

「はあ…」

「いや、ホントごめん」

姉ちゃんではなく、クマ（奥沢さん）が謝罪してくる。

事情を知った今、奥沢さん達が悪くないということも分かった。

「いや、別に大丈夫。おk.: ミツシエル達が悪いわけじゃないってのは分かったし、むしろ怒鳴ってごめん」

「フツ。シェイクスピア曰く『喜怒哀楽の激しさは、その感情とともに実力までも滅ぼす』。つまり、そういうことさ」

どうということだってばよ。

相変わらず意味分かんない引用してくる人だな。

「で？ ホントに何しに来たの」

「遊びに来たわ！」

どうしてまた急に。

というか今日は三人だけなのか？ 松原さんは今日確かシフト入ってたはずだからそっちに在るとして、北沢も家の手伝いとかなのかな。

「今日はチョコを持ってきたんだ。バレンタインのチョコを渡すと言って、まだ渡していなかっただろう？」

「あ、ボクも美咲ちゃんから預かってきてるのがあるよー」

そう言い、瀬田先輩はちよつと高そうな包みに入ったものを、おk... ミツシエルは手作りっぽいクツキーの入った袋を渡してくる。「まじ?・ありがとうございます」

思ってもいなかったことに一瞬戸惑ったが、貰えるっていうなら有難く貰おう。

奥沢さんの手作りクツキーも嬉しいし、瀬田先輩からチョコ貰えたってのは後でひまりと牛込さんに自慢しとこう。

さて、これで用事は終わったわけだが。

「わあ!・海の部屋には小さなアンプがあるのね!・ どうして小さいのかしら?・ もっと大きいほうがかっこいいわよ!・」

お嬢がちよこまかと部屋の物色を始めやがった。

別にその辺は見てもいいけど本棚の一番上の棚は絶対に漁るなよ。マジで。

「ミニアンプつってな。デカイスピーカーなんて家じゃ使わねえし、そんなくらいで十分なんだよ」

「どうして使わないの?・」

「どうしてつってお前、家じゃアンプからデカイ音なんて出せないだろ」

「どうして?・」

どうして???

あつ、いや、お嬢の家はデカすぎるから別に隣の家に騒音迷惑かけるとか考えなくていいのか。ハロハピのバンド練習も普段弦巻家内のスタジオでやってるって聞くしな。ブルジョワジーム。

「ごちとら壁一枚挟んだ向こう側は別の家庭だからさ。デカイ音出したら迷惑だろ」

「そうなのね!・ 隣の家の人のことを考えられて偉いわね、海!・」

俺、もしかして今バカにされてんのかな?

いやまあお嬢だし、素直な意見なんだろうけどさ。

「でも、海くんってちよくちよくアコギの弾き語り配信とかやってるよね?・ あーいうの、アンプ通してなくても結構大きい音出るんじゃない?・」

ミツシエルが聞いてくる。

てか奥沢さん俺の配信見てるのか。なんか恥ずかしいな。

「アレはアコギって言ってもセミアコだからね。アコギほど生音はデカくないよ。多少は引く時間を考えたり、壁にダンボール三重に張り付けたりして対策はしてるし」

うちが角部屋だつてこともある。今のところ怒られてはいない。いやもしかしたら怒られてないだけで音は聴こえてるのかもしれないけど、怒られてないならセーフ。気にしすぎも良くない。

「海の配信、あたしも見たわよ！ ハロハピの皆と、黒服さんたちで！」

なんでだよ。

「弦巻家特大シアターで見たねえ」

なんでだよ!?

そんな大層なもんじゃないだろ俺の配信は！

「美咲も見てるって言ってたわ！」

あー。一緒に見た時はミツシエルだったのか。まだ気付いてないの、三周くらい回つて逆に凄いな。さすがお嬢。北沢もか。

「あたしたちも海と一緒に“はいしん”をしたいわ！」  
なんでだよ。

一緒にする意味なんて一つも——

「準備致します。十分ほどお待ちください」

「ありがとうございます、黒服さん！」

早いよねえ。行動がねえ。

つーか今黒服さん俺のベッドの下から出てきたか？ 何。どこで○ドアじゃなくてどこでもベッド裏つてこと？ 怖いんだけど。良かったー、ベッドの下とかいうド定番の場所に隠してなくて。

「え、てかホントにやるの？ あんま俺乗り気じゃ……」

「関口様。我々は花咲川高校の校則を二つ変更するお手伝いをさせていただきますました」

「あっ」

逆らえないよねえ。これはねえ。

承知しましたー（諦め）



てなわけで。

「おいつすー。これ聞こえてんのかな」

配信が始まった。

YouTubeでのゲリラ配信。人が集まるか不安だったが、十数人も見てくれている。

黒服さんから「マイクOKです」とカンペが出される。テレビかよ。なんか照明も用意してくれたし、防音材も壁に貼ってくれてるし。いたせりつくせりだな。

「これが“はいしん”なのね！…それで、何をするのかしら？」

「ノープランかよ」

お前が始めた物語配信だろ。

コメントもぽつぽつ出てきたな。えーつと？『まーた女と一緒にいるよこいつ』『パスパレじゃないじゃん。でも可愛い』『なんだろう。嫉妬とかじゃなくてこう……燃やしたい』『どうして公式の男の周りにはこんなに美少女が集まっているの？』『誰か千聖様に通報してー』『彩ちゃんこいつやってるよ!!』って何だこいつら。

「ふむ。それじゃあここは一つ、私がハムレットシェイクスピアの朗読を——」

「ギター弾きますねー」

「仔犬くん。私は一応、キミの先輩なのだけれど」

うるせえ。俺のチャンネルだぞ。侵略されてたまるか。いやまあもうだいたい侵攻されてるけど。

「何弾く？ ハロハピのやつ弾くか」

「え、弾けるの？ うちの曲、けっこーピコピコ鳴ってるけど」

「まあアレンジだけど、やれないことはない」

「いやもうほんと、すごいですねえ」

えへへ。それほどでも。

まあ十年もギターやってればできるようになるや。

スタンドからセミアコを取り、シールドを繋げる。繋ぐ先はオーディオインターフェース。配信をする時や録音をする時なんかはこれでPCに楽器を繋ぐ。ついでにマイクも繋いでおこう。

ちなみに今日使っているインターフェースは俺のものじゃなく、黒服さんがどこからともなく用意してくれた質の良さそうなやつだ。端子もたくさん付いてる（小並感）

正直オーディオインターフェースの善し悪しは分かってないけど、わざわざ黒服さんが用意してきたってことはきつと高いやつなんだろう。壊してもしたらって思うと怖いなあ。くわばらくわばら。さして。

セッティングも終わり、軽くコードを鳴らしてチューニングを合わせ、弾く準備が整った。

「じゃ、何やるよっ」

「うーん…」

ミッシェルが大きな頭を傾かせる。

どうでもいいけど、この部屋にそのデカい着ぐるみは存在感がありすぎだな。流れてるコメントでも『クマおる』『デカ』ってやつが若干あるな。

『わちや・もちや・ぺったん行進曲』などはどうだろうか？」

瀬田先輩が提案してくる。

俺が朗読をぶった斬ったのにちゃんと参加意欲は見せてくるのか。すごいなこの人。

「んじゃそれで。歌は三人でお願いします。いや、あれ？ あの曲って松原さんとお嬢の二人だけ？」

「その辺はこっちで勝手にパート分けするけど… え、もう弾けるの？」

「うん。前にハロハピのライブに突然ぶち込まれた時に弾いたことあるし、ある程度の構成は覚えてるから」

「すごいね」

えへへ。

まあ十年もギターをやったら以下略。

それにこの曲、結構バンドサウンドだしな。シンセ爆乗りDTMやストリングス激鳴りのジャズ風味の曲より全然やりやすい。ファントムシーフとかだったら十分くらい時間貰ってたかも。

お嬢もやる気らしく「分かったわ！ 楽しみね！」なんて言っている。瀬田先輩やミッシェルもだけど、これ一応全世界に向けた配信だったのに全く緊張してる素振りが無いな。まあどこぞの大統領やお偉いさんと話したり、その人ら相手にライブをしたりもしているバンドのメンバーだ。この程度じゃもう緊張しないのかもしれないな。「んじや行きまーす」

ギターのボデイでカウントを取り、弦を弾く。もちろん指で。俺の配信ではおなじみのスラム奏法だ。

ボデイを叩きバストラの音を出し、拳を開く要領で弦を鳴らす。フレットを手のひらで叩いてミュートしつつスネアドラムっぽい音を出し、拳を握るような動きでアップストローク。

イントロが終わり、お嬢の歌が入ってくる。

突然始めた俺が言うことじゃないけど、よく一発で上手く入れたなお嬢。あと歌がうめえ。特にトレーニングしてるわけじゃないって前に奥沢さんが言ってたけど、やっぱスペックオバケなんだなあ。それに加えて歌声から伝わってくるこの「楽しい」という感情。「世界中を笑顔にしたい」という野望からくるものだろうか？ 普段から色んなところでライブをして相当な場数を踏んできた余裕もあるのかもしれないな。

松原さんパートはミッシェルが入ってくる。ミッシェルも歌が上手いんだよなあ。

続くお嬢パートだが、今回は瀬田先輩が入ってきた。ぶつつけなのにアイコンタクトで息を合わせてきているし、やっぱり瀬田先輩も上手い。

なんだかんだ言っちゃんとレベルは高いんだよなあ。瀬田先輩は演劇なんかで発声が出来てるってのもあるけど、お嬢とミッシェルはそういう土台がなくてこれだ。結構な練習をして歌を習得した俺としては、こういう才能を前にしたら普通に凹む。俺ら凡人が何年も

かけるものをたった数ヶ月のものにしちゃうんだから、才能ってやつは恐ろしい。

が、そこに羨望はあっても嫉妬があるわけじゃない。

才能は才能。そこを妬んでも仕方がないと知っている。才能がないならそれ相応の努力で賄えばいい。好きなら努力なんて惜しくないし、何より上達する楽しみがあるとさえ思えば凡才も悪くない。才能があろうがなかろうが、音楽を楽しむことは誰にだってできる。

それに、天才は天才で俺ら凡人には分からない苦労もあるだろう。隣の芝は青く見えるってわけじゃないが、才能も苦悩も人それぞれだ。

ま、そんなことは今考えることじゃない。

お嬢の思いつきに振り回されて始まった配信ライブ。乗り気だったかと言われれば素直に頷けないが、楽しくないと言ったら嘘になる。

今はただ、笑顔をばら撒くお嬢達と一緒に楽しく音楽をやる。それだけでいい。

「そうだわ！ ドーンとバーンすればもつとキラキラになると思うの！」

やめてくれ。

何を言ってるのか何一つ分からないがやめてくれ。

事前確認はしつかりしよう。

「ん、あゝゝ……」

朝。

ふと目が覚め、布団から身を起こす俺を寒さが襲う。

もっと寝ていたい、温かい布団に身を包んでいたい。そう思うが、外はもう明るかった。

まだ目覚ましは鳴っていないようだが、明るいということとは起きなきやいけないということ。目覚ましをセットしていたのが七時で、家を出なければならぬ最終ラインが八時前。それを過ぎると遅刻確定だ。まあ目覚ましは鳴っていないってことはまだ七時前なんだろう。

のそのそと布団から出て、昨日のうちに用意していた靴下を履く。

「いま……なんじ……」

寝ぼけ眼で時計を探す。

いつもの定位置に無い。なんでだ？

キョロキョロと周りを見渡すと、床に転がっている目覚まし時計を発見した。夜中に寝惚けて落としてしまったんだろうか？

よく分からないままに時計を拾い上げ時計を見る。

短い針が、八を少しだけ通り越していた。

「……………は!？」

慌てて立ち上がり、床に置きっぱなしだったシールドシールドケブル。楽器をアンプやミキサー等に繋ぐもの。に足を引っ掛けてフラつき本棚を倒すまで、あと三秒。

? ? ? ? ?

「なんつで目覚まし鳴らねえんだよ……！」  
バイクに跨り、文句を吐き出しながら疾走する。

普段は都電＋徒歩か自転車通学だが、今日はそれじゃあ間に合わない。

細道抜け道を最大限使い、最短距離で学校へ向かう。

「間に合え……！」

別に遅刻くらいしたっていいんだが、今週は謎の遅刻撲滅週間が開催されている。遅刻したら風紀委員に捕まるばかりか、反省文も書かなければいけない。それは非常に面倒くさい。

バイトの配達で培った信号無しのルートをフル活用し、なんとか始業三分前に学校に辿り着いた。

周りにはほとんど人がいない。みんな真面目だな。

バイク置き場からダッシュで昇降口まで駆ける。

未だ知り合いとは出会わない。妙だな、なんて思うがそれどころじゃねえと足を止めず教室に向かう。

始業のチャイムが鳴る。けど大丈夫。鳴り終わるまでが始業のチャイムだ。

ビッグ・ベンの鐘の音が元ネタだというこのチャイムは約二十二秒ほど続く。ここから教室まで全力で走れば十秒程度。十分間に合う。

廊下を走ったら走ったで紗夜さんに捕まりそうだが構うものか。

反省文と説教、どちらがマシかと聞かれれば断然後者だ。

誰もいない廊下を駆け抜け、教室に飛び込む。

まだチャイムは鳴っていた。

「よっしやセーフッ!!」

思わずガッツポーズが出る。

息切れしながら、遅刻回避でガッツポーズはさすがに恥ずかしいなと教室内を見回すと……

「あれ？」

そこには誰もいなかった。

じわじわと染み出てくる汗が気持ち悪く、とりあえず上着を脱ぎ、窓を開ける。冷たい風が心地よい。跳ねていた心臓が徐々に落ち着いてくる。

だが心は落ち着かない。なんで誰もいないんだ？ もしかして一限目は移動教室だったかと、教室の隅に貼つてある時間割を見るが、今日の一限は現国。この教室で行われる授業だ。

はて、マジで一体何なんだ。

ポケットからスマホを取り出し、一旦須田に電話をかける。

「…あ、もしもし須田？」

『あー？ んだよこんな朝っぱらに…』

繋がった。

やけに眠そうな須田の声が聞こえてくる。

寝てたのか？ なんで？ 今日金曜日だぞ。

「お前、今どこ？」

『家だけど』

「学校は？」

『学校？ バカお前、今日は休みだろ。受験があるから』

「え？」

『は？』

は？

？ ？ ？ ？ ？

「それで、慌てて学校に来てしまったんですか？」  
所変わって生徒会室。

教室で呆けていたところ、校内を見回っていた紗夜さんに発見された俺は、生徒会室まで連れてこられていた。

生徒会室には紗夜さんのほかに、白金さんと市ヶ谷さんの姿もある。来年度から始動する新生徒会の面々だ。今日の受験のサポートのため、学校に来ていたらしい。なんでも新生徒会が主導で動く初仕事なんだとか。そんな時に面倒かけてしまったみたいでごめんなさいの気持ち。

呆れたように聞いてくる紗夜さんと、同じく呆れたように見てくる市ヶ谷さん。

おどおどした様子の白金さんは「さ 災難、でしたね。」とクツキーをくれた。ありがてえ。けどただでさえ走ってカラカラだった口の中から更に水分が奪われる。辛い。

「ほら関口、茶」

「あ。ありがと」

せっかく白金さんから貰ったのだからとクツキーを頬張って口内が死にかけていたところ、市ヶ谷さんがお茶を用意してくれた。いたせりつくせりですげえな生徒会室。今度から暇な時は遊びに来ようかな。…… いや、紗夜さんがいたら怒られる可能性があるな。やっぱやめとこ。

「全く。昨日周知があつたはずですが、聞いていなかったんですか？」

「いやあ…… あはは」

笑って誤魔化すと、更に厳しい目が紗夜さんから飛んできた。

ぶっちゃけ聞いてなかった。帰りのHRなんてどうせ大したこと  
は言っていないと右から左だったな。次からはちゃんと聞いておこう。  
「つたく。うちのバカでさえ今日が休みだって分かって————  
——」

「あ、有咲あゝ!! どうしよう、みんな教室にいないんだけど！  
しゅーだんぼいこつとつてヤツかな!? それともミステリーサークル!」

「この香澄……!」

香澄が慌てた様子で生徒会室に駆け込んできた。



……え、何？ 俺、このバカと同レベルってこと？  
本気で凹むんだが……

？ ？ ？ ？

「ほら香澄、関口待ってんぞ」

バイクを取って校門まで引つ張ってきた俺は、昇降口付近で乳繰り合っている百合を合掌して眺めていた。

金百合さんがこちらに気付き、猫百合さんが手を振って金百合さんと別れる。

待て。俺は今、あの尊い百合を阻害したのか？ 馬に蹴られて死のっかな。

「海くんおまたせっ！ わあ、それが海くんのバイク？ カッコイー！」

「へへっ」

前向きに死を検討していたところ、愛車を褒められて鼻が高くなる。そうだろ、俺の愛メタル・モンスター車はカッコイイだろ。

「乗せてってくれるの!?!」

「そうしてやりたいけど、俺、まだ後ろに人乗せれねえんだわ」

「そうなの?」

「おん。法律で免許取得後一年過ぎないと人乗せれないことになってさ。あと十ヶ月したら乗せれる」

「そうなんだ！ じゃあその時乗せてよろ！」

「いいよ」

おたえに加え、女の子を乗せる予約もこれで二件目だ。男冥利に尽きるね。バイクの免許、取って良かった。

バイクを押し、香澄と二人帰路につく。

香澄は途中で都電に乗るから、そこまでは一緒だ。

「うわ、ホントに中学生多いね」

帰りの途中。俺たちとは逆方向、学校に向かう道を中学生達が歩いているのが目に入る。

花咲川<sup>ち</sup>は内部進学がほとんどだが、去年から始まった共学化により男子は全員受験組。今目に入る中学生たちも、ほとんどが男子だ。ちらほらと女子生徒もいるようだが、比率は九対一で男子が多い。

「あ、そういえばうちの中等部に都築さんのお孫さんがいるんだってー。海くん知ってた？」

「都築さん？」

「ほら、スペースのオーナーのおばあちゃん」

「あー」

あの人の名前、今知ったわ。なんだかんだ初ライブでお世話になったってのに我ながら薄情だなと思う。

「何年？」

「今一年生だって！」

「へー」

中等部との絡みはほとんどないからなあ。体育祭や文化祭でチラツと見たことがあるくらいだ。

部活でもやってれば交流の一つや二つあったらうけど。

「香澄の妹もうちの中等部だっけ？」

「そう！ あ、でも高校は羽丘に行くんだって」

「へー。なんでまた」

「羽丘の方が頭良いからって言った」

なるほどな。

まあうちより進学率良いし、大学狙ってるなら良い判断だとは思  
う。

「あれ、香澄って外部入学だったよな？」

「そうだよ！ せっかくあつちゃんと同じ高校に通えると思ったのに、あつちゃん、羽丘に行くってゆーんだもん」

「そりゃ残念だ」

姉妹で同じ高校ってのも良いことばかりじゃない気もするけど  
な。特に下からしたら、姉のせいで変に上級生と絡みが出来てクラス

内で浮く、みたいなことにもなりかねない。

まあ別にそんなこと俺が考える必要もないかと思いを切り、引つかかった別の話題を出す。

「兄弟つていやあ、今年は澤田さんの弟が花咲川を受験するらしいぞ」「そうなの!?! 合格祈願しなきゃ!」

こいつはほんと、優しいというかバカというか。

まあ知り合いの身内だし、俺も内心応援はしている。顔も知らない相手だからあんま応援しようもないけどな。メタラーの素質があるって話だし、無事合格して入学してきたら仲良くしてもらおう。

受験つて言えば、倉田ちゃんの受験はどうなっただろうか。もうあっちの受験はとっくに終わってるはずだし、そろそろ合格発表の頃合いか。良い知らせが届くことを願ってる。

そんなことを話しながら歩き、駅まで来た。

ここまで来るともう受験生らしき中学生の姿は見えない。時間的に、今駅にいるようじゃ遅刻だろう。

「ほいじゃ香澄、また来週」

「うん!..... あっ!」

手を振り香澄を見送ろうとしたところで、香澄が何かを見つけたらしく、俺の後ろを見て声を上げた。

何かあるのかとそちらを見れば、踏切を渡る二つの人影が見えた。

一人は、この辺じやよく見かけることのある老婆。腰が曲がり、歩く速度も遅い。

そしてもう一人は、この辺の中学の制服を着た男の子。どうやらおばあちゃんの荷物を持ってあげているらしい。善人だな。

けどあれがどうした? 特に珍しくもない、って言ったらアレだけど、ただ親切な中学生がおばあちゃんを助けてるだけに見えるが。

... いや、中学生? この時間に?

時間的に中学生も授業が始まっている時間だ。この時間に制服を着て彷徨っているのはおかしい。ただのサボリだと言われればそこまでだが、今日は高校受験がある。

足りない頭のくせして色々と察し、嫌な予感がしたのだろうか。香

澄が駆け出した。

「大丈夫ですかー！」

ほんとこいつ、とことん善人だな。市ヶ谷さん家の蔵に不法侵入した拳銃ギターをかつぱらったクセしてよ。

なんてことを思いながら、俺も香澄に続く。

「おや、香澄ちゃん。ええ、ええ。大丈夫だよ。この人が荷物を持ってくれてねえ」

香澄はこのおばあちゃんと知り合いだったのか、朗らかな笑顔でおばあちゃんが言う。

それにホツとした様子を覗かせるのは、荷物を持っていた男の子の方だ。

「お知り合いの方ですか？ 良かった。おばあちゃん、この荷物持ってふらふらしてて」

「そうだったんだ、ありがとね！ おばあちゃん、こんなに大きな荷物、どうしたの？」

「孫がねえ。社会人になってしばらく帰ってきてなかった孫が、久々に帰ってくるって言っててねえ。好物をたあくさん作ってあげよう、って思ってたねえ」

「おばあちゃん偉い！ 優しい！」

香澄の友好関係に今更ながら驚きつつ、男の子の方に声をかける。

「え えっと……き、キミ、もしかして受験生？」

初対面の相手って苦手なんだよなあ。なんか爽やかイケメン君だし。善人でイケメンとか何者だよ。怖い。

吃り散らして不審者一步手前な声掛け具合に自分でも引いていると、イケメン君が光り輝く笑顔を返してくる。

「はい！ 今から花咲川を受験する予定ですよ！」

高校名まで言わなくていいんだよ。危機管理。

けどまあ聞く手間が省けたから良しとしよう。

「でも、今からって間に合わない？」

「かもですね……けど、困ってる人を見捨てて受験しても良い結果は返ってこないと思いますし！ 間に合わないかもですが、今からで

も行ってみます！」

な、なんて野郎だ……！　あまりの輝きに浄化されかけた。陽キヤとか越えた存在かよ。神か？　神々しさを感じる。笑顔に後光がさしてんよ。

「ど　どうしよう！　今から有咲に連絡したらどうにかならないかな……？」

香澄もさすがに受験遅刻のヤバさは分かっているのか、焦ったように聞いてくる。

「……いや、無理だろ。いくら生徒会つってもそんな権力あるわけねえし」

生徒会が学校以上の権力を握ってるなんて、漫画の中か日菜さんくらいでしか有り得ない。うちの生徒会は至って普通の生徒会だ。黒服さんもそこまで学校側に口が出せるとは思わないし、何より最近俺のせいで干渉しすぎている。ここで頼るのは気が引ける。

だが、人助けをして大事な受験に遅れるとかいう主人公ムーヴをカマスこの子を放って置くのもなんだかなあ。

ダメ元で白金さんや紗夜さんに連絡してみるか？　……いや。

「……えと、キミ、自転車つて乗れる？」

「自転車ですか？　乗れますけど……」

不審がるイケメン君に、続けて質問する。

「じゃあ、二人乗りの経験は？」

「一応あります！　……あつ、いえやっぱり無いです！」

「いや、別に二人乗り注意しようとかしてないから」

「あります！」

なんだか可愛い子だな。好感が持てるというか。

いやおばあちゃん助けてる時点で好感しかないんだが。

……仕方ない、かあ。

「香澄。そのおばあちゃん、よろしく」

「え？　あ、うん！　え、どうするの？」

「この子、バイクに乗せて学校に行く」

「え？　いやでもさつき二人乗りはまだ出来ないって」

「いいか、香澄？ お前は何も知らない」

「知ってるよ！」

「知らないんだよそういうことにしとけ」

「なんで？」

ほんまこいつは……！

ダメだけど知らないフリしとけばいいんだよ！ 二人乗りだつて免許取って一年経ったら解禁されんだ。一年未満かどうかなんて交通違反でもしなきゃバレないダメです。バレるバレないの問題ではありません。良い子は絶対にやめましょう。法律遵守。バレなきゃ犯罪じゃないんですよ。絶対にやめましょう。

いいや。この際香澄は無視だ。後でポテトでも奢れば全部忘れるだろ。単純<sup>バカ</sup>だし。

バイクに跨りエンジンをかける。

「ほら、乗った乗った」

「え？ あ、いや、でも……」

「バイク<sup>これ</sup>ならまだ間に合うかもだから。良い事して自分が悪い目を見るとか、普通にダメだから」

遠慮…… ってわけでもないかもしれないが、あまり乗り気じゃないイケメン君を半ば無理やり後ろに乗せる。

悪いね。俺はキミみたいに根が善人ってわけじゃないんだわ。ここでキミを無視したら今夜の晩飯が悪くなる。それだけの自己満なわけ。だからキミが嫌がっても連れて行く。

…… いや、知らん人間に突然「後ろ、乗りな（キリツ）」なんて言われたら警戒するのが普通なんだけどな。今はそんなこと知ったことか。

「じゃ、しっかり捕まってるな。あと暴れないで」

そう言い、アクセルを回す。

ヘルメットも一つしかないから後ろの子に被せている。警察に見つかったら一発アウト。

配達のバイトで培った警察のいない、あるいはいる可能性が限りなく低いルートを叩き出す。

どうか警察にも知り合いにも見つかりませんように。  
そう願いながら、今朝同様、全力で道を走り抜ける。

? ? ? ? ?

「お兄さんありがとうございます!!」

バイクをかつ飛ばし、なんとか時間ギリギリに到着することができた俺たち。

手をブンブン振って校舎へ駆けて行くイケメン君。「受験頑張つてね」とこちらも手を振って見送る。

香澄に連絡を入れると『おばあちゃんをおうちまで送ったら羊羹くれたから今おばあちゃんちでお茶してる!』と返ってきた。あいつのコミュ力はやっぱり抜けてるよ。

さて、それじゃあ紗夜さんに見つかる前にさっさと退散するか。貸していたヘルメットを被る。なんか良い匂いするな。怖いんだけど。

これからどうするか。今日はバイトも無いし、なんなら学校があると思っていたから他の予定も一切無い。

ひまり達は普通に学校あるだろうし…うーん。あそうだ。久しぶりにツーリングでもするか。

そうと決まればさっそくレッツゴー。

目的地? そんなの知らねーよ。風に聞きな。

? ? ? ? ?

てなわけで。

特に何も考えず突き進み、時に左へ時に右へ、気分風の赴くままに

バイクを走らせる。地図なんて見ない。風情がないだろう？

……だなんてカッコつけて突っ走った結果、迷子になりましたとき。ちゃんちゃん。

じゃあねえんだわ。

現在どこかの山の中。多分千葉のどこかだとは思うんだが、よく分からない。

最悪なことにガソリンが無くなり身動きが取れない状態。スマホも充電が切れていて現在地どころか助けも呼べない始末だ。一体どうしてこうなった（カッコつけの末路）

ほんと、どうすっかなあ。

とりあえず誰か通らないか待ってみるか。山の中とは言っても公道だ。そのうち車の一つや二つ通るだろう。

そう思いしばらく待っていると、こちらに向かってくるエンジン音が聞こえてきた。

この感じはバイクかな。スマホを貸して貰えばいいんだけど。道路からよく見える位置に立ち、手を挙げて待つ。

これで怖いにーちゃんとかが来たら嫌だなあとドキドキしながら待っていると、一台のバイクがこちらに向かって走ってきた。

いかついバイクだけど、あれ、なんか見覚えが……

こちらに気付いたのか、バイクは速度を緩め、俺の傍で停まってくれる。って、

「あ？ 関口じゃねえか。何してんだお前、こんなところで」

やって来たのは狂犬ドラマーお嬢様、佐藤ますきだった。

？  
？  
？  
？



「バイクはガス欠スマホは充電切れで山途中で立ち往生とか、お前ほんとバカだなあ！」

わははと豪快に笑う佐藤。

場所は山の中から移り、山を下ったコンビニの駐車場。佐藤にガソリンを分けてもらい、なんとか山を抜けてガソスタで補填した後、お礼として佐藤にコーヒーとカップ麺を奢っていた。

「いや、マジでほんとそう。助かったわ」

スカジャンをはためかせるその風貌を裏切ることなく、コンビニの前で座ってカップ麺を啜る姿はまさにヤンキーのそれ。これが夜のコンビニだったら百点満点だったな。

こいつ、本当にお嬢様学校の生徒か？ そんな疑問を覚えつつ、俺も隣で缶コーヒーを啜る。

「佐藤はなんでこんなところに？ 今日学校あんじゃねーの」

「お前んとこと同じで、こっちもお受験で休みだよ」

お受験。育ちが良いのか何なのか。八百屋の娘でお嬢様学校の生徒でステイックを握らせれば手の付けられない狂犬と化す佐藤が分からない。ほんとに「ごきげんよう」とか言ってるのかこいつ？ 想像つかねー。

「ごちそうさん。やっぱラーメンはとんこつだよな」

「分かる。とんこつ以外はラーメンじゃない。ただの亜種だ」

「そこまで過激派じゃねーよ私は」

そうなのか。

そうなのか……

「そーいや最近どうなんだよ、バンドの方は」

コンビニのゴミ箱に空の容器を捨て、コーヒーを飲み始めた佐藤が聞いてくる。ラーメンの後にコーヒーってどうなの？ と思うがまあ人それぞれか。

「楽しくやってるよ。今度ライブにも出るし」

「へー。またC i R C L Eで？」

「そ」

「今度うちのライブハウスでもやれよ。お前らがライブしてからぼち

ぼち客も入ってきてつけど、やつぱお前らがやった時が一番盛り上がってたし」

「そりやRoseliaやパスパレがいたからな」

「謙遜すんなって！ お前のバンド… えっと、なんだっけ」

「Capliberte」

「そうそれ！ お前らも十分人気だし、何より親父が気に入ってたよな」

そうなのか。あのいかつい八百屋のおっさん、ずっと仏頂面だったからあんまし好かれてないと思ってたけど。

「佐藤の方はどうなんだよ。相変わらずサポートで狂犬やってんの？」

「狂犬って言うな。可愛くねえだろ」

フン、と不機嫌そうに鼻を鳴らす佐藤に平謝りしてみるが、お前の演奏スタイルは間違いなく狂犬だろ。

「ふん。まあ、アレだ。聞いて驚け。私もバンドに入ったぞ」  
「マジでか」

驚くが、まあ佐藤はこれでバンドに憧れというか、バンドをやりたいてってという意味はずっとあった。バンドを組んだこと自体は不思議じゃない。

問題はいつまで続くかかなあ。佐藤はべらぼうにドラムが上手いが、協調性が無い。突っ走ったドラムで孤高の一人旅、周りが着いていけないほどの荒々しいドラムを叩く。

俺や和奏は佐藤に合わせられる数少ない演者として、セットでサポートと呼ばれることも少なくはない。最近俺が断ってるから別のギタリストが犠牲になってるんだろうな。

まあとにかく、そんな暴れ馬なドラムを叩いているから、今までバンドが長続きしたことがないらしいと聞いたことがある。

ちよっただけ心配している俺に、佐藤はニヤニヤとした笑顔を向けてきた。

「なんだよ」

「いや？ ちよっとおもしれえバンドに入ったからな。お前らと闘<sup>や</sup>り

合うのもそう遠くないはずだと思って」

「戦うってなんだ。喧嘩ならお断りだぞ」

「ちげーよ。バンドで闘り合うんだ」

「やらねーよ。対バンならやるけど」

音楽は他人との戦いじゃない。

バンド内で「音」で殴り合うことはあっても、戦いはしないんだ。

「あー…ま、お前はそういう奴か。けど、そうも言ってられなくなるかもしれないぜ？」

「はっ」

意味深に笑ってみせる佐藤に疑問を返す。

「うちの頭はお前んのとこのバンドにご執心なんだよ。お前が嫌がっても、そのうち必ず闘り合う時が来る」

「こねーよ。来たとしても無視してやる」

「ハハッ！ まあ楽しみにしとけて。闘り合うところは置いて、私としちやあ関口と対バン出来んのは楽しみなんだ」

「対バンなら喜んで。俺もお前と、お前が認めた奴らと対バンするのは楽しみだ」

佐藤と対バンできるのは嬉しい。これは紛れもない本音だ。

狂犬だなんだと言うが、ドラムの腕は一級品。うちの五十嵐が一番だが、佐藤のドラムも俺は好きだ。お互い好き勝手に「音」で殴り合っている時間は楽しいし、自分の全部をぶつけられる相手というのは貴重なもの。正直、サポートと一緒に演奏しているのは死ぬ程楽しかった。

同じバンドでは無いにしろ、同じ土俵でライブができるってんなら望むところだ。

……それにしても、Capliberteに執心してる奴がリーダー？ 一体誰のことだろうか。全く心当たりがないんだが。

卒業は終わりじゃない。

月が変わって弥生よ！

というわけで三月に入った。

澤田さんの弟や香澄の妹、そして倉田ちゃんらの高校合格を聞き騒いでいたらあつという間に終わったな、二月。

グリグリの皆さんもそれぞれ無事に大学合格を決め、今日はずいぶんグリグリ主催の卒業ライブ。

練習期間もいつもより長めに取れたし、リハも上々。準備は万端だ。

ぼちぼち開演時間も迫ってきて、フロアにお客さん達が入ってくる。

Capliberteの出番は一番最初。今回は志願ではなく、ほかのバンドと調整してのトップバッター。

そこに不満はない。何番目だろうが、俺たちは俺たちのライブをやるだけだ。

「Capliberteさん！ 準備お願いしまーす！」

スタッフさんの呼び掛けに「はい」と返事をして、俺たち七人は円陣を組んだ。

「つぐ、おたえ。最初からトバしてくからな」

「うん！」

「頑張る」

今回のサポートであるつぐとおたえが、気合十分に返してくる。それに満足して頷いた俺は、続けてもう二人のサポートメンバーであるひまりと巴に目を向ける。

「二人は三曲目から。MCで呼ぶから、準備しとていくれ」  
「まっかせてー!」

ひまりが言い、巴もすっかり頷いてくれる。頼もしい限りだ。全員、自分のバンドもあるのによく俺らに付き合ってくれた。感謝しかない。

「掛け声は任せて! セーのっ、えいえいおー!!」

.....

「うわーん!! やっぱりー!!!」

「Capliberteさん、出番ですー!」

「よし、行くぞ」

『おー!!』

「ちよつとなんで?」

ひまり、お前はずつとそのままであってくれ。

? ? ? ? ?

ゆりさんから軽い開会の挨拶があり、その後すぐにステージの照明が落ちる。

暗いステージの上。足元で光るライトを頼りに、楽器やシールドに引っかからないよう各自定位置にスタンバイ。

ギターを担ぎ、軽く一音弾く。PAさんと照明さんへの合図だ。

俺の合図を聞き、淡い一筋の光がステージ上に降り注ぐ。

照らすのはキーボード。つぐのいる場所だ。

仄暗いライブハウス内で一番の光を受け、つぐがゆつくりと指を鍵盤にかける。

ゆつくりと、ゆつくりと。染み入るように、ピアノの音を一つ一つ丁寧に鳴らすつぐ。

微かに見える観客の顔は、どこかポカンとしているようだった。

それも無理は無い。最初はCオス・メapタルplバンドiberドteだドと聞いていたのに、蓋を開ければAドffドerドgドlドowのキーボードドイストが出てきて、しかもしつとりとしたピアノを披露してきたんだ。困惑もするだろう。

出だしは十分。

つぐの伴奏が終わり、ライブハウスにはまたも静寂が訪れた。オーケー。そのまましつかり俺の言葉を聞け。

マイクに口を近付ける。

『グリグリ卒業ライブだ。たくさんお世話になった。あの人たちに光を貰ったやつも多いだろう。卒業を悲しむ声も聞いた』

光もなく、ただ暗闇に俺の声がしんしんと響く。

『けどさあ。これまでさんざこの箱を、このガールズバンド時代を盛り上げてきたあの人たちを、しんみりしながら送り出すのは違うよなあ？ 初っ端からぶち上がれよ、でっかい声援であの人たちを盛大に送り出すぞ!!』

声を張り上げると同時、身を焦がすほどの照明がステージ上に注がれる。

さあ、開演だ。

『紅だアアアアああああ!!!』

咆哮のすぐ後、五十嵐ドラムのシンバルカウントが高らかに鳴り響く。全日本人が知っていると云っても過言では無い伝説中の伝説。音楽を愛し、ライブハウスにまで足を伸ばすコイツらがこの曲を知らないはずがない。

大声援と共に、俺たちの演奏は始まった。

イントロを走り抜け、Aメロに突入する。

綺麗な声は出さない。若干の「ダミ」を織り交ぜる。昂る感情をそのまま曝け出し、観客にぶつけた。

こちらに応えてくれているのか、観客達も手を掲げ、必死で楽しいな笑顔を向けてくれている。

Aメロを走り切り、続くはサビ前のギターソロ。

おたえの指が走る。正確で「粒」のある良い音だ。さすがおたえ、ブレがない。キマってんな。俺も負けていられねえ。

八小節分のソロが終わり、次は俺のターン。

返し演者側に向かって音を出すスピーカー。に左足を乗せ、観客に見せつけるようにソロを弾く。

原曲に忠実だったおたえとは打って代わり、バリバリのアレンジソロ。原曲通りに弾いた方が良かったのは頭では分かっているんだが、この手がどうにも止まらない。俺だって人間、死ぬ程努力して今の技術を手に入れた凡人だ。自分の「業わざ」をみんなに見せびらかしたいって子供みたいな欲求はある。

そして何より、こうやってると自分が楽しい。それが一番の理由だ。

俺の分のソロも八小節で終わる。

ここで返しから足を下ろし、おたえの方に歩き寄った。

打ち合わせは無かったが、おたえも同じ考えだったらしい。あちらも俺に向かって歩いてきている。

一秒足らずで互いの息遣いが分かる距離、あと半歩踏み出せばぶつかってしまう距離まで接近する。

やるぞ。

そういう目を向ければ、  
ドンとこい。

そういう目が返ってくる。やっぱりおたえは最高だ。  
互いに合わせ、同じタイミングで指板上に指を走らせる。

オクターブのユニゾンソロ。ユニゾンなんだかソロなんだか分からないが、最高に気持ちの良い演奏。絶頂。

本来は二人交互に弾くパートを、熱と興奮でぶっつけ本番ツインギター。

これがライブ、生の熱量。最っ高の瞬間だ。

オラ観客共。もつとだ。もつと盛り上がれ。我慢なんかすんなよ。ペース配分なんて考えんな。この後のことなんざその時に考えろ。

今日この日、足腰喉が無事なまま帰れると思うなよ。

サビに入り、マイクを通した俺の声に負けないほどの観客の声がライブハウスを揺らした。

Cメロに入ってもライブハウスの熱は全く失われない。ワンコーラスだけ俺が歌って、すぐにマイクをスタンドから外し観客側に向ける。

一際熱の籠った大きな声がマイクに注がれた。

最高だお前ら。けどまだまだ続くぞ、着いてこいよ。

ラスサビ、アウトロと走り抜け、ギターを高く掲げながら弾く。その音を途切れさせること無く、すぐさま次の曲の演奏を始める。

次の曲は、一曲目と同じく《X JOPAN》から。日本の国歌（本当）である『R o s t y N a i l』の始まりだ。

さながらDJのように、つぐがシンセで曲を繋ぐ。違和感もほとんど無い、完璧なシフト。

つぐは『私はキーボードが下手』だと自分を過小評価するが、決し



てそんなことはない。『紅』のピアノイントロが弾けている時点で下手なわけがないし、そこらのバンドのキーボーディストより断然上手い。

自信を持って。

そう言わんばかりに、ギターパート突入と共につぐの傍に寄る。つぐの表情は固く、ジツと鍵盤を見つめていた。緊張しているんだろうか。

緊張するなどは言わないが、これじゃあせつかくのライブなのに勿体ない。笑っていこう。

膝を付き、キーボード越しにつぐを見上げる。

そうすると視覚的に、鍵盤ばかり見ていたつぐの目にも俺の顔が映るだろう。

バチツと目が合う。二秒ほどジツとつぐを見つめたあと、ふぐの様に頬を膨らませてみたり、眉にシワを寄せ般若の様な顔を作ってみたり、すぐすぐできる変顔を披露した。

つぐの顔に笑顔が灯る。

それでいい。お嬢じゃないけど、笑顔ってのは大事だ。満足して俺もつぐに笑顔を向け、立ち上がる。

そろそろ歌が始まる。早くマイクの下に戻らなくちゃ。なんとか間に合い、Aメロを歌う。

十六小節でAメロが終わり、すぐにサビ。喉をかつぴらき、鼻腔に向けて声をぶつける感覚で柔らかい高音を引っ張り出す。

須田がバスドラに足乗つけやがった。あ、おたえもやりやがった！ズルいズルい、俺も混ぜてよ!!

こういう時ギタボは寂しいよな。マイクを放り出して遊びに行くわけにもいかないし。ハロハピはヘッドセットのマイク使ってたっけ。俺もあれ欲しー。

いや待て。ロックンローラー足るもの、やっぱりスタンドマイクを使つてナンボな気もする。

うーん、悩みどころだ。

メインを張れるボーカルがもう一人うちのバンドに入ってきたら色々楽で楽しいんだけどなあ。

まあいいもんね。

間奏でマイクを離れ、またつぐの前に出て低く構える。リズムに合わせて膝を動かし全身を縦に振ると、つぐも合わせて首を振ってくれた。なんだ、手元を見なくても弾けてんじやん。たくさん練習したもんな。

間奏も終わりに近付き、二番が始まる前にマイクの下に帰る。

Aメロとサビを演りきり、サビ終わりに囁き英語パート。ここは須田が歌う。低く渋い声だ。須田って歌うと声の質が変わるんだよな。こういうタイプは意外という。

ここで俺も五十嵐の下に行き、つぐの時同様膝を使つてリズムに乗った。

それが終われば伴奏パート。

つぐが二つのキーボードを使い、柔らかい音を出す。

ここは変に動き回ることには無く、静かにマイクを握つて歌を添える。暴れるだけが能じゃない。緩急は大事だ。

しつとりが終われば、また激しくギターを鳴らす。

ここからはギターソロ。俺の魅せ場。

スタンドマイクよりも前に乗り出す。それに合わせて須田とおたえがしゃがみ、俺にスポットライトが当てられた。

全員が俺を見ている。数百の視線が俺に注がれている。

普段であれば緊張して上がってしまうだろうが、今はライブ中。アドレナリンがドバドバのフィーバー状態。

緊張は無い。むしろ興奮する。

俺を見る、俺の音を聴け。そういう気持ちを込める。自然と口角が上がっていくのが分かった。

『おたえは自分のバンドでの出番もあるから、リードギターは俺が弾くよ』

俺はおたえにそう言ったが、あれは半分…いや、八割嘘だ。もちろんおたえの負担を考えていたのは事実だが、本当の理由は他にあり

る。

「こんな最高のパート、他人に譲れるかよ」

誰にも聞こえない声で眩き、さながら剣道の残心のように、ソロの終わりを告げる余韻あるチョーキング弦を引つ張り上げ、音程を変換させる奏法。をカマす。

すぐに歌に入るが、その歌を掻き消す程の歓声が上がった。

おいおい、今歌ってんだぞ。聴けよ。

そう思うが、それ以上に歓声が心地良い。

一人で弾くのも、スタジオで合わせるのももちろん楽しいが、これは別格。

ああ。やっぱり、ライブってやつは最高だ。

? ? ? ? ?

『——はい。てなワケで、グリグリ主催ライブのトップバッターを務めさせていただきます、《Capliberte》です』

二曲目も終わり、MCに入る。

この間におたえと須田がチューニングを、俺はギターを六弦から七弦に変える。

七弦ギターに持ち替え、チューニングを確認しながらマイクに声を通した。

『えー。今回サポートってゆーか、シンセで《Afterglow》の羽沢、サイドギターで《Poppin Party》の花園に来てもらってます。自分らのバンドもあるのにホントありがたいことで』

横目で舞台袖を見ると、ひまりも巴もスタンバっている。時間も無いし、すぐ次にいくか。

『えー。次やる曲もコピーなんですけど、その前に追加のメンバーです。こっちも羽沢と同じく《Afterglow》から。上原と宇田川です』

紹介と同時に、ひまりと巴がステージに上がってくる。

ひまりは手を振りながら、巴は堂々と胸を張つての登場。さすがに客前に慣れてるな。

『みなさーん！ 盛り上がってますかー!?!』

マイクを持ったひまりがフロアに問い掛けると、マイクにも負けな  
い声が返ってくる。

元気だなあ。それでいい。もっとブチ上がれ。

『えー。まあ今回二人にはボーカルお願いしてます。アイドルソング  
なんで盛り上がってください』

フロアがなぜかザワついた。

なんだ？ 俺らがアイドルソングやるのがそんなに意外か？ い

つもサイ○イやってるし今更だろ。

須田とおたえに準備は出来たかと確認すると、大丈夫と返つてき  
た。

よしよし。俺も問題ないし、次を始めようか。

『いやー、海とバンドやれるのすっごく楽しくてたんですよ！

《Afterglow》に海を呼んだことはあったけど私が《Cap  
liberte》に呼ばれるのは始———』

『はーい。んじゃあ時間も無いんでサクサクいきまーす』

『ちよつと！ まだ喋ってるんだけど！』

悪いけど時間が無いんだよ。

曲を詰め込みすぎた。《Capliberte》の持ち時間ギリギリだ。長々とMCやってる時間とか無いの。マジで。

そう目で伝えると、むむむって目を返してくるひまり。でも喋るの  
は止めてくれたな。助かる。自分のバンドの時に思う存分喋って  
くれ。

視線を五十嵐に移す。

五十嵐が一つ頷いた。あっちも準備は良いらしい。

『それじゃあいきます。《Broken By The Screa  
m》で「走れ！ なで○こー!」』

シンバルでフォーカウントをとる。

それに合わせ、ギターとベース、そして歌も入る。

歌とは言っても、入りはひまりや巴じゃない。

俺と須田だ。二人共にデスボを喉から溢れさせる。俺が低音で、須田が高音。フリスクリーム

アイドルソングと言ったな？ あれは本当だ。《Broken By The Scream》は変態大国・日本が排出したメタル系スクリーミングアイドルグループなのである。

もはや聴き取れないんじゃないか、マイクすら必要ないんじゃないかというような声の暴力を披露し、イントロに入る。Aメロまでの間奏

イントロになると俺のギターも始まる。

本家のギターは一人なんだが、やはりというか、音源を聴くと存在しない二本目のギターが聴こえてくる。一人でもなんとかなるっちゃなるけど、おたえが加わることで音圧が厚くなる。音圧があればあるほど良い。

だが、ギター二本すら上回る五十嵐のバスドララムの足元にある1番大きい太鼓のこと。キック。の音がステージを揺らす。

これは比喻なんかじゃなく、本当に音で揺れているんだ。音の波がビリビリと伝わってくる。花火で物が揺れるのと同じだな。

五十嵐はとにかくパワー型のドラマーだ。鼓膜どころかバスドラそのものが破けるんじゃないかという爆音を飛ばしてくる。

五十嵐は技術も凄いが、ことパワーとリズムキープに関しては俺の知る中で最強。プロとして活動している大和さんや佐藤にも引けを取らず、ことパワーにおいては完全に勝っている。

全く、本当に良いドラマーを拾ったものだ。

野球界からすげー睨まれそうだけどな。

そうこうしているうちにAメロが始まった。

アイドルソングと銘打つだけあり、もちろん女性の歌声も入ってくる。ここがひまりと巴をサポートと呼んだ理由だ。

まあ本家のデスボやシャウトも女性がやってるんだけどな。バケモンだよあの人ら。大好き。

グロウルとスクリーム、そして女性クリーンボイスの掛け合い。これはメタラーの間でも話題を呼んだ。

つぐがやりたいと言って46話『つつぐつぐにしてやんよ』参照実現したこのコピー。最初はどうなるかと思ったが、須田は上手えし俺も楽しいしひまりと巴はダンスまで覚えてくるので最高だな。やって良かった。

そしてつぐ。Bメロから入ってくるシンセを完璧に弾き、ピコピコした電子音を再現している。

最初はいつもと違う音作り、いつもと違う演奏に苦戦していたが、つぐは頑張り屋さんだ。バンド練習の度に成長した姿を見せてくれた。

これこそがつぐの最大の才能。自分を卑下してこそいるものの、決して腐らず上を見て駆け上がれる根性。

つーかこれ本家はサンプリングしてるんじゃないの？ なんてつぐは完璧に弾いてくるだよ。すげーな。

つぐ、お前は本当にすごい奴だよ。

ニッコニコの笑顔でつぐを見てみると、ひまりが近寄ってきた。何かと思えば、顔ごとマイクを近付けてくる。一緒に歌え、ということだろうか。よろしい、ならばデュエットだ。

ひまりの声を支えるように低音グロウルを捻り出す。

一つのマイクを使い、頬がくっつくほどの距離で歌う俺とひまり。それぞれ別のマイクを使った方が音的には良いに決まっているんだが、これは生のライブだ。聴き手以上に演者が満足するべきステージだ。

…前から思ってたけど、ひまりってなんか温かいっていうか、甘いにくどくない絶妙に良い匂いするよなあ。香水とかじゃないし、説明しにくい匂い。ひまりの素の匂い。俺の好きな匂いだ。

……………幼馴染み相手に、こんなこと思いたくなかったなあ。

? ? ? ? ?

四曲目はまた《Broken By The Scream》から『Breeder Breeder』を全力で弾き、それも終わる。ギターソロをつぐがシンセアレンジで弾いててすごかった（小並）さて、サポート組はここまでだ。

『サポートの皆はここまで。ありがとね』

MC代わりに言い、はけていく四人を見送る。

四人が完全にはけてから、俺はギターを七弦から六弦に持ち替えた。

『それじゃあ、ここからは《Capliberte》だけの演奏つてことで。野郎ばっかでむさ苦しいと思うけど我慢してくださいね』

ガールズバンドの聖地とも言われたSPACEで初ライブを決め、ガールズバンドの巣窟であるCIRCLEを主戦場に行っている俺たちはもうガールズバンドと言っても過言ではないかもしれないが、まあ見た目がな。華やかな女性陣と比べるとむさ苦しいのは避けられない。

特に五十嵐、お前の筋肉だ。いや別に悪くはないけど。むしろちよつと羨ましいまであるけど。

などと思いつながら、須田がMCで『俺らって基本ライブで衣装の統一とかしてないんですよ。今もほら、バラバラで。その点、ガールズバンドの方はみんなキラキラしたライブ衣装があつて良いですよね。やっぱコーディネートはこーでねーとー』などとドすべりしている間にチューニングやらエフェクターの確認やらの準備を終わらせる。

今のは大御所のアーティストがやってもすべつただらうなあ。その勇気だけはかつてやるよ。

『はい、須田の勇気に拍手。つてことで次行きます。「革命前夜にラナウエイ くお国に逆らうもんじゃないく』

『私は悲しい』

うんうん、悲しいね。

さっさと切り替えろ。

ドラムの四小節から始まり、ゆつくりとひっそりとギターとベースも入る。

決戦前夜、嵐の前の静けさを表現したイントロ。

それが終われば一度静まり、一気に解放。鼓膜を破るつもりで鳴らし、まだまだスローペースで、しかし徐々に速度を上げていく。

ある程度の速度まで達すると、再度沈黙。そして大咆哮。

ここからは速度が命だといわんばかりに掻き鳴らす。

嵐のように吹き荒れるドラムの音、重く冷たい雨のように降り注ぐベース、雷鳴のように轟くギター。

サビに入り、俺と須田で歌い出す。

しかし、真に唄っているのはギターだ。俺たちの声でギターを支える。

そして迎えるギターソロ。

ステージのど真ん中に立ち、俺を見ろ、俺を聴けと主張する。

ギターソロの途中で突然須田が割り込んできた。お前それ即興アドリブだろ。最高だもつと来い!!

ステージの中央で睨み合うように須田を額を付き合わせ、どちらも引かず音で殴り合う。互いに熱狂し、ソロパートが終わっても弾くのを止めず。

ドン!

バスターの一発が、俺と須田の世界を蹂躪する。

たった一音。それだけで俺と須田は黙らせられた。

五十嵐を見れば、いい加減にしろと目で言っている。ごめんなさいの気持ち。

そこからは気取り直して楽譜に沿い、だが決して丸く収まるなんてことはせず、この瞬間に情熱を燃やす。

速く、重く、荒々しく。

そうやってCメロを走りきり、終焉。



革命前夜にトンズラこいた男の臆病さとある種の勇敢さ、逃げ出した後悔、逃げた先での覚悟なんかを表現したメロスピ。くドウームの風を添えてく。だったが、ちよい暴走しすぎたな。怒らないで五十嵐、反省してる。

『えー、「革命前夜にランナウエイ くお国に逆らうもんじゃない」でした。サクサクいきます。次は新曲、「始まりのTrue Emotion、終わりのsimply inertia」  
「厨二かー!」メタラーなんてみんな厨二だろ!」と観客の声が聞こえる。正しい。

俺たちのメタルは社会への反逆や現実への不満を吐き出しているというより、物語性を綴ったものだ。しかも神話の時代や中世、異世界転生モノのラノベみたいないな世界観を主にしている。

それらをテーマにする以上、厨二チックになってしまふのは仕方がないだろう。でもいいじゃん、カッコよくて。ドラゴンとか剣とか、男の子の憧れだろ。

けどまあ、今回の曲「始まりのTrue Emotion、終わりのsimply inertia」は別にそういった世界観を語ったものじゃない。

曲名通り、「初めは純粹に楽しんでたが、そのうち惰性になってしまふ」。それを憂いたり嘆いたりする内容の曲だ。歌詞はもちろん英語。デスポは無い。ポストグランジ曲のジャンル。クリードやフーファイターズなんかが代表的。系統の曲になっている。

アルペジオから入る。

この曲はBPM130無いくらいのローテンポ。染み入るような演奏になる。

アコシユミアコースティックシユミレーター。エレキギターの音をアコギ風の音に変換するエフェクター。を使い、B↓F#m↓G#m↓Eのアルペジオ。かの有名な《ニツケ○バック》をオマーージュしたコード進行だ。

一回しした後、歌が入る。

子供心に憧れたテレビの向こうの主人公達。彼らに近付きたくて始めたもの。Aメロはその喜びを綴り、Bメロで現実や挫折を歌詞にしている。

Bメロからはドラムやベースも入ってきて、少しだけ音に厚みが出てきた。徐々に厚みを増し、サビに突入。

情景への冷めぬ想いと、現実への悲観、絶望。どうして自分は彼らのように上手くやれないのかという自己否定を綴る。

二番のAメロでは時間が進み、高校生になって「憧れ」が風化してしまった光景を観せる。趣味として続けてはいるものの、昔のような情熱は無い。すっかり現実に染まってしまい、気軽に夢も語れなくなってしまう。これが大人になることなのだとぼんやり思っていたところ、一人の男に出会う。ここからがBメロだ。

同年代のその男は、自分が憧れ、諦めてしまった「夢」に向かってひた走っていた。それどころか、周りに何と罵倒されても自分を貫き、「夢」に忠実なその生き様。

サビで、彼を見て自分の中に再び炎が灯るのを感じた心情を吐露する。そして、自分の不甲斐なさもひしひしと感じ、またも自己否定。けれど今度は、今度こそは倒れないと覚悟を決めて再び歩き出す。そこからはただただ突っ走る。

ギターソロで安定した「大人への道」を切り捨て、周りの反対や批判を押し切り、再び「夢」へ手を伸ばす風景を表現。ラスサビに突入し、キツカケとなった男と手を組んで「夢」を獲りに行く。

そこでこの曲は終わりだ。

この後の物語は聴き手それぞれに任せる。彼らは「夢」を追いかけ続けるのか、また諦めてしまうのか。はたまた追いかけた先で報われず終わるのか。それは聴き手が自由に解釈してもらって構わない。むしろ、その先を想像することでこの曲は完成する。

今まで《Capliberte》がやってきたメタルとは違う方向性の曲。暴れることもなく大人しくギターを弾く様は、観客から見て少しばかり以外に写っただろうか。

だが、そこに籠った「熱」は今までの曲と遜色ない。滾る情熱を全

面に出しているか、内に込めているか。それだけの違いだ。

曲が終わり、照明が消える。

同時、歓声が上がった。

普段メタルバンドとして活動し、激しい音楽を演ってきた俺たちだ。毛色の違う音楽に戸惑い、求めていたのはコレじゃないと思った人もいるだろう。

それでも、ここまでの歓声を送ってくれる観客達。これほど嬉しいこともない。

数秒して、淡い光が再びステージを照らした。

汗が頬を伝い、ステージに落ちる。

——ああ、満足だ。

客に受け入れられないんじゃないかという不安があった。別に客のために音楽をやってるわけじゃない。俺らがやりたいことをやった。だから、受け入れられなくても良い。そう思っではいるものの、せつかくなら何かしらの、そしてプラス方面の反応が欲しいというのが人間の心だろう。

それが叶えられ、自然と笑みが零れる。

この熱が冷めやまぬうちに、次に繋げよう。

『えー。それじゃあ最後の曲。《SILENT SIREN》で「HERO」』

ほら、サ○サイだ。お前ら好きだろ？ 俺も好きだ。

まだまだライブは始まったばかり。もっとブチ上がれよ、観客共。

? ? ? ? ?

俺たちの出番の後、パスパレ、Afterglow、ハロハピ、ポ

ピパ、Roseliaの順でライブが巡る。

トップバッターの良いところは、自分の番が終わってしまえば他のバンドを何の気負いもなく観られることだ。今回はグリグリの主催ライブということもあり、多分恐らくきつと急なアンコールもないはずだしな。あった場合のための練習はして来てるし、何とかなるはず。

ということ、パスパレの演奏からは俺も客席に紛れ込んでみんなと一緒に盛り上がり、Afterglowで蘭たちの青い情熱に焼かれ、ハロハピに物理的に飛ばされ、ポピパのキラキラドキドキで青春の煌めきを感じ、Roseliaのいつそ暴力的なまでの熱量にあてられた。

そしてラスト。今日の主役であるグリグリの出番を迎える。

彼女達のライブは、圧倒的だった。

演奏技術やパフォーマンス力。それらが飛び抜けて高いということはもちろんだが、それだけじゃない。

言葉にしにくい、あえて言うのであれば《カリスマ》か。

一つの時代を創ったバンド。ガールズバンド時代の前線を走ってきたバンド。

そんなグリグリの集大成がこのライブだ。感じ入るものは少ない。

そして、それと共に僅かな不安も募る。

これから先、彼女たちはいないのだ。

グリグリが解散するわけじゃない。けれど、ゆりさんの進学なんかもあって暫くは活動しないだろう。

彼女たちがいない中、俺たちはどう活動するのか。これからも出てくる後輩のバンドたちに、俺たちが見た彼女たちの背中と同じものが見せられるのか。

部活動をやってこなかった俺にとっては初めてとなる『世代交代』という波。

これを取りこなし、俺たちが新たな時代を築く。

今までは後輩面をして好き勝手にやってきた。今後もちろん、自分たちが楽しむことを大事にやっていくつもりだ。だが、今度は俺たちが後輩に背中を見せ、導いていく番でもある。

僅かな不安と責任感。プレッシャー。

彼女たちの熱を受け継ごう。彼女たちに恥じないライブを続けよう。

そう思うのは、俺だけではないはずだ。

? ? ? ? ?

大盛況のまま終幕を迎えたグリグリ主催ライブ。

終わった後は演者が皆フロアに出てきて、ファンとの交流や物販を始める。

主役のグリグリやプロであるパスパレはもちろん、他のバンドや俺たちだって例外じゃない。CDを売ったり、ファンと話したりしている。

俺たちもCDやグッズこそ無いものの、ファンとの交流は行っていた。その中で「CDは出ないのか」「グッズが欲しい」などの意見も出てきている。

CDはそのうち出すつもりだが、グッズについては考えていなかった。要望があるようだし、タオルとかリストバンドくらいなら作ってみても良いかもしれないな。

そうこうしているうちに、ごった返していた観客達も徐々にはけてきた。

隣のブースだったハロハピの面々とちよつとした雑談をしていたところ、一人の男が《Capliberte》のブースに近寄ってくる。

「……音源、ある?」

男、つてより男の子か? 幼い顔つきだし、背も低い。中学生くらいかもしれない。にしてもめっちゃ綺麗な顔だな。アイドルとかにい

そんな感じの。てかピアスしてるし、髪も染めてる？ 長い髪は、よく見れば少しだけ青みがかっていた。もしたしたら童顔なだけで大学生なのかもしれないな。

挨拶無し、敬語でもないという点に少しばかり面食らうが、まあそういう人もいるだろうと思考を切り替える。

「すみません、CD無いんすよ」

「……………」

無言はやめて欲しい。ごめんて。近いうちEPでも出すから。

なんとも言えない時間が流れる中、ふと男の子が視線をズラす。

気になってその視線を追ってみれば、そこにはRoseliaの姿が。はて、Roseliaのファンでもあるんだろうか。

そう思っていると、再びこちらに目を向けた男の子が口を開いた。

「…………… 神泉しんせん 神泉あきひ 彰」

「…………… は？」

なんだ突然。自己紹介？ なんで？

不審に思い反応できずにいると、男の子が追加で言う。

「… 来月から花咲川に入る。《Capliberte》、あんたらのいる学園だろ？ よろしく、先輩」

そう言い残し、再度Roseliaの方を睨むように見ながら出口へと向かう、神泉と名乗った男の子。

「…………… え、今の何？」

隣で見えていたミッシェルがそう聞いてくるが、俺の方が聞きたい。何だったんだ今のは。

何が何だか分からずにボケっとその背中を見送っていると、女の子たちの撮影を終えて帰ってきた瀬田先輩が「おや」と声を漏らした。

「あの子は……………」

「知ってるんですか、瀬田先輩」

「うむ」

ネタが分かるのかこの人。いや別に今のはネタのつもりで聞いたわけじゃないんだけどさ。

まあこの人は素で「うむ」とか言ってもおかしくないか。：。いや、やっぱり言わなそう。「うむ」はさすがに解釈違いか。

それで、さっきの神泉とかいう男の子は瀬田先輩の知り合いか何かなのか？

「半年程前だろうか。仔犬くんと一緒に、二人きりで帰った時があったらだろうか？」

「ありましたっけ、そんなこと」

「忘れてしまったのかい？ いけない子だ。ほら、焼き芋を食べただろう？」

「？ …… あー」

「そういうあったな、そんなことも。26話『ふふつ。つまり、そういうことさ。』参照

でもそれがどうかしたのか？

「あの時に見かけた路上ライブの子ではないかな、あの仔犬くんは」

え？ あー…… ええー……？

「そうかなあ。路上ライブでやけに上手い奴がいるなつてのは覚えてるけど、顔までは覚えてないや。」

確かにピアスがバチバチだった気はする。けどそんな人、世の中にごまんといるしなあ。

「凄いつすね、瀬田先輩。あんな一瞬見ただけの顔、覚えてるんすか」

「ふふつ。人の顔を覚えることには自信があつてね。シエイクスピア曰く、『無学は神の呪いであり、知識は天にいたる翼である』。つまり、

そういうことさ」

「ガチで分かんねつす」

「薫さんを『理解』ろうとしてるうちは三流つて、あたしは最近気付いたよ」

「ええ……」

それにしても、その路上ライブの君が一体全体どうしたんだろうか。

同じ高校になる予定の先輩を見つけて挨拶をしようと思った？

いや、それは無いだろうな。そんな丁寧な奴だったら先輩に対して敬

語を使わないなんてのは有り得ないはずだ。

それに、Roseliaの方を睨んでいた理由も分からない。分からないことだらけだが、まあ分からないんだから仕方がない。考えても無駄だろう。ヒントが少なすぎる。

ここは一旦忘れて、パパッと切り替えていくのが良い。

? ? ? ? ?

観客も完全にいなくなり、演者とスタッフだけが残ったCiRCL Eにて。

「よーっし！ それじゃあ皆、準備はいーい!？」

香澄が元気に言ってくる。

皆、とはポピパを含め、Afterglow、Roselia、ハロピ、パスパレ、そして俺たちCapliberteの面々だ。

場所は舞台袖。もう観客もいなくなり、忘れ物でもない限り用事のない場所。そんな場所で、総勢二十八人が大きな円陣を組んでいた。

香澄の確認に、それぞれが頷き、返事をする。

「今日こそは！ みんな頑張ろうね！ えいえい、おー!!」

そんなひまりの号令も無事不発に終わり、「なんでえ!？」という泣きそうな声を背にぞろぞろとステージに向かう。

これから始まるのは、俺たちだけのライブ。

今日この時だけ披露する、たった一曲のためのステージだ。

ステージに上り、立ち位置に着く。

聴かせる相手はGlitter\*Green。客席には五人の姿があり、他はいない。五人のために用意した、特別な曲。

演奏はポピパの面々。その他は全員楽器を持たず、ボーカルとしてステージに立っている。



ポピパも歌わないなんてことはなく、全員にマイクが用意されていた。こんな大量のマイクを使うことなんて絶対に無いだろうに、準備してくれたC i R C L Eのスタッフさんたちには感謝しかない。

『それじゃあ改めて！ ゆりさん、リイ先輩、七菜先輩、ひなこ先輩！

ご卒業、おめでとうございますっ！』

『おめでとうございますー！』

香澄に続き、全員で復唱する。

まるで小学校の卒業式の練習のようだ。少しだけ気恥しさはあるが、このくらいなら我慢しよう。

今日のこの演奏についてはグリグリの皆さんには内緒にしていたから、彼女たちはこれから何が始まるのかという顔を見せている。

『Glitter\*Greenの皆さんには、たくさんお世話になりました！ 私が初めて見たライブで、初めて見たバンドがグリグリでした！ あの時のキラキラとドキドキは今でも忘れませんっ！』

そうなのか。それは初耳だ。

俺がグリグリを初めて見たのは確か中学の頃。Afterglowのライブを見に行った時に対バンしてたのが初見だったかな。綺麗な人達が上手い演奏してらあ、って思ったのを覚えてる。

『今日は皆さんに歌を作ってきたので、聴いてください！ 作詞はりみりんで、提案は海くんですー！』

作詞までは良いとして提案者で俺の名前まで出さなくていいんだよ。恥ずかしい。

グリグリの皆さんも「おおー」「海くんが…」「ひなちゃん感動したッ！ さすがだじえ海坊！」じゃないんだよ。牛込さんが作詞したところに反応してくれ。そこだけに注目してくれ。頼む。

「関口くんが作詞じゃなくて良かったわね」

「ねー。海くん、作詞下手っぴだし」

おうおう鰐部先輩にゆりさんよお!! 事实は時に人を傷つけるんだぜ!? ひまりも領いてんじゃあねえよ! 「うんうん。でもそのセンスがない所も海の魅力なのです」じゃあネエ! フォローになつて

ないんだよバカ!

暴れそうになったところを右から五十嵐、左から蘭に脇腹パンチされて黙らせられる。いてえ。手加減が無いんだが。

『コントも終わったところで!』

香澄さん!!??

『これから皆で歌います! グリグリのために作った、グリグリのためだけの曲!』

茶番(納得がいかない)を強引を終わらせるといふ思いもよらない香澄の高等MC技術を見せつけられ、言いたいことは山ほどあるが一旦は大人しく立ち位置に戻る。

覚えてろよお前ら……!!

『それでは聴いてくださいっ! 曲名は———』